

---

# 大地の宝石

森宮 スミレ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大地の宝石

### 【Nコード】

N0334Q

### 【作者名】

森宮 スミレ

### 【あらすじ】

貴族達が通う名門校フロース学園に転校したばかりの地味な少女は、その場で何故か行われていた決闘にいきなり乱入する。後悔しても時すでに遅し。それが全ての始まりだった。

学園に君臨する五人の生徒達に囲まれながらも、のほほんと学園生活を過ごそうとしていたのに、不運にも色々と面倒な事に巻き込まれ……？

ついには国をも巻き込む事件にまで吞まれることとなった少女と、国の未来を背負う彼等と、出来る限り平凡に送る学園生活。

## 第一章、完結しました

## 国の未来

世界が不穏な空気に包まれ、各国の間で緊迫した関係が続く中、ヨーロッパの一角に位置する国、クルダス王国は独立独歩の道を歩んでいた。周辺諸国の思惑を撥ね除け、その姿勢を支えていたのは、英明な王と、王を支持する国民。そして、王を支え、實際国を動かす権力を持ったマリオス達であった。

マリオスとは、クルダス国初代王を支え、生涯彼に尽くしたとされる、マリオス・メラール・ヴェルガーにちなみ、王を助ける為、家柄、頭脳、その他全ての面で認められ、選ばれた男性達を指す。彼等はその類稀な才能で、幾度にも渡る混乱から国を守り抜いた。

そしてまた、マリオスとなった者達の殆どが、名門校フロース学園の卒業生であった。

学園に設けられた、マリオスとなりうる人材の為のクラス。

将来を期待され、また自らの信念に従って進む青年達。

彼等を人は、マリオス候補生と呼ぶ。

## 出会い 1

大きな鐘が鳴り響き、その日の授業の開始が学園中に伝わった。少し前まで生徒達で賑わっていた庭や廊下からは人の気配が消え、引き締まった空気が教室から伝わり始める。にも関わらず、どの教室へも向かわずに、真っ直ぐ廊下を歩く影が一つ。その影が歩く度に響く靴音が、誰もいない廊下に木霊していた。

「今日も良い日になりそうねー。校長」

学園の中にある一室で、一人の男が窓の傍に立ち、陽の光を全身に浴びている。それに反射して、薄緑色の髪がひかり、その端麗な顔も輝いている。他の教室とは違う、高級感の溢れるこの部屋で、女のような口調の男が目の前にいる人物に話しかけた。

「うむ、そうだな。この一日一日が、生徒の為になるであろう」

校長と呼ばれた男は部屋に似合う高級そうな椅子に座り、外を眺めていた。

二人が会話しているのは、どの学園にも必ず一つはある、校長室だ。そして、この部屋の主である椅子に座った男こそ、この学園で一番の権力者、つまりは校長である。

校長である彼の方が、もう一人よりも上の立場の筈だが、そんな事を気にする風も無く、この二人は気兼ねなく会話していた。

「ところで、君は授業の方は良いのかね？担任がいないと、生徒達が心配しておるのではないか」

答えなど分かっているが、一応責任のある立場なので聞いておく。それを、目の前の男は全く気にした様子も無く、むしろクスクスと笑いだした。ようやく聞いてくれたと喜んでさえいるようだ。

「大丈夫よ。私の生徒はとっても優秀だから。それに、私の良きパートナーがしっかり面倒見てくれるわ」

彼がこう言うのは、決してサボリを弁明する為では無い。それが分かっているからこそ、校長も納得して頷く。

「それに、誰かが、これからの予定を説明した方が、新しい子にとっても良いでしょうしね」

それに、早く転入生に会いたいし。と本音を漏らしながら、この学園の教師であるクルーセル・ブロシエは始終楽しそうだった。そんな彼にやれやれ、と肩を落とす校長だが、彼の言っている事にも一理あると、彼の無断欠勤とも取れる行為を見逃していた。

本来、この学園で転入生を迎える事は稀であり、なかなか認められないのだが、転入試験の際、合格点以上の成績を出し。そして本人にこの学園に通わせるだけの価値がある、と判断した学校側の意見により、ようやく転入の許可が下されたのだ。

そうしている内に、校長室の、これまた高級そうな扉が叩かれた。「噂をすれば、どうやら来たようだな」

校長が椅子から立ち上がると、入室の許可を外の人物に伝えた。

「なんと言ったら分かるんだ、カールハイツ。お前の考えはいつも強引すぎる」

言いながら、ダークブロンドの青年の拳が、音を立てて机に叩きつけられた。口調は落ち着いているが、その声色には怒りが滲み出ている。目はしっかりと目の前の人物を見据え、強い決心が込められているようだ。

それに対して、青年の言葉の先にいる人物は、眉一つ動かさず、冷静さを保っている。まるで、全く相手にさえしていないようだ。カ

ールハインツの涼やかに光る長いプラチナブロンドが、彼の心を表しているようでもある。

「私は最も有効的な解決策を述べたまでだ。貴様にとにかく言われる覚えは無い」

ダークブロンドの青年よりも、少し低い声でそういうと、こちらも相手を睨みつけた。

対峙する二人の周りを何人もの生徒が囲み、これからどうなるのかと成り行きを見守っている。その大半を占めるのは、冷静な青年の取り巻きとも言える部下達だ。といっても、彼等が勝手にプラチナブロンドの青年に憧れ、自分達を部下と呼んでいるだけなのだが。彼等は、ダークブロンドの青年を、我が主にたてつく敵として、鋭い目で睨んでいる。その中に、他とは違う強い憎しみさえも醸し出している瞳が混じっているのを、誰か一人でも気付いているのだろうか。

「政府の為に弱者を切り捨てるような事、あってはならない」

「腐敗は早めに取り除かねば、さらに広がるだけだ。情に流され、判断を躊躇しては、新たな問題の火種となる」

「それで犠牲になる者達にも心がある。彼等が苦しむような国を作ってはならない」

「それこそ正に、机上の空論だ。犠牲を払わなければ、何も生まれない。だからお前は甘いと言うのだ」

お互い一步も引かないまま、同じような口論を延々と続けている。「……また始まった」

繰り広げられる口論を少し離れた場所で聞いている人物が、またか、と少し肩を降ろした。

この二人はどうしてこう毎回、仲違いするのだろうか。と呆れた風に手を頭の後ろに回した。

「ねえイアン、止めた方が良いんじゃない？」

イアンと呼ばれた青年が隣を見ると、少し心配そうに自分を見上げる水色の髪と深緑の目と合った。

「無理だな。言って聞くような奴等じゃねえって。だろ、ザウル」

「ええ……まあ……」

イアンが褐色の肌の青年に同意を求めると、彼は少し困り顔で、それでも頷いた。それと同時に、長い彼の赤色の髪が揺れる。

どうやら、この類いの口論は、日常茶飯事らしい。

論争はまだ続いているが、それを遮るように、教室の扉が開かれた。

「何事だ」

「ハンス先生……」

目つきの悪い男が入ってくると、生徒達は一斉にそちらを向いた。お互いに、自分の意見をぶつけ合っていた二人の青年も例外ではない。

ハンス・ギーレンが教室内を見回すと、彼は疲れたように溜め息をついた。

「また、君達か」

呆れたような口調に、青年達が不満そうな顔をして、ハンスはお構い無しだ。もう一度溜め息をつき、肩を落とすと、ずれた黒縁の眼鏡を正した。

「国政に興味を持つのは良いが、議論に熱を上げるのは授業中にしなさい」

彼がそう言い残し扉の向こうに消えると、渦中の中心人物であるダークブロンドの青年は、失礼する、と一言残し、足早に教室を出て行ってしまった。その後を、水色の髪の青年に目配せをしたイアンが慌てて追った。

「おい、ラン！ 待てよ」

イアンと呼ばれ、ダークブロンドの青年、ランスロット・オルブ



ラインはようやく立ち止まった。振り返った顔は、明らかに不機嫌だ。イアンは、やれやれ、と呟くとランの背中を軽く叩いた。

「そう怒るなって。まったく。どうしてカールが相手だと何時も、ああなるのか」

「やり方にどうしても賛同出来ない。彼の言う方法では、罪無き者が犠牲になってしまう」

考え方が根本的に違う二人なので、意見に行き違いがあるのは仕方が無い。しかし、お互い、いずれは国を背負って立つ事になる人材なのだから、もう少し認め合っても良いと思うのだが。

「まったく。ほら、こう言う時は落ち着く所へ行こうぜ」

イアンは、ランの腕を掴むと、軽く引っ張りながら学園のある場所へと連れて行った。

「あっ！いらっしやい。準備出来てるよ」

「おお、ルネ。ありがとうな」

ラン達が入ってくると、先程教室にいた筈の、水色の髪の青年が、煎れたばかりの紅茶を持って二人を出迎えた。

ここは、学園の片隅にひっそりと建っている、温室である。白い骨組みにガラスが張られ、中はかなり広い。

この温室は校長の趣味で作られた物で、目立たない場所にあり、生徒達は特に用も無いので、存在すら忘れられてしまった場所だ。だが、中には色鮮やかな花々が、それは見事なほど綺麗に咲いている。

あまり生徒の来ないこの場所を見つけた水色の髪の青年、ルネ・レミオットは、校長の許可を得て、忘れられた場所に新たに花を植え、自分で世話をしていた。そしていつのまにか、この場所は彼と、彼の親しい者達の憩いの場になっていたのだ。

「はい、ラン」

ルネはニコニコと微笑みながら、テーブルの上に紅茶の入ったカップを置く。ランが出て行ってしまった後、イアンの瞳の意味を汲み取ったルネは、一足先にこの温室へ出向き、紅茶を用意していた訳である。学園からわざわざ持ってこなければならぬ為、普段はあまりやらないのだが、ここで紅茶を飲むのが一番落ち着く、と彼等は思っていた。

「わざわざすまない、ルネ。君にも心配をかけてしまったな」

「ううん」

意見の食い違いで、反発することはあっても、二人はお互い仲間と知っているのは、ルネも知っている。ただ、二人共素直でなく、それを認めようとしないので、どうにか出来ないかと思っていた。

「カールは？」

「今、ザウルと一緒にいるよ」

ランに聞こえないよう、イアンがもう一人の友人の事をルネに聞いた。

「……何故、彼を挑発する事ばかり言うのです」

カールの目の前に紅茶の入ったカップを差し出しながら、ザウルが言った。

「彼奴が私に楯突くからだ」  
あやつ

「……」

冷めた瞳を崩さず、冷静な口調で返した。

差し出されたカップに口を付けると、一瞬、少しだけ口元を緩めた。紅茶に満足した証拠だ。

静かに紅茶を飲むカールに、ザウルは何も言えず、その横に立ち尽くすだけだった。

その、二部屋隣の教室で、一人の生徒が拳を握りながら、憎しみを露にしていた。

カールハインツ様こそが、この学園では最高の人物であり、最高権威を持つべき方だ。彼こそが、この学園の、そして国の頂点に相応しい。唯一の存在にして、絶対的な君主。それが彼だ。

何故、カールハインツ様に歯向かう者が、この学園に存在しているのだ。そして、少なからずこの学園でも支持を得ている。あいつの存在は、カールハインツ様にとっても、自分にとっても邪魔ではない。

自分の元に届いた、この紙に書かれている事が、本当かどうか分からない。だが、相手に対して、少なからず打撃を与える筈だ。

怒りに歪んでいた生徒の口元が、少し緩み、不適な笑みを作っていた。

「ほら、行こうぜ」

温室でしばらく過ごした後、三人で寮へと続く道を急いでいた。

「ラン、もう大丈夫？」

「ああ、今日はありがとう。ルネとイアンのおかげで、とても落ち着いた。だが、カールとの事、自分に非があると認めたわけではない」

「ああ、分かってるって。お前もカールも、頑固だって事は」

他愛無い話を続けていた三人を、後ろから見つめる影が一つ。そして、その影が、何かを投げつけるように大きく動く。

「なっ！」

乾いた音がして、ランの足元にガラスの破片が散らばった。ガラスは、まだ落ちきっていない太陽を反射して、キラリと光っている。いきなりの事にラン達が動けないでいる隙に、影はその場を離れた。割れた破片の中に小さく折り畳まれた紙が混じっている。それを広い上げ、中に書いてある事に目を走らせたランは絶句した。それを後ろから覗き込んだイアンとルネも同様だ。

『お前の過去の罪を知っている。この学園に相応しくない者は速やかに学園を立ち去れ。我らのカールハインツ様の邪魔はさせない』

書いてある事の意味を理解すると同時に、思い出したくない過去が走馬灯のように蘇ってくる。忘れたい情景、しかし決して忘れてはならない事実。

次に沸き上がってくるのは、言いがたい程の怒りだった。

ランは荒々しく踵を返すと、来た道を急いで戻って行った。

「おい！ラン」

「ラン！？」

部屋の端にいる自分にまで振動が伝わる程大きな音が響き、廊下から現れたランを、部屋にいたザウルは驚いて見つめていた。

「何事だ、ランスロット」

突然、教室の扉を乱暴に開いて入り、目の前まで来たランを、訝しげに一瞥したカールは、それでもいつものように冷静に言った。

「それはこちらの台詞だ」

言うと共に、ランは持っていた紙を彼の前にある机に叩き付けた。  
「お前がやらせたのだろう」

ランがここまで確信を持って言うのは、この学園に、彼の過去を知る人間はほんの少数しか居ないからだ。そして、その内三人は、つい先程まで自分と共にいた。そして、もう一人は、こんな事をする動機が無い。ましてや紙には、堂々と目の前の人物の名が記してある。そして、彼とはつい先程衝突したばかりだ。今のランには、こうする以外は方法が浮かばなかった。

「私が邪魔なら、何故実力で来ない。こんな卑劣なやり方は、許さない」

「……………もし、私だとしたら」

静かに見守っていたカールが、ようやく口にしたのは、否定でも肯定でも無く、彼を更に挑発するような言葉だった。

「私の名誉の為に……決闘を申し込む」

ランがそう言うと同時に、周りがざわつき始めた。

本来、貴族同士での決闘は、申請する事も受ける事も禁止である。それが、まだ家督を次いでいない子息であっても同様だ。発覚すれば、貴族にあるまじき行為として、厳重な調査の末、相応の罰が下される。

この学園の生徒が立てる最も高い地位にいる人物同士が、それをしようと言うのだから大事だ。皆、一様にカールの反応を伺っている。

カールは、ふっと笑みを零すと、よかろうと一言、同意の意志を口にした。

途端、更に室内がざわめき出した。

「ここなら、邪魔は入らない」

「いいだろう」

二人が言い終わると、剣と剣が激しく交わる音が響いた。

学園は敷地が広い為、どうしても生徒や教師の意識が向かない場

所も出てくる。温室がそうであるように、学園内の林に面した大きな池の畔もその内の一つである。

その場所で、二人の青年が真剣を振り回し、相手を捕らえようと必死になっている。

「どうしよう。決闘だなんて」

二人を、少し遠くから見つめていたルネが、そう零した。

「なんとかお止め出来ないでしょうか」

「無理だな、あんなった二人は止められない」

二人は、学園内でも、一、二を争う剣術の持ち主である。お互いの力は五分五分で、どちらが勝ってもおかしくはない。そのため、下手に間に入ってどちらかに隙を作らせてしまえば、その瞬間、予期出来ない程の惨事になりかねない。その為、誰も手を出せないでいた。

「ですが……誰があんな事を」

机に叩き付けられた紙の内容を見た時、ザウルもラン達同様、言葉を失った。

紙に記されていた、彼の過去と聞いて思いつく事は一つ。しかし、それは決して罪などと呼ばれるべき物ではなく、咎められる物ではない、不慮の事故である。しかし、ラン自身に罪の意識があるため、彼への衝撃は大きい。

そして、その事を知るのは、極数名。考えられる人間は限られ、また彼に動機がある人間も多くは無い。

「まさか、本当にカールが……」

「そんな事ないよ」

ルネが間髪入れず否定した。

「カールは、こんな酷い事はしないよ。本当は、とても優しい人だもの」

「では、一体誰が」

ザウルが顔を上げると、林の中の木の一本に身を隠すようにして、ランとカールの様子を伺っている生徒がいた。顔には絶望の色が濃

く見え、足は震えている。

「カールハインツ様……なぜ」

「お前、何か知ってるのか」

イアン達が背後に迫ると、彼は大げさに驚き、振り向いた。そして、自分に声を掛けた人物の顔を見ると、さっと青ざめ、反射的に逃げようと地面を蹴った。が、後ろから襟首を引かれ、そのまま地に転がってしまう。

「な、何をするんだ」

尻餅をついたまま、後退りしようとするが、腕や足が震えて上手く動けない。

相手の、ただならぬ様子に不審感を抱いたイアンは、その胸倉を掴み引き上げた。

「おい！どうなんだ。お前は何か知ってるのか」

「もしや、貴方があれを……」

更に顔を青ざめ、汗を滲ませる相手を見て、イアンは沸き上がる怒りを抑えきれなくなった。掴んでいる胸倉をゆすり、その人物に怒鳴り散らした。

「テメエ、自分が何をしたのか分かってんのか！」

「ほ、本当の事を言っただけじゃないか。カールハインツ様の邪魔をした奴が悪いんだ」

少し離れた場所では、まだ剣を交えている二人がいる。

「止める二人共！……ラン！カールは関係ないんだ！」

「お二人共、お止め下さい！」

友人達の必死の呼びかけは、目の前の敵に全神経を集中させている二人には届いていない。お互い相手の動きと剣先を見つめ、反撃の機会を伺っている

「ダメだ。聞こえてない」

「でも、このままじゃ……」

どうしようかと、途方に暮れていた時、ザウルの横を誰かが横切った。はっと見ると、その人物は、長い栗毛を揺らし、あちこ

ちに落ちている長い木の枝を二本拾い上げた。

いきなりの事に驚いて、その者に声を掛けようとしたが、その前にその人物は動いた。

ヒュン、と音がした瞬間には、ランとカール、二人の鼻先に木の枝が突き付けられていた。

はっと前を見ると、つい先程までいなかった筈の人物が、剣をかわすように間に割って入り、枝を自分ともう一人に向けている。いきなり現れた人物は、この学園の制服を着た、見覚えの無い少女だった。

乱入者以外はその場で呆然としてる中、栗毛の少女はキツと二人を睨むと口を開いた。

「友人が止めようとしてるのよ。決闘を中断させようとするのはそれなりの理由がある筈。それが友達なら尚更。その声を無視するなんて、彼等に失礼じゃない」

それだけ言うと、少女は枝をその辺りに放り投げ、踵を返しその場を離れてしまった。

「……………」

突然の事に声が出せなかったイアン達だが、二人を止めてくれた事には感謝した。

少女が見えなくなると、カールは剣を降ろし、気が削がれた、と言いき残しそのまま去ろうとする。

去り際に、例の生徒が前に出て来たが、見向きもせず、「目障りだ。私の前から消えろ」とだけ言い、学園に向かって歩いていってしまった。うう、と生徒はその場に崩れ落ちたが、同情する者は一人もいなかった。



「まったく、心配させやがって」

カールとの決闘で、ランは全く無傷という訳にもいかず、温室でイアンの手当を受けていた。

「ラン。あれはカールがやった事じゃなくて……」

「分かっている」

ランに事の真相を話そうとしたルネだが、話始める前に遮られてしまった。

「ああすれば、本人から出てくると思ったんだ。カールもそれを察してくれたようで助かった。決闘は勝敗に拘ってしまったが」

つまり、カールの取り巻きは多すぎる為、カール自身も巻き込んで本人を誘い出した、という事だ。

「じゃあ最初から、カールじゃないって分かってたの？」

「ああ。意見でぶつかる事があっても、彼があんな卑劣な真似をする筈がない」

どんなに衝突していても、お互いを高め合うライバルで、良き友人だ。心の奥底では、認め合っている。だから、今回もカールに協力してもらう事にした。筈なのだが、食い違った主張がある為、どうしても反発してしまう。

「なんだよ。だったら最初からそう言えば良いじゃねえか」

「すまない。あまり時間が無かった」

包帯も巻き終え、そろそろ寮に戻ろうとした時だ。イアンが不思議そうに言い出した。

「それにしても、あのお嬢さんは一体誰だったんだ。ランとカールの間に割って入るなんて、それもただの枝で」

「ああ。私も、彼女には気付かなかった。制服を着ていたから、この学園の生徒だとは思うのだが」

「でも、見た事無いよね」

「……案外……また直ぐに会うかもな」

夕食に間に合うように、少し急ぎ足で歩く三人を、昇り始めた月が照らしていた。

月が照らす寮の一室では、ザウルに手当を受けたカールが、窓の外を眺めている。

ザウルは、ランとカールの思惑を聞いておらず、少し心配気に彼を見ていた。すぐ後で、イアン達から聞く事になるのだが。

「なぜ、彼の挑戦を受けたのです？ 貴方はやってはいないのでしょ  
う」

「ふん。彼奴<sup>あやつ</sup>を潰す良い機会だと思ったただけだ。さすがに、そう簡単にはいかなかったがな」

ランの作戦に乗っただけだと言えば良いのに、全く素直でない。こちらにも、最初こそ冷静に犯人が表れるのを待っていたのだが、剣を交える内に、つい本気になってしまった。ランとの決着はいつもどっち付かずで、片方が勝てば、次はもう片方が勝つ。といった事を繰り返していた。ので、剣で叩き潰したい、と思ったのは事実だが。

「しかし、あの女性には驚きました」

ザウルも、ランとカールの間に入った女子生徒の事を気にしているようだ。それを聞いたカールもふっと息を付くと、口に笑みを浮かべた。彼にしては珍しい事である。

「私の剣筋を見切るとは、面白い。またいずれ会う事になるだろうな」

彼のプラチナブロンドの髪を、室内ランプの淡い光が、優しく照らしていた。

## 出会い 2

陽が昇り、学園の広い敷地を照らしている。生徒は皆、今日も自分の教室を目指し、他愛の無い話に花を咲かせていた。

そんな中を、一際目立って歩く人物達がいた。

その人物の姿を目に留めると、どの生徒も脇にそれて、道を作る。その間を歩く人物を目にしては、憧れや、尊敬の眼差しを送る者が殆どだ。宝石が輝くように自信を主張する彼等の美貌に、振り向かない生徒はいないであろう。

いつもの光景を、普段は気にせず歩き続けるラン、イアン、ザウルだったが、今日はある人物がいないかと、その集団に少し目を向けていた。

その人物とは、間違いなく昨日、乱入した少女である。

何故そこまで気にするのかというと、学園内でも、ランとカールの間に入れる程の剣術の持ち主は、今までいなかったからである。しかも、それが女生徒ならば、尚更興味を引かれても仕様がな。自分達に、熱い視線を送ってくる女生徒は、今この場にも大勢いるが、その中の何処にも彼女はいない。

すこしがっかりした顔で、ラン達は大きな校舎へ入って行った。

「わっ！まずい」

朝日が眩しい朝、寝過ごしてしまった少女は、今まで微睡んでいたベッドから跳ね起きた。

急いで身支度を始める彼女の風貌は、はつきり言って「地味」である。背中に届く長い栗毛は何の飾り気も無い紐で、後ろで一つに纏められている。顔の造りも、別段美少女という事はなく、平均並

である。街を歩いてても、まず間違いなく目立つ事はないであろう。  
転入初日から遅刻はまずい、と思いながら、鞆を引っ掴み寮から  
飛び出た。

周りに生徒は殆ど残っておらず、セリアが寝坊した事実を突き付  
ける。学園内にある寮とはいえ、校舎からはそれなりに距離がある  
のだ。

昨日、教師であり、女性口調のクルーセル先生に教室の場所は教  
えられていたので、校内で迷う事は無いだろうが、それでも果たし  
て間に合うだろうか。

全速力で駆けて行くと、教室の前に、丁度入ろうとしている教師  
の姿があった。彼がこちらに気付くと、すこし驚いたように目を見  
開いたが、直ぐに優しい顔になった。

「転入生の……セリア・ベアリットさんですね」

「は……はい」

息を切らして目の前に来たセリアを、彼は少し困り顔で見ている。

「貴方の担任の、ヨーク・バルディです。宜しく」

「よ……宜しく、お願いします」

まだ息の整わないセリアは、なんとかそれだけ言った。

「慣れない環境で、戸惑う事もあるでしょう。何かあれば、遠慮せ  
ずに言って下さい。では、クラスに貴方を紹介するので、付いて来  
て下さい」

穏やかに言われ、優しい人だなあ。と思いながら、セリアは、乱  
れた髪を治しながらヨークに続いた。

「……ふう。終わった」

あの後席に付いたセリアは、授業が全て終わったと同時に溜め息

を零した。他の生徒も授業が終わった事に安堵したのか、教室内はすぐに騒がしくなる。

授業を受けて何とか付いて行けそうだな、と判断するとセリアはスツと立ち上がり、校内を散策する事にした。

何しろ敷地が広い為、色々と面白い場所がありそうなのだ。

ふむふむ、と辺りを見回しながら一つ一つ教室を覗いていく。授業はもう終わっているのも、残っているのは雑談している生徒達ばかりだ。何処にでもありそうな風景だが、新しい場所というのは、それだけで新鮮さがある。ジロジロと周りを観察しながら廊下を進んで行った。

上の階まで来るとさすがに生徒の数も減り、シンと静まり返っている。

誰もいない廊下というのは、それだけで不気味だ。普通の生徒ならばここで引き返すのであろうが、冒険心に火が付いたセリアは、そのまま進んで行ってしまった。

その内、歩き疲れたセリアは、少し休もうと一番近くにあった教室の扉を開いた。殆ど同一の造りである教室を一つ一つ覗いていけばそれは疲れるであろう。中は静かなので落ち着きそうだ。そう思いながら中を見回すと、思わぬ所に先客がいた。

その人物は、机に腰を降ろし、壁に凭れ掛かって、目を閉じている。寝ているのだろうか。

穏やかな顔で目を閉じている顔は、驚く程整っている。それでも、淡い感じはせず、どこか頼りになる、凜とした顔だ。窓から入る光を受け、その存在そのものが輝いている様にも錯覚する。

その人物に見覚えがあったセリアは、あつと声を挙げた。咄嗟に口を抑えたが既に遅い。その声に、ピクツと眉が上がると、瞼がゆっくりと開いて、その赤みがかった瞳に、しっかりと自分が映ってしまった。向こうも、セリアが誰であるか気付いたようで、驚いたように瞳を見開いている。

しばらく二人で驚いていたのだが、やがて黒髪の青年、イアンが笑い出した。いきなり笑い出されたので、セリアもどうしたら良いか分からなく、困惑して見つめていた。

「ああ、悪い。いや、他の奴と、昨日の勇ましいお嬢さんに会えるかどうか話してたもんだからさ」

しばらく笑って気がすんだのか、イアンは立ち上がりながら言った。お互い、昨日顔を見ているからか、初対面の様な気がしない。

「俺はイアンだ。昨日は二人を止めてくれて、ありがとうな」

「あ、いえ。そんな」

勇ましいと言われた事に多少複雑な気持ちだが、一応貴族の礼儀として、丁寧にお辞儀をして自己紹介した。相手が、それを重んじるような人物かは怪しいが、それでもだ。

「セリア・ベアリットです。昨日はいきなり失礼しました」

「……あんた、見た事無い顔だけど、転入生か？」

「はい。今日からこのフロース学園に通う事になりました」

「時期外れになんて珍しいな」

言われてセリアは、うっと唸った。確かに周りから見れば不自然だろうが、こちらもそうれなりの事情があるので、仕方が無い。それをいきなり会った人物に話そうとは思わないが。

「それに、剣術も凄い腕前してるな。結構面白い」

「最初は内緒で習ってたんです。叔父に。家族に反対されるのは目に見えてたので。それより、イアン様はここで何を？」

「ん、ちょっと休憩をな。ここは静かで良い」

うーん、と一度大きく伸びをすると、イアンは壁に掛かっている時計に目を向けた。セリアもそちらを見ると、授業が終了してから三十分程が過ぎた所だった。

「おっと。そろそろ、時間かな」

何をしようというのか、イアンは窓に近寄り、開け放つとその縁に足を掛けた。

「えっ！そ、そこから飛び降りるつもり!？」

いきなりのイアンの行動を慌てて静止したセリアだが、自分の失態に気付き、はっと我に帰り、途端に後悔した。急な事だったので、言葉遣いを考えず、素で聞いてしまったのだ。

父はそうでもなかったが、母は礼儀に厳しい人で、一応それなりの教育を受けた。それに相手は貴族の子息。貴族同士での礼儀は当たり前であって、いくら突然とはいえ、言葉を誤ればまずい事に変わりはない。

セリアがどんどん青ざめているのを見ながら、イアンも少し驚いた。今まで、女性から気さくに話しかけられた事が無いイアンにとって、セリアの反応はかなり新鮮だった。大抵のお嬢様方は、とにかく体面を気にして、妙に上品ぶった者が殆どだ。別にそれを悪いと思っているわけではない。ただ、何となく自分とは合わないな、と感じていた。

「えっと……そこから、飛び降りるおつもりですか？」

もう遅いとは思いつてもいい女性の碎けた口調は、親近感があつてようと、飛び出た言葉は帰っては来ないのだから、本当に悪あがきだ。

「んー、聞こえない」

「へっ!？」

何を言われるかと、びくびくしていたが、聞こえた言葉は思いもしない物だった。

「さっきの言い方なら、多分聞こえるんだけどな」

殆ど初めてていつてもいい女性の碎けた口調は、親近感があつて面白い。出来れば、ずっとそんな風が良いなとも思い、少しからかうように言ってみた。

「そんな事言ってる場合では無くて、ここ五階ですよ!」

やはり、まずかったと思うが、ここで負ける訳にも行かず、相変わらずの仰々しい物言いで食い下がる。それに、こんな場所から飛び降りるなんて、正気とは思えない。どんなに身軽でも、無事では

すまない高さだ。

「聞こえねえな。じゃあ急いでるんで、このまま行くかなって」

そう言って、本気で身を乗り出すイアンに、セリアはもう降参した。

「ああ、もう、分かった、分かったから。そこから、飛び降りるつもり？これで良いでしょう」

最初から、飛び降りるつもりだったのだから、飛び降りようとするのが脅しにはならないのだが、今のセリアにそんな冷静な考え方は出来なかった。

しかし、イアンはそう言ったセリアに、ニヤリと笑いかけると、足を窓に掛けたまま言った。

「その『つもり』。あと俺はイアンだ。『イアン様』じゃない。じゃあまたな」

それだけ言い残すと、イアンは強く窓枠を蹴って、近くにあった木の枝に飛び移った。そして、そのまま木を伝って地面に下り立つ。呆然と自分を見下ろしてくるセリアにヒラヒラと手を振ると、イアンはそのまま歩いて行ってしまった。

いきなり現れ、そのまま去ったイアンに、セリアは呆氣に取られていた。

彼は今まで出会った貴族達とは違うようだった。貴族と言えば、変にプライドが高くて、形式に拘る者が多かったからだ。勿論、例外もいたが。

貴族同士ではそれが当たり前なのだから、最低でも礼儀として不足の無い程度には気を使っていたつもりだ。

そして、自分が女性という事も、礼儀を意識しなければならない理由の一つでもあった。女性というだけで、男性の殆どがこちらを下に見る。なので、気さくに話そうとすれば、すぐに礼儀知らずだ



と言われてきたのだ。

だが彼、イアンはそんな素振りを全く見せず、何となく対等に話そうとしてくれた気がする。ほんの少し話ただけで、分かる訳は無いのだが、少なくとも自分はそう感じた。

セリアが学園に転入して、初めてまともに話した生徒は、かなり好感の持てる人物だった。

校内を散策していたセリアだが、校舎はあまりにも広い為、全てを見る前に途中で断念した。もう何度か迷いかけた所なので、得策といえるだろう。

これからどうしようかと悩みながら、ふらふらと校舎を出たセリアに、声を掛ける者がいた。

「あら、セリアちゃんじゃない」

聞き覚えのある、女口調。声のした方を振り向けば、案の定クルーセルがいた。

「学校の中を探検？」

「はい。色々見て回ろうと……」

「ふーん。じゃあ、あっちに行くと良いわ。面白い物があるかも」  
クルーセルは悪戯を思いついた子供の様に、クスクスと笑いながら学園の一角の方を指した。

「ところで、学校はどう？ 馴染めそう？」

「あ、はい。親しみやすい人にも会いましたし」

「そう。それはよかった」

「クルーセル・ブロシェ！」

いきなり、の大声にセリアがビクツと肩を振るわせると、クルーセルの後ろから影が飛び出した。その人物は、黒縁の眼鏡を正すと、ジロツと睨みつけてくる。

「まったく貴方は。仕事をサボって何を遊んでいるのです」

「あら、ハンスちゃん。そんなに怒らないでよ。授業は終わったんだし、良いじゃない」

「授業が終わって緊張を解いて良いのは生徒達です。貴方は教師でしょう。早急に仕事に戻って下さい」

ハンスは、逃げようとするクルーセルを引きずると、そのままずるずると校舎へ連行していった。置き去りにされる形で残されたセリアに、クルーセルは引きずられながらも手を振っている。

二人のやりとりを微笑ましく思いながら見ていたセリアは、教えられた方角に向かって歩き出した。

その先に、セリアが温室を見つけるのにそう時間は掛からなかった。そして、それを見たセリアは、瞳を輝かせて早速中へ入ろうとする。ちょっとした好奇心という物だ。子供の頃に憧れた、秘密基地にでも来たような気がして、自然と顔が綻ぶ。

実際はそんなに、秘密でも何でもないのだが、そこはまあ気分の問題である。

流石に誰かいるかもしれないと思い、そっと足音を忍ばせて入る。端から見れば何処かへ不法に侵入しているようしか見えない。

コソコソと隠れるようにして入った場所には、ありとあらゆる草花が、それは色鮮やかに咲き誇っている。まるで楽園にでも来たようだと、セリアは思った。

「わぁ。綺麗」

「あれ?…君は……」

後ろから声が聞こえた途端、セリアの肩がビクツと揺れた。つい花に見入ってしまい、背後から近付いて来た人物に気付かなかったのだ。

「たしか、昨日の……」

「あつ、えつと……」

目の前に現れた、肩に届く長さのふわふわした水色の髪をした少年は、少し驚いたようにこちらを見てくる。そして、何を言われているのかも、すぐに察した。そして、彼もあの場所に居たな、と思いつく。

「こんにちは。君は、昨日助けてくれた人だね。どうもありがとう」

ふわっと優しく笑って言う様子は、まるで天使のようだとセリアは思った。ガラスから光が透けているような透明な雰囲気も、深緑の瞳も、丁寧で端麗な顔にとっても似合っている。

「いえ、そんな。こちらこそ、昨日はすみませんでした。私は、セリアと申します、」

会ってすぐの自己紹介は、貴族間の礼儀の一つだ。

「僕は、ルネ。花が好きなの？」

「…はい………まあ」

この場所には好奇心で入っただけなのだが、実際花は好きだし、この花に見とれたのも本当だ。

「僕もだよ」

少年はそう言うのと、手に持っていたじょうろを近くの植木鉢に向け、水を掛け始めた。室内に降り注ぐ温かい日差しの下、花に優しく水を与える様子は、それだけでまた絵になっている。

「このお花は全部ルネ様が？」

先程のイアンとの過ちを繰り返すまいと、自分の言葉に気を配りながら聞く。

「うん。大体は僕が世話をしてるよ。花を見ていると心が休まるから」  
「ルネ。いるか？昨日のお嬢さん見つけたぜ」

いきなり声がしてそちらを向き、温室に入ってきた人物を見ると、セリアは目を見開いた。それは、入ってきたのがイアンだからではない。イアンと共に入ってきたのが、昨日決闘をしていた青年本人だったからだ。

「おっ！なんだ。セリアも一緒か」

「…セリア？…君は…」

イアンの横にいた、ダークブロンドの少年がこちらに目を向けて来た。まるで彫刻のように繊細な顔が、驚きで目を見開いている。セリアも、少年に負けない程驚き、彼を見返していた。

「セリア、こいつはランだ。見覚えあるだろう」

二人の驚きようを見てからかっているのか、イアンは必死で笑いを堪えるように肩を揺らしている。

「ランスロット・オルブラインだ。昨日は仲裁に入ってくれたこと感謝する」

余計な事をした、と責められると思い身構えていたセリアは、覚悟していた言葉が来ず、尚かつ丁寧にお辞儀までされて、呆氣に取られた。

「いえ。その、私こそ。昨日は大変失礼しました」

今日三度目になる謝罪をする。自分でも、少し出過ぎた真似をしたのでは、と不安に思っていたのだ。それを、感謝されたのだから、まるで肩透かしをくらったような気分である。それでも、どうやら、反感は買っていないようだ、と少しホッとした。目の前の相手も何かすっきりしたような顔をしている。

「出来れば、昨日のお礼に何かしたいのだが」

いきなり感謝されたと思えば、今度はお礼と来た。そんなに凄い事をした訳でもないのに、しかも会って早々これである。律儀というか大胆というか。

思っても見なかった申し出にセリアは目を白黒させる。その反応が面白いのか、後ろで見ているイアンは先程から笑っぱなしだ。隣のルネも、どこことなく頬が緩んでいるように見える。

いきなりの事で、頭が回らず困惑していたセリアだが、その内はっと思いついた。

「じゃあ、学園の案内を頼めますか？」

とにかくこの学園は広い。一人で探検するよりも、学園の生徒に

聞いた方が、色々面白い物があつたりするものだ。昨日、必要最低限の教室は幾つか教えられたが、まだまだ分からない場所は沢山ある。後々誰かに頼むつもりだったが、今はまだそんなに親しい人物はいない。

それに、これからの学園生活、友人は多い方が良い。案内を頼めれば、彼等とも親しくなれるかもしれない。一石二鳥という奴だ。

「君は転入生か？」

「はい。今日からここに通います」

「では、分からない事も多いだろう。案内くらいならば、お安いご用だ」

本当に彫刻か、描いた絵のように、にこりと微笑むとランは快く了承してくれた。

「それじゃあ行くか」

やる気満々のイアンは心底楽しそうにしている。

「ルネはどうする？」

「僕は、まだ、花の世話が残ってるから」

「そうか。ではまた後で」

「うん。セリアまた来てね」

軽く手を振るルネと別れると、三人は温室を出た。

「イアン。さっきから随分楽しそうね」

横で、今も笑い続けているイアンを軽く睨むと、セリアは責めるように言った。すぐ横にいるランに聞こえないよう声は抑えている。

「そりゃあ、ラン見た時のお前の顔。ホントに面食らってたからな。思い出すだけで笑える」

今にも大声で笑い出しそうなイアンに、セリアは頬を膨らませた。それを見て、イアンも更に面白がる。短時間でこれだけ打ち解けるのも、イアンの気取らない性格からだろう。親しく出来るのは嬉しいが、やはり、からかわれるのは何となく面白くない。

セリアは、最後の抵抗とばかりに、そっぽを向いた。すると、横でこちらをじっと見ていたランと目がばっちり合ってしまったので、たじろいでしまう。

「一つ聞いても良いだろうか？」

「あ、はい」

「君はどうしてイアンとは親しげに話すのに、私に対しては少し控えめなのだろうか」

昨日、イアンも彼女を知っている風ではなかったので、今日初めて会ったのは明らかだ。それなのに、明らかにイアンの方に打ち解けている。イアンの飾り気のない性格が理由なのは分かるが、自分との対応があまりにも違うと、少し複雑だ。

セリアは、ランの質問に氷のように固まってしまった。彼には聞こえないように用心していたつもりだが、聞こえてしまったらしい。イアンに続いてランにまで失態を晒してしまったのだから、衝撃はかなりの物だった。今まで、こういった事が全く無かったのかと聞かれればそうでもない。が、ここまで酷い過ちをした事はなかった。元々、形式に拘った貴族の礼儀事は苦手だったのだが、だからといって素を見せる訳にもいかず、セリアは懸命にそれを貫いて来たのだ。それが当たり前の世なのだから、文句は無いが。

何故、ここへ来てこんな失敗を繰り返すのか分からない。が、それよりも、今この状況をどうするかだ。

ランの場合、イアンのように笑ってそのまま、という訳にはいかないだろう。彼自身、礼儀正しい人間の代表のような人物だ。優雅な物腰に丁寧な口調。彼が、自分の態度を不愉快に感じるのも無理

は無い。

と、内心グルグル考えているセリアに、ランが言った言葉は予測出来ない物だった。

「出来れば、私にも親しくして貰えると、嬉しいのだが」

先程のように、彫刻のような端麗な顔で、微笑みながら彼は言った。

その言葉に、セリアはまた面食らってしまった。今日は何度も驚かされてばかりだ。

予想だにしていなかったランの申し入れに、セリアは思考が一瞬停止しそうになった。

どうやら彼等は、他の貴族方とは器が違うようだ。さすが、名門校と名高い学園の生徒なだけはあるなあ。等と、頭の隅で考えてしまった。

「どうだろうか。君さえ良ければなのだが」

「えっと……」

何と答えれば良い物か、考えたセリアは、迷った末、

「これから宜しくね、ラン。…で良いのかなあ」

確認するように少し遠慮気味にこちらを見てくるセリアに、ランはやっぱりと笑いかけた。

## 出会い 3

「けど、案内ったって、一日じゃ終わらないぜ」

お互い、少し打ち解けたセリア達に、イアンがどうするかと聞いて来た。

とにかく広いこの学園を一日で廻り切ろうというのには無理がある。

「とりあえず、図書室の方から回って行こう」

一日で終わらないとは、本当に広い学園だな、等と呑気に考えていたセリアだったが、周りから嫌という程に集まる視線に気付いた。そして、その視線を集めているのは、横に並ぶ二人だというのにも気付く。続いて、横にいる女は誰だ、的な意味を込めた視線を向けられてくる。

あまり深く考えていなかったが、二人の輝くような容姿に、殆どの生徒は憧れを持つだろう。主に女生徒達は、自分に敵意めいた視線を投げかける者もいる。

別に、それでどうしよう、という気はセリアには無いが。

「セリア。どうかしたのか」

自然に足が止まっていたらしい。視線に気付いていないのか、敢えて無視しているのか。少し先にいる二人が不思議そうにこちらを見ってくる。

置いて行かれては折角の案内を頼めなくなる、とセリアは急いで二人に追いついた。

三人が最初に来たのは、学園の東側にある、大きな図書室だ。吹き抜けの二階構造で、上から下まで本がびっしりと詰まった棚がズラリと並んでいる。図書室というより、図書館だ。

周りを見渡せば、ここでは、勉に勤しむ生徒や暇を持て余している



生徒、雑談する生徒など様々だ。が、ラン達が入って来ると、皆一斉に目を向けた。数名の女生徒からは、歓喜の声すら上がっている。普段ならそのまま自分達のしていた事に戻る生徒達だが、ラン達の後ろから着いて来る見慣れない女生徒がいる事で、自然と視線もそちらに行く。今まで、彼等と連れ立って歩く女性など、皆無に等しかったからだ。

「ここが図書室な。大体の資料なんかもここにあるぜ」

他生徒の興味津々な視線を全く気にせず、イアンは種類別に置かれている本棚を一つ一つ案内してくれた。その後に続くランも、特に視線を気にしている様子でも無い。

「大きいのね」

セリアはぐると室内を見回しながら言った。

率直でもっともな意見に、イアン達二人は可笑しそうに、くつと笑った。

「でかいよな」

同意するイアンに、後ろにいるランも頷いている。

「卒業生からも寄贈されてくるので、棚は年々増えるばかりだ。興味深い図書も贈られて来るので、それは有り難いのだが」

「本が入りきらなくなって、五年前に改築したんだとさ」

ははっと笑うイアンに、返す言葉が見つからず、セリアは苦笑するだけだった。

もう一度セリアが図書室を見回していると、いきなり何かが背中にぶつかった。

「きゃっ！」

短く悲鳴を上げ、すぐ後ろにいたランに受け止められたのは、セリアにぶつかった別の女生徒であった。ぶつかられた本人のセリアは、特に大きな衝撃でも無かった為、踏み堪えたが。

「君、大丈夫か？」

「あ、はい。ありがとうございます、ランスロット様」

そんなに激しく衝突してはいないのに、大袈裟に後ろに転んだ女

生徒は、頬を薔薇色に染めながら恥ずかしそうに身を振らせている。

「大変失礼しました。それでは」

ぶつかったセリアには何の詫びもせず、ランに頭を下げると女生徒はさっさと行ってしまった。しかし、去り際に彼女がジロツと自分に敵意剥き出しの視線を投げかけたのを、セリアは見てしまった。どうやらラン達と居る事で、一部の女生徒達の反感を買ってしまったようだ。ようするに、釘を刺されたわけである。

遠くで、ぶつかった生徒に他の女生徒達が、よくやった、とエールを送っているのは、気のせいではないだろう。どこに行っても、女性の嫉妬とは恐ろしい。

でも、特に何かやましい事をしているわけではなく、ただ案内をして貰っているだけなので、まあ特に気にする必要もないだろう。後々何か言ってくるようであれば、事情を話せば良いだけだ。と、この時セリアは甘く考えていた。

図書室を回って、その他の教室、講堂、ホール等を見て回ったが、行く先々で同じように女生徒方の痛い視線を受ける事になった。そんな視線に内心うんざりしているセリアだが、笑顔で校内を案内してくれる二人にはとても言えない。

「次は厩舎の方へ行ってみるか？」

「えっ！厩舎があるの！？」

驚くセリアにイアンが、教養の授業に馬術も含まれている為だと説明してくれた。

上級になれば自由に馬を連れ出す権利が与えられるらしく、学園に近い草原で彼等はよく走らせるらしい。

この学園は校舎だけではなく、懷まで広いらしいな。などとセリアが考えている内に厩舎に着いた。躊躇する事なく中に入って行くラン達の後を、恐る恐る覗き込む様な形でセリアは厩舎に足を入れ

る。

中では、鼻息荒く足を踏みならしている馬達が、ズラリと並んでいた。優に二十頭はいるだろうか。一匹一匹の毛並みがしっかりしていて、動きに気品がある。

「セリア！こっちだ」

イアンに急かされて二人の傍へ行くと、厩舎の端の方でそれぞれ二人に鼻先を擦りつける二頭の馬がいた。

「どうだ？別嬪だろ。シャルルっていうんだ」

そういつて、イアンは自分にじゃれて来る月毛の馬を指した。名前を呼ばれたのが嬉しいのか、更にイアンに強く擦り寄って来る。

馬が別嬪かどうかを問われても分からないが、見事な馬だという事はセリアにも分かった。これでも乗馬が多少は出来る身なのだ。

シャルルに近付いてクリーム色の鼻先を優しく撫でてやれば、気持ち良さそうに目を細めた、気がした。

「んで、ランのがヘルメス」

ヘルメスと呼ばれた栗毛の馬は、自分が撫でられるのを待つように、セリアをジッと見つめている。シャルルにしたように鼻先を撫でてやれば、嬉しそうに尻尾が揺れている。

「可愛い」

「良かった。ヘルメスもセリアを気に入ってくれたようだ」

そのままセリアが二頭を撫でていると、後ろにいた馬が一度大きく嘶いた。驚いて後ろを振り返れば、そこには、大きな黒馬がこちらを睨んでいる。黒い毛には艶があり、堂々と立っている姿には余裕が感じられる。澄んだ黒い瞳は真っ直ぐこちらを射抜き、まるで吸い寄せられているような引力を感じる。

その馬に引き寄せられるように手を伸ばすと、イアンが慌ててそれを静止した。

「おいおい、止めとけ。こいつは気性が激しくて危ないぞ」

「そ、そうなの？」

言われて、伸ばしていた手を引こうとすると、また再び馬は大き

く嘶いた。

「おい、アルセウス。どうしたんだ。」

ラン達が宥めるように近付くが、それでも馬は鼻息を荒くするだけで、静まる気配がない。その動きさえも力強い美しさがあって、セリアは更にその馬に見惚れた。セリアがそのまま手を伸ばすと、黒馬は待ちわびたように、首をセリアに向かって伸ばして来る。

それに答えるようにセリアが頭を撫でてやれば、馬は途端に大人しくなり、セリアに身を寄せて来た。

「信じられねえ。あの、アルセウスが……」

イアンもランも絶句しているが、セリアは全く気付かず、黒馬と戯れている。

この学園では、未来への可能性を認められ、またそれを示す地位を与えられた生徒に、記念として馬が送られる。そして、目の前のこの黒馬もその内の一頭である。

しかし、己の主に似たのか。この馬はプライドが高く、自分の主以外には騎乗するどころか触らせる事も殆ど許さず、世話係の者達の悩みの種であった。馬は飼い主に似るというが、何人も寄せ付けない冷たさは、主を見事に連想させる。

その馬が、会って数分も経たない少女に撫でる事を許し、あまつさえ身を寄せているのだから驚きだ。

すっかり懐いたアルセウスを、可愛い、と言いながら夢中で撫で回すセリアの耳に、遠くから夕刻を告げる鐘の音が届いた。それは、後ろにいる二人にも聞こえたようだ。

「おっと。もうこんな時間か。そろそろ戻らないと晩飯を食いそびれちまうな」

「そうだな。回りきれなかった場所は明日にして、今日はもう引き上げよう」

「ほらほら、行くぞ」

まだアルセウスと一緒にいたい衝動で、立ち去る足が遅くなってしまふセリアを軽く施しながら、イアン達は厩舎を出た。

「今日は本当にありがとう。二人共」

「いや。役に立てたのなら嬉しい」

「そうそう。それにまだ終わってないぜ。見てない所は沢山あるんだからな」

そう言ってくれる二人に、感謝しながら、セリアはラン達の紳士ぶりに感心した。きっとこういう人程、人望も厚いのであろうな。

「人望って言えば、マリ奥斯候補生よね」

マリ奥斯候補生も、きっと人望厚い若者なのであろう。浮かんできた考えにセリアはそれまで忘れていた事実を思い出した。

「そうだ。二人はマリ奥斯候補生って知ってる？」

学園に詳しそうなこの二人なら、当然国の未来を任される人材である彼等の事も知っているであろう。

いきなり問われた質問に、虚をつかれた思いの二人は何と答えれば良いか戸惑ってしまった。

「し、知ってるが。何でだ？」

「ちょっと気になって。将来、この国を背負って立つ存在になるかもしれない方でしょ。どんな人なのかなって」

「…そうか。セリアはどんな奴だと思っんだ」

セリアの候補生像に興味が湧いて、うきうきした目でイアンは逆に聞いた。人々が、マリ奥斯にどの様なイメージを持っているのかを伺う良い機会である。いきなり話を勧めるイアンをランが止めようとするが、そんな事は気にしない。

「そうね。まず、勉強熱心だろうから、丸い大きな眼鏡を着けているかな」

「……………はっ!？」

予想だにしていなかった答えにイアンは声が上擦ってしまった。

「あと、いつも大きな本を抱えていて。歴史書とか。授業は白熱していて、議論が飛び交って」

いや。確かに授業中に議論が飛び交うのは間違っていない。主に自分の隣にいる人物と、もう一人の所為なのだが。だが、歴史書を抱えているなんて、何処からそんな想像が浮かんでくるのだ。

「それで、国の事を大事に想ってくれている人かな」

「……………」

最後の言葉は、この国の誰もが思っている事だろう。マリオス候補生は、国の未来を考える人材だと。

「それで、君は彼等に会いたいのか？」

ランの問いに、セリアは一瞬驚いた顔を見ると、顎に手を当てて考え出した。

「うーん。きっと忙しい方達だから、会えるかは分からないけど。でも会えたらお礼が言いたいな」

「お礼？」

「うん。この国の未来を本気で想ってくれて、ありがとうって」

マリオス候補生に求められるのは、何と言っても国を想う心だ。少なくとも、セリアはそう信じている。そして、自分もこの国で生きていくのだから、国を想う者に当然、感謝の心がある。その気持ちを、もし会ったならば伝えたいのだ。

セリアの力説に、胸の内がじんわりと温かくなるのを感じたイアンは、ふっと微笑むとセリアの頭を優しく撫でた。

「その気持ち、十分アイツ等に伝わると思うぜ」

にこりと笑ったイアンに、セリアもまた笑い返した。

「おい、イアン」

和んでいる空気を壊して、イアンをセリアから引き剥がすと、ランは耳打ちした。

「何を考えている。隠す必要は無いだろう」

「あゝ悪い。なんか、アイツの顔見てたら、照れくさくてさ」

セリアには聞こえぬよう、十分注意しながらイアンは返した。別に深い意味があった訳では無いのだが。これでは、彼女に真実を打

ち明けにくくなってしまった。それも、面白いので悪くは無いが。  
「どうしたの？」

「いや、なんでもない。よし！一旦部屋に戻って、食堂に集合だ」  
「えっ!？」

また、突拍子もなく告げられた事に、セリアは困惑した。まさか夕食も一緒にするつもりだとは思っていなかった。確かにこの学園の食堂は男女共用だが。でも、折角親しくなれたのだし、誘って貰えて嬉しくない訳が無い。アインの言葉に気持ちよく頷きながら、近付いた寮に目を向けた。

彼等とは食堂の前で待ち合わせた後、セリアは女子寮の自分の部屋へ戻って行った。男子寮の建物と女子寮の建物は距離は少々あるが隣同士に建っており、その間に、大きな食堂がある。それなりのキッチン設備が整っているので、大きさもそれなりである。

自分の部屋に戻ったセリアは、一度ベッドに腰掛けると、どっと疲れが湧いたように感じた。かなりの場所を見たように感じたが、イアンはまだあると言っていた。本当に、どれだけ広いのだこの学園は。一人個室が与えられるこの寮も、かなりの大きさがある。昔は、何処かの貴族の屋敷だったそうだとランが説明してくれた。

しばらくぼうつとし、一息ついた所で、約束の時間だと思い直し、気合いを入れてベッドから立ち上がった。

階段を下りて玄関を出ると、急いで食堂へ向かう。その道中で、女生徒方の興奮した声が聞こえてきた。そして、それは食堂に近付

く程に大きくなっていく。どうやら原因は、食堂前に立っている四人の若者らしい。

「あっ！」

「セリア、こっちだよ」

セリアが慌てて駆け寄ると、イアンとランの他に昼間会ったルネと、もう一人、昨日の決闘の場にいた褐色の肌の男子生徒が居た。

彼と目が合うと、その生徒は丁寧にお辞儀をした。それと同時に、琥珀色の瞳は伏せられ、長い赤髪が揺れる。整った顔と寸分の狂いが無い見事な姿勢と、不思議な雰囲気を持つこの少年の落ち着いた空気に、心が静まったように感じたセリアは、周りから上がる黄色の声で我に帰った。

「ザウル・アルシャーノフです。あの時は、二人を止めて頂き、ありがとうございます」

また、お礼を言われてしまった。何故、この者達はここまで感謝するのだろうか。どの様な経緯があったかは知らないが、神聖とも言える決闘を強引に中断させてしまったのだから、むしろ責められても可笑しくはないのに。

何はともあれ、取り敢えず謝罪はしておこうと、セリアも深々と頭を下げ、その意を伝えた。その後自己紹介を終え、彼もニコリと微笑んでもう一度頭を下げられた。その丁寧な物腰に周りの声が更に大きくなった気がする。

「ほら、さっさと行こうぜ。話はそれからだろ」

イアンが再び事の進行を決める。どうやら、彼等の中でイアンはそういう位置にいるらしい。持ち前の明るさから為せる業であろう。セリアが入ると、案の定、生徒達の視線が向く。これほど揃いも揃って端正な顔をした者達ならそれも仕方がないが。チラホラと混じる、敵意剥き出しの女生徒達の視線は、どうにかして貰えないだろうか。まあ、気持ちも分からなくは無いが。

「早く座らねえと、席取られちまうぜ」

急がなくとも、彼等が近付けば自然と席が開けられているのだが。



目の前でいそいそと席を譲る生徒達に申し訳なく思いつつも、セリアは彼等の隣に席を取った。ザウルとルネがテーブルの反対側に座り、イアンの隣の端の席だ。

「ん？　そういや、カールはどうした？」

「ああ。彼は、先程済ませ、今は自室に戻っています」

「相変わらず、不規則だなあ」

いつも食事を二次三次の次にしてしまうカールは、それまでの作業に区切りがついた時、思い出したように食事を取る。その為、時折何も食わずに時間を過ごしてしまうので、よく友人達からも心配されているのだ。治すように言っても、彼は聞きはしないのだが。

「折角セリアを紹介してやろうと思ったのに」

「誰の事ですか？」

目の前に座るルネに聞いてみる。健気に丁寧な口調を貫こうとするセリアに、隣の二人は困惑した顔になっているが、そんな事は気にしない。

「昨日、セリアが止めてくれたもう一人の方だよ」

「あつ、…あの」

チラリとランを覗き見ると、少し不機嫌そうな顔をしている。本人にその意識は無いのだろうが、眉間に寄った皺はくっきりと深い。そんなに仲が悪いのだろうか。まあ、決闘などをしていたぐらいだ。少なくとも、多少のすれ違いがあるのだろう。

「セリア殿は、何処で剣術を？」

「あつ。小さいころから、叔父に習っていたんです」

「女性なのに、反対はされなかったのですか？」

「叔父は特に何も。家族には内緒だったのさ」

まるで、悪戯がバレた子供のように、少し笑いながら話す様は、昨日決闘に割って入った勇ましい女性の姿とは、かなり違っていた。凜とした姿勢で二人を射抜く様に睨んだ瞳は、今は優しく細められていて、昨日感じた威圧感は今も無い。

「ザウル様はなさるんですか？　剣術」

「自分は、余り。護身術程度です」

ザウルと談笑していると、肘を突かれた。横を向くと、そこにはやけた顔のイアンがいたので、何となく嫌な予感がする。

「お前、諦め悪いぞ。別に構わないだろ」

「いいの。私が構うの」

小声で言われたのは、言葉使いの事だと、すぐに推測出来た。初対面のザウルや、昨日今日会ったばかりのイアン達と食事を共にしているだけでも、凶々しいだろうかと思うのに。これ以上慣れ慣れしく接するのも彼等に対して失礼ではないかと思う。

「セリアはイアンとランとは仲良く喋るんだよね」

ルネの一言に顔を上げると、イアンが教えてくれたよ、と笑顔で言われた。その微笑みは、何かを企んでいるのか、純粋な天使の笑みなのか、判断が着かない。

セリアが横に座る人物を睨みつけると、当の本人は最後のパンを口に放り込んでいる所だ。

「はい。自分もそのように聞きました」

ザウルの絶望的な一言にショックを受けていると、ランが口を開いた。

「別に構わないのではないか。特に形式に捕われる必要も無いだろう。それに、君には自然体の方が似合っている」

真っ直ぐな瞳で殺し文句を言われ、反対側に座る二人に頷かれた事で、セリアは遂に白旗を上げた。その後、横で必死に笑いを堪えるイアンを、軽く肘で小突いておいた。

夕食の時間も終わりに近付いて、残る生徒も疎らになる。去って行く生徒を一人一人気にしている様子のセリアにザウルが気付いた。

「どうかしたのですか？」

「あっ！えと……マリオス候補生様はいないのかな、って思って」  
先程話題に出たのだから、何となく気になってしまう。

セリアの一言に、イアンがビクツと肩を揺らしたので、逆にこちらが驚いた。

「ど、どうしたの！？」

「いや……何でも」

セリアが視線をザウルに戻すと、彼もまた目を見開いて、驚いた顔をしていた。何かまずい事を言っただろうか。視線をそのままザウルに向けていると、非常に困惑した顔をしている。

「セリア殿は、聞かされていないのですか？」

「え……何を？」

ザウルが視線をさり気なくセリアの隣に向けると、一生懸命何かを目で訴えて来るのが分かった。ランも非常に複雑な表情をしている。

彼等とセリアの反応から、セリアには何も伝えていないのは明らかだ。特に隠す理由は無いように感じるが、イアンが余りにも必死に目を動かし、言うなど意思表示をしてくるので、ここは自分が引いた方が良さそうだ。

「いえ……」

「さっ、飯も食ったし。そろそろ戻ろうぜ」

突然切り出したイアンを、セリアは不審げに見ているが、イアンが自分の背中を押して来るので、しぶしぶ出口へ向かった。その後が続く三人も、何処か複雑そうな顔だ。

まさか、マリオス候補生の話題は、この学園では禁句なのだろうか。とも思ったが、そうである理由が分からない。

考え込むセリアの後ろで、ザウルが静かにイアンに聞いた。

「何故隠すのですか」

「いや、成り行きでこうなっちゃってな」

近々話そうとは思うが、マリオス候補生達の事を知りたがるセリ

アを、近くで見ているのは何故か面白い。なので、もう少しこのままで、と思っていたのだが。こうなっては、いよいよ打ち明けにくくなってしまった。

「まいったな」

不思議そうな顔をしてくるセリアに、イアンは笑うしかなかった。

自分に与えられた自室に戻って来たセリアは、ドサッとベッドに体を預けると、はぁと息を吐いた。部屋に帰ってみると、やはり疲れていたのか、激しい疲労感に襲われた。

初日という事で、それなりに緊張もしていたし、広すぎる学園も歩き回ったのだ。まだ時刻は早い、このまま寝てしまおうか。

とも思ったが、風呂だけは入ろうと、体を起こした。流石、名門校のフロース学園だけあって、一人個室の寮には、それぞれシャワーと洗面所が付いている。熱い湯を頭から被ると、少し緊張が和らいだ気がした。

シャワーですっきりしたが、薄暗い部屋に戻ると、やはり眠気がぶり返して来る。セリアはそのままベッドに倒れふすと、髪が濡れているのも構わず、そのまま眼を閉じた。

## 出会い 4

カーテンの隙間から入り込んだ朝日によってセリアは起こされた。寝過ごしたか、と思い、急いで時計を確認するが、まだ時間には余裕がある。ほっと息を吐くものの、余りのんびりはしていられない。まだ眠気の残る身体を起こし、洗面所へと向かった。

片手に真新しい教科書の詰まった鞆を下げ、セリアは学園への道を歩いていった。昨日の朝は走った道のりだが、今は緩い歩調でも十分に間に合うであろう。周りは、自分と同じ目的で学園を目指す生徒達で賑わいでいる。今まで、規律の厳しい学園にいた為、こういった光景はセリアには珍しい。

興味深げにキョロキョロと辺りを見回していると、整備された道から少し離れた林の中に、見慣れた人影をみつけた。

「クルーセル先生？」

「あら、セリアちゃんじゃない。おはよう」

クルーセルは特に驚いた様子もなく、こちらを振り向いた。

「おはようございます。あの、先生はここで何を？」

「ああ。朝の日向ぼっこよ」

教師は皆、学園で授業の準備を始めているというのに、彼はまったく気にした様子はない。名門校フローズ学園の教師でありながら、ここまで自由に行っているクルーセルを、彼の相方が見れば激怒することだろう。

「そういえば、昨日は面白い物が見つかった？」

聞いた途端、それは温室の事を言っているのだらうとセリアは理解した。

「はい。ありがとうございました」

「いいのよ。折角の学園生活なんだから、楽しまなくちゃね」

茶目っ気たっぷりと言う姿は、何と表現したものか。可愛らしい、とセリアは思った。大の大人に、しかも男に可愛らしいという言葉

はどうかとも思うが、そう感じたのだから仕方がない。

「あの、先生。そろそろ時間では……」

「あら、そうなの？じゃあ急がなきゃね」

残念と言いながらも、全くそんな気は見せず、クルーセルはさつと踵を返した。

「おいでー」と自分を呼ぶ彼の自由奔放ぶりに少し戸惑うが、授業に遅れるのはまずい。

セリアも再び学園へ歩き出した。

授業も滞りなく受け、二日目も順調に進んでいるかのように見えたが、周りから自分に向けられる好奇の視線は、段々強くなっているようにセリアは感じていた。転校生という事もあるのであろうが、その最大の理由は、

「よお、セリア。迎えに来たぜ」

間違はなく彼等だろう。

授業の終了を伝える鐘が鳴り、帰り支度を済ませていた所に、教室の外からひよつこりと顔を覗かせたイアンに声を掛けられた。

彼の凜とした顔が覗いた途端、女生徒達の歓喜の声が上がる。

確かに、今日また案内をしてもらう事にはなっていたが、まさか迎えに来るとは思ってもいなかった。というより、何故来るのだ。これでは良い見せ物ではないか。と、半ば八つ当たりに近い事を考えながら、自分を呼ぶイアン達の元へと向かった。

何故彼等がこれほどまで注目を浴びるのかは、男にしておくには勿体無い程の端麗な容姿と丁寧で華麗な動作、そして周りから集ま

る女生徒達の黄色い声で、容易に想像が出来る。

「今日は僕も一緒に案内させて」

「自分も一緒に宜しいでしょうか？」

ランとイアンは十分に目立つ。それは昨日嫌という程見せつけられた。が、恐らくそれに匹敵するであろう注目度を集める人物が更に二人現れた。可愛らしく話すルネと、落ち着いた雰囲気を持つザウルである。

昨日会ったばかりなのに、ここまで良心的に接してくれる四人に感動すると同時に、昨日以上の視線を集めるだろう事にセリアは肩を落としてしまった。

「ここがフロース学園記念館」

薄暗い建物に足を踏み入れると、イアンの声と自分達の足音がよく響いた。校舎とは別になっているその建物は、フロース学園創立時からあり、これまでの学園の歴史などが伺える場所だ。

「この人達は？」

セリアが指した先には、ずらりと並んだ、髭を伸ばした男性達が描かれた肖像画。部屋の端から端まで並べられたそれらは、とても古い物から新しい物まで様々であった。

「フロース学園歴代校長の肖像画です。右端の方が初代校長。左端がマクシミリアン現校長です」

成る程。どうりで全員髭を伸ばして立派にしている訳である。

記念館には、他にも昔の校舎の模型や生徒の心得等、いかにもな物が並んでいた。

中を進むと、ある一角にセリアの興味を引くものが置かれていた。歴代のマリオス候補生クラス卒業生達の名前覧である。この中の

多くは、国の為に尽くし、また大きな実績を残している。

一覧を追っていると、ルネが後ろから覗き込んで来た。驚いてセリアはビクツと肩を振るわせたので、イアンにまた笑われてしまった。

「どうしたのセリア」

「えっと。この人達が国の未来を築いてくれたんだなと思って」

変に思われただろうか、とルネの顔を伺うと、思いのほか明るい顔で微笑まれた。

「セリアってやっぱり変わってるね」

彼女こそ、国の事を想っているのかもしれない。素直に国の事を話すセリアの反応は、自分達にとってはとても新鮮な物だ。

変わっていると言われて、困り顔で少し焦り出すセリアに、ルネは笑みが深くなるのを感じた。

「なあ、次は面白い所に行ってみないか」

「面白い所？」

記念館を出るとイアンが提案して来た。

その言葉に首を傾げるが、イアンはまるで子供のようにワクワクしている。今度は何をさせる気だ、と不審げに彼を見ていると、後ろからランが答えた。

「稽古場だそうだ」

「稽古場？」

その言葉に嫌な予感を覚えると、案の定イアンが言い出した。

「剣術用の稽古場でさ。お前に手合わせ願おうと思ってるな」

予想はしていたが、言われてセリアはかなり困惑した。

一体何を考えているのだ、こいつは。何をさせるかと思えば、手合わせと来た。勿論、勝負をして貰えるのは有り難い。というか、



是非とも受けて立ちたい。だが、転校したばかりの学校で、いきなり手合わせだと。しかも男子生徒とだ。問題が有りまくりなのに、周りにいる彼等は全く気にした様子は無い。唯一、ザウルが若干複雑な顔をしてこちらを見て来るが。

「ちよつと待って。そんな手合わせなんて」

「別に良いだろう。ランの剣筋を見切ったんだ。勝負出来ない事はねえだろ」

さも辺り前だと言わんばかりに聞いてくるイアンに、セリアはかなり驚いた。

今まで、自分が剣を握ってしようものなら、女だという事を理由に反対されたものだ。中には嘲りの目で見える者さえいた。そして、また女だという事を理由に、誰一人剣の相手をしてくれる者がいなかったのだ。女は剣よりも花を持って笑っていれば良いのだと。散々聞かされた言葉に、毎回本気で嫌気が差していた。それでも辞めなかったのは、剣が好きだったからと、そんな環境でも熱心に教えてくれた叔父の存在があったからこそだ。

なのに、今この場にいる彼等は、嘲笑うどころか、手合わせまで持ち出して来た。彼等は本当に自分の常識を覆す事ばかりしてくれる。それと同時に、自分がどれほど小さな世界に居たかを改めて認識させられる。

「じゃ、話が纏まった所で、行くか」

「ちよっ！」

だからといって、今この場で手合わせするなんて、冗談ではない。もし学校側にバレて問題になりでもしたらかなりまずい。

そんな空気も気にせず自分の背をズンズン押して来るイアンに、話を聞け、とセリアが訴えるが、本人は全く聞いちゃいない。

無理矢理な形で連れて来られた稽古場は、予想を裏切らず、見事に整備されていた。

その広々とした場所に、刃の潰れた練習用の剣を持ったセリアが、複雑な表情で立っている。

「ねえ。本当に大丈夫なの？」

「良いだろ。俺が手合わせしてみたいんだから」

こちらの意見を完全無視した発言をしたイアンは、横で準備運動なんかをしている。こちらが何を言っても聞き入れるつもりは無いらしい。

駄々を捏ねる子供のように剣を押し付けて来る彼に、思わずそれを手に取ってしまった。そして今に至る。本当に勘弁してくれ、と言いたくなる気持ちをぐっと抑えて前を見れば、もう準備万端にして立つイアンの姿がある。

「それとも負けるのが怖いか」

ニヤリと笑ったイアンは、からかう様に一言呟くように言った。

これにはさすがのセリアもカチンときた。元々根っからの負けず嫌いであつた為、ここまで言われれば黙ってはられない。挑発だと分かっているけど、勝負に燃えてしまう。

「手加減は無しだからね」

ここまで来ると、半ば自棄になったのか、セリアはやる気を出した。

なんだかんだといっても、久しぶりの手合わせだ。それも、今まで殆ど相手をしてくれる人間が居なかった中で。こうなったら負ける訳にはいかない。相手も気合いが入っているようで、燃えてくるではないか。こちらはワンピース型の制服だ。動きにくい分少し不利ではあるが、そんな事は気にしない。

セリアのやる気を感じ取ったのか、イアンは一層嬉しそうな顔をする。試しに口にした言葉が、思いのほか効果あったらしい。

だが、すぐに真剣な顔になる。自分が負ける可能性もあるのだ。油断は出来ない。

正直、女相手に自分が剣で負けるかもしれないと思うなど、今まで考えもしなかった。これは偏見なのかもしれないが、そう思わせる者が周りにいなかったのだ。そして、その考えを打ち砕いた少女と、どうしても勝負がしてみたかった。

周りで見守るラン達もセリアの剣筋に興味があるのか、じっと息を飲んでいた。

練習場に立った二人が構えると同時の一瞬の静寂。その静寂の間にイアンは確信した。目の前の相手の強さを。

「始め！」

ランの声と共に、空気を切りながら突き出された剣で勝負は始まった。剣と剣とが交わる音が、辺りに響き渡る。

セリアの剣を突き出す姿勢は男性と同じである。違うのは、男よりも確実に細いその腕と、長い栗毛が風と共に揺れる事だ。

お互いの剣先から視線を外さず、詰め寄っては距離を取り、突きを送ってはそれを防ぐ。それを繰り返すうち、少しずつ押されているのは驚いた事にイアンの方であった。

体格、体力、共にイアンの方が確実に勝っているが、セリアは女性特有の身の軽さでイアンの懐に入り込む。力で劣る分、技で攻めて行くのだ。繰り出す技は全て防がれ、その隙に詰め寄られる。一つ一つの突きは男相手に比べて多少軽めだが、その分確実に急所を狙って来るのでやりにくい。

少しずつ焦りが出て来たイアンは、一か八か勝負に出る事にした。覚悟を決め大きく腕を突き出す。がその瞬間、目の前の人物が消え、何かが弾かれる音がした。

「そこまで！」

ランの声に我に返ると、気付いたのは遠くに弾かれた剣が一本転がっている事と、自分の手に数秒前まであった筈の物が無くなっている事。

呆氣に取られて自分と対峙していた人物を探すと、彼女は少し低

い位置から剣を上突き出していた。ほっと息を吐いて立ち上がるその表情には安堵が映っている。自分は負けたのだと理解するのと、腹の底から沸き上がる興奮を感じるのは同時だった。

「すごい、セリア！」

同じ事を言おうとイアンが口を開いた瞬間、別の声に遮られた。そちらを見ると、驚いた表情のザウルの横からルネが笑顔で手を振っている。

「イアンに剣で勝てる人なんて、ランかカールくらいだと思ってたよ」

拍手を送って来るルネに、今度はセリアが興奮気味に話だした。

「イアンも凄いよ。こんな真剣勝負始めて。今まであんまり他の人とした事がなかったから。ありがとう」

セリア自身、試合の前は迷っていたものの、いざ勝負してみれば驚く程にそれを楽ししむ自分がいた。先程までの戸惑っていた様子が嘘のように、心底嬉しそうに語るセリアが、また対戦してくれと頼むと、イアンも口元を綻ばせながら頷いた。負けはしたものの、十分楽しめたし、後味の良い試合だったので是非ともまた勝負したい。次は負けねえ、と言いながらセリアを見れば、また花の様な笑顔を浮かべていた。

「いや。しかし凄かったな」

場所は変わってセリア達は温室で寛いでいた。本来なら校舎の案内を続ける予定だったのだが、一試合終わった二人の為に、ここで一休みしようというわけである。

「とにかく動きが軽いんだよ。なんつーか、小動物みたいだよ」

未だ冷めぬ興奮を抱えながら、イアンはセリアの剣筋の感想を詳しく述べていた。

「周りから見ても、無駄の無い動きだった。女性だからこそ、あそこまで身軽なのかもしれないが」

「でも、イアンも凄かったよ。やっぱり一振りが重いし、体力あるしで」

ランの感想にセリアも返す。セリアにとっては、こんな会話が出来る日がくるなんて夢のようである。

「それ程の腕だ。前の学園でも相手はいたのではないのか？」

さり気ない一言だが、セリアはギクリと反応した。

「……えっと、そういう事は余りしない学校だったから」

「へえ。何処の学校だ？」

やめてくれ、と願っても、恐れていた一言が出てしまった。ここ  
で話をそらせれば良いのだろうが、上手い誤魔化し方が思い浮かばない。

「……ワイト：ローズ学園」

「あの有名花嫁学校か!？」

渋々と口にした言葉を聞いた途端、その場にいた全員が驚きの表情を見せた。

ああ、やはりこうきた。だから言いたくなかったのだ。

耳まで赤くしたセリアは思わず俯いた。イアン達が驚くのも無理はないだろう。卒業出来れば間違はなく女性として申し分ないと言われる学園。良家の子女が集まるその場所に通う事は、将来有望な貴族の後継者との縁談を約束される場所である。これだけなら、さぞ華やかで学のある学園のように聞こえるが、実際は窮屈以外の何ものでもない場所である。

学ぶ事といえば、椅子の上での仕草や話し方。紅茶の煎れ方や裁縫などばかり。規則は厳しく息がつまりそうであった。その中で、少しでも爵位が上の貴族の子息方とお近づきになろうと、女生徒は自分に磨きをかける。学園の中はしとやかに笑う女生徒達が溢れる、いわゆる女の戦場である。それでもその先にある約束された未来を手にする為に、笑顔の仮面を貼付け通い続ける生徒は後を絶たない。

「でも、どうしてこの学校に？」

まあ、当然の疑問であろう。女性としての幸せを約束された将来を捨てたも同然なのだから。しかし、あの場所では自分の目標は果たせないのだ。

「憧れ、かな」

「憧れ？」

「今この国があるのは、今までこの学園で学んだマリオス達がいたから。彼等が学んだ場所で、もっとこの国のことを知りたい。そういう憧れがあったから」

「……憧れだけか」

突然響いた声に、弾かれたようにそちらを向けば、いつのまに温室へ入ったのか長いプラチナブロンドの髪と冷たいヴァイオレットの瞳があった。

「その程度の感情、誰でも口にできる物だ。糧となるべき目的も覚悟もなければ、何も生まれない。憧れだけを追い求めるなど、浅はかな行為だ」

言われた言葉を理解しながらセリアは俯いた。いきなり現れたかと思えばこの言われよう。確かに、彼の言う事は正論だ。憧れだけで突っ走れるほど、自分が入ろうとしている世界は甘くはない。しかし、何故、名前も知らないような者にここまで言われなければならないのだ。そもそも、こいつは誰だ。

一昨日のランの決闘相手である事は分かるが、それ以外の事などまるで知らない。それはお互い様な筈だ。なのに、何故ここまで否定されなければならない。怒りが沸々と沸き上がるセリアは拳を握ると勢いよく立ち上がった。

「おいカール。いくらなんでも言い過ぎじゃ……」

イアンが諫めようとしたが、その前にセリアがカールの前に立ちただかった。冷たい瞳に見下ろされ、普通の人間ならば間違いない

怯むだろう状況でも、頭に血が上ったセリアには通用しない。大きく息を吸い込むと、一気に捲し立てた。

「私だって、憧れだけでここに来たわけじゃない！今は、まだ私には何の力も無いけど、この学園で色々な物を見て、経験して、学んで。そして力をつけて、いつか国の為にマリオス候補生様達を押す、踏み台くらいにはなって見せるわよ！」

自分にだって目的や覚悟ならある。ただ、それを口にする勇氣がなかっただけだ。根拠はないが、何かが終わってしまう気がして、今まで誰にも、自分自身にさえ言わなかった。

しかし、今なら。学園に入学した今なら言える気がする。自分の言葉を受け入れる事が出来る。だから今、目の前で偉そうにしている男に言っただけだ。踏み台とは少し小さいかもしれないが、今の自分にはこれが精一杯の夢だ。

それを聞くと、固く結ばれていたカールの口元が少し緩んだ。

「ほお。では、精々我らの良い踏み台になる事だ」

えっ、と驚くセリアを他所に、温室を出ようとしたカールの前に一人の男子生徒が息を切らして入って来た。

「ああ、皆様こちらでしたか。校長からマリオス候補生の方々に集まって欲しいとの伝達です」

それだけ言うと、男子生徒は失礼しましたと急いで温室を離れてしまった。彼の言葉にますます混乱するセリアだが、事の成り行きを見守っていた彼等が立ち上がった事で更に衝撃を受けた。

「収集が掛かったようだな。イアン。お前もこれ以上は隠せないだろう」

「別に隠すつもりなんかなかったんだって」

「ごめんセリア。ちよつと行って来る」

「失礼します。では、また後ほど」

「行くぞ」

次々に温室を出ようとする彼等の背に声を掛けようとするが、状況をやっと理解したセリアは声を飲み込んだ。そして、途端に顔が

青くなるのを感じた。

聞かれてしまった。厚かましいにも程がある夢を。しかも、本人達に。

「……彼等が………マリオス候補生……」

国の未来を背負ったその背を見つめながら、セリアは一人呟いた。



## 始まり 1

一日の授業が終わり、生徒達は思い思いの場所へと向かう。ここにも同じように寮へと向かう人物が居た。

昨日は、衝撃的な事実を知った後、その場に留まる事はせずに寮へ戻った。何も告げずに失礼かとも思ったが、ショックと羞恥で彼等を待つなんて出来る筈も無かった。知らなかったとはいえ、マリオス候補生の一人に啖呵を切り、剩え彼等の力になりたいと堂々と語ってしまったのだ。その前にも、色々余計な事をいくつか喋った気もする。

暗い気持ちで歩くセリアの背中に、聞くのは何度目かの明るい声が投げられた。

「よっ、セリア」

前を歩いていたセリアに追いつくと、イアンはポンと彼女の肩を軽く叩く。出来れば会いたくない人物の内の人だが、無視をする分けにもいかずセリアは振り向いて軽く頭を下げた。

「イアン様。何か御用ですか？」

「えっ！？おい。セリア？」

いきなり丁寧に返されたイアンは、まさか自分がマリオス候補生だから、という理由でいきなり距離を置かれたのか。と焦ったが、セリアのしかめ面から、そうではないと悟った。

「なんだ。昨日の事怒ってんのか？」

「まさか。マリオス候補生の方に対して当然の振る舞いです」

セリアはそう言って何くわぬ顔でまた歩き出してしまった。言葉と行動が一致していないセリアに苦笑すると、イアンはセリアの横に並んだ。

「悪かったって。別に隠すつもりは無かったんだよ」

「何の事を仰っているのかさっぱり分かりません」

こちらを見向きもしないセリアに、イアンはどうしたものかと考

える。こんなやり取りも、イアンにとって今までに無い物で、何処か楽しんでいる様子があるが。

「じゃあ、どっか甘い物の店教えるからさ。だから機嫌治せよ」

甘い物、の一言にピクリと肩を揺らし、歩調を緩めたセリアに、イアンは効果ありと見て尚も続けた。

「この近くで一番旨いクレープでどうだ？そんなに遠くないし、今からでも行けるぞ」

「クレープ……」

本人は意識していないのだろうが、徐々に口角が上がって来ている。先程までの素っ気ない雰囲気もなく、纏う空気も穏やかになった。まさかここまで効果があるとは思っていなかったイアンもホッとする。

その気になれば毎日でも高級な菓子を口に出来る筈の伯爵家の令嬢が、街のクレープ一つで機嫌を治すなど、他人から見れば奇怪に映る。だが、友人と連れ立って出歩く事に憧れを持っているセリアにとっては、甘いクレープという特典まで付いて来るイアンの誘いは、十分に魅力的だった。

小さくセリアが頷くと、話は決まったとイアンはセリアを連れ、足速に歩き出した。

嫌がるセリアを説き伏せて、イアンは温室へ来ていた。マリオス候補生達に今は会いたくなかったが、どうせなら皆も連れて行こうというイアンの提案を断り切る事が遂に出来なかったのだ。

陽の光を反射している温室に、セリアがおずおずと足を踏み入れた瞬間、ドンと何かを叩き付けた様な音が響いた。

「その考えは間違っている」

突然の音に、セリアはビクツと怯んだが、隣のイアンはやれやれといった様子で中へ進んで行った。恐る恐るイアンの後ろから中を覗くと、ランともう一人が机を挟んで対峙していた。そのもう一人とは、候補生の中でも一番会いたくないカールである。

昨日や一昨日の穏やかな雰囲気からは想像もつかない程相手を怒りの形相で睨むランにセリアが戸惑っていると、ルネに声を掛けられた。

「セリア。いらっしやい…」

ルネはこの状況をどう捉えているのか、少し困り顔だ。

「この場合、治安維持の予算への投資を前向きに見当すべきだ」

「徹底した取り締まりこそ、この状況に置いては必要な政策だ」

「それではやり方が強引だと言っている」

「問題の火種は迅速に取り除くべきだ」

セリア達が入って来た事に気付いていないのか、それとも気にしていられないのか、二人が口論を止める気配は全く無い。

「もしかして、今日のあれか？」

「ええ。そのようです」

ザウルに聞いたイアンが、その答えに納得した顔をする。なんの事かとセリアは不思議に思う。自分にはイアンの質問の意味が到底理解出来ない。

考え出したセリアを見かねたルネが静かに説明してくれた。どうやら、今日の授業中、治安が悪化している街があると仮定し、この場合最善と思われる政策についての議論が行われたらしい。当然の如くこの二人の意見で議論は白熱したが、結局案は纏まらずに時間切れとなったようだ。そして授業が終了した今、その時の決着をつけるべく、こうして議論の延長戦をしているわけである。

二人が挟んでいるテーブルには、それぞれの意見を纏めた資料が置かれている。それを相手に突き付けて意見をぶつけ合っている光景を見る限り、お互い一步も譲る気は無いようだ。

「そもそも、お前の考えは甘い。そんな事では、潰すべき敵すらも

見えなくなる」

「その傲慢な思想を見直すべきだと言っているんだ。より良い国を作るには、周りと手を取り合い、協力する事が大切だ」

「国を動かす気があるのなら、その楽観的思考こそ改善するべきだ」  
遂に、言い合いは互いの性格や思想の否定にまで到達してしまった。二人がお互いの意見など聞く気が無いのは見て分かる。しかしどちらも譲らないので、誰かが止めないかぎりこの言い合いが終わる事は無いだろう。

慣れているのか、イアンやルネはこの状況に全く動じていない。ただザウルが少し心配そうな視線を送っているだけだ。自分達が何を言っても無駄なのは分かっているので、今は見守る事しか出来ない。

言い争っている二人の勢いで、テーブルに置いてあった資料が数枚ハラリと落ちた。イアンはそれを拾い上げるとポツリと呟いた。

「二つとも、悪い案じゃねえんだけどな」

「どれどれ？」

セリアが後ろから顔を覗かせると、イアンが資料を手渡して来た。それにぎつと目を通すと、ランの案を見ながら零した。

「でも、この予算案は少し難しいんじゃない？」

その言葉にイアンやザウルは当然反応したが、ラン達まで議論を中断させセリアに視線を移した。その事を気にした様子もなくセリアは尚も続ける。

「これだと、他の所から予算を削る必要があるけど、時間が掛かる。それに、この額だと、余分が出るかもしれないし、その調査や確認も大きくなるわ」

「しかし、この場合で重要になるのは治安の改善であって、その為の投資は必須だ」

セリアの意見にランが真剣に返す。そこへ別の声が割って入った。「それこそ、その場しのぎにすぎない。それよりも、より強固な規

制をかける事が先決だ」

「それにも問題があるわ」

訝しげな視線を向けるカールにもう一枚の資料を目で追いながら言った。

「急な取り締まりには反対の声だって挙がるだろうし、それで混乱が生じればそれに乗じて治安が更に悪化する可能性もある」

「ほう。ならば貴様はどうする」

「……そうね。まずは民間へ危険意識を持つように呼びかけて。公安機関と市民団体の連携も考えるわね」

少し考えてから言い切ったセリアに、二人はまだ納得出来ない様子だ。今度はセリアを挟んで、また議論が始まってしまった。

最初、セリアが仲裁に入ってくれないかと期待したイアン達だが、思わぬ事態に驚いていた。セリアの行動には勿論だが、何よりも目を疑ったのは、今までお互いの意見を聞くなど絶対にしなかったラシとカールが、セリアを挟んでそれぞれの案を少なからず視野に入れた始めた事だ。まるで、言葉の通じない二人の間に、一人通訳を放り込んだ様な光景だ。しかし、何時まで経っても一向に終わりを見せない議論にイアン達も戸惑っていた。意見は飛び交い、新しい案が出され、遂には国家レベルの治安維持政策にまで発展した三人の会話に、イアンがとうとう止めに入ったのだ。

「はいはい。もう今日はそれくらいで良いだろ。お前等、どれだけこの国の治安が悪いと仮定するつもりだよ」

確かに、今彼等が提示していた政策を必要としていたなら、それは立派な犯罪国家といえるだろう。

「ふん。多少は有意義な時間を過ごせたようだな」

決着こそつかなかったが、散々論争して満足したのか、それだけ言い残すとカールは温室の外へ消えた。

「セリアも。早く行かねえと時間無くなるぞ」

「あ！それはダメ！」

ここへ来た本来の目的を思い出したのか、セリアはすかさず返し

た。その反応にもまた笑いそうになるが、ぐっと堪える。ラン達を先程話したクレープ屋に誘うと、漸く目的地を目指した。

「わっ！美味しそう」

店先に並べられた色とりどりのディスプレイ用のクレープにセリアは感極まっていた。ふわりとしたクリームに、様々なフルーツが乗っていて、見ているだけでも楽しい。

オープンテラスのこの店は、同じ目的を持った者で随分賑わっている。店の雰囲気も良いので、余計に人気がある。

どれにしようかと本気で悩むセリアだが、どうしても決められないようだ。選んだ物を注文しようとしては、後から来る客が手にするクレープを見てまた悩む。

うーん、と唸りながらクレープを睨むセリアに、思わず笑ってしまいそうになるマリオス候補生達。学園からそれほど離れている訳でもないのが最後、という訳でもない。むしろ、これから幾らでも来れるという事に、セリアは全く気付いていない。というより、クレープに夢中になっていて、そこまで考えていないのだろう。結局悩んだ末、苺と生クリームの入ったシンプルな物を選んだ。

他のマリオス候補生達も自分の分を注文すると、出て来たクレープを受け取り、テラスの一つに席を取った。

腰を降ろした途端、美味しい、と呟きながらセリアはクレープを口いっぱい頬張る。その姿はとても貴族のお嬢様の見せる物ではない。しかし、それを気にする者もここには居ないので良しとしよう。

嬉しそうにクレープを平らげて行くセリアを暫く眺めていたルネが途端に口を開いた。

「やっぱり、セリアって面白いよね。ランとカールの間に平気で入

ってく人なんて、今まで見た事ないよ」

クレープを食べる手を一旦止めてルネを見れば、彼は優しく微笑んでいる。ルネの言っている意味がよく分からず疑問符を浮かべる。「カールって？」

こっそりザウルに聞けば、先程ランと議論していた方ですよ、と教えられた。本名はカールハインツという事も。面白いと言われたが、自分ではそんなつもりは全くなかったので、どう反応して良い物か悩む。

困り顔のセリアを他所に、ルネの意見にイアン達は納得していた。当人であるランは、自覚が有るのか無いのか、少し考え込んでいるようだ。

「しかし、君の意見は参考になった。出来ればまた議論したい」

「そんな、マリオス候補生が参考に出来るような立派な事は言えないわよ」

セリアはこう言っているが、実際あのカールでさえ彼女の案に耳を貸していたのだ。彼を知る者なら、これだけでもそれなりに説得力のある発言であった事が分かる。だが、セリアがそんな事知る由もなく、手を振って否定している。ただ、参考になるとは思わないが、マリオス候補生達の交わす議論には興味があるのは事実だ。その事を告げると、イアンが、それなら何時でも見れる、と笑っていた。

「でも、良かった。昨日は温室にいなかったから、怒って帰ったのかと思ったよ」

そういえば自分は少なからず腹を立てていた筈だと、セリアは思い直す。そして、クレープ一つですっかり気分を良くしている自分にも、単純だなと思う。チラリとイアンを見れば、非常にバツが悪そうな顔で頭を掻いていた。

「黙っててごめんね」

「そんな。謝る程の事でもないから」

確かに驚きはしたし、最初に話していてくれればとも思ったが、

彼等が謝る程の事でもない。それに、彼等は自分に非常に親切にしてくれているのだ。それだけでも十分ではないか。

そうは言うものの、クレープによって機嫌が上がったのも事実であった。

絶品なクレープに上機嫌で寮に帰ったセリアだったが、自室の前の惨状に、目を見開いていた。何処から運んだのか、大量の椅子が入り口を塞いでいたのだ。積み重ねられた椅子は、絶妙なバランスを保ち、何人たりとも通す気配は無い。

誰が何の目的でやったかは容易に想像が出来る。誰もが憧れるマリオス候補生の方達と、慣れ慣れしく接している得体の知れない転校生に、女生徒方が嫉妬と怒りの鉄槌を下したのだろう。前の学校で女性の怖さは十分知ったつもりだったが、この学園の女生徒も例外では無いようだ。さてどうしたものか、とため息をついていると、トンと肩を突つかれた

「貴方、この部屋の人？」

振り向くと、そこには肩まで届く長さの青髪を弄りながらこちらを見る女生徒が立っていた。

「隣の部屋の者だけど、これの所為で私も部屋に入れないの」

彼女の指す先には、積み切らなかつた椅子が、隣の部屋の前まで崩れている様だ。なんとなく申し訳なく感じてしまう。自分がやった事ではないとはいえ、自分が原因である事は否めないのだ。

「はあ、すみません……」

「大変だろうけど、出来るだけ私にまで影響が出ないようにして欲しいわ」



それは自分になのか、これの犯人になのか。彼女はそう言っ  
て、自分の部屋の前の椅子を移動し始めた。彼女の意見も最もだ  
な、と思いつながら、セリアも椅子を移動させる。作業していく  
内に、自分の部屋に入れるだけの分を片付けた女生徒は、じゃあ  
頑張っ、て、と言に残し、さっさと部屋へ入ってしまった。出来  
れば手伝って欲しかったが、迷惑をかけてしまった分、そんな事  
を頼める筈もなく、セリアは気合を入れて山積みの椅子を移動  
させた。

「終わった……」

全てが片付く頃には、すっかり夜遅くなっていて、体の節々はズ  
キリと痛む。ふらふらとする足取りで、なんとかベッドに這い上  
がる。初っ端からこうも派手に来るとは、驚きである。もう全  
て忘れて寝てしまえ、と疲れた身体を休める為、セリアは意識を  
手放した。

痛む身体に鞭打って、窓のカーテンを開けると、それは見事な  
陽が部屋に降り注いだ。唸りながら身支度を整えるが、間接や  
筋肉の痛みが引く事はない。自分でも運動はそれなりにする方  
だと思いが、あの様な労働は別だ。軽く三時間程は椅子を動か  
すのに使っていただろう。しかし、だからといって授業を休む  
わけにもいかない。気合を入れて、何とか部屋を出た。

学園への道を歩いていると、以前の様に林の中に影を見つ  
けた。疲れているせいか、声を掛けようとは思わなかったが、  
向こうがこちらに気付いたようで、おいでおいでと手を振って  
来る。

「おはようセリアちゃん。なんだかお疲れね」

「おはようございます。クルーセル先生はまた日向ぼっこ  
ですか？」

「そうなの。私の朝の日課。そういえば、温室でマリオス候補生達には会えた？」

彼は何かと自分を気に掛けてくれているようだ。心身疲れているセリアには、それがとてもありがたく感じる。

「はい。候補生の五人と。全体では何人居るんですか？」

興味本位で聞いたただだが、クルーセルは意味深に笑った。

「本当は十二人いるんだけど、将来マリオスになれるのは、その五人だから大丈夫よ」

クルーセルは微笑んでいるが、セリアには彼の言葉が理解出来ない。というか、何が大丈夫なのだろうか？

マリオス候補生になれるのは、マリオスになる事が可能な人材だ。確かに、今までの候補生全員がマリオスになった訳ではないが、いずれも何らかの形で成功を治めている。それが国の為か否かは別だが。

つまり、それだけの資質を持った者達が候補生となるのだ。それが十二人もいるのに、マリオスになれるのがラン達だけとはどういう事だろうか。

「もちろん、皆素晴らしい素質を持った生徒達よ。成績も優秀だし、家柄も申し分ないし。でもね、それだけじゃマリオス候補生にはなれても、マリオスにはなれないの。セリアちゃんなら分かるでしょ。逆に、素質を持っていなくて候補生にはなれなくても、マリオスになるべき人はマリオスになるの」

もちろん、マリオスになるべき人は候補生にもなる事の方が多いけどね。と付け加え、クルーセルは片目を瞑った。

彼の言っている事は、理解は出来る。説得力もある。ただ、納得いくかと問われれば、答えは否だ。いきなりの話で混乱しているのもあるが。そもそも、こんな話を自分にしても良いのだろうか。

「ほらほら、セリアちゃん。あんまりのんびりしていると遅刻しちゃうわよ。そうになったら私も叱られちゃうから急ぎましよ」

いやいや。教師である彼が叱られる、というのは何処か可笑しい

気がする。それよりも、こんなに立ち話に時間を取ってしまったのは、彼にも責任があると思うのだが。戸惑いながらクルーセルを見るが、彼は全く気にした様子を見せず、むしろ現状を楽しんでいるようでもある。しかし、文句を言っている間にも本気で遅刻しそうなので、取り敢えず今は校舎を目指して歩いた。

## 始まり 2

大量の椅子を目にしてから一週間。セリアは平和に過ごしていた。それからの、マリオス候補生達との大きな接触は無い。クラスが違うので、それも当然だろう。例の案内が終われば、学友、という関係で終わるのだから。途中廊下ですれ違えば普通に挨拶も交わすし、多少の会話もするが、それだけである。それだけでも他の女生徒達にしてみれば十分妬みの対象になるのだが、椅子を積み上げ満足したのか、目立った嫌がらせは無い。

「それでは、授業はここまで」

ヨークの一言で、教室内はすぐに騒がしくなった。授業が終われば当たり前前の光景なので、誰も気にしない。それよりも、セリアが気にしているのは。

「無い……」

鞆の中を漁っても、机の中を覗いても、自分の教科書が数冊見当たらないのだ。可笑しい。数時間前までは確かに机の中に閉まっていた筈だが。何処かに置き忘れたのか、と思い直し急いで教室を出る。それから校内を走り回り、思い当たる場所は大体当たったが、一向に見つからない。まだ慣れない学園内でもあるためだが。

これは、かなりまずい状況になった。

もう一度机を見て見よう、と教室に帰って来ると、先程は無かった筈のメモが置いてあった。

『教科書、三階物置』

いかにも怪しすぎる内容だが、だからといって放っておく訳にもいかない。取り敢えず、教科書だけでも見つけねば。このメモを見る限り、どうやら自分が何処かに置き忘れた、という事では無さそ

うだ。自分は今日、三階へは行っていないのだから。

はあっとため息を吐くと、セリアはしぶしぶと足を廊下へ向けた。

今回の事で思い当たる節があるとすれば、昨日のあれであろう。

偶然出会ったラン達と下校を共にし、そこでその日の授業で交わした議論についての意見を求められた。当然のようにセリアが自分の答えを述べると、ランがそれに返し、意見の交換が行われた。そのまま話し合いは発展し、気付けば夕食まで共にして議論に熱を上げたのだ。

そしてその現場はばっちり目撃されており、多少静まった女生徒方の嫉妬の火に再び油を注いでしたようである。

三階の物置は、廊下の隅にあり、いかにも人目につかない場所である。中には掃除器具等が仕舞われており、それなりの広さがあるが、埃っぽさもそれなりで、人が歩けばたちまち塵が舞い上がるだろう。

セリアが中を覗けば、なんとも御丁寧に部屋の真ん中に教科書が無造作に置かれている。勘弁してくれ、と言いたくなるが、教科書が見つかっただけ良しとしよう。と中へ入ると、後ろで無情にも扉が閉まる音がした。慌てて振り返れば、外側からカチャリと子気味の良い音まで聞こえる。何となく予想はつくが。試しに扉を押してみるが、案の定、開かない。

さて、いよいよ本格的に困ったものだ。

授業が終了すれば、生徒は皆下の階へ向かうので、三階に残っている者は少ないだろう。今来る時もそうであった。明日まで待てば、少なくとも誰かがここを通るだろうが、それを待つ気は無い。

部屋を見回しても、他に脱出出来そうな場所が無い為、出入り口は当然目の前の扉のみとなる。そうすると、当然結論は扉をぶち破る以外無い訳だ。物置内を物色してみるが、使えそうな物は無い。

仕方無い、とセリアは立ち上がった。

扉から二三歩離れ、勢いをつけて身体をぶつける。しかし、ビクリともしない。しかも、肩には鈍い痛みだけが広がる。だがここで諦めるほどの大人しさをセリアは持ち合わせてはいない。何度も何度も扉に体当たりを決める。全く効果が無い訳でもないが、扉をぶち破るのには時間が掛かりそうだ。

なかなか崩れない扉に、少々苛立ちながらも、持ち前の諦めの悪さで止める事はしない。

これでもか、ともう一度勢いをつけて扉に向かった瞬間、光が目飛び込んで来た。えっ、と思った時には遅く、全開にされている扉に突進してしまっていた。

「ぎゃ！」

猫を踏んだ様な声を出しながら、勢いを殺せなかったセリアはそのまま床に突っ込む羽目になった。

「…貴様は一体何をしている」

この声は。と、打った鼻を抑えつつ、セリアが振り向くと、そこには呆れた様な表情でこちらを見下ろす魔王がいた。

人の居ない静かな場所を好むカールは、授業後も校舎内に留まっている事が多い。そんな中、廊下の隅からガタンガタンと何かを叩く音がしたので来てみれば、施錠された扉。開けてみれば、飛び出して来たのは、栗毛の地味な少女。少し前に校舎内を走り回っている人物と、中から聞こえる声の主が同じなので予測はしていたが。

物置を覗いてみれば無造作に置かれている数冊の教科書。そして、簡素にだがしっかり施錠されていた扉を見れば、何があったかは大体想像出来る。

「カ、カールハインツ…様……」

「廊下が想像しいと思えばやはり貴様か」

見下ろす瞳は、相変わらず涼しげだ。よりもよって、自分が以前啖呵を切った張本人にこんな失態を晒すとは。助けてもらえたの

は有り難い。だが、彼は一番会いたくない人物でもあった。

しかし、何も言わない訳にもいかない。自分があの扉を一人で破るには相当の時間を要しただろう。それまでに身体がもったかどうか。実際、肩の痛みもかなり悪化している。間違いなく痣になっているだろう。それに、彼には言わなければいけない事があるのだ。床から立ち上がり、制服のスカートの埃を祓ってから、背の高い彼を見上げる。

「あの……助けて頂いてありがとうございました」

「助けた訳ではない。廊下が想像しいので、その元を見に来ただけだ」

「あと……」

セリアはガバツと頭を下げた。

「あの時は、申し訳ありませんでした。理由も知らずに私の一存で決闘を中断させてしまいました」

「……」

あの時、彼等が何故決闘などしていたかは知らないが、とりあえずこれで全員に謝った。決闘を止めたのを間違いだったとは思わないが、余計な事だったかとは思う。なので、その為の謝罪だ。

「ほお、自覚は有るようだな……」

低い声で言われて、うっと怯む。特に責められた訳ではないのに、なんだこの威圧感は。

「だが、謝罪の必要はない」

思っても見なかった人物から、思っても見なかった言葉を言われ、また驚いた。ラン達は分かるとして、見るからに厳しそうな彼まで、ラン達と同じような事を言うとは思わなかったのだ。

「あ、ありがとうございます。カールハインツ様」

「カールで構わん」

「……?」

これは、もしや友好的と捉えて良いのだろうか。  
言われた言葉に少しの優しさを感じたので、彼の表情を見たが、

変わらず冷たい瞳で見下ろして来る。

「それと、礼儀を弁えるのは良いが、習熟していない言葉を使う必要もない」

更に言われ、再び混乱する。つまり、丁寧に話すのに慣れていないのであれば、気さくに話せば良い、という事だろうか。そんなに言葉遣いが不自然だったであろうか、とショックを受けるが、これもイアン達と同じで形式ばらないでも良いという意味だろうかと考え直す。

しかし、そんな冷たい顔で言われても、実感が湧かない。相当顔が整っている為、余計そう感じるだけかもしれないが。

相手の真意が分からず、疑問符を浮かべていると再び言われた。「フン。貴様とは多少なりとも価値ある議論が交わせそうだと思うただけだ」

それだけ言って彼は歩き出したが、すれ違う時、いきなり右腕を掴まれた。痣が出来ているであろう肩の方の腕だ。

「いっ！」

急な痛みにセリアも遂に顔をしかめる。いきなり何をするのだ、と彼を見上げるが、その瞳は相変わらず冷たい。

「それから、今すぐ医務室へ行け」

脅すような声色に竦み上がりそうになる。腕を放して今度こそ立ち去ったカールに、呆気にとられた。言葉だけを聞けば、肩を心配してくれたのは分かる。だが、その行動と表情はとても気を配った風ではない。実際は、助けられた上に心配までされたのだが、どうも分かりにくい。

しかし、今ので彼が親切だという事だけは十分理解した。それに、自分とは議論が出来ると言った。自分の意見を認めてくれたのだ。それを考えただけでも嬉しさで肩の痛みが消えて行く気さえする。すっかり気を良くしたセリアは、物置の教科書を拾い集めると、上機嫌で言われた通り医務室へ向かった。



「痛っ！」

医務室へ来たは良いが、養護教諭の教師が丁度留守だった為、セリアは一人で肩の治療を行っていたのだが、案の定、悪戦苦闘していた。

夢中だった為あまり自覚は無かったが、相当強く打ち付けていたらしい。肩は内出血で赤黒くなり、大きな痣も出来ている。前はそれ程感じなくても、見てしまえば痛みがぶり返して来た。取り敢えず湿布を貼ったが、しばらくは動かしたくない。

それでも、セリアにとっては、カールとの会話の方が重要だった。肩の治療をさっさと済ませ、寮へと向かう。思った以上に物置の中で時間が経っていた様で、もう陽が落ちようとしている。今日の課題もこなさなければならぬのだ。

セリアは意気揚々と医務室を出た。

しばらくは気合いで誤魔化していたが、やはりそれでは治らない。夕食時になり、食堂で夕飯を済ませたのだが、右肩が動かせない為かなり不便であった。

食堂を出ると、一つの大きな影が前に立ったので、見上げると相変わらずの冷たい顔があった。

「カール、今から夕食？」

「ああ。お前はどうかなのだ？」

「うん。食べて来た」

「……そうではない」

おや、と思うが、カールの視線は肩に寄せられている。それで、ああ、と納得する。彼は心配してくれているようだ。

「暫くは負担をかけない事だ」

彼は相変わらず言葉少なに去ろうとしてしまう。

「ありがとう」

遠くなって行く背中に呼びかけたが、何の反応も返らず、そのまま食堂内へと消えてしまう。それでも、なんとなく彼の優しさを理解したセリアは微笑みながら寮へと戻って行った。

夜。寮の学生が寝静まる時間だが、それは街も同じ。灯りの無い道路には人影は殆ど無く静寂が広がっている、筈である。しかし、ある一角で響いたのは女性の悲鳴とそこから走り去る影の足音。

「また出たって」

「今度はここからそんなに離れてないぞ」

今、生徒達が騒いでいる内容は、最近流行っている一連の事件の噂である。

最近、学園都市で夜になると、道行く人が後ろから鈍器のような物で殴られる暴行事件が勃発していたのだ。女性ばかりが狙われているこの事件、まだ死人は出ていないが、不安は拭えない。危機感

から夜の外出を控える者が増えているが、そうはいかない者もいる。

噂する生徒達でざわつく校舎内を、肩を気にしながら歩く生徒が一人。

殆どの女生徒から敵視されてしまったセリアは、誰かと雑談する機会が無い為、噂の事を全く知らない。

一晚経過しても引かない肩の痛みを気にしながら、セリアは真っ直ぐ校門へ向かっていた。

校門の傍を通ったザウルは、門の外へ出ようとしていたセリアを見かけ呼び止めた。

「セリア殿」

「あっ。ザウル」

「お出掛けですか？」

「うん。ちょっと筆記用具が足りなくなつて。ザウルは？」

「自分は、これから図書室で調べものがありまして」

「そうなんだ」

そのまま少しの間雑談したが、お互いの目的を果たすべく、それぞれの場所へ向かった。

学園都市へ来たセリアは、活気のある街中について興奮してしまう。本来の目的も忘れ、フラフラとショーウィンドウを覗くのに必死だ。以前来た時はクレープに夢中だった為、あまり街並に集中していなかった。なので、街の物一つ一つが新鮮だ。

「おお、ザウル遅かったな」

夕方、いつものように温室にいたイアンがザウルを迎えた。中にはルネとカールも見える。

「すみません。調べものに時間が掛かりまして」

「その前にセリアとも少しおしゃべりしてたんだよね」  
見ちゃった、と笑うルネにザウルも頷く。

「図書室へ行く前、偶然お見かけして。そんなに長くは話していなかったんですが…」

「セリアがどうした？」

丁度今入って来たのだろう。温室の入り口に立つランが聞いて来た。

「筆記用具をかうと、街へ行く所をお見かけして」

「そうか、では先程見たのはやはり彼女か」

つい先程、本屋から戻ったランは帰り道の途中、フロース学園の制服を着たセリアらしき人影を見たらしい。すぐに人混みに消えて見えなくなり、声はかけられなかったが。

そこまで聞いて、イアンが首を傾げる。

「ラン。お前がセリアを見たのは？」

「二十分程前だ」

「場所は？」

「街の広場の近くだが。どうかしたか？」

街の広場はここから少々距離がある。ランの足で二十分かかったのだ。セリアの足ではそれ以上かかるだろう。

「ザウル。お前がセリアを見た時、あいつは？」

「これから街へ行くと、校門に……」

「時間は？」

「授業が終わって直ぐです」

今は夕方だ。それも、もうすぐ陽が沈む。いくらなんでも、買い物一つでこれほど時間が掛かるのは可笑しい。普段ならば只の散歩か何かだと片付けられるが、今はあの噂もある。

「道にでも迷ってんのか？」

「心配だね。セリアなら、ちょっとした事なら逃げられると思うけど」

確かに、彼女ならば、相手を返り討ちには出来ないが、逃げ切るくらいは出来るだろう。

「あいつ身軽だし、すばしっこいから大丈夫だと良いが」

「やはり心配だな。とにかく探しに…」

「待て」

立ち上がったラン達を、それまで黙って見守っていたカールの声が止める。

「あれは今、怪我を負っている」

「……………!!」

遠くに浮かぶ夕日は今にも沈みそうだ。

「…………え…………と」

こう言う場合はどうすれば良いのだろうか。

イアンの危惧した通り、すっかりセリアは迷子になっていた。目に映る物に気を取られ、自分の向かう場所に全く注意していなかったセリアは、気がつけば裏通りに近い道を歩いていた。辺りを照らす灯りも人影も少ない。

あまりこういう雰囲気得意でないセリアは、一生懸命出口を探しているつもりなのだろうが、裏道の奥へ奥へと入って行く。

これでは、一連の事件がなくなるとも、何かに巻き込まれるだろう。陽はすっかり沈み、すでに月も昇り始めている。

必死に足を勧めるセリアは背後から近付いている気配にまだ気付いていない。

「くそっ。あいつ何処にいるんだよ！」

「イアン、私はあちらを探す。お前はそっちだ」

「わかった」

走りながら悪態を吐くイアンとランが別れる。ザウルとカールも別の場所を探し、ルネは学園でセリアが戻った時の為に待機していた。

元々地味な容姿の彼女を目に留めている者は少なく、目撃情報も得られないため、一向に見つからない。ラン達の不安は募るばかりだ。まさかとは思いが、もしもという事もある。

「えっ!？」

背後に感じた殺気に咄嗟に屈めば、セリアの真上を何かが音を立  
てて横切った。そのまま振り向けば、影になっている人物はそのま  
ま長い棒を自分に振り下ろそうとしている。

「くっ!」

必死に身を振って避けたが、瞬間、肩に鋭い痛みが走った。ぐっ  
と堪えるが、やはりまだあまり動かす事は出来ないようだ。それで  
も、相手は迷わず再び振り下ろして来る。これも辛うじて避けるが、  
思った程身体動かず、避けるのが精一杯だ。いきなりの事に混乱す  
るが、戸惑っている時間は無い。考える事は後でも出来る。

振り下ろされる棒を避けて、相手との距離を取る。それでもじわ  
じわと追いつめられ、遂に背中に固い壁があたった。敵は目の前で  
棒を力一杯振り下ろそうと腕を上げる。逃げる隙が全く見えない。  
セリアがぐっと目を閉じて衝撃に備えた瞬間。

「セリア!!」

敵の背後から自分を呼ぶ声があった。敵もそれは予測していなかつ  
たのだろう、一瞬怯む。その隙を見逃さずに、セリアは身を投げて  
敵から離れた。一瞬の間に逃げたセリアを追いきれず、棒はセリア  
が元いた場所に叩き付けられた。攻撃は躲せたが、肩の痛みは限界  
にきている。避けた時に床にぶつけた様だ。痛む場所をぐっと押さ  
えて動かぬセリアに、イアンが駆け寄った。

思わぬ邪魔に焦ったのか、敵はその場から走り去った。その姿は  
段々と裏道の闇に吞まれて行く。後に残るのはその場に響く足音だ  
けとなった。

「セリア! おい! セリア!!」

「イアン……痛い」

抱き起こされた際、身体を揺すられて、またそれが肩に響く。  
声を聞けて取り敢えず安心したのかイアンはほっと息を吐いた。  
イアンの声に駆けつけたのか、ラン達の姿も後ろに見える。

「イアン、ありがとう。でも、どうして此処に？」

「お前を探してたに決まってるだろ。こんな時間まで何してたんだよ」

イアンに睨まれギクッと怯む。こんな大事になって、まさか街をフラフラしていてそれで道に迷ったとは言えない。このまま誤魔化せないかと他の者を見るが、集まった四人は全員ご立腹の様子である。あの穏やかなザウルまでもが苛立った表情なのだ。うっと唸って、「言わなきゃダメ？」的な意味を込めて見上げるが、逆にジロリと睨まれてしまった。仕様がないので、正直に話すと、案の定呆れたような表情をされた。

「物騒な事件の噂があるにも関わらず、夜間まで街を歩き回るなど、少々思慮が足りなかったのではないか？」

「……事件？…噂？」

ランの言葉に、はて、噂とは何かと疑問符を浮かべれば、ついには横からため息が聞こえた。

「とにかく、今は学園に戻りましょう。セリア殿の傷も診なければ」ザウルが提案して、一旦その場から生徒達は離れる事にした。



## 始まり 3

「へー……そんな事件が……」

ラン達がセリアに事件の噂の説明をしているのは、いつもの温室である。

あの後、学園に戻り医務室に寝泊まりしている養護教諭に診察を頼んだセリアは、打撲と判断された。骨に異常は無く大事には至らないが、暫くは無理をするなど言われ、今は湿布の上に包帯が巻かれている。

事件に巻き込まれたにも関わらず、呑気に返したセリアに、ラン達はどうしたものかと頭を抱える。噂がなくとも、女生徒が夜、あのような場所にいる事はよろしくないというのに。もう少し警戒心を持てないものだろうか。

「セリア。僕たち本当に心配したんだよ」

「うっ……どうも、ご迷惑おかけしました」

あの後、何度か謝られたのだが、それよりも、その無防備を直して欲しいのだと、彼女は分かっているのだろうか。恐らく、分かっているまいだろう。

「その事件って、今まで何人が被害にあってるの？」

「そうですね……確か、八人だったと思います。セリア殿で九人目ですね」

知らなかった。街ではそんな事件が起こっていたのか。あの時、逃げるのに必死で顔がよく見えなかった事が悔しい。学園内にいれば安全であろうが、そんな噂を聞いて放って置くのも気が引ける。どうしたものか。

なんとか出来ないかと、少し考え込んだセリアは、ふと名案を思いついた。それを元に策を練るが、我ながらなかなかいけるアイデアである。

しばらく思い悩む風を見せたセリアに、やっと理解したか、と安堵したイアン達だが、突然セリアの顔が明るくなったので不審に思った。少し様子を見ていれば、何やら考えたりブツブツ言ったりで、かなり怪しい。

「お前、何考えてんだ」

すっかり自分の世界に入り込んだセリアに問いかければ、びくりと反応した。なんだか嫌な予感がするが、一応聞いてみる。

「な、なんでもない！」

首と手を一生懸命振って、何もない事を表そうとしているが、それでは逆に何かありますと言っているような物である。

「まさか、余計な事に首突っ込もうとしてるんじゃないだろうな」

「ま、まさか……滅相もない」

分かりやすい反応だ。普通あんな目に遭えば、誰でも恐れてこれ以上関わろうとはしないだろうに。

「セリア。分かっているとは思うが。この件は忘れて、君は肩の治療に専念するんだ。良いか？」

「……………」

何を考えているのかは分からないが、念のため釘を刺しておく。だが、ランの問いかけにセリアは頷かない。ランが再度問いかけるが、やはり肯定の答えはいつまで待っても返っては来なかった。

「……よし。誰も居ない」

その日の夜、女子寮を抜け出し、コソコソと校門の前まで来たセ

リアは、人影が無い事に安堵していた。どうやら、ここまでは誰にも見つからずに来れたようだ。大人しくしていると言われたが、それを素直に聞くようなセリアではない。

校門を出てしまえばもう大丈夫だろうと、外へ出た。

今セリアは制服ではなく、私服を着ている。髪も三つ編みにしている。犯人も昨日の相手だとは気付くまい。と思っているのはセリアだけなのだが、それを彼女が知る事は無いだろう。

彼女の作戦とは単純明快。自分が囷になる事。あまりにも分かりやす過ぎる。

まるで無計画に見えるが、セリアも一応考えていた。コートで隠された腰には、こっそり稽古場から拝借した真剣がさしてある。自分が相手を押さえ込めれば申し分ないが、今は肩を負傷しているため苦戦する可能性もある。しかし、相手の顔さえ確認出来れば、それで良い。

怪我が治るまで待てば良いものを、早く犯人を捕らえたい、という思いが彼女を突き動かした。

セリアがまず向かったのは昨日自分が襲われた場所だ。二日連続で同じ場所には来ないだろう、と思いはしたが、他に宛もないので取り敢えず此处に来てみる。というより、昨日の今日で犯人が出没するだろうか、という考えは無いらしい。

いざ来てみると、やはり灯りが十分では無い為、視界が悪い。

街灯等の設備の取り付けに不十分な点が無いかも治安維持の課題の一つになるな。等と考えていたセリアの後ろに立つ影があった。ゆっくりと近づく影は、昨日と同じように長い棒状の物を握っている。

息を殺して背後に迫り、棒を握った腕を振り下ろした。

だが、棒が強打したのはただの道路。餌食になる筈の少女は居な

かった。

影がそう理解した瞬間、スラリとした刃が自分に向けられたので、咄嗟に腕を振って棒で防いだ。金属がぶつかり合う音がして後ろに飛び前を見ると、真剣を左手に構えた三つ編みの少女がいた。

「チッ！」

舌打ちをして地面を蹴る。少女に攻撃を仕掛けるが、素早い動きで躲かれた。最初こそ互角に見えたが、向こうは体力が無いのか、段々とその動きも鈍くなってきているのが伺える。

セリアは焦っていた。利き腕と反対の手で対峙している為、相手に一撃も入らない。しかも、右肩を気遣いながらの攻防なので、思った以上に体力を消費する。相手もそれを読み取ったのか、右側への攻撃が多くなった。利き腕での戦闘だったならば、何の問題もなく撃沈出来たのであろうが。後悔しても、もう遅い。

「あっ！」

攻撃を防いでいて痺れ始めた左手に、重い一撃が入った事で剣が弾き飛ばされてしまった。まずい、と思うが、取りに行っている暇は無いだろう。仕方なく攻撃を躲す事に専念する。本来の目的であった犯人の顔も、暗闇のせいかな、それとも隠しているのか、はつきりとは見えない。

最初こそ身軽に攻撃を避けていたセリアだが、右腕に衝撃が走った事で形成が逆転した。転がった時に腕をついてしまった様だ。ジワリと浸透するような痛み顔に顔を歪めると、見えない筈の相手の顔がニヤリと笑ったような気がした。

昨日のように確実に壁際へ追い込まれている。焦り出した思考を必死に押さえようとするが、相手の攻撃は容赦無く降り掛かる。

とうとう、逃げ場を失ったセリアが前を見れば、丁度棒が振り下ろされる寸前だった。近付いて来る棒を見ていたセリアだが、次の瞬間感じたのは衝撃ではなく、一陣の風。次に目に飛び込んだのは、吹き飛ぶ影とそれを蹴り飛ばしたと思われる足。そして揺れる長い赤髪だった。

「…ザウル!!」

影を蹴り飛ばした人物の名前を呼べば、彼は優しく微笑んだ。

「セリア殿。ご無事ですか？」

小さく頷けば、彼は心底安心したように目を細める。しかし、すぐにまた地を蹴り、気付けば、なんと逃げようとする影の顎を蹴り上げていた。

「セリア！」

怒気を含んだ声で呼ばれば、そこには予想通りの顔ぶれがこちらを見下ろしていた。

「お前、俺達が言った事聞いてなかったのか！」

「この件には関わるなと忠告した筈だ」

「セリア、無理はしないでって言ったのに」

唯一労りの言葉を掛けてくれたルネだが、瞳は怒っている。返す言葉も無く俯いていると遠くで男性の押し殺した様な悲鳴が聞こえた。思わず振り向くと、ザウルが影を取り押さえている所であった。穏やかそうで、細身の彼からは想像もつかない光景だ。

「相変わらず、見事だな」

「恐れ入ります。彼はどうしましょう」

カールは未だ抵抗を止めない影を一瞥すると、冷たくあしらった。

「近くの駐在所にでも放り込んでおけば良いだろう」

「そうですね」

影を引きずるザウルを、イアンが手伝うと言って二人は裏道の奥へ消えて行った。

それを見届けたカールは、今まで見た中で一番冷たい表情でセリアを見下ろす。

「さて、貴様にはまだ幾つか聞きたい事がある」

ギョロリと睨まれセリアは「ひいっ」と息を飲むが、睨みは止まない。

視線だけで人を殺せるのでは、と思う程冷たい空気を纏ったカー

ルをルネが宥めた。

「まあ、セリアも今日は疲れてるだろうし。お説教は明日の放課後で良いんじゃない。セリアも温室に気ってくれるよね」

質問しているようだが、声は命令しているようにしか聞こえない。どうしても、断る事は出来ないだろう。助かったと思ったのは最初だけ。まるで、死刑宣告を言い渡されたような気分だ。しぶしぶルネに頷くと、彼は相変わらぬ笑みを向けて来たが、今はどう見ても悪魔の微笑みにしか見えない。

カールもランも、取り敢えず納得したのか、言いたい事は明日まで停めておく事にした。

ほっと息を吐いて立ち上がったセリアだが、瞬時に浮遊感に襲われた。と思った時にはランに抱き抱えられていた。

「えっ！ なっ！？」

「とにかく、学園へ戻ろう」

さも当然といった風に持ち上げられたが、全くこの状況に付いて行けない。いきなり何をするんだ。

「ラン。歩けるから降ろして」

「君は怪我をしているんだ。無理はしない方が良い」

怪我といっても肩だけであって歩くのには何の支障もない筈である。

確かに、先程まで張りつめていた緊張が解けて、広がった疲労感には否めない。だが、この密着感に落ち着かないのも事実で、どちらかと言えば自力で歩きたい。

ランは自分の腕の中で、青くなったり、考え込んだりを繰り返すセリアに少々複雑な気持ちになるが、勿論降ろすつもりは無い。そもそも、彼女には昼間きつく言ったにも関わらず、何故こんな事をしているのだ。念のため校門を見張っていて良かった。

彼等は窓から見た、校門を出て行く影に、それが彼女だとすぐに察し追跡したのだ。途中見失ってしまったが、ラン達もセリアと同じ考えで昨日の場所へ行った。着いてみて真っ先に遭遇したのは

あの現場。もう少し駆けつけるのが遅かったらと思うと冷や汗が出る。

あれこれと考えを廻らせていれば、急に大人しくなった少女を不思議に思っ腕の中を見やると、穏やかな顔をして寝息を立てていた。

予想もしていなかった事態に逆に驚く。特に何かやましい事を考えていた訳では無い。だが、普通異性と密着していればこの歳の娘は相手が誰であろうが少なからず緊張するだろう。それなのに、これほど無防備な姿を晒すなど、年頃の娘としてはどうなのだろう。

先程とは違う事をあれこれと思い悩んだ末、ランはセリアの疲労が限界に達したのだろう、と結論づけ、それ以上は考えないことにした。

次の日、指定された通り温室へその足を向けたセリアだが、早くも帰りたい気持ちでいっぱいであった。入った途端、イアンに出入り口を塞がれ、ルネに部屋の真ん中に位置されていた椅子に座らされた。何故ここに椅子が置かれているかは聞くまでもないだろう。いつもの和やかな空気は碎片もなく、ピリピリと突き刺さってきそうである。まるで裁判にでもかけられているようだ。

「この件は忘れろと言ったのを覚えているか」

「はい…」

「関わるなど言っただのも覚えているな」

「…一応……」

ジロリと睨んでくるランに、自然とセリアの返事も歯切れが悪くなる。ランがため息を吐くと、今度はイアンが口を開いた。

「昨日襲われた時、怪我の所為でまともに逃げられなかったよなあ」

「……はい」

「昨日肩は？」

「……治って、ませんでした」

イアンが終わると今度はザウルが立ち上がった。

「門限後の校外への外出は規則で禁じられています。ご存知ですよ  
ね」

「…それは……」

「学園側に知られば、謹慎処分もあり得るのですよ」

「……」

「まあ、それは自分も同じなのですが」

「……はあ」

ザウルからも厳しい視線を頂戴したが、セリアには反論する余地もない。

ザウル達がこの事を未だ報告しないのは、決して我が身可愛さからではない。何かと優遇され、学園側からもそれなりの信頼を得ている自分達と違い、彼女は一般生徒であり、しかも女子だ。夢がある、と語った彼女にとって処分は、たとえば自分の責とはいえ、相当きつい物があるだろう。

「もうそれくらいにしたら。セリアだって反省してるし、この通り無事だし」

俯き加減のセリアに、ルネが助け舟を出す。だが、他は納得していない様子で、ランが口を挟んだ。

「しかし、彼女の行動が無謀だと言える物であった事は事実だ」

「でも。私だって一応考えて……」

すかさず反論しようとしたが、睨み返されて言葉に詰まった。

「なら、その考えとやらを聞こうじゃねえか。よっぽど周到に練られた策なんだろうな」

「いや…その……」



行つて、見つけて、捕まえる。とか。行つて、見つけて、逃げる。とか？」

「……………」

数秒の沈黙の後、聞こえたのは全員で揃えた様に吐き出されたため息。

「……君はもう少し思慮深い女性だと思っていたのだが」

心底残念そうな声色の言葉に、セリアもいたたまれなくなって思わず立ち上がる。

「一度だけに留まらず、二度も迷惑かけたのは分かってる。その事は本当に申し訳ないと思ってる。でも、やっぱり放っておけなくて……」

「……………」

「どれだけ自分が考え無しだったかも分かってる。でも、巻き込まれたのは自分なんだし、じっとしているのは……」

襲われるまでは噂さえ知らなかった自分だが、実際被害にあつて少なからず恐怖を感じたのだ。同じ事件がこれからも起こるとしたら、やはり何か出来ることがあるのならばやりたいと思った。そもそも、あの場で犯人の顔さえ見えなかったのが悔しかったのだ。

「それで威勢をはって軽卒な行動に出たわけか」

それまで黙って聞いていたカールが一步前に出た。昨日と変わらず冷たい視線で見下ろされ、思わず怯んでしまう。

「奏功する確証もなく、ただ闇雲に行動するなど、とんだ愚行だな」  
「……………」

思わず俯きそうになるが、セリアをそれをぐっと堪え、決して目を逸らさない。カールの意見はもつともなのだ。それに、彼等が来てくれていなかったら、実際どうなっていたか分からない。

「お前は、もっと冷静に物事を対処する術を覚える事だ」

急に温かくなった声に、はっと気付けば、いくらか優しくなった視線。それでも、柔らかな視線とは程遠いが。他の四人の空気も穏

やかになっている。

「まあ、ルネの言う通り、お前は無事だったんだしな」

そういつて頭を撫でたイアンも、優しく微笑んでくれている。その事に安堵が広がり、自然に言葉が出た。

「ごめん……」

今度は、セリアを責める者はこの温室には誰一人としていなかった。

「なあ……」

「何だ」

夕方になる頃、イアンが声を出した。今セリアは、湿布を変える為、医務室へ行っている。それにザウルが付き添っているので、温室に残っているのはラン、カール、ルネ、そしてイアンの四人だ。

「あれも、あいつの国を想っての行動なんだよな」

「……そうだな。国というよりは、他者といった方が良いかもしれないが」

セリアの力説を聞いて、もう彼女を咎める気は無くなっていた。確かに、やり方は浅はかで、とても賛同できる物ではなかったが、それも他者を想う故の無鉄砲さ。

いずれ、国の未来を背負うかもしれない立場にいる自分達にとって、彼女のような存在は、非常に嬉しいものである。それが、彼等の糧となり、守る者となるから。

強く示された彼女の国への気持ちに、やはり彼女は他とは違う存在だと、再度認識したマリオス候補生達であった。

## 祭り 1

マリオス候補生達は時に、他人が思わぬ行動をして、周りの者達を驚かせているものである。ここでも。

「何読んでんだ？」

「んぎゃっ！」

図書室の棚の傍に立ち、本に夢中になっていたセリアの後ろから、ひよいと腕が伸びた。思わぬ所から声をかけられ、いきなりの事にセリアは奇妙な悲鳴を響かせた。幸い、授業後で緊張の解かれた生徒達の雑談で、その悲鳴は掻き消されたが。

取られた本を奪い返そうとセリアは背を伸ばすが、なにせ身長差があるため全く届いていない。

本を取り上げたイアンの手の中にあるのは、小難しい数学書。手に残されている幾つかの教科書や参考書から察するに、課題にでも必要なのだろう。後ろから見た背中が本に集中していたので、年頃の娘らしく恋愛小説でも読んでいるのかと思ったのだが。

少しがっかりしたイアンが本を帰す。

「用事は済んだか？」

「うん、一応」

「じゃ、行こうぜ」

本を借りて、戻って来たセリアと連れ立って、イアンは早速温室を目指した。

あの事件以来、マリオス候補生達は何かとセリアに構っていた。というより、見ていなければまた何かやらかしそうで、危なっかしくて放って置けないのである。それに、彼等と同様に国を想う彼女

と接するのを楽しんでもいた。

セリアが、助けられたお礼に何かさせてくれと強く懇願してきた時、候補生達が出した提案はこれからも温室に顔を出す事だった。そんな事で良いのかとセリアは驚いたが、候補生達は強く頷き、言葉を変えような事はしなかった。

その為、候補生達とセリアの親密度はぐっと上がり、それに比例して女生徒方の妬みも上がる。当然なにかしら行動に出したい彼女達だったが、セリアは最近候補生達と行動を共にしているので、以前のように隙が無い。その事も彼女達の怒りに拍車をかけていた。そんな周りの考えなど知る由もなく、セリアは親しい友人ができた事を素直に感謝していた。

「それでは、行政が成り立たなくなってしまう」

「貴様の案では、なんの解決にもならない」

温室の扉を開けた途端に響く言い争いの声に、セリアとイアンも顔を見合わせる。流石に慣れてしまったのか、セリアは以前のように動揺はしない。

中を覗けば、案の定ランとカールが向かい合って対峙していた。その横ではルネが静かに見守ったり、花の世話をしていたりを繰り返している。気にしても仕様がないと取っているのか。

「セリア。出来れば君の意見も聞きたい。良いだろうか」

良いだろうかと聞きながらも自分の資料を手渡してくるランだが、セリアは何も言わずそれを受け取る。

以前はセリアが入って来ても議論に夢中で気付きもしなかったランが、今は自分から意見を求めて来る。それだけ距離が近付いたといえるのだろう。

「これなら……」

早速三人での議論に突入した。

慣れとは恐ろしいもので、最初こそ驚いたが今はこの状況が当たり前になってしまった。今までこの二人の論争に口を出そうなど、イアン達でさえ考えた事もなかったのに、セリアはそれをすんなり

とやってのけたのだから、驚きようだ。普通の生徒なら、恐れおののいて近付きもしないだろうに。

「三人共、一回休憩しない？」

いつの間に外へ出ていたのか、ルネが紅茶の入ったティーポットとカップを持って温室へ戻って来た。散々論議して少しは満足したのか、三人は差し出された紅茶に嬉しそうに手を伸ばす。しかし、それで議論が止まる筈もなく、結局お茶をしながらも論戦再開となった。

やれやれ、とルネが肩を落とすが、全く気付いちゃいない。

尚も続けようとするかに見えたラン達だが、取り敢えずは決着がついたのか、カールが去った事で議論は終結となった。

セリアも何処かすっきりした顔になっている。

「お疲れ様。セリアはこれからどうするの？」

「あつ、うん。借りた本を置きに寮に戻るね。課題もあるし」

両腕に抱えてる本を見せるとルネは納得した様子である。紅茶のお礼を言うと、セリアは脇目も振らずにそのまま温室を後にした。

残された候補生達、特にイアンは少し落胆した様子である。

「折角、祭りに誘うと思ったんだけどな」

「残念だが、あの様子では仕方ないだろう」

今は寮の自室で課題をこなしている筈のセリアだが、何故か校門へ向かって歩いていた。寮への帰り道、偶然耳にした行事へ参加するためだ。足を急がせ、校門の外に見える次々と並ぶ露店。わあつと頬を紅潮させながら近付くと、騒がしい喧騒の中、行き交う人々

に囲まれた。

相変わらず流行や噂に疎い彼女は、祭りが行われていることなど全く知らなかった。これだけ騒々しく行っているのだから、普通は気付くのだろうが、広い敷地を持つ学園の為、楽しそうな音はセリアに届く前に掻き消されていた。だが、祭りへ向かう途中だったのだろう生徒達の話し声でぎりぎり知る事が出来たのだ。

足取り軽くあちこちを散策するセリアを、露店商達が呼び止める。その度にフラフラと店に近づく彼女をいいカモと思ったのか、誰もが売りつける気満々だ。セリアは、わかっているのかいないのか、品物についての胡散臭い説明を疑いもせず興味深げに聞いている。ラン達と別れた直後にこれでは、彼等が放って置けないのも頷ける。

のほほんと歩くセリアを、また呼び止める声があった。

「お嬢さん。ちょっと見て行かないか」

近寄ってみれば、体格の良い褐色の肌の男が、白い歯を見せながらニカニカと笑って来た。

指差された先を見れば、少し前の時代の骨董品が、所狭しと並んでいる。壺やら怪しげな箱やら、とても売れそうな物は無いが、セリアは何を気に入ったのかそれらの品々に魅入っている。

「どうだい。全部ハモネス国の物だぜ。お嬢さんなら、そうだな……この変はどうだ」

そういつて露天商が出したのは、大きな箱に丁寧に並べられた装飾品らしき宝石。色も形も様々な物がある。言われてそれらに目を通してみたセリアだが、装飾品の奇妙な形に気付いた。円い輪になっている細い鎖に、宝石がいくつか取り付けられている。これだけ見れば、首飾りに見えるし、サイズのにもその類だろう。だが、鎖は繋がっていて、外せる箇所が見当たらない。大きさ的にも、人間の頭を輪の間に通すのは無理であろう。

「えと……これってどうやって付けるんですか？」

「これは、健康を願うお守りですね。室内の陽の当たる場所に吊り

下げて使うんです」

いきなり横に立った人物を見れば、長い赤髪を揺らすザウル。セリアと目が合えば、どうも、と丁寧に頭を下げて来る。

ザウルの説明に成る程、と納得した。身につける物でないのなら、それが不可能でも不思議はないだろう。

「あと、これは自分の枕元に置いて使うんです。安眠の為のまじないですね」

ザウルが手に取ったのは、大きな一つの宝石にいくつか羽を取り付けた様な物。どうもこの箱の中の物は、まじない等に使うものが多いらしい。それぞれ使われている宝石と品の形で意味が違って来るのだと説明された。

「兄ちゃん詳しいな。ハモネスの人間かい」

「はい。自分の生まれ故郷です」

「そりゃあたまげた。こんな遠方で同じ土地の者に会えるたあ嬉しいね。兄ちゃん。これ持って行きな」

そういつて露天商が差し出したのは、手の平に乗る程の小さな円盤。セリアにはそれが何なのか分からないが、ザウルと露天商には分かっているようで、別の言語でお礼らしき言葉を言っている。

手を振る商人を後ろに露店から離れると、セリアは自然とザウルの隣になって歩いた。

「セリア殿は、お一人ですか？」

「あ、うん。ザウルも？」

「ええ。宜しかったらご一緒しませんか」

「そうだね」

やはり二人で行動する事になったザウルは、セリアにこの後しばらく振り回される事になる。

フラフラと歩き回り、胡散臭い物を買わされそうになるセリアを諷めながら、ザウルは彼女を偶然でも見かけてよかった、と心底思った。

「でも、知らなかった。ザウルがハモネス出身だったなんて」

「そういえば、言ってませんでしたね。すみません」

「もしかして、この間相手を蹴り飛ばしたのも……」

「はい。ハモネスの伝統的な体術です。剣術はあまり得意ではないので」

一通り歩き回った二人は、今は学園近くの公園で一休みしている。ザウル達のいうハモネス国とは、クルダスから遙か東にある鉱物資源の豊富な大国だ。その資源を元に、国全体が経済的に裕福な国である。それと同時に、昔ながらの文化を保ち、その現れが国の至る所にでている、神秘的な国としても知られている。

そんな遠方から、わざわざクルダスまで留学してきたのは何故であらうか。

「気になりますか？」

思いつき顔に出ていたセリアに、ザウルが問いかける。何故分かったのだ、とセリアは慌てるが、ザウルの落ち着いた雰囲気になんとか平静を取り戻した。彼の纏う落ち着いた空気は周りも静める効果があるらしい。

「母がクルダス出身なんです」

「ああ、成る程」

なんだ。簡単な答えではないか。母上がクルダス出身ならば、その息子がここへ留学に来ても何の不思議もない。

しかし、そこでふと思いとどまる。ならば彼は卒業後、国へ帰ってしまうのだろうか。てっきり、この国の未来を背負って立つものだと思っていた。なんといっても、彼はマリオス候補生なのだ。国を想い、国を導く者だけが得られる場所に最も近い者。

「卒業したら、ハモネスに……？」

「……恐らく、そうなると思います」

込み入った事を聞く様で申し訳なかったが、どうしても聞きたかった。候補生になったのは、彼なりにこの国で成し遂げたい事がある



ったからではないかと考えたからだ。しかし、返ってきたのは肯定の答え。

「そっか。寂しくなるね」

「……………」

「ラン達がマリオスになっても、ザウルが居ると居ないとじゃきつと違うんだろうな」

「……自分は……………」

急に暗くなったザウルの声に、セリアはしまったと思った。もしかなくとも、責めているように聞こえただろうか。全く他意は無く、ただ思ったままを口にしたただけなのだが。

「ザウルにどうしろとか言ってるんじゃない。ただ、寂しくなるなど……………」

「いえ、そうではなく。自分も、この国で仲間と共に歩いて行く未来を見たくて……………」

ザウルの言葉に、「うん？」とセリアは首を傾げた。これは要するに、卒業後もこの国に留まりたい、という事だろうか。

「その……………愚痴を言うように申し訳ないのですが、少し話を聞いてくれますか？」

セリアが無言で頷くと、ザウルはゆっくりと口を開いた。

「母と父は、父が短期留学の為クルダスに来た事で出会いました」  
クルダスで伯爵の地位を得ていたボルノ家に生まれた母は、ハモネス国で子爵の位についていた父の家に嫁入りした。しかし、慣れない遠方の土地に戸惑い、苦労は耐えなかったと、父から聞かされた事がある。そして長男ザウルを出産。その後、母の希望により、ザウルは幼少の頃を母の実家であるクルダスの祖母の家で暮らす。

「母も、やはり故郷の土の方が馴染むのか、ハモネスにいる時より

も生き生きしていたように自分の目には映りました。今から考えると、母が帰郷する為の口実だったのかもしれないね」

クルダスでの滞在期間、とても良くしてくれた祖母に別れを告げ、ハモネスへ帰国したのはザウルが七つの時であった。しかし、一度の帰郷は母の寂しさに拍車をかけたのか、帰国後の彼女は少しずつ衰弱していった。

「母は我慢強い人で、どんなに辛くても、表面には出さなくて。自分も、母が倒れるまで気付きませんでした」

ベッドに伏せる母に、父もクルダスへ帰る事を進めたが、遙か遠方のクルダスへの行程に耐える体力はその時の彼女には残されていなかった。

今でも聡明に思い出せる、日に日に痩せ細って行き、それでも笑顔絶やさなかった母。そして、それを見ながらも、気丈に振る舞う父。何とか帰郷する体力だけでも回復させようと、父は手を尽くした。部屋にクルダス風の家具を揃え、クルダスで採れる花を飾り、食事も出来るだけクルダスの物を出した。自分も、クルダス語で母に話しかけたり、本を読み聞かせたりもした。だが、そういった気遣いが、気の弱い母を逆に追いつめたのか、そのまま彼女は静かにこの世を去った。

「それから、父も何処か支えを失ったようで」

瞳に寂しさを秘めるようになった父は自分の教育に熱を入れた。その真意が、早く自分にアルシャーノフ家を継がせる事にあると知ったのは、数年前だ。家族が離れていくかもしれない状況に、何処か不安を抱えていたのだろう。

「父が留学したクルダスに来る事も、勉学の為と言えば反対はされませんでした」

留学の間の世話を祖母に頼み、ザウルは故郷を後にした。筈だったのだが、クルダスに着いた時、感じたのは何故か懐かしさ。幼少の頃を過ごしたのだから、懐かしいと感じるのは不思議ではない。が、何故かここを故郷と呼ぶのに違和感がなかった。逆に、数年後、

ハモネスに「帰る」と思うと、少しの抵抗を覚えた。

祖母のいるボルノ家へ行けば、以前自分が去った時と何も変わらぬ光景。祖母の優しさも変わる事は無かった。生活もハモネスと全く違うのに、すぐに馴染んだ。フロース学園に通い、仲間も出来た。マリオス候補生になった今、その仲間と共に国を背負う事を夢にするようになった。

最初こそ、叶わぬだろうと思っていたその夢は、祖母の提案により現実味を帯びるようになる。クルダスに残る場合、自分にボルノ家を継がせるというのだ。そうなれば、卒業後のクルダスでの生活が可能になる。

しかし、そこで思い起こされるのは父の事。卒業後に国へ戻る事を信じて、今も自分の帰りを待っているのだろう。妻を失い、更に自分まで遠い異国に住む事になれば、父はどうなる。その時父が抱く失意の念は想像に難しくない。

「そこまでして、自分の我が儘を通すべきか」

「……………」

琥珀色の瞳が少し辛そうに揺らいでいて、セリアは少し戸惑った。こういう時になんと言えば良いのだろうか。自分には大切に想う人を失う気持ちが分からない。失うかもしれないと不安に駆られるような経験も無い。言葉を探している内に、いつのまにか手は長い赤髪を撫でていた。

「ザウルは優しいから、自分のしたい事をしろっていつでも、どうしても他の人の事も考えちゃうんだよね」

「……………」

「だったら、後で後悔しないように、今思いつきり悩んでおけば良いと思う。悩む事は悪い事じゃないんだし」

ザウルの頭をぎこちなく撫でながら、セリアは曖昧に笑った。自分は何かを決断する時、それが何であろうと、冷静さを欠く事がある。その後、もう少し悩んで置けば良かったのではと思う事も少ない。だから、自分の意志を保ちながらも、周りを懸命に気遣う

ザウルの慎重さを羨ましくも思えた。もちろん、彼にとって、そうしなければいけない程の大事な決断だというのも分かるが。

だから彼の心が決まらないのであれば、答えを急ぐ必要はないと思っただけ。

ザウルの瞳は驚きで見開かれていた。決断を急ぐ声はあっても、悩めと言われた事は無かったからだ。自分でも早く決めなければと思っていた。その考えを覆されたのに、彼女の言葉は妙にすんなりと心に浸透し、温かみを帯びていく。

今まで、悩むこと事態に、多少の罪悪感を感じてきたのかもしれない。クルダスに留まりたいと思う事が父への裏切りのようで、苦痛に思っていたのだ。

だが、それでも良いのだと思えた。悩む事に苦痛を感じる必要はないのだと。そう言われた気がした。

自分の頭を撫でる手を握ればキョトンとした瞳がこちらを見返して来る。

「貴方は、不思議な方ですね」

いきなり自分達の前に現れた、剣を振り回し、政治に興味を持つ女性。ついこの間、無謀にも飛び出して行ったかと思えば、今のよう達観した事を言う。何処か掴み所が無いように感じれば、妙に単純で子供の様な表情をする。実に不思議で堪らない。

ザウルの心境を全く理解していないセリアは、不思議だと言われた事に首を傾げ、「あー」とか「うー」とか訳の分からない声を出している。目を泳がせて、必死に思考を廻らせているセリアに思わず吹き出しそうになるのを堪えると、ザウルはセリアの手を離して立ち上がった。

「そろそろ戻りましょうか」

「う、うん……」

いったい、彼は何が言いたかったのだ、と頭を捻って考えるが、その答えは全く出て来なかった。

少し薄暗くなってきた。祭りの活気は静まる事なく続いている。夜に近付き、それぞれ用事を終えた人々が覗きにくるのか、昼よりも人出が多い。しかし、人が増えれば問題も増えるのか、所々に警備兵の姿も見られる。

そんな中、人の間を抜けながら、セリアは懸命に学園を目指していた。背が高く、人混みを難なく抜けてゆくザウルに対し、少し小柄なセリアは気を抜けばすぐに向かい側から押し寄せる人の流れに吞まれてしまいそうになる。

俄然やる気を奮い立たせ、意地で前へ進んでいると、目の前の人混みから急に影が現れ、突っ込んできた。咄嗟にザウルが手を伸ばすが間に合わない。

「ひえっ!？」

ぐっと身構えるが思ったよりも衝撃が強く、セリアは可愛らしくもない悲鳴を上げながら影に弾き飛ばされた。彼女にぶつかった本人も、すぐ傍で地面に転がっている。

「すみません」

ぶつかった本人、げっそりとした痩せ男は慌てて立ち上がると、形ばかりの謝罪をして、また急いで人混みに紛れていった。

「セリア殿、大丈夫ですか？怪我などは？」

地面に座り込んでいたセリアに手を差し出しながら、心配そうにザウルが様子を伺って来る。

「あ、うん。全然大丈夫だよ」

軽く笑いながら、ザウルの手を取ると、力強く引かれてセリアは立ち上がった。何処にも怪我がない事を確認して安心したのか、ザウル表情にも安堵の色が広がる。しかし、やはり目を離せないな、とザウルは気を引き締めた。

その後も、何度か同じ様な状況に遭遇したが、常に気を配るようにしたザウルのお陰で、なんとか無事学園へ辿り着いたのだった。ザウルと別れ、セリアはそのまま女子寮へ向かう。楽しい時間とは早く過ぎるもので、学園を出てからかなりの時が流れていた。

すぐにでもベッドで眠りたいと思っていたセリアだが、まだ課題が残っていたなと思い直す。明りをつけて机に向かった所で、制服のポケットに違和感を覚えた。手を突っ込むと指に当たる固い感触。取り出してみると、それは一枚の金貨だった。いや、金貨に見えるが、模様が所々綻んでいるように見える。はて、こんな物ポケットに入れた覚えはないのだが、一体何処で紛れたのだろう。祭りに行く前は持っていなかった筈だが。

もしかしたら、ザウルのものかもしれない。明日、彼に聞いてみよう、と思いセリアは静かにその金貨を机の上に置いた。

## 祭り 2

「セリアに話した!？」

「はい。祭りでハモネスの物を見つけたので、それをきっかけに」

男子寮に設けられている小さな談話室。帰りの遅いザウルと偶然出会ったイアンは、いつもより何処かすっきりした顔付きの彼を見て、その訳を聞いてみたのだ。

「あいつ祭りに行ってたのか？」

「ええ。そこで、偶然お見かけしたんです」

温室にいた時には、課題があると言っていたので、部屋でそれをこなしているものと思っていたのに。勿論、自分達が誘わなかったのは事実だが、少々面白くない。

「それで、少しは悩みは解決したのか」

「いいえ」

「……はっ!？」

「悩みが解決したわけではないんです。実際、まだ迷っています」

何かが吹っ切れた様な顔をしたザウルが、例の事をセリアに打ち明けたというので、セリアの助言が何かで決断できたのかと思ったのだ。が、返って来たのは予想とは真逆の答え。彼の表情から、何か彼の心境に進展があったのかと思ったのだが。

「ただ、少し心が軽くなったと申しましょうか…」

「なんだ、惚れたのか？」

ザウルがあまりにも晴れやかな顔で話すもので、少しからかうつもりで言ったのだ。真面目な彼の事だ。この後顔を真っ赤にして、いつもの様に固い口調で否定してくるだろう。

「どうなのでしょうか？」

と思っていたが、ザウルは慌てる様子は一寸も見せずに淡々と答えてしまった。これには流石のイアンも絶句するしかない。

今まで浮いた話も異性の噂も皆無だったザウルが、まるで別人で

ある。

「……本気か？」

「いえ、分かりません」

分かりませんと答えたザウルだが、それは本当のようで、考えだすザウルに、思わずため息が漏れる。人の色恋に口を出すつもりはないので「まあ頑張れ」とだけ言って、自分の思考に集中し始めたザウルを残して自室へ戻ることにした。なんだか、既に波乱の予感がする。

「ザウルいる？」

昨日の会話に加え、温室に入るなりザウルの名を出したセリアに、流石のイアンも目を白黒させた。

「セリア。ザウルは今席を外しているが、どうかしたのか」

「あっ！うん。ちょっとね」

イアンは、知らず知らずの内に、背中に冷や汗が流れていたのを今確認した。

なんだ。セリアまでザウルを意識しだしたのか。急な心境の変化には何かしらきっかけがあったのだろう。昨日一体二人の間に何が起こったのだ。というか、何故自分はこんなに焦っているんだ。

「どうしたの？眉間に皺寄せて」

「のわっ！！」

自分の世界にすっかり浸っていたイアンは、いきなりの声に飛び上がって驚いてしまった。驚かれたセリアが逆に驚いてしまった程度だ。「いや、何でもない」と否定するが、ランからも不審気に見られてしまっていたたまれなくなる。何で俺がこんな思いをしなければならんだ。



イアンが心中、訳の分からない悪態を吐いていると、ルネが慌てて温室に駆け込んで来た。

「セリア！いる！」

「ど、どうしたの！？」

「大変だよ。今、女子寮で……」

「とにかく来て」というルネに連れられて来てみると、女子寮の前には人集りが出来ていた。セリアに気付くと、一斉に視線が集中したので、セリアにとっては非常に居心地が悪い。女子寮の寮長が彼女を見つけると、凄い形相でこちらに歩いて来た。ただならぬ雰囲気、セリアも身構える。

候補生達は寮長に連れられて中に入って行くセリアを、心配気に見つめていた。

「なっ！？」

連れて来られたのは自分の自室。何か、尋常ではないことが起こっているのは予想できたが、中の惨状はそれを絶するものだった。

恐る恐る覗いたセリアの目に映ったのは、部屋をまるごとひっくり返したのではないかと思う程物が散乱した室内。棚という棚は全て中身がぶちまけられ、クローゼットなどは引き倒されていた。中でも酷いのはベッドで、鋭い刃物でマットレスを引き裂かれている。

寮長はカンカンに怒っているし、部屋はこのありさまだしで、セリアは頭を抱える他なかった。一体何が起こっているのだ。

部屋を片付ける際、取られた物は一つも無い事を確認する。壊れて使い物にならなくなった物なら幾つかあるが。もしかしたら、ま

た女生徒方の嫌がらせだろうか。

一応部屋には鍵が付いていて、こじ開けた形跡は無い。不審な点といえば、窓辺に何故か付着していた泥と靴後だ。確かに、セリアの部屋の前にはうまい具合に枝が伸びていて、窓から入るのも出るのも可能である。しかし、ここまでするだろうか。

「大変ね」

部屋に別の人間の声が響いて後ろを振り返ると、いつかの隣室の女生徒が部屋の外に立っていた。あの後名前を聞いて、アンナと名乗った彼女は、部屋の中を覗いても眉一つ動かさない。冷静というか、落ち着き払っている。

「はあ……」

「何があったかは知らないけど、足りない物があつたら言つて。出来る範囲で面倒でなければ手助けするわ」

それだけ言つと、アンナはさっさと自室へ引つ込んでしまった。

手助けの前に、『出来る範囲』と『面倒でなければ』とはっきり言つた所が、また彼女らしい。

片付けを手伝ってはくれないだろうな、と思つたセリアは乾いた笑いを零しつつ、また部屋の片付けに戻つた。

「ううっ……」

「大変だったね。セリア」

元々所持品が少なかった為、片付けには思つたほど時間は掛から

なかったものの、昨日は徹夜する羽目になってしまった。ベッドは新しい物が明日には届くとのことだ。

セリアは今、疲れた体と心を癒すため、ルネの香ばしい香りの漂う紅茶を啜っている。

「しかし、他人の部屋を荒らすなど、許すまじ行為だ」

「何か心当りは無いの？」

ランは見えない犯人に対し、己の正義感を燃えたぎらせ、ルネは心配気に見つめて来る。貴方達と一緒にいる事が唯一の心辺りです。とは口が裂けても言えない。他には何も覚えがないので、一応首を振っておく。

「空き巣でしょうか？」

「それは無いだろう。こやつ部屋は三階だ。ただの窃盗ならば、もっと階下の部屋を狙う筈だ」

他生徒の嫌がらせか、との意見も出たが、それはセリアが否定した。部屋の扉はこじ開けられた形跡は無く、鍵は自分が所持していた。寮長が保管している合鍵を使えばそれも可能だが、確認した所、合鍵は始終安全に保管されていたとの事だ。それに、窓枠に付着した泥から考えて、やはり侵入経路は窓からになるが、そこまでして嫌がらせをする生徒はいないだろう。考えたくないが、同じ学園に通っているかぎり、他にもやり方は幾らでもあるのだから。

「だとしたら、やはり外部の人間が？」

「その考えが打倒であろうな。郵便の配達とでも言えば部屋の利用者を調べるのは難しくない」

そう言ったカールは、もう女子寮の方に確認を取った後だった。やる事がマメなのは生まれつきか。

「留守中に侵入したのであれば所有物の何かが狙いだろう。何か紛失したものはあるか？」

「ううん。壊れた物なら少し。でも、取られた物は無かった」

「なら、部屋に侵入し目的の物を探したが、見つからなかった。という所だろう。昨日の所持品は持って来ただろうな」

「でも、盗んで得しそうな物なんて、一つも持っていないけど……」  
そう言いながら、セリアは事前に言われていた通り、昨日の寮の部屋には置いていなかった物を出した。といっても、鞆の中身の勉強道具くらいである。他人が盗みたがるような物ではない。

「これはどうしたんだ？」

そう言ってイアンが取り上げたのは、他の物と比べて不釣り合いな一枚の金貨。祭りの日の夜、ザウルに聞こうと思って鞆に入れたまま忘れていた物だ。

「あ、そうだった。それ、お祭りの日にいつの間にかポケットに入ってたんだけど、ザウルのじゃない？」

「いえ。自分の物では。祭りの最中に何処かで紛れたのでは……」

「そう」

金貨の様に価値ある物を落とすだろうか。とも考えるが、祭りの様に賑やかな場所なら、こういった事があっても可笑しくはないだろう。とセリアは考える事にした。

どうやら話が纏まったようである、とイアンは金貨をコイントスの様に親指で弾いた。と、聞こえたのは金属特有の鋭い音ではなく、コツンという小石を叩いたような音。他は誰も気付かなかったようだが、気になったのもう一度弾いてみる。すると、また同じく、妙に軽い音がした。不審に思って、ポケットからコインを一枚取り出し指で弾いてみるが、こちらはちゃんと金属音がする。

一人で金貨を投げたり叩いたりしているイアンを不審に思ったのか、周りが聞き出した。

「どうかしたのか」

「……これ、本当に只の金貨か？」

周りが「どういう意味だ」的な視線でイアンを見つめていると、彼は徐に立ち上がり、金貨を床に向かって手放した。重力に逆らう事なく、金貨は地面に向かって落下していく。そして地面に着くと同時に、高い音が響く。とイアン以外全員の予想を裏切り、金貨は軽い音を立てて温室の床板に転がった。

「おい…」

「…………はい」

「科学室から天秤を持って来い」

「分かりました」

何が起っているのか訳が分からず、ただ呆然と床に転がる金貨を眺めていたセリア達に、カールが淡々と命令した。いち早く反応したザウルは、すぐにそれを実行するため駆け出す。

「お前は、これが何処で紛れたのかをさっさと思い出せ」

冷たい視線がセリアを射抜く。そんな無茶な、と思いながらも魔王様に押され、懸命に思考を廻らす、全く思い出せない。セリアでなくとも、これが良い物だとは思わないだろう。金貨の姿形をしているが、明らかに紛い物である。それが、どう転んでも良い事の予兆に繋がる筈がない。

必死に頭を悩ますセリアを見ながら、残った候補生達は同じ事を考えていた。何故こいつはこうも厄介事に巻き込まれるのだ、と。

「祭りに行く前は、確かに持っていなかったのだな」

「うん。多分……」

「ザウルと会う前は？」

「特に気になる事はなかった、ような気がする」

「……これが紛れられるような状況になったか？」

「う、ん。色々な所見て回ったから…」

必死に彼女の思考を辿ろうとするが、何を聞いても曖昧な答えを返す彼女に、さすがのランも少々苛立ってくる。祭りに夢中で、あちこちをフラフラしていたセリアに聞いても、無理な話なのだが。

セリアが唸っている間に、天秤を持ったザウルが急いで戻ってきた。ザウルがそれをテーブルの上に置くと、カールは懐から見事に輝く金貨を取り出し、それを一端に乗せる。そして、例の金貨をも

う一端に乗せた。すると予想通り、天秤はカールの取り出した金貨の方に若干傾いた所で止まった。

「……狙いはこれだろうな」

セリアは、さあっと血の気が引いて行くのを感じた。

「しかし、なんでこんな物が？俺達だって気付いたんだ。その道の奴が見りゃ一目瞭然。それを偽金貨として使う事はしないだろ」

「確かに、人の目を騙すのには、質が悪すぎるようだな」

よく見れば、形にも多少の違いが見え、音に関しては先程証明した通りだ。マリオス候補生に選ばれる程の才能を持った者が見たとはいえ、彼等はまだ学生である。そんな彼等が見てすぐに紛い物である事が分かったのだ。偽物と本物を見分ける事に対して洗練された術を持つ商人や資産家等が見れば、子供の玩具も同然である。それを、実際の商談や取引で使う等、普通は考えられない。

全員で頭を悩ませるが、まだ情報が少な過ぎる。もう少し何か分ければ、何かが見えるのだろうか。

とにかく、ここで考えていても始まらない。向こうの狙いが分かっただけなら、こちらに対策が取れるではないか。

「お前、またこの間みたいに余計な事に首突っ込む気か？」

ズバリその通りである。ギクリと肩を揺らしたセリアに、大きなため息が聞こえた。また反対されるのかと身構えるが、どうやらそうではないらしい。

セリアには、言っても聞かないだろうと、全員が理解していた。

というより、諦めていた。それはもう性格の問題であって、今はとやかく言うつもりは無いが。それならば、全員で首を突っ込んだ方が、解決出来る可能性も増えるし、彼女の危険も減るだろう。と考えた末の決断だ。

「近々動くでしょうか？」

「相手の目的は果たされていないのだ。そうそう諦める程度の物でもあるまい」

「しかし、その間彼女は……」

一瞬で視線を集めたのは、巻き込まれた張本人のセリア。しかし、以前のように自分は怪我を負っているわけではないので、大丈夫だと思いを懸命にした。以前と同じ、自分を囚に、という彼女の意志は候補生達にも容易に推し量れる。

確かに、今回は以前の事件のように狙いが不特定多数の無差別攻撃ではない。相手の狙いが金貨だと分かってても、その意図が分からない為、敵を誘き出すのにはセリアが行動するのが確実。だからといって、そう安易に彼女を囚に使う程、彼等は薄情でもない。筈だが。

「ほう。覚悟は十分出来ているようだな」

「カール!？」

一人だけ、薄情な人間が居た。薄情というのが正しいのかは分からないが。

「相手はこやつが金貨を所持している事を確信している。逆に言えば、こやつしか相手を誘き出せないという事になる」

「しかし、それでは彼女にも危険を強いる事になります」

「金貨を手にした時点で危険な事に変わりはあるまい。実際、もう被害が出ているではないか」

「ですが……やはり賛成出来ません」

カールの考えを必死に否定しようとしているザウルの姿は、候補生達でさえ見た事が無い物であった。今まで彼は、誰かの意見を頭から否定する事など殆どしたことがなかった。それに加え、カールの意見は正論であり、説得力もある。実際、既に寮の部屋を特定され、そこに侵入されているのだ。こちらが黙って引っ込んでいても、向こうから何かしら仕掛けてくるであろう事は想像に難しくない。

普段のザウルなら、迷いはしても、即座の否定はしなかったであろう。

しかしカールの意見に反対なのは他の候補生達も同じなので、ザウルの行動の違いに気付いている者は少ない。

唯一その違いを見抜いたイアンは、その原因に見当がつく為、内心その違いを指摘するべきか迷っていた。別に指摘する必要性は特に無いのだが、恐らく無自覚であろうザウルに持ち前の親切心と内に隠した悪戯心と興味本位で教えてやろうかとも考えたのだ。

話題の中心人物である少女を見やれば、非常にバツの悪そうな顔をして、肩を細めて縮こまっている。目の前で繰り広げられる、あでもないこうでない、と言った話に、どう切り出そうか迷っている様子であった。

「セリアはどうなんだ？」

「えっ！私？」

まさか、いきなり自分に話を振られるとは思っていなかったのであろう。セリアは目を白黒させた。話の内容は彼女だというのに。

「お前が協力してくれるならそれは有り難い。危険はあるが、その時は俺達が全力で守る」

「……………」

「この事にこれ以上関わりたくなければ、金貨を俺達に預けるでも、警察に届けるでもして、学園内の安全な所にいてくれれば良い」

強制もしなければ否定もしない。判断はセリアに任せる。そう言い切ったところでイアンはセリアの表情を伺った。彼女の場合、後者を選ぶ事は無いだろう、と予想しての提案だ。

どう切り出そうかと悩んでいたセリアは、これはチャンスだと喜んだ。

いや、丁度良い所でイアンが申し出てくれた。などと、イアンの心中を全く察することなく、セリアは思わぬ助け舟に感謝していた。「その……私の方が巻き込まれているわけだし。協力をお願いするのは寧ろこっちだというか、なんというか」

言い出したは良い物の、やはり迷惑をかけてしまうだろう事が後ろめたいのか、語尾が少しずつ小さくなっていった。

ビクビクと肩を揺らすセリアの周りでは、どうやら話が決まっらしい。カールの案通りに、セリアを餌として使う方向で話を進め



る。だが、やはりどうしても納得していない表情のザウルがセリアの前に立ち、真剣な瞳で彼女を見つめる。

「セリア殿。絶対に無茶はしないと。これだけは約束して下さい」

「ザウル……」

心底心配してくれているらしいザウルに、少し申し訳なく思いながらもセリアは頷いた。本当に、こんな事に巻き込まれてしまつてすみません、と誤りたくなる。

明日までに、それぞれ出来るだけ考えや案を纏めてくる事になり、セリアは、それまでは勝手な行動はしないようにと言われ、寮へ帰された。

例の金貨は、万が一セリアの身に何かがあつても、金貨がこちらにあれば相手との交渉にも使えるだろうと考え、彼女の手からカールに渡ることになった。

寮まで送ると申し出たザウルに、過保護過ぎではないかと、イアンは内心苦笑したのであった。

## 祭り 2 (後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

突然ですが、今回から、次話予告、の様な物を乗せたいと思いました。といっても、ネタバレは含みません。ドラマなどの予告を真似た様な物です。読まなくても支障は全くありません。後書きに乗せるので、不快に思われる方は飛ばして下さい。

作品のキャラクターに喋って貰います。誰かは読んで分かるようにしたいと思っています。

無茶な振る舞いをする彼女は、自分には眩しいのです。同時に、常に不安に駆られるようになり、目が離せない。でも、彼女はそんな事に気付いていないでしょう。いつでも無鉄砲で、無防備で。だから増々気になってしまう。どんな危険が彼女に迫るか分からない。

例えどんな時でも、自分は貴方を、守ります。

以上です。こんな感じでこれからも次話予告をやっていたらと。予告というより、眩きですね。ちなみに、今回はザウル様にしました。初めては主人公のセリアちゃんにしようとも思ったのですが、話の内容的に彼に決定しました。

これからも、キャラクターが変わったり、ナレーションだけだったりで書いて行けたらと思っています。

あくまでも予告という事なので、その時の話と関連していなかったりするかもです。

これからも、宜しくお願いします。

### 祭り 3

寮への道中でも、よくよく注意する事と、危険な事はしないようにとザウルに何度も確認されたセリアは、どっかりとベッドに腰を降ろした。少なくとも貴族の令嬢がする行動ではないが。

セリアは、あれから懸命に金貨が自分のポケットに入っていた理由を考えたが、皆目見当がつかない。祭りで浮かれていた中、思い当たる節があり過ぎる。どうしたものか。

出来るだけ、面倒事には巻き込まれたくはないのだが。必死に思考を辿るセリアの瞼が落ちるのに、そう時間は掛からなかった。

「ザウル。お前は祭りの日、あやつと行動を共にしていたのだな」

「ええ。ですが特に思い当たる様な事は…」

男子寮に設けられている談話室で、候補生達が揃って頭を悩ませている場所へ、カールが一枚の新聞を持って来た。他の生徒も使っている筈のこの部屋だが、彼等以外には誰もいない。候補生達が居るので、恐れ多いと遠慮して誰も入ってこようとはしないのだ。話を聞かれる心配がないので、好都合ではある。

「ならば、この男に見覚えはあるか」

そういつてカールが差し出した新聞を受け取ったザウルは、目にした記事に目を見開いた。『密輸犯、逮捕』と書かれた見出しの横には、見覚えのある顔。祭りの夜、学園への帰路を行く途中でセリアにぶつかった痩せ男だ。

「祭りの日に、学園都市内で起きた事件はそれだけだ。そして、それに関連していると思ったのだが。どうだ？」

「はい。確かにこの男、セリア殿に接触しています。密輸犯だったのですか……」

ザウルは信じられないとでもいった風に記事をまじまじと読んでいる。他の候補生達も驚いた面持ちだ。金貨の本来の持ち主は密輸犯。そして、本人が逮捕されているにも関わらず、セリアが金貨を持っていると知り得た人間が、それを狙って来た。密輸犯の接触は偶然で、この件に関係していると考えるのは、思い過ごしかもしれないが、無視は出来ない。仮に金貨の持ち主が密輸犯だと考えれば、一つの仮説が生まれる。

密輸取引の際、密輸品は当然運び屋によって運ばれて来る訳だ。しかし、犯罪を犯しているのに、それが正当な方法である筈がない。法をかいぐり、政府の目を騙しながら運ぶ必要がある。その為、囹や偽取引等の動きも活発になるだろう。そういった時、物を運ぶ者と受け取る者は正しい相手を見分ける手段を用意している筈だ。

その男が、逮捕される直前、セリアのポケットに忍ばせた金貨。重さも本物と異なり、科学配合も分からないこの偽金貨を他人が複製するのは難しい。

直ぐに紛い物と分かる為、金貨としての価値は無いが。もしこれが、お互いを見分ける手段であつたとすれば。

まだ仮説にすぎないが、十分可能性がある。

「金貨は、お互いを確認する、いわゆる割り符の変わりってわけか」  
「でも、何でセリアにそれが…？」

ルネが不思議そうに呟くが、カールがそれにすかさず答えた。

「あの晩、逮捕されると覚悟した男が、その場で唯一身分が特定出来る者の着衣に忍ばせたのであろう。後々誰かが取り返せると見越して」

「そうですね。この学園都市の者で、フロース学園の制服を知らない人はいないでしょうし」

祭りの人混みの中、目についたのが偶然居合わせたフロース学園の生徒だった、という事だろう。あとは学園を見張るでもなんでも

して、金貨を持っている生徒を確認するだけだ。それがセリアだったという事。はっきりいって、不運以外の何でもない。

「でも、そう決まった訳じゃ……」

「可能性は捨てきれないがな」

密輸と関連性があるにしろないにしろ、金貨はロクな代物ではないと、改めて認識した候補生達であった。巻き込まれた張本人を思っっては、彼等は頭を抱える。

その頃、そんな会話が為されているなど知る由もなく、セリアは安らかに寝息を立てていた。

普段通り授業を受けた後、候補生達の仮説を聞いて、セリアは心底がつくりした顔を見せた。その手の中では、例の金貨が鈍く輝いている。もう一度溜め息を吐いて、セリアは申し訳なさそうにその場にいる候補生達を見つめた。彼等の言う通り、密輸に関連している物なのか、セリアには判別の仕様がな。どうしたものか。

冷やかな視線を保ちつつ、カールがこれからのセリアの取るべき行動を説明した。

それが、夕方近くの時刻に人気の少ない場所を歩けというものだった。

「夜じゃダメなの？」

「余りにも芝居がかつてると逆に怪しいだろ」

確かに、夜に学生が理由も無くふらつくのは、少々態とらしいともいえる。特に、名門校として知られるフロース学園の生徒ならば尚更だ。直接、寮を荒し回る程焦っている敵なのだから、そこまで心配する必要は無いのかもしれないが、用心に越したことはない。

彼女の後ろからは、目立たぬ為に一度に二人程の候補生が付いていく。一応、金貨は学園に残る候補生に託し、偽の（実質的には本物）金貨をポケットに入れておく。

そうと決まれば即決行。今日からでも作戦開始しようではないか。早速準備をするべく、セリアはスタスタと寮の自室へ戻ってしまった。

残った候補生達は、今日は誰が後をついていくかを話し合っていた。真っ先に申し出たのはザウル。是非自分が行く、と強く願っていたザウルの後に「俺も」とイアンが言い出した。予想以上に協力的な二人に、他の者は多少驚いたが、特に気にせず今日は彼等に任せる事にした。

ザウルの胸の内を知っているイアンは、自分の行動に自分で驚いていた。ザウルの申し出を聞いて、勝手に体が動いていたのだ。申し出た事を後悔している訳ではない。いや、寧ろ自分の行動を賛美してやりたい位だ。今のザウルと、彼の心を知らない他の者とでセリアの護衛をさせるのは、何故だか躊躇われた。

いやいや、別に気になってる訳ではない。セリアの身の安全の為だ。と自分に言い聞かせる。

イアンが脳内で終わりの見えない議論を繰り返している間にも時間は過ぎ、気付けばセリアと校門で落ち合う時間になっていた。

自分が一番危険な状況に踏み込もうとしているというのに、ずっと自分達の事ばかり気にするセリアに、イアン達は再び頭を抱えた。一番危機感を持って欲しい時に、何故他人の心配をするのだ。頼むからその心配を自分の為に使ってくれ。でないと、守るこちらの身が持たない。そういつても、彼女は巻き込んでしまって申し訳ないと、逆に縮こまってしまった。本当に勘弁してくれ。

前を歩くセリアは、緊張感の欠片も感じられない。いや、本人は警戒しているつもりなのだろうが、その迫力がこちらに全く伝わってこないのだ。敵にしてみれば、その方が動きやすいだろうが。普段のほんとしているので、緊張の域が狭いようだ。

「今夜にでも動きがあるでしょうか？」

「だろうな。向こうは切羽詰まった状況見てえだしな」

金貨を忍ばせた次の日に寮を荒し回った事を見ても、密輸犯が逮捕された事を見ても、敵が時間を持て余した状態であるとは考えにくい。こちらにも気を引き締めねば。と思っていた矢先に、少し前を歩いていたセリアが何者かに軽く衝突されていた。「来たか」とイアン達が目を光らせるが、当の本人は緊張感など欠片も見せず、遠くからでも分かる程に頭を下げて謝罪している。

セリアにぶつかった者は男の様だが、こちらも同じ様に頭を下げて謝罪はしている。が、一向にセリアから離れる気配が無い。更にあるうことか、少し二人で会話したあと、セリアに並んで歩き出してしまった。これは間違いなく、敵さんであろう。

男にのこのこ付いて行くセリアは、その事に気付いていないのか、敢えてなのか。

頼むからその警戒心を微動も感じさせない後ろ姿を何とかしてくれ、と心中でどれだけ訴えても、先を歩く当人に聞こえる筈もなく。セリアは、薄暗い路地裏に男と一緒に入って行ってしまった。

イアンの心配通り、案の定セリアは男を疑う事など考えもせず、男の巧みな言葉に誘導されていた。

「悪いね。そこまで来てくれなんて」

「いえ。こんな事でお詫びが出来るならお易い御用です」

男と衝突したセリアは、道案内を頼まれ、呑気にそれを承諾した。以前来た事があるのだが、どうも記憶が曖昧なので不安だと言った男に、セリアはせめてものお詫びにと案内役を喜んで引き受けた。自分も漸くこの辺りに少し慣れて来たばかりだというのに。穏やかな口調に何の不審も抱かず、むしろ衝突した事を責めもしない彼に友好的な印象を抱いていた。

薄暗い路地裏に入り、少し歩いた頃に横を歩いていた男が立ち止まった。探していた場所が見つかったのかと思い、振り返ろうとし



たが自分の首に冷たい物が当たった事でセリアは動きを止める。何故か妙に近くに感じる男の気配と、首に当たる鈍く光る物。

「序でに、一緒に行ってもらおうか」

「……はい!？」

がしっ、と肩を掴まれ首筋にピリツとした痛みを感じた。急な状況についていけないセリアは、必死に今の状態を何とか理解しようとしている。恐らく、彼は金貨を狙っている密輸犯と関係があるだろう、とまではなんとなく予想できた。となれば、自分はこの状態から脱却しなければならぬ訳なのだが、どうしたものか。

セリアは必死に思考を廻らす、グルグルと空回りするばかりでまともな考えなど浮かぶ筈もない。

刃物を取り出したというのに微動だにしないセリアを不審に思ったのか、男は彼女を拘束する手に力を入れた。本人は頭が混乱して動けないだけなのだが。

「取り敢えず、来てもらおうよ」

「そいつは出来ねえな」

セリアの首に刃物を突き付けている腕をがっちり掴まれ、男は驚きで後ろを振り返った。その間に必死に考えを廻らせ、はっと思いついたセリアは思いつき男の足の甲を踏みつけた。以前、知り合いに教えられた技だ。危機的状況で相手に後ろから拘束された場合、狙える急所は足の甲だと。

自分の腕を掴んだ声に気を取られていた男は、思わぬ痛みにぐっと硬直する。その隙に男の腕から逃れたセリアは、男がその首筋にイアンの肘鉄を食らい、その場に蹲る光景を見た。イアンの容赦の無い肘鉄は、かなり痛そうである。

「セリア殿。大丈夫ですか」

「うん。全然平気」

イアンと共に駆けつけたザウルにセリアは無事な事を伝える。それでもザウルの心配そうな瞳は緩まない。

「ですが、血が」

言われて首筋に手を当てると、少しぬめりとした感触。自分でも気付いていなかったが、男の刃物につけられた傷からは血が少々流れていた。しかし、そんなに大した量では無いし、放っておけば治るだろう。

「でもこれぐらい、なんでもないよ」

「すみません…」

別にザウルが謝る程の事でもないように思うのだが。それを伝えようとした時イアンの声に中断させられた。

「お前等。話は後で良いだろう。こっち手伝えよ」

暴れる男をなんとか押さえ込んでいる状態のイアンが、少し苛立を含んだ声で睨んで来た。

なんなのだこの仕打ちは。男を押さえつけたのに自分は全く蚊帳の外。肝心のセリアはザウルと二人の世界に入りかけている。全くもって面白くない。

内心で不満を爆発させているイアンの声に、セリアは何かを感じ取った。

「さて、説明してもらおうか。何でこいつを狙った」

少し怒の含んだ声で凄むイアンに、こちらが怖じ気づいてしまう。声は自分へは向けてられないのに、まるで怒りは自分へ向けられているような気がする。

「放せよ！ただ、その女連れて来いって頼まれたんだ！」

先程までの穏やかな口調は消え大声で怒鳴りながら、彼は必死になってイアンの拘束を逃れようとしている。

「誰に？」

「知らねえよ！明日の朝までに連れてけば金やるって言われたただだ！」

この言葉に三人は顔を見合わせる。嘘を言っている様子はないので、本当に金で雇われたチンピラなのだろう。

明朝までにセリアを連れて行く、つまり明朝までに金貨が必要という事だ。だとすると、密輸取引は明日行われる可能性が高い。

「何処に連れて来いって？」

「……………」

男は急に黙り込んだ。失敗した上に居場所をバラしたとなれば、彼自身も危ういと思ったのだろう。

いつまでも口を開かない男にイアンが拘束する腕に更に力を込める。

「いでででっ…」

「さっさと吐け」

「う…裏町の先の池のある公園だよ！」

その後、男に場所以外にも幾つかの事を尋問している間、他の候補生達を呼ぶ為、セリアは急いで学園へ戻った。辺りはまだ若干明るさを保っているのですが、それほどの危険は無いだろう。それよりも男を押さえているイアンとザウルの方が心配である。それ程人氣が無い訳では無いので、いざとなれば大声を出せば人が来るだろうが。それに、相手は一人でザウルもイアンも普通の平均男性よりは強いだろう。ならば心配無用かとも思うが、もし男の仲間か何かが来た場合、確実に不利なのはイアン達であろう。等と考えながら足を急がせている内に学園へ着いた。予め待機する側が待つ事になっている温室を目指す。

「セリア。どうしたんだ」

焦ったセリアは勢い余ってそのまま温室の扉を蹴破るように入った。その姿を見て、何か一大事かと候補生達も緊張を高める。

セリアは急いで事の成り行きを話、すぐに行くと言った彼等を案内するべく再び走り出した。

「よっ！遅かったな」

駆けつけたセリア達を見るなり、イアンは手を挙げて軽く笑った。

押さえ込まれていた男はロープによってグルグルに縛り上げられている。何時の間にロープなど用意したのか。

男に吐かせた情報によると、密輸犯と思われる男達は、この先にある公園でセリアが連れて来られるのを待っているようだ。それを聞いて先程ザウルが十人程の男達を確認してきた所だ。

となると、やるべき事は決まってくる。警察への連絡はルネに任せることにし、残りの者は公園へと急いだ。縛られている男も同行させている。相変わらず抵抗を見せるが、カールの睨みが効を為したのか、派手な行動に出る様子はない。魔王様の射るような視線は、何にも増す恐ろしさを持っているな、とセリアは再度思い知らされた。

マントを深く被った男に連れられたセリアが公園に入ると、すぐに周りを囲まれた。ワラワラと集まって来る男達にセリアの頬も引き攣る。流石に体格の良い男が多く、いかにも悪人面をしているものばかりだ。

「手荒なマネして悪かったなお嬢さん」

リーダー格の男が一步前に進みでてきた。釣り目が目立つリーダー格の男はセリア自身が来た事が重要なのか、彼女を連れてきた男が顔を隠している事を気にしていない。彼からセリアを引きはがすと、少し距離を置いて立った。

「祭りの日、金貨が服のポケットに入ってたと思うんだけどよ。覚えはあるか？」

「……………」

セリアの無言を肯定と受け取ったのか、釣り眼の男は手を差し出す。

「それ、渡してくれねえか」

「無い」

「はっ？」

「密輸犯に渡す金貨は無い」

凜とした声が響いた瞬間に男達に動揺が走るのが分かった。まさか彼女の口から自分達の仕事の事が出るとは思っていなかったのだ。しかも、まだただの学生だ。

こうなってしまうえば、彼女が金貨を持ち続けている可能性は薄い。もう警察に届け出ているかもしれない。焦りで額に汗を浮かせたり、ダー格の男が、懷からナイフを取り出した。それに続くように、他の男達も一斉にナイフやら剣やらを取り出す。

「もう一度だけ言うぞ。金貨を渡せ」

釣り眼の男がナイフをセリアに向けそう言ったが、セリアは一向に動こうとしない。それを見た男は痺れを切らし、遂にナイフを突き出した。が、それはセリアに届く寸前で弾き帰された。見れば目の前の少女が何時の間に取り出したのか、真剣を片手に自分を睨みつけているのだ。次の瞬間、自分の後ろで押し殺した悲鳴が聞こえたと思ったら、その場で数名が倒れていく。何が起きているのか理解出来る前に、見た事のない少年達が真剣を振り回し、自分の部下達がなぎ倒されていた。

「お前、わざわざ挑発するような事言っでどうすんだよ」

「別に挑発したわけじゃ」

一人を殴り倒したイアンがセリアに近付いて言えば、セリアはバツが悪そうに答えた。すぐ傍ではザウルが見事に数名の鳩尾に突きをお見舞いし、ランとカールも剣で応戦している。

まさかの逆襲に動揺し混乱した密輸犯達は、ことのほかすぐに片付いた。元々ランやイアンの腕っぷしが常人よりも強いのだが。

ルネの通報を受け、彼に案内された警察が駆けつけた頃には、ほぼ全員が地面に倒れふした状態であった。それを見たルネがクスリと小さく笑ったのには、誰も気付いていない。

後日、公園で捕らえられた密輸犯から情報を引き出し、例の金貨と対になる物を持った運び屋達も逮捕された記事が新聞を飾った。その横には、不運にも密輸事件に巻き込まれた一人の女生徒を華麗にも救ったマリオス候補生達の活躍が華々しく記載されている。密輸犯逮捕に協力したマリオス候補生達が警察から感謝状を受け取っていることまで、本当に詳しくだ。しかし、記事は主にマリオス候補生の武勇伝を語るばかりで、巻き込まれた少女の名前も無ければ、彼女も協力したとは何処にも書かれていない。

手に持っていた新聞を置いた校長が、そのまま溜め息を吐いた。

「やれやれ。本来、門限を破るのは校則違反なのだが」

「あら、いいじゃない。折角大活躍だったんだし。大目に見て上げても」

クルーセルの言葉に、もとから咎める気の無い校長は深く頷き、また新聞に目を通す。その目は、学園の名声が上がる事を喜んでいくわけでも無ければ、生徒達の行動を不快に感じているという訳でも無い。ただ、優しく見守っているような瞳だ。

「芽が出た。と言えば良いのかな」

「あら、まだまだこれからじゃない。もっと大きくなるわよ」

静かな校長室に、クルーセルの至極愉快そうな笑い声が響いた。

### 祭り 3 (後書き)

ホントに危なっかしくて見てられねえ。

大体アイツは、いつも変な所で強気なのに、訳の分からねえ所で弱気だったり。

もう少し女らしく、弱々しい所でも見せれば可愛げもあるのにな。

普通の女だったら剣とか、喧嘩とか、怖がって近寄らねえのに。なんでアイツは自分から突っ込んでいくんだ。怖いもの知らずっていえばそれだけだが、アイツにだって怖い物の一つや二つくらいあるだろう。

アイツの苦手な物って何だ……？

## 苦手な物 1

セリアはいつもの温室で、淡々と作業を繰り返していた。もう何時間も作業を繰り返しているの、そろそろ腕も疲れてきている。

また一つ、作った物を横に山積みになった物の上に積み重ねて行く。

山になっているのは大量の花。といっても、本当の花ではなく、

正方形の紙を何枚か重ね、細く山折谷折を繰り返して、真ん中を紐で止め、1枚ずつ広げて作る手作りの花だ。一つ一つ手間がかかるこれを、セリアは脇目も振らずに延々と作り続けていた。

「セリア。少し休憩しよう」

ふわりと香ばしい香りを放つ紅茶をテーブルに置いたのはルネだ。セリアがここに通うようになってから、紅茶を用意する回数がぐっと増えたなと考えながら、セリアに休息を勧める。終わらない作業にうんざりしていたセリアはテーブルに突っ伏して「ありがとう」と呟いた。その声にも、いつもの活力は無い。

「学園祭の飾りつけも大変だね」

温室の外では学園祭の準備に勤しむ生徒達が慌ただしく動き回っている。本来、セリアも生徒達に交じって自分のクラスで用意する出し物の手伝いをしている筈なのだが。実際彼女はルネが入って来るまで一人で、淡々と花を作り続けていた。

セリアが一人で地味な作業をしているのは、別にサボっていた訳でも、楽をしているのでもない。きちんとした理由があるのである。

セリアのクラスは特にこれといって案も出なかった為、無難に茶店の様な物を出す事にした。といっても、名門校であるフローズ学園の学園祭である。よって出し物もそれなりにきちんとした物であり、茶店だからといって手を抜く事は一切ない。出す紅茶も茶菓子も周到に用意された物が使われ、飾り付けにも一工夫加えたりもする。そんな中、女子生徒はメニュー等内容の準備、男子生徒は力仕事を



任せられ、各々が仕事に取りかかった。

セリアも当然、食器を揃えたり茶菓子の材料を用意したりしていたのだが、持ち前の不器用さが災いし、何をやってもうまくいかなかった。それどころか、小麦粉を持たせればそれをぶちまけ、オロするものだから飾り付けようの機材を倒し、散々迷惑をかけてしまったのである。

その結果、割り当てられたのがこの花の製作で大量の紙と一緒にクラスを追い出されてしまった訳だ。この花も当日の飾りに必要な物であるのでこれも一応仕事ではあるが。

学園祭当日も、手伝いはいいと断られてしまった。つまり自分はその日、祭りを堪能出来る事になったのだが。心底申し訳ない気持ちで一杯である。

そんな理由で淡々と大量の花を作り続けているセリアを、相変わらずのニコニコ笑顔で見守るルネ。

「でも、半分位は終わったんじゃない」

山積みになった花に視線を移して聞いてみれば、セリアは小さく頷いた。終わった分だけでもクラスへ持って行ける頃だろう。飲み終えた紅茶のカップを置き、セリアは花を手を集め始めた。しかし、一人で運ぶのには少々無理がある数だ。何度か温室とクラスを往復する必要があるだろう。

「セリア、一人で大丈夫？」

明らかに大丈夫ではない量を抱えようとしているセリアをみて、ルネがつい声をかける。それに精一杯答えるセリアだが、もはや花に邪魔されて声にならっていない。流石に手伝おうとルネが動くうとするとその横をスッと通り抜ける人物がいた。

「お手伝いしますよ。セリア殿」

「あっ、ありがとう。ザウル」

急に現れたザウルは、セリアが抱えていた花の半分とまだ残っていた花の殆どを軽々と抱えた。思わぬ助っ人にセリアも一瞬戸惑うが、ここは有り難く言葉に甘える事にした。というより、彼は何時

の間に温室に来ていたのだ。

花を抱えた二人が温室を出て行くと、残されたルネはカップを片付け、自分も本来の仕事に戻る事にした。

あの密輸事件以来、ザウルのセリアに対する態度が少し変わった。セリアに対して、かなり友好的になったのだ。それに、セリアへの距離が明らかに近くなった。元々の親しみ易い性質に加え、セリアはおろかザウル本人でさえ気付いていない程なので、他の誰もその違いに気付いていないが。

ザウルの変化に唯一気付いた人物が、連れ立って歩く二人を偶然見つけ、そのまま暫く眺めていた。ザウルの変化に気付いてから、何故だか二人と一緒にいる時はつい視線で追ってしまうのだ。特に不満があるわけでも、嫌だと感じるわけでも無いが、何となく気になってしまう。

「イアン、どうした？」

遠くで自分を呼ぶ声に適当に返事を返すと、二人から視線を外し、その場を離れた。

「どうかね、クルーセル君。生徒達は頑張っているかね」

「一年に一度のイベントだもの。皆一生懸命よ」

相変わらず、校長室で面白そうに会話を繰り返す二人は窓の外からせつせと勤しむ生徒達を眺めている。いつてしまえば高見の見物だ。

「そうか。今年は何か特別なイベントがあるそうだな」

「ふふ。女子生徒達の強い希望でね。彼等にも協力してもらわなくちゃね」

「しかし、最近の女子生徒の考えは理解しにくい」

「あら。女の子はいつでも恋多き乙女なのよ」

何を企んでいるのか、二人は心底楽しそうである。しかし、その空気に割って入る者がいた。

「私は反対です。この名門校フローズ学園の催しにしては、いささか程度が低いように思います」

「あら、ハンスちゃん。そんな事言っていると、女子の怨みを買っちゃうわよ」

言われた言葉にハンスはうっと言葉を詰まらせる。実際、彼はその女子の怨みを何度か目の当たりにしているのだ。彼の堅い考えは、恋に燃える女生徒達には理解し難い物らしい。

「まあまあハンス君。こういうイベントもたまには良いではないか」  
元来お祭り好きな校長も、この催しには賛成のようだ。堅物なだけに校長が決めた事には口を出さないハンスだが、やはり何処か納得出来ていない様子である。

校長室でのやり取りがされている間も、学園祭の準備は着々と進んでいるのであった。

学園祭当日、校舎と敷地内は色とりどりに装飾され、大変な活気に溢れていた。生徒達は勿論、この日は興味をそそられた街からぞろぞろと人が押し寄せてくるので、毎年の学園祭は随分な盛況である。

今は、記念式典に出席するため、生徒達は大きな講堂に集まっていた。だが、ここにも明らかに部外者がチラホラと見える。

周りから送られる興味津々の視線を全く気にせず、校長は堂々と卓上に現れた。正に校長の威厳というのか。普段おちゃらけている様に見えても、こういう所ではしっかり校長の格というものを示していたりする。

そして、挨拶と説明等を終えた頃、校長が思い出したようにもう一つ、と加えた。

「生徒諸君。今年は少し面白い趣向を取り入れる事にした」

そう言いながら一枚の紙を取り出す。

「それぞれ幾つかのクラスの出し物に課題を用意させた。それをこなすと、紙に印が押される。全ての印をより早く集める、という物だ。これと同じ紙は校門の所で配るので、みな是非参加してくれ。

なお、上位十二名には、景品が与えられるものとする」

そういつて、今度こそ生徒達を解散させた校長にクルーセルが何やら耳打ちしていた。

講堂を出た生徒達の大半は、例の紙を手にするべく校門へ向かった。その中には勿論セリアの姿もある。根っからの負けず嫌いを燃やしながら、ちょっとワクワクした気分になっている。自分は今日、手伝いは断られているのだから、これに専念しても良いであろう。周りを見てみると、何故か女生徒達が妙に急いでいるように見えるのが気になるが。

校門で手渡された紙には、成る程、幾つかの枠が書いてある。ここに印を押すわけか。等と納得しながらセリアはもう一度来た道を引き返し、喧騒の中に突っ込んで行った。

学園祭の間にも、例の催しの話が広まったらしく、今や生徒だけに留まらず一般の客までが印を求めて上へ下へと回っていた。そして、ここでも何故か妙に急ぐ女性の姿が目立つ。

枠の空白が半分以上は埋まった紙を見ながら、セリアはちよつとした達成感に浸っていた。課題というのは思ったよりも簡単で、ゲームを用意したクラスならば単純にそれをクリアする事だったり、展示物を用意したクラスならばそれらの感想を述べたり、といった物ばかりだった。やはり、目的は生徒達に色々なクラスに赴いてもらう事らしい。しかし、上位十二名に与えられる景品というのが気になる。よし、と気合いをいれて次のクラスへ向かおうとすると唐突に肩を突つかれた。

「よっ。お嬢さん」

軽快な口調で自分を呼び止めた人物が自分にニツと笑うと自分も笑い返した。遠くで響く女性の黄色い声には、相変わらず慣れないが。

「これはこれは、マリオス候補生の方」

「印集め、進んでるみたいだな」

セリアの紙を覗き見ると、イアンは自分の物も見せてきた。セリアが見てみると、どうも自分が埋めた枠と大体同じ様な場所に印が押されている。

「どうだ、残りは一緒に回らねえか」

セリアは驚いた。正に今自分が考えていた事と同じだったからだ。

イアンの提案に二つ返事で頷いた。

しかし、彼が一人にいるとは珍しい。いつもなら他の候補生と行動を共にしているからだ。学園祭など当然彼等と一緒に回るものと思っていたのに。それでなくとも、彼が一人であれば、女子生徒のお誘いが必ずあるだろうに。

「ラン達は？」

「ああ。ランとルネはクラスの手伝い。ザウルは他のお嬢さんに誘われてダンス。カールは……あいつは学園祭なんてくだらないって、一人で読書中だ」

イアンも、当然の如くお誘いがあったのだが、何とか躲していた所であった。上手い断り方が思い浮かばなかったであろう、ザウルには気の毒だが。

やはり、女生徒達の猛攻ともいえる熱烈なアピールは休む事を知らないらしい。

イアンの説明に納得している間にも、二人は一緒に次々と課題をこなしていった。その間にも、のほほんとしたセリアは、あちこちをふらりとし、物珍しげに殆どのクラスを覗いていく。楽しそうなのは良いのだが、どうも迷子になりそうだな、とイアンは思った。

学園の中なのだからそれは絶対に有り得ないのだが、そんな当たり前の事を忘れ去れる程、セリアはフラフラと不規則な動きを繰り返している。押し寄せる人波にのまれそうになるセリアを見ては、自身がそれを掻き分けて近くへ行くわけだが。

なんとなく、ザウルが放っておかないのも分からないでもない。というより、真面目な彼のことだ、どうしても気になってしまうのだろう。かく言う自分も、どうしても目が離せないのだから。

それにしても、セリアは見れば見る程掴めない少女である。始めて見た時は、キリリとして自分の友人達の間にも勇ましくも割って入った。その時は正に凛々しいとか勇ましい等の言葉が似合う姿であったにも関わらず、今はこうしてまるで子供の様に学園の行事を楽

しんでいる。

その事を言っても、彼女はまたきょとした顔で、「そう？」と平気で聞くのであろう。

そもそも、こいつの存在がどれだけ自分達にとって斬新かを、こいつは少しも理解していないだろう。だからザウルが必要以上に彼女に構っているのにも気付かないのだ。実際、そこまで構っている訳ではなく、イアンを目にそう映っているだけなのだが。

鈍感なのは構わないが、少しは自覚を持って欲しい。こちらはこれほどまでに内を掻き乱されているのだから。そう考えると少々苛々してくる。

……とそこまで考えイアンは我に返った。何故自分が苛立つ必要がある？と自問してみるが行き着いた答えに愕然とした。

いやいや、何かの間違いだろう。そうだ。これは、ザウルのセリアへの接し方が焦れたいので苛々してただけだ。そうに違いはない。と無理やり結論づける。つい先程、必要以上に構っているといっていたのに。

一人で、唸ったり頭を抱えたりを繰り返すイアンに全く気付く事なく、セリアは目の前の課題に集中していた。

「残りも少なくなってきたな。次はここか」

そう言ってイアンが立ち止まったのは、大きく『ホラーハウス』と描かれた看板の前。課題は一目瞭然。恐らくこのホラーハウスの出口に印が設置されているだろう。といっても、流石フロース学園の出し物。手抜きは一切入っていない。外のデザインにもかなりこだわが見れるので、中もそれなりの物が期待できそうだ。

早速入ろう、と隣にいる少女に声をかけたが、返事が無い。「どうした？」と肩を軽く叩いてみるが、全く無反応。どうしたのだから

うかと思ひ顔を覗き込めば、血の氣が引いて青くなっている顔が現れた。

「もしかして、こういうの……」

「……苦手……です」

.....

まさかここに来てこのような関門が待ち受けていたとは。どうしたものか、とセリアは頭を悩ませた。昔から、幽霊やお化け等の類いが全く駄目だったのだ。これは、苦手とか嫌いとかいう次元を超えて、生理的に受け付けないのである。

しかし、ここで引き下がるのも出来ればしたくない。梓はもうすぐ埋まるのだ。一度始めたのだから、達成したいではないか。と、余計な意地で引くに引けず、セリアはギリギリとホラーハウスの扉に手をかけた。

数分後、ホラーハウスの中から奇妙な悲鳴が響く事になる。

「ぎよええええええええええ」

セリアは薄暗い部屋を一生懸命早足で突き進む。その後を追うイアンもどうしたものかと参っていた。ここで「キャー」とか言つて自分に抱きつきでもすれば可愛い物を。なんとも奇妙な悲鳴を挙げながら蹲ったり走り回ったりでどうしようもない。

時折、前を見ずに走るからか、壁に勢いよく激突している。駆け寄ろうとするが、誰かが近付く気配すらも恐ろしいのか、その度にまた悲鳴を挙げられるので下手に近づけない。

驚かすのが仕事なのだろう色々な物に扮した生徒達も助けようとするが、メイクされた顔を近づければ再び逃げられるのだ。しかも、わけも分からず動き回るので、全く出口に辿り着く気配が無い。ここまで苦手なのなら、何故来たのだ。たかだか学園祭の催し程度で。



と知っている内にも、数メートル前でセリアが激しく転んだ。もう見てられん、といった風にイアンは走り寄り蹲るセリアの背中とひざ裏に腕を回し軽々と抱き上げた。

「ぎゃああああああ」

「俺だ。大丈夫だから暫く目と耳塞いでろ」

セリアをお姫様抱っこした状態のイアンは足早に出口に向かう。その途中でも、係の生徒達が心配気な視線を送って来る。

出口の扉を蹴り開ける勢いで出たイアンは早速好奇の視線に晒されてしまった。ホラーハウスの中から奇妙な悲鳴が聞こえた時点で興味をそられた者達がジロジロとその出口を興味深げに見張っていたのだ。そこから出てきたのが、震える少女を抱いたマリオス候補生ともなれば、一気に注目を浴びるのは当然である。

その視線にも苛立ったが今はセリアを落ち着かせるのが先と腕の中の少女にイアンは視線を移した。

明るい場所に出て幾らか落ち着きを取り戻し、無事ホラーハウスを抜けた事に安堵感を覚えたセリアは大きな溜め息を一つはあつと吐いた。しかし、気分は一気に急降下でかなり辛い。極度の緊張感からか吐き気がする。

「お前、もう今日は寮に帰った方が良いぞ」

イアンの言葉に思わずばつと顔を上げる。冗談ではない。なんの為にこんな思いまでしてここに入っただ。全ては印を集める為ではないか。こんな所で諦めるなど、したくはない。

洩るセリアを見たイアンが、止めの一言を発する。

「でも、似たようなのがあと二つはあるぞ」

その言葉に紙を見ると、確かに、同じように恐怖を煽るようなものが無情にも二つ残っている。

「……無理」

先程までの威勢や決意は何処へ行ったのか、セリアは諦める事にした。しかも、ホラーと聞き先程の情景が思い起こされ、吐き気が

ぶり返してくる。流石に気分も悪いので、ここは やはりイアンの言う通り、寮へ戻って休む事にした。

余程悔しかったのか、紙を未だ握りしめながらトボトボと寮に入って行くセリアを見送って、イアンは急に笑いがこみ上げてきた。後先考えず、学園祭如きにあれほどもキになるなど、まるで子供である。

そして恐らく、彼女の苦手な物を知っているのは自分だけであろう。こんな事が起きない限り、知り得ない彼女の一面だ。そう思ったら、何故だか無性に嬉しくて笑ってしまう。

遠くの方から聞こえる、毎年の学園祭での恒例行事を知らせる鐘が聞こえたので、イアンも来た道を引き返した。

「今日はフロース学園の学園祭に参加してくれた事を感謝する。みなのお陰で今年も成功を治めることが出来た。これより、最後の趣向であるダンスを始める」

毎年学園祭の最後には、中庭に設置された広い舞台の上でのダンスが行われる。といっても、やはり貴族の生徒達が通う学園、ダンス一つでも十分華麗だ。

「その前に、ここで今日の印集めの勝者を発表する」

校長がそういつて一枚の紙を取り出すと、十二人の名前を読み上げた。名前を呼ばれた者は校長がたっている舞台の上に乗るのだが、何故だか全員女生徒であった。その全員が達成感に浸っている顔をしている。

「なお、景品はこれから行われるファーストダンスへ加わる権限とする」

瞬間、ザワツと観衆がざわめき始めた。毎年、学園祭で最初の曲を踊るのは、マリオス候補生と決まっており、それをファーストダンスと呼ぶ。つまり、ファーストダンスに加わるという事は、必然的に一曲でもマリオス候補生のダンスのパートナーとなる事を意味する。

舞台の上にいる校長を眺めながら、クルーセルはクスクスと笑っていた。女生徒達による強い希望で、なにかしら催しを決め、その上位の者にファーストダンスを踊る権限を与える事になったのだ。初めから景品狙いの殆どの女生徒は、それはもう凄い早さで課題をクリアしていった。なので、上位十二名はあつという間に決まった。自分の横で渋い顔をして眉間に皺を寄せている同僚にも、つい笑みが漏れてしまう。それでジロリと睨まれても気にしない。

いつになっても、恋に燃える女生徒とは恐ろしいものである。

舞台の上にいる者を確認して、少し複雑な顔をしたザウルをイアンは目敏く見つけた。これは完全にセリアが居ない事にがっかりしたのだろう。その後も周りをキョロキョロとするザウルに、セリアは寮に帰ったと教えてやると、一瞬落胆した顔を見せた後、「そうですか」と答えた。やはり彼の気持ちは分かりやすい。先日聞いた時には分からないと言っていたが、もう答えは出ていると見て良い

だろう。しかし、それを知っても応援する気になれないのは何故だ。

それぞれ複雑な想いを抱えたまま、学園祭は終わりを迎える。その間も、寮の自室でウンウン唸っているセリアの姿があった。

## 苦手な物 1 (後書き)

嫌だ！絶対に嫌だ！学園祭が終わったばかりなのに、なんであんな祭りを祝わなきゃいけないのよ！というより、意味の無い祭りだ。絶対に。

参加なんか絶対したくない。なんでこの学校はこんなに行事が多いんだ。でも逃げる事も出来ない。

ああ、もう！そもそも、なんであんな物がこの世に存在するんだ。子供っぽいといわれても、嫌いなんだから仕方ない。

絶対に嫌だ！！

## 苦手な物 2

「セリアは何の仮装にするの？」

憂鬱な気分で温室のテーブルに頬杖をつくセリアにルネが陽気に問いかけた。しかし、セリアはその問いかけに答えようとはしない。正確には、答えたくないのだ。あんな忌まわしい祭りの事など考えたくもない。

つい先日、学園祭が終わったばかりだというのに、学園内は次の催しの準備で慌ただしく動いている。

その催しとは、人々が魔の物に扮し、夜の街を闊歩するという行事。恐怖祭。毎年この時期になると、クルダスで行われる祭事の一つだ。

昔から、この時期にはよく魔が往来すると言われ、取り憑かれないうちに、自分達も魔に扮しそれらをやり過ごそうとしたことから始まった行事である。

今となっては、仮装を楽しむにする者達の楽しみの一つになっているが。他国でも同じ祭事を祝う習慣があるらしいが、セリアはそれを見た事はない。というより、見たくもない。

本当にお祭り騒ぎの好きな学校だ、と半ば八つ当たりに近い事を思っても、恐怖祭の夜に行われる学園の仮装パーティーが全生徒参加必須なのは変わらない。

毎年この時期には、よっぱどの事がないかぎり部屋に籠って一歩も出ようとせず、恐怖祭を祝う行事からなんとか逃れ続けたセリアだが、今年はそうもいかなかった。それもこれも、全部あの校長の所為だ。

そんな事を考えているセリアの目の前に、突然オレンジ色のニタリとした笑い顔が現れた。

「ヒッ!？」

「二人共、いらっしやい。可愛いね、それ」

飛び出しそうな悲鳴をなんとか押し殺したが、背中にツツと冷や汗が流れるのを感じる。心臓が早鐘を打つのを自覚しながら、セリアは目の前に置かれた、化け物首を模した置物を睨みつけた。カボチャをくり抜いて作ったこの置物は、海外ではジャック・オ・ランタン、と呼ばれているらしいが、そんな事は知った事ではない。

目を逸らさず今までに無い程凝視するが、こちらが必死に睨みつけても、ただの置物は何の反応も返さない。

可愛いだと? これの何処を見ればそんな表現が思い浮かぶのだ。一年のある時期になるとあちこちに現れ、今にも大声を上げて笑い出しそうなこれの。可愛いではなく、気味が悪いだろう普通は。

そんな事をぐるぐると考えるセリアを、まるで嘲笑うかの様にカボチャは笑顔を崩さず、こちらを向いている。

「大きさも手頃だし、温室に置くのに丁度良いと思ったのだが」

それを聞いてセリアは一瞬にして青ざめた。

という事は、これがここに居座るということか!? 張り裂けそうな程口を開け、ニタニタと嫌な笑みを浮かべるこれが。ただのカボチャに段々と敵意すら向けだしたセリアを、それに唯一気づいたイアンは苦笑しながら見つめていた。

恐怖祭当日、学園内はそれはもう見事に飾り付けられていた。一体、どれだけ飾り付ければ気が済むのだ、と他人が見れば思うだろう程、あちらこちらに恐怖祭をイメージした物が取り付けられている。

幽霊や蜘蛛の巣に似せたシートや綿があらゆる箇所に着るされ、一般生徒ですら顔を引きつらせるのだから、セリアにとっては地獄

も良い所だ。風が吹く度にそれらはユラユラと揺れ、不気味さを更に強調させている。今にもこちらに飛んできそうな勢いのそれらの間を、セリアは毎日必死の思いでかいくぐりながらここ何日かを過ごしてきたのだ。それを心配するアインの心労も想像に難しくない。授業が終わると同時に生徒達は今夜のパーティーの準備に取り組むかる。

恐怖祭といえば仮装だ。一般的には悪というイメージの強い、人ならざるもの達に扮した生徒達がパーティー会場へ向かう姿が目立った。

そんな中、非常に疲れた顔をした少女が一人、遅い歩調でトボトボと歩いている。

まるでこの世の終わりだ、とでも言わんばかりに顔を俯かせている少女の横でイアンはどうしたものかとその縮こまった姿を見下ろしていた。その顔も何処か楽しんでいるようにも見えのだが。

彼女は恐らく参加を必死に拒むだろう、と予想して女子寮の前で待っていれば案の定、時間ギリギリでゆっくりと顔を出したセリアに遭遇した。なんとも分かりやすい行動だ。

自分を見るなり寮内に引っ込もうとしたセリアを、半ば無理矢理な形で引きずり出した。女子寮の前で待ち構えていて、文句の一つも言われない男子生徒など彼等マリオス候補生くらいだろう。

今のセリアの格好は、黒い帽子と同色の上下。一見してカラスにも見える服装を、彼女は魔女と言っているが、明らかにやる気の欠片も見受けられない。

イアンはというと、ラフな服に頭にバンダナを巻いた、盗賊の仮装だ。これも、悪というイメージは強くても、人ならざるものではない。セリアの近くに居るならばこの方が良いだろうと判断した上でこれに決めた。

いや。これはただ、彼女が心配なだけであって、別に他意は無い。と言いつつ見えた言葉が頭の中で木霊する。



そんな事を考えている内にパーティー会場へ着いた。どうやら本当に自分達は最後の客らしく、周りに他の生徒は誰一人として居ない。

目の前には、他の何処よりも派手に彩られたパーティー会場が聳える。まるで先日のホラーハウスを連想させる勢いで、ここの飾り付けには生徒も力を入れているのが見て取れる。

大きな木製の扉を前にし、セリアは覚悟を決めた様にグッと取っ手を握った。セリアが力を込めると重苦しい音を立てながら扉が開き始める。そして次の瞬間、中から骸骨が現れた。

「ようこそ」

正確には骸骨の面を被った生徒だったのだが、今のセリアにはそれを判断する余裕は無く、悲鳴を上げる暇も無くその場に崩れ落ちた。それを見たイアンが咄嗟に駆け寄る。

実際に倒れるとは思いついていなかったのだろう。ただ会場に来た生徒を出迎えるだけの役目だった生徒も青い顔をしてイアンの肩越しにセリアを覗き見ていた。

いきなり現れた骸骨に、気絶する一歩手前まで驚いたセリアだが、なんとか自分を奮い立たせて立ち上がりとした。が、その直後、イアンの肩越しに再び骸骨を見て、今度こそ泡を吹いた。それはもう気の毒になる程顔を真っ青にして。

セリアの反応を見たイアンは、「悪い」と詫びながらも、生徒の骸骨の面を乱暴に剥ぎ取ってしまった。彼も仕事なのだろうとは理解できても、今はそんな事考えている場合ではなく、セリアをどうにかする方が先である。

役割をこなしていただけなのに、女生徒には倒れられ、しかも全生徒の憧れであるマリオス候補生に責められたように感じた生徒も、いっそのこと倒れてしまいたい思いだった。

「セリア。遅かったね」

「顔色が優れないようですが、大丈夫ですか」

心配してくれているのに失礼だとは思いますが、セリアはどうしても彼等の顔を見る事が出来ないでいた。

薄暗い照明に照らされた会場内では、世に言うおぞましい者達で溢れかえっている。なにしろ薄暗い為、どんなに簡素なメイクでも本物に見えてしまうのだから質が悪い。

そして、中で自分を待っていてくれた候補生達もしっかりと仮装していた。

ザウルは顔を包帯で覆っているのでミイラ男を装っているのだろう。そこまでぐるぐる巻きにするには相当時間が掛かっただろうに。赤い髪がさらりと流れる様子や、落ち着いた雰囲気は変わらないのに、包帯の隙間から覗く琥珀色の瞳がギョロリと動いている様に見えるてしまう。

ルネは頭から角を生やし悪魔の服装をしているが、その微笑みは天使に見える。悪魔の姿をして天使を連想させられるのは、この学園内でもルネくらいだろう。しかし、照明の所為かその笑顔にも何処か陰が差している様にも見える。

こればかりは克服出来ない、セリアは申し訳ない気持ちで一杯になりながらも、やはり彼等の顔は見れない。イアンは盗賊だし、ランは黒いマスクとマントで覆われた怪盗、という人ならざるものではない為、どうしてもこの二人の後ろに隠れる形になってしまう。

「何を怯えている」

一層低い声が響くと同時に、後ろに大きな影が現れた。飛び上がらん勢いでセリアが後ろを振り向くと、予想通りカールがこちらを見下ろしている。黒の燕尾服にマントを羽織っている様は吸血鬼を扮しているのだろうか。普段が魔王なのだから仮装などいらぬのでは、と思ったが口には出さないのでおく。

「人間が創った虚像に恐れるなど、時間の無駄だ」

「うっ」

核心を突くカールの言葉に何も言い返せない。

「もしかしてセリア。こういうの……」

「苦手、です」

きっぱり言い切ったが、それもカールに鼻で笑われてしまった。

「下らんな」

「仰る通り、です……」

そんな会話をしていると、会場の前の方が騒がしくなった。セリアもつられてそちらに目を向けるが、人の頭が邪魔をして、何が起っているのか確認が出来ない。候補生達は、その長身を活かして全てを把握している様だが。

「諸君。今宵はおぞましい宴によく集まってくれた」

普段より少し声を低くしてそう言ったのは、もしかしくなくても校長だろう。どうやら彼も、この催しを十分楽しんでいるようだ。それにしても、おぞましいとは、少し言い過ぎではないだろうか。というより、わざわざそんな言い方をしなくても良いじゃないか。

「存分に楽しんでくれる事を祈る。尚、宴の最中は何が起こるか分からないのでそのつもりで」

そんな。あのお祭り騒ぎ好きな校長の事だ。何かが起こると言っている様なものではないか。

血の気が引いていくのを感じているセリアに、ザウルがそっと近付いてきた。

「セリア殿。もう少しすると明かりが消えますので、そしたら心の準備をして下さい」

ザウルがそっと耳打ちをする様に言うのを聞いてセリアは内心悲鳴を上げた。明かりが消えるとはなんだ？心の準備とは？一体何が起きるというのだ。

セリアが焦りまくっていると、ザウルの言った通り、不意に明かりが落とされた。真っ暗になったパーティー会場では、一寸先すら

も見えない。内心ビビりまくっているセリアだが、折角ザウルに警告して貰ったので、それに従う。心の準備とは良く分からないが、取り敢えず落ち着こうと深く息を吐いた。そして再び息を吸った瞬間、明かりが点いた。終わった、と安心したセリアが息を吐き出そうとした瞬間……

「ガーーー」

「ギッ、ギイエエエエエエ！！」

目の前にゾンビが現れ、まるでこちらに襲いかかるように両の手を広げたので、セリアは吐く息を悲鳴に変えてしまった。

あまりに虚を突いた事態に、腰が抜けてその場にへたり込む。これでは先ほどの入り口で起こった事とそう変わりがない。セリアが床でビクビクと震えていると、慌てたようにゾンビの面が剥がれ、その下から驚いた顔のクルーセルが覗いた。

「えっ？セ、セリアちゃん！？」

「ク、クルーセル：先生？」

思いもよらない教師の登場にセリアは目を見開く。周りを見れば、候補生全員が、非常にバツの悪そうな顔を向けてきた。一体、何がどうなっているのだ、と説明を望む視線を送っていると、イアンがポツリと呟いた。

「だから……これが校長の言ってたやつなんだ」

「はっ？」

「毎年、明かりを落として教師が生徒を脅かすんだ」

「なっ！」

なんて趣向を用いるんだ、この学園は。生徒をショック死させる気か。等とセリアが呆然としてしていると、本当に心配した風なクルーセルが目線を合わせて覗き込んできた。

「ごめんねセリアちゃん。そんなに驚くとは思わなくて」

「いえ。ごめんなさい。大きな声を上げてしまっ」

心底申し訳ない、と言った感じのクルーセルに、こちらこそ申し訳ない気持ちになる。彼も仕事でやったことだろうに、自分が迷惑

をかけたようなものだ。

周りではセリアの悲鳴に反応したのだろう女生徒がつられて声を上げている。それ以外は、セリアの桁違いに大きな悲鳴を怪訝に想ったのだろう生徒達の視線が集まり始めた。本当に、勘弁してほしい。

「申し訳ありません。自分がもつときちんと説明しておくべきでした」

「あと何回か同じのがあるけど、大丈夫か？」

イアンの無情な一言にサアツと青くなるセリアだが、二度も同じ場所に来ることは無いだろう。ならば耐えられるかも、とこの時は甘く考えていた。

普段から輝きを放つ美貌を持った候補生達は暗闇でも光っているような錯覚すら覚えさせた。つまり、どんな状況でも彼等は目立つのだ。

そうになると、脅かす役の教師達も自然と彼等が目に入る。暗闇の中を歩き回る彼等は、まるで吸い寄せられている様に、そちらに足が向いていた。明かりが再び点いた時、仮装した教師達の近くに居る生徒が標的になる。

その被害を被るのは当然、候補生達の傍に居るセリアであって、会場内ではその後も奇妙な悲鳴が何度も響いていた。

今日は非常に、とても疲れた。と、フラフラになりながらなんと

か寮の自室に戻ったセリアは、直ぐにベッドへ倒れ込んだ。

何もする気が起きず、そのまま寝てしまおうと目を閉じたが、どうも落ち着かない。部屋は今真っ暗な状態なのだが、なんだか良からぬ物が飛び出して来そうで、はつきり言って怖い。かといって、明かりが点けば目が覚めてしまう。

ランプを点けたり消したり繰り返すセリアに唐突に窓を軽く叩く音が届いた。こんな時間に外から音が聞こえてくれば、セリアでなくとも驚くだろう。ビクツと肩を揺らして振り返った先で見た物に目を見開く。慌てて窓を開け放つと外に居た人物が「よっ」と軽い声を発した。

「イアン！何してるの！？」

「シーツ。静かにしろって。序でに明かりも消してくれ」

見つかったまう、と告げるイアンに従いセリアは大急ぎで明かりを消した。夜間に女子寮を男子生徒が尋ねるなど、校則破りも良いところだ。いくらマリオス候補生といえど、言い逃れは出来ないだろう。

にも関わらず、セリアの自室の前まで上手い具合に伸びた枝に悠々と腰掛けるイアンは、そんなこと気にしないといった顔だ。

「どうしたの？何かあった？」

「いや。お前が今頃怖がってるんじゃないかと思ってな」

「うっ」

正にその通りだったのだから、何も言い返せない。認めるのは何だか悔しいが、仕方なく頷いておく。

トボトボと女子寮へ消えたセリアを見送った後、一度は男子寮へ戻った。しかし、どうしても気になり、自然と足が向いてしまった先では、案の定目当ての部屋から明かりが点いたり消えたりが繰り返されていた。木を伝って覗いた先では、落ち着きのない少女がウロウロと歩き回るので、つい笑ってしまった程だ。扉を小さく叩けば、面白い程ビクリとしたので、ここへ来た自分の判断を褒めてや

りたい。一人であれば、きつと何時までも同じ状態だっただろう。

「俺が来たんだから安心しろ」

「う：ん」

なんの根拠もない励まし方だが、やはり人が居てくれると心強いのかセリアは安心した様子で小さく頷いた。

それに苦笑しながらも頭を優しく撫でてやると、子供扱いしていると思われたのか、少し睨まれた。こういう威勢の良い所は嫌いでない。むしろ「好きだ」。

いや、威勢の良さだけではない。正直に言ってしまうえば、彼女の全てが「好き」だった。安っぽい台詞が出るものだと思っただが、他に表現の仕様がな。一体、何処でこうなってしまったのか。セリアは自分の好みである、か弱い守られる少女とは似ても似つかないタイプだというのに。思えば、初めて彼女を目にした時から気になっていた気がする。最初は、興味で終わらせる積もりだったのに。

しかし、何処かで納得している自分もいる。それだけ彼女は自分達には刺激的な存在だったのだ。凛々しく剣を構えたと思えば、幽霊如きに本気で怯える。何処か掴みどころが無くて、安全な場所から直ぐに抜け出して危険に飛び込んで行ってしまうようで、目が離せない。それでなくとも、見張っていなければ何処か危なっかしいのに。

「取り敢えず落ち着け。それで今日はもう休め。なっ」

「うん。イアン、ありがとう」

心配してわざわざ来てくれたのだろう。なんだかまたしても申し訳ない気持ちが入み上げてきたセリアは、少し納得いかない所はあるものの、お礼はしておいた。彼が来てくれて幾らか落ち着きを取り戻せたのも事実だ。

セリアの様子に満足したのかイアンは一つ大きく頷くと頭から手を離れた。長居して見つかるような事態は彼も避けたいらしい。

もう一言二言交わすと、イアンは来た時と同じように木を伝い、

鮮やかに地面に着地した。上を見上げれば窓から顔を覗かせたセリアが見下ろしてくる。それが初めて言葉を交わした時の事を思い起こさせ、ドキリとした。それを悟られないように、ヒラヒラと手を振り、その場を離れる。まあ、心配せずともセリアが気付くとは思わないが。

少し離れた所から後ろを振り返れば、今度こそ明かりが消えたセリアの部屋が見える。どうやら、少女はきちんと眠れたようだ。もう明かりが点かないのを確認すると、イアンは自分の居るべき場所へ戻るべく足早にその場を去った。

「セリア、大丈夫かな？」

男子寮に設けられた談話室。ここでは、マリオス候補生達が肩を並べていた。今話題に上がっているのは当然、今日のセリアの事。いつもは危機感も警戒心も見せない彼女が、まさかあそこまで怯えを露にするとは思わなかったのだ。

そんな会話が成されている談話室に、今まで不在だったイアンが入ってきた。

「イアン。何処へ行っていた？」

「ちよつとな。野暮用さ」

イアンの答えに特に追求するでもない候補生達は、彼にも席を作る。そこにイアンが腰をおろすと、再び会話が再会された。

「でも、セリアにも苦手な物ってあったんだね」

「フン。もう少し女らしい声量にすれば良いものを」

カールがこう言うのも無理は無い。お世辞にも年頃の娘が出すような可愛らしい悲鳴ではなく、何処か奇妙な悲鳴がずっと響いていたのだから。セリアの声に釣られて続くように他の女生徒達が悲鳴を上げたが、こちらはきちんと可愛気のある物だった。音量もそれ



なりに押さえられていて、正に育ちの良い娘が上げる声に相応しい。それがセリアの声には全く見受けられなかった。

「でも、傍に居たって事は、カールもセリアが心配だったんだよね」  
にっこりと笑うルネの言葉にカールは顔を逸らした。

確かに本当に煩わしいと思い、それが関心が無い者ならば、相手が泣こうが喚こうが彼は放って場所を移動したであろう。しかし、彼はそれをしなかった。それは、カールも一応セリアを気にかけていたからに他ならない。彼を知るものならば良く分かるだろう。

ルネに言われてバツが悪くなったのか、カールはそのまま談話室を出て行ってしまった。それに続くように他の候補生達も次々と退室しようとする。

「ザウル。少し良いか？」

ザウルも同じく退室しようと立ち上がったが、思わぬ人物に呼び止められた。彼が自分に何用だろう、と疑問に思いながら振り返ると、意外にも真剣な瞳が向けられていたので驚く。

他の候補生達が居なくなるのを待ち、それから改めてイアンと向き合った。

ゆっくりと開かれた口から、次に出てくる言葉に身構える。

「前に俺が、セリアとの事頑張ってたと言ったの覚えてるか？」

ザウルは、いきなり何の話かと思ったが、そういえばそんな事もあったなと思い直しゆっくりと頷く。

イアンはザウルが頷くのを見て少しホッとした。

以前、セリアに惚れたのかと冗談まじりに聞いた時、彼は分からないと答えた。その時、適当にだが自分は頑張れと言ったのだ。覚えていてくれたのなら有り難い。わざわざ説明しなくて済む。

「悪いがあれば取り消す。やっぱり応援は出来ねえ」

「……………そうですか」

イアンの言わんとしている事を察したしたザウルは、静かにだがそう答えた。

成る程。やはりこうなってしまったか。決して予想していなかった訳ではない。別にこれを望んでいた訳でもないが。だが、それ程彼女は自分達を惹き付ける。だからこうなっても、なんら不思議はないのだ。

しかし、だからといって、そう易々と譲ってやる積もりは毛頭ない。

「なら、こちらもその積もりでいます」

「ああ。そうしてくれ」

自分だけが向こうの気持ちを分かっているのに、向こうがこちらの事を知らないのはフェアではない。ザウルがそれを気にするかは分からないが、自分が納得いかないのだ。セリアの事に関しては、卑怯とかそういう言葉になる事は出来ればしたくはなかった。

お互い、微動だにしない所が、まるで譲る気も負ける気も無いと意思表示しているようである。そうしてお互いしばらく睨み合っていたが、どちらからともなく笑い出した。

「不思議ですね。貴方とこの様な関係になるとは」

「まあ。考えた事もなかったからな」

それはそうだろう。国を想ってこの学園に入学した彼等にとって、自分が恋をするなど考えもしなかった事なのだから。

二人がそんな話をしている間も、当の本人であるセリアは、やはり明かりは点けようかな、とランプに手を伸ばしている所であった。

## 苦手な物 2（後書き）

セリア、いつも僕達と一緒に居てくれるのは嬉しいんだけど、大丈夫かな？

だって、セリアも一応、女の子なんだし。やっぱり女の子の友達も居た方が良いんじゃないかな。セリアからはそんな話聞いた事ないけど。

でも、僕達と一緒にだといつも国の議論とかになっちゃうし。勿論、僕達はセリアが居てくれた方が良いんだけど。

セリアみたいな子初めてだから、どう思ってるのか分からないな。

セリアにも、女の子の友達が出来ると良いんだけど。

## 焦燥 1

稽古場は、剣術や馬術など、己の技術を磨こうとする生徒達が集う場所である。

今この時も……

「そこまで！」

キーンと響いた音とイアンの声で、今まで剣先で追っていた相手から視線を外す。遠くに飛ばされた自分の剣を確認すると、ランは小さく降参の意を表した。それにセリアもホッと息を吐くと、張り詰めていた緊張の糸を解く。

「これでセリアはランに5勝4敗だね」

ルネが今週の二人の戦績を確認する。何処かワクワクしている風に話すのは、ここの所毎日の様に続く手合わせが接戦している所為だろうか。

ルネの声にランが飛ばされた剣を拾い上げながら頷いた。

「うん。いつもだが、君の剣の腕は本当に見事だ」

「相変わらず、奔放な振る舞いだな」

冷たい声が響きセリアがそちらを振り返った先では、しなやかな白銀の髪を揺らしたカールが、練習用に刃の潰れた剣を握りながら立っていた。

彼の言葉にセリアはピクリと眉を潜める。

「カール。それ、どういう意味」

「どうしても解釈すれば良からう」

悪く取れば女らしく無い、と言っている様にも取れる言葉にセリアは頬を膨らませた。というより、間違いなくそういう意味を込めているのだろう。セリアの様子を見ても、カールは変わらず涼しげな顔を崩さない。

「まあまあ。カールもセリアと手合わせするよね」

「元よりその積もりで呼んだのであろう」

授業が終わり、全員で稽古場へと向かう際に、カールも一緒にと誘ったのだ。最初は断ったカールもルネに押されて渋々ながら後から行く、と約束させられていた。天使の笑みを浮かべるルネが、あのカールをなんと行って説得したのかは謎であるが。

折角カールが到着しただから早速一戦願おう、とセリアが剣を構えようとする、鼻で笑われ、呆れたような視線を向けられた。

「貴様は自分の体力を考えろ。ランスロットと交えたばかりの、弱った相手を捻り潰したとて面白みに欠ける」

「まあそうだな。セリアは取り敢えず休んでろよ。カールはその間俺とどうだ？」

そう言ったイアンに背中を押されてセリアはグツと言葉に詰まった。

確かに、彼等と比べてしまえば自分の体力など高が知れているだろう。勿論、ランと同等の実力を持つカールと今剣を交えたとしても結果など分かりきっている。実際、息も上がっているのだ。

それをカールが察して、遠回しにだが休む様に進めてくれたのも分かる。だが、何故いちいち神経を逆撫でする様な言い方しか出来ないのだろうか。

釈然としないセリアがイアン達に目を向けると、本気とする積もりは無いのか、どちらもある程度力を抜いた状態で剣を交えていた。その姿も、光輝いていて、ここに女生徒がいたなら、明らかに黄色い悲鳴が聞こえてきそうだ。

「セリア。お疲れ様」

こういう労りの言葉をくれるのはいつでも天使の様な微笑みと心を持ったルネだ。セリアが近づくと、今まで座っていたベンチの端へ座り直し、横を進めてくれた。その横に、ストーンと腰を落ち着ける。

「カールには勝てそう？」

「分からない。でも、絶対に負けたくない」

負けたくない、と語るセリアの目には炎が燃えている。根からの負けず嫌いと、先ほどのカールの『捻り潰す』という一言がセリアの闘争心を煽ったようだ。その為にも今は体力の回復に専念する。

今までカールとは二回程手合わせしたが、一勝一敗。少しでも彼の弱点を探ろうと、ギラギラと燃える瞳で、カールの動きを判別しようとしたが、相手はあのカールである。そう簡単にいく訳も無く、それよりも無駄も隙も全く無い見事な動きを逆に見せつけられてしまった。

ルネと会話をしている内もイアンとカールの勝負は終わったようで、イアンがこちらへ向かって歩いてきた。

よしっ、と気合いを入れてセリアは立ち上がり、早速カールの元へと歩く。カールを凝視しながらも、しっかり休んだ所為か、体力もかなり回復されている。

イアンと擦れ違った時、頑張れ、と頭を撫でられた。応援してくれるのは有り難いのだが、子供扱いされている感が否めない。のでなんだか腑に落ちない気がするが、今は目の前の妥当カールである。

自分の前で腕組みをして仁王立ちしているカールを前に、グツと剣を握る手に力をいれた。

「手加減は無しでお願いします」

「ならば私を退屈させないことだ」

いかにも余裕顔でそう言われれば増々負ける訳にはいかない。この傲慢な物言いは死ななきゃ直らんだろうな。等と若干物騒な事を考えながら、剣を構える。

シンと静まった空気をランが開始の合図を伝える声が破った。

「始め！」

そのまま剣の切っ先を相手に突きつける。

「悔しい……」

手合わせの結果は、簡単に言えばセリアの敗北。

「冷静さを保っていればお前にも勝機は見いだせた筈だ」

「うっ」

事実なだけに何も言い返せないのが悔しい。

普段ならば、女という事でどうしても劣ってしまう体力や腕力を補う為、セリアは技術で攻めるのだが、それをしなかった。

いや、それが出来なかったのだ。

最初こそ互角に渡り合っていたのだが、カールの挑発的な言葉に乗ってしまった。その言葉に踊らされるように、冷静さを欠いてしまったセリアはカールの敵ではない。流石に簡単には行かなかったが、結局勝利を手にしたのはやはり彼であった。

しかし、セリアに実力が有るのも事実。カールの横顔にも汗が目立つ。候補生以外の他の者が相手なら、眉一つ動かさず振じ伏せるのだから。カールの言う通り、冷静でいれば勝てる可能性は十分にあった。

「次は絶対に勝つ」

と高らかに宣言するセリアを候補生達は暖かく見守っていた。

「ごめんね」

「おお。気にするな」

そう言ってセリア達は稽古場で別れた。

剣術や馬術は男のスポーツというイメージがクルダスでは根付いている。なので学園内で稽古場を利用する生徒は決まって男子だ。なので、更衣室も男子用だけで十分事足りる。しかし、学園という場所では男女公平にするため、申し訳程度だが女子の更衣室も設け

られている。といっても、男子用よりも小さいし、稽古場から少し離れた位置にあるのだ。

流石に、ワンピース型の制服でランやカールに立ち向かうのは無理があるため、セリアも今は長ズボンとシャツに着替えていた。なので、更衣室で着替えるとなると、必然的に彼等を待たせしてしまうことになる。なので、さっさと支度を済ませようとセリアは足を急がせていた。

何の飾りも工夫もしていない制服にさっさと着替え終わり候補生達と合流しようとしたセリアの耳に、近くから話し声が聞こえた。少し高めの声から、それが女生徒である事が分かる。

はて、こんな場所に来るとは、何用だろう？と疑問に思ったセリアだが、自分には関係ないし何より友人達を待たせているので、そのまま去ろうとした。

が、次にセリアの耳に届いたのは何かを倒した様な音。次いで誰かの怒鳴り声まで。

こんな音がすれば気になってしまうのが人の性というもの。何が起こっているのか確認する積もりで、そおっと音がした更衣室の裏を覗き見る。そして、その先で見た光景に目を見開いた。

まず目に入ってきたのは仁王立ちした三人の女生徒。こちらに背を向けている為、顔は見えないが、どうも虫の居所は悪いらしい。そして、その三人が何かを囲んでいる。目を凝らすと、それが地面に座り込んでいる別の女生徒だというのが分かる。

見るからに穏やかな状況ではない状況だが、どうしたものか。今自分が出て行った所で、特になにかが出来る訳でもない。むしろ、彼女達の怒りを増長させてしまうかも、とセリアは冷静に考えた。しかし、泣き崩れる生徒を放って置けないのも事実。やはり見て見ぬ振りは出来ない、とセリアは一步踏み出した。

「あのう……」

「何よアナタ！」

低姿勢で恐る恐る声を発したセリアは、まるで止めようとしてい



る風には見えないが、これはこれで彼女なりにやっているのだ。

キツと振り向いた女生徒は目をつり上げてこちらを睨んで来た。やはりというか非常にキツそうな顔をしている。しかし、普段からカールの睨みを頂戴しているセリアはこんな事では怯まない。

「何をしていらっしやるので？」

「放って置いて下さらない。私達、今お話しているの」

話し中と言っているが、どう見ても友好的な会話では無い。しかし、何とか彼等の意識はこちらに向いてくれた様だ。

「はあ。しかし、嫌がっている様に見えるのですが」

「アナタには関係無いでしょう！」

言われてセリアは、うっと言葉に詰まる。関係無いと言われてしまえばその通りなのだが、放って置けないのも事実である。

何と返そうか悩むセリアをジロリと睨む生徒に、今まで黙っていた別の生徒が声をかけた。

「もういいわ」

彼女はそう言う、クルリと踵を返した。それを見た残りの二人も慌てて後を追う。どうやら彼女がリーダー格らしい。人に見られては分が悪いと思ったのか、三人はさっさと退散した。

後に残されたセリアと、彼女達の標的になっていた生徒との視線が重なる。

今までそれどころでは無かった為気付かなかったが、良く見れば彼女はかなりの美人であった。ふわりとした肩に届く金髪と、大きな蒼い瞳が美しく輝いている。まどついている雰囲気は何処か儚げで、守ってやりたい、と思う者を多く出すだろう。その美人がスクツと立ち上がり、ペコリと頭を下げたのでセリアはぎょっとしてしまった。まるで、人形が突然動いた様な錯覚を覚える。

「あの：ありがとうございます」

「あ！いえいえ、そんな。大した事はしていないので」

「私、アシリア・リンドロースと言います」

「はあ。セリア・ベアリットです」

丁寧にお辞儀をされたので、セリアも慌てて自己紹介をする。アシリアと名乗った少女が、それは見事に洗練された動きを見せるものだから、セリアも緊張してしまった。

「あの。助けて戴いたお礼をしたいのですが……」

「ええ！そんな良いですって」

とんでもない申し出をセリアは透かさず断った。そんなお礼なんてされる程、大した事はしていない。しかし、途端に縋る様な目を向けられて、一瞬怯む。

「では、せめてお友達になって下さい」

「はい？」

「あの、私としては、折角お会い出来たのに、ここで別れてしまいたくなくて。それに私、あまり仲の良いお友達が居なくて。セリアさんなら、仲良くなれるのではと思って」

「えっと……」

全く脈絡の無い話に混乱するが、アシリアが目には涙を浮かべ始めた事でまたしても慌てる。何処へ行っても、美人の涙とは老若男女関わらず効果を示す物だ。

「勿論、セリアさんにとって迷惑ならすみません。残念ですが、ここで引き下がります」

「い……いえいえ、そんな。迷惑だなんてとんでもない。むしろ、私のような者で宜しければ、是非ともお友達になりたいと申しましようか」

なんだか途中言葉が変になった気がするが、気にしない。そんな風に言われては、断るに断れないでは無いか。

セリアの言葉を聞いて「良かった」と漏らすアシリアは心底安心した様な顔を見せた。そして少し浮かれた様にはしゃいで見せ、それがまた可愛らしくて、まるで花園を舞う蝶のような印象を与える。

「宜しく願います。セリアさん」

「あ。こちらこそ」

アシリアが余りにも嬉しそうにするので、思わずセリアも和んで

しまう。そのまま二人で少しほのぼのとした会話に突入か、と思っていたがセリアが急に何かを思い出した様に声を上げた。

「あああ！しまったー！！」

「えっ！」

「アシリアさん。私、向こうに人を待たせているんです。一緒に行つて貰えますか？」

「は、はい！」

突然のセリアの行動に、アシリアは一瞬呆然としたが、直ぐに己を取り戻す。

セリアに取っても、折角友人になれた人物なのだ。このまま此処へ置いて行くのも憚られる。なので咄嗟に言った言葉だが、アシリアは了承してくれた。それにマリ奥斯候補生ならば、突然の訪問者にも見事に対応してくれるだろう。それよりも、彼等を待たせてしまった事の方が重要だ。手合わせまでしてもらって、更に着替えなどで時間を取られるのは、彼等も嬉しくないだろう。なにせあの中には魔王様までいらっしゃるのだ。間違はなくキツイお言葉の一つは頂戴するだろう。

漸く現れたセリアを見ると、候補生達は直ぐに後ろに隠れるようにしている影を見つけた。まだ少し距離がある為、はっきりとは見えないが、どうやら別の女生徒らしい。

「ごめん。お待たせしました」

「気にすんなって。昔から言うだろう。女の着替えと買い物は長いって。それより、後ろの奴は誰だ？」

セリアの謝罪に軽く答えたイアンがそう訪ねると、今までセリア

の後ろに隠れていた影が真っ赤に染まった顔を見せた。

「マ、マリオス候補生様……」

ポツリとアシリアが呟くと、彼女は再びセリアの後ろに引っ込んでしまった。彼女も、新しく出来た友人が待ち合わせていた人物が、まさか全生徒の憧れであるマリオス候補生だとは思っても寄らなかつたのだろう。顔を赤面させながらもどうしてもセリアの影から出られない。

自分の後ろに引っ込んでそのまま出て来ない少女を見ると、セリアは再び疑問符を浮かべている候補生達を見やった。

「はい。どうぞ」

「あ！ありがとうございます！ルネ様」

「ううん。どう？少し落ち着いた？」

「はい。申し訳ありません。私のような者が皆様の温室にお邪魔してしまつて」

取り敢えず場所を移動したセリアと候補生達は、アシリアを連れて温室へ来ていた。しかし、この温室は他生徒にとって、候補生達が集う尊い場所、というイメージが強い為アシリアは恐れ多いようだ。先程からずつとこの調子で、何かする度に恐縮していた。

「その様に思ふ必要は無い。セリアの友人ならばいつでも歓迎する」

「あ、ありがとうございます。ランスロット様」

流石、将来は国を背負って立つ者だ。こういった女性の扱いも見事なもので、思わず感心してしまう。そして何より、急な来訪者にも嫌な顔一つせず、丁寧に接してくれた彼等にセリアは心から感謝していた。

「しかし、驚きました。セリアさんは何処で候補生様方とお知り合

いに？」

アシリアの疑問は当然の物だった。何しろ全生徒の憧れの的で、国の未来を担うマリオス候補生と、かなり親しげにしているのだ。普通の生徒ならば恐れ多くて近づけもしない存在なのに。

聞かれてセリアはうつと言葉に詰まる。まさかランとカールが決闘していたとは言えないし、それに乱入したなどとはもっと言えない。しかし、上手い誤魔化し方も思いつかない。だからといって下手な嘘を言うのも気が引ける。

どう答えようかとセリアが頭を悩ませていると、ルネが口を挟んだ。

「セリアは剣が得意なんだ。それが切っ掛けかな」

ルネの素晴らしい答えにセリアは、おおっと感心した。なんと上手い。これならば嘘は言っていないし、ちゃんとした答えにもなっている。ナイスなアイディアをありがとう。とセリアが内心喜んでいると次の関門が現れた。

「女性なのに剣術を！？」

アシリアが、今度は訝し気に聞いた。これも当然の疑問である。女性が剣術、しかも学園で一二を争う实力を持った候補生達の目に止まる程とは。クルダスでは多少珍妙に映るだろう。

なんと言おうかと、先程から同じ事ばかり考えているセリアを置いて、ランが答えた。

「別に構わないのではないだろうか。確かに余り聞かないかもしれないが、それは彼女の個性の一つだ。それも含めて、私は彼女が友人である事とても嬉しく思っている」

この答えに驚いたのは他でもないセリアだ。まさかここまで言ってもらえるとは思っておらず、面食らってしまった。しかし、彼の言葉が、胸が暖かくなる程嬉しいのは事実だった。胸中で「ありがとう」と言っておく。

ランの答えに納得したのかアシリアは「そうですね」とだけ呟くと、また花の様に微笑んだ。これにもセリアは安堵する。もしかし

たら怪訝に思われるかとも思ったがそうでは無いらしい。これもラン達候補生のお陰だろう。本当に、彼等には感謝してもらいたくないな…とセリアは考えていた。

その後も話は弾み、結局は夕食の時間になるまで全員で温室に留まっていた。そのまま自然な流れでアシリアも夕食と一緒にしないかと誘いがかかる。

候補生からの誘いなど、多くの女生徒にとっては涙する程嬉しいものであって、断る理由など微動も無い。どんなに都合が悪かろうと、体調不良であろうと、全ての優先順位が下がり、候補生のお誘いが断然上に来る。それ以外は大体が恐れ多いか、生死に関わる重大な用事があるかだ。アシリアもその内の一人だったようで、多少の動機の不純に気後れしながらも喜んで誘いに乗った。

カールも一緒に、と誘ったのだがまだ用事があるらしく、校舎の方へ戻ってしまった。相変わらず不規則な食生活はセリアが来た後も変わらない。

なので、四人の候補生とセリアとアシリアとでの夕食になった。

セリア達が食堂に入ると、いつもの嫉妬の視線に混じって、驚きと落胆の色が垣間見えた。それは、今までの地味な少女に加えて、候補生の横にいる少女が増えた事による物である。しかも絶世の美少女が。地味なセリアならば対抗出来た物を、余計な人物が増したのだ。女生徒方にとっては、面白くないの一言であろう。

そんな視線を気にするでもなく、アシリアは自然と候補生達に溶け込んでいた。一瞬驚いたものの、これほどの美少女ならば、多方面からの視線も慣れているのだらうとセリアも納得する。

アシリアの実家であるリンドロース家とは、クルダスでも主立った貴族の内の一つだ。そのリンドロース家の令嬢だけあって、アシリアの作法は完璧であった。ちなみにセリアの実家、ベアリット家もそれなりの家なのだが、そういった作法全般を苦手としているセリアだ。比べてしまうと、どうしてもボロが出る。といっても、そんなに大きな失敗をしている訳ではないのだが。でもやはり、気品に満ち、動作が洗練されているのはアシリアだ。それを特にセリアは気にしてはいないのだが。

こうして普通の令嬢と見比べてしまうと、やはりセリアは女らしさが欠けている様に見えてしまう。特別美人でもないし、というか地味だし。セリアはその細腕で剣を振り回し、アシリアは同じ手でナイフとフォークを器用に扱う。

どうしてセリアに惚れてしまったのだろうか、イアンはしみじみと考えていた。というより、本当に不思議で仕方がないらしい。特に美人でも、機転がきく訳でも無い。というか危なっかしい。放って置けばのほほんと自ら知らない間に厄介事にどつぷりと巻き込まれているし、それでなくとも自分から突っ込んで行く。今まで見て来た中で女らしさなど見た事が無かったし、寧ろルネよりも男らしい気さえする。

なぜセリアなのか、本当に不可解だ。しかし、そういった所も既にツボなのだが。

意識してないでもジロジロと凝視していたらしい。セリアにどうしたのか、と聞かれて慌てて視線を外した。すると、別方向から視線を感じ、目を動かすとその先にはザウルが複雑そうな顔でこちらを見ていた。どうやら、考えていた事は同じらしい。目で会話するとは正にこの事だろう。

そんな事を思っている内にも、目の前ではセリアが盛大に咽せて涙目になりながら、ワタワタと慌てていた。

全くもって、不可解である。





## 焦燥 1 (後書き)

最近の私はどうも変だ。今まではこんなこと無かったのに、どうしたと言うのだろう。このままだと、セリアに対しても、アシリアに対しても失礼なのではないだろうか。いや、それ以前に何が起きているのかも分からないのだ。学園内では少し穏やかではない動きが出ているというのに。

どうすれば良いのか答えが見出せない。どうしたら良い？

## 焦燥 2

「セリアさん」

「ああ。アシリアさん」

授業も終わり、いつもの如く温室へ向かおうとしていたセリアに、昨日友人になった人物、アシリア・リンドローズがヒョコリと顔を出し、声を掛けた。クルクルとした目が輝いていて本当に可愛らしい娘だな、と改めて思う。クラスが違うので、わざわざ会いに来たのだろうか。

「セリアさんはこれからどうされます？」

「えっと。これから温室へ行こうと思っていたんですが」

「是非ご一緒させて下さい」

頷いてみせると、わぁと頬を染めるアシリアにセリアもつられて微笑んでしまう。

流石リンドローズ家の令嬢だけあって、アシリアはラン達のように気さくに話すという訳には行かなかった。直接聞いた訳ではないが、彼女自身が丁寧な言葉を貫くので、セリアも自然とアシリアに大しては若干畏まった物言いになる。といっても、本来これが普通であって、セリアがかなり特殊であるだけなのだが。

二人で連れだって温室へ向かう姿を、敵意むき出しの視線が追うのだが、セリア一人の時に向けられた程露骨な物は少ない。やはり、美人が相手では分が悪いと思ったのか、視線はどちらかというと控え気味であった。

「いい加減にしないかカール！」

セリアとアシリアが温室へ足を入れるなり響いた声に、アシリア

はビクリと震え上がった。しかし、セリアは誰の声かも、その原因も分かっているので平気だ。「大丈夫です」とアシリアに言って中へゆっくりと誘導した。

温室の中では、やはりというかなんというか、ランとカールが睨み合っていた。テーブルの上には何枚にも積まれた資料。セリア達が入ってくるのを確認するなり、ランはセリアに自分の意見案を手渡して来た。

「セリア。これなんだが、君はどう思う？」

セリアはマリオス候補生クラスの授業を受けていない。なので、彼等の議論の内容を知るためには、一から資料や案を読む必要があるのだが、そこは流石というべきか。なんとも読みやすく分かりやすい資料が手渡された。ざっと目を通して、セリアは自分の意見を頭の中で整理する。

「これなら……」

そして、いつもの様に三人での議論に突入した。それをしばらくは呆然と見ていたアシリアだが、怪訝な顔をしながらイアンに訪ねる。

「セリアさんは、いつもあの様に候補生様方と議論を？」

「ああ。まあな」

アシリアの問いにイアンは苦笑しながらも答えた。

昨日の剣と言い、今日の議論と言い、普通のご令嬢には奇異に映るだろう。やはり少し受け入れがたいのか、アシリアは眉を寄せたままの顔を崩さない。

「まあ、ちよつと変わった所もあるが、昨日ランも言っただろ。あれがセリアだって」

「……はい。そうですよね」

アシリアも、自分に言い聞かせる様に頷いた。

人の得手不得手に口を出す積もりは無いし、何よりセリアは自分の恩人だ。不条理な理由で絡まれていた所を助けに入ってくれた時、まるで救世主の様にさえ自分には見えた（実際はそんな風には全く

見えない)。勢いでつい友人になりたいと口に出してしまったが、セリアはそれも快く受け入れてくれたのだ。今までにあまり見ないタイプだが、セリアは本当に好感の持てる人物だ、とアシリアは納得した。

一人納得するアシリアを見て、イアンは少し感心してしまった。こんなにすんなり受け入れるとは意外である。普通ならばもう少し悩んだり、奇異に思ったりするだろう。それが悪い訳ではない。クルダスの長い歴史の中で、貴族内での偏見や先入観というのが深く根付いているだけなのだ。それをアシリアは、かなりすんなりと納得した。やはり類は友を呼ぶのか。アシリアも少々変わった考えの持ち主のようだ。

アシリアとイアンがそれぞれ心中で色々考えている間にも、ラン達の議論は一段落したらしい。まだ確認などはしているが、資料を片付け始めている。その後、セリアが満足そうに頷きながら温室を出て行くカールを見送った。その時になって、議論に夢中になりアシリアを放る形にしてしまったのを思い出す。

「あっ！アシリアさん。ごめんなさい」

漸く気付いた、という風にセリアが謝るとアシリアは無言で首を振る。

議論に参加する姿を見られて、少し呆れられるのでは、と少し覚悟していたセリアはホッと胸を撫で下ろした。視線の先でイアンが妙に微笑んだりしている様に見えるので、もしや何かあったのだろうか。もしかしたら、イアンがアシリアに何か言ってくれたのかもしれない。と、珍しく鋭い思考を見せたセリアはイアンに感謝していた。

ラン達の議論が終わってしまえば、次は温室でまったりした時間を過ごすのが常だ。アシリアも加わって学園内の話に花を咲かせる。セリアと違い、アシリアはやはり普通の娘であり、学園の噂なん

かにもそれなりに通じていた。そのアシリアが話す内容は、色々としりあのかく知らない世界ばかりだ。マリオス候補生も、滅多に聞かない『女の子』の話に、多少なりとも興味をそそられる。といっても、大体の内容は把握してゐるのだが。それでも耳を傾けるのは、アシリアが年頃の娘らしく機転を利かせながら上手く語るからだろう。話の元が噂好きの娘か、そうでないかで色々視点も変わってくる物である。

暫くそうして雑談を続けていたのだが、アシリアが何かに気付いた様にランの制服を指差した。

「あの、ランスロット様。ボタンが……」

「ああ。糸が解れてしまった様だ。今まで気付かなかった」

見れば、制服の袖のボタンが今にも取れそうな状態でぶら下がっていた。ランも気付いていなかった様で、寮に戻ってから直すと言った。しかし、それを見て透かさずアシリアが言葉を発する。

「私で良ければ直させて下さい」

「……!？」

「その……裁縫道具なら持っていますし。それなりに得意ですし……」

「……」

「いや。しかし、君がそんな事をする必要は……」

「いえ!是非やらせて下さい」

大人しそうな雰囲気からは想像も出来ないほど強く主張するアシリアに、セリアは少し驚いてしまう。

ランの言い分も最ものであるのだ。わざわざアシリアがそんな事をする必要は無い。

しかし、アシリアは譲ろうとはせず、不安そうに見詰めてくる。そこまで強く言われては断る理由も無いので、ここは有り難く言葉に甘える事にした。ランが制服の上着を脱いで渡すと、アシリアは早速鞆の中から小さな裁縫セットを取り出し、それは見事に針と糸でボタンを縫い始める。その手捌きは見事な物でボタンはあっという間にあるべき場所に収まっていた。

アシリアが仕上げを済ますと、丁寧に上着をランへ帰す。その仕事も美しく洗練されていて、まるで聖母でも見ている気分だ。

それをランが柔らかい物腰で受け取るものだから、一枚の絵を見ている様に映える。

裁縫をかなり苦手としているセリアは神業の如く針を扱ったアシリアを尊敬の眼差しで見詰めていた。

あの複雑で精神力を削る作業をこんなに軽々とこなす人物がいるとは。自分が縫い物などしようものなら、糸が縮れたり、針は布を通らないしで、散々な結果を生むのに。今、上着の袖に収まっているボタンは、最初からそこにあったように何の違和感もなく縫い付けられている。（そうなるのが普通である）

おおっ、と感嘆の声を上げるセリアに、アシリアは少し得意げに「成績も良いんですよ」と話していた。

本来、フロース学園には選択科目として教養の授業が設置されている。数種類から選ぶ事が出来るこの授業は、剣術や馬術の他に裁縫等も受けられる。特に制限は無いが、どれを選択するかは当然の如く性別で分かれていた。男子は剣術等、女子は裁縫等。セリアは剣術を選択しようとしていた様だが、親が学校側に猛反対したそうで、セリアは教養の授業中かなり苦勞している。

勉学の内では無いといっても、フロース学園の基準はそれなりに厳しい。教養もそれは同じで、成績で良い結果を出せたというのは十分自慢になるのだ。

ちなみに、マリオス候補生達は教養の授業でもトップを誇っている。

ランが感謝の意を示すと、途端にアシリアは頬を真っ赤に染め、瞳を輝かせた。候補生に感謝されるなど、アシリアや他の生徒にとっては大変名誉な事なのだ。それに、彫像の様な美しい顔で微笑まされて、九割の女性は赤面するだろう。残り一割に属するセリアはラ

ンの上着に目を向け、その出来映えを再び観察していた。

「なあ。あれ、どうするんだ…？」

「その…：…どうすると聞かれましても」

ここは男子寮の談話室。イアンとザウルは扉の前に立ち、室内に入るでもなく、ただ中の様子を見守っていた。二人の視線の先では、先程から落ち着きの無いように談話室をウロウロと動き回る友人の姿。普段は落ち着いている風に見えるランが、この様な行動を取るのには長い付き合いでも滅多にある事ではない。

時折、唸ったり考え込んだりしている様は他人がやれば怪しく見えるのだが、美形がやればなかなかの絵になっている。

暫くは様子を見守っていたイアン達だが、遂にランに声をかけた。

「ラン。どうしたんだ」

「イアン…：…」

「さっきから落ち着かねえけど、何かあったのか？」

「…：…：…」

ランをソファアに座らせ聞くが、なかなか口を割ろうとしない。どうも随分と思い悩んでいる様で、話しても良いものかと考えている。しかし、やはり自分一人で考えても答えは出ないだろう、と思っただけ。ゆっくりと口を開いた。

「私は、今まで婦人や女性には平等に接してきた積もりだ」

「…：ああ。まあ、そうだろうな」

一瞬何の話かと疑問に思ったが、彼の言っている事は事実なので頷いておく。

容姿、地位、実力。この三つの点でもかなりの物を持っているラ

ンやイアン達は、当然女性からのお誘いもかなりの数があつた。今、この学園でもそうだが、他へ行ってもそれは変わらない。貴族同士のパーティーへ顔を出せば話しかけてくる女性は後を絶たず、街を歩けば聞こえてくる黄色い声も多い。

イアンはそれらを巧みに避け、カールは冷たい視線で撥ね除ける。それでも、逃れられない場合もあるのだが。ザウルもルネも断りはないものの、時々多少困った笑みを浮かべている事は少なくない。しかし、ランは違った。何時どんな時であろうと、相手が誰であろうと、それが女性ならば敬意を持って接した。

彼女達が想いを告げてくれば丁寧に対応し、その気持ちを受け止められる人間は自分の他にきつと居る、と一人一人の背中を押して、新たな恋へ送り出していた。ラン自身、彼女達の望む物は与えられない事は十分理解していたし、無意味に気を持たせて彼女達の未来に出会う筈の相手を見えなくする事はしたくないと思つての行動だ。その所為で逆に枕を濡らす羽目になった女性は数しれないが：

それでも、ランに送り出された者達の中には、ちゃっかり別の恋に生きる事に成功した人間も居たりする。

「今まで、それが当然だと思つていたのだが……」

「何かあつたのですか？」

「差別をする積もりなど無い。だが、アシリアとセリアに対する気持ちはどうしても違つてしまうのだ」

「………はっ!？」

たっぷり間を開けて結論を理解したイアンとザウルは目を見開いてしまった。

ランが珍しく真剣に思い悩んでいる様なので、どんな事かと思えば、打ち明けられたのは予想だになかった内容。ラン本人ですら気付いていない、その感情が何かを察したイアンとザウルは途端に言葉に詰まった。

答えの予想はつくのだが、はたしてそれを言っても良いものだろうか。



「そんなに心配する必要無いよ」

「ルネ…」

「ごめんね。立ち聞きする積もりは無かったんだけど、聞こえたから」

「いや。それより、心配の必要が無いというのは？」

ルネの言葉の意味が飲み込めずランが聞き返す。立ち聞きされた事は特に気にしていない様子だ。

「だって、ランは彼女の事が嫌いなんじゃないでしょ」

「……う、うん」

抱く感情が違うといっても、それは嫌悪や拒否感ではない。むしろ逆だ。それならば、答えは限られてくる。親愛の情か、あるいは……

ルネは誰とは言わない。ランの説明からだけでは確信が持てないし、そんな野暮な事は聞かない。重要なのは、ランが気持ちを持て余しているということ。

「じゃあ気にしないで、いつも通りにしていれば良いんじゃないかな。答えはきつとその内出るから」

「ねっ」と可愛らしく言ってくるルネに、ランは複雑そうな顔をしている。つい先程まで散々思い悩んでいた事を、気にするな、と言われても直ぐに納得は出来ないだろう。というより、まるでルネには答えが分かっている様な感じがするのも府に落ちない。ならば教えてくれるとも良いと思うのだが。

そんな事を思わないでもないランだが、取り敢えずルネの助言に従う事にした。気にするな、と言われて気にしないのも難しいのだが、今の自分にはどうしようもないのだから。訳の分からないまま藻掻くよりも、今は考えない方が良くかもしれない。

ずるずると自室へ下がったランを、微笑む一つの視線と複雑な顔の二つの視線が、静かに見送った。

「良いのか、あれで」

「何が？」

非常に複雑な心境を抱えたイアンが尋ねると、ルネはしれっと返した。何がと言われても、答えなど一つしかないのは、彼も分かっているだろうに。

「だから、ランの事だよ。あんなんで良かったのか？」

「良いんじゃないかな。特に問題は無いと思うけど」

本当に良いのだろうか？明らかにランを混乱させただけの様に見えるのだが。しかし、教えてやるのもどうかと言うものである。それは何故かというと……

「あいつのは、ほら、あれだろ。その……」

「恋？」

言い難そうにしているイアンの言葉を、ルネが先に言った。その様にイアンもグツと詰まる。恋だの愛だの、自分が言うにはどうも照れが生じてしまうのだ。そんな言葉を言おうとする度に、自分の思い人の顔が脳裏を過ぎてしまうあたり、自分も相当だなと自覚させられてしまう。

確かに、「恋」かどうかは分からないが、ランがそれに近い感情を抱いているのは確かだろう。セリアにしろ、アシアにしろ、どちらかを意識しているのは間違いない。

「良いんじゃない。折角なんだし、皆で応援しようよ」

「それはそうなのですが……」

それだけ言ってザウルが口籠る。確かに、友人であり仲間である彼の恋ならば自分の事の様に応援してやりたい。今までそういった相手が居た試しが無いランだ。折角だし、というルネの言葉も妥当である。しかし、イアンとザウルには素直に応援出来ない理由があった。

先程のランの言葉だけでは、それがセリアへなのかアシアへなのか特定が出来ない。もし相手がアシアならば、応援だろうとなん

だろうと大いにしてやれる。だが、もしその相手がセリアならば後押しなど冗談ではない。何が悲しくて自分の恋敵となる者の恋路を支えなければならぬのだ。

「それに、恋愛は若い内に沢山経験しておいて損は無いと思うよ」

「お前は時々年寄りみたいな事言うよな」

胸の内はかなり思い悩むイアンとザウルを見て何を思ったのか、ルネ堪えきれずにクスクスと笑っていた。

そんな会話があつてから一週間、ランがどうしていたかと言うと、何もしなかった。それはもう清々しい程。まるで、本当に全て丸ごと忘れたかのようである。

素直な彼は自分では解決出来ないと思つた問題を、友人の助言通りに実行しているに過ぎないのだが。しかし、こうもさっぱりと無かつた事にされるとなんだか肩透かしを食らわされた様な気分だ。

そんな事知る由も無いセリアとアシリアは、今日も連れ立って温室へ顔出す。

セリアが来れば恒例のカールとランと三人での議論に突入。それをアシリアを加えた他の者が暖かく見守る。そんな光景も段々と見慣れたものになって来た。カールやランにズバズバと意見をぶつけるセリアの対応には未だに戸惑っているアシリアだが、じき馴染むだろう。

議論が一段落してしまえば、全員での雑談に移る。カールだけは用事がある、と校舎に戻ってしまうのだが。協調性の無さを直す積もりは毛程も無いらしい。

アシリアが加わってから雑談にも花が咲く様になった。やはり、会話の中に女という花が有ると無いとでは違う。しかも、セリアは

相手を疲れさせない会話の出来る者である。自然と雑談も盛り上がる。一応セリアも女ではあるが、花とは程遠い。

「そういえばセリアさん。先程の事は本当にもう大丈夫なんですか？」

「あつ。はい。全然大丈夫ですよ。ご心配おかけしてすみません」

唐突に聞いたアシリアに、候補生達がなんの事かと疑問を浮かべると、アシリアが説明しだした。

それを聞くに、どうも穏やかでは無い話だった。

学園で階段を降りていたセリアを、後ろから突き落とした人物がいるというのだ。急な事にバランスを崩したセリアは、盛大に段差を転げ落ちてしまったという。咄嗟に受け身を取ったので大した怪我もせずに済んだのだが。偶然近くを通りかかったアシリアが音を聞きつけて駆け付けた時には、もう誰の姿も無かったらしい。

信じられない話を聞いた様な顔をする候補生達を見ながら、セリアは非常にバツの悪い思いをしていた。出来れば彼等には知られたいくは無かったのからだ。

こういう嫌がらせは別に初めてでは無い。似た様な事は今までに何度も起こっているし、その度に遠回しでも直接でも理由は言い聞かされている。大事にはなっていないのだし、この程度の事で泣く程気弱でもない。なので、特に問題にもしていなかったのだ。しかし、それをアシリアに言う事は出来ず、結局口止めをするに至らなかった。

その結果がこれである。全校生徒の代表とも言える存在であるマリオス候補生の彼等も、学園内でこの様な事が起こっていると知れば、良い気分では無いだろう。元々彼等は、学園内で起こっている事に常に責任感を抱いている節がある。それもマリオス候補生に求められる素質の一つなのだろうが。なので、あまり余計な事を言うて心労をかけたくないと思っていたのだが。

チラリと彼等の顔色を伺えば、端麗な顔の眉間の間には何本も皺が寄っていた。なんだか睨まれている様な気がして、ヒイツと縮こ

まってしまう。やはり余計な問題を起こしたのはまずかったか、とセリアはかなり焦っていた。

背を丸めて小さくなるセリアを見ながら、ザウルは沸き上がる苛立ちを必死に押さえ込んでいた。

なんだそれは。そんな事、セリアは少しも悟らせなかった。その事に更に怒りが増す。

セリアに害を与えようとする者が居る事も、そんな事が学園内で起きた事にも十分不快感を抱く。しかし、何よりも自分を苛立たせているのはセリア自身だ。何故自分達を頼ろうとはしないのか。相談くらいしてくれても良いだろうに、セリアは全くそんな様子は見せなかった。恐らく、アシリアが言わなければそのまま何事も無かった様に過ごしたのだろう。いつもと何ら変わらない態度に、焦れつたさを感じてならない。

誰だろうと、そんな事があればその直後しばらくは多少なりとも警戒心を抱くだろうに。また同じ様な事が起こるかもしれないのだ。しかし、セリアからは危機感も不信感も何も感じ取れなかった。必要以上に周りを疑えと言っている訳ではない。せめて、普通の人間程度には注意を払えないだろうか。

「セリア殿」

「…はい」

「自分が付き添いますから、今すぐ医務室へ行って下さい」

「ええ!!」

いつになく厳しい眼差しザウルに言われてセリアは慌てた。そんな大した事ではないし、怪我も無いのでそんな必要は無い。そういう意味を込めて遠慮しようと目線に移せば、セリアの言わんとしている事を読み取ったのか、多方面から「行け」とキツイ視線を頂戴した。こんなに睨まれては行くしかなくなる訳で、セリアは渋々頷く。しかし、流石に付き添って貰うのは悪いと思い、一人で行くと言えば更に氷の様な視線が降り注いだ。いやいや、なんで自分が

こんなに睨まれるのだ。やはり学園内での揉め事は、彼等の機嫌を損ねさせてしまったのだろうか。

ブツブツとそんな事を呟きながらも、ザウルに連行されたセリアを見送った候補生はすぐにはあっと息を吐いた。全員思うところは一緒のようで、もう少しどうにかならないものか、と考えを巡らせる。そんな候補生達の耳に鈴の様な声が届いた。

「あの……」

「アシリア。何か気付いた事はあるか？」

「あの、その。出来ればランスロット様だけにお話したい内容なのですが……」

「……………」

目で「少し時間をくれ」と語るアシリアに、ランは困惑する。何故自分だけなのだろうか。そう疑問に思っただけなのに、断る理由が無いのも事実。ランがゆっくりと頷くと、二人は温室から出た。

「それで、私に話というのは」

「セリアさんですが、その……誰かに恨まれるような事をしたのではないのでしょうか？」

「はっ……………」

言い難そうに言葉を紡いだアシリアを、ランは虚を突かれた様な顔で見た。アシリアは非常に真剣な顔をしており、冗談を言っている様には見えない。

「あんな事、悪意があってやったとは思えません。それほど、セリアさんの素行に、何か問題があったのでは？」

「……………」

確かに、階段から突き落とすなど、それなりに敵意を秘めた者でなければないであろう。一歩間違えれば、何が起こったか分からないのだ。なので、アシリアの意見もそれなりに説得力があった。

しかし、納得は出来ない。

「例えそうだとしても、それにはきつと何かの誤解があった筈だ」  
「……………」

「私は、彼女が好んで他人を傷つける様な真似はしないと信じている。君もそうだろう」

強いランの言葉にアシリアも俯いてしまう。自分が今何を言っても、ランの考えは変わらないだろう事は分かった。セリアを疑うなど考えられない、とでも言う風に語ったランに、アシリアも説き伏せられてしまう。一瞬、表情に陰が差した様に見えたが、アシリアはすぐに「そうですね」と納得した事を伝えた。

「アシリアがそんな事を？」

「下らん。あれが他人に害を与える程の器量を持たないと、見れば誰でも分かるだろうに」

夜、男子寮の談話室でアシリアとの会話の内容を聞いた候補生達は、少なからず驚いた顔を見せた。まさかアシリアからそんな言葉が出るとは思いもしなかったのだ。ルネから事の成り行きを聞いたカールも、半ば呆れた様子だ。

「まあ、貴族のお嬢様なんてそんなもんだろう」

花の様に守られながら育った令嬢が、多少愚直な考え方をするのも仕方ない。そういう点でも、セリアがどれだけ奇特な存在かを物語っている。

「フン。やはり深窓の令嬢というのは考えが甘いらしいな」

カールの厳しいお言葉に返す者は居らず、全員が苦笑いを浮かべていた。

## 焦燥 2（後書き）

どうしたものか。また、厄介な事になってしまった。

これはかなりまずい事になった。非常にまずい。どれくらいまずいかと言うと、最悪の場合、学園を追い出されてしまうかもしれない程まずい。

と…取りあえず、もう暫く様子を見てみよう。何の手掛かりも見つからないのだから、下手には動けない。

でも……………



### 焦燥 3

セリアに付いてくる内に、アシリアもすっかり温室に馴染んでいた。今では七人で平和な学園生活を過ごしている。この日もそうなる筈であったのだが、不穏の空気はすぐそこまで来ていた。

授業が終わればクラスは生徒達の喧噪で騒がしくなるものである。いつもなら、楽しそうな話や笑い声が混じっているのだが、今日は少し違った。

「やっぱり無いわ」

「私のもよ」

「大切にしていたのに」

そんな声があちらこちらから聞こえてくる。それに混じって、鞆や机の中を漁る生徒の姿が目立った。

事の発端は数時間前、授業中に一人の女生徒が筆記用具を入っていたペンケースが無い、と言い出した事に始まる。それから一時間と経たない内に、リボンが無いとか、ブレスレットが無いとか、物が紛失した訴えが続出した。二三人の訴えならば不注意で何処かに置き忘れたのだろう、と言えるがこれだけの人数が同じ日に物を無くすというのは不自然すぎる。

あるクラス内でのみ起きたこの事件に、誰も口にはしないが生徒達はその一つの結論に達していた。盗まれたのだと。

セリアは自分の私物が紛失しているかを確認しながらも、自分のクラスで起きた窃盗事件の事を考えていた。被害は他のクラスには及んでおらず、被害者も女生徒に限定されている。盗まれた物も様々で統一性が無い。目的が分からないが、あまり気分の良い話ではない。

一通り目を通したところ、取り敢えず自分の私物は全て無事の様だ、とセリアは帰り支度を始めた。

「セリアさん」

セリアは教室から出た所で呼び止められた。振り返れば不安そうな目でこちらを見てくるアシリアの姿。

セリアのクラス内で起きた事件とはいえ、学園内で噂が広まるのは驚く程速い。何が起こったかはアシリアも承知しているようで、セリアの私物は大丈夫か、と聞いて来た。セリアがそれに答えると安心した様にホッとした顔を見せる。

「あっ！セリアさん」

当たり前の様に温室へ向かおうとしたセリアを後ろから引き止める様にアシリアが声を発した。

「先程、ヨーク先生が通られて、セリアさんを探していた様ですが」「ヨーク先生が？」

セリアが聞き返すとアシリアが頷く。ヨークが自分に何の用事だろう。と疑問に思いながらもセリアは職員室へ向かった。

その前に、自分の用事に彼女を付き合わせるのには申し訳ないと思い、アシリアには先に温室へ行く様に進める。

「いえ。私はここで待ってます」

「そうですか？すみません。じゃあすぐ行ってきます」

「よければ、鞆も預かりますよ？」

アシリアが申し出て来たのでセリアは思わず自分の鞆に視線を移した。不思議そうにしているセリアにアシリアは続ける。

「移動するのに少し邪魔でしょうし。私はここで待っているだけですし」

「いえ。でもそんなに重いものでも…」

「でも、温室で候補生様方を待たせてしまいますし。少しでも軽い方が動きやすいです」

アシリアの言葉に、それもそうだ、と納得するとセリアはアシリアに感謝しながら自分の鞆を預け、職員室へと足を急がせた。パタ

パタと駆ける様に廊下を歩けば、途中で他の教師に注意されるだろう。

その後ろ姿を見送ったアシリアは、よしっ、と気合いを入れるようにセリアの鞆を持ち直した。

「二人共、今日は遅かったな」

「ごめんなさい。ちょっと担任の教師に呼ばれて」

ヨークの用事というものは、なんてことはなく、レポートの記名忘れを指摘するものだった。しかし、職員室はセリアのクラスから多少離れた場所にあり、どうしても時間がかかってしまう。出来るだけ足を急がせたのだが、案の定途中で別の教師に何度か足止めを食らって更に時間を取られてしまったのだ。

温室ではいつもより何処か重苦しい空気が漂っていた。セリアのクラスで起きた窃盗事件は、やはり候補生達にもしっかり伝わっており、全員がその事で色々と考えを出し合っていた所らしい。

「つい出来心で盗んじまった。っていうのじゃないよな」

「紛失した物に一貫性が見られない。目的は物では無い様に思う」  
ランの考えは外れてはいないだろう。物欲による行為ならば、それを盗めばそれで終わる筈である。しかし、盗られた物には関連性が全く無い物も混じっている。ならば動機は他にあると考えた方が  
良いだろう。

しかし、ならば何が狙いなのだろうか。

沸き上がった疑問に頭を悩ませれば、ルネが確認する様に聞く。

「でも、盗まれたって事だけは確かだよな？」

「自然に紛失したにしては少し納得が行かないのは事実です。セリ

ア殿のクラスでのみ起きたというのも気になります。何か気付いた事はありませんでしたか？」

ザウルの問いにセリアが、特に何も、とだけ答えると、また全員で考えを巡らせた。それを見てセリアは少なからず申し訳なく思う。自分のクラスで起こった事なのだから、一番自分が近い位置にいる。なのに、何も気付かなかった事が悔しい。もう少し回りを注意していれば何かに気付けただろうか？

「きゃっ！」

悩むセリアの思考を遮る様に短い悲鳴が響いた。それに驚いて顔を上げると、アシリアがテーブルに手を突いて自分を支えている。その光景から、アシリアが躓いて運悪くバランスを崩したのだ、という事が分かった。

「すみません。うっかりしていて。あっ」

アシリアが下を見れば、セリアの鞆が転がっていた。いつもはテーブルの横にあるガーデンチェアに置いているので、アシリアが躓いた時に落ちたのだらう。留め具も外れてしまったようで、中身が少し飛び出ている。

アシリアが急いでそれらを拾おうと屈むと、おやつ、と首を傾げた。鞆から飛び出したのは、蝶を基調とした可愛いペンケース。しかし、セリアは普段なんの飾りも無いシンプルな物を使っている。で、セリアの私物にしては違和感がある。

不思議そうにしているアシリアを心配したセリアがアシリアの肩越しに覗けば、そこには見覚えの無い物が転がっている。セリアも目を見開く。ある一つの可能性が頭を過り、まさかとは思いつつもセリアは自分の鞆の中身をひっくり返した。

「なっ!？」

「え!？」

鞆の中からジャラジャラと出て来たのは、どれも見覚えの無い物ばかり。しかも、リボンやブレスレット等記憶にある限りクラス内で紛失したと言われていた物と似ている。

視線を感じてギギッと壊れた人形の様に後ろを振り返れば、ジッと見詰めてくる候補生の姿。

「セリア。お前……」

「セリアさんじゃありません!」

「はっ!?!」

また厄介な事に巻き込まれやがって、と続けようとしたイアンの声に被さる様に別の声が響いた。見るとアシリアが強い眼差しで候補生達を見据えている。

温室に居る全員が驚いた様な目でアシリアを見ても、彼女は氣にした風もなく続けた。

「セリアさんはこんな事をする様な人じゃありません」

「あの、アシリアさん……」

普段は大人しいアシリアの、急な変化にセリアが啞然としている間にもアシリアは散らばった物を掻き集めて、スクツと立ち上がった。

「これは、私から返します」

「ええええ! そんな! 駄目ですよ!」

「いいえ。セリアさんが疑われる様な事、あつてはいけません!」  
セリアは自分の恩人だ。こんな事で恩が返せるとは思わないが、せめてセリアが疑われる様な事態だけは避けたい。そんな思いを秘めた瞳をしながら、アシリアは温室の外へ駆け出して行った。セリアも、まさかアシリアにそんな事をさせる訳にもいかず、慌てて後を追う。温室を少し離れた所でアシリアに追いついたセリアは、抗議するアシリアを説き伏せて、なんとか半分だけでも自分で返す所までこぎ着けた。アシリアもかなり頑固なもので、中々譲ろうとしなかったが、最後には渋々と了承したようだ。

外へ消えて行った二つの後ろ姿を見送ると、温室に残された候補生達は同時にため息を吐いた。

「あれは何だ。そういう体質か?」

「新しいタイプの才能かも」

どうすれば、ああもフラツと一人で厄介事に巻き込まれる事が出来るのだろうか。

「冗談を言っている場合ではないだろう。とにかく、これで相手の狙いは分かった」

ランが言った言葉に他の候補生も頷く。盗まれた物がセリアの鞆に入れられていた。この意味する事は限られてくる。そして、最終的な結論は、標的は物でも、盗品の持ち主でもなく、セリアだという事。窃盗事件で、その証拠品をセリアが所持していたとなれば、誰でもセリアが犯人だと考えるだろうから。

しかし、分かったと言ってもそれだけである。まだ誰が犯人か、何故セリアが狙われているのかは検討もつかない。セリアに注意する様に言い、再発を防ぐのも一つの手だが、それでは解決したとは言えない。セリアが疑われ、そのまま犯人になってしまえば退学もありえるのだ。マリオス候補生である自分達が弁護するにしても限界があるだろう。しかも、あの警戒心の無さもいい加減にしろ、と言いたくなる様なセリアである。注意するにしても、何処まで信用してよい物か。次に相手がどのような手で来るかも分からない。

思わず頭を抱えなくなる様な状況に、全員が再びため息を吐いたのは同時だった。

アシリアから預かった物を返すべく、セリアは校内を大急ぎで駆けずり回っていた。それを、またか、と呆れた様な教師の視線で睨まれても無視である。今はそれどころではないのだから。

一つ一つの持ち主を探して、彼女達の物を返せば当然聞かれるのはそれらが何処にあったか。自分の鞆の中にありました、なんて自分が盗んだと言っている様なものである。しかし、だからといって上手い誤魔化し方も思いつかず、下手な嘘を言って後々厄介な事に

なるのも避けたい。なので正直に話せば、案の定自分がやったのかと聞かれた。そんな直球で来るかと驚きつつも、勿論それは全力で否定し、疑わしい視線を向けられたものの、なんとか納得して貰えた。

自分の持っていた物を全て返し終え、脱力した様に肩を落とすと、こちらも終えたのかアシリアに呼び止められた。

彼女にも迷惑を掛けてしまったな、と謝るとアシリアは首を横に振り、気にしないで下さい、と告げる。その様子にも感謝しながら、セリアは疲れた様に息を肺から全て出し切った。

「そう心配するなって。その内、解決出来るって」

「そうかなあ…」

セリアを心配したイアンが、いつかの様に彼女の部屋の窓を訪問していた。そう何度も来ては見つかるのでは、とも思うがこの時間に学生が外を出歩いている事はまず無いので大丈夫だろう。

「取り敢えず、お前が気を付けてれば一応は大丈夫だろうな。どうだ、出来るか？」

「それくらい出来ますとも。心配しないで」

「：お前、それ本気で言ってるのか？」

「どういう意味よ？」

セリアがムツとした風に聞けばイアンは失言した様に頭を押さえながら息を吐いた。その様子にセリアが更に不満を募らせる。

ここで何を言っても彼女には無駄だろう、と判断したイアンは、分かった分かったと、まるで聞き分けの無い子供をあやす様にセリアの頭に軽く手を乗せた。子供扱いされたセリアはどうも納得出来ない様子だ。

唇を尖らせるセリアに思わずククツと笑ったイアンだが、すぐ横で窓の開く音がして止めた。驚いてそちらを見やると、青髪の少女が窓から顔を出している。

「お話中悪いんだけどね」

「ア、アンナ」

「密会が良いのだけど、もう少し静かにしてくれるかしら」

「え？ あっ！ その、ごめん」

密会、等という言葉が平気で使うアンナに、セリアも一瞬たじろいだが、取り敢えず煩くしてしまった事に頭を下げた。

セリアが謝罪すると、アンナは今度はイアンに向き直った。何処か鋭い視線にイアンも思わず背筋を伸ばしてしまう。

「マリオス候補生のイアン・オズワルト様ですね」

「あ…ああ」

「候補生の方ならご自分の行動には責任を取られると思いますが、連帯責任でこちらも処分される様な事態は避けて下さい」

「も、勿論だ」

言いたい事だけ言うと、アンナはそのまま自室へ引っ込んだ。その様を少しの間呆然と見ていたセリアとイアンだが、その内に二人で同時にクスクスと笑い出した。

「変わった友達だな」

「というより、良き隣人かな」

暫く二人で忍び笑いをしていたのだが、また隣人の邪魔をしては悪いと、今度はヒソヒソと内緒話でもするように話始めた。

暫く聞こえていた笑い声が静まると、アンナは漸く本に集中する事が出来た。

隣の部屋に栗毛の地味な少女が来てからというものの、周りが騒がしくなる事が多くなったな、とアンナは実感する。誰かが騒がしくするのも、校則を破るのも構わないのだが、それが寮の隣人となれば少し気になる。この学園はそれなりに厳しい上に、連帯責任とい



う物が存在するのだ。自分まで被害を被るのは是非とも避けたい。

それに、彼女と自分の距離が近い為、面倒がこちらまで及ぶ事だ  
つてあるのだ。初めて彼女を見た時、山積みになった椅子が自分  
の部屋へ入る扉を塞いでいた。それなりに噂が立っていたあの状況  
で、何が起きたかを察するのは難しくない。あの頃に比べれば幾分  
か落ち着いたが、また厄介な事に巻き込まれるのは御免である。ま  
あ優秀なマリオス候補生の事だ。進んで周りが迷惑する様な事態を  
作る事はしないだろう。

などと考えているアンナだが、イアンに釘を刺したのは多少なり  
ともセリアを心配しているから。……………だと信じたい。

クラス内で起きた事件から一晚経った今、セリアは窮地に立たさ  
れていた。

「……………」

「聞いているの!」

「あの…」

「あんな卑劣な真似をするなんて。恥ずかしくないのかしら?」

「いえ、ですから。あれは私ではなく…」

「そんな事が聞きたいのではないわ!」

廊下を普段通りに歩いていたのだが、数名の女子生徒に囲まれて  
しまった。昨日の説得で多少は納得してくれたとも思ったのだが、  
そうはいかない生徒も居たらしい。やはり全て自分で返しに行くべ  
きだったのか、ここに居るのは被害にあった物の返却をアシリアに  
頼んだ分の持ち主達だ。それに混じって全く関係無い生徒の姿もあ  
るのだが、これは日頃のセリアに対する恨みを晴らすべく集まった  
者達である。

「候補生様達に気に入られてるからって、好い気になっているので

はなくて！」

「本当に。貴方みたいなのが、一体どうやって取り入ったのかしら」  
いやいや。確かに候補生達とは親しくさせて貰っているが、何を好い気になるというのだ。そんな要因は全く無い。それに、マリオス候補生である彼等が簡単に誰かに取り入られる程度の器ではないと思うのだが。それを實際口にさせて貰えそうな雰囲気ではないが。しかし困った。このままでは、自分が犯人にされてしまうではないか。そうなれば、最悪の場合退学もありえるし、そうでなくとも実家から呼び戻されてしまうかもしれない。そんな事態を避けるため先程からこうして否定しているのだが、最初から彼女達に聞く気は無いようで、同じ事の繰り返しである。

「君達。何をしている」

唐突に響いた声に弾かれたように全員がそちらを見た。視線の先ではこちらへ向かって歩いてくる、ランとイアン、それにルネの姿。廊下の向こうから堂々と光を放ちながら歩いてくる姿に、その場の誰もが気圧されてしまう。三人の姿など見慣れている筈のセリアでさえ言葉に詰まる程に今の三人は威圧的な空気を纏っていた。

「あ、あの…昨日、クラスで私達の私物が紛失して…その事で少しお話を」

「そうです！それがセリアさんの鞆から見つかったんです」

それを聞いてラン達は思わず出そうになるため息を堪えた。予想はしていたが、やはりこうなってしまったか。気をつけろ、と言ったのはこういう状況にもならないよう注意しろ、という意味も込められていたのだが。やはりというか、セリアにはそんなこと欠片も伝わっちゃいない。

「それは聞いている。が、彼女はそれを認めてはいないのだろうか？」

確認する様にランが言えば周りの生徒も、うっと言葉に詰まる。  
しかし、やはり納得いかない者もいるようで縋る様な目でランを見

詰める。

「でも、証拠があるんです」

「まだ決定的とはいえない。それに、彼女が今回の様な事をする人物ではないと私は信じている」

スパッと言い切られ、今度は誰もが口を噤んだ。決意の籠った声で言うランに、誰も何も言えなくなってしまったのだ。やはり迫力というか、貫禄が違うのだろう。

「今回の件は、解決の為に我々マリオス候補生も尽力を尽くす積もりだ。なので、彼女を疑うのは待って欲しい」

その姿は今までに見ないほど凜としていて、神々しささえ醸し出している。その姿に暫く見惚れていた生徒達が「失礼しました」と慌ててその場を立ち去ると、その光景を呆然と見ていたセリアも正気に戻った。ここまで言ってももらえるとは、なんだか申し訳ない気持ちと、自分には勿体ない様な感じとで一杯になる。

とにかく、助けてくれた彼等に礼を言おうと向き直ると、口を開く前に頭の上に手を置かれ、驚いて出かけた言葉を飲み込んだ。

視線を上げると、自分を優しく見詰める三人の瞳と合う。その目が「心配するな」と言っている様で、なんだか安心してしまった。しかし同時に、また彼等に迷惑をかけてしまったな、と後ろめたい思いも湧いてくる。しかし、そんな考えを押しつけるようにイアンが乗せてくれた手が力強く頭を撫でるので、それにほっと安堵してしまう。学園に来る前は味わった事の無いものだ。

「行こうセリア」

ルネに優しい声でそう言われ、セリアは大人しくそれに従った。

候補生がセリアを庇った、という話はセリアを囲んでいた生徒達によって瞬く間に学園中に知れ渡った。多少の尾ひれがついたその噂を聞いた殆どの女生徒達は更なる嫉妬の炎を瞳に宿し、他の生徒

は候補生がこの件をどう解決するかと興味を抱いた。教師達でさえ候補生が動いてくれるなら、と安心する。

学園を飛び交う噂は、当然の様にある生徒の元にも届き、それはその者に大きな決断をさせる事となった。



## 焦燥 4

候補生達が弁明したことによって、セリアへの強い追求は無かったものの、やはり疑いは拭いきれないようだ。といってもあのマリオス候補生が言うならば、と彼等の言葉に大半は納得していた。それに、今回の事は候補生が自ら解決すると申し出た事で、その勇士が見れると喜ぶ者も居る程だ。

しかし、セリアが窃盗犯ではないと証明出来ていないのも事実。セリアは、立場的に非常に微妙な位置に立たされていた。

そんな状況の下、セリアは言われた通り、出来るだけ周りに気を配りながら生活していた。のだが、変化などは微々たるもので、警戒心がこちらに伝わって来ない。警戒している積もりなのか、時折思い出したように周りをキョロキョロと伺う様は、どちらかといえは迷子の姿に近かった。

そんな、用心しているのかいないのか分からない様な状態が続いて三日。治まりかけていた窃盗事件の騒ぎがぶり返す事態が起きた。また数名の女生徒の私物が紛失したのだ。今回盗まれたのは指輪やブレスレットなど、小さいが高価な物ばかり。前回に比べて数は少ないが、価値は同等になる。

当然、クラスから疑惑の目を向けられたのはセリア。事件を知って即座に自分の鞆や机の中身を確認したが、何も入ってはいない様なので取り敢えず一安心である。

しかし、ぼんやりとしている訳にもいかず、セリアはクラスの視線から隠れる様に急いで教室を出た。

教室から少し離れた所で、一人になれた事に安堵し、ホッと胸を

撫で下ろしたセリアの肩を誰かがトンと突いた。

「セリアさん……」

こちらを心配げに見るアシリアに、セリアも困り顔を向ける。生徒達が常に注目していた窃盗事件の噂が広まるのは早く、当然の様にその話はアシリアにも届いていた。

「また大変な事が……」

「そうみたいですわね」

まるで他人事の様に話すセリアは、何処か遠くを見詰めている。これから起こる厄介事を考えると、一気に脱力感が襲う。何かが起こっても、また彼等に甘えるのもどうかと思えるだけ一人で解決しようと考えた。しかし、候補生達にその事を話した途端、キツく睨まれ却下された。その上、何かあれば必ず報告する事を約束させられてしまい、結局また彼等を頼る羽目になってしまったのだ。勿論、自分一人で解決出来る自信など微塵も無いセリアにとっては有り難いのだが、こんなに彼等に甘えても良いのだろうか疑問にも思う。

「候補生様方にお知らせした方が良いのでは」

「……はい」

「……………」

温室にセリアが足を踏み入れた途端、聞こえたのは大きなため息。恐る恐る顔を覗かせれば漂ってくる重苦しい空気に一瞬怯んだ。あれだけ注意するように言われていたにも関わらず今回の様な事態になったのは自分にも責任があるので、申し訳ない気持ちで一杯になる。

「取り敢えず、鞆の中身は確かめたんだよな」

「うん。さっき見た時は大丈夫だった」

一番肝心な事は、これ以上セリアの立場が危うくならない事である。再びセリアに疑惑が向けられる様な事態はを避けるため、そこだけはしっかり確認する必要があるのだ。先程教室では、鞆にも机にも何も入ってはいなかった。それを聞いて他の者も幾分安堵した顔を見せる。

「本当に大丈夫ですか？」

そんな中で、不安を抱えた顔のままアシリアが呟いた。

「前回もセリアさんの知らない間に入っていたのですよね。今回も気付いていないだけかも」

そう言われてしまえば不安がぶり返してくる。まさかと思っても、もう一度確認した方が良さだろうか。

そう思ってセリアが立ち上がり鞆に手を伸ばす。が、その手を遮るようにアシリアがセリアの鞆を取った。

「私が確認します」

「えっ！？ちょっ…！」

突然の事にセリアが咄然としている間にも、アシリアはセリアの鞆を開け中に手を突っ込んだ。静止するのも忘れてセリアがその様子を伺っていると、アシリアが即座に驚いた様な顔をする。ゆっくりとアシリアが鞆から手を出しセリアに向かって伸ばした。

伸ばされた手の中に握られていたのは小さな指輪。

「…！？」

慌ててセリアが鞆の中の物をテーブルに広げ確認すると、出て来たのはブレスレットやイヤリング。それを見てセリアの顔からは血の気がサアツと引いていく。

つい先程は確かに無かった筈なのに、何故。そんな疑問が浮かび、呆然とする。これではもう言い逃れ出来ないだろう。二度も自分の鞆から盗品が見つかったのだ。犯人と確定されても可笑しくない。

「セリアさん……」

呆然と自分の鞆とその中身を見つめるセリアにアシリアが向き直



った。

「セリアさんではないんですよね」

「も、勿論です!!」

「分かりました」

セリアの答えに納得したような顔を見せたアシリアは、盗品と思われる物を掻き集めてそのまま背を向けた。

「これは、私の鞆に混じっていた事にします」

「ええ!! ちよっ! いけませんよ、そんなの!」

「いいえ。そうさせてください」

セリアの静止も聞かずにアシリアは温室を走り出て行ってしまった。しかし、それをセリアが黙って見送る筈も無く、慌てて後を追う。

温室から離れた場所で何とか追いつき、アシリアの説得を試みた。いくら自分の為とはいえ、それでは今度はアシリアが疑われてしまふではないか。そんなことをアシリアにさせる訳にも行かず、セリアは必死にアシリアを納得させようとした。その甲斐あってか、最初はかなり渋っていたアシリアも遂に根負けした。そして躊躇い勝ちにセリアに持っていた物を渡す。セリアはそれを受け取り、よしっ、と気合を入れた。

今回は数が少ないので返すのは直ぐに終わりそうだ。が、これらの持ち主の説得に時間が掛かるだろうな、と考えると肩に重荷が乗る様な気がする。

セリアとアシリアが去った温室内では、候補生達が頭を抱えていた。あれほど注意しろと言ったし、自分達もそれなりに気を配ってもいた。にも関わらず、この様な事態に陥ってしまったのは、少なからず彼等の自尊心を傷つけた様だ。

とにかく、戦況は頗る悪い。セリアは当然学園側からも疑われるだろう。仮にもプライドが高く、品行方正を望む貴族達が通うフロース学園である。最悪の場合、即刻実家へ送り返されてしまうかもしれない。勿論候補生達も弁明はする積りだが、それも二度目となれば何処まで通用するか。

いよいよ、盗人を生徒と教師の前に突き出す以外方法が無いかもしれない。

候補生達が真剣な顔で考えていると、今までただ状況を見ているだけだったカールが徐に立ち上がった。どうしたのか、と他の者が彼の様子を伺っていると、カールが手を伸ばした先はテーブルの上に乱雑に広げられたセリアの鞆の中身。迷い無くその中であつた一つの物を掴み上げるとカールは無言のままそれを見詰めた。候補生達がカールの手視線を向けるとそこにあつたのは金色に輝く小さな輪。大きさに腕輪だろうそれは、幾つかの小さな宝石があしらわれていて、いかにも高級感が漂っている。

絶対にセリアの私物では無いだろうそれを、カールのいつも以上に冷ややかな目が睨んでいた。

「あいつら、一つ忘れていったのか？」

だとすれば、セリアに届ける必要があるだろう。今の状態では、返す物が一つでも紛失していればそこに漬け込まれかねない。

そんなイアン達の思いとは別に、カールはその腕輪をあるうことか自分の制服のポケットに入れてしまった。

「お、おい。返さないのか」

「その必要は無い。これは元々私の私物だ」

「!？」

驚いた表情を見せる候補生達を尻目にカールは尚も続ける。

「大方の見当は付いていたが、これで確証を得た」

「ちよっと待て……どうということだ」

「この事は誰にも話すなど、あれには言っていた」

「……？」

どう考えても言葉が少ない説明に候補生達が分からない、といった表情をすると呆れたような視線を向けたカールが答えた。

「気付かないのか。アシリアという娘はこれが盗品に含まれていないと知っていたのだぞ」

それを聞いた瞬間、候補生達も何かを察したように目を見開いた。明らかにセリアの物では無い腕輪を、アシリアは手に取らなかった。どちらかという物質で地味な物で統一されているセリアの持ち物に紛れていたにも関わらず。あれだけ目立つ物を見落としたとは考えにくい。ならば盗品ではないと分かっている、意図して返す物には含まなかったのだ。

これがセリアならば、カールから預かっている本人なのだから知っていても当然である。しかし、アシリアは違う。セリアが話してなければ知り得ない事実を彼女が知っていたのは何故だ。答えは一つ。それが盗品かそうではないかを把握していたから。そして、それが分かっているのは盗んだ本人のみ。

「まさか、アシリアが？」

「お前達も感づいていなかったわけではあるまい」

冷たく言われて候補生達も言葉に詰まった。カールの言う通りだったからだ。

確かに、アシリアの動向や言葉には何処か陰が見え隠れしていた。気位の高い令嬢達には珍しく無い事かもしれないが、思うところが全くなかったわけではない。しかし、セリアの友人という事で無意識にもその考えから目を逸らしていたのだ。揉め事になれば、セリアが自分達とアシリアの間で板挟みになっただろうから。

しかし、セリアの為にも、そうするべきではなかったのかもしれない。

「でも、こんな事をする理由が……」

「大方の予想は付いているだろう」

冷たく言われたカールの言葉に候補生達は自然とランに視線を送る。

アシリアは、自分達候補生に対して丁寧な態度を貫いていた。まさに候補生を尊敬しています、と言わんばかりに。そこまでなら他の生徒達と同様だ。しかし、一人だけ、他の候補生とは接し方が違う者が居た。それがランである。瞳に何処か熱を持ってランを見つめるアシリアの様子に、気付かなかった訳では無い。当の本人以外は……

何故自分に視線が集中するのか分からないランは、困惑した表情を見せた。アシリアの一連の行動の動機に思い当たる節が無いランは、他の者が行き着いた答えを聞きたい様子だったが、彼等にそれをわざわざ説明してやる気は無い様だ。

「……セリアにはなんて？」

「ありのままを話せば良い」

「……………」

セリアの私物はまだここにある為、盗品を返し終わればここへ戻ってくるだろう。伝えるのはその時になる。

今は待てば良いのだが、真相を知った時のセリアを思うと、気持ちが重くなった。

全ての物を返し終えたセリアは、背を流れる冷や汗を感じながら、今の現状からどう抜け出そうかと思案していた。

「やはり貴方だったのね」

「もう我慢も限界です」

「学園側に突き出してやりましょう」

案の定、被害にあった盗品の持ち主達に、セリアは盗人と確定付けられていた。先程から 何度も否定はしているのだが、全く聞き入れて貰える様子がない。まあ、当たり前かもしれないが。

「貴方もなんとか言ったらどうなの!？」

「ですから、私ではありませんと……」

「そんな事聞き飽きたわ!!」

そう言われても、何か言えと言ったのは向こうではないか。このまま水掛け論を繰り返しても何にもならないのだが、だからといって話し合いなどする気の無い彼女達が、このまま引き下がるとは思えない。

どうしたものか、とセリアが内心考えていると、緊迫した空気に似つかわしくない穏やかな声が響いた。

「どうしました？」

その場にいた全員が弾かれたように振り向いた先では、声の主のヨークがニコニコとこちらに向かって近付いて来る。

突然の教師の登場に女生徒達は盗人を突き出すのに好都合だとばかりに詰め寄った。

「ヨーク先生。紛失した私達の私物が、またセリアさんの鞆から見つかったんです」

「その件でしたら、マリオス候補生達から報告がありましたよ。なんでも、じきに解決しそうだとか」

思ってもいなかったヨークの言葉にセリアも目を見開く。ついさっきまで温室に居た彼等が何時そんな報告をしたのだろうか。それに温室で会った時には、そんな話を聞いていない。

そんな疑問を思い浮かべているセリアの周りでは、先程まで彼女を取り囲んでいた生徒達が動揺を見せていた。いくらセリアをこの場で突き出したいといっても、候補生が解決したとなれば自分達が出しゃばる訳にも行かない。そうは思ってもやはり納得出来ない生徒もいるようで、尚も食い下がる。

「ですけど、こちらには証拠が……」

「今はまだ詳しい事は分かりませんが、彼等に任せようと思っています」

笑顔で言われてしまえば、生徒達も口を噤むしか無くなる。分が

悪いと判断した彼女達は、挨拶もそこそこその場を去って行った。足音がその場から消えた頃、取り残されたセリアが恐る恐るヨークに聞く。

「あの…ヨーク先生」

「はい？」

「候補生の方達は、本当に解決出来たと…？」

「はい。自分達では非解決したいと、先日報告を受けましたよ」

「え？…えええ！！」

大袈裟な程声をあげたセリアを気にせず、ヨークは絶えず笑みを振りまいている。清々しい笑顔を向けられたが、そんな事気にしている暇は無い。予想していた答えから大きく離れた言葉にセリアは混乱した思考を必死に纏めようとしたが、更に混乱してしまう。

確かに、自分達が解決したいと彼等は申し出た。その影響力は凄まじく、流石はマリオス候補生と賞賛の声も上がるほどだ。しかし、先ほどは解決した、と言った。いや。彼等が解決すると言ったなら、それはもう解決したと教師達は取っているのだろうか。所詮は生徒間のいざこざだ。マリオス候補生にかかれば朝飯前、と思われているのかもしれない。

グルグルと回る思考を追いかけるセリアを観察しながら、ヨークは穏やかな声を発した。

「色々あるとは思いますが、今は頑張ってください」

それだけ言うと、またヨークはのんびりと廊下を歩き出した。なんだかお年寄りが散歩をしている様な雰囲気は、この場には全く似つかわしく無いが、先程の現状から抜け出せた事にセリアはホッとする。

少し落ち着いてヨークを見送っていると、後ろからまた声を掛けられた。

「セリアさん」

「あっ！アシリアさん」

ここ数日でよく見るようになった心配気な顔を向け、アシリアは立ち尽くしていた。緊張しているのか、スカートを握る手に汗が滲んでいるようにも見える。どこことなく普段とは違った空気を纏ったアシリアに、どうしたのか、と訪ねると一呼吸置いてゆっくりと口を開いた。

「あの……今回の事で少しお話したいことが……」

「あっ！なら温室に行きましょう。皆も待っているでしょうし」

窃盗事件の事を言っているのだな、と察したセリアの言葉にアシリアは首を横に振った。事件の事で何か分かれば必ず知らせろ、とキツく言われているセリアは首を傾げる。アシリアならば、何か気がついた事があれば真っ先に候補生達に相談するだろうと思っていたからだ。

「出来れば、二人でお話したいんです」

「はあ。でも……」

「私……」

何かを言いかけたセリアの言葉を遮ってアシリアが続ける。今までに聞いた事のない程大声を発したアシリアにセリアも驚いた。

アシリアは、何度か口を開けたり閉じたりを繰り返しながら懸命に言葉を出そうとしている。それをセリアも黙って見守っていると、漸く決心がついたのか、アシリアが言った。

「この件で、盗んだかもしれない人を知っています」

「ええ……」

また再び大袈裟に声をあげて、飛び上がって驚くセリアに、アシリアはまるでとんでもない事を言ってしまったかの様な顔を向けた。「それじゃあラン達に言わないと……」

「でも！もしかしたら違うかも知れないし。間違っていたら、私とても失礼な事をした事になって。でも、セリアさんが疑われる様な状況をなんとかしたくて」

一気に捲し立てる様にして言ったアシリアの言葉をセリアはゆっ

くりと理解する。

犯人だと思っていた人物が全くの無実の人間だったとしたら、それはお互い気分の良いものではないだろう。でも、アシリアとしては、一刻も早く事件を解決したい訳で、怪しいと思った者を放っておくのも憚られるのだ。しかし、確証も無いのに大きな影響力を持っている候補生達に告げるのにも戸惑いを覚える。なので、事件の当事者であり、友人でもあるセリアに相談して判断を仰ごうと思ったのだ。

「分かりました。それで、その人というのは？」

「その……ここでは誰が聞いているか分からないので、出来れば二人つきりになれる所へ行きたいのですが」

学園では誰が何処で聞き耳を立てているか分からないものである。アシリアの意見ももつともなので、セリアは思い当たる場所を頭の中に描いていく。

「じゃあ、少し待っていて下さい。鞆を取ってきますから」

「ああ。それでしたら、先ほど候補生様方が寮まで届けて下さると言っていましたよ」

「へっ！……そうですか」

なんとも用意周到のアシリアに、セリアから乾いた笑いが溢れる。まさかそこまで先を考えていたとは。というより、彼等に鞆を届けてほしいだなんて、頼んでも良いのだろうか。ここまでしてくれるのは有り難いのだが、候補生達にもアシリアにもなんだか申し訳無い気持ちになる。

「それじゃあ、行きましょう」

「はい！」

二人きりになれる場所、と聞いてセリアは思い浮かんだある場所へ向かうべく足を動かした。



「……遅い」

温室では真相を伝えるべくセリアを待っていたのだが、何時まで経っても気配すら見せない少女に候補生達は痺れを切らしていた。

「何時まで掛かってるんだ。返す数は少なかったはずだろ」

「もしや、何かまた揉め事に巻き込まれているのでは……」

「だとしたら、さっき様子を見に行ったルネがなんか聞いた筈だ。何も無かったんだろ」

苛立ったイアンが確認する様にルネを見れば、彼も心配した様に頷いた。

「特に問題が起こってる様子は無かったよ。セリアの姿も見なかったけど」

あまりに遅いセリアを心配してルネが一度学園へ探しに行ったのだが、結局見つける事は出来ずに終わった。

セリア達が出て行ってから軽く三時間は経過している。鞆がここに置きっぱなしになっているのだから、そのまま寮へ戻ったとは考え難い。一緒に行ったアシリアも気になったが、直ぐに大きな行動を起こす事はしないだろうと思いきや安心してはいたが、その考えは間違っていたのだろうか。

時刻は夕食時に迫り、もう校舎に残っている生徒も殆ど居ない。

「先に寮に戻られたのでは」

この場所は候補生とセリア、最近ではアシリアもだが、以外が使う事は滅多に無く、一晩くらい私物を置いていても平気だろう。そう思ってそのまま鞆を残して寮へ戻ったのかもしれない。

「とにかく、様子だけでも見に行った方が良さそうだ」

ランの言葉に他の者も頷くと、全員がゆっくりと立ち上がった。

すっかり夕食時になり殆どの生徒は食堂に入っている。セリアが居る場所としては一番可能性が高いので、まずはそこを覗く事にした。食堂へ向かう間も、ちらほらと見える生徒の中にセリアの姿が無いかと探したが、とうとう見つからずに食堂まで着いてしまった。仕方が無いのでそのまま中へ入ろうとした候補生達に突然後ろから声が掛かった。

「失礼します。イアン・オズワルト様」

「あっ！アンタは……」

呼ばれたイアンが振り向けば、何時か見たセリアの隣室の主であるアンナがこちらを見ていた。癖なのだろうか、青い髪を弄りながらこちらをじっと見ているアンナに近寄ればすぐに用件が伝えられた。

「セリア・ベアリットさんですが、まだ寮に戻っていないんです。食堂にも居ませんでしたし。何か面倒な事に巻き込まれているのはありませんよね」

面倒な事も連帯責任も御免だ、とばかりに発せられたアンナの言葉に、イアンはしまったと焦りを見せた。

まさか、こんなに早く行動に出るとは。やはりアシリアと二人きりにするべきではなかったのだ。

「分かった。この事は俺達が何とかする。知らせてくれて助かった」  
早口で言うと、イアンは急いで自分を待つ候補生達の下へ駆け出した。

その姿を見てアンナは、はっと短く息を吐く。何とかすると言っていたが、彼女が巻き込まれる面倒事の根源は少なからず彼等にあるのだと、少しでも理解しているのだろうか。

それに、隣人の行動にも疑問が湧く。彼女に対する風当たりは、やはりどう考えても良いものではない。自分には関係の無い事だが。しかし折角、影響力も大きく、実力も備わった候補生達と共にいるのだから、彼等に相談するでも泣きつくでも出来るだろうに。そうすれば、自分まで厄介な事に首を突っ込む必要も減るだろう。しか

し、そんな気配は全く無い。恐らく、隣人の中にそういう考えは存在していないのだろうな。

という結論に達したアンナは、もうこの場に用は無い、と自分の部屋へと戻って行った。

「いない!？」

「ああ。寮にも戻ってないらしい」

イアンの言葉に候補生達の間には緊迫した空気が流れた。

「とにかく探そう。学園内にはいるはずだ」

とは言うが、必要以上に広いこの学園を探すのにどれ程時間が掛かるだろうか。しかし、だからといって捨て置く事も出来ない。

すぐさま数名の地を蹴る音が食堂の前に響き、走り去る足音は薄暗い空に溶けていった。

## 焦燥 4（後書き）

アシアの気持ちはきつとランには届かない。だって、ランはいつでもそうだったから。

でも、だからこそ今回の事が起きたのかな。だとしたら、巻き込まれたのはセリアなんだよね。だから、早く探さないと。

でも、何を言えば良いんだろう。

## 焦燥 5

すっかり日も沈み、夜の時間帯になる頃、セリアに連れられたアシリアは学園内のある場所へ来ていた。

「ここは……」

あまり人の来ない場所、と聞いてセリアが思いついたのは、ランとカールが決闘の場所として選んだ林に面した池の畔である。昇り始めた月が水面に映し出され、まるでそのまま二つ目の月が落ちている様だ。

ポツリと零したアシリアの言葉にセリアが返す。

「ここ。ラン達と初めて会った場所なんです」

「……ランスロット様と」

アシリアはギリツと唇を噛み締めたが、闇が邪魔してその姿はセリアには見えなかった。噛んだ唇を離すと、自分の少し前に立っているセリアにゆっくりと近づく。

そういえば、あの時は夢中で二人の間に入ってしまったのだったな。などとセリアは懐かしんでいるが、その横をアシリアが静かに通り過ぎたので本来の目的に集中する。

「あの、それでお話というのは」

「……」

自分を通り過ぎて池の近くに佇んでいるアシリアに声を掛けたが、その返事はいくら待っても返って来なかった。不審に思い、沈黙を守っている背中にもう一度問いかけると、その肩がゆっくりと上下する。アシリアが大きく息を吸うと、静かな声がその場に響いた。

「例の事件を起こしたのは……」

いよいよか、とセリアは真剣な面持ちでアシリアの次の言葉を待った。

「セリアさん。貴方ですよね」

「……はっ!？」

言葉の意味よりも、アシリアの今までに聞いた事が無い冷たい声に驚いて一瞬理解が遅れた。はっとして前を見れば、ユラリと怪しげに振り返るアシリアの姿。月明かりに照らされた少女は、普段の穏やかな性格からは想像もつかないほど冷ややかな目でこちらを睨んでいる。それはもう、何処かの魔人様もびっくりな程であろう。

「ち、違いますよ。私では…」

「いいえ。貴方です」

否定しようとした言葉を遮り、きっぱりと言われてしまってセリアも困惑する。

彼女の雰囲気からして明らかに冗談を言っている風ではない。しかし、なんでこんな状況になっているのか分からない訳であって、どう解釈したら良いのだろうか。

「人の物を盗んだのだから、学園を出て行くべきではありませんか？」

「えっと。ですからそれは」

「……………なんでよ！」

突然響いたアシリアの怒鳴り声にセリアもビクリと肩を振るわせる。そんなセリアに構わず、アシリアは髪を振り乱す勢いで続けた。「なんで貴方みたいなのが、ランスロット様の傍に居られるの!？」  
ずっと、彼等を見て来たのだ。長い間ずっと。近寄る事も出来ず、でも忘れる事も出来ずに。

今でも聡明に覚えている。初めて彼等を見た時の、あの衝撃を。国の期待を一身に背負い、それに見合う光を放つ彼等は、いつでも周囲の憧れと羨望の眼差しの的だった。

自分も同じ様な視線を向けていたが、その内に彼等の一人に強く惹かれているのに気付いた。始めは戸惑ったが、それを幸せに思えたのだ。例えそれが憧れの延長線であっても、自分にはそれで十分だった。

ランスロットに対し、自分と同じ様な感情を持つ者がどれだけ居るかなど知っていた。それも当然だろうと納得もしていた。しかし、そこから一步踏み出した者達の中に、望む結果を得た者が居ないのも事実。

どんな相手に対しても丁寧に接する様から、彼にとって大切なのは国と彼の仲間であると、何度も見せつけられた。女性に対し、優しく、そして決して決して特別を作らずに一線引いて接する場を見ては、その事は痛感したものだ。

しかし、それは自分も特別にはなれないが、他の誰もが同じだという事。それならば、遠くから見ているだけで十分だ、と決心した。自分達が、その特別の地位を望むなど恐れ多いと思うほど、彼等は高嶺の花であったから。

しかし、どんなに頭では理解していても、僅かな夢を見てしまうものだ。もしかしたら、自分を見てくれるのでは、と。少しでも彼等に近づける様に、少しでも彼等に見合う様に、と今まで必死に努力してきた。自分が生まれ持った「女」を磨いて、彼等の目に留まるように。それだけで、儂い夢を保つ事が出来たのだ。その状態が続いていけば。

「いきなり現れたクセに！」

「……………」

それなのに、いきなり現れた冴えない転校生が、たった数日の内に彼等の隣に居た。今まで自分が思い描いていた、彼等の隣に立つ女性像とはかけ離れている地味な少女。始めこそ、彼女が彼等に勝手に纏わり付いているのだろう、と思っていたが、その考えが間違いだった事に直ぐに気付く。長い間ずっと彼等を見ていたのだ。微妙であっても接し方や態度が変われば分かる。彼等はその地味な少女を、今までの一線引いた間柄ではなく、確かに仲間として見た。

「ランスロット様に相応しくもないクセに！」

セリアに近づいて、彼女を知っていく内に、自分の中で黒い物が段々と成長していくのを感じた。知れば知る程、セリアは自分の理想からかけ離れた存在だったからだ。これが、自分が目指しながら思い描いていた、完璧な貴族の令嬢に近い存在だったならば、まだ諦めもついただろう。

しかしセリアの行動は、まるで今までの自分の努力を嘲笑うかの様だった。裁縫の一つも満足に出来ず、奥床しさの欠片も無い。礼儀作法も完璧にはこなせていないセリアを、彼等はそれでも受け入れたのだ。

それを見た瞬間、自分の中で何かが切れた。抑えの利かない何か

「始めに階段から突き飛ばしたのも貴様か」

アシリアのでもセリアのでもない、まるで背中を這い上がる様な恐ろしい声が後ろから掛けられた。驚いてセリアが振り向くと、そこには木々の間に立つ魔人様。その睨みは決して自分に向けられている訳ではないが、横から見ているだけで竦み上がりそうである。しかし、アシリアはその視線を受け止め、剩え睨み返しているのだから驚きだ。カールの突然の登場にも、全く同様していないようである。

「あれで候補生様が離れて行ってくれば良かったのに」

もし、彼等がセリアから少しでも離れて行ってくればそれで良かったのだ。セリアなど、取るに足らない存在だと、自分達が恐れるに値しない存在なのだと、示してくればそれで満足出来た。しかし、そんなアシリアの期待を見事に裏切って、彼等はセリアに対する信頼を自分に突きつけたのだ。

だから今回の事を起こした。



アシリアとカールのやり取りを聞きながら、セリアは幾らか心が痛んだ気がしていた。普段はこれでもか、という程鈍い頭をフル回転させ、必死にこの現状をまとめる。

つまりアシリアも、他の女生徒方同様、候補生と自分が親しくするのを快く思っていないのだろう。自分と友人になってくれたと思っていたアシリアが、まさかそんな風に思っていたとは。予想外なアシリアの行動は、少なからず衝撃を与えた。昔から、自分が好意を抱いた者からの拒絶や嫌悪には慣れている筈なのに。今までとそう変わらない筈なのに、ここまで打撃を受けるほど自分は弱くなってしまったのだろうか。候補生達が自分を受け入れてくれたから、自然と甘えが生じていたのかもしれない。

その内に、遅れていた候補生達も次々とその場に集まって来た。バラバラに探していたが、見当たらないとなると、やはりこの場所が思い浮かんだようだ。そして、アシリアとセリアを睨むカールを見て瞬時に状況を察する。

ランスロットもその場に来たことを確認すると、アシリアは一瞬怯んだが、またすぐにセリアを睨みつけた。

「何がどうあれ、それなりの処分は免れんだろう。退学は覚悟することだ」

「えええっ!!」

カールの言葉に驚いたのは当のアシリアではなく、セリアだった。オロオロとするセリアを、今度は何だと呆れ顔のカールが見やる。

「そ、そこまでする必要はないんじゃない?」

「自分を貶めようとした人間を庇うのか」

「庇うとかそういう事じゃなくて……実際被害も出てない訳だし」退学までする必要は無いのでは。と続けようとしたが、後ろから腕を掴まれ、それは叶わなかった。

「同情なんてまっぴらよ!!」

グイッと掴まれた腕を引かれそのまま池へ向かって投げ出された。咄嗟の事にバランスを崩したセリアは、重力に逆らわずそのまま落下していく。反射的にセリアが腕を伸ばしてアシリアの腕を掴むと、予想していなかったのか、二人分の体重を支えきれずにアシリアも一緒に落ちてしまった。

全く予想外の出来事に、候補生達は目を見開いて二人が落下していく様を見詰める他ない。バシッと派手な水音がして波紋が池の真ん中辺りで輝いていた月まで到達すると、セリアとアシリアは同時に水面から顔を上げる。

池自体はそんなに深くは無いが、頭から突っ込んだセリアは全身ずぶ濡れの状態だ。池の底に座り、胸の辺りまで水に浸かった状態で呆然としていたが、肩を掴まれ揺さぶられた為に直ぐに現実に取り戻される。

「なんで貴方なんかが選ばれたのよ!」

何度考えても、必死に思考を巡らせても、その答えだけが出て来ない。どんなに怒りを押さえようとしても、いくら諦めようとしても、最終的にその疑問が頭に浮かび、押さえつけた筈の感情がぶり返した。

「どうして、私じゃなくて貴方なのよ……」

セリアを揺さぶる手を止め、項垂れながら吐き出した言葉は、今までとは違いとても弱々しい。

「あの……アシリアさん……」

声を掛けた瞬間にギロツと睨まれ、条件反射でセリアは怯むがそれでも負けじと言葉を続ける。

「その……私と彼等はただの友人ですし、アシリアさんもそうだったではないですか。選ばれたとか、そうでないとかでは無いです。それに、どんなに好きでも人の嫌がる事はしてはいけないと思います。そんなことをしたら、アシリアさんが嫌われてしまいます」

その言葉にはっとしてアシリアが横を見ると、ランスロットの非常に残念そうな、悲しそうな瞳と視線がぶつかった。そして体から

サアツと血の気が引いて行く。セリアに言われて、漸く自分がした事は、ただ自分を更に彼等から遠ざける結果に終わったのだと悟った。それを覚悟していなかった訳ではない。しかし、ランスロットのあんな表情を見るのを、自分は何より恐れていた筈なのに。

セリアの言葉を理解すると同時にジワリと込み上げて来た涙を見られまいと、アシリアはサツと立ち上がりその場から駆け出した。

「……」

その場から逃げる様にして走り去ったアシリアを追おうとしたセリアを、候補生達が止める。

「今お前が行っても逆効果だろ」

「そうだね。少しそつとしておいた方が良いかも」

それでも心配そうな顔をするセリアの隣にすつとランが立った。驚いてそちらを向くと、彼はすぐさま上着を脱ぎ濡れた肩を覆う様に掛けてくれたのだ。

「ああっ！ふ、服が濡れるよ！」

「濡れたら乾かせば良い。それより、そのままでは風邪を引く」

慌てて上着を返そうとするセリアをラン自身が制した。

今の季節は冬に近い秋で、夜の風はかなり冷たい。そんな中、全身ずぶ濡れの状態でいれば、風邪でもなんでも簡単に引いてしまうだろう。セリアは、出来るだけ早く寮に帰した方が良い。アシリアの件は明日考えるところとして、セリアを安全に（これ以上何かに巻き込まれない様に）寮まで送るべく、候補生達は歩き出した。

候補生達に四方を囲まれるようにして歩いているずぶ濡れの少女の姿を見た一般生徒達は、ぎょつとしていたが、彼等の間を流れる緊迫した空気にさっと目を逸らす。

そんな視線に気まずい気持ちのまま女子寮の前まで来た所で、連行されている気分から解放されたセリアは、ホッと安堵の息を漏らした。

「今夜はお疲れでしょうが、出来るだけ身体を暖めて休んでください」

「じゃな」

無事セリアを寮まで送り届けると、候補生達もそれぞれのいるべき場所へ帰ろうと踵を返した。しかし、その背中をセリアが咄嗟に呼び止める。

「あ、あの！」

「どうした？」

「その、アシリアさんの事はもう少し待っていただけないかと」

「はっ………！？」

「えっと、まだ話したい事があるというか、なんというか」

当事者であるセリアが望むなら、それを優先させるべきなのだろう。待ってくれ、と改めて言われてしまえば、候補生達も言い返せなくなる。しかし、なにをする積もりなのかと不安になるのも事実。候補生達が眉を寄せると、セリアがまた焦りだす。

「候補生の立場も理解しておりますですが、被害は出ていないし、明日一日程で良いので、だから……」

もはや自分でも何を言っているのか思考が追いつかない状態だが、それでも必死に考えを言葉にする。その様子に候補生達もフツと笑うとゆっくりだが頷いた。これ以上粘られても、セリアの身体が冷えるだけだ、と思つての行動だ。漸く安心した様子のセリアにさっさと中へ入るよう施すと、彼等は今度こそ寮へ向かって歩き出した。後ろから大きな声でセリアが「ありがとう」と言つたのを聞きながら。

何に對しての感謝なのかは分からないが、自然と口の端が吊り上がってしまうは、気のせいではないだろう。

「……………」

セリアの意見に頷いたものの、彼等は実際どうしたものか、と悩んでいた。勿論、約束したのだからアシリアの件を学園側に報告する事はまだしない。しかし、だからといってセリアを不用意にアシリアに近づけてよいものだろうか。

「まあ、大丈夫じゃないかな。アシリアも、流石にもう何かする事はないだろうし」

「ですが、セリア殿に任せるのもどうかと」

思い浮かぶのは、頼り無さげなセリアの姿。なんだかんだと言っても不安は拭いきれず、候補生達は頭を抱えていた。

「なににせよ、お前も後々どうするか考えておく必要があるよな」

チラリとイアンが送った視線の先では、ランが思い切り難しい顔をしながら、なにやら考え込んでいた。一応、彼にもアシリアの行動の理由が伝わったらしい。見方によっては、相手の気を引く為にした可愛気さもある行為とも取れるのだが、それでもあまり気分の良いものではない。自分達の友人がそれで酷い目にあっているのだ。今回ばかりは快く受け入れられるものではないだろう。

しかし普段は女性に対して非常に寛大で、それを貫き通して来たランだ。アシリアも女性、という事でどう対処して良いか悩んでいるのだ。

「とにかく、様子を見る以外ないよな」

仕方が無い、といった風の言い方をするイアンに、それ以外方法は無いだろうと、再び肩を落とす候補生達の影が談話室にぼんやりと映った。

「退学願い!？」

「そうなのよ。急な話だね。何か聞いてない？」

午前の授業が終わった昼休み。クルーセルに言われた言葉にイアンとランは驚いた。

今朝、アシリアが校長室に来て退学願いを提出して行ったのだという。その場に偶然にも（いつものように）居合わせたクルーセルも理由を聞いたが本人が何も答えなかった為、最近彼女と親しくしていた彼等に何か心当たりがないかと聞いて来たのだ。

「いえ。自分達は何も……」

「あらそう。それにしても残念ね。セリアちゃんにとっても良いお友達だったのに」

「……………」

本当に残念だわ、とがっくりと肩を落とすクルーセルを置いてイアンとランは足早に歩き出した。セリアにもこの事を知らせる為だ。アシリアの退学願いは数日の内には正式に受理されるだろう。だとしたら、セリアと対話できる時間も限られてくる。昨日の今日でいきなりこれとは、どうもアシリアという娘は自分達が想像する以上に大胆な少女らしい。

廊下を去って行く二人を、クルーセルは先程まで嘆いていた姿がまるで嘘の様に微笑んで眺めていた。彼は常に周りで起こる物事を面白がっているが、今も実に楽しそうな目で小さくなっていく背中を見送っているのも、その為なのだろうか。クスクスと忍び笑う声が暫くの間廊下に木霊していた。

「……………」

「……………」

非常に微妙な空気が温室に流れる中、アシリアは休む事無くセリアを睨み続けていた。その視線を懸命に受け止めながらセリアはとう切り出そうかと考えを巡らせている所である。

廊下で偶然擦れ違ったアシリアをなんとか呼び止めここまで連れてくる事には成功したのだが、この後どうしたものか。

いや。ここで怯んではダメだ。彼女に会って確認したい事があったのではないか。と自分を奮い立たせなんとか口を開く。

「あの……」

「何よ！私は貴方に謝るつもりは無いわよ」

「うっ！あの、そう言う訳では……」

「だったら早くしてよ！私は貴方の顔も見たくないの！」

言われる度にグツとくるものがあるが、ここで怖じ気づく訳にはいかない。

「あのですね……アシリアさんは、その……ランのことが、す、好きなの、ですよ？」

さも自信がないといった風にアシリアに尋ねた瞬間、彼女の眼光に鋭さが増したので、今まで必死に抑えていたが遂に怯んでしまった。

「アナタ！私をバカにしてるの！？」

「い、いえ。決してそういう訳では」

「あんな素敵な方、惹かれないなんて無理よ！！」

そう大声で言われたアシリアの言葉にセリアはやっと納得する。昨日の会話で薄々だがそうなのかと予想していた。確証を得る為に確認したが、やはりそうだったのだ。

「あの、そのことランには」

「……今更……伝えられる訳が……」

「そ、そんな！ダメですよ」

「はっ！？」

思っていなかったセリアの反応にアシリアは聞き返してしまった。セリアにしてみれば、折角のアシリアの気持ちを部外者である自分が知っていて、本人に伝わっていない、というのは非常に勿体ない話ではないか、という事なのだが、それを今まで知らなかったのは自分だけということ、セリアは少しも理解してはいない。

「あの、私今からランを呼んできますから」

「ちよっ！？」

「そしたらランと少し話を……」

「待ちなさいよ！！」

今にも温室を飛び出そうとしていたセリアに遂に我慢の限界が来たアシリアは怒鳴りつけた。

「何処まで私を馬鹿にするつもり！そんなこと出来る訳がないでしょう！それに、私なんかランスロット様は相手にしてくれないわよ！」

一息で言い切ったアシリアは、激しく肩を上下させている。そんなアシリアにセリアは振り返ってゆっくりと口を開いた。

「あの……そんなことないと思いますよ。ランだってそんな女性の気持ちを無下に扱うようなことはしないと思うのですが」

「……………」

「それに、ランは凄く優しい人ですし。それはアシリアさんもよくご存知なのでは……」

あのランが他人を不用意に傷つけるとは思えない。何より、こんな美人に好かれてランも嬉しく無い筈が無いだろう、というのがセリアの素直な考えである。

「とにかく、少しここで待っていて下さい」

「あっ……」

困惑した表情のアシリアを置いて、セリアは温室を半ば飛び出す



勢いで出て行った。その姿を、止める間もなくアシリアはただ呆然と見送るしかなかった。

「あいつは何をしてるんだ？」

「……………」

温室の外でセリアとアシリアの会話を立ち聞きしていたイアンは、思わず隣のランに尋ねた。尋ねられた方も何と答えたら良いものかと表情を崩す。

決して立ち聞きする積もりでは無かった二人だが、セリアとアシリアのしている会話の内容を知って、入るに入れない状態だったのだ。そうして聞いている内に段々と妙な方向へ話が向かってきたので焦りだしたのである。

中の様子を伺っていると、セリアが外へ出てくる所なので、イアンはその場で呆然としているランを残してさっさと隠れてしまった。出て来たセリアは、その場に丁度探していた人物が居た事に驚いている様だ。

「ラン。あの、温室に用事だよね。えっと……私は用事があるので、先に中に入っていて貰えますでしょうか。宜しく」

変な喋り方をして、何か隠していますというのがバレバレであるセリアは、ランをそのまま温室へ押し込むと、自分はサッとその場を離れた。

頭の整理をする暇も無く、温室に入れられたランは、突然の来客に呆然としていたアシリアと同時に我に返った。そして、妙に胸の内がすっきりしない様な感情に襲われる。というより、セリアの行動にちよっとばかり不満を覚えた。アシリアと。自分に好意を寄せる人間と二人きりにして、それでセリアは何も思わないのだろうか。

と、そこまで考えて、自分の思考に疑問を抱く。自分はセリアに何を感じて欲しいのだ。いや、特に何も思っただけで欲しい訳では無い。それに、セリアのこれくらいの行動は不思議ではないではないか。直ぐに行動に突っ走ってしまう彼女だ。それは十分理解している訳であって、彼女の行動を不満に思う必要など無いのではないか。

しかし、そこまで理解しても、胸に捨てきれない行き詰まりの様な物は消えなかった。その事にも疑問を抱く。

「ランスロット様……」

弱々しく吐き出された言葉は自分の名前で、その声にはたと現実引き戻された。声の方を見ると、昨日の姿からは想像が出来ないが、力なくこちらを見詰めるアシアの姿。それを見て、ランはただぼんやりと残る疑問を頭の隅に追いやる事にした。

ランを温室に押し込めたセリアは、次の自分の役目を果たすため少し離れた場所で待機していた。彼女の役目とは、ランとアシアの話が終わるまで、温室に誰も近づけさせないというものである。二人を引き合わせたのは自分なのだから、これも自分がするのが当然である、とセリアは妙に気合いを込めていた。しかし、そんなセリアの意気込みを他所に、いきなり関門が現れる。

「よお、セリア」

「イアン！」

咄嗟に隠れた場所から、こっそりと回り込み何食わぬ顔で出来た来たイアンは、引き攣る頬を必死に押さえながらセリアに近づいて行った。その内でも内心では、一体何をしているんだお前は、と叫んでいるのだが。本来ならここはアシアの行った行為への対処を考えるべきであって、恋路を応援している場合では無い。にも関わら

ず、何をするかと思えば、また頭を抱えなくなるような事を。

「あっ！その……今は温室には近づかない方が良いというか。私がさせない、というか」

必死にイアンを遠ざけようとして、他人が聞けば若干物騒にも聞こえる言葉になっていたがセリアは気付いちやいない。

その姿にも笑ってしまいそうになるが、ここは我慢である。

「中にいるのはアシリアか？」

「……！？」

何故バレたのだ！？とセリアはかなり動転していたが、イアンが事の成り行きを立ち聞きしていなくても焦りまくっているセリアから容易に想像出来る事を、本人は全く分かっていない。

「アイツは今朝、退学願いを出したそうだぜ」

「えええっ！！」

「驚き過ぎだ」

驚愕したセリアを落ち着かせる様にイアンは彼女の頭に軽く手を乗せたが、あまり効果を成していない。

いきなり伝えられた事にセリアが驚くのも無理はないが、考えてみればそれは当然かもしれない。アシリアの行為が学園側に知れば、退学を進められる事は想像に難く無い。気位の高い貴族の令嬢が、学園から退学を言い渡されるのは堪え難いだろう。

それに、例え今回の事を候補生とセリアが学園へ真相を報告する事をしなくても、アシリア自身は恐らく学園に留まる事を良しとしない。もうセリアと友人関係を続けて行く事は出来ない、ので当然候補生達からも遠ざかる。再びセリアと候補生達が親しくする様を見せつけられながら過ごすのは、彼女にとって最も辛い事だ。

そうになると、これが彼女にとって一番良い方法なのかもしれない。「お前がそれで良いなら、そつとしいてやれ。勿論、学園側に何があったかを報告して、きちんと処分を決めて貰うのもありだが」イアンが言うと、セリアはブンブンと首を横に振った。予想通りの反応に、イアンも苦笑してしまう。今回、被害を被ったのはセリ

アだ。その彼女が良いというなら、自分達は口出しはしない。これが、昨晚彼等が出した結論である。

しばらく二人で温室を見守っていると、中から目を腫らしたアシリアが出て来た。そのままこちらを見ようともしせずに去ろうとするので、セリアも声を掛けられずにその姿を見守る。あつという間にアシリアは遠くの方を歩いていて、その姿を学園内で再び目にする事は無かった。

「やはり、今回も失敗か」

残念です。と語った口調は、全く残念そうではない。

学園内のある一室で、夜なのに明かりも点けずにその影は壁に背を預けていた。

今回は少し方向性を変えてみたのだが、中々上手くいかないものである。

「これで一体何度目だろうか」

まあ、元々見込みはなかったので、落胆も少ないが。しかし、この学園の生徒はいずれも自分の期待を裏切ってくれる。以前も、下らない理由で恨みを抱いた生徒に手紙を送ってみたが、それもあっさり失敗に終わった。やはり、憎しみや怒りで目を曇らせた生徒では駄目だという事だろうか。

いずれにせよ、自分に目が向く様な要素は何処にも残していないので、身の安全は全く心配していないが。

「まあ、多少の収穫は…」

今回の事で、事態が今までに無い動きを見せた事で、この先の行動もこの方面にしようかと考えた。そういう意味では、少しの成果があったといえる。

何にせよ、また次の機会を待たなければ。

しかし、焦る必要は無い。まだ時間は十分あるのだ。

暗闇に向かって怪しい笑みを送ると、その影は一度その顔を月に映し、再び静かに夜の闇に溶けて行った。

## 焦燥 5（後書き）

彼は常に高みを見据え、そこへ向かって真っ直ぐに向かっている。自分とは比べ物にならない程、カールは強いお人です。いつも自分の情を切り離し、その時々が必要に応じて正しい判断をする。だからこそ、彼の胸の内を理解するのは難しい。どんなに理性で正しいと思っても、彼は感情で何を思っているのでしょうか。

## 隔意 1

華やかなドレスに豪華なアクセサリ。自らを飾り立てるそれらを纏って、貴婦人達は香水の香りをまき散らしながら、しとやかに笑う。流れる円舞曲の音色に酔いしれ、目当ての男性を見つけては熱い視線を向けるのが常。今日のこのパーティーの場では、その視線の殆どが静かに佇む一人に集中していた。

会場内では貴族達が、我こそが一番だとばかりにめかし込み、自分の自慢話に花を咲かせる。高い天井から吊るされたシャンデリアが放つ光に反射されるのは、人々が身につけた貴金属。それが、クルダス国内の貴族の中でも五本の指に入る中心的存在、ローゼンタール公爵家のパーティーともなれば、皆が一層派手に着飾る訳で、笑い声も話し声も他の倍は大きく響いている。パーティーに招待されただけで十分誇りに思っただけのだから。

そんな中で、カールは普段の冷淡な瞳を意識的に抑えようとして、失敗していた。パーティーの前に、自分の母親が言っていた言葉を思い出す。

『もう少し優しい顔をして頂戴。今日は大切なお客様がいらっしゃるのだから』

その要望に答えようと何度か試みているが、無駄に濃厚な香水の香りを嗅ぐ度に、どうしても穏やかな心情にはなれない。早々に退散したいが、そういう訳にもいかなので仕方なくこの場に留まっている。

少し離れた場所で、他の有力貴族との話が終わったのだろう、父が目配せをして自分を呼んだのでそれに従う。

カールが足を向けた先では、カールに似た冷たさをヴァイオレットの瞳に宿した男が立っていた。しかし、その表情には穏やかな笑みが浮かんでいる事から、カールと違いそれなりの愛想を備えている様だ。彼こそがローゼンタール公爵家当主であり、カールの実の

父である。

「カールハインツ。フロース学園での生活はどうだ？」

「なんでも、マリオス候補生に選ばれたそうではないですか。いや、優秀な跡取りがいましてローゼンタール家も安泰ですな」

カールが父の問いに答える暇も与えず、先程まで公爵と会話していた男性が上辺だけの言葉を並べた。手に握られているワイングラスを煽っている様が、どうにも癪に障る。その後も、意味の無い言葉を並べる輩が数名居たが、そんな話を聞きに来た訳ではない。

「父上」

カールが呼ぶと、公爵も察した様にその輪から一步離れる。公爵が去った後も、他の貴族を褒めたたえる声が聞こえたが、無視である。この世界では、決して珍しい事ではない。

「今日はお前に紹介したい方がいるのだ。こちらへ」

そう言った公爵が顔を向けた先には、ブロンドの髪をサラリと伸ばし、上品な笑みをこちらに向ける少女が立っていた。カールが目を向けると、彼女は頭を軽く下げて、見事な一礼をして見せる。

「パンデラス公爵家令嬢、リディアアヌだ」

「……………」

自分の父の意図を理解すると同時に、カールの瞳が一瞬冷たさを増した様な気がした。

「アシリアには、なんて言ったんだ？」

答えなど分かり切っている質問を今更ながらイアンがランに訪ねた。ただ、それは最終確認の様な物で、嫌味の積もりはない。

「……………気持ちには、答えられないと」



「そうか。でも、なんでだ。いつものお前ならもう少し気の利いた事くらい言えただろう」

涙を滲ませ、目を腫らして出て来たアシリアを見た時、イアンは多少の違和感を覚えた。女性からの好意など、星の数程向けられてきた彼が、相手を泣かせるような断り方しか出来ない筈はない。以前にも、自分との事より、相手にもっと相応しい男がいる筈だとか言って、夢を持たせたまま告白を躲した事もあった。それは、ラン自身、相手が望む物を与えられないと分かっている故の言葉だ。今回も、アシリアには似た様な対応を取るだろうと予想していたのだが。

ランは俯いたままイアンの問いに答えられないでいた。

イアンの言う通り、普段なら気持ちを撥ね除けるだけの事はしない。しかし、今回アシリアに対しては、その様な言葉が思いつかなかった。何故かは分からない。アシリアが嫌いだからとか憎いからとかそんな理由ではない。例え誰であろうと、平等に、誠実に接してきたランなのだから。

「お前、この間セリアとアシリアじゃあ気持ちが違うって言ったよな。ありゃ、どう違うんだ」

「…………アシリアが上着を直してくれた時、セリアはこういった事はしないだろうなと思ったんだ」

自分でも何故そう思ったかは分からない。ただ、まるでセリアに直してもらいたいと言っている様な気がして、自分でも驚いたのだ。今まで、女性から何かを求めた事など無かったのに。

イアンはランの言葉を聞くと、そうか、と言葉を吐いた。

これで確認は終わった。それまでのランなら、アシリアが何をしようとして丁寧に対応しただろう。しかし、そうしなかったのは、あの少女が関わっていたからに違いない。どうもセリアの事になると、自分の思い通りに行かない事が多いらしい。ランまで加わるとは、

「…………厄介だな」

「どういう意味だ？」

イアンの言葉の意味を理解しきれなかったランは、訝しげな顔で聞き返した。自分にとっては未知な感情を、まるで分かり切っているとしてもいいような様子を少し不審に思う。

「お前、セリアがアシアの背中押したの見た時、不機嫌だったろ」「いや、そうかもしれないが……」

どうも納得出来ない様子のランに、イアンもどう切り出そうかと迷う。明らかにセリアを意識しているのに、それがどういうことなのかを全く理解していないのだ。

だが、何時までも煮え切らない会話を繰り返すのも面倒である。結論を出したイアンは強行手段に出る事にした。

「俺は、アイツが好きだ」

静かな談話室に、その言葉が響いた。何故自分はこの告白を何度も他人にしなければならぬのだ。本来ならセリア自身に伝えたい言葉なのに。

イアンが内心で涙を流しながらも言い終えた瞬間、ランが息を呑むのがこちらにまで聞こえた。

「お前はどうかんだ？」

「私は……」

全くの予想外な展開に困惑したランはその決定的な問いになんと答えて良いか分からない。イアンとは数々の場面を共にしてきたが、こんな状況は初めてだ。いきなりの質問は全く脈絡の無いように思えるが、だからといって容易に答えるのが躊躇われた。

「私は……」

言い淀むランにイアンは苦笑する。彼自身も分かっているのだろう。無理もない。

相手が年頃の娘らしい普通の娘だったなら、素直に恋でも何でも語れただろう。だが、相手はあのセリアだ。芽生えた感情が、興味や仲間意識なのか、異性として見ているのか、はたまた将又心配で目が離せないだけなのか、どうにも判断を付け難い相手である。

イアンは確認する積もりで聞いたが、ランが比較として出したのは

アシリアだった。それは、セリアを異性として見ている事に他ならない。友人や仲間として特別ならば、比較するのは他の生徒でも良かった筈だ。何なら、自分達の名を出しても良かったのだ。しかし、実際に出たのは非の打ち所の無い令嬢。意識しなければ比べようなどとは思ひもしなかっただろうに。

「言いたいのはそれだけだ」

これ以上追求した所で、今のランは何も言えないだろう。そう判断したイアンは、自分の思考に集中し始めたランを残し、静かに談話室を出た。

学園での窃盗事件は、犯人が結局見つからないまま未だ保留となっていた。しかし、噂とは何処からでも立つものである。いつの間にか、リンドロース家の令嬢とマリオス候補生の誰かとの間で愛憎劇があり、それが窃盗事件と関係している、という話は学園中の生徒の知る所となった。候補生も、勿論セリアも噂の発信源は分らない。しかし、所詮は噂。教師達も、物的証拠が何も無い以上、強く追求は出来なかった。

だが、この噂も長くは続かない。というのも、生徒達は、より刺激的な報を得たからである。

「こ、婚約!?!」

「お前が!?!」

いつもの温室では、和やかな空気など何処かへ吹っ飛び、驚きに目を見開いたセリア達が一人に視線を集中させていた。

「もしかして、昨日実家へ帰っていたのはそれ？」

ルネの問いにカールは無言で頷く。未だに驚きを沈めないセリアやイアンに鬱陶しそうな瞳を向けるが、そんな事気にしている暇など彼等には無い。

「ちょっと待って。婚約ってそんな急に」

「相手と引き合わせる為に呼び出されたらしい。近々正式な発表があるだろうな」

まるで他人事の様に答えるカールに、セリアは増々混乱した顔をする。そんな一生ものの大事な決断を、そんなサラリと何でも無い事の様に言うのもどうかと思う。カールが感情を表に出して何かを語る事の方が珍しいのだが。

「それで、お相手の方は？」

ザウルもまだ戸惑っている様子だが、いつもの落ち着き払った空気がそれを周りに感づかせない。その点は、流石と言っても良いだろう。少なくとも、今この場ではカールの次に冷静を保っている様に見える。

「……リディアアヌ・パンデラス公爵令嬢だ」

本来、クルダス王国には国事決定権を持つものが二つある。一つは国王、もう一つは六十名の中型貴族以上の出身者によって形成される王宮議会だ。国王の言葉には必ずと言ってよいほどマリオスの意見も取り入れられているので、彼等にも国事決定権があると言っている。国政に関する決議は必ず議会の賛成も得なければならず、議会の三分の二以上の反対意見が出れば、たとえ国王であっても強

引にそれを押し進める事は出来ない。逆もまた然り。議会で決定された事でも、王の拒否権を用いれば成立しないのである。

そうして、正式に決定された事項を各方面へ通達し、実際に取り仕切るのはマリオスに任される。

その議会の中でも重要議席を占めるのが、三名の議長と、一名の総議長である。定められた期間、議会で決議が出されない場合、彼等にその決定権が委ねられるので圧倒的な権力を保持しているといっても過言では無い。毎三年ごとに議会内での投票によって選出されるのであるが、パンデラス公爵は次期議長長の呼び声も高い実力者であった。

そのパンデラス公爵の令嬢が、王国内では確固たる力を誇り、王陛下の信頼も厚いとされている名家、ローゼンタール家の跡取り、しかもあのマリオス候補生にまで選ばれたカールハインツと婚約したと言うのだ。学園内に止まらず、噂話に盛り上がる貴族の婦人達までがその事を話の種にするのは決して不思議ではない。

パンデラス公爵は王宮議会の一員ではあるが、王宮での力は無い。ローゼンタール公爵は、王宮内でその力を絶大に振るえるが、議会には何の口も出せない。

もし、この二つの家が縁故関係で結ばれば、パンデラス公爵はローゼンタール家の後ろ盾を得た事で更にその立場を強固な物にし、ローゼンタール家は現在の影響力の上に議会にまでその手が届く所になる。

お互いの腹の底が透けて見えるほど、なんともまあ明確な政略結婚である。別に珍しい事では無いのだが、こうもあからさまにされては、逆に戸惑ってしまうというもの。本来結婚とは、お互いを最愛とした者同士が永遠を誓い合う物の筈が……

「でも……私達はまだ学生で、そういうのは早いんじゃない」

「年齢の問題では無く、国政においての時期が重要だ」

いやいや。そんないかにも政略結婚をします、みたいな言い方。

もう少し、相手の女性を労わってお互いが同意しているから、とか彼女に惹かれた、とか気の利いた台詞の一つでも出ないのか。と、そこまで思ったセリアだが、いつもと変わらず冷めた表情をするカールを見て諦めた。彼に『気の利いた台詞』を求めるなど、怖いもの知らずもいいところである。

「相手の女性に敬意を払わず、剩え政略の為に利用するなど。お前に心は無いのか！」

つい数秒前にセリアが考えるのを放棄したのに、ランはあっさりと怖いもの知らずだと宣言した。セリアにしてみれば、何もそこまですで核心を突く様な言い方しなくても良いではないか、と冷や汗物だ。しかし、ランに臆する事なくカールは淡々と答える。

「特別な事では無い。遅かれ早かれ、この場に居る全員に持ち上がる話だ」

確かにそうだろう。学生だ何だと言っても、ラン達はマリオス候補生になれるだけの身分を持っている。セリアも、主立った貴族に入るだけの権威を持った家に生まれているのだ。それを了承するしないはさておき、政略結婚の話の一つや二つ、持ち上がったても可笑しくは無い者達なのである。それをカールが承諾しただけの事。考えてみれば不自然な事では無い。しかし、それでも他の者達は洩った表情を和らげないでいる。

「でも、その人の事、良く知らないのでしょうか？」

ルネの問いに、カールは意味の無い質問だという目を向けただけで答えず、それ以上追及されるのは面倒だとばかりにその場を立ち上がり、足早に温室を出て行ってしまった。

当の本人が去った後も、温室内では問答が続けられていた。

「やっぱり、まだ早いと思う。まずはお互いを良く知り合って、それなりのお付き合いをして、って順序があるでしょう」

何もそこまで堅くて古臭い関係をカールに期待している訳ではな

いのだが。しかし、当たらずとも遠からずなので、一応候補生達は頷いておく。

「あれだろ。心の伴わない夫婦仲は上手くいかないって」

「それ以前に、カールが女性を政略の道具として見ているのが許せない。相手に対して不誠実だ」

やはりランが拘るのはその一点らしい。普段から女性に対しては人一倍敬意を尽くす彼だからこそ気になるのだろう。それとも、他に何か理由があるのか。

その後も熱い会話は繰り広げられたが、一向に前進しない。全員が同じ意見であっても、当の本人の意思が決まっている様なのでどうしようもないのである。しかし候補生達が、友人を心配しているのも事実。

「どれだけ政略的に有利な位置に着けるからといって、彼が心からこの結婚を望んでいるとは思えません」

伊達に長い間友人をやってはいないのだ。カール自身がどんなに心の内を見せなくとも、彼が何時でも己の利益の為にだけに動くような人間かどうかは分かる。

しかし、幾らザウルの意見に賛成したとはいえ、部外者である自分達に出来る事は、見守る事くらいである。その事に落胆を隠せないセリアであった。

候補生達の心配を他所に、学園内は既にカールの婚約の噂で持ちきりになっていた。

「本当なの？婚約されるって」

「まだ正式な発表はされていない見ただけだね」

「そんな。ショックだわ」

「悔しいわよね。折角同じ学園に居るのに、私達は殆どお会いする機会すら無いんだもの」

この時ばかりは、女生徒方もセリアの存在を、それは綺麗さっぱりと忘れ去ってくれた様だ。しかし、カールハインツの婚約に落胆する者は多く、ハンカチを嚙んで涙を堪える者が居るほどだ。ランやイアン等、比較的他の候補生に熱を上げている女生徒方にすら、候補生の一人が婚約した、というのは辛いものがあるらしい。

そんな女生徒達とは変わって、多くの男子生徒はこの報を歓迎していた。その殆どは、自分達を勝手にカールハインツの部下と呼び、彼を称えている生徒なのだが。

「パンデラス公爵といえば、議会でも名のある実力者」

「カールハインツ様の立場が、より強固な物になるに違いない」

「公爵令嬢も、気立てのよい美人だと評判が高いそうだ」

「正に、カールハインツ様に相応しい」

「やはり、我等のカールハインツ様は、人の上に立つお方だ」

彼等がちょっと危ない一線を今にも越えそうな目で見る先には、涼しげな顔で手元の本を見下ろすカールハインツの姿。まるで何も聞こえていないかの様に読書に専念する指先は、次の頁を静かに捲る。まるで、婚約するのは自分ではありません、といった態度だ。しかし、その何が良かったのか、男子生徒達はその姿に新たな賞賛を送っている。ここで得意の睨みでもお見舞いしてやれば静かになるのだろうか、カールは自分の部下を全く相手にしていない様だ。殆ど空気と同一の扱いらしい。



学園中が今カールの話で盛り上がっており、それは何処でも同じなのだが、ここでは少し他とは雰囲気違っていた。寮への道をスタスタと歩くランと、その隣を歩くイアンである。

「やはり納得いかない」

同じことを繰り返すランに、イアンは苦笑しながら頷く以外出来ないでいた。彼がカールのやり方に反対するのは珍しい事ではない。むしろ、賛同する事の方が少ないだろう。それはいつもの事なのだが、今回は普段と理由が違う。それを、イアンは目敏く見抜いていた。

「自分が愛情を抱いた異性とこそ結ばれる事を願うべきであって、カールも……」

「お前、それ自分に言っていないか……？」

遂に痺れを切らしたイアンが足を止めてランに言い聞かせる様に言葉を発した。その瞬間に、ランも足を止める。瞬間息が止まり、言われた言葉に心臓がドクンと早鐘を打つ。

イアンの三步前で立ち止まったランが振り向くと、その顔からは明らかな狼狽えの色が見て取れた。

「セリアの事だろ」

「ちが……」

「違わねえ」

否定の言葉を出させる前に、イアンがきっぱりと言い切った。

「セリアの事を認めようとしないうちに自分を、カールに置き換えて言うただけだ」

「……………」

ぐう、と押し黙ってしまったランに、言うては不味かったかとも思ったが、言わないのは我慢ならなかった。ランが己の気持ちを受

け入れられない理由が分かるだけに、余計に彼には認めて欲しい。

「お前は怖がつてるだけだ。弱い存在を特別に思っっちゃう事が」

「……………」

ランに言い寄る娘は多かった。それこそ、数え切れない程。しかしランは、常に一線引いた態度で接して、決して特別を作る事だけはしなかった。それは、自分よりも遥かに弱い、男よりも弱い存在である、女という存在を大切に思う事を無意識の内に恐れていたから。

女と男の違いにどんな理屈をつけようと、突き詰めてしまえば結論は同じ。女は非力な存在であるということ。あくまでも肉体的に、という意味だが。しかし、自分達にしてみれば、少し力加減を間違えれば簡単に折れてしまいそうな存在である。

それを、ランは特に意識してきた。だから、女性に対して常に紳士的な態度を貫き通して来たのだ。

「だけど、セリアは違うだろう。そんなに簡単に失っちゃう様な存在じゃない」

「……それは」

「あいつは強い。だからこそ、お前も惹かれたんだ」

「……………」

俯いて何も言わないランに、苛立ちは更に増す。ここまで言っても、まだ抗うか。別に、ランを後押ししてやりたいという訳では無い。もし、彼が抱く感情が少しでも違っていたならさっさと切り捨てている。こちらこそセリアに惚れているのだ。わざわざ敵を増やしたくは無い。

しかし、そうでは無い。ランはセリアを好いている。友人というのは厄介で、長く付き合ってきた分、お互いの感情の揺れにも敏感になってしまう。ザウルもルネも薄々気付いている筈だ。そんな状態で本人が自覚していないのは、こちらとしても非常に居心地が悪い。自分は正々堂々と、精一杯セリアが欲しいのだ。対戦者が対戦している事を自覚していない内から叩くのは趣味では無い。

「おーい」

緊張で張り詰めた空気を割る様に、なんとも間の抜けた声が対峙している二人の耳に届いた。緊張感の欠片も感じられない声を発したのは、案の定ザウルと共にこちらへ向かって手を振るセリアである。話の中心人物が来た筈なのに、何故こうも肩透かしを食らった気分になるのだ。言い知れない脱力感に、イアンは今頭を掻き篁りたい気持ちで一杯であった。「お二人共、先に食堂へ向かわれたのでは？」

「どうしたの？ 難しい顔して」

追いついて来たセリアを、暫くの間ジッとランが見つめるので、その場の空気が複雑な物になる。それにセリア自身は全く気付いていないが。

やがてランが、女生徒が見れば失神しそうな程穏やかにフツと笑うと、セリアの頭に手を乗せた。

「いや。少し自分の気持ちと向き合う事が出来ただけだ」

「……？」

何の事か、とセリアはキョトンとした顔を見せたが、ランが余りにも穏やかな顔をして笑うので、まあいいか、と呑気に納得していた。

ランの言葉に反応したザウルがチラリとイアンを伺うと、目配せと共に静かに頷いたので何があったか一瞬で悟る。そして、二人同時に短く息を吐いた。

## 隔意 1（後書き）

納得も賛成も出来ないけど、でもカールが本当に意思を変える気が無いなら、やっぱり祝福するべきなのかな。

今回の婚約、成立するとしたら、それまで何も起こらなければ良いけど。でも、それは難しいんじゃないか……。カールなら分かってる筈なのに。この婚約に、どれだけの危険があるか。

## 隔意 2

「しかし、だからといってカールの婚約に納得した訳ではない」

その部分はハッキリとしたラン。分かった分かった、とイアンが宥めると、漸く四人で食堂へ向かう事が出来た。

「やはりランも…?」

「ああ。そうみたいだぜ」

確認する様にザウルがこそっと聞いてきたので、イアンが答えてやる。そうですか、と頷くザウルにランがどういうことだと目を向けた。そこでザウルが自分の気持ちを包み隠さず伝えると、ランの顔が驚きで見開かれる。全くの想定外の事態に、啞然としている様だ。

ランにしてみれば、やっと受け入れる事が出来た自分の想いに、まさか恋敵が二人もいたとは、少々気の毒な話である。

「何の話？」

全く意識していなかった後ろからの声に、三人は同時に飛び上がった。いきなり問題になっている張本人が現れたので、驚くのも無理は無い。しかし、話の内容など知る由も無いセリアは、その光景に少々複雑な気持ちになる。三人で隠れるように会話しているかと思えばこの反応。なんだか幽霊扱いされた気分だ。

「なんでもない。カールの婚約がどうのって話だ!」

「ああ…」

なるほど、やはり皆まだカールの事が気になっていたのだな。と、咄嗟に出たイアンの言葉に、セリアは疑いもせず納得した。

「とりあえず、カールにもう一度聞いてみよう」

そんな事を言って歩き出すセリアの後姿を、学園の憧れである候補生三人は心底安心した様に付いていった。

セリア達が食堂に着くと、丁度カールとルネが席に座った所であった。これは好都合とばかりに、四人はその隣に席を取る。カールはセリア達を一瞥しただけで、黙々と食事を続けていた。

「さっきからずっとこの調子で……」

ルネがこっそりとセリアに耳打ちするように説明した。どうやらルネも同じ事を考えていたようだ。しかし、それが成功しているのか失敗しているのかは、聞くまでもないだろう。五人でカールを囲む様に席を取ったが、それを気にする事もなく、食事の手を止める事もない。

「もう少し、そうだな……卒業するまで待つ、ってのは出来ないのか？」

「後からするのなら、今であろうと問題無い」

イアンが始めに言葉を掛けるが、あっさりと返されてしまった。どうも時期の事について問答するのは無理らしい。

「でも、もう少しお互いを理解しあう時間も……」

「必要ない」

セリアの意見も一刀両断される。もはや取り付く島も無い。

「相手の女性にとっても重要な問題なんだし」

「彼女も公爵令嬢だ。自分の立場くらい理解しているだろう。その上での今回の話だ」

こうもきっぱり言われてしまっただけは、頷く以外無いではないか。やはりカールを説得するのは至難の技らしい。彼の頑固な面は、彼と論議を交わしていても垣間みる事が出来る。

やはりカールに取って結婚とはそういう物なのだろうか。価値観が違うのは今に始まった事ではないが、少々複雑だ。しかし、これだけ言ってもカールの意思は変わらないのだから、きっと何を言っても無駄であろう。そう理解すると納得したような声を発し、セリ

アも大人しく食事を続けた。

そうして暫くは静かな食事が続くかと思われたが、セリア達がカールを説得しようとしているのを見て、それを睨み付けていた生徒が立ち上がった。普段なら他の生徒が候補生に意見するなどはもつてのほかであるが、今は一般生徒が混じっている。どうやら、標的にするならその生徒だ、と彼はセリアに矛先を向けたらしい。

セリアから数歩分離れた場所で立ち止まった生徒に、セリアがキョトンとした顔を向けると、生徒はキツと目つきを悪くした

「君。カールハインツ様に意見する気か？」

「はっ？ 私ですか？」

いきなり強い口調で言われ、セリアは困惑する。横に座っていた候補生達も驚いたが、すぐに警戒の色を見せた。急に投げかけられた言葉を理解すると、セリアはぶんぶんと両手を胸の前で横に振る。

「別に、意見というほどでは……」

「カールハインツ様の判断はいつでも絶対なんだ。君に反対する権利は無い」

「あの……私はただ」

「その辺にしとけ」

セリアと男子生徒の間に候補生が入った。流石にこれ以上は黙って聞いている訳にはいかない。マリオス候補生に前に立たれて男子生徒は一瞬怯んだが、自分が尊敬するカールハインツ自身が何の文句も言っていない事が彼を奮い立たせた。

「お、女の分際で、出しゃばってカールハインツ様の決断に口出しするな、と言ってるんだ！」

自分達ですらカールハインツと話す事も殆ど無いのに、なんの取り柄も無い女子生徒が隣に居るというのに嫉妬するのは何も他の女子だけではない。

男子生徒は精一杯それだけ言うと、候補生達の前からさっさと退散しようと踵を返した。いわゆる、逃げるが勝ち、というやつである。

「おい！お前……」

「待ちなさいよ！！」

今のは言い過ぎだ、とイアンが文句を口にしようとした瞬間、後ろから怒声が響いた。それは男子生徒にも聞こえたようで、ビクリと肩を震わせ足を止める。

候補生達がまずい、と思った時には既に遅く、セリアは固まっている生徒にズカズカと歩み寄って行った。

「今の言葉、取り消して！」

「はっ！？」

「女性だからって、なんで口出しするな、なんて言われなくちゃならないの！」

「そ、そんなの当たり前だ。お前なんか、この婚約でカールハインツ様にもたらされる政略的な利益が分かるはず……」

「何が政略的な利益よ！！」

少し強気を取り戻した生徒が言い返した言葉は、セリアの怒りを更に膨張させるだけに終わった。

「確かに、ローゼンタール家にとっては有益かもしれない。でも、大事なのはそれだけじゃないでしょう！」

「し、しかし……」

セリアの気迫に押されて、男子生徒も言いよどむ。

「それに、女性にだって意見する権利はあるわ！性別が違うからって、口出しするな、なんて言われる必要性は無いはずよ！！」

「セ、セリア殿。落ち着いて下さい」

ザウルやルネが必死に宥めると、セリアはぐっと押し黙ったものの、まだ落ち着いているとは言い難い。口元は強く引き締められているが、肩はわなわなと震えている。

セリアと過ごしている内に分かった事だが、女だ、という理由で



女性の権威を無視するような行為は彼女の神経を逆なでする事に他不ならない。特に、「女のくせに」などと言われた日には、セリアの怒りが頂点に達する。まあ、彼女の場合、それで色々苦勞した様だから、分らないではないが。

しかし、その「女」が自分に怒鳴りつけた、という事実は男子生徒のプライドに少なからず傷をつけたようだ。

「そう感情的になって我を忘れるなど無様だな。これだから女は」「なっ！」

「カールハインツ様や、他の候補生の方にも上手く取り入っているようだがな。しかし覚えておけ、本来ならお前なんかに相手をしている暇なんか無い方達なんだぞ」

これは流石に候補生達も怒りを我慢しきれずに言い返そうとした。今の言葉は、セリアに取ってこれ以上無い程の侮辱だろう。友人に対しそこまで言われて、黙っている方が無理だ。しかし、候補生達が何か行動を起こす前にカールがすくっと立ち上がったので、その場の空気が瞬時に凍る。

とくに大きな音を立てた訳でもなく、ただ普通に立ち上がっただけなのに、これほど威圧感を放つとは。先程までセリアと言いつついた男子生徒などは、気の毒な程顔を青くし、足をガクガクと震わせている。その場にいる全員が恐怖に打ち震えている間も、候補生達だけが落ち着いてカールの様子を見守っていた。

そんな視線などお構いなしに、カールは何を言うでもなく、そのまま静かに食堂を出て行った。しかし、彼の通った後はまるで吹雪が通り過ぎた様に空気が冷たくなっている。

その後も他の生徒達が言葉を発する事が出来ないで居る間に、残った候補生達は悔しさに拳を震わせているセリアをさっさと食堂から連れ出した。

「大丈夫？」

ルネが心配そうに見詰めると、幾分か落ち着いていたのだろうセリアが、フウッと息を吐き出した。

「すみませんでした。ご迷惑お掛けしました」

冷静になって、また彼等に迷惑をかけてしまったのに気づき、セリアは深く謝罪した。

候補生達にしてみれば、むしろ先ほどの男子生徒こそが謝罪するべきであって、セリアに非は全く無いのだが。むしろ、セリアと同じほどの怒りを覚えた。

「彼の言葉を気にする必要は無い。我々は、君を大切な仲間だと思っ  
ている」

「そうです。先ほどの言葉の様な思いを抱いた事はありません」

俯くセリアに、候補生達が優しく語りかけた。しかし、それがまた胸に響いて、こんなに良くしてくれる彼等に、申し訳無い気持ちで一杯になる。

「ごめんなさい。ありがとう」

素直な礼の言葉を述べる以外出来ない自分かもどかしい。確かに、自分には力が無いのだから、出しゃばっていると思われても当然かもしれない。出会った時から迷惑をかけてばかりだし、もしかしたら先程の彼の言葉通り、自分の相手をするなど彼等にしてみれば勿体ないのではないだろうか。

考え込んでいる内に額に何かが当たったと思った瞬間、ピツと小気味良い音が響いた。

「いたっ」

軽い打撃を食らった額を押さえて前を見ると、イアンが人差し指をこちらに突き出しているの、指で弾かれたのだと理解する。涙目でイアンを見返すと、その表情が少しムツとしている様にも見え

た。

「お前、今余計な事考えてただろ？」

「うっ…」

気にするな、と言われた手前、正にその事を考えてましたとはい難い。しかし、こうして何度も世話になってしまおうと、どうしても先程の様な事を思ってしまう。

セリアの反応にイアンははあっと息を吐くと、もう一度彼女に向き直った。

「良いか。アイツに言われた事で、お前が気にする様な事は一つも無い。この言葉信じられるか？」

ここで「いいえ」なんて言ったらもう一度打撃を食らいそうなので、一応頷いておく。

「……………」

「ランも言った通り、セリアは僕達の仲間だよ」

俯くセリアにルネがそつと言い聞かせる。優しい声でそんな事を言われれば、胸にあたたかいものが広がるのは抗えないだろう。今まで数えきれない程迷惑を掛けたにも関わらず、ここまで良くしてくれる彼等には、感謝してもしきれない。

折角の感動的な場面なのだが、セリアが候補生達とのやり取りで周りを全く意識していなかった為に、悲劇は起こる。

今はすっかり夜の時間帯なので辺りはもう暗い。通い慣れた道とはいえ、所々に木の根などがむき出して、注意していても危ないのにそれすらしていないセリアが無事な筈が無く、少し大きめの石に大いに躓いた事で、先ほどまでの会話は中断させられる事となった。

男子寮のある一室では、香ばしい紅茶の香りが漂っていた。

必要最低限の物以外何も置かれていないその空間は、殺風景で、まるで生活感を感じられない。無駄が一切存在せず、角という角がビシリと整頓されている部屋を、ザウルの心配そうな視線が横切っていた。その視線の先では、ザウルの淹れた紅茶に手を伸ばすカール。紅茶の乗っているテーブルに掛けられたテーブルクロスにも、シミどころか皺一つ見られない。隙がどこにも無いのは、正に部屋の主を表している。

「お前も何か言いたい事がありそうだな」

「……本当に宜しいのですか？やはり人生に置ける重大事を決めるには、早すぎるのでは」

「人には、それぞれ立場という物がある。やらねばならない事も。これが私と、私の家の利に繋がるのなら、答えは決まっている」

「……」

威圧的に真っ直ぐ見詰められると、やはり何も言えなくなってしまう。言いたい事は口を出ようとするのだが彼のヴァイオレットの瞳があまりに澄んでいる様を見れば、反対する気も削がれてしまった。迷いも躊躇も一切見せない彼の態度に、逆に気圧されてしまう。「しかし、それでは貴方が……」

「私は、私の目的の為に動く。ただ、それだけだ」

そのまま会話を打ち切る様にカールはカップに再び口を付けた。満足したようで、一瞬だけ口を緩める。それを見てザウルも自分が煎れた紅茶に手を伸ばした。

しばらく無言の状態が続いたが、カールが何かを思い出したのか、徐に顔を上げる。その瞳が冷たくなっていたので、空気がピンと張り詰めた。

それに敏感に気付いたザウルがどうしたのかと尋ねると、数秒の

後、カールは無駄の無い丁寧な動きでゆっくりとカップをソーサーに戻す。

「あれはどうした？」

冷めた声で聞かれた問いに、一瞬何の事か、と考えたザウルだが、すぐに食堂での一件を思い出す。ああ、と納得するとザウルも安心した。

「食堂を出た直後は、少し動揺されていた様ですが、今は落ち着かれましたようです」

「…そうか」

それだけ言うと、カールはもう一度カップを手を取った。自分の為にしか動かない、と語ったその口で他人の心配をするとは。やはり、彼はあまり本音を明かそうとはしない様だ。しかし、彼がセリアの事を気にかけていたというのは、紛れも無い事実である。

ローゼンタール家とパンデラス家との婚約は、日に日に確かな物になっていった。ローゼンタール家の力を改めて認識させるように、遂には王陛下の承認も得るに至った。後は、正式な発表をするのみである。

「本当に良いのかな、これで…」

まだ納得いかない、といった風のルネがポツリと零せば、それに苦笑したイアンが答える。

「カールの説得ならもう無駄だろ。アイツはそう簡単に自分の意見を変える様な奴じゃない」

「……」

「それに、アイツも、相手の女性も、必ず不幸になるとは限らないだろ。案外、上手くやるかも知れないぜ」

確かに、不幸になると決めつけるのはまだ早いかもしれない。なんだかんだ言って、根は優しいカールだ。相手の女性を不幸にさせない力もあるだろう。使うかどうかは別として。

「でも、意外にすんなり事が進んだと思わない？」

セリアは多少そこに疑問を抱いた。今回の事は見ていても分かる程トントン拍子に進み、何の横槍も入らなかったのである。横槍といても、セリアが気にしているのはカールの相手に嫉妬した貴族の令嬢方の物では無い。

「今まで、力のある議会と王宮内が結びつくのは難しかったのに」

議会と王宮との間で、今回の様な婚姻による結びつきが行われようとすれば、必ずと言ってよいほど他方から邪魔が入った。それらを撥ね除け、見事に成功した例は数える程しかなく、殆どはなんらかの形で失敗に終わっている。その全てが穏やかな方法だけで妨害されて来た訳ではない。

王宮は国王に最も近い位置で、議会は陛下に対抗する唯一の権力。その両方で力を得る者が現れ、均衡が崩れる事を嫌う者が出るのは仕方の無い事である。しかし、中には少々強引な手段を使う者も居るので、基本的に議会と王宮内が姻戚関係を結ぶにはそれなりの危険が伴った。

そして、今回は双方がそれぞれの場合でかなり大きな影響力を持つ家同士の婚姻である。良く思わない者の方が圧倒的多数を占める筈なのにも関わらず、全くそんな話は聞かない。もしかしたら、ローゼンタール家やパンデラス家を敵に回す事を恐れているだけかもしれないが。

「少し気になるな」

セリアの意見に納得したようにラン達も頷く。どんな事になっても、友人が危険な目に遭うのは防ぎたい。婚約が仕方の無い事であ

るなら、せめてカールの身の安全と幸せを願うのであった。

ローゼンタール家とパンデラス家の婚約。その話は日増しに確実な物へとなっていく。実際婚姻によって結ばれば、王宮と議会の両方で今までに例が無い、絶大な力を思う存分振るう者が出てくるのは明らか。

「このままでは、少々厄介な事になるのは時間の問題だろう」  
自分の主の放った言葉に、素直に頷いておく。

今回の事は出来るだけ慎重に進めたかったが、相手が大きい分そうも言っていない。少なくとも、多少の犠牲は払わねばならないだろう。

「こうならないようにするのも、君の仕事ではなかったのかね」

「流石に、そこまでの干渉は少々無理があるかと」

あっさりと言い返せば、フンと鼻で笑う姿が目につく。

「直ぐに手配します」

「ああ。頼りにしているぞ」

心にも無い事を。とは思っても口には出さないでおく。この関係に、信頼などという不確かな物は存在していない。あるのは、お互い利益を得るという確証と、利用価値。ただそれだけだ。頼りになどされていない。お互いが失敗はしないと分かっているだけ。

まるで、セリアの危惧していた事をそのまま現実にしたような会

話が、学園より遠く離れた場所で行われていた。しかし、夜の闇に紛れた二人が、人目に触れる事は無い。

嵐の前は静かになるというが、この日は風の通り過ぎる音がやけに耳に障る夜であった。



## 隔意 2（後書き）

私の行動に迷いは無い。目的の為ならば、利用するのみ。そして：  
：それだけだ。私が望む事を成し遂げられるならば、他に何が起き  
ようと構わない。己が身に何があろうと。

しかし、あれはそれが不服らしい。そしてあろうことか、私の身を  
案じると言った。

私の周りの平穏を望むなら、お前は私に何を与える。

### 隔意 3

何処の学園にも必ず一つはある校長室。他の教室より幾分か豪華な造りになっているそこでは、大きな窓から陽の光がぽかぽかと降り注いでいる。その大きな窓から外を眺めていた校長だったが、にっこりと微笑みながら振り向き、後ろに立っていた人物に向き直った。

「婚約が正式に決まったそうだね。おめでとう」

「ありがとうございます」

「うん。暫くは身辺も慌ただしくなるかもしれないが、君ならば心配は要らないだろう」

校長が生徒の成長に喜んでいる様子なのに対して、この部屋に元からいたもう一人は少し落胆した様子を見せていた。

「私はちよつと残念よ。大切な教え子が離れて行っちゃう見たいで寂しいわ」

「この学園で学ぶ事がまだ多いのは、自覚しています」

「あら、それは嬉しいわね」

まだ彼からは学ぶ事がある、とカールが意思表示した瞬間クルーセルはパツと顔を輝かせる。

「やっぱり私の指導が良いからよね」

カールは、パチンと片目を瞑って見せたクルーセルに、何故ここに居るのかとは聞けなかった。何時もの事には違いないが、彼は何故常にもこの校長室に出入りしているのだ。そして、何故校長は何も言わないのだ。疑問に思う事は多々あるが、まあ今は横に置いておく。

「何はともあれ、生徒がこの学園を慕ってくれているのは喜ばしい事だ。しかしカールハインツ君。勉強だけが大切ではないよ。時には、若さを満喫する事も大事だ」

「あら、彼には言うに及ばずなんじゃないかしら」

「ああ。それはそうだな」

ハハハハハ、と実に愉快そうに笑う二人の教師に、カールは掛ける言葉が見つからず、この空間から出る機会を見出す事も出来ずに、ジツと二人の笑いが治まるのを辛抱強く待った。

その間も、遠くで少しずつ沈んで行く夕日は、数日後には行われる行事をカールに自覚させる。フツと短く息を吐いたカールは、改めて身を引き締めた。

大きなホールに集められた顔ぶれを見渡して、イアンは感心した様に呟く。

「流石に、ローゼンタール家の婚約発表だけあって、主立った貴族が揃ってるな」

何処を見ても、華やかな衣装と装飾品に飾り立てられた人々が、これでもかとばかりに愛想を振りまいている。

クルダス国内で富と力と地位を得た貴族の多くは、今夜この場所に招待されていた。その中でも、上位の地位を得ている者は、話の輪の中心に立ち、周りからの賛美の声に気を良くしたりしている。

中型以上の貴族なら、殆どがこの場に招かれている。ラン達の家にも当然ながら招待状は届いた。そして、それはセリアも同じである。普段のセリアならばこういった場には絶対に出て来る事はしないのだが、今回は友人の婚約発表。無視する訳にもいかず今回ばかりは、と着慣れないドレスに袖を通したのだ。

「カールは…？」

「まだ挨拶に回っているのではないか」

声に答える様にランが振り向くと、そこには普段より幾分か粧し込んだセリアが立っていた。といっても、華やかさとはほど遠く、

いつも来ている制服の変わりに、ドレスを身にまとっているだけだが。そのドレスも、良く言えば清楚だが、はっきり言ってしまえばただ地味なだけだ。見る者によっては、普段着を着ているのでは、と疑いたくなる様な格好だが、セリアはこれでも結構気合いを入れた積もりである。

地味な感じの地味な少女が、普段からパーティーの花形であるランスロット達の傍に居るものだから、当然の様に令嬢達の冷たい視線を集める事となった。しかし、今の彼等はそれどころではない。今日はまだカールに会っていないのだ。婚約自体にはまだ納得しきれてはいなかったが、せめて今夜くらいは祝福の言葉を送りたい。ルネが人混みの中からやっとカールを見つけ出すと、その場に全員で向かう。流石に、光輝く容姿を持った候補生達は目立つ様で、彼等が動けば自然と人々の視線も動いた。

「カール」

「……来たか」

声が届く範囲まで来たセリア達を確認すると、カールは冷ややかな目で迎えた。

「本日はお招き、ありがとうございます。この度はご婚約、おめでとうございます」

「……」

いつもの如く見事な一礼をしてみせたザウルに、カールも無言で頷く。候補生が勢揃いした光景は、令嬢達の黄色い声を招き、ふうつとため息を吐く声も所々から聞こえる。

「相変わらず凄い屋敷だな。流石ローゼンタール公爵家…か」

「イアン達は前にも来た事があるの？」

「ああ。そんなに短い付き合いじゃないし。何度かパーティーにも招待されてるからな」

イアンが軽い感じで話すので誤解してしまいそうになるが、それはかなり凄い事なのではないだろうか。

「ベアリット伯爵家にも、今までにパーティーの招待状は行っていないのか？」

「これがそういった場に自分から出て来なかったただけであろう」

カールに指摘されてセリアもうつと詰まる。確かに、パーティーだのそういった物は苦手なので、今まで殆ど出た事が無い。行けと言われても、逃げるか躲すかだった。昔からずつとそんな事を繰り返していたので、ローゼンタール家に来るのは、これが初めてである。

「あら、未来のマリオス様達じゃない」

明るい声が響いて、カールの後ろから一人の綺麗な女性が現れた。水色のドレスに身を包み、輝くプラチナブロンドの髪は上で高く結い上げられている。年は三十から四十代、といった所だろうか。ひよつこりと現れた女性の登場に、候補生達は一瞬驚いた様子だが、すぐに我に返る。

「公爵夫人。お久しぶりです」

「ランスロット。本当に久しぶりね」

「はい。お元気そうでなによりです」

そう言うと、ランはその女性の手を取って甲に軽くキスをする。他の候補生達も次々に同じ動作を繰り返して行った。それに華の様な笑みで返す女性は、実に嬉しそうに候補生達を見ている。

「あら。こちらは？」

セリアに気付いた彼女は、好奇心を瞳に宿してにっこりと微笑み掛ける。急に話しかけられた事にセリアがキョトンとして答えられないでいると、カールが横に立った。

「フロース学園のセリアです」

「あ、セリア・ベアリットと申します」

はっとしてペコリと頭を下げると、女性は再び嬉しそうな顔をした。

「初めまして。カールの母、イレエネ・ローゼンタールよ」

「えええっ!？」

セリアは、目の前に立つ、明るくて気さくな女性がカールの母と知って驚いた。確かに、見事なプラチナブローンドはカールと同じだが、どうすればこんな柔らかい感じの人から、カールみたいな魔人様が生まれるのだ。チラリとカールを見れば、相変わらずの冷めた表情。公爵夫人の優しそうな笑みと見比べてしまうと、やはり親子だとは信じられない。

「今日はようこそ。嬉しいわ、カールにこんな可愛らしいお友達が居たなんて。今まで女の子を紹介してくれた事なんてなかったもの」

「あ、いえ…」

「でも、カールとお友達でいるのは大変じゃない？　いつも怖い顔をしているでしょう」

「ええ。それはもう…」

言った瞬間、首筋にジリツと殺気を感じてセリアは竦み上がった。チラツと横を伺えば、カールがもの凄い形相で睨んでくる。しまった、と思いセリアは慌てて取り繕った。

「いえ。でも、優しい表情をする時もありますよ。たまに。それに、頼りになって、いつも迷惑ばかりかけてしまっ」

「あら、そうなの？　それを聞いて安心したわ。これからもカールを宜しくね」

ニコリと公爵夫人は笑うと、カールに一言二言残して、その場を去ってしまった。しかし、その後もカールの睨みは終わる事なく注がれている訳で、セリアは今、非常に逃げ出したい気分である。

「相変わらず、楽しい人だね」

何度もパーティーに招待され、その他も何かと公爵夫人とは交流があったので、ラン達とは今ではすっかり知った仲なのだ。彼等がマリオス候補生である事も承知しており、またカールの友人である事も歓迎している。

セリアは未だに信じられなかった。少し話しただけでも、公爵夫人が親しみのある人柄だという事は十分理解出来る。なのに、その息子は視線だけで人を射殺せるのでは、と疑いたくなるような魔王。

どうにも信じ難い。

「何か言いたい事があるのか」

「うえっ!？」

無意識の内にジッとカールを見ていた様で、ジロリと睨み返された。唐突に地を這う様な声で言われて、思わず上擦った声が出る。

セリアがその冷たい睨みに背筋を凍らせ、候補生達がその光景に苦笑している中で、イアンだけは吹き出しそうになる笑いを必死に堪えていた。

そんなこんなでやり取りをしているセリアの視界に、彼女の目を引く存在が映った。まさかと思い、さり気なく視線を向けると、その先で見つけた人物に目を見開く。

「あれって、コーディアス議長と、ヴィタリー殿下じゃ…?」

黒い髪のアールバックが目立つ髭の男性は、現議長コーディアス侯爵である。ずっしりと立つ姿は、今の地位に相応しい振る舞い、というべきか。しかし、噂ではかなり野心のある人物で、議会議長の座に就くまでに、相当裏で色々してきたらしい。

そしてその横に悠々と立つのは、何を隠そう、今の国王の弟君、ヴィタリー王弟殿下だ。

「なんで王弟殿下が…?」

「気晴らしがしたい、と仰られたので、父が招待したのだ」

コーディアス議長も貴族の中でも高い地位を持った有力者だ。なのでこの場に招かれているのは不思議では無い。しかし、王弟殿下がこの場に居るのは明らかに可笑しい。というのも、王弟殿下については、コーディアス侯爵以上によくはない噂があり、かつては王位を狙っていたとまで聞いた。しかし、国の仕来りで王が即位した際、その兄弟が王位に就く事は出来ない為、一度は王位継承権を失

っている。

そして、コーディアス侯爵は、議会内でヴィタリー殿下を強く後押ししていた。何をどうやったのかは知らないが、コーディアス議会議長の計らいで、ヴィタリー殿下が、王位継承権第一位の座に返り咲いた程だ。古い伝統を無視すると言って、かなりの反発もあったがそれらを撥ね除け、コーディアス侯爵はそれを見事やってのけた。現国王に跡継ぎが居ない事もあったのだろうが、それでも異例の事態である。

そんな噂があるコーディアス侯爵とヴィタリー殿下が行動を共にしているのは不思議では無い。しかし、ここはローゼンタール家とパンデラス家の婚約発表の場。この二つの家は、現国王陛下との関わりも深く、信頼も厚い。その二つが結び付く場に、王弟殿下が気晴らしで来たいなどと言う筈は無い。

「……………」

セリアが見詰める先では、二人の男性がワイングラスを片手に優雅に笑っている姿が映っていた。

前置きも終わり、カールがローゼンタール公爵に呼ばれて行くのを見送ると、候補生達は静かに人混みに紛れる。観衆が見守る先では、ホールに伸びる大階段の前に立つカールとその腕に自身の細腕を絡ませる美少女。彼女がリディア・ヌ・パンデラス公爵令嬢だろう。ラン達の危惧していた事とは裏腹に、カールの横に立つ彼女は幸せそうに笑っていた。この分なら、婚約後の二人の関係も心配無いだろう。

「皆様、本日は我が息子カールハインツと、パンデラス公爵家令嬢、



リディアアーヌの婚約の儀において戴き、ありがとうございます」

ローゼンタール公爵が二人を紹介する。その間も会場内は何かとざわついていたが、低く通る声は、その場の全員に届いただろう。

「……!？」

セリアが会場の前で公爵の話を聞いていると、人混みから離れて行く影に気付いた。そのまま真っ直ぐ出口へ向かって行くのは、ヴィタリー殿下だ。それに他の候補生も気付いた様で、不審に思い目でその姿を追う。嫌な予感是否めず、会場内に目を凝らしたが、不審な点は見当たらない。

「っ!?!……あれを」

ザウルが声を発すると、その視線はカール達の居る階段の陰に向けられていた。この距離では、はっきりとその姿を確認する事は出来ないが、それが招かれざる客なのは嫌でも分かる。その場で影が動いたのに気付くと、セリアと候補生達も動いた。人混みをかき分け、急ぎ足で観衆の前へ出る。

その場にそぐわない動きを見せる候補生達に、カールも気付いた様で怪訝な目を向けて来た。

「カール!!」

「お前達、なんの積もりだ」

冷ややかに言われるが、今はそれどころでは無い。影が先程まで居た場所にもう一度目を向けると、その場所には明らかに不自然な長細い包みが置かれている。いよいよ嫌な予感が現実的な物になって、候補生達は動きを速めた。

「直ぐにそこを離れて!」

「時間が無い」

ランとルネがカールと公爵令嬢を引き寄せ、ザウルがローゼンタール公爵を庇った。セリアも咄嗟にその場で固まっている先程会ったばかりの公爵夫人を突き飛ばし、その上に覆い被さる。

その途端、耳を劈く様な爆音と共に、先程までカール達が居た場

所がー吹き飛んでいた。

その即座に起こった爆風に抗えず、セリアは公爵夫人を庇ったままその場に転げる。

「ぐっ…！」

多少の痛みが体を走ったが、怪我はしていない。バラバラと音を立ててこちらへ飛んでくる瓦礫の破片から守る様に、公爵夫人を自身の小さい身体で精一杯隠す。

突然の爆発に、観衆から悲鳴が上がった。その悲鳴に掻き消されて、ローゼンタール家から発進した一台の自動車の音は、誰の耳にも届いていない。

「公爵夫人！お怪我は！？」

はっと我に返ると、セリアは咄嗟に自分の下でピクリとも動かない女性の安否を確認する。何度か声を掛けたり肩を揺すって見たが、何の反応も返って来ない。一瞬ヒヤリとするが、見た所外傷は一切無いので、どうやら気を失っているだけのようだ。

爆発事態は小規模だった様で、実際に吹き飛んだのは階段の裏を中心に、カール達が立っていた場所ギリギリまで。観衆には届いていない。しかし、もしあの場所に本人達が立ったまま爆弾が爆発していれば、確実に巻き込まれていただろう。

「っ、皆は！？」

バツと振り向くと、同じ様に爆発を逃れた候補生達と、無事なカールの姿。それを見たセリアはホッとしたが、すぐにランの怒りの形相に気付く。

「では、お前はこうなる事に気付いていたのか！？」

「フン」

ランの言葉にカールは軽く鼻で笑う。えっ、とセリアが混乱した顔を見ると、ザウルに庇われて難を逃れた公爵が声を上げた。

「カールハインツ、無事か？」

「はい。問題ありません。彼女も、気を失っているだけです」

カールが抱え上げたのは、先程まで幸せそうに笑っていたリディアーヌ令嬢。その表情から先程の笑みは消え、眉は苦痛に歪められている。気を失ったリディアーヌ令嬢とローゼンタール公爵夫人が別室へ運ばれて行くのを見送ると、公爵は動揺している観衆を落ち着かせるためにその場を離れた。すると、ランが再びカールに詰め寄る。

「お前は、知っていたのか!？」

「議会と王宮。結び付くのに、政敵が黙っている訳もあるまい」

「それを分かっている、それでも押し進めたのか!」

「ここまでやるとは予想していなかったがな。しかし、これだけ派手な事を起こしたのだ。探せば幾らでも証拠が出る。敵の大本は掴めずとも、強力な切り札の一つになるだろう」

そこまでカールが言った所で、その場を離れていたイアンが戻って来た。すぐさま階段で見た影を追ったのだが、捕らえるには至らなかったようだ。すまねえ、と言ったイアンは肩を竦めて見せた。

まだ混乱している会場を後にして、セリアは一人バルコニーに出ていた。ホールの中では、人々が騒ぐ声が聞こえるが、それは公爵が説明と謝罪を繰り返した事で幾分かマシになっている。予想もしていなかった爆発に、驚く者や一刻も早く帰りたがる者が殆どなので、バルコニーには他の誰も居ない。

そこで少し頭の中を整理するなり、セリアははあっと息を吐いた。ランとカールの会話から察するに、カールはこの事態を予測していたのだろう。そしてそれを逆に利用した。敵をあぶり出す為に。

「何をしている」

後ろから聞こえた声に振り向くと、相変わらず感情の冷めた様なバイオレットの瞳。あれだけの事件に巻き込まれたにも関わらず、動揺一つ見せないとは。

「母が世話になった。礼を言う」

「あ、うん」

「……………お前も、私に何か言いたい事がありそうだな」

どうやら考えが顔に出ていたらしい。カールに視線を送るとセリアはゆっくりと言葉を吐き出した。

「危険な事は知っていたのね。それを分かかって、最初からリディアーヌ公爵令嬢を利用していたの？」

「何も無ければそのまま婚約していただろう」

「彼女は、本当に幸せそうだったのに」

「私と一緒にいるより、いつか本当に惹かれた相手と結ばれる方が、お前達の言う、幸せ、というものだろう」

「……………でも、もしかしたら、カールだって怪我じゃすまなかったかもしれないのに」

「例えそうだったとしても、なんらかの形でこちらにも益はあった」

「っ！？全部分かったのね。最初から、私達が止めようとした時も、ずっと。危険も承知で」

「だったらどうする」

冷ややかに言うのと、カールは一瞬目を見開いた。セリアがその細腕で、カールの胸ぐらを掴み、そのまま引き寄せたのだ。体格差があるため体がかなり前屈みになるが、敢えて抵抗はしなかった。少女の茶色がかった瞳が隠する事なく自分を睨む様は、久しぶりに見るものだった。

再び瞳に冷たさを宿したカールだが、すぐまた驚きに目を見開く。今度は先程よりも長く。目の前では、自分より遥かに小さい少女が、自分の胸ぐらを引き寄せながら、心底安心した顔を見せているのだ。

「よかった。カールが無事で。本当に…」

「……………」

「お願いだから。出来る範囲で良いから。今度からは話して」

「……………」

「心配で、さっきはびっくりして……」

もう一度、よかったと零すセリアをカールはジッと見詰める。彼女の行動からして、怒るか責めるかするのかと思ったが、どうもこの少女の行動は予測不能である。胸ぐらを掴むという行為からして、普通の女がする様な行動ではないが。

その頬には、先程作ったのだろう、複数の真新しい擦り傷。その傷に指を這わせれば、今まで強気だった瞳がギョッと驚いた色に変わった。パツと胸ぐらを掴んでいた手は離されたが、カールは頬に添える手を降ろさない。

「……………お前なのか……？」

この少女ならば、自分の隣に立ち、自分と同じ場所から同じ物を見る事が出来るのだろうか。カールはそんな疑問を抱いた。

利用出来る物は利用する。それが自分のやり方だ。婚約も、どこかの貴族の令嬢も、自分にとってもは利用価値があるか無いか。あれば今回の様に利用し、無ければそのまま捨て置く。ならば、結婚とて同じ事。自分に有益な縁談ならば、なんの迷いも無く受けるだろう。

しかし、この少女を手にするのは、他の女人によってもたらされる利益全てを投げ打つ価値があるのだろうか。自分が望んだ、その存在になれるというのか。

真剣な瞳を見せるカールに対して、セリアは内心ビビりまくっていた。勢いでカールの胸ぐらを掴んでしまったのだ。しかも、強く。先程から自分を見詰める瞳は冷えきっていて、その口からはなんの言葉も発せられない。

セリアは、自分の頬に寄せられているカールの手は、なんとなく拘束する為なのではないだろうか、と考えていた。実際は、そんな事全くないのだが、恐怖で思考が麻痺したセリアには、そんな正常

な判断下せる筈もない。それに、出来たばかりの擦り傷を、決して優しいとは言えない力で撫でられて、少し痛いのだ。

セリアがオロオロとしている場に、救世主が現れた。

「こちらでしたか、公爵が呼びです。………カール？」

「……ああ」

直ぐに返事が返って来ない事を不審に思ってもう一度呼びかけると、それに漸く反応したにカールが背を伸ばした。その拍子に、今まで影で隠れていた小さな身体が目飛び込む。

「セリア殿!？」

こんな人気の無い場所で何をしていたのだ。しかも、カールと二人っきりで。

何も無いだろう、という事は理解している。が、一瞬の動揺が顔に出てしまったのも事実。ザウルの表情の変化をカールが見逃す筈は無かった。すれ違い様にカールはフツと鼻で笑うと、ザウルの耳元で囁く。

「何を動揺している。今は、まだ何も無い」

今は、の部分強調して言い捨てると、カールはそのまま何事も無かったかのようにホールの中へ戻って行った。カールの言葉に弾かれた様にザウルは振り向いたが、見えるのは長い銀髪を揺らす後ろ姿だけ。

まさか……!

「セリア殿!」

「は、はい!」

「カールに何か言われましたか？」

「えっ!あの、それは……」

途端に目を逸らしたセリアにザウルは咄然とした。セリアの行動を別の意味で取ったようだ。セリアは、もしやカールの胸ぐらを掴んだ光景を見られていたのか、と気まじくなり目を逸らしたのだが。しかし、ザウルにはそれが伝わらず、全く別の意味で捉えてしまった。

しかし、直ぐに冷静を取り戻し、そんなまさか、と考え直す。幾らなんでも、カールがそんな事を口にするとは思えない。

「セリア殿。カールと何をお話しされていたのです？」

「えっと…その、今回の事、カールは最初から知っていたのだったか………そうですか」

セリアの答えに取り敢えずは安堵する。しかし、カールの去り際に言った言葉がどうしても気になった。『今は、まだ』、そしてあの態度。あまり考えたく無い事態が容易に予想出来てしまっただけで、ザウルはらしくもなくがっくりと肩を落とした。

「婚約を解消したそうじゃないか」

「はい」

「まあ、あれだけの事があれば無理もないだろう。君も色々大変だったね」

「お気遣い、ありがとうございます」

「何はともあれ、君が無事でいてくれて良かった」

カールハインツから改めて婚約解消の話を聞き終えると、彼が静かに退出するのを見送る。今日は珍しくクルーセルが居ないので、校長室は幾分静かであった。

校長がチラリと視線を動かした先には、今朝の新聞が豪華な机の上に置かれている。そこにはローゼンタール家で起きた爆破事件が大きく取り上げられていた。しかし、肝心な所は一切が排除されており、テロや過激派の行き過ぎた行為、という事になっている。恐らく、世間体を気にしたローゼンタール家とパンデラス家が手を回したのだろう。

「犯人は毒物によって自殺……さて、何処までが本当なのやら」

『爆破犯、自殺』と新聞には書かれているが、果たしてこの記事を信じる者がどれだけ居るといえるのか。そのまま新聞から目を逸らすと校長は、部屋に構えている大きな椅子にゆっくりと腰を下ろした。何はともあれ生徒が無事だった事に、校長はホッと胸を撫で下ろす。



### 隔意 3（後書き）

だから、何でこの学園はこうも行事が多いのよ。それは楽しい事なのかもしれないけど、私は絶対に嫌。お祭り騒ぎが嫌いとかいう訳ではないけど。でも、やっぱり嫌だ。

どうして参加必須になんかなってるの？

それ以前に、こんな時までザウル達を頼る訳にはいかないよね。

## 精華 1

何処の世界にもあるように、クルダスにも恋人達の季節、という物が存在する。世界が新年を迎える数日前。冬の寒さに負けない様にと、男女が寄り添って体温を高め合う祭典。その時期が近づいて来たのである。

聖花祭 ー 初代国王が栄光と繁栄の女神、フィシタルに花を送り、愛の誓いを交わしたとされる日。王が敢えて草花が少ない冬に、色彩鮮やかな花を用意した事から、王の愛の深さを表すともされている。

そして、王の愛を受け入れた女神フィシタルは、クルダスの永遠の栄光を約束したという。それが、現在の聖花祭の発祥である。

元々は国の発展を祈る為の祭りだったのだが、王とフィシタルの話から意中の異性に花を送って想いを伝える、という日に時代と共に変化していったのだ。冬に想いをとげた者達は、次に訪れる春に永遠を誓う事が多い。つまり、この国での結婚の時期が春とされているのはその為である。

いつしか恋人達の為の祭典になってしまったこの聖花祭。それを、お祭り騒ぎ好きのフロース学園校長が放って置く筈も無く、毎年訪れる学園行事に胸を高鳴らせていた。

「ご機嫌ねえ、校長」

「それはそうだろう、クルーセル君。若い恋というのは、見ているだけでこちらも若返らせてくれるものだ」

「フツ。確かに、今年も面白い事になるかもね」

いつもの如く、授業中にも関わらずに校長室で寛いでいるクルーセルが上げるクスクスとした笑い声は、暫く部屋に響いていた。

「……以上が、今年の曲目です。尚、例年の如く、教養のテストの一環としますので、そのつもりで。何か質問は？」

指で黒縁眼鏡の位置を正しながら、ハンスは非常に苛ついた様子で言った。不穏な空気の原因は、間違いなくこの場に居ない同僚にあるのだろうが、誰も何も言わない。

自分達の教師の説明を聞きながら、候補生達は全員出そうになるため息を必死の思いで堪えていた。普段は涼しい顔のカールも、どこか不機嫌な雰囲気滲み出ている。

「質問が無ければ、これで今日の授業は以上とします」

教卓に並んでいた本や資料等を纏め、ハンスはさっさとこの場を離れようと教室の外へ向かって歩き出した。手遅れになる前に、今は出来るだけ自分の教え子達から距離を取りたい。足を急がせているのを悟られないよう、慎重に、だが確実に外へ足を進める。

まだ安全な事を願って扉に手をかけたが、それでも時は既に遅かった。

「キャー！ー！！」

「ランスロット様ー」

「ち

よっと、押さないでよ！！」

「カールハインツ様ー」

「今年は私と！！」

「いえ、是非私と！！」

「ザウル様ー」

「イアン様！何処ですか！？」

「お願いします！！」

「ルネ様は私と！！」

「

ああ、何時もながら素敵！！」

「き、君達！！一体何だね！！授業はどうしたんだ。戻りなさい！！」

「何ですかハンス先生！」

「先ほど授業は終わりだと！！」

「ええ、確かに聞きましたわ！」

「もったいぶ

らなくてもよろしいじゃありませんか！」

「候補生様達と、

是非お話を……」

「今日という日をずっと待っていたんで

すよ」

「通して下さい！！」

「早く！！候補生様

に！！」

「ま……まだ授業は終わっていない。戻りなさい！」

そういつてハンスはピシャリと扉を閉めた。強烈な勢いで押し入って来ようとする女生徒方を教室内に入れまいと必死で抵抗し、かなり労力を使ったようだ。額に汗を浮かべ、肩で息をする姿に、室内の生徒達は同情すら覚える。

ハンスは、げんなりとした表情で振り返ると、もう一度教卓へ戻った。そうして一つ咳払いをすると、渋々と口を開く。

「ええ、何か質問は……？」

ミシミシと音を立てる扉をなるべく視界に入れないように全員が勤めている中、他にやる事が無いので、結局はランとカールの議論が始まることになった。

同時刻、セリアは絶望感に打ち拉がれていた。

「ええ。今お話した通り、以上が今年のダンス大会の曲目です。毎年の様に、これはダンスの教養のテストも兼ねていますので、参加必須とします」

聖花祭を祝う為の学園行事が、その祝日の夜に行われるダンス大会である。大会といっても、ただ楽しく生徒間でダンスを踊る、というだけのものだが。

折角の恋人達の季節、わざわざ男女で二人っきりになれる催しを、

と校長が発案したものだ。そして、その影で繰り広げられる恋路の行方を見て楽しんでいたりもする。はつきり言って、趣味が悪い。いったい何を考えているんだ、と言いたくなる。

しかし、この校長の余計な気遣いに便乗して、めでたく春を迎えた生徒達も居るため、結構このイベントは人気だったりする。とくに、女生徒達にとっては、数少ないマリオス候補生と接する機会でもあった。

ヨークの発する一言一言を理解する度に、顔を青くしていくセリア。それはもう、気の毒になるほど顔から血の気が引いていくその姿に気が付いたのか、話すヨークの顔も微妙に崩れてきている。

「ええっと……何か質問は？ 無いようなら、今日の授業はここまでにします」

その言葉を合図に、わぁと教室を飛び出していく女生徒方を尻目に、セリアはヨロヨロと立ち上がるとヨークの下へ歩いていった。

「ヨーク先生……」

「セリアさん。どうしましたか？」

あくまでも優しく声を発するヨークをセリアが見据えた。

「ダンスですが、どうしても参加しなければなりませんか？」

「えっ？ まあ、テストも兼ねていますし、出来れば参加した方が良いですね」

「はぁ。そうですね」

一縷の希望を打ち碎かれ、セリアの表情はどんどん曇っていく。それには流石のヨークも少し慌ててしまった。

「その、そんなに心配する必要は無いかと。不安ならば誰かに手伝ってもらってはどうです？ マリオス候補生達とは仲が良いのでしょう？」

「えっと……」

「彼等は教養の科目も完璧な成績ですし。それに、カールハインツ君もランスロット君も、この大会の優勝経験者ですよ」

「…………はあ」

彼等が全てにおいて完璧だ、というのは知っているが、こればかりは彼等も手に余るだろう。

「でも……」

「私も何か出来ることがあればお手伝いしますので、何時でも相談してください」

ニコニコといつもの表情を取り戻したヨークは、そう言ってセリアを残して教室を去ってしまった。それを見てセリアもはあっと溜め息を吐く。

こんな行事があるとは思ってもいなかった。しかし考えてみれば、あのお祭り騒ぎが大好きな校長ならやりそうな事である。だが、それとこれとは話が別。全員参加必須なのは分かったが、なんとか理由をつけて抜け出せないものだろうか。

そんな事を考えながら、セリアは重い足を引き摺り、トボトボと教室を出て行った。

人から隠れるようにして、廊下を進んだ所にある扉を開き、ザウルは素早くその中に身を滑り込ませる。人気の無い場所を選んで進んだ結果、ここに辿り着いたのだ。友人達は上手く逃れただろうか。毎年のことながら、あの現象には流石のザウルも参ってしまう。

マリオス候補生の教室に押しかけた女生徒達は皆、今年のダンスで彼等のパートナーになろうとする者達であった。一年に一度の恋人達の時期。その事実には背中を押された女生徒達は、例えそれが一時の夢であろうとも、候補生の隣を勝ち取らんと必死になっているのだ。

逃げなくとも断れば良いのだろうが、恋とは時に人に計り知れない力を与えるもので、あのカールでさえ恋する乙女の猛攻に立ち向か

って勝利したことは無い。

そんな女生徒方からどうやってザウルが逃げ出して来たかという、簡単な話である。ランとカールの議論が始まってしまえば、時間というものはかなり早く過ぎる訳で、授業の終わりを告げる鐘が学園に鳴り響いても、二人の攻防は続いていた。

放課後になれば、教師達も教室を後にする必要がある。実際は、この時期のこの日のこの時間、マリオス候補生の教室に近づきたがる物好きな教師など皆無なのだが、生憎と職員室は候補生のクラスの前を通らねば辿り着けない構造になっている。その為、廊下を塞いでいる女生徒方を何とかしなければならぬ役目を運悪く負わされた数人の教師達が、時間を掛けて何とか彼女達を解散させたのである。

女生徒達は、この場で申し込むのに失敗したとなると、次は教師達の目の届かぬ所へ行かねば。と、それぞれお目当ての候補生達が現れそうな場所へ一直線に向かっていった。

その隙を逃さず、マリオス候補生達は一斉に教室を抜け出したのだ。そして、ザウルは出来るだけ人の気配が少ない道を進んで、今この場に到達した。

誘われるのが嫌な訳では無いのだが、今年はどうしても譲れない理由があるのだ。

去年までは、あの数の中からどう選べというのだ、と考えながらも、いつの間にか自分の知らない所でパートナーが決まっていたりもした。それは他の候補生達も同じだろう。どう決められていたのかは、未だ謎に包まれている。

今まではそれでも構わなかったのだが、それは去年までの話だ。今年は少し勝手が違う。初めて、自分から誘いたいと思える人物が居るのだ。そして、その少女が居るだろう場所へ一刻も早く向かいたい。出来れば、他の友人よりも先に。

しかし、もし誰かから声を掛けられてしまえば、その時は断り切る自信が無い。セリアと約束している訳ではないのだから、誘いを

断る理由が無いのだ。それは、他の候補生達にも言える事である。

実はこのダンス大会、曲目を発表する前に誘う事も誘いを受ける事も禁止されている。以前はそうでも無かったようだが、その所為でその時のマリオス候補生に入学と同時にダンスのパートナーにしてくれと頼んだ女生徒が殺到したそうだ。当時の候補生達も、そんな入学早々、かなり後の学園行事の約束をホイホイと交わす訳にも行かず、結局その時期になるまで断り続けたと聞く。

そんな事があってから、混乱の期間を出来るだけ短くする為、今の様な規則が設けられたのである。

そんな訳で、セリアはまだ誰のパートナーにもなっていない筈である。そしてセリアの場合、申し込んだ相手を断る様な事はしないだろう。それは、彼女を一番初めに誘った者がその隣を勝ち取る、という事に繋がる。なので、誰よりも先に目的の場所に向かいたいのだが、今はこんな状況の為、迂闊に行動出来ない。

ザウルが足を踏み入れた図書室は、どことなく静かだった。普段ならば課題や調べものをする生徒、暇を潰す生徒等でそれなりに雑音は聞こえる筈だが。

ふっと周りを見回してザウルはその理由を察する。女生徒が一人も居ないのだ。何処へ行ったかは、今は出来るだけ考えたく無い。しかし、雑談や噂話等に花を咲かせる存在が居なければ、静かになるのも当然か。

ザウルは、奥のもう一つの出入り口から出ようと足を向けた。今通って来た道を逆戻りするの、かなり危険であるからだ。それに、ここを抜けた方が温室への距離は短い。そう思い、ギョツとした視線を投げかけてくる生徒の間を足早に通り過ぎる。

と、視界に此処には居ないと思っていた人物が映り、途端に歩み



を止めた。

「セリア殿？」

「っ！！」

声を掛けると、栗毛の背中がビクリと肩を振るわせてからこちらを振り向いた。

「あっ！ザウル」

声の主が自分の知った人物であった事にセリアはホッと胸を撫で下ろす。ジィッと本を眺めるのに集中していた為、背後の気配に全く気付いていなかったのだ。

「何をされているの？」

「え、えっと……」

聞いた途端にセリアが今まで手に持っていた本をさり気なく後ろに隠そうとしたが、その前にザウルが表紙を目で捉える。そこに乗っていたは、社交舞踏、の文字。

バレてしまつては仕方ない、とセリアは観念した様におずおずと本を見せてきた。

「あっ、えっと……ほら、今日聞いたんだけど、ダンスのテストがあるっていうから」

「ああ、成る程。そうでしたか」

ダンスのテスト、の部分に氣にする所がセリアらしいというか、乙女らしからぬというか。

思い掛けない偶然だったが、セリアがここに居たのは幸運だった。この分では、まだ誰にも誘われていないのだろう。しかし、そこではっとなる。周りを見れば、右も左も男ばかりで、女生徒はセリア一人。

「セリア殿」

「何？」

「その、もうパートナーは決められましたか？」

「えっ？まだ、だけど」

セリアの答えにザウルは一人安堵する。

こんな男に囲まれた場所に居たのだ。もう誰かに誘われていても可笑しく無い。というより、こんな場所で一人本に集中していたのだろうか？自分の気配に気付かぬ程。だとしたら、もう少し自覚を持って、と言いたくなる。セリアが自分達以外の者の誘いを何食わぬ顔で了承する様が容易に想像出来てしまつて、その事に多少の苛立ちを覚えた。

まあ、多くの女生徒に目の敵にされているセリアと自分から関わろうとする男生徒など皆無に等しいので、それは要らぬ心配なのだが。しかし、ザウルにそんな事が分かる訳もない。

「では、もしよろしければ自分とお願い出来ませんか」

「い、いえいえ。私など勿体ないと言いまするか。そんな、出来ませんと言いますでしようか」

ザウルが言った瞬間、セリアはサツと顔を青ざめ、慌てて首を横に振った。これには、流石のザウルもピクリと眉が動く。

焦ったり慌てたりした時にセリアの口調が可笑しくなるのは知っているが、言われた事には納得出来ない。

不審に思つたザウルの雰囲気を感じたのか、セリアは慌てたように弁明する。

「いえ、ザウルが誘ってくれたのは嬉しいのですが、私には身に余るというか……」

その後も暫く、ああでもないこうでもない、と言葉を続けていたが、言っている内に自分の言葉に意味が伴っていないのを漸く理解したのか、セリアは一旦言葉を切ると、渋々と口を開いた。

「その……昔から、ダンスというものは苦手で。私の所為でザウルの成績まで下がったら申し訳ないし」

言われてザウルは、ああ、と納得する。確かに、今回はテストも兼ねているのだ。そんな事を気にしてパトナーがどうだの言う者はいないだろうが。

セリアの言い分は分かった。しかし、一度断られたからといって引き下がる様な事もしない。

「自分もそこまで踊れる人間ではありません。お気になさらないで下さい」

「でも、本当に下手だし。練習はするけど、本番までに間に合うか。それに、ザウルなら他にもっと……」

「自分は、セリア殿にお相手をお願いしたいのですが」

琥珀の瞳でジッと見詰められながらそんなことを言われては、誰でも言葉に詰るだろう。いつものザウルらしからぬ有無を言わせぬ雰囲気にはセリアも押し黙った。最後に「ご迷惑でしたか？」などと聞かれてしまえば否定する以外なくなる。その後も何度か自分の実力の程を念押ししたのだが、ザウルがそれを聞き入れる事は無く、結局、申し訳なく思いながらも、ザウルに頼むことになったのだった。

「あら、ハンスちゃん相当お疲れね。やっぱり逃げておいて正解だったわ」

ぐったりとしたハンスが職員室へ入ると、そこでは非常に寛いだ様子のクルーセルが片目を瞑った笑みを飛ばしてきた。それに、腹の底でフツフツと溜まっていた怒りは躊躇することなく爆発する。クルーセルの姿が教室から消えていたのは、あの混乱から逃れる為校長室に避難していたからだということは、承知している。当の本人が、隠すこともせず、しれっと言つてのけているのだから当然だが。

「クルーセル・ブロシエー！貴方という人は」

「あっ、皆のパートナーは決まった？」

ハンスの怒りをまるで気にすることなく、クルーセルはウキウキ

と言葉を続ける。それが更にハンスの怒りを膨張させていることを知っているのだから、質が悪い。

「貴方は、全て私に押し付けて何をしていたのですか！」

「あら、校長とのんびりお茶してたわよ。お茶菓子も美味しいのがあったし」

あっけからんと言う様に、脱力感で軽い眩暈を覚える。フラフラと近くの椅子に崩れ落ちれば、流石に悪いと思ったのかクルーセルが心配した表情を見せた。

「だ、大丈夫？」

「誰の所為だと思っっているんですか」

「まあまあ。そう怒らないでよ」

ジロリと睨んでも、軽く躲かれた。

もう彼との付き合いは長いので、こういったことは何度もあったのだが。全く、何処までが本気なのか分からない。彼の教師としての能力は、彼がマリオス候補生の担任であることから伺いしれるし、理解もしている積もりだ。自分は担任補佐という立場なのも十分、肝に銘じている。しかし、この仕打ちはあるまいではないか。「でも、やっぱり凄いわね。流石、恋する乙女」

「……」

瞳を輝かせて面白がるクルーセルに、本気で辞職願いを出そうかと今年何度目かになる考えがハンスの中で思い浮かんだ。

授業が終わって暫くした後、セリアと並んで温室に入ってきたザウルを見た途端、他の候補生は自分達の負けを悟った。

教室を出た後、それぞれ温室へ向かったのだが、女生徒の猛攻を

回避出来た者は居なかった。ランとカールは教室を出たものの、数分で女生徒に囲まれてしまい、あれよと言う間に自分のパートナーが勝手に決められていたのだ。特に、紳士的な態度を貫くランに、女生徒を押し退けて前に進む事など出来る筈も無く、無理矢理に近い形で押し通されていた。イアンにいたっては、何とか温室まで辿り着いたのだが、そこで待ち構えていた女生徒方に確保されてしまったのだ。

少し面白く無い、と思ったのが顔に出ていたのか、横でルネがクスクスと笑っていた。ちなみに、ルネも既に相手が決まっていたりする。

「それより、セリアはダンスどれくらい苦手なの？」

先程からオロオロしているセリアに、ルネが核心を突く質問を投げかけた。始めから、苦手、と断言してくるあたり、よくセリアを見ている。というより、この場の誰もセリアにダンスの腕を期待していないのは事実だが。

元々予想はしていたが、先程から落ち着かない様子でウロウロと歩き回ったり、心配気に顔を歪めたりで、嫌でもセリアの自信の程が分かってしまう。恐らく、相当不得意としているのだろう。

なんだか若干失礼な聞き方をされた気がしないでもないが、言い返す言葉が無いのでセリアは押し黙る。見る見る顔から血の気が引いて行くセリアを見たイアンが、苦笑しながらも助け舟を出した。

「まあ、全くって事はないだろ。試しに少しやってみたらどうだ？」

「ええええっ！！！」

どうせ最終的には踊る事になるのだ。それに、実力を早めに見せてもらった方がアドバイス等も出来るかもしれない。

そう説明するイアン達に、セリアは大いに遠慮したい気持ちで一杯であった。勿論、有り難い事に変わりは無いし、覚悟も決めた積もりだったのだが、いざとなるとやはり気まずい。

ううっ、と唸りながらもイアン達の瞳に促され、仕方なしにノロノロと立ち上がった。そのまま差し出されたザウルの手を取ったの

だが、久しぶりの感覚に若干の違和感を覚える。

温室のベンチに座って大人しく二人を見守る積もりだったイアン達だが、目の前の二人の位置に妙な点を見つけてしまった。始めはそれがなんなのかはっきりしなかったが、ザウルが困り顔でこちらを振り返った事で、それがなんなのかを悟る。

「おい、セリア」

「えっ？」

「お前、まずは一人で踊ってみろ」

「ええええっ！！」

漸く決心がついた所で、なんて要求をしてくるのだ。そんな一人でだなんてとんでもない。そうは思っても、目の前のザウルには、非常に申し訳なさそうな顔で手を離されてしまった。そんなあ、と涙目で周りを睨んでも、この状況が変わる事は無さそうである。

逃れられない事実は幾ら待っても変わらない。ええい、と半ば自棄になって、セリアはうる覚えのステップを踏み始めた。

右足、左足、と最初こそ順調に進んでいたかの様に見えたが、やはりそう長くは続かない。前後に体を揺らしながらも、段々と頭が混乱してきて、次の動きが分からなくなる。少しずつ減る氣力を掻き集めるが、それも遂に尽きて、セリアは足を止めた。

「えと……こんな感じです」

「……………」

振り向いたセリアが見た候補生達の表情は、何とも表現し難いものだった。戸惑いと混乱と、その他が入り交じった瞳で見詰められて、セリアもうつと言葉に詰まる。やはり、何か拙かったのだろうか。俯くセリアに、候補生達はどう言葉を掛けたら良いものか悩んでいた。まさかこんな事態になるとは。ある程度は想像していたのだが、今の現状はそれを遥かに超えている。

「セリア。非常に言い難いのだが……」

「……………今のは、男用のステップだぞ」

シン、と温室が静まり返った様な気がした。

「取り敢えず、明日からは特訓だな」

というイアンの言葉で、セリアは温室から帰された。それも、明日までにせめて女用の立ち方ぐらいいは頭に叩き込んで来い、というお題付きで。

自分でも気付いていなかった致命的な欠点に、やはりザウルの相手は自分には勤まらないだろう、と考えさせられた。

もう一度考え直さないか、と説得してみたのだが、どうもザウルは考えを変える気はサラサラ無いらしい。穏やかな笑顔で、特訓に付き合う、と言われてしまった。

寮に着いてから、セリアは先程図書室で借りた本を開いて奮闘していた。

昔は、それこそ人が踊るのを見て覚えようとしていた。恐らく其処で間違えたのだろう。記憶に残る僅かな動きを再現して、残像である女性の動きに合わせようと、自然に男用のステップを踏んでいたのだ。我ながら、情けない。

シュンと項垂れるセリアの部屋の明かりは、その日の晩遅くまで消える事はなかった。

## 精華 1（後書き）

今更何が起きようと、俺は驚かないし、焦らない。そう決めた筈なのに、なんでこんな事になってるんだよ!?

なんだ! あいつに惚れるのはそんなに拙いことだったのか? それとも、俺に恨みでもあるのか?

でも、やっぱどうしたって惚れちまってるんだよな。



## 精華 2

朝、それぞれの寮から伸びる校舎への道は、ダンス大会を存分に楽しもうと薔薇色の空気を振りまく生徒達で和気藹々としている。誰もが、若々しい恋心を胸に、一夜の夢の時間に心躍らせているのが見て分かる程に。

そんな中、この世の終わりだとしても言わん顔つきのセリアが一人トボトボと歩みを進めていた。その周りだけ、どんよりとした空気が漂っているのは気のせいではないだろう。

歩調を緩めずとも現状を思い出す度に、昨日から何度目かになる重いため息が口から吐かれるばかり。せめて立ち方だけでもどうにかしようと夜遅くまで頑張ってみたのだが、やはり一夜漬けでどうにかなる訳もなく、先行きは暗い。

「セリアちゃあん」

セリアの淀んだ気分を吹き飛ばす勢いで明るい声を投げかけてくる人物。日課としている朝の日向ぼつこの最中のクルーセルが、ニコニコ顔で手を振っている。そのまま手招きでセリアを呼び寄せると、その暗い顔を覗き込んだ。

「あら、どうしたの？ なんだか元気がないわよ」

「いえ、その……」

ハハハ、と乾いた笑いを零すセリアに、クルーセルは疑問符を浮かべる。

一体どうしたというのだろうか。年に一度のこの時期、年頃の娘なら誰もが浮き足立つだろうに。

「ダンスのテストですが、自信が無くて」

「テスト……？」

テストと聞いてクルーセルは一瞬疑問符を浮かべた。このイベントで意中の相手とのダンスよりもテストの方を気にする生徒など聞いたことが無かったし、クルーセル自身その事を完璧に忘れていた。

しかし、直ぐに思い直し、ニコリと笑う。

「そんなに気にしなくても大丈夫よ。最低限踊れば悪い点数は取らないわ」

「でも……」

「それより、パートナーは決まった？」

「えっと、一応ザウルにお願いすることにしました」

「あら、ザウル君？素敵じゃない」

それより、とはなんだ。仮にも教師なのだから、テストの方を気にするべきだろう。とセリアが心で突っ込んでみるも、クルーセルの楽しそうな顔は変わらない。

「でもそうなる、ラン君達はがっかりしてるでしょうね」

「……？」

「ああ、羨ましいわ。私がもう少し若ければ皆とトキメキの青春を送っていたのに」

「……………？」

一人で盛り上がっているクルーセルだが、その言葉をセリアは全く理解しちやいない。

何故ラン達ががっかりするのだろう。そんな要因一つも無いように思うのだが。

「セリアちゃんも頑張ってね」

「……………はあ」

その後も校舎への道中も、若さね、とか、恋っていいわ、とかセリアには理解不能な言葉を続けていた。

その日の授業も滞り無く終わり、ヨークが教室を出て行くのを見

送ると、セリアは素早く仕度をすませた。今日から特訓、と言われているのだが、出来ればもう少し待っていただきたい。昨日課せられた基本の立ち方を覚えるという課題が、まだ出来ていないのだ。曲目も複数あるので一つ一つ覚えるのですら一苦労なのに、何処をどう間違えたのか、男性用のステップが身体に染み付いているので一筋縄ではいかなかった。

その状態で、練習に付き合って下さいと候補生達に言える訳もなく、出来れば最低限の立ち方が出来る様になるまで特訓は是非とも待って欲しい。

「セリア。行こう」

教室から顔を出すと同時に、何故か目の前にいたルネに呼び止められた。出来れば逃げたいなあ、と少しでも考えていたセリアは、まるで思考を読まれたような気がしてかなり焦る。ルネの姿を目にした女生徒達から、途端にギョロリと敵意を向けられる、というお決まりの展開になったのだがそんな事気にする間もなく、セリアはルネに連行されていった。

「大丈夫だから、逃げないでね」

「いえ、とくに逃げようとはしていない、ような……」

途端に目を逸らしたセリアを、深緑の瞳が笑顔で捉える。

「そんなに深く考えることないよ。ザウルも、セリアと踊れるってだけで楽しみにしてるんだから」

いや、何故そんな事を楽しみするんだ。むしろ迷惑がつてやしないだろうか。というのがセリアの素直な疑問である。

ニコニコ顔のルネと歩いている間も、温室は確実に近づいている訳で、セリアはなんとなく肩が重くなる気がした。

「あんまり女にこういう事は言いたかないんだけどなあ……………」

なんなんだ、そのへっぴり腰は！

イアンが言った先では、ザウルの手を取りながらも、大きく腰を引いたセリアがかなり不恰好な状態で足下を注意深く見下ろしていた。あまりにも不安定なその姿勢に、イアンが遂に声を発したのだ。本来なら、女の姿勢をどうこう言うのは男としてどうかと思うのだが、はつきりいってセリアの状態は性別を超越している。

「ちよつと見てろよ」

そういつてイアンはセリア達の間に入ると、ザウルの手を取った。言うより見せる方が早いだろうと思つての行動だ。そして、流石は候補生、と賛美の声を送りたくなるほど見事な立ち姿を見せる。やはり彼等はどんな事でも完璧にこなしてしまえる様だ。

「お前の場合、もう少しザウルとの距離を詰めた方が良さだろうな」  
本音を言えば、二人に接近して欲しくなど無いのだが、今回はどうしようもない。

そのままセリアに見せる為、イアンがザウルとその場で少し体を揺らす。イアンは女用のステップだろうと軽々と踏んでみせるし、ザウルも自分より若干体格の良いイアンとも違和感を感じさせず流れる様に動いている。

その姿はまさに光輝いていて、セリアですら感心する程だ。この場に他の女生徒が居ようものなら、鼻血を吹いて失神するに違いない。むしろ、この二人がパートナーになった方が良いのではないだろうか、と本気で思う。

折角手本になってくれているのだから習得せねば、とイアンの動きに集中しているセリアは、そのイアンの表情が段々と曇っている

のに気付いていない。

ザウルの手を取りながら、イアンは釈然としない気持ちに襲われていた。

可笑しい。明らかにこの状況は可笑しい。成り行きでこうなってしまったが、どうも納得が行かない。本当なら、自分が手を握りたい相手はセリアであって、決してザウルではない。しかも、何故自分は女用の振り付けを踊っているのだ。聖花祭の夜の相手は取られるし、なんだか訳の分からない事態になっているしで、本気で頭を掻きむしりたくなってくる。なんなのだこの仕打ちは。セリアに惚れた時点で甘い事態は期待していなかったが、これは余りにも酷すぎないだろうか。

イアンが心中穏やかでないことを握っている手から感じ取ったザウルは、苦笑しながらも全く同じ心境であった。とはいっても、自分はイアンには無い特権があるのだから文句はないが。

セリアは必死で二人の動きを目で追いかけるが、基礎も何も出来ていないのに、いきなり超上級の動きを習得しろと言う方が無理な話だ。見ているだけで十分である。

だんだん頭も混乱してきたセリアが、ふわりと香ばしい香りに気づきそちらを見ると、ルネがティーカップとポットを持ってこちらを凝視していた。

茶の用意をしに少しの間温室から離れていたルネは、帰ってきて目に飛び込んだ友人達のなんとも奇怪な行動に迷わず噴出する。長い付き合いの中でも、こんな光景は見たことがない。いくら自分達は仲間だといってもこの状況はそれとは別の問題だろう。それに加え、当の二人が何処か冴えない顔をしているので、なお面白い。

それもこれも、全て栗毛の少女の為かと思うと、どうしても可笑しくて堪らないのだ。

「クッ……少し休憩しよう」

肩を揺らしながらのルネの提案に、お互い離れる機会を窺ってい

たイアンとザウルはこれ幸いとばかりに応じた。

「どうだ。少しは出来そうか？」

「……………」

テーブルに並べられた紅茶を手に取りながらイアンが聞くと、セリアは難しそうな顔をした。やはり、二人のダンスは完璧そのもので、とても真似出来る様な代物ではない。彼等には悪いが、はつきりいってあまり参考にはならなかった。

そう言えば途端に顔を渋めるイアン。

ではなにか。自分が野郎と手を取って耐えたにも拘らず、何の意味もなさなかったということか！？

イアンは今度こそ頭を抱えて俯いてしまった。

それを見てルネがもう一度クスリと笑ったのには、誰も気づいていない。

食器のぶつかる音が響く食堂では、候補生達が勢ぞろいしていた。数ヶ月前まではそれだけだったのだが、ここ最近は栗毛の地味な少女がその中に混じっている。

「すみませんでした」

結局その後も特訓は続いたのだが、殆ど成果は得られなかった。ヘトヘトの体を動かしながら、遅い時間まで付き合わせてしまった彼等に謝罪の言葉を告げる。

しかし、実は奮闘したのはセリアだけで、候補生達にはそれほど

の苦ではなかった。本来貴族のダンスとは曲の流れに身を任せ、優雅に舞うものである。コツさえ掴めばそれほど体力を要するものではないのだ。何の苦もなくステップを踏む候補生達に対して、体に余計な力が入り、必要以上に動き回り、緊張で気を張り続けたセリアが、かなりの疲労を感じるのは当然だろう。

「そう落ち込むことないよ。まだ時間はあるんだし。気長に練習しよう」

「……でも」

時間があるといっても、あと二週間ちよつとである。それまでに、最低でも一曲は踊れる様にしなければならない。

テストは三曲用意されており、その中で最も高い点数が採用される。それが終われば、あとは自由。大会はそのままパーティーへと変わり、踊り続けるもよし、恋人と抜け出すも良しで、それぞれが思い思いの場所へ向かう。そして、最後にその日のダンス大会優勝者が発表されるのだ。

候補生の中でもランとカールは優勝経験があるらしい。そして、優勝は逃しているものの、残る候補生達も負けず劣らずの成績を叩き出しているようだ。

聞くだけでも、本気で申し訳ない気持ちになってくる。

「鬱陶しい」

ブツブツと理解不能な言葉を呟くセリアを、不機嫌顔のカールが一刀両断した。その表情は、鬼のそれよりも恐ろしい。

「カール。機嫌悪そうだけど、どうかしたの？」

カールの表情からその心情を読み取る事の出来る、数少ない貴重な存在のルネが聞くと、カールは更に眉間の皺を寄せる。

これを機嫌が悪い、の一言で済ましてしまえるルネはある意味大物かもしれない。他人からしてみれば、縮み上がって訳も分からず謝罪してくるだろう程の形相を。

その横で、ランも厳しい表情を見せている。それを見てルネは、ああ、と頷いた。

「大変だったね。今年も」

「……………」

セリアが覗くと、ランとカールの食はあまり進みが良くない。何かあったのだろうか

「また逃げられなかったのか？」

「どうしても、と詰め寄られてしまつては、断ることも出来ない」  
ぐったりしたランがそれだけいうと、またスープを無理やり口に含んだ。

ランスロットとカールハインツ。その麗しの美貌と揺るぎない実力に、羨望の眼差しを向ける者は数知れない。まあ、それは他の候補生達にも言えることだが。

とにかく、恋人達の季節に彼等の隣を勝ち得た者が、それを機に一気にお近づきになろうと、練習を口実に押し付けてきたのである。既にパートナーが決まっているザウル、逃げる術を身に着けているイアン、温室で花の世話という盾を持ったルネ。この三人は逃れられても、残った二人にはそれが出来なかった。

紳士的な態度を貫くランは、練習したいと目を潤ませる女生徒に背を向けること叶わず、捕獲。

カールハインツの場合、魔人の睨みを浴びせたが、恋に燃える乙女達の方が強かった。議論になるとあんなに多弁になるくせに、それ以外では無駄を一切口にしないカールの無言の拒否を、女生徒方が受け入れる筈もなく、捕獲。

そのままこの時間まで、ずっと練習にお付き合いさせられていた、という訳である。

同じ練習でも、絶えず乙女心と一緒に身を任せてくる女生徒と、セリアとではやはり違う。

「はあ、それは…」

大変だったね、と続けようとした言葉を、カールの睨みが制した。これ以上、その話題について一切語られるのを嫌ったらしい。とい



うより、思い出したくもないのだろう。

一方、睨まれたセリアはヒイツ、と悲鳴を上げ縮こまる。なぜ自分がそんなに睨まれなくてはならないんだ。という不満は、目の前の魔人には言わないでおく。

「ルネ、居るか？」

昼休みの隙に、イアンは校舎を抜け出し温室へ来ていた。普段は授業の後に皆で集まるため、この時間には誰も居ない筈だ。しかし、花の世話一切を請け負っているルネは、朝だろうと昼だろうと決まっ

ってこの場で水を撒いている。

「珍しいね。どうかした？」

校舎から幾分離れているこの場所に、まだ授業中にも構わず顔を覗かせる者は少ない。例えそれが候補生であっても同じだ。にも関わらず彼がこの場へ赴いたのには、何か理由があるに違いない。まあ、大方の見当はつくが。

「忙しいのは分かってるんだけどよ、花ってまだ頼めるか？」

この時期、聖花祭の本来の趣旨である相手に花を贈り想いを伝えるという行為。それを、ダンスに浮かれているとはいえ、生徒達が忘れる筈もない。そんな彼等にとって、この温室の中、ルネの天使の微笑みと愛情をたっぷり注がれ育った草花は、祭りを彩る絶好の材料である。お目当ての相手がいる者はこぞってこの場を訪れ、祭りで想い人に贈る花束を用意して貰えるよう頼んでいくのである。

普段から花と接している為か、ルネの作る花束は、それはもう芸術技と称される程素晴らしい物だった。相手のイメージ通りか、それ以上の花々をあしらい完成したそれは、ほぼ確実に相手の心を掴む。なので、ルネの花束はかなり人気があるのだ。

ルネもそれを分かっているのです、この時期に間に合う様、随分前から大量の花をこの温室で用意し始めた。その花を入荷する為の資金は、毎年校長が惜しげもなく提供するらしい。

「大丈夫だよ。でも、今まで花を頼んだ事なんてなかったのに」

「ま、まあな。でも、女がどんな花を欲しがるかなんて分かんねえんだよな」

そう言ってイアンは温室内をグルリと見回す。ガラス張りの空間では季節に似つかわしく、クリスマスローズやヒラギといった冬のらしい花がこの場を彩らせていた。しかし、イアンにとっては何れがどれやらさっぱり分からない。花は嫌いではないが、自分で愛でたことなどないのだから仕方の無い事だが。

「うーん。大体は華やかな感じの花を使うけど、セリアならもうちょつと小さめの花かな」

「ああ……」

ルネの言う通り、セリアに贈るのであれば大きく派手な大輪の花よりも、可憐で野花の様な花の方がイメージにあっているように思う。イアンも同意見で納得し、その言葉に頷いたが、うん？と一瞬違和感に包まれる。

「ちよつと待て！誰がセリアにとって……」

「あれ、違うの？」

あつげらかんと言われてイアンはうつ、と言葉に詰まった。

違いはしない。正にその通り、セリアに贈ろうと思っていた花だ。しかし、考えてみれば少し決まりが悪い。自分で言うのもなんだが、自分の様な人間が人に花を贈るなど、似合わなすぎる。今まで考えた事もなかったのだから。それでも、この行事に便乗しようとする姿を少し前の自分が見れば、目を点にして驚くだろう。

それにしても、ザウルとランには教えた気持ちだが、ルネには何も言っていない筈である。にも関わらず、何故さも当然の様に言ってくるのだ。

「いや、その……とにかく、それで頼む」

非常に微妙な空気を醸し出しながら、イアンはそれだけ言うときと退散してしまった。温室を出る前に、この事は内密に、と釘を刺すのも忘れない。

バツが悪そうにそそくさとその場を立ち去るイアンは、ルネが後ろでクスクスと笑っていることには気付かなかった。

少しからかい過ぎただろうか。別に今更隠す必要は無いのだし、彼が隠しているとも思っていなかったのだが。まあ、今まで花などろくに選んだ事の無かった彼が、この季節にそれを用意しようと決心したのだ。それだけでも賞賛に値する行為だろう。

「でも、ちょっと遅かったかな」

実は、今年初めて自分に花を頼んできた友人は一人では無い。イアンは四番目なのである。残る一人が花を用意しようなどと考えているとは思えないので、事実上彼は最後に来た事になる。それで花束に優劣を付けようとは思わないが、花の数にも限界がある。まあ、予想していた順位であるし、彼はそういう事に敏感な方ではないので良しとしよう。

しかし、最初の人物がこの温室に現れた時は正直言って驚いた。まさか花を頼んでくるとは思いもしない人物だったからだ。全くそんな気は見せなかったのに。そして、誰よりも早かった事にも驚いた。

「花、足りるかなあ？」

花を贈ろうとするなど初めての友人達だ。折角なので、少しサービスしてやろうとも思ったのだが、どうも数が少々足りなくなるかもしれない。

フウ、と息を吐くルネの顔は、それでも何処か楽しげであった。

「いやいや、今年もこの学園は色鮮やかに飾られるだろう」

校長室では上機嫌の校長が、相変わらず寛いでいるクルーセルに笑みを向けていた。

彼の言う色が、自らが資金提供した花か、それによって咲かせる恋の花かは分からないが。恐らく両方なのだろう。

「いいわねえ。私もルネ君にお花頼もうかしら」

「それは面白いな。では、今年は教師全員から生徒に花を配って貰おうか？」

職権乱用も甚だしい、とんでもない提案にクルーセルの相方が透かさず口を出す。

「校長。あまりご冗談を」

「おや。私は何時でも本気だよ、ハンス君」

だとしたら尚更質が悪い。ハンスが顔を青くしているのを、彼の同僚が忍び笑いで見守る。

「それに、これはただ愛を伝えるだけの行いでは無いよ。もう一つ意味があるのも知っているだろう」

「確かにそうですが、年の若い生徒達が理解するでしょうか？」

「それもそうだな。では仕方無い。今回は愛を伝えて貰おうか」

「何故そうなるのですか……」

ハンスの答えをケロッと答えた校長なら、本気でやりかねない。勘弁してくれ、とハンスが必死に食い下がると、校長は渋々ながら引き下がった。全く、何処までが冗談なのか、本気なのか分からない。

「ほらほらハンスちゃん。早くしないと授業が始まっちゃうわよ」  
「っ！私なんの為にここまで来たと思っているのですか！！」

休み時間になった途端姿を消したクルーセルの次の行動は分かり切っている。どうせこのままこの場に留まる積もりだったのだろう。なので、ハンスが自ら確保しに来たのだ。

そのまま同僚をズルズルと引きずって、ハンスは校長室を後にした。

## 精華 2（後書き）

不運の事故、というのは色々な所で起きる。それは分かってるけど……なんでよりにもよってこんな時に。今回は私だけの問題じゃないのに、どうして。

いや、私の不注意だったのかもしれないけど。それでも納得出来ない。

やっぱり、隠しておくしかないよね。

## 精華 3

温室内に響く手拍子に合わせて、セリアは懸命に足を動かしていた。

「ほら。右、左」

「くっ！」

歯を食いしばって次の動きに対応しようとするが、どうしても手を握る相手との呼吸が合わない。

「あっ！！」

「っ！」

声を上げた時には既に遅く、パートナーの足に自らのそれを引っ掛け、激しく転倒していた。しかしザウルがそのまま何もしない筈もなく、器用に重心を動かし難を逃れる。一瞬襲われた浮遊感の後に、元の位置に戻っているのにも、もう慣れてしまった。

「ご、ごめんなさい」

「いえ。お気になさらず」

というより、一々気にしては、身が持たないだろう。

本日何度目かになる転倒に、セリアは重いため息を吐いた。本番を一週間後に控えた今、こうして毎日練習に付き合っただけののだが、未だに失敗が耐えない。流石に、男用のステップを踏むということはしなくなったが。

「でも上達したよね。もう合格点は出せてると思うよ」

ルネの意見には大いに賛成である。セリアなりにかなり努力したのだろう。優勝には程遠いが、なんとか最低限は踊れていると思う。ただ、一つの点を除いては。

「しかし、パートナーと息が合わないのは致命的だな」

ここ数日は運良く女生徒方の猛攻から逃れられているランが指摘した。

あれから何度もこうして二人で練習しているが、どうしてもずれ

が生じてしまうのだ。セリア一人の時は何とか失敗もなく、最後まで押し通せた。それでもまだ不恰好な部分があるので、テストはぎりぎりだろうが。

しかし、二人で手を取って動こうとする度に、セリアが力みすぎる所為か先ほどの様に転倒を繰り返している。

「その…合わせようとはしてるんだけど」

「……………」

ザウルにとっても、これはあまり嬉しい事ではない。想いを寄せている相手が、自分とは相性が合わない、と言われている様で、少しキツイものがある。

実際、相性が悪いという問題ではないのだが。

逞しい腕に身を委ねた女性と、それを支える男性。この二つが優雅な男女のダンスを生み出す。つまり、お互いが多少は相手に身を任せなければ成り立たない行為なのだ。しかし、いまいちそれが理解出来ないらしいセリアは、一人で踊っている時と何ら変わらない動きをするので、相手との間にずれが生じるのも当然といえる。

練習と回数で何とかしようと試みた候補生達だったが、どうも上手くない。彼等にとっても初めての事態なので、どうしようかと考えを巡らせていた。

うーんと、イアン達も思考を回転させるが、上手い方法が思い浮かばない。それに、練習続きでセリアの疲れがたまっているのも気になる。それならば、ここでこうしているのも無意味に思えてきた。「よしっ！たまには気分転換に行かないか？」

「へっ!？」

唐突なイアンの申し出に、一瞬理解が遅れた。この状況で、今の現状で、どうしてそうなるのだろうか。

「あんまり気を張ったって仕方ないだろう」

「それもそうですね。セリア殿もお疲れでしょうし」

なんだかもの凄く気を使わせてしまったらしい。その事に気づく



と、彼等の申し出を断る訳にも行かず、結局その日は街へ出かける事になった。

学園都市はいつでも人で賑わっている。それなりに大きな都市でもあるし、王都から馬車で一時間と距離も近い為だろう。行きかう人々で賑わった通りは、見ているだけでも十分楽しめる。

普段は用事が無い為、外には滅多に出ないがたまには良いかもしれない。とセリアは思っていた。候補生達にとってこの場合は庭も同然で、通行人も彼等を認識しているのか、少し視線が痛い。それでも、一人で来た時よりも断然楽しいだろう。

セリアにとって、何処へ行くでもなく、ただブラブラと街を歩くのは初めての経験だ。前は気付かなかった物を見つける度に瞳を輝かせる栗毛の地味な後ろ姿を、候補生達は微笑ましく付いて行った。特に目的は無いが、とりあえずは街の広場を目指している。その間も行き交う人の好機と敵意の視線を集めている訳だが。

今彼等は商業区を通っていた。人々の生活の一部とも言える店が立ち並ぶ通りでは、人の出入りが一層激しい。人が増えれば、賑やかになる反面問題も多く発生する。時には窃盗や喧嘩も起こるらしいこの場所だが、そんな雰囲気を見せず、活気で溢れていた。

「楽しそうだな」

「よかったんじゃない。あんまり根を詰めても疲れるだけだし」

イアンが見詰める先では、セリアが店の中を興味深げに覗いている。あちこちの店の窓に、まるで引き寄せられるよう張り付く様は、さながら子供のような。

そんな風楽しい時間を過ごしていた候補生達だが、突然響いた

悲鳴に何事かと振り向いた。

「誰か！捕まえて！！」

女性の訴えが響いたかと思えば、何者かの影が人混みから飛び出して来た。そして、見事な具合でセリアに衝突する。

「へう！！」

可愛らしさも色気も、女らしさの欠片も無い悲鳴を上げると、セリアは大いに弾き飛ばされ盛大な尻餅をついた。セリアにぶつかった男も、一瞬よろけたがそんな事に構ってはいられない。すぐに体制を立て直しつつ走り去ろうとしたのだが、ぶつかった相手が悪かった。というより、ぶつかった相手と共に居た者が悪かった。

「させるかよ！！」

「っ！！」

セリアの周りにいた候補生が、窃盗犯（女性の悲鳴から推測するに）、尚かつセリアに危害を加えた者を逃がす訳もなく、強行突破しようとして突っ込んで来た男をイアンが殴り飛ばし、蹣跚けた所をがザウルが思い切り放り投げた。続いてランが起き上がった男の腕を捻り上げる。途端に男は痛みで小さなうめき声を洩らした。

「盗みを働いた上に、女性に怪我をさせるとは、許されざる行為だ」  
「ひっ！お、お許しを！！」

ギリリツと捻る力を強めたランに、男はぞっと青ざめた。セリアを弾き飛ばした男を許す積もりは毛頭なく、本当ならこのまま腕の一本折っても構わなかったのだが、人混みから警官が慌てて駆け付けた事により、仕方なく手を離れた。

「こ、これは、フロース学園の…」

駆け付けた現場で窃盗犯を取り押さえたのが、自分達より格段に身分が上である貴族、しかもフロース学園の生徒であると知って、警官は捉えられた男以上に顔を青ざめた。

「ご、ご協力感謝します！！」

妙に緊張した状態で敬礼すると、そのまま男を引き摺って野次馬の中へ消えてしまった。その一連の様子を呆然と眺めていたセリア

に、ルネが慌てて駆け寄る。

「セリア。大丈夫？」

「えっと。全然、大丈夫だよ」

急な展開に呆気にとられていたが、ルネの言葉で正気に戻る。しかし、セリアが立ち上がろうとした瞬間、足首に「ぎくっ」とした痛みが走り、気付かれない程度に眉をひそめた。どうやら転んだ時に捻ってしまった様だ。まあ歩けない程ではないし、放って置けば治るだろう。

そのような事があったので、外出はこのくらいにして学園に戻ろう、という事になった。セリアも、今日はもう寮で休んだ方が良くと言われ、今は自室にいる。そんなに大した事ではないのだが、彼等が余りにも心配するので大人しく従う事にした。

しかし、まだ寝るには早い時間の為、もう少し練習はしておこうと一度立ち上がる。図書室から借りた本を頼りに、身体を動かそうとしたのだが、その途端に再び足首に「ビリッ」とした痛みが走った。昼間よりも酷いその痛みに思わずうっ、と声を上げる。恐る恐る靴下を下げて見れば、その箇所は紫色に腫れていた。

「うわぁ」

やってしまった。こんな時に怪我をするなど、あり得ない。踊れない程ではないと思うが、明らかにそれなりの支障が出るだろう。万が一大会に出れなくなってしまうえば、自分の成績だけでなくザウルにも迷惑が掛かってしまうし、ここまで付き合ってくれた候補生達にも申し訳ない。

「う、ん……………」

暫く考えた後、明日になれば大丈夫だろう。と、根拠も何も無い結論を出して、その日は早めに寝る事にした。

しかし、足の怪我は一晩経っても治る気配は全く無い。それでも、その日の授業は何とか気力で乗り切った。まだ多少痛みは残っているものの、まあなんとかなるだろう。何より、まだ練習が必要なのだ。怪我をしたからといって休んではいけない。

そう思って、痛む足を温室へ向ける。

「セリア、どうかしたのか？ 顔色が優れないようだが」

覗かせたセリアの顔が多少青ざめている事にいち早く気付いたランがそう尋ねたが、セリアはブンブンと首を振った。ここで足の怪我の事を知られる訳には行かない。心配性の彼等の事だ。きつと練習を中止されてしまう。せめて最低限ザウルと踊れる様になるまで頑張りたい。

必要以上に否定してくるセリアを多少不審に思いながらも、見た所何処にも異常は無いので取り敢えずランも頷いた。

それから少しの間雑談になったのだが、その後は当然の様に特訓が開始される。ザウルの手を取ってセリアは気合いを入れるが、やはりというかすぐにまた足を引っ掛けてしまった。その途端にかなりの痛みが足首に響き、セリアは顔を歪める。

「いっ！！」

「セ、セリア殿！？」

ちよっとシャレにならない程の痛みが走り、セリアはヨロリと椅子に腰掛けた。今も不自然な熱を持った足がジンジンとその異常を知らせてくる。

今までに無い悲痛な声を上げたセリアに、ザウルは驚いた。いつもの様に体制を立て直してセリアを元の位置に立たせたのだが、顔を歪ませて椅子へ向かうセリアの様子は可笑しかった。どうも足を気にしているようだ。

「セリア殿、どうなされました？」

「え、ううん。ごめん、なんでもな…わっ!!」

いきなり自分の前に膝を付いてしゃがみ込んだザウルが何をするかと思えば、何といきなり足を掴んだのだ。突然の痛みに再び表情を歪める。

「…失礼します」

セリアの様子にザウルも眉を潜めると、一言断りをいれて靴を丁寧に、だが素早く脱がせていった。

「えっ!!? いや、ちよっ!!」

まずい。明らかにバレている。とセリアの顔が青ざめる間にも靴下まで取り外され、あっという間に素足がザウルの前に露にされた。「なんだこれ!？」

覗き込んだイアンとランが見たのは、紫色に腫れ上がった足首。ジロリとセリアを睨めば途端に逸らされる目線。一体何時からこんな状態になっていたのだ。しかも、そんな事微塵も見せず、何の相談もせずに練習などしようとしたいたのか。呆れて何も言う気が起きない。

「あの、そんな見た目程酷くはないし、別に大丈夫……っ!!」

言葉の終わりを待つ事なく、浮遊感に襲われたセリアは一瞬でザウルに抱き上げられていた。いわゆる、お姫様抱っこである。

「彼女を医務室まで連れて行きます」

「ああ、頼む」

脇目も振らず歩き出すザウルに、セリアは焦った。そんな急に、しかもこの体制のまま行こうというのか。

「ちよっ! ザウル、降ろして!!」

「お断りします」

きっぱりと言われてしまつてセリアはうつ、と押し黙った。しかし、この体制と、行き交う生徒（主に女性）が飛ばしてくる敵意の視線に落ち着かないのも事実であつて、出来れば是非とも降ろして貰いたい。そんな事をセリアが内心で願つても、ザウルは歩調を緩める事無く、驚愕の表情を向ける生徒達のと真ん中を真っ直ぐに進んで行つた。

セリアを抱えたまま医務室に飛び込んだザウルを迎えた養護教諭は、一瞬驚いた表情を見せたが丁寧に対応してくれた。数分絶つた今、セリアの足首は包帯でグルグル巻きにされている。

「でも貴方も女性なのだから、もっと自分の身体を大事にして下さいね」

肩を打撲してこの医務室に来たのも、そんなに昔の事ではない。それに、階段から落ちたといつてこの場に現れたのもつい最近だ。いずれも同じ少年に付き添われて来ていた。こうも何度も医務室に赴き、しかもそのいずれもが比較的大きな怪我を持つてくる女生徒は珍しい。

「では、三日間は安静にしていして下さいね」

「みつ、三日!?!」

そんな、ダンス大会まで一週間を切っているのだ。しかも、まだろくに踊れていない。貴重な練習時間を三日も潰さなければならぬのは、正直厳しいものがある。

「セリア殿」

「ひっ!?!」

聞いた事の無い、低い声で言われて、物思いに耽っていたセリアはビクリと反応した。声のした方向を見れば、明らかに不機嫌顔の

ザウル。それを見てセリアは更に縮こまった。

何があっても殆ど物怖じせず、いつでも穏やかな雰囲気を纏うあのザウルが、これほどまでに苛つきを露にしているのだ。やはり、こんな時に怪我を負ってしまったのは拙かっただろう。自分だけでなく、ザウルにまで迷惑が掛かってしまうのだから。

「ご、ごめんなさい。その、大丈夫だから。練習はするから」

「いいえ。練習は禁止します」

「え、えええ！」

練習を中止ではなく「禁止」と言ったザウルはそのまま屈んで、椅子に座ったセリアに視線を合わせた。

「貴方は怪我を治して下さい。最悪の場合は、大会も諦めましょう」  
「ええ！そんな気にしなくても、平気よ。少しくらい動いても、全然」

「いけません」

「でも、…」

必死で説得しようとするが、ザウルは首を縦には振らない。しかし、セリアにしてみたらそれはとんでもない事だ。幾ら何でも、それは心苦しすぎる。それでは、ザウルまで成績に支障が出てしまうではないか。自分と違って彼はマリオス候補生だ。責任が大きい分、不相応な行いを見ればその地位から落とされる可能性だってある。

「それじゃあザウルが…」

「自分の事はお気になさらないで下さい」

「でも……じゃあザウルは別の人と…」

言った途端、ザウル表情が苛立ちに染まっていくので、セリアは口を閉ざした。

「自分はセリア殿以外の方をお誘いする積もりはありませんよ」

「だって、それじゃあ……」

「セリア殿」

ザウルの強い口調にセリアも背筋が伸びてしまう。

「貴方はもっとご自分の事を労って下さい」

「……………」

「またそうして無茶をなさるおつもりですか」

「え、いや、その……」

「何故、今日も何も仰って下さらなかったのですか」

「えっと……」

何故いきなりこんな会話になっているのか理解出来ず、セリアも口籠る。つい先刻まで大会の事を話していたのではなかったのか。

「自分は、そんなに頼りないでしょうか」

「そ、そんな事ない!!」

いやいや、何を言い出すのいきなり。そんな頼りにならないなんて、どうしてそうなるのだ。全くそんな事は思っていないし、むしろいつも頼りまくっているではないか。段々話しが可笑しい方向へ傾いているのを、どう修正しようかと悩むが、どうすれば良いのか分からない。

「では何故、何もご自分から話しては下さらないのですか」

いつもいつもセリア自身から頼まれたり、弱音を聞いたが無い。

どんな時でも、自分達が気付くか、他の誰かが言うかだ。目が離せない程危なっかしいくせに、なんの相談もしてこない。それが、どれほど自分を苛立たせているのか、この少女は何故理解しないのだろうか。

「その……」

「とにかく、練習は禁止です。最低でも三日は安静にしてくださいいただきます」

言いよどむセリアに、ザウルは言付ける形で会話を中断させた。

元々答えなど望んでいない。それでも、自分達を少しは頼れと、遠回しにでも言わなければ気が済まなかった。その意図は、少しでも伝わったのだろうか。

内心で焦りまくり、ザウルの心など欠片も理解していないセリアは、考え込みながら難しい顔をしていた。

先程の問いはどういう意味だろうか。自分にしてみれば、彼等に



は出会ってから今まで迷惑を掛けっぱなしなのである。だから、必要以上に心配を掛けたくないと思っていたのだが、それも迷惑だったのだろうか。なんだか理由は分からないが、非常に申し訳ない気持ちになり、居心地が悪くなりセリアは俯いた。

しかしそれも一瞬で、再びあの浮遊感に襲われる。

「わっ!!」

「とにかく、今日はお休み下さい」

「えっ!? あの……」

再びセリアを抱きかかえると、ザウルは医務室の扉を出た。今度は何処へ連れて行かれるのか、と焦ったセリアは必死に降りようとがいてみるが、ザウルに取ってそんな抵抗意味を成さない。暴れるだけ無駄なのだが、混乱したセリアにそれが分かる筈もなく、無駄な足掻きが続けていた。

「ザウル、降ろして」

「いいえ。足を怪我されているのですから、このまま寮まで送ります」

「い、いえいえいえいえ。そんなことなさらずでも、よろしいともうしましょうか」

この体制のまま、多くの女生徒の中へ突っ込んで行こうというのか。本当に勘弁してくれ。とセリアが内心悲鳴を上げてても、ザウルがセリアを降ろす事なく、寮への道を確実に進んで行く。

まずい。このままでは、もしかしくとも相当の嫉妬を買ってしまふ。

いくらセリアが鈍くとも、ザウルと自分の体制が多くの女性が永遠に憧れる姿勢である事は分かる。自分に取っては出来れば遠慮したい状態であるが。とにかく、そんな姿を見れば、今度こそ確実に殺されるかもしれない。と、冗談ではなく、本気で思ってしまう。

というより、自分は歩けるのだから運んでもらう必要は無いのだ。と言っても、ザウルが降ろす気配は無い。そんな問答が続いている内も、女子寮は近づいて来ている訳で、女生徒の目も増えて来てい

る。なんだか遠くで怒りの奇声が聞こえるのは気のせいであると信じていた。

「自分はここまでしかお送り出来ませんが」

そう言ってやっと降ろされたのは、女子寮の目の前。針の筵に放り込まれる気分だが、わざわざここまで運んでくれたザウルにそんな事言える筈もない。入り口の所まで連れて来られたセリアは、漸く解放された事にホッと安堵する。

「部屋では絶対に安静にしていして下さい。よろしいですね」

「でも……」

なんだか子供に言い聞かせる母親みたいだな。と若干ずれた思考でセリアがザウルを見上げると、その表情が真剣そのものだったので再び俯いた。

その後も、ひどく心配するザウルが、繰り返し無理をするなどか、足を出来るだけ動かすな、とか言い聞かせていたが、セリアの中では怪我の事より、禁止されてしまった練習の事の方が頭を多く占めていた。

### 精華 3（後書き）

安静にしていって下さいとは言いましたが、今までの行動から察するに、彼女がそれを守る事はあまり期待できないでしょう。どうしても一人でどうにかしようとされるのか。

どうも自分達が迷惑がっていると思っっている様ですが、まだ理解して戴けてないようです。彼女の為なら、自分はどんな事でもしたいと、望んでいることを。

その想いが、この花と一緒に届けばよいのですが。

ガサリ、と草を踏む音がしたと思えば、闇の中で人影が動いていた。

夜、女子寮を抜け出したセリアが訪れたのは、いつかの池の畔である。そこで一人、痛む足に耐えながら練習に励んでいた。練習なら自室で、と思ったのだが机やベッドなど障害物が多く、その中で足を気遣いながら、というのは少し厳しかったので、こっそり寮を離れこんな場所まで来たのである。

ザウルから練習禁止を命じられてしまった為、昼間候補生達に付き合って貰う事が出来なくなってしまった。しかし、一週間を切っているダンス大会に出られる程上達していない。ならば、少しでも特訓は必要ではないか。と思つての行動だ。

セリアにとつても、教養の成績は、何がなんでも落とす訳には行かないものなのである。それによつては家に呼び戻されるかもしれない、と母親にキツク言われているのだ。どうしてもこの学園に留まる為には、是が非でも今度のテストは受けなければならない。

それにしても、この池の畔とは何かと縁があるな。など余計な事に思考を飛ばしていたセリアの耳に、今では聞き慣れた声が響いた。

「セリア殿！」

「ぎわっ!!」

今日はもう会う事は無いだろうと思つていた人物の登場に、つい素っ頓狂な声を発してしまった。ギリリッ、と壊れた人形のように振り返った先では、鬼の形相のザウル。普段温厚な人程、怒らせると怖いとは聞くが、まさにそうかもしれない。

よりにもよつて、一番バレたく無い人物に見つかってしまった。

というより、何でここに居るのだ。

ジロリと睨んだ視線の先で、オロオロと怯える少女を前に、ザウルは酷く不愉快な心情を何とか抑えていた。

自室に戻って何気無く見た窓の外で見た動く人影。はつきりとは見えなかったが、確かに見えたその影がどうしても気になってこうして探していたのだ。そして案の定出くわしたこの状況。昼間あれほど言ったにも関わらず、何をしているのかと思えば。

考えれば考える程苛立ちは募るが、この少女に大人しくしている、と言う方が無理だということは冷静になってみれば分かる事。そう思い直せば、握っていた拳の力も弱まる。

「寮に戻って下さい」

言うだけ無駄なのは分かっているが、一応言ってみる。しかし、やはり目の前の少女は食い下がって来た。

「あの……その、もう少し」

「それでは治癒を遅らせてしまうだけです」

「……でも」

それでもセリアは渋ってその場を動こうとしない。

「やっぱり、ザウルにこれ以上迷惑かける訳には……」

こんな場所で、怪我を押して一人で居られる事の方がよっぽど迷惑だと、この少女は何故分かろうとしないのだろうか。しかし、それをこの少女に伝えた所で、相手がそれを理解する確率など微々たるものだ。それに加え、自分が彼女の心配をする様に、向こうもこちらに気を使っているのだから、今ここで追い返しても結果は同じになるだろう。

納得行かない思考がグルグルと脳内を巡るが、思いつく最善の解決方が一つなのが、どうも悔しい。

「仕方ありませんね。お付き合いします」

「えっ！？ いやいや、ザウルが其処までする必要は……」

「こればかりは譲れませんよ。良いですね」

「…………ごめんなさい」

「いいえ」

いつもの穏やかな表情でザウルが言えばセリアは申し訳無さそうに謝罪した。

どうせこのまま寮へ帰しても、またなんだかんだと絶対に安静になどしないだろう。ならば、自分の目の届く場所で彼女の気の済むまでやらせてやるのが一番だ。

「お手をどうぞ。セリア殿」

ニコリと微笑んだザウルが差し出した手をセリアが取った途端、グイッと強く引かれる。えっ、と思った時には遅く、ふわりと襲った浮遊感。気がつけば、足が地面から離れていた。腰の周りにはザウルがしっかりと腕を回しており、あり得ない程密着している。

「ええっ！ ザ、ザウル！？」

「暴れないで下さい。セリア殿は足を怪我されているのですから」  
だからといって、なんでこうなるのだ。

今セリアは、ザウルに片腕で抱き上げられていた。確かに、一見すればダンスをする体制に変わりはないが、それはお互いが地の上で足を動かす筈だ。しかし、これでは自分は足を動かせないどころか、完璧にザウルに任せっきりになってしまう。自分の練習なのに、これでは意味が無い。

「これなら、余り足に負担はかかりませんし」

「いや、でも、ちょっと」

確かに、足が宙に浮いているのだから、負担も何も無いのだが。異様に近いこの距離感に、落ち着かない。しかし、そんな事思っている間に、ザウルが動き出してしまった。

「わっ！」

「……………」

しっかりと抱えられている為、落ちる事は無い。それでも、振り落とされまいと身体に力が入ってしまう。

流れる様に動くザウルは、人を抱えているなど微動も感じさせな

い。普段から思っていることだが、細身の彼の何処にこんな力が隠れているのだ。

最初こそオロオロとしていたセリアだが、段々と慣れて来ると妙に安心出来てきた。ザウルが一步動く度に、まるでゆりかごに揺られている様な感覚を覚えるのだ。日頃、足を踏み外すまいと気を張っていたのが嘘の様に、今は穏やかにステップが踏めている。といっても、実際セリアは全く動いていないのだが。

この特訓で初めて、和やかに踊れた事にも、多少の嬉しさが込み上げて来たのは、やはりザウルのお陰だろう。

「セリア、治って良かったね」

「ご迷惑おかけしました」

「それに、ダンスもいつの間にか上手になってるし」

ルネが温室で拍手すれば、セリアも頬を緩める。

足に負荷を掛けない様に、と言われた三日間。結局毎晩ザウルにあの体制で特訓してもらう事になったのだ。そこで、（ある意味）身も心も任せる事になる訳で、問題だった二人の呼吸も見事に合ってきたのである。勿論、他の候補生達はそんなこと知らないが。

今では、少なくとも落第はしないだろう点数は取れる程になった。

喜ばしい事態の中、イアンは複雑そうな顔をしていた。というのも、自分の知らない所で、セリアとザウルの間にかかがあったのだろう事が予想出来て、それが少し気に入らない。あれほど息の合わなかった二人が、三日の間にこれほど上達したのだ。しかも、セリアの方にも多少なりともザウルに頼っている節がある。まあ、そうしなければダンスなど成り立たないだろうが。しかし、それが面

白く無い。何がセリアをそうさせたのか、自分には予想も付かないというのが、更に腹立たしい。

しかし、自分が何を思っても、実際の所空回りしているのも事実。ザウルに聖花祭の相手を取られた時点で、こうなる事は想定内だった筈である。それでも、やはり見せつけられると、やり切れないものがあるのもまた事実。

はあっ、と吐いたため息が、温室の空気に溶け込んで行った。

「これでいいかな」

聖花祭当日、自分の見下ろした先には、友人達の為に作り上げた花束が並んでいた。冬にも関わらず色彩豊かなその花は、我ながら良く出来ていると思う。ダンス大会の後に渡す事になっているそれらを手に取って、ルネはかなりご満悦であった。花が足りなくなるか、とも思ったが、そこは気合いを入れて配分や色合い等を試行錯誤した結果、それなりのものが出来たのだ。自分でも満足の行く作品である。

「さてと。僕もそろそろ行かなきゃね」

花束を崩さぬ様、そっとテーブルに横たえ、ルネも足早に温室を出て行った。

学園も誇る大ホール。その中は気合いを入れた校長の希望通り、豪華に飾り付けられていた。見るも鮮やかな花があちらこちらに取



り付けられたホールは、正に聖花祭に相応しいといえるだろう。祭りに背中を押され、一步勇気を出し、目出度く恋を成就させた生徒達も、この場を見事に彩る役割を果たしている。

恋心躍らす生徒達で溢れる中、やはり注目を集めるのはいつもの面々。きらびやかな正装に、悠然たる立ち姿。見るもの全てにため息させる程の美貌は、その場だけを別世界に変えてしまっている。

そんな候補生達に混じって、見事な程地味さを貫いた少女が居るのだから、生徒達がどこか違和感を覚えるのも無理はない。

「諸君。まずは今夜集まってくれた事に感謝する」

演壇に上がった校長が、普段は何処に隠しているのだ、と聞きたくなる程の威厳をたっぷりに演説を始めた。

しかし、校長も内心挨拶など早く終わらせたいのが事実。立場上、他人には言えないが。なので、校長の話はよっほどの事がないかぎり、割合短めに纏められている。

「というわけで、今年も聖花祭を祝して。乾杯」

乾杯の合図と共に、優雅な舞曲がホールに鳴り響き始めた。この後すぐにテストの曲が流されるので、セリアはグッと気合いを入れる。ちなみに、ザウル以外の候補生達は、さっさと女生徒方に連行され、遠くの方で一足先に彼女達のお相手をしている。

「セリア殿。足のお怪我は？」

「あっ、もう全然大丈夫。ありがとう」

何かと気を使う候補生達のお陰で、必要以上に足に負荷が掛からなかった為、そして元々セリア自身頑丈なので、足首の怪我はもう完治しているといってもいい。

「そろそろですね。では、お手をどうぞ。姫君」

いや。姫君と言われても、変に気恥ずかしいだけなのだが。と、内心セリアが思ったのは内緒である。

しかし、ザウルが言うとは妙に様になっているのは、やはり彼が本物もびっくりするほど「王子様」のイメージにあっているからだろ。うか。穏やかで不思議な雰囲気と、褐色の肌に透き通る琥珀の瞳。

ザウルを異国の王子と紹介されても、なんら疑う事はしないだろう。胸に手を添え軽く頭を下げる際に揺れる赤髪が、また印象的である。しかし、この後のテストが憂鬱である事には変わりはない。それでも、ここまで練習に付き合ってくれたのだ。最低限の結果は出さなくては。フウ、と息を吐くと、セリアはゆっくりとその手を取った。

今まで練習は、ザウルとセリアの二人きりで踊っていたので意識していなかったが、こうして他人が踊っている中で見ると、セリアの動きは明らかに不自然であった。フラフラとするし、妙に緊張している。秘密(?)の特訓で多少は改善されたといっても、やはり何処か身体が硬くなってしまう。それでも、今までの時間を無駄にするものか、と自分を奮い立たせ、なんとか三曲踊り抜いた。といっても、一曲に重点を置き、他の二曲は諦め半分だったのだが。

奇跡的に大きなミスも無かったし、何とか形にはなっていたので、取り敢えず落第は免れただろう。しかし、やはりザウルには申し訳ない事をした感が否めない。本来なら彼は優勝しても可笑しく無い程の成績を叩き出せる実力を備えているのだ。自分に付き合った為に成績が下がる様な事になってしまったのは、やはり後ろめたい。そう思ってザウルを見上げたのだが、何故か満足そうな顔をしていたので口は噤んでおく。

テストが終わったと同時に緊張が解け、途端に今までの疲れが一気に押し寄せてくる。それをザウルも感じ取ったのか、ホールの隅へ移動してくれた。

「ありがとうございました。セリア殿」

「えっ! ううん。こちらこそ。ありがとう、ザウル」

ペコリと頭を下げれば、いつもの穏やかな表情。申し訳ない気持ちに残るものの、ザウルの雰囲気にも少し緩和した様な気がす

る。いやいや、駄目だ。迷惑を掛けてしまったのは疑いようの無い事実なのだから。しかしここがザウルの不思議な空気のような、なんだかこちらの心情も穏やかになってしまう。

そんな、ちょっと良い雰囲気だった二人の間に、可愛らしい声が響いた。

「セリア。ここにいたの」

「ルネっ！」

「例の物は温室に置いてあるよ」

「あっ、そっか！ありがとう」

何かを思い出したらしいセリアは途端に慌ててその場を離れようとする。

「ごめんザウル。また後で」

「セリア殿……？」

ザウルの呼びかけも空しく、セリアは一目散にホールを後にした。テストも終わった今、その行動を咎める者も、止める者もない。なんだか取り残される感じで置いて行かれたザウルは、しばし呆氣に取られていたが顔には出さない。

「ごめんね。邪魔した？」

「いえ。そのようなことは……」

非常に複雑な顔をしたザウルに、ルネは失敗したか、と謝罪したがまあそれは置いておく。そして、持っていた花束の内一つを差し出した。テストの終了と同時にさっさとホールを抜け出し、これを取りにわざわざ温室まで行って来たのだ。

「それより、はい。これ、頼まれてた花束」

「すみません。お忙しい時に無理を頼んでしまって」

「ううん。僕も楽しかったから」

「そうですか……それよりルネ。一つお聞きして良いですか」

「うん？何？」

聞き辛そうにしているザウルにルネが問いかける。聞き返して見たものの、ザウルは一向に話を進めようとしない。どうかしたのか、

とルネも不審に思う。彼がこれほど聞き辛そうにするのは珍しい。

「……セリア殿は、何故温室に？」

「ん？…ああ、そっか。うん、そうだよ。大丈夫だよ、ザウルも喜ぶと思うから」

ぼつりと出されたザウルの問いに、ルネは一人だけ納得したような言葉を返した。それを見てザウルは更に困惑したのだが、ルネは答えを教えようとしめない。終いには「内緒」と言われてしまった。ザウルとしては非常に気になる所なのだが、無理に聞くような真似は出来ない。

戸惑うザウルを他所に、ルネは内心でほくそ笑んでいた。

友人達の中で最初に温室を訪れた意外な人物。それは実はセリアだったりするのだ。

自分もセリアが花を頼んで来た時は驚いたが。しかし、その理由を教えられた時に更に驚いた。まあ、セリアならやりかねないだろう、と最終的には納得出来たが。

しかし、セリアが温室へ行っている間に自分も友人達へ花を届けねば。そう思ってホール内を徘徊する。予想通り、候補生達はそれぞれ女生徒に囲まれており、辿り着くまで大変である筈なのだが、ルネも同じ候補生。軽く声を掛けるだけで、教祖に道を譲る信者の如く左右に逸れる生徒達の間を、それは楽に通って行った。彼の手から候補生に渡される花束に、期待で心を踊らせた女生徒は多いだろう。残念ながら、その誰の希望通りにもならないのだが。

残るは一人となった時に、漸くその姿を見つけて近づいて行った。

「カール」

「どうした」

相変わらず冷やかな目を隠そうともしない視線で射抜かれる。一見普段と変わらない様に見えるが、今はどうも虫の居所は良く無いらしい。

「これ」

「……なんだそれは」

「なんだって、見れば分かるでしょ」

目の前に花束を差し出せば、途端に顰められる眉。まあ予想通りの反応ではあるが。しかし、自分の力作に対してなんだとは、少し面白く無い。

「それを私にどうしろと」

「今年がこれが入り用になると思って」

「…必要無い」

「まあ、そう言わないで」

無理に押し付けようとするのが気に入らないのか、元々受け取る積もりがないのか、増々険しくなっていく空気。周りの生徒は恐れをなして一定の距離を空けてしまった。

「絶対に後々必要になるから。ねっ」

「……………」

押し黙ったカールに花束を強引に持たせてその場を離れた。「必要になる」と釘を刺しておいたので捨てる事はしないだろう。何より、彼は根は優しい人間だ。押し付けられたからといって、無闇に破棄しようとはしない筈。

大体は自分の思惑通りに事が進んでいるので、内心満足だ。

どうなるかと思っていた聖花祭、今年はなかなか面白い事になりそうである。

「あら、ルネ君」

「っ、！…クルーセル先生」

薄緑色の髪を丁寧に梳かし、いつになくきちんとしたクルーセルがルネを呼び止めた。普段からそうして真面目な感じを保っているが、相方の心労も大分減るのだろうが、それは天がひっくり返って

も期待出来る事では無さそうである。

「今年も綺麗なお花を沢山ありがとうございますね」

「いえ。先生もありがとうございます。お陰で僕もセリアの花束を作る事が出来ました」

「あら、それは良かったわ」

日課である朝の日向ぼっこで時折一緒になるセリア。といっても、クルーセルがセリアを見つける度に呼び寄せて、そのまま校舎まで二人で歩くだけなのだが。そこで冬でも手に入る花束はないかと相談され、ルネの事を教えたのだ。それを聞いたセリアは真っ先に温室へ頼み込んで来た。

「ところで、お花はさっき皆には渡し終わってたわよね」

よく見ているな、と思いながらもクルーセルの言葉に笑顔で答える。

「はい。ラン達には渡しました」

「じゃあそれは？」

クルーセルが指差す先には、ルネが作ったのだろう美しい色合いの花束ともう一つ、リボンで纏められただけの何処か不格好な花束。リボンで纏められている方は、ルネの手作りではないだろう。色の分け方や配分が、何処から見ても素人の仕事だ。

その不格好な花束を持ち上げてルネは嬉しそうに語った。

「これは、セリアに貰ったんです」

「あら、良かったわね。それじゃあ、それはセリアちゃんに渡す分？」

「はい。後で会った時にでも。ラン達に渡しにホールに戻ってくると思うので」

自分に渡す分は、セリア自身が用意したらしい。僅かに手に入る花を、何とか纏めて束にしたのだろう。しかし、五人分には足りなかったらしく、クルーセルに相談したという訳だ。セリアが自分で用意した分、これは特別な花束になるのではないだろうか。友人達には悪いので、それは秘密にしておくが。

ニコニコと微笑むルネに、クルーセルも笑みで返す。

「皆喜んでくれると良いわね」

「はい。そうですね」

なんだか言葉だけでは理解できない会話が成されているが、その真意を計る事が可能は当の本人、セリアはこの場には居ない。

人混みから抜け出たくて、無意識の内に足が向いてしまった池の畔で、ザウルは一人佇んでいた。銀色の月明かりに照らされ、静かに池を見下ろすその姿は、もうそれだけで十分神秘的に映っている。

そのまま誰もいない空間で、ザウルは一人、ここで過ごした時間を思い出していた。

今更ながら、自分は随分と大胆な事をしていたのだな、と実感する。いくらあの時はあれしか思い浮かばなかったとはいえ、もう少し他に方法があっただろうに。柔らかい少女の感触が消えない手を見詰めるながら、ザウルは用意して貰った花束を握りしめていた。

先ほど手にしたばかりだが、既に手放したく思えてしまう。勇気を出して頼んだは良いが、なんと行って本人に渡すべきか。

「ザウル!!!」

「っ!?!」

物思いに耽っていた背中に唐突に声が掛けられ、不覚にもビクリと反応してしまった。突然の声に驚いたのではなく、その声の主が今まさに自分の思考を支配していた人物だったからだ。

「やっと見つけた。探したよ」

「自分を、ですか？」

セリアがこの場に現れたという事にも驚いたが、何よりも自分を探していたらしい事に目を見開く。一体どんな用事だろうか。

そんな考えを巡らせているザウルの目の前に、これまた突然花束が差し出された。えっ!？と思い目線を上げれば、照れくさそうにしている少女の姿。

「女神フィシタルより、永遠の栄光を貴方に」  
「っ!!」

目を点にして、理解力が追いつかない思考を必死に廻す。何処かで聞いた事がある台詞だが、それを何処で聞いたのか、その情報源が脳の内から出てこない。それでもなんとか思い出そうと、記憶をたぐり寄せる。

自分の想い人の思わぬ行動に、混乱で空回りする思考が、やっと機能を取り戻したと同時に、思い当たる節があることに気付いた。

それは、この花束が持つもう一つの意味。すっかり寂れてしまっているが、まだクルダスの人々に根深く残っている風習の一つである。

本来この祭りは、クルダスの永遠の栄光と繁栄を願う為の祭典だ。女神に花束を贈った事で、国は輝く栄誉を手にした。そこから花を贈る行為は、相手の幸せを願う事を表した。今はすっかり異性に愛を伝える為の花束になってしまったが、歴史を少し勉強した者なら誰でも知っている事だ。といっても、若い世代同士ではすっかり忘れられてしまっているのだが。

「それでは、自分からも贈らせて下さい」

この花束をお互いがそれぞれに贈る事は、そのまま国の繁栄を表すともされている。初代国王が花を捧げた際、女神は国に栄光を齎<sup>もたら</sup>し、大地に花を咲かせ王へ贈ったとされているからだ。

「他の誰でもない。ここにいる貴方の幸せを、永遠に願うと、誓います」

誰が最初に言ったのか。相手の幸せを願うのは、少なからずそこ



に愛が存在しているからだ。だからこそ今の花束の形がある。しかし、それもあながち間違ひでは無いと思えた。自分は今、確かにこの少女の幸せを願っている。そして、同時に好いている。これまでに無い程。

ふわりと自分の持っていた花束を差し出せば、同じ様にふわりとする少女の笑顔。何度も見た子供の様に笑うその表情を、他の誰でもない自分だけが引き出したのだと思うと、それがとても心地よく感じられて、口が緩んでしまう。

しかし、そこで気付く。セリアが嬉しそうに手にしている他の四つの花束に。

「セリア殿……カール達にも花を贈ったので？」

「えっ？ うん。皆にも色々迷惑をかけてるし、お世話になってるから。その感謝の積もりで」

「そ、そうですか……」

理解すると同時に、しまった、という気持ちになる。これでは、「栄光の花束」は渡せても、自分の本来の目的が全く果たせていない。気持ちを伝える積もりが、微動も伝わっていないではないか。

しかし、贈った花束を返せとも言えず。かといって、花束を渡した後で、完璧に好機を逃してしまった状態で、伝えられるかと聞かれれば、そこまで図太い神経はしていない。

やられた。完全に機会を無駄にしてしまった。この分では、他の友人達も同じ様な結果に終わったのだろう。

しかし、手に感じる花に嬉しい気持ちを隠せないのも事実。どんな形であれ、幸せを願っている事は伝わった筈だ。それで今は良いのではないか、と思えて来た。

今はどうでも、きつといつかは伝えられるだろうと、そう信じて。

ちなみに、余談だがその年のダンス大会は、ランが二度目の優勝を果たしたらしい。

## 精華 4（後書き）

毎年、思い出すのはあの日の事。自分の一部を失った様な感覚は、今でも忘れる事が出来ない。大切に思えば思う程、なくしてしまつた時に取り返しがつかない。分かっていた筈なのに、抗えなかった。彼女に出会って心に平穏が戻った気がした。しかし、やはり考えてしまう。それもいつかは消えてしまうのではないかと。

今度こそ、絶対に失いたくない

## 過去の 1

生徒達が緊張を解く合図である授業終了の鐘。その音が鳴り終わる頃、厩舎からは馬の嘶きに混じって数人の生徒の声が聞こえていた。

「アルセウス。久しぶり」

立派な体躯の黒馬の鼻を撫でるセリアをカールが冷やかな眼で見つめていた。というのも、気位の高いこの馬が自分以外の人間を簡単に受け入れる場を始めて見たからだ。そんな主の視線を物ともせず、黒馬は栗毛の地味な少女に鼻先を擦り付けていた。

フローズ学園でマリオス候補生の地位を得ると、その記念に学園から在学中は自分専用となる馬が贈られる。この場にいる候補生達も例外では無く、それぞれ自分に与えられた馬の傍に立っている。そんな中、候補生でもなければ自分の馬もないセリアも、何故かこの場を訪れていた。気候はすっかり寒くなり、本来なら温室でのんびりと温まっていた筈なのだが、そんなことより偶には遠乗りにも行かないか、と誘われたのだ。

普段は外に出たがらないカールも、ルネに言いくるめられたのか、渋々とながらついてきていた。説得に赴いたルネがカールと共に戻ってくるのに、どのような手段を用いたのかは、本人達のみが知る。学園の敷地から繋がっている草原は、抜けるとかなりの距離があり、馬を乗り回すにはもってこいなのだ。市外へ抜けられる森や、林へも続いていて、どこからどこまでが学園の敷地かは正確には分からないらしい。

「…………遅れてすまない」

暗い声色に振り返るとランが一足遅れて入ってきたので、セリアはどうかしたのかと顔を向けた。すると、いつもの端整な顔にはや

はりどこか影が差している。理由を聞いてみようと思ったが、ささと動け、という後ろから魔人様が飛ばす睨みに竦み上がってしまい、叶わなかった。

「……大丈夫か？」

「ああ。心配をかけてすまない」

あたふたと黒馬から離れるセリアを尻目に、イアンがこそつとラ  
ンに問いかけた。その声にピクリと反応を見せたランだが、言葉少  
なに返してそのまま自分の馬の用意を始める。その姿をイアンが心  
配を拭い切れないといった眼で追っていたが、それも気づかぬふり  
をした。

「セリア……そんなんじゃ肩こるぞ」

イアンが必死に噴出しそうになるのを堪えながら見つめた先では、  
セリアが前屈みの姿勢のまま青ざめていた。その後ろからは、カー  
ルの冷やかな視線が止め処なく降ってきているのだが、それを気に  
している場合ではない。

普段は一人乗りが基本のセリアでも、自由に乗り回せる馬がいな  
い上、馬術の授業も受けていない。その結果、騎乗の許可は下りな  
かった。その為、必然的に誰かと同乗することになる。この際、誰  
の馬に乗るかで一悶着あったのだが、結局は一番体躯の優れている  
馬に、ということになったのだ。それが意味するところはカールと  
の相乗りである。別にそれは問題無い。問題なのは、今の今まで二  
人乗りの経験がセリアは皆無に等しいことである。

貴族の令嬢のくせになにを、と思われるかもしれないが、下手な  
貴族よりもよっぽど馬の扱いに慣れているセリアが、わざわざ相乗

りを必要としたことがなかったのだ。

慣れない乗り方は、安定感が低い上に自分は手綱を握っていない為不安が募る。少しでも安定感を得ようと馬のたてがみにしがみ付いている訳だ。

「手綱が引きにくい」

「う、うひゃあ！」

静かに掛けられた言葉と共に、ぐいっと肩を引かれ、セリアは悲鳴を上げた。落とす気かー！と慌てるが、いくらカールでもそんなことをする筈がなく、気づけばすっぽりと腕の中に収まっていた。

一拍遅れてセリアも状況を理解する。先ほどの前傾姿勢よりも安定はするものの、背中に感じる密着間に落ち着かなくなり、もう一度前に屈もうとするが、がちりと押さえられてしまっていて、それは叶わない。普通の娘ならば「騎士に護られる姫君」の状態に、頬を染めて胸を高鳴らせるのだろうが、生憎セリアはそんな可愛らしい思考持ち合わせてはいない。

「暴れるな」

少しでも距離を空けようとあたふたするセリアに、低い声で言うてやれば途端に大人しくなった。

それを見て少し面白くないイアンだったが、それ以上に感心していた。それなりに長い付き合いになるカールだが、こんな風に他人を気遣う姿を見せたのは久しぶりだ。普段ならば、あのまま落としても構わないくらいの勢いで、しっかり支えてやるなんてしないだろうに。というより、相乗りを許した時点で奇跡ではないだろうか。しかし、なんだかんだ言っても、それもセリアだからこそだろう、という事は十分に理解出来た。そこでまた複雑な心境になるのだが、隣で顔を青白くさせている少女は、そんなこと微動も分かつちやいない。

「わああ!」

「好い所だろ」

学園の裏から暫く馬を歩かせれば、少し小高い丘に着く。そこは、それなりに見晴らしも良く、今は天気も良い。初めて訪れた場所に、セリアは感嘆の声を漏らした。

本来ならば最高の気分の筈なのだが、浮かない表情の者が一人。周りの少し後ろから付いてくるランに、他の者は皆、似た様な視線を向ける。周りの気遣う視線を撥ね除けて、ランは自分の馬を来た道へ戻した。

「ラン……?」

「……………申し訳ないが、失礼する」

どうしても耐えられない、といった風のランは、そのままセリアの静止の声も聞かず、馬を飛ばして走り去ってしまった。

「えっ、ラン!？」

「捨て置け」

「でも……」

まだしっかり抱えられながらも、ランの後を追おうと慌てるセリアにカールが冷たく言った。先ほどからどこか様子が可笑しかったが、一体どうしたのだ。考えてみても、セリアには思い当たる節が無い。しかし、他の候補生達には心当たりがあるらしく、難しい顔はするものの、誰一人ランを追いかけようとはしなかった。

「やっぱりダメだったか」

「少しでも気晴らしになれば、と思ったのですが……」

セリアが振り返ってみれば、もうランの姿は見えなくなっていた。

あれから結局ランに会う事はなく、一日を過ごしてしまった。イアン達の話によると、男子寮でも自分の部屋から出ようとしなかった。流石に授業には出ているのだろうが、クラスが遠く離れている為確認にも行けなかった。

ここ数日続く無気力なランの様子に、どうしたのかと心配する気持ちは残るセリアだが、まあそんな日もあるのだろう、と呑気にも結論づけていた。考えた所で自分には分からないし、もし個人的な事ならそんなに込み入ったことまで聞くのは憚られる、と思ってる事なのだが……。

「セリア!!」

授業も終わり、さて温室にでも行こうか、と考えていたセリアの耳に突然自分を呼ぶ声が響いた。

「ル、ルネ!？」

「ごめん。すぐに来て!」

教室に飛び込んできた友人の名を呼べば、焦った様子のルネにそのまま引きずられる様に教室から連れ出されてしまった。走るルネの後ろを必死に付いていけば、たどり着いたのはマリオス候補生の教室。

はて、一体何故自分はこの場に呼ばれたのだろう。と疑問符を浮かべるセリアの背を、ルネが押して教室の扉を開けた。

「それは傲慢というものだろう!!」

「お前こそ、そろそろ現実を見つめ直したらどうだ」

いきなり聞こえた怒声に怯み、セリアはビクリと肩を振るわせた。中から聞こえたのは友人二人の声。会話の言葉だけならばもう聞き慣れている。セリアが驚いたのは、その声量、気迫、空気、そういったものだ。

普通の温室での議論よりも数倍は声が大きく、圧倒的に雰囲気が違う。こうもピリピリと刺す様な空気は初めてだ。いくら付き合いが長くはない間柄とはいえ、セリアにも、これが日常茶飯事でないことくらいは容易に想像がつく。

「セリア。悪いが頼む。俺たちじゃどうしようもないんだ」

入り口で立ち尽くすセリアに気付くと、イアンが非常にバツの悪そうな顔を向けて来た。その様子にさえ、議論に夢中の二人は気付いていない。

後は任せた、と渡された資料にさっと目を通すと、そこに記載されていたのは「テロ対策」についての資料。一つはランのものと、もう一つはカールのもの。それぞれに目を通すが、セリアは途端に眉を潜める。

「これって……」

一通り資料に目を通すと、セリアはさっそく二人の間に割って入った。教室の隅で顔を真っ青にしている教師らしき人物も、いったい何の用だ、と敵意の視線を向けてくる他生徒の視線も気になる。しかし、それよりも今はこの二人を落ち着かせる事の方が先だ。

「いくらなんでも、この政策は無理よ」

「…セリア」

余程目の前の人物に集中していたのか、二人とも今セリアの存在に気付いたようだ。

「規制が厳しくなるのは仕方がないけど、検問の数が多すぎるわ。

配備するだけでも手間がかかるのに、一つ一つ管理するのは…」

「しかし、たった一つのテロ組織を入国させただけで引き起こされる被害は計り知れない。その為にも、出来るだけ多くの審査は必要だ」

「でも、この数は一般の人からも反対されるわ。それこそ、商業や交通の妨げになる可能性だってある」

ランの考えは恐らく間違っている。今の所、審査や検問以外に他国の組織を入国させない手段は即席では思い浮かばないのだから



ら。だからといって、一般のクルダス国民でさえ反発する程の規制を強いるのは、はっきりいって無理である。理解を求めようにも、明らかに上限を超えている。

「だからって、カールの政策は嚴重すぎるわ」

「……」

「街の警備や視察は分かるけど、これじゃ市民に恐怖心を植え付ける様なものじゃない」

「テロでの被害と、多少の規制。どちらかを選べと言われれば答えは決まっているはずだ」

カールの資料からは、街を闊歩する厳格な警官の姿がありありと想像出来てしまう。それも一つの手ではある。しかし、ランと同様、やりすぎだ。

「それより、検問の数を少なく纏めて、その分その箇所ですれなりに厳しく審査する方が効果的よ」

「しかしそれでは、その場で見落とした時の対処が出来ない」

その後も、セリアの指摘に言い返したり返されたり議論を交わした。しかし、その間でセリアが思ったこと。それは、二人がどうも普段の様子と違うという事である。特にランは、何かを思い詰めた様な表情で、一向に自分の意見や思想を変えようとしなない。政策においての不備や疑問点は認めても、何処か別の処で譲れないものがあるかのようだ。

しかし、議論は確実に進んでいる。全くの平行線だった二つの意見が、多少なりとも変わって来ている。その事に、イアンを始め他の候補生達はホッとしていた。二人だけの時は全く手が付けられない状態だったが、セリアを放り込んだことで今は少し落ち着きが戻っている。情けない話だが、自分達ではやはりどうにも出来なかったのだ。

確固とした意思のあるランと、それを捻り潰そうとするカールを緩

和させられるのは、今この学園内においてセリア以外には居ない。お互いの意見を聞く気が無いくせに、相手の意見は否定するのだから、手の付けようがないのだ。

「……失礼する」

分が悪くなったのか、これ以上話しても自分の思想を曲げる気がないのか。その判断はつかないが、ランはそのまま教室を足早に出て行ってしまった。

「ラン!？」

「今は無理だ」

「そんなこと……」

咄嗟に追いかけようとするセリアをイアンが止めた。突然のランの行動にセリアは戸惑っている様だが、今はそっとしておく以外出来ないのだ。

「毎年のことだ。仕方ねえんだ」

「……?」

それはどういう意味だろうか。この様な事が毎年起こっているのか?確かに、ランは最近様子が可笑しかった。普段ならばもう少し現実味のある意見を述べる筈が、今回はかなり理想論が勝っていた。それに、ここ最近の彼の行動もいつものランからは考えられない様なものばかり。

一体、何が原因だというのだろうか。気にはなるが、はたしてそれは自分が聞いても良いものなのだろうか。

「ここじゃちよつと話し難いからな。場所を変えよう」

イアンがチャリと視線を送った先では、ランスロットとカールハインツの議論の間に割って入った乱入者に驚愕と戸惑いの視線を投げかける者で溢れていた。どうやら議論の最中にも観衆は増えたらしく、教室の外からも痛い視線を感じる。そして、そのどれもが好意的なものなどではなく、むしろ敵意めいていた。その理由が、自分の性別にあるだろうことは、セリアも理解している。生徒の憧れである候補生に、国政に口出し無用の筈である女生徒がズバズバと

意見したのだ。気分を良くする生徒ばかりではないだろう。

イアンに頷くと、セリアは候補生達と連れ立って出来るだけ静かに教室から離れて行った。

「で、やっぱ気になるか？」

結局はいつもの温室へ集まった候補生達。この場に居ないのはランのみとなった。カールも冷ややかな視線をそのままに、ベンチの一つでなにやら思想に耽っている。つい先程まであれだけ議論に熱を上げていたというのに。

「まあ少しは。でも、勝手に聞くのはちよつと……」

この場に本人が居ないにも関わらず、個人的なことまで聞くのはやはり後ろめたい。誰でも、知られたく無い事の一つや二つはあるだろう。自分だってそうなのだから。なので、幾ら彼等が友人であっても、素直に喜んで問うような事は出来ない。

「まあ、あんま気分の良い話じゃねえけど、聞いといってくれねえか？」

「……………」

「お前なら、アイツも文句は言わねえだろう」

「……………」

やはり渋ってしまうセリアに、イアンが苦笑する。

「いや、お前には知っててほしい」

「……………」

「ランの姉の話なんだけどな」

セリアだからこそ話せることであるし、彼女には聞いておいて欲しい。ランが心を許した者なのだから。

「ランの……あいつの姉は」

テロで死んだんだ

イアンのその言葉に、セリアは息を飲んだ。

当時、まだランは八歳と、十にも満たない子供。姉も十一になったばかりと幼かったが、二人共子供ながらにしっかりしていると、屋敷の者にも評判だった。年も近かったせいかな、二人共とにかく仲が良く、女性には紳士的に優しく、というランの姿勢も姉から教わったらしい。

「姉上。父上がオルブライン家は僕が守るんだって言っていました」

「フツッ。じゃあ私がランを守ってあげないとね。貴方はすぐに泣いてしまうんだから」

幼いながらに繊細で美しい容姿を持った姉弟は、周りからの期待も大きかったという。特に、弟のランスロットは跡継ぎの名に恥じぬ様にと厳しい教育も受けた。時折その重圧に息苦しさを感じたランの、心の拠り所とも言える存在が姉であった。本当に仲の良い姉弟だったのだ。

そうして幸せな姉弟は、その日を迎える。

「姉上！今街に旅芸人が来ているらしいんです。凄く珍しい、異国の踊り子とか、動物とか。一緒に行きませんか？」

「まあラン。そんなこといって、家庭教師の先生の授業はどうするの？」

「終わらせてきたから大丈夫です」

「そう。でも街へ行くのは少し遠いんじゃない？」

「でも行ってみたいんです。異国の文化は本でしか見た事ないから。お願いします、姉上」

大好きな弟の我が儘を、姉はよく聞いていた。普段はあまり我を張る事をしない弟だったが、姉に対してはこの様に甘えを見せることがあったのだ。

大人びた二人は、子供だけで家を離れる、という普通なら躊躇しそうな事も平然とやってのけた。屋敷の者も、まあこの二人なら大丈夫だろう、と数人の使用人と馬車を用意したのだ。それが悲劇を生む事になるとは知らずに。

「いい？少し見に行くだけよ」

「はい。分かっています」

目を輝かせる弟を見て、姉も顔がほころんでしまう。

街まで来た二人が見たのは、人集りの中心で踊る異国の舞姫。見た事も無い楽器から奏でられる曲に合わせるその姿に、弟は特に感激の声を洩らした。

「綺麗ね」

「はい！」

聞こえるのは聞いた事も無い曲と、多くの拍手。きらびやかな衣装は何処か神秘的で、周りには観客として十分な数の人間達が集まっていた。

その様子に見入っていた二人に次に届いた音は、旅芸人の突然の悲鳴。そして響いたのは――爆音。

「うわっ……！！」

ランの小さな身体は爆風に吹き飛ばされた。その瞬間、何かに身体を優しく包まれる。そしてそのまま遠くの地面に叩きつけられた。一瞬何が起きたのか分からず、転がった身体を起こそうとすると、途端に感じた重み。はっとして目を開けると、自分を庇う様に力なく抱きしめる姉の姿があった。

「姉上!!」

ガバツと起き上がると、そのままずり落ちる姉。額からは幾筋もの赤い液体が流れ、美しかった筈のドレスの背中の部分は赤黒く変色している。

「あ、あああああああああ!!」

何よりも小さな弟を大事に思っていた姉は、悲鳴が上がった瞬間、その小さな、十一歳の少女の身体で弟を庇ったのだ。

「直接の爆心地からは離れてたし、爆発自体大きくはなかったらしいから、ランは助かったが……」

「……………」

聞かなくても分かる。小さな少女が爆発に巻き込まれたのだ。無事である筈がなかった。

「調べたら、その旅芸人の中の一人が爆弾を抱えて人混みの中に走っていったらしい。丁度ラン達が居たのとは反対の方だったから助かったんだろうな」

「……じゃあ、テロっていうのは」

「それも調べた結果だ。そいつらの出身国とは元々国交関係が思わしくなかったがな。国の影響もあっただろうが、個人的にクルダスが気に入らなかったんだろう」

「……………」

何と言っているかわからなかった。何かを言うべきかも分からなかった。

「もしかして、ランの様子が最近可笑しかったのは……」

「姉上の命日が、丁度三日前だった」

「……………」

毎年この時期になると、その時の事を思い出していたのだろう。

姉を失った悲しみを。

「アイツは……今でも姉は自分の所為で亡くなったと思ってる」

「そんなんっ！」

「そんなことないって言っても、アイツは認めようとしらないんだ」

「……でもそれは」

当時八歳だった少年が、最愛の姉を亡くしたのだ。テロがどういうものかも、何故姉が死んだのかも理解できなかったのだろう。悲しみを怒りにすり替えたくとも、恨む相手も、憎むべき敵も分からない。唯一出来たのは、自分を責める事だけ。

「自分が姉を誘わなければ、自分が姉を守ってればってな」

「……………」

「アイツは、まだ傷を抱えてるんだ。何年も経って、隠すのが上手くなったがな」

彼の傷は完全に消える事はないだろう。幼い時の悪夢は、脆く未発達な心に根深く植え付けられた。

「彼奴<sup>あやつ</sup>の他者への甘さも、その過去故なのだろうがな」

「カール……」

「それをとにかく言う積もりはないが、この時期に彼奴<sup>あやつ</sup>が覇氣を無くすのは面白く無い」

「……だからさっきもあんな無茶な政策を？」

言った瞬間、冷ややかなカールの眉がピクリと動いた。

「ほお。私の施策を批判するとはな」

「えっ！？ いや、そんな積もりじゃ」

焦った末に現実味の無い案を出したランが対抗出来るように、わざとあんな政策を出したのかと思ったのだが。しかし、その考えもあながち間違いではないのかもしれない。

「フン。私に楯突く者が弱っては、退屈ではあるがな」  
まったく、素直でない。

「でも、そんな話、私なんかにしても良かったの？」

やはり勝手に聞いてしまったのは、悪かったのではないだろうか。確かにランの個人的な部分に深く踏み入った話だ。彼等は心の置ける仲間であるし、付き合いも長いのだろうから良いとして、自分はそのではない。確かに友人ではあっても、彼の知らぬ間にあれこれと立ち入って良い間柄だろうか。

「ごめん。やっぱり……」

何故イアンが知っていて欲しいと言ったのかも分からないが、聞いてしまったものは仕方無い。聞かなかった事にも出来ないし、聞かなかったふりも出来ない。しかし、ランに隠しておくのも憚られる。どんな形であれ、彼の領域に踏み込んでしまったのだ。

足早に温室を出て行くセリアの背中を、イアン達が優しく見送った。

「……………役者だね。それより策士って言った方が良い？」

「褒め言葉として受け取っとく」

チラリと流されたルネの視線を、軽く躲す。

「どんな形にしろ、あいつにはランの事知っというて欲しかったんだ」  
姉を失ってから、ランが初めて心を許した少女。ランが好意を寄せたセリアには、彼の事を知って欲しかった。友人であり、大切な仲間であるからこそ、彼が心に抱えた傷をどうにかしてやりたかった。

きっと、彼の傷が癒える事はない。何が起きても何時になっても、姉の事を思い出す度に悲しみが心に住み着く。でも、せめてこれらの出会いにまで姉の事を引き摺ってほしくはなかったのだ。過去として、乗り越えてほしかった。

それをさせてやれるのは、恐らくセリアだけであろう。

無意識の内に、女というもののとの壁を作ってしまったている彼だが、セリアには違う反応を見せた。それをきっかけに、少しでも壁を壊



す事をしてくれれば良い。

何より、乗り越えてもらわねば、自分が思い切りセリアを取りにかかれない。もし、セリアがランの唯一になってしまったら。彼の事情を知っているだけに、お互い気分が悪いだろう。遠慮する積もりはなくとも、自分が胸を張ってランからその存在を奪えないのだ。

「俺は、ランもセリアも大事なだけだ」

「それは、ここにいる全員が同じ気持ちですよ」

## 過去の 1 (後書き)

アイツがあんなに誰かを必要としたことなんて、無かったのにな。  
まさに、骨抜きって奴か。まあ、俺も人の事言えねえけどな。  
大事に思っちゃまうのを怖がる理由なんて、本当はあるわけないんだ  
よ。その事に、早く気付いて欲しい。  
ただ、それだけだ。

## 過去の 2

ランを探してあちこちを彷徨ったセリアが漸くその姿を見つけたのは、林に面した池の畔。人気もなく、落ち着けるこの場所は、彼等も気に入っているのだ。

一人になれる場所を探したのだろう、ポツリと立つランの後ろ姿は、何処か寂しげで脆く、弱々しい。

立ち並ぶ木々の隙間からその姿を見つけ出したセリアは、静かに林の中に足を踏み入れた。

「……………」

「っ！セリア…………？」

何と声を掛けようか迷っているセリアが言葉を発する前に、その存在に気付いたランが目を見開いた。振り向いたその表情は、やはり沈んでいる様に見える。

「その、先程はすまなかった……………どうかしたのか？」

「……………ラン。あの……………」

そのままオロオロと口籠った後、セリアは目を逸らした。言いたい事は分かっているのだが、いざとなると言葉が出ない。

俯いたまま視線を合わそうとしないセリアに、なんとなく何があったのかはランにも見当がつく。

「……………聞いたのだな」

「っ！？」

「君は分かりやすい」

「……………ごめん。勝手に聞いたことは申し訳ないと思ってる」

どう切り出そうか悩んでいたが、こうなっては仕方無い。ランの隣まで行き頭を下げる。しかし、彼から責める言葉は発せられなかった。

「いや。君には、知っていて欲しかった」

「……………」

イアンも同じ様な事を言っていたが、どういう意味だろうか。  
ランの事を知れたのは嬉しい。彼は大切な友人だと思っているし、少しでも彼の事は理解したいと思っている。しかし、先ほどの話は、彼にとっても他人を受け入れ難い領域だろう。それを勝手に聞いても責めないというのは、少なからず彼も自分を信用していると思っても良いのだろうか。

そのまま二人で池の眺めていると、ランが小さな声で言った。

「……………当時は、朝目が覚める度に思ったものだ。これが夢で、部屋を出れば、何ら変わらない姉の姿を見れるのでは、と」

「……………」

夢であって欲しいと、どれ程願っただろうか。それが無駄だと理解したのは何時からだろうか。優しく笑いかけてくれる姉が、もう亡き存在だと実感したのは。

「私の所為だ」

「そんなこと…………！」

「私を庇って姉が犠牲になったんだ。姉を護れなかった。どうしても、その事だけが頭から離れない」

誰に何を言われても、どうしてもそれだけが、変えようの無い事実になって自分を襲う。自分達が危険に巻き込まれる切っ掛けを作ったのも、姉を死に至らしめたのも、他でもない自分だ。

姉はいつも自分を守ってくれた。自分が弱かったから。自分よりも弱い筈だったのに。自分こそが姉を守らねばいけなかったのに。

「肝心な時には、何も出来なかった」

「……………」

何と言葉を掛けて良いか分からなかった。彼の悲しみが全身から伝わって来て、見ているだけでも十分辛い。

ランが自分を見据える瞳が、これほど悲しみや怯えに揺れている

のを見た事がなかった。しかしその奥には、救いや許しを求める様な色が見える。まるで、必死に安息を求め、願っても与えられないものを欲する、迷子の子供の様に。

ランが許しを請うのは、他の誰でもない、姉のものなのだろう。しかし、それは無理である。彼女は、この世の者ではないのだから。伸ばしても答えを得られなかった手が行き着いたのは、後悔と自己嫌悪。出ない答えを無理やり出し、得たものが更にランを苦しめているのだ。

「姉は、私を恨んでいるのだろう。不甲斐ない弟を持ったと」

「ラン……そんなことない」

震える身体を抱きしめたかったが、体格差があるためそれは叶わない。そのかわり、その顔にそっと手を寄せた。

「お姉さんは、ランが大好きな筈だよ。だから何が何でも護りたかった」

「……………」

「守ってもらった事を、ランが悔いる必要はない。忘れられることなく想われてるんだもの。お姉さんもきっと幸せに思ってるよ」

そこまで言うと、顔に寄せていた手を強く掴まれた。痛いくらいに強く。今にも泣き出しそうな顔で、縋る様な瞳を向けてくるランが、普段よりも一回り小さく見える。

「今でも覚えてるんだ。姉の服が赤く染まって、綺麗だった顔が苦痛に歪んで」

「ラン……………」

「起きてくれるのではないかと、何度も何度も呼んだのに、身体はどんどん冷たくなっていった」

幼い頃に見た光景は、悪夢となって心を蝕んだ。その度に、記憶の中の姉の笑顔が蘇って、余計に自分自身への怒りを増長させる。

「もう無駄なのに、姉上は居ないのに、それでも夢に見る度同じ事を繰り返すんだ。姉上の名を呼ぶ以外、自分は何も出来なくて」

「……………」

「自分でも愚かだと思う。こんな私を見れば、姉も呆れる筈だ」

「ううん……そこまで想ってくれる人は、そうは居ないよ」

これが十年近く前の事なのは聞いた。それからずっとランは姉を忘れずに想い続けていたのだ。例えそれが罪の意識からでも。忘れる事なく想ってくれる存在がいるということは、それだけでとても幸せなことだ。

「自分を責めないで。今のランの姿を見たら、お姉さんはきっと喜んでくれるよ。だから……」

そう言った瞬間、何かがセリアを包んだ。目の前が制服の色で覆われていて、それがランの物だと理解するのにも数秒要した。気付いたときにはランに抱きすくめられていて、セリアははっと息を飲む。反射的に離れようと手が動いたが、その前に理性で止めた。いくらなんでも、今ランを突き放す訳にはいかないだろう。

決して弱いとはいえない力で抱きしめられて、少し息苦しい。どうしたのだ、とランの表情を伺おうにも、彼の頭は自分の肩に絡まるように乗せられていてそれは叶わず、首筋に彼の吐息がかかって、くすぐったい。

妙に近いこの距離感に、理解力が追いつかない頭が戸惑いを覚えるが、そんな思考は次に耳に聞こえた声で現実呼び戻される。

「君は……」

「えっ?」

「君は……行かないな……?」

いつも議論の時にカールに言い聞かせる様な、そんな声からは想像もつかない程擦れた小さな声。自分を包んでいるのだから、身体は大きい筈なのにずっと小さく感じる。

彼の言っている意味を理解すると同時に、セリアは言葉に詰まった。行かない。つまりは、彼の前から消えない、ということだろうか。大切な存在を失った彼が、これ以上何かを失う事に恐怖を覚えるのは当然である。

ここで、行かない、と言えば彼は安心するのだろうか、簡単に口に

出来る言葉ではない。

彼の言う行かない、が一体どんな形なのかが分からないのだ。命が消える事を意味するのか、周りから離れていく事を意味するのか。もし、ここで安易に約束をして、何らかの形でそれが破られれば、ランを裏切る事に他ならない。

「……ラン……」

言葉が続けようとした。とその時、何だか木々の裏から声が聞こえたような気がした。

「離せ、ルネ!!」

「まだダメだって。もう少し堪えて」

林に生える木の陰から様子を伺っていたが、もう限界であった。しかし、踏み込もうとした体をルネに止められる。

いや。自分は十分耐えた。もうこれ以上は我慢ならない。

元は身から出た錆、自分で蒔いた種だ。少なからずこうなることは予想していたし、その上でセリアをランの元へ行かせた。結果は良好。ランもそれなりに落ち着きを取り戻したようだし、セリアにもランの過去を知ってもらえた。しかし、抱きしめるなんて自分の予定には入っていないし、そのままランの好きにさせる気もない。

自分が引き起こした結果なので、今までは大人しく事の成り行きを見守っていたが、もう我慢の限界であった。

「お前ら。その辺でいいだろう」

「えっ! イ、イアン! ?」

突然の乱入者に、セリアが驚いて出かけていた言葉を飲み込んだ。すると途端にセリアを離れたランが、正氣に戻ったのかほんのり焦りだす。

「す…すまない。その、これは……」

どうやら無意識での行動だったようで、ランは非常に慌てていた。ワタワタと言いつつ述べようとするランに、何処か複雑そうな表情

のセリアは、先程の問いの答えを言うべきか迷う。折角、少しいつもの表情を取り戻したのだ。今、事を蒸し返すのも憚られるが、このままというのも難しい。

しかし、ランは元から答えを求めていた訳ではないのか、それ以上追求するようなことはしなかった。

「それで……どうだったかね」

「見込み通り、ってところかしら。予想を裏切らない点では、喜ばしいわね」

クルーセルの言葉に、校長は満足した様に頷いてみせる。上機嫌ではしゃぐ校長は、まるで新しい玩具を手にした子供だ。

普段なら九割の確率で校長と一緒にってクルーセルも喜ぶ筈なのだが、今は何故か大人しくしている。それでも相変わらず、我が物顔でソファで寛いでいるが。

「でも、まだまだだね。今はちょっと早すぎるわ」

「それは分かっているよ。まだ期ではない。しかし、近いうちに何かしらの動きはあるよ」

「フフッ。そうかもね」

他人が聞けば意味を成していないだろう会話も、この二人には通じる様だ。お互い視線を合わすと、校長は何が嬉しいのか、また笑みを深くした。



まったく、冗談ではない。少し面白い事になりそうだと思っ  
た自分が愚かだったのか。予想していなかった訳ではないが、幾  
らなんでも早すぎる。自分が手を打つ前に厄介なことになっては敵わ  
ない。早急になんらかの形で、この事に終止符を打つ必要があるか  
もしれない。

だがしかし、これもこれで悪くはないかもしれない。最悪の場合  
でも、そうなった時の事態の重要性は高が知れている。多少の障害  
になりはしても、実際に自分達に影響を及ぼすような事にはならな  
いだろう。

だとすれば、このまま流してみるのも面白い。

何より、後々事の次第によっては自分の仕事が格段に楽になるの  
は、想像に難くない。実際、それなりに面白い事が何度も起こっ  
ているのだ。学園の愚直な生徒は当てに出来ないし、かといって簡単  
に潰れてくれそうもない。ならば、やはりこれを利用しない手はな  
いのではないだろうか。

そう考えると口元が緩んでしまうのも仕方がないというものだ。  
あまり露骨にする訳にもいかないが、誰も気付くまい。

ランが多少の落ち着きは取り戻したとはいえ、彼の気が完全に晴  
れることは難しかった。少し寂しそうな顔を見せたと思えば知らな  
い間に姿を消している。イアンに聞けば、これは毎年二週間程続  
くらしい。

毎年、暗い気持ちに区切りがつくのは、ランの実家であるオルブ  
ライン家が主催するパーティーに参加してからだと聞いた。悲しみ  
に取り付かれる妻や息子の気晴らしの為に、と侯爵が開くものらし

い。そんな父の気遣いに、ランは自分を奮い立たせ、また一年悲しみを胸の奥深くに隠すのだ。

貴族が理由も無くパーティーを開くのは珍しいことではない。家族にどんな事情があろうとも、建前はただの夜会ということになっている。

オルブライン家主催の夜会の招待状が行き渡った頃、学園に数通の外出席が提出された。貴族が通うフロース学園の生徒は、社交の場に出席するため、夜間や短期間学園を離れる者は少なくない。

今回提出された物の内五つはマリオス候補生から。そしてもう一つは、ヨーク・バルディが受け持つクラスの地味な少女からだった。六つの外出席は、現在職員室で受理される時を静かに待っている。丁寧に重ねられたそれらは、面白い物を見つけた様な視線が投げかけられても、微動だにしなかった。

「……提出、されていない？」

「はい。こちらの手違いだとは思いますが」

ヨークの言葉にセリアは困惑した。今夜のオルブライン侯爵家で行われる夜会に参加する為、学園に提出した外出席が出ていないと言われたのだ。数日前に出した筈が受理されておらず、セリアに外泊の許可は下りていない。

「どうでしょう？ 夜間の外出だけなら今からでも間に合いますが、外泊となると…」

フロース学園で一日以上の外出、もしくは外泊の許可を得るには、

少なくとも前日の内に外出届を提出する必要がある。それ以降になると、最低でもその日の晩には戻らなければならない。そうしなければ、無断外泊の校則破りとして処分もあり得る。

ランの夜会の後、時間によっては戻るつもりだったが、恐らくオルブライン家の屋敷に滞在する事になるだろうと考えていた。ローゼンタール家での婚約披露パーティーもそうだった。夜会は大体が夜遅くまで続くので、朝学園に戻る予定だったのだが。

しかし、受理されていない物は仕方無い。許可が下りていない以上、提出した筈だ、とここで言い張っても意味が無い。かといって、ランにも誘われたし、イアン達にも来てくれと頼まれてしまったので、参加しない訳にはいかないだろう。

「……分かりました。夜には戻る様にします」

「では、のように報告しておきます」

すみません、と一言謝るとヨークはセリアから離れて行った。それを見送ると、セリアもはあっと息を吐く。

候補生達は滞在するのだろうか、自分はそういう訳にはいかなくなった。なるべく早く切り上げる事になるだろうが、そうしても良いものだろうか。建前上はただの夜会になっても、実際はランや彼の家族の気を紛らわせる為の場だ。自分が居るからといって何かが出来るとは思わないが、心配は拭い切れない。

誰も居ない廊下でセリアは再び大きく息を吐いた。その背後に、すっと影が立つ。

「あまり廊下で立ち止まらない様に」

「ヒワッ!!」

後ろから突然声が掛けられ、思ってもいなかった事にセリアは飛び上がる。大袈裟に驚くセリアを、黒縁眼鏡の奥から冷たい瞳が見下ろしていた。

「廊下では騒がない様にしなさい」

「うっ。ハンス先生……」

目つきの悪い教師に睨まれて、セリアは一瞬怯む。

「それと、先日提出してもらった化学のレポートですが、また名前が記入されていませんでしたよ」

「えっ！？ あっ、すみませんでした！」

それぞれの教師は担任を受け持つクラスとは別に、個別の科目も担当している。内容の基準によっては、科目が同じでも教師が変わる事もあるが。セリアが受ける化学の授業は、このハンスが教えていた。クラスが違う為内容にそれなりの差はあるが、マリオス候補生の授業も受け持っている。ちなみに、クルーセルは数学、ヨークは歴史の担当だ。

「次からは気をつける様に」

「は、はい……」

セリアを冷たく一瞥すると、ハンスは再び廊下を進んで行く。突然のハンスの登場と説教に、セリアは本日三度目のため息を吐いたのだった。

「ごめんなさい」

「君が謝る事ではない」

主催側の人間であるため、昨日から実家に戻っていたランを見つけると、セリアは未提出だった外出届の件を話し、深く謝罪した。

「本当にごめん。折角招待してもらったのに」

「いや。来てくれただけで十分だ。ありがとう」

まだ寂しさを瞳に秘めたようなランだが、家族の手前気丈に振舞っていた。他よりも少し遅れて着いたセリアも、そんなランを心配げに見守る候補生達と合流する。

「相変わらず、華やかさの欠片も無い」

「うっ！」

カールに言われ、その視線に居た堪れなくなったセリアは、ソロリと一步下がる。彼の言いたい事は痛い程理解出来た。

今セリアが袖を通してるのは、周りの輝かしいご令嬢方と比べてしまえば地味な容姿を隠そうともししていない、何の飾り気も無いドレス。装飾品らしい装飾品も身に付けておらず、年頃の娘らしさなど全く見受けられない。元々、社交の場から遠ざかっていたセリアだ。着飾るという経験もそれに比例して皆無に等しい。それだけでなく、もとよりそういった事には疎いのだ。

「カール。それは失礼だろう」

「フン。私は事実を言ったまでだ」

ランが透かさず言い返すが、鼻で笑われてしまった。

自分の好いた相手が着飾る姿を多少なりとも期待してしまったランも、言い返しはしても否定はしない。

「うっ。その……すみません」

途端に多方面からも似た様な視線を投げかけられ、セリアは何故だか罪悪感に襲われた。

その後も続く友人達との雑談に、セリアという存在が加わる事で、ランは今までに感じた事が無い程の安心感を覚えた。毎年この時期になると、痛感するのは自分の非力さ。護れなかった姉への罪悪感と、大切な存在を失った事への喪失感。

幼い頃にぽっかりと開いた心の穴。埋まることの無かったそれを、栗毛の少女の存在が少しずつ塞いでいくのを感じていた。

姉を失った悲しみや罪の意識を忘れることはどうしたって出来ないだろう。しかし、セリアなら簡単に手の中から消えてしまう存在ではないのでは、と思えてくる。非力な自分でも守り抜けるのでは、と。

段々と穏やかになっていくランの心情を、イアン達候補生は敏感に感じ取っていた。

しかし、楽しい時間とは過ぎるのも早いもので、もう既に時刻は夜の遅い時間をさしていた。他の貴族達は、まだまだこれからの夜会を楽しむ積もりだが、セリアはそうも言っていない。オルブライン家の屋敷は、学園から比較的近いといっても馬車で三時間は掛かるだろう。汽車を使えばまだ早いのだが、生憎今から乗れる車は走っていない。

「ごめん」

「いや。少し待っていてくれ。すぐに馬車を用意させる」

馬車を呼ぶ為、ランは一度その場を離れる。会場から出た候補生達は、セリアを見送るために玄関ホールまで来ていた。

「セリア殿。お一人で大丈夫ですか？宜しければ一緒に一緒にしますが」

「そんな！平気だよ。それよりランの方が心配で」

出来ればもう少しこの場に留まりたいが、それは流石に無理だ。

今から帰っても既にギリギリの時間だろう。

やはり夜の遅い時間に女性を一人で帰すのは、とザウルが渋っている、突然背後に気配が立った。

「あの………」

「……っ！」

その声に振り返ると、黒い服を着こなした初老の男性が立っている。頭には随分と白髪が目立ち、口は白い髭に覆われていてどんな形をしているのか判別出来ない。

「失礼ながら、セリア・ベアリット様では？」

「えっ！？は、はい！私ですけど」

名前を呼ばれてそれに反応すると、男性はやはり、と嬉しそうに顔を綻ばせた。

「ルネ坊ちゃま方とご一緒だったので、もしやとは思ったのですが」「ジャクソンさん。久しぶりですね」

「はい。お久しぶりでございます。坊ちゃま方においては、学園生活も充実されておられるようで、何よりです」

ルネがジャクソンと呼んだ男性は、丁寧に頭を下げる。その姿にセリアがキョトンとしていると、その男性は上げた頭を再び下げた。「失礼しました。私、このオルブライン家で執事頭をさせて戴いております、ジャクソンと申します。今宵はようこそお越しくださいます、我が主も喜んでおられます」

「あっ！ いえいえ、こちらこそ」

彼が深々と一礼するので、つられてセリアも頭を下げる。そろっと視線を上げると、その姿をジャクソンがじいっと見詰めていたのに気付いた。どうしたのか、とセリアが首を傾げると、ジャクソンははっとした様な顔をする。

「申し訳ありません。ランスロット坊ちゃまが、是非ご招待したいと仰られていた方ですので」

「ランが……？」

「はい。幼少の頃より女性とは常に一定の距離を保っておられた坊ちゃまが、貴方の事だけは嬉しそうに話して下さいました」

「えっと……」

髭で隠された口が吊り上っているのが分かる程、にこやかに語る彼が、終いには涙まで流しだしたのでセリアは焦った。戸惑っていたら、ポケットからハンカチを取り出し涙を拭ったジャクソンが再び見えない口を開く。

「これは、大変失礼いたしました。しかし、ランスロット坊ちゃまがお心を開かれた事には、私も感動のあまり言葉を見つけられない程であります」

幼少の頃から。つまり、ランが姉を失う前も、その後も見守り続

けた執事頭は、ランが女性から距離を置く姿に胸を痛めていた。それがそのままランの心痛を表している様に感じたからだ。しかしだからといって、傷を抉る様な事をする訳にもいかず、長い間見守るしか出来ないでいた。いつか、彼が心を開ける存在が現れる事を願って。

「差し出がましい事ですが、ランスロット坊ちやまを、今後も宜しくお願い致します」

「いっ、いえいえ！私の方がいつもお世話になってますし。むしろこちらがお願いしないといけないような状況でして……」

自分は決して、そんな涙を流しながらお願いされるような、そんな立派な存在ではない。むしろ、いつもいつも迷惑ばかりを掛けてしまっている。そう言えば、ジャクソンは驚きに見開いていた目を細めて、にっこりと微笑んだ。

「坊ちやまが貴方様をお選びになったのも、分かる気がいたします」  
「……？」

ジャクソンの言葉が理解出来ず、セリアはうん？と首を傾げる。

「私も長い事この家にお仕えしておりますが、今の坊ちやまは……」  
「おっと待った。ジャクソン、それ以上は他言無用で頼むぜ」

ずっとイアンがセリアの肩を引き自分の後ろに隠せば、ハハッと笑いながらジャクソンの言葉を遮った。それを見て有能な執事頭は全てを悟った様で、一礼の後静かに口を閉ざす。

しかし、セリアは言われた意味が分からず、オロオロと視線を彷徨わせた。しかし、他の候補生と目が合うと途端に逸らされてしまう。なんなのだ、いったい。

「それでは、私は失礼させて戴きます。本日はお目通りできまして、大変光栄にございました」

「あっ、いえいえ。こちらこそ、ありがとうございました」

なんだか分からないが、これ以上突っ込んでも答えは返って来なさそうだ。そう理解したセリアが丁寧に頭を下げると、執事頭は静かに、まるで影の様にすうっとその場を去った。



「あの人も変わりませんね」

「うん。いつもランのこと心配しているもんね」

執事の変わらないランへの気遣いに、候補生達は頬を綻ばせたのであった。

## 過去の 2 (後書き)

急がないと。とにかく急がないと。何が何でも急がないと。

それでも、間に合わないかも。本当にどうしよう。ああ、もう。どうしてこんな事になってるの！？何であんな目に合うの！？

とにかく、急いで戻らないと。

### 過去の 3

馬車が到着したとの知らせが届いたので、セリア達は一度屋敷の外に出た。入り口のすぐ前に止められている馬車では、逞しい馬が鼻息荒く出発の時を待っている。それとは対照的に黒い帽子を深く被った御者は、先ほどから微動だにしない。

「道中では気をつけてくれ」

「うん。ありがとう。じゃあまた学園で」

その言葉を最後にランが馬車の扉を閉めれば、カタカタと揺れる音と共に静かにその場から離れていく。その姿を心配そうに見送るランの瞳には、再び寂しそうな色が戻っていた。

「そう落ち込むなって。明日までの辛抱だろ」

「……別に、そういう積もりでは……」

イアンに後ろから背中を軽く叩かれランは我に返る。

「やはり、お一人で帰したのは良くなかったのでは？」

「大丈夫じゃないかな。そんなに遠い距離じゃないし」

セリアを心配する気持ちは多分にあるが、ランと一緒にいて欲しいとセリア自身に押し切られてしまったのだ。

「そういうことだ。心配するなよラン」

「それは、分かってはいるが……」

セリアの存在が、ランに安らぎを与えているのは疑いようがない。正直、この時期にランとこんな会話が出来るとは思っていなかった。出来たとしても、まだ随分先になるだろうと思っていたのだから。

そうしてセリアの乗った馬車が完全に見えなくなった頃、屋敷の中へ戻ろうとしたラン達の視界に、遠くの門から入ってくる別の馬車が映った。そして、随分と急いで近づいてくる馬車に乗った御者が目の前で深々と頭を下げたのだ。

「お時間を取らせてしまい申し訳ありません。途中車輪に不具合が

ありまして」

「はっ!？」

「あっ、いえ。馬車をご所望だと……」

目を見開くラン達に御者がビクリと怯む。しかし、候補生達はそんな事気にしていられなかった。

「ラン!？」

「いや。呼んだ馬車は一つの筈だ」

何が起きているのか分からない、といった風のラン達だったが、すぐに屋敷の中へ足早に戻っていった。

「ジャクソン!!」

「は、はい! 坊ちゃま、どうされました?」

「他に馬車を呼んだか?」

「い、いえ。先ほど坊ちゃまがお呼びした他は……」

その言葉に候補生達の背中を冷たいものが流れる。

では、今セリアが乗った馬車はいつたい……

「ジャクソン! 馬を頼む!!」

「はっ!？」

「急いでくれ!!」

「は、はいいいい」

そういつて駆けて行く執事の後ろ姿を見ながら、ランは急ぎ立てられる思いで外へ飛び出す。他の候補生達も、何が起きているのかは分からないが、一つだけ確信していた。

今この場に居ない友人の身に迫る危機を。

オルブライン家の屋敷を離れた馬車は、夜の道を静かに通ってい

た。周りには家らしい家も無く、かなり暗い。しかし、もう少し進んだ所には街がある筈である。ランの姉が亡くなったのもその街であつた。御者台に取り付けられたランプの僅かな明かりを頼りに、馬車は迷い無く進む。

心地良く揺れる馬車の中で、セリアは襲い来る眠気と格闘していた。頭は船を漕ぎながら、瞼はトロンとして今にも閉じそうだ。少なくともあと三時間は馬車の中なのだから、寝てしまおうか。

ふと窓に目を向ければ、木々が通り過ぎる情景が飛び込んでくる。学園都市や王都の周りとは違い、都市と都市との間はまだ未開発の土地が多い。近年では開拓がかなり盛んに進んでいるので、それもあと僅かの間かもしれないが。

そんな事を考えている間にも眠気が再び押し返して来て、もう寝てしまえ、と思ったセリアは、馬車がゆっくりと止まるのを感じた。おや？と思って外を見てみるが、何も変わった様子は無い。特に急に停止した訳ではないので、意図的に止まったのだろうか。

しかし、それならそれで御者が何か声を掛けるものだ。サッと窓の外に視線を走らせたが、他に明かりは無く不気味な程暗闇が広がっている。他に人の姿は見えず、動物の気配すら無い。

一瞬間な予感が脳の隅を通り過ぎた。何となく本能的にこの場は危ない、と思ったのだ。

緊張から無意識に息を殺していると、前に乗っていた御者が御者台から降りたのが分かった。

ランプの僅かな明かりでは、その顔は完全には見えない。帽子を深く被った御者は、馬車の扉にゆっくりと手を掛けた。そしてそのまま勢いよく開ける。しかし中を覗くと、先程までそこに居た筈の少女の姿が無い。サッと振り返ると、道を走る小さな後ろ姿があつた。

「ハア、ハア!!」

何が何やら分らないが、今は逃げるしかないだろう。明らかに、あれはただの御者ではない。ほんの僅かだったが、セリアは確かに殺気を感じた。普段から剣などを握っていたりすると、そういったものを感じる感覚も、自然と研ぎすまされるものである。そういう意味で、剣術は貴族男子の嗜みの一つともされているのだが。

咄嗟に反対側の扉から逃げ出したセリアは、息を切らしながら走っていた。暗い中、何度も転びそうにはなるものの、火事場の馬鹿力という奴で何とか踏み堪えている。

しかし、いくら逃げ出したといっても所詮は人の足。背後から聞こえる馬の足音と馬車の車輪の音は大きくなってきていた。

「くっ!!」

すぐ後ろまで迫った馬車を、咄嗟に横に身を投げて避ける。躲した事にホッとしたセリアが顔を上げると、丁度馬車がこちらへ向き直っている所だった。夜の闇ではっきりとは見えないが、ランプの明かりがぼううと照らす馬の姿は確認出来る。

それを見てセリアも慌てて立ち上がり、再び足を動かす。何度か同じ事を繰り返したが、向こうもこちらの動きが読めて来たのか、躲すのも段々とギリギリになって来た。

背後を振り返れば、すぐ傍に迫る影。馬の嘶きが妙に近く感じるのは、気のせいではないだろう。馬を急かすムチの音も、段々と聡明に聞こえて来るようになった。それだけ距離が近づいたという事だ。

しかし、幾ら走る早さを上げようとしても、段々と足が言う事を聞かなくなってきた。

「あっ!!」

走るのに夢中で行く先まで意識していなかったセリアは、気付けば崖際へ出て来てしまっていた。

しまった。追い込まれたか。

背後に迫る馬車の音を聞きながら、セリアは悔しさと絶望に顔を歪めた。

「畜生、なんだってこんなことに」

「とにかく、急ぎましょう!!」

馬の背に飛び乗った候補生達は、力一杯馬車の後を追っていた。

「あれを狙ったのは偶然ではないのかもしれない」

「だからって、何でセリアを狙う必要があるんだよ」

「自分で考えろ」

「俺が知るかよ!!」

考えても出ない答えに、苛立ちは募るばかりだ。

少女一人を連れ去るのに、こんな手の込んだ事をするだろうか。

貴族を誘拐しようという輩は少なからず居る。かといって、実際に行動に出る例は少ない。それは、現国王が市民から得ている信頼と支持によるものだろう。

候補生達の言い合いを聞きながら、ランは胸に焦りを広がらせていた。

やっと、やっと現れた存在を、再び失うのか。それも、また自分の失態が生んだ結果で。

「ラン!」

横から聞こえた声に、知らぬ間に俯いていたランは顔を上げた。

声の主、ザウルを見れば自分を強く見据えている。

「セリア殿はお強い方です。どんな時でも最後まで抗う様な」

「……」

「彼女が持ちこたえている間に我々が行くべき時なのに、貴方が俯いていてどうするのですか!」

「っ!!」

セリアは、女らしく大人しく護られているだけの存在ではない。

どんな時でも自分で剣を振り回して相手に向かって行く。ならば、その場に一刻も早く辿り着く事が、自分達がすべきことだ。

今、この場で誰よりもセリアの身に何かが起こる事を恐れているのはランである。勿論他の候補生達も、彼女の身を案じてはいる。しかし、恐れる事と身を案じる事は違う。俯いて震えているだけでは、セリアは救えない。ランもそれを分かっている、心に植え付けられた恐怖が邪魔をしていた。

ザウルの言っている事は分かっている。今度こそ、自分は護りたいのだ。大切な存在を。しかし、それを失ってしまったらと思うと、どうしても背中を悪寒が走ってしまう。セリアの元へ行く事よりも、もし手遅れであつたら、と考えてしまう。

苦悩する思考を何とか押さえ込んだランが視線を前に向けると、仄かな明かりが映った。

あれだ。と確信すると同時に一気に馬の腹を蹴る。大声でその名前を呼んでみるが、返事は無かった。

それでも、あと少し、もう少しだ。と思った矢先、漸く栗毛の少女の姿を捉えた。

「セリア！」

彼女が無事だった事への安堵からもう一度名前を呼んだラン達目の次の瞬間、信じられないものが映った。

馬車に撥ねられた少女の体が、崖下へ消えていくのが。最後に見たのは、驚きの表情でこちらに向けられる茶色がかった瞳。

「っ！！セリアー！！！」

落ちて行く少女を確認して満足したのか、馬車はそのまま御者と共に闇に消えて行く。その後を追わねば、と理性では分かっている、その場に居た全員が崖の傍で馬から飛び降りた。

「セリア！！！」



「…………オーイ」

「はっ!？」

非常に場違いな間延びした様な声が聞こえ、下を覗き見れば、上手い具合に伸びている枝にぶら下がった栗毛の地味な少女。

「皆、ごめん。その……助けてもらっても良い？」

「な、何やってんだ!！」

急いで小さな身体を引き上げるが、枝は以外とがっちりしていて、何の問題も無く少女は引き上げられた。

ふう、とセリアがため息すれば、未だに信じられないといった候補生達の視線に気付く。

「セリア。一体何が……」

「いや。その……私にも何がなんだか。でも、逃げてたらこの崖まで追い込まれて」

「……………」

「下を見たら太い枝が伸びてたから、一か八かで……わっ!！」

飛び降りたのだ、と説明しようとした言葉は、視界が暗転したことで遮られた。途端に感じるふわりとした温もり。ランに抱きしめられているのだ、と理解するのに、少々時間がかかった。

「よかった。無事で本当に」

「ラン……」

セリア自身、何事もなく良かったと思っていた。ランにとって姉上を亡くしたこの時期に、更にまた身近な人間にもしもの事があれば、傷をより深く抉ることに他ならない。そうならないで、本当に良かったと思う。

「ラン、あのね…私、やっぱり約束は出来ない」

「……………」

「今日みたいな事は、そう何度もあるとは思えないけど……でも、この先何が起こるか分からないから」

出来れば、そんな事にはなって欲しくはないのだが。というより、先程の馬車は一体なんだったのだ。自分の生きて来た人生の中でも、

まだ経験のしたことのない事態だぞ。

「でも、私は今ちゃんとここに居るし、学園に通ってる間は、皆と一緒にいたいと思ってる」

「……………」

「ラン達には迷惑ばかりかけてるけど……………」

それは非常に申し訳ないのだが。

「もし良ければ、なんだけど……………」

これから先の約束は出来なくとも、今共に居る事は許して貰いたい。ランにとって苦痛になるかもしれないのなら、突き放してもらって構わないのだ。しかし、出来る事なら、これからは友人として一緒に居る事を許して欲しい。

「セリア……………」

ランからの答えは無いまま、セリアはその場を離れる事になった。これ以上この場に留まっても意味が無い上に、暗い夜に崖の傍は危険だという事になったのだ。その後セリアは、近くの街から別の馬車で学園まで戻る事にした。それにはザウルとルネ、それにイアンも同行する。

今はとにかく学園に戻らねばならなかった。もう予定ならば学園都市に入っても可笑しくない時間だ。馬車に襲われたと話しても、現実味が無い上に証拠も無い。無断外泊の言い訳だと思われては適わないからだ。

ランとカールはオルブライン家に戻り、今回の事を少し調べる積もりだった。ランが呼び寄せた馬車の御者が、車輪に不具合が生じた為遅れた事も気になるし、なによりどうやってセリアの事を知ったかが気かりだった。

セリアがザウル達と共に馬に乗って闇に消えて行く姿を目で追うランの後ろ姿に、カールの冷たい声が投げかけられた。

「貴様は何時まで過去に縋り付いている積もりだ」

「なに？」

「手を伸ばす事を恐れるなら、始めから焦がれるな。その方がこちらにとっても好都合だ」

「……………」

冷やかな視線でこちらを見据えるカールに、何か言い返してやりたかったが、言葉が見つからなかった。

「しかし、感情があれを望むなら、それなりの覚悟を決めろ」

「それは……」

「揺るがない存在など何処にある。ありもしない幻影を求める暇があるなら、今あれが実在していることを認めたらどうだ」

その言葉と共に、先程のセリアの表情が思い起こされた。申し訳ない、と言った風に自分を見上げる、いつものオロオロとした表情あんな事があったにも関わらず、普段と何ら変わりなかった彼女を思い出すと、今まで自分が悩んで来た事が無意味だったのでは、と思えて来た。

ああ、自分はなんて愚かだったのだろうか。失う事ばかり考えて、大事な所を見逃していた。彼女は今ここに居るのではないかと。消えるのではと自分が恐れている間も、ちゃんとこの時に存在しているのではないか。

自分が幾ら彼女が消える事を恐れようと、そんな事には左右されはしない。護りたければ手を伸ばさねば。

「それは、分かってている積もりだ」

「フン……ならば、これ以上は何も言うまい」

しっかりと言い切ったランに、カールは興味を無くしたかの様に背を向けた。

セリア達は街で馬車を借り、急いで学園を目指していた。しかし、明らかに予定を大幅に遅れている。もしかしくとも、無断外泊と見なされてしまうのでは……

漸く見えて来た学園の門に、セリアはルネが持っていた懐中時計にサツと目を落とす。時刻は午前四時。実際の時刻は言い渡されていないが、戻っていないなければならない時間は過ぎているだろう。しかし、運が良ければギリギリ見逃して貰える可能性もある。せめて校則破りにならないように、あわよくば教師に見つからない様にセリアは祈りながら門を走り抜けた。

「よかった。間に合った」

「……間に合ってなどいません」

聞こえた声は、よりにもよって一番見逃してくれなさそうな人物のものだった。なぜ彼がここにいるんだ、とか。これは絶対になにかしらのお咎めを食らうだろう、とか。胸に過ったそんな考えや不満が、ものすごく率直に言葉に出てしまい。

「げっ！」

セリアは思わずそんな声を出していた。

言われた方は途端にピクリ、と片眉を上げる。なんだその猫を踏みつぶした様な「げっ」という声は。自分は珍獣かなにかか。

「良家の子女がそんな声を出すものではありません」

「うっ……」

黒縁眼鏡の奥の瞳がギロリと睨んだので、セリアは内心でひいっ！と悲鳴を上げた。

あくまで冷静に、教師として最も適切な言葉で注意したハンスは、かなり冷ややかな目で縮こまる少女を見下ろしていた。

「ハ、ハンス先生」

「君達は、今夜は外泊ではなかったのですか？」

セリアに一步遅れて入ってきた候補生達も、内心で舌打ちした。この場に居た教師が、不運にも規律に人一倍厳しいハンスであった

のだ。どうしてこんな時間に校門でまるで待ち構えていた様に登場するのだ、と疑問が過るがそんな事気にしている場合ではない。

「その…ハンス先生。これには、色々事情がありましてでして…」

「何がどうであれ、十分外泊したと見なされる時間帯ですが」

「いえ、でも…一応外出届は出したのですが」

「外泊の許可は下りていない筈です」

セリアが必死に並べる言い訳も、瞬時に返されてしまう。

さて、どうしようか。乗った馬車の御者に襲われたのだと、正直に言おうか。しかし、彼がそれを信用する可能性は、極めて低い。

「ハンス先生。これは我々にも責任が…」

「その事は後ほどゆっくり聞きましょう。しかし、理由がどうあれ、セリア君が無断で朝まで学園を離れていた事に変わりはありません」

「しかし、それには理由が…」

「ならば話して下さい。それで君達にとって事態が好転する事は無いでしょうが」

候補生達も弁明するが、ハンスは考えを変えようとはしない。取りつく島も無い状態に、セリアを絶望感が包み始めた。

無断外泊の場合、最悪停学もあり得る。そうでなくともそれなりの処分は下る訳で、どうしても歓迎できる状態ではない。もしもこれが問題になれば、家の恥を晒す事を恐れた親に呼び戻されてしまう可能性も…

考えただけで頭が痛くなる。しかしそんなセリアに後ろから声が掛けられた。

「あらあ。どうしたの、セリアちゃん」

場にそぐわない、なんとも気の抜けた声が響いたと思えば、門の外からクルーセルがヒョコリと顔を覗かせた。

「クルーセル！貴方はこんな時間まで何処へ行っていたのですか！？」

「あらやだ。見つかったやつだ」

「この様な時間に無断で校外を出歩くなど、教師にあるまじき行為です!!」

「そんな怒らないでよ。ちょっと野暮用よ」

パチン、とウインクを飛ばすクルーセルは、まるで反省した様子が無い。その事にハンスは増々怒りを募らせる。普段は冷静沈着なハンスも、クルーセルが相手だとしても声を荒げてしまう。

「一体貴方達は、校則を何だと思っているのですか!!」

ビシッと突き出された指が自分にも向いているのでセリアは大いに戸惑った。

急なクルーセルの登場にセリアだけでなく、他の候補生も狼狽えてしまう。ハンスは一人で怒りを増長させているし、クルーセルはクスクスと笑い声を上げている。ハンスがセリアの事を報告する積もりなら、これは非常にまずい状況なのではないだろうか。

「それで、どうしたの？」

「あ、その……」

クルーセルがハンスから視線を外して問いかけたので、セリアは戻るのが予定よりも遅れてしまった事を話した。遅れた理由は、話すのもどうかと思ったので伝えていない。

セリアの話を聞くと、クルーセルはなるほど、と一人納得した。そしてニコリと笑ってハンスを見る。

「まあ良いじゃない。実際に何処かに泊まって来た訳じゃないんだし、ちゃんと帰って来たでしょ。そんなに怒らないでよ」

「ですが、今は既に朝の時間帯です。認める訳にはいきません」

「そんなに固い事ばかり言っていると、老けるわよ」

「そういう事を言っているわけではありません。貴方はもう少し規律を守って下さい!!」

まるでからかうようなクルーセルの口調にハンスの声は怒を増している。そこへ、また新たな声が割り込んできた。

「どうかしたのですか？」

門の傍から怒鳴り声が聞こえ、明かりを持ったヨークが気になって顔を出したのだ。

「ヨーク。セリア・ベアリット君が無断で外泊した様なので」

「外泊……？」

ヨークがセリアをまじまじと見ると、オロオロと自分を見上げる茶色がかった瞳。状況から察するに、今戻ったのだろう。時刻は既に夜間外出には遅すぎる時間帯。ハンスの言う様に無断外泊として校則違反にも成り得るが、今回はそういう訳にもいかない。

「それでしたら私からもお願いします。この件は不問にして戴けませんでしょうか？」

「なっ！」

「元々セリアさんからは外泊の申し出があったのです。しかしこちらで手違いがあったらしく、仕方無く夜間のみの外出になってしまったので」

「そ、それは……」

「何か問題があるようでしたら、私が責任を取ります。ですから、どうか今回はお聞き戴けないでしょうか？」

唯一この場で見方になってくれそうな人物の当ても外れてしまい、完全に孤立したハンスはうっ、と怯んだ。多方面から同じ様な視線を向けられてしまえば、これ以上咎めるのも無理というもの。不満は残るが、この件はお咎め無しにする以外ないだろう。

ふう、と息を吐くと、ハンスは渋々頷いた。

「分かりました。しかし、クルーセル！貴方の行動は教師として見逃せません」

「ええっ！？ちょっ……」

むしろそちらの方が重要だ。とハンスはクルーセルを引き摺り、その場から足早に離れて行った。

「今回の事は私にも非があります。すみませんでした」  
「い、いえいえそんな」

「では、私はこれで。それとセリアさん。明日の授業が辛いようなら、欠席でも構いませんので」

こんな時間まで外出していたとなれば、その疲労は当然明日の授業にも響いてくるだろう。育ち盛りの学生に、それは酷だと思ったのだ。今回彼女がこうして戻らなければ行けなくなった事には、自分にも少なからず責任がある。

心底申し訳無さそうにヨークはもう一度頭を下げると、再びのんびりと校門から校舎へ向かって歩き出した。

なんだか知らぬ間に色々と話が進められていたが、取り敢えず無断外泊にはならず済んだようだ。その事にセリアも候補生達もホッと胸を撫で下ろす。

誰が誰に対して放った言葉かは分からないが、セリアがホッと胸を撫で下ろしたと同時に、ある人物は確かにこう思った。

余計な事を……



### 過去の 3（後書き）

また、何か不穏な空気が近づいている様に感じます。何故、平穏を望んでいる時に限って、こうも色々起こるのでしょうか。セリア殿に被害が及ばないか心配です。敢えて首を挟まなければ巻き込まれる事は無いのですが、やはり不安は拭いきれません。

そういえば、あの方がセリア殿にお会いしたとか。こうして呼ばれるのは久しぶりですね。それは嬉しいのですが、彼はどうお考えなのでしょうか。

## 蜘蛛 1

網状に紡がれた銀色の糸が、その存在を光に映す事なくひっそりと佇む。そうして描かれる螺旋は、その場に巢食う捕食者の城。獲物を捕らえる事だけを目的に生み出されたそれが待つのは、優雅に舞う蝶。

糸の意図に気付かぬまま、ふわりと漂う風に乗った美しい羽は、気付く間もなくその網に絡み取られた。その様を見届けた銀色の糸の主は、悠々と城を横切り、ゆっくりと捕らえられた哀れな蝶に近づく。内に潜めた尖る刃を、この時ばかりはむき出しに、かかった獲物を見定める。蝶はその下で脅え、逃げようともがくが、既に何の意味もなさず、最期の時は確実に迫っていた。

そして……

「っ！！！」

悲鳴を上げる間も無くその命を散らした蝶の眼は、止め処なく流れる己の赤い液体を何時までも見つめていた。

疲れた表情のハンスがため息を吐いた先では、校長とクルーセルは仲良く新聞を覗き込んでいた。

「世の中も物騒になったものだ」

「本当ね。生徒達には気をつける様に言っておかないと」

責務から逃れた獲物をハンスが捕獲した場所は、やはりというか校長室。もうこれはどうしようもないと、諦めるべきなのだろうか。と、現実逃避したくなる程の疲労が蓄積されたハンスの脳をそんな考えが過ぎるが、その生真面目な性格がそれを良しとしない。僅かに残った気力で、同僚の行状の改善に力を注ぐ。

そんなハンスの内なる努力を、いとも容易く打ち砕く様にクルーセルが顔を上げた。

「見てよハンスちゃん。また例の事件よ。いやねえ、こういうの」自分の行動に全く非が無いことを疑いもしないクルーセルは、呑気にその後も新聞を眺め続けている。

内心で色々と奮闘し続けたハンスだが、色々と次に出す言葉を考えたり、この状況を懸命に纏めようとするうちに、遂に思考が停止する。

怒りと脱力感と、その他諸々の感情が一度に込み上げたハンスはよろり、と崩れかけた。校長の手前失礼と思いながらも、その部屋に置かれているふかふかのソファに腰掛ける。

「あら、ハンスちゃんお疲れね。大丈夫？」

「そうだハンス君。飛び切りの茶菓子があった筈だ。君も食べて行きたまえ」

彼の胃痛の元凶である二人がそんなことを言っている間、ハンスの脳は辞職願の文章を着々と書き始めていた。

校長とクルーセルが読んでいた新聞に乗っていた記事。それはフロース学園内でもかなり噂されている事件に関することであった。

貴族の女性は何人も無残に殺されているというのだ。

始めは何処かへ連れ去られ、数日経った後に変死体となって王都の道端へ捨てられているのが発見された。既に六名の犠牲者が出ており、手口が同じであることから、同一犯の犯行とみなされている。いずれもが名貴族の令嬢や夫人ということで、警察も貴族達も必死で動いているが、何の手掛かりも掴めないでいる。貴族達にも日頃から注意するよう呼びかけられているが、それでも数日姿を消した女達が、胸を一突きにされた状態で見つかった。

奇怪なことに、その死体の傍からは毎度、これも刃物で一突きに

された手のひら程の大きさもある蜘蛛の死骸が発見されている。それになんらかの意味があるのでは、と推測されたが、明確なことは分かっていない。ただ、この妙な事件の不気味さを増しているだけだった。

何はともあれ、決して穏やかではないこの事態に、王都からそれほど離れていない学園都市のフロース学園生徒達も、不安を胸に抱えていたのである。

「という事件が起こっているのは知ってるよな」

「その、それはそうなのであります……」

非常にキツイ視線を飛ばしてくる面々の前で、縮こまる栗毛の地味な少女。温室の真ん中に位置された椅子に座っている今、セリアは四方からの睨みを必死に受け止めていた。出来れば今すぐ逃げ出したいのだが、もはやそれは不可能である。

「それで。そんな物騒な事件に危機感を高めるべき時にも関わらず、お前はこれから何処へ行こうとしてた？」

「だから、ノートが足りなくなりましたですね。お店もそんなに離れていないのですし。さっさと行って来れば良いと思ひましてでして。それに、まだ夕方でありますんで、門限までには戻ろうか、と……」

「……………」

ノートが足りなくなった事に気付いたセリアは、そういえばそろそろ無くなりそうだったな、と軽い気持ちで校門へ向かった。まだ夕方の早い時間なので、急いで行けば夕食までには戻れるだろうか、と気にしながら。事件の噂もあるので注意しよう、という考えは微動も無い。

しかし、門を潜ろうとした瞬間、後ろからどこか怒りを含んだ声に呼び戻され、現在の状況に至る。

まるで針の様にチクチクと刺さる視線に、セリアはどうしようかと考えを巡らせていた。

確かに、物騒な事件が立て続けに起こってはいる。それでも、これは少し心配しすぎではないだろうか。例の事件を気にして、街を歩く人の数は多少減ってはいるが、人気が無いという訳ではない。まだ夕方であるのだから、そんなすぐに何かに巻き込まれる様なことはないと思うのだが。

しかし、彼等が心配性なのは今に始まった事ではない。人一倍責任感の強い彼等だから、どうしても用心してしまうのだろう。

と考えるセリアは、内心で惚れた女がこんな時間に一人で街中をふらつく事に不満を感じる候補生達の胸の内など、微動も理解しづらい。これだから目が離せないのだ、などと候補生達は内心でブツブツと文句を繰り返しているのだが。

しばらくのお説教で、とうとう街へ出向くことを最後まで許されなかったセリアは、ルネが余分に持っていたノートを貰うことになった。候補生達も、これで外へ行く必要はないだろう、と釘を刺す。長い説教を聴いている間にも、気付けば時刻は既に夕食時だ。目を離すものか、とジロジロと責める様な視線を送ってくる候補生達と連れ立って食堂へ向かう。

そのまま連行される様な形で食堂へ足を踏み入れると、その一角で他とは明らかに違う、重々しい空気を撒き散らす人物を見つけた。珍しいな、と思いつつもその人物に近づくが、どうも様子が可笑しい事に気付く。彼の前に食事を取った形跡は見られず、誰にも目を向けることなく、ただじっと座っているのだ。

「カール。どうしたの？」

「お前、ちゃんと食ったのか？」

食堂に来る理由は間違いなく食事である。しかし、彼の前のテ-

ブルの上には、その痕跡が見受けられない。普段から食べる事を二の次、三の次にする彼のことだから、多少心配になってしまう。

イアンの問いにゆっくりと頷いてみせたカールは、その冷たい視線をセリアに向けた。

「…お前達を待っていた」

「へっ!？」

思わず聞き返したが、カールは口を開かずただ黙っている。二度言うつもりは無いらしい。

何か急用だろうか?と首を傾げた候補生達が周りに腰を落ち着けると、カールはゆっくりと口を開いた。

「次の週末。お前達を我がローゼンタール家の茶会に招待する」

「……………」

何のことかと疑問符を浮かべるセリア以外は、それが意味するところを即座に理解したらしい。

「公爵夫人か」

「ああ」

今までも度々ローゼンタール家には招待された事があり、その何れもがカールの母、イレネ・ローゼンタール公爵夫人の希望だったのだ。今回も夫人が、是非にと誘ったらしい。

それを聞いて、セリアはカールに似た見事なプラチナブロンドの女性を思い出す。

その後のカールの話によると、例の貴族の女性ばかりが狙われている事件には公爵夫人も不安を募らせていた。幾らカールが男だといっても、そんな物騒なご時世であれば自分の子の事が心配になってしまうもの。息子の問題無いという言葉聞いて安心したものの、不安は拭い切れない。

そして、カールの周りに居る貴族令嬢といえ、以前紹介されたセリア。他人とはいえ、カールが初めて連れて来たタイプの人間だ。考えてみれば、男のカールよりも、セリアの方が狙われやすいのではないか。

そのまま話は進み、今度連れて来い、という事になったらしい。  
マリオス候補生達と一緒にならば安全だろう、という事だ。

「お前にも強力して貰うぞ」

「は、はあ……………」

セリアは未だに理解出来ていない様子だが、カールの言葉に一応  
頷く。

学園都市から馬車で数時間。王都を通り抜けそのまま馬車を走らせると、目に嫌でも飛び込んで来る大きな屋敷。古くからローゼンタール家の人間が守りぬいたこの城こそ、カールの実家である。

流石名家の中の名家、ローゼンタール家の屋敷だけあって、その風貌は圧倒的で、敷地も広大である。

以前来た時は夜だったため気にならなかったが、こうして陽の光を反射している姿を見ると、こちらが恐縮してしまう。

それほどの、絶対的な存在感を醸し出していた。

外見が大きいだけに、中も広く、まるで迷宮にでも迷い込んだかの様だ。何処までも伸びる通路は、長いだけでなく広い。セリア一人なら、確実に迷子になっていただろう。既に自分が何処に居るのか分からなくなり、キョロキョロとしながら歩いていてる。

そんな屋敷内を、まるで熟知しているかの様に候補生達は悠然と進んでいった。

候補生達が歩を進めた先にあったのは、これまた堂々と構える一つの扉。カールが軽くノックをすると、中から女性の声が聞こえる。入室を許可する言葉と共にカールが扉を開くと、室内ではイーネ・ローゼンタールが優しげにこちらに笑みを送っていた。

「皆さん、今日はいらしてくれてありがとう」

「イレネさん。こんにちは」

にっこりと微笑んでいる姿は、セリアの記憶に残る生氣や好奇心に溢れた声と同じ物であった。我が子の帰還とその友人の訪問に喜び、笑顔でルネの挨拶に微笑みを返す。

「公爵夫人。本日は、お招きいただきありがとうございます」

「いいえ。私も来ていただいて嬉しいもの」

ラン達と会話し始めた夫人が、ふいにこちらを見たのでセリアは慌てて頭を下げた。

「まあセリアさん。我が家へようこそ」

「あ、いえ。ど、どうも。こんにちは」

「その説は本当にありがとう。ごめんなさいね。ちゃんとお礼も言わないでそのままにしまっって」

「い、いえいえ。そんな。どうかお気になさらないで下さい」

カールの婚約披露パーティー。突然ローゼンタール家を襲った爆発から、セリアは公爵夫人を守った。その後夫人は氣を失ってしまったので、それきりになっていたのだ。

「あの、その後お怪我などは……？」

「いいえ。貴方のお陰でこの通り無事だったわ。本当に、ありがとうございます」

「楽しんで行ってね。今日は特別なお客様達の為に、沢山用意したのよ」

夫人がそう言って進めた先には、確かに沢山の茶菓子がテーブルの上に乗っていた。

それをセリアは、おおっ！と輝いた目で見詰めている。見るからに高級そうな菓子は、やはり見た目も美しく。人の食欲を引き出す。漂う甘い匂いと、紅茶の香ばしい香りに、セリアの胃は既に空腹を



訴え始めた。

早速テーブルを囲んで茶会の始まりである。

セリアがまず始めに手にとったのは、ふっくらとしたスコーン。それを、もふっと一口含むと、途端に程よい甘みが広がる。それにすっかり気を良くし、二口目を口に放り込む。

頬を膨らませて頬張る様は、とても貴族の令嬢のするものではない。公爵夫人の手前、それはまずいのでは、と分かってはいるが、目の前に出される甘い誘惑にはどうしても勝てない。それでも、僅かに残った理性で、最低限の作法は守り抜く。

「美味しいね」

ルネが微笑みかければ、セリアは満面の笑顔で頷いた。その様子に公爵夫人も笑みを深くする。

「よかったわ。貴方みたいな人がカールのお友達になってくれて」

「……？」

「いつも怖い顔ばかりするんですもの。貴方みたいに可愛らしい人がいてくれれば、私も安心だわ」

いやいや。夫人の危惧している通り、カールは学園でも恐ろしい形相で周りを睨んでいる。それは自分が居ようと居まいと変わらないう様に思うのだが。というより、何が安心なのだろうか？

「学園でカール達とはどんなお話をしているの？」

「あ、その……」

唐突な質問に、セリアは言葉に詰まった。

どうしよう。ここで正直に毎日国政についての議論を交わしています。といっても良いのだろうか。これがラン達ならばそれでも良いのだろうか、自分は違う。幾らカールの母親でも、事実を知れば眉を顰めるかもしれない。

しかし、カールは議論の時以外は基本無口だ。実際、カールが雑談に加わる事は殆ど無い。何を話している？と聞かれれば、答えられる事の一つなのである。

どうしようか、と迷っている所を、ルネが助け舟を出した。

「カールは普段通り、あんまりおしゃべりはしませんよ。相変わらずランと議論ばかりです」

「まあ。そうなの？」

それを聞いてイレネは少し責める様な視線をカールに向けた。

「カール。セリアさんは女の子なんだから、ちゃんと気を使ってあげないと」

その瞬間、その場にいた全員が、ギクリとする。気を使うもなにも、カールとは熱い議論を毎日に様に繰り広げているのだが。

「……善処します」

そう言う以外ないだろう。

「今日はとっても楽しかったわ。ありがとう。また来て下さいね」

「いえ。こちらこそ、ありがとうございました」

丁寧に礼を述べると、セリア達が乗り込んだ馬車は動き出す。

流石に六人も一度には乗れないので、二台用意して貰うことになった。後ろの一台にはイアン、ルネ、ザウル。そして、前方の馬車にはランとカール、そして二人の仲裁役であるセリアが乗っている。窓の外では夕焼けの色が辺りを照らしだしている。今から行けば学園に戻る頃には暗くなっているだろう。

「相変わらず、優しい人だな」

「本当。凄く楽しい時間だった」

あんなに親しげな人から、どうしてカールの様な人物が生まれたのだろう。未だに不思議である。チラリと横に涼しげな顔で座る人物を窺えば、再びジロリと睨み返されてしまった。

「女性には気を使うのではなかったのか？」

「これがもう少し女らしくなれば、考えよう」

からかうように言ったランに、カールが返した言葉に少し引っか

かりを覚える。

「カール。それどういう意味？」

「好きに解釈すればよろう」

くう、とセリアは押し黙る。事実であるだけに、何も言い返せない。

ふい、とそっぽを向く積もりで窓の外に視線を移すと、既に王都に入った所だった。王宮のある街だけあって、学園都市よりも幾分華やかだ。今は人も疎らだが、昼になればかなり活気に溢れているのだろう。

少しでも王宮を見れないかと視線を彷徨わせるが、馬車の小さな窓ではそれも叶わない。しかし、だからといって大人しく諦める事もせず、体を動かして上から下からと目線を変えてみる。

見えないなあ、と一生懸命に視線を動かすセリアだが、小石にでも躓いたのだろう馬車が軽く撥ねた事でそのまま窓に鼻をぶつける事になった。

「フグッ!!」

「セリア!？」

思い掛けない打撃にグッと涙目になりながら、痛む鼻を抑える。

「だから女らしくないと言ったのだ」

カールの一言に、ごもつともです、とセリアは頷く以外なかった。くうっと唸りながら、窓を恨みがましく睨む。理不尽な恨みをぶつけられた窓だが、微動だにする事はなかった。

そんなことがあっても、今まであまり王都に來た事の無いセリアだ。やはり物珍しいのか、セリアは窓の外を凝視する事を止めない。

暫くは大人しく、ジッと外を眺めていたのだが、ふと視界に気になる物が映った。一瞬だったが、確かに見えたのは黒い影と、地面に横たわる白い物体。まるで、人の様な……

「止めて!!!!!!」

急なセリアの叫びは御者にもしつかりと聞こえた様で、馬車は急停止する。馬車が止まったと同時に飛び出したセリアの背中に、ラン達はどうしたのかと声を掛けるが、セリアは走る事を止めない。前の馬車から、セリアが飛び出した事に驚いたのだろう、イアン達の声も後ろから聞こえる。

それでもセリアは構わず先程の場所へ辿り着いた。瞬間目に飛び込んで来たのは、地面でぐったりとしている女性と、その場から駆け出そうとする黒い影。女性の方は、胸元が真っ赤に染まっており、びくりとも動かない。服とは対照的に、体全体は血の気を失っていて、病的なまでに青白い。

外套と帽子に隠された影は、人が来た事に焦ったのか、そのまま走り出す。

「っ!!」

「セリア! よせっ!!」

後ろから叫ぶ友人の言葉も空しく、セリアは咄嗟にその影を追いかけていた。見れば分かる。女性の方は恐らくもう手遅れ。ならばあの影を捕らえなければ。

僅かに聞こえる足音と、その後ろ姿を頼りに角を曲がる。その途端、殺気を感じた。

「うっ!」

「チッ!!」

影によって突き出されたナイフを、紙一重で避ける。体を捻ったと同時に、ナイフを持った男が舌打ちするのが聞こえた。

自分に向けて突き出された刃を驚きで見ていると、それを握る腕に目を引く物が乗っていることに気付いた。影はそれを見られた事に気付いていない様で、尚も刃を突きつけて来る。

「セリア!!」

慌ててその場に走ってくる候補生達に、影も分が悪いと思ったのか、再び身を翻す。あっ、と思い追おうとした時には既に遅く、影はいつの間にかその場で止まっていた馬車へと乗り込み、路地裏に

消えて行った。

その姿を呆然と見送っていると、途端にグイッと肩を強く掴まれ、振り向かされる。

「お前は一体何を考えてるんだ!!」

「イ、イアン!？」

「考え無しに突っ込むな!! もしなんかあったらどうするんだ!？」

「あ、ごめん……」

言われて自分の失態に気付く。咄嗟だったので深く考えてはいなかったが、今の自分の行動は得策とは言えなかっただろう。実際に襲われたのだし、彼等の怒りももつともだ。

「そ、それより、さっきの人は……?」

「それよりって、お前」

はっ、と思い出したようなセリアの言葉に、イアンは呆れる。

「今ルネが警察に連絡している。が、もう息は……」

「………そう」

答えたランの言葉に、セリアは俯く。

予想はしていたが、やはり心苦しい。セリアの脳裏に青白い腕を伸ばしぐったりとしている姿が思い起こされる。間違いなく犯人はあの影だろう。

「胸を刃物で一突き。傍に大きな蜘蛛が転がっていたことから、例の事件と関係ありそうだな」

「クモ………っ!!」

その言葉に、セリアは先程己が見た物を思い出す。

「そうだ。クモ!!」

「っ!？」

一瞬だったが、確かに男の腕に刻み込まれていた物。丁寧な柄で描かれたつる草の中心に、まるで生きているかの様に居座る、一匹の蜘蛛。まるで何処かの紋章の様に、男の腕に彫られた刺青だった。貴族がよく使う紋章の様にも見えたが、蜘蛛を使用している家などあっただろうか?



## 蜘蛛 1 (後書き)

貴様が何を言った所で、それを立証する力はない。ならば、自分に火の粉が降りかかる前に、目を背ければ良いだけだ。それを理解して、何故まだ干渉しようとする？

それでも答えを追い求めるのなら、その先にお前が見る物を、今の場で示せ。

## 蜘蛛 2

現在、セリア達は図書室にて分厚い資料を手当たり次第に引っぱり返していた。

「でも、蜘蛛なんて聞いたことないよね」

「本当に見たのか？」

薄暗かったために見間違えたのでは、と疑うランにセリアは首を振って否定する。

自分は確かに見たのだ。男の腕に、蔓の中心で不気味にその存在を主張する蜘蛛を。

今回の事件。毎回現場に蜘蛛の死体が置かれていることから、絶対に関係していると言える。クルダスでは、貴族の紋章だけに許された短剣が蜘蛛の後ろに彫られていたので、どこかの家の紋章ではないかと考えたのだが。

「やっぱり無いぜ」

「こちらもです」

あの後、駆けつけた警察にも蜘蛛の紋章のことを話したが、あまり参考にはならないと言われた。先ほどルネも言った通り、蜘蛛を用いた紋章など聞いた事が無いからだ。

「今はもう没落した家でしょうか？」

「それにしても、腕に刺青を入れてるぐらいだ。ここ最近のものだと思うが」

図書室の貴族に関する資料や、蜘蛛を使った模様など、考え付く限りの資料はここ数日をかけてとりあえず全てに目を通した。しかし、未だにこれといった成果は見られない。

セリアは分厚い歴史書の最後のページを閉じて、深くため息を吐いた。

「見られる資料は大体見たけど……」

「とりあえず、今ある貴族で蜘蛛を使ってる家は無いようだな」



「…………やっぱり見間違い、だったのかな…………？」

落胆した様にセリアが言うと、ランは読んでいた資料をパタンと閉じた。

「あちらにも、目を通してみるか」

現在、マリオス候補生達は図書室の一角で資料を漁っていた。しかし、その場に居ることを一番望んでいる筈のセリアの姿が見受けられない。

図書室の一角に設けられた空間。そこは、一般生徒は勿論、一部を除く教師でさえ立ち入り禁止の場所。マリオス候補生のみ閲覧を許された資料や書物が立ち並ぶ場に、彼等は居た。この場には、書記によって記された王宮内や議会で交わされた議論内容や、可決されなかった法案など、国政に関することが詰まった資料が大切に保管されている。外部に漏らしても良いギリギリのラインまで詳しく書かれたそれらは、定期的に王宮から送られてくるものだ。

他にも、今はもう発行されていない図書や、かなり問題になった思想家の書籍など、あまり公の場に出されていないものも置かれている。

これらの資料は後にマリオスとなる者達の為にと用意されたものだが、流石に機密事項や国の貴族にとって都合の悪い部分は除外されている。しかし、実際の内情をうっすらとでも伺うには十分であった。その中に、今回のことに関係する手掛かりでも見つからないか、と模索している訳である。

セリアはこの場には立ち入り禁止であるため、その入り口から資料に目を通す候補生達を、期待と不安が入り混じった瞳で、ジッと見詰めていた。

ある意味、熱い視線を送ってくるセリアに、複雑な心境の候補生が三人。

「……普段からああいう風にこっちを意識してれば可愛げもあるのにな」

「流石に、それはあまり望めないだろう」

落胆するイアンに琥珀の瞳が優しげに向けられる。

「セリア殿は元から可愛い方ですよ」

「いや、別にそういう意味じゃねえんだけどよ」

こんな時に何を考えているのだ、と自分でも思ってしまうが、滅多に見ることの出来ないセリアの情熱的(?)な視線を、どうしても意識してしまう。

しかし、そこは流石マリオス候補生。邪念を捨て、もう一度手前の資料に集中し始めた。とはいっても、中々それらしき文献は見つからない。

「貴族じゃないのか？」

「しかし、短剣を用いているなら、何処かの家の紋章と考える方が……」

ウーン、と唸りながら考えてみるが、それらしい紋章については全く手がかりが掴めていないのも事実。こうなっては仕方が無い。出来る限りの資料に目を通そう、と力を入れた所で突然影が後ろに立った。

「うわっ！」

気配も背後に迫った人物が醸し出す、あまりにも冷たい雰囲気、その存在を真後ろに感じ取ったイアンは思わず声を上げた。

「カール！？何をされているの？」

「……興味深い物を見つけた」

ボソリと呟いたカールの手には、分厚い古ぼけた本が一冊。相当の埃を被っていたのだろう、まだ多少の塵を被っている。それに、カールが今出てきた角は、閲覧禁止書棚のかなり奥。比較的古い図書が保管されている場所だ。

それにしても、昨日の夕食時から姿が見えないと思っていたカー  
ルだが、何時からこの場所に居たのだろう。

「…………お前達も来い」

「あ、ああ」

埃っぽい場所へ赴いた事で不機嫌なのか、疲れが溜まっているの  
か、その口調は普段より荒い。

「あれっ!! どうしてカールが？」

突然現れた人物にセリアがキョトンと首を傾げると、鋭い視線で  
睨まれた。相当機嫌は悪いらしい。ひい、とセリアは縮こまるが、  
どうしても納得出来ない。何故自分は睨まれているのだろうか？

チラッと伺うように上げた目の前に、ずいっと開かれた本が突き  
出された。なっ、何事だ!？と混乱するセリアに構わず、冷え切っ  
た声が投げかけられる。

「お前が見たのはこれか？」

「へっ!？」

言われて改めてそのページを見ると、確かにそこには蜘蛛の紋章。  
絡み合う草の中心で、短剣を後ろに堂々と居座る蜘蛛は、自分  
が男の腕に見た刺青と同じ物であった。

ゆっくりとセリアが頷くと、カールはその視線を更に冷たくした。

「これはデナトワールの紋章だ」

「デ、ナト、ワール……？」

聞きなれない単語をセリアが復唱すると、カールは静かに頷いた。

温室のテーブルの上に置かれた、閲覧禁止書棚に長い事保管されていたらしい本を再び見下ろす。探し求めた筈の紋章だが、やはり何処か不気味に見えた。

「これは二百年程前にある集団が使用していた物らしい」

「集団……それが、デナトワール？」

セリアが聞けばカールが無言で肯定した。この言葉の少なさはどうにかならないものだろうか。などと若干ずれたことを考えながら開かれたページを捲ってみると、確かにデナトワールと綴られている。

かなり古いその本の他のページの内容にも目を通してみるが、デナトワール同様、セリアが聞いた事の無い言葉や情報が幾つも載っていた。そして、出来れば知りたくない様な事も。

「黒魔術、呪術のカルト集団。クルダス要人切り裂き事件の犯人。

王宮の一部を爆破計画。公爵邸夜会大虐殺事件。………これって」

「異なる事情から、クルダスの歴史上排除された件に関しての資料だ」

「そ、そうですか……」

セリアも初めて目にする物に、困惑した。多少読むだけでも、頬が引き攣る様な内容ばかりだ。異なる事情とは、事件が残酷過ぎるか、もしくは国にとって都合の悪い事件だという事だろう。国民の不安を煽る出来事、王族や政治家の尊厳を損なう様な不祥事が、歴史から揉み消された、という事だ。

「その資料の中に、蜘蛛を用いた紋章を掲げた集団の存在が記述されている」

「……狂信集団、デナトワール」

セリアと他の候補生達が、集団が蜘蛛の紋章を掲げている様を写し取った絵が描かれたページに目を走らせる。

蜘蛛を崇拝する集団、デナトワール。その紋章を体の一部に彫る事で、自らの信仰を証明した。

彼等は古代呪術の復興を望む者達であり、王都の何処かに密かに

集会場を設けていたと書かれている。その集会場で定期的にある儀式を行っていたらしい。

ページの横には、その儀式の場面を描いているのだろう、おぞましい光景が描かれていた。その余りの生々しさに、セリアは思わず顔を歪める。

祭壇の上に投げ出された女性の肢体。その上からナイフを振りかざす、神官の様な男。二人の周りを、平伏する人や、必死に手を伸ばす者達が囲んでいる。恐る恐る次ぎのページを捲れば、そこには胸に短剣を刺された女性と、その横に描かれた大きな蜘蛛。

「その集団によって、何人もの女人が犠牲になっている」

「儀式の生け贄、って奴か」

イアンが納得したように呟く。あまり馴染みの無い言葉に、セリアは眉を潜めた。

資料によると、当時は少なくとも三十人以上の貴族女性が犠牲になった様だ。しかし、何人もの死者が出ているにも関わらず、野放しにされている筈が無い。

「王国軍によって、デナトワールの一員は一人残らず秘密裏に処刑されたらしい。それを機に姿を消したとされていたが」

「えええっ!？」

驚いて続きに目を走らせると、確かにその様な事が書かれている。集会場で儀式を行っていた所へ、王国軍が強行突入し、一人残らず逮捕。その後すぐに全員が刑を受けている。

「じゃ、じゃあ。今回の事ってまさか……」

「二百年前に滅ぼされたデナトワールが復活したってことか？」

信じられない、と言った風にセリアと候補生達が顔を見合わせた。「ちよっ、ちよっと待って!でも、そんな!！」

「しかし、毎回蜘蛛の死体が置かれている事にも、これで説明がつく」

セリアがラン達とああでもない、こうでもない、と繰り返す間もカールは無言でいた。不自然すぎる程落ち着き払ったカールに、セ

リアが疑問を投げる。

「でも、カールはなんで……」

「蜘蛛は元々クルダスでは不吉とされている。それを使うなど、あまり公の場で知られている紋章でない事は考えれば分かる事だ」

古くからクルダスで蜘蛛は、王族への反逆、国の滅亡などの意味があり、不吉とされてきた。今まで紋章にも使われなかった理由はそこにある。言われてセリアも、なるほど、と頷いた。

しかし、どうもそれだけでは納得し切れないのも事実。まだ色々聞きたいと思うセリアを、カールが冷めた瞳で見下ろした。

「これ以上はお前が知らなくて良い事だ。要らぬ好奇心で面倒事に介入する必要もあるまい」

「えっ!？」

カールが言うには、あまりにもあり得ない言葉に、セリアだけでなく候補生達も目を見開いた。

まるで、これ以上首を突っ込むなど言っている様だ。彼は何か知っているのだろうか。確かに、二百年前に滅んだ筈の狂信集団など、あまり関わりになりたいとは思えない。だからといって、カールが言う様に、何もしなくて良いことだろうか。

セリアが脳内でグルグルとカールの言葉の意味を理解しようとしていると、カールが急に立ち上がり資料を閉じた。

「なっ! えっ!？」

「あまり長い間持ち出す事は許可されていない」

閲覧禁止図書は、それぞれ理由があり閲覧禁止と割り振られた。

それを、たとえマリオス候補生でも、保管場所から長時間持ち出すのは好ましくはない。

さっさと温室を出ようとしたカールをセリアが慌てて追う。彼は明らかに何か知っている風であった。それに、自分でも納得出来ない事が幾つかある。カールの言う通り、要らぬ好奇心、かもしれないが、知っていれば何か自分にも出来るかもしれないではないか。

「カール!!」

カールに続いて転がる様に温室を出て行くセリアを、イアン達も追おうとしたが、それを止める者が居た。戸惑う候補生達の姿に、既に温室を出てしまったセリアは気付いていない。

前に立ちふさがった人物に、どういう事だ？という視線を向けると、その人物は先程カールから聞いた事を説明する為に口を開いた。

「あのう……………」

「……………」

先程から何度かカールに言葉を投げかけているのだが、うんともすんとも言わない。時折冷めた視線を寄越すだけで、答える気は微動も無いらしい。静かに歩き続けるカールを、セリアはそれでも追いかけた。

そんな事をしている内に、あっという間に図書室の閲覧禁止書棚が保管されている場の入り口まで来てしまった。ここから先へは進めないセリアは慌ててその場で足を止める。保管場所の中へ躊躇い無く入った所でカールがやっと振り向いたのでセリアはホッとした。

「言いたい事があるのなら来い」

「えっ！？ いや、でも……………」

ここはマリオス候補生以外は立ち入り禁止であり、当然それには自分も当てはまる。オロオロとしているとカールが鼻で笑うのが聞こえた。

「今更、お前は校則如きに縛られはしないだろう」  
「うっ……………」

確かに、今まで何度も夜間の外出など、散々校則を無視した行動を取って来た。それと比べてしまえば、立ち入り禁止の場に少し入るなど、可愛いく聞こえてしまうだろう。本当に今更であるのだが、やはり少し後ろめたい。

というより、校則如きとは、一体何様だ。と突っ込みたくなった。思っている間にも、カールはどんどん中へ進んでしまっている。まずい、と思った時には反射的に一步踏み出してしまっていた。

カールが戻るのを待てば良いだけの話なのだが、セリアも咄嗟だったのでそこまでの考えは回っていない。こうなったら自棄だ。とセリアは急ぎ足で薄暗い中を進んで行った。

「カール」

追いついた時には、カールは既に資料を棚へ戻している途中だった。呼びかけるとすぐに冷ややかな視線で振り向かれたので、一瞬怯んでしまうが、取り敢えず質問はして良いという意味表示だろう、と解釈する。

「でも、何でデナトワールの紋章に短剣が？」

クルダス内で短剣は貴族、または王族を表す。もし、ただの狂信集団ならば、その象徴は使用される事を許されない筈だ。例えどんな団体であるにしろ、紋章は自分達を表す物であるのだから、それなりの誇りはある筈。崇拜している蜘蛛まで記しているのだ。ある意味自分達にとって神聖とも言えるそれに、使ってはならない模様を用いるだろうか。

「デナトワールは、始めはある貴族が独自で行っていた。その後も殆どの信者が貴族出身だった事から、その紋章が使われ続けた様だ。その事も、この件が揉み消された理由の一つであろうな」

「そうなんだ。でも……」

「まだ何かあるのか？」

呆れた様な視線を向けて来るカールに、セリアはもう一度向き直る。

「どうして、今更……」

「……」

「二百年も前の集団なんでしょう？ 処刑された人の子孫だとしても、復活した理由が分からない」



「……………お前はと思う」

質問を質問で返されてセリアは戸惑ったが、自分の素直な考えを述べた。

「誰か……………デナトワールが存在していて、貴族女性を殺害しているのを都合が良いと思った誰かが、利用するために作った」

「……………」

「あまり考えたくは無いけど、この事件の被害者が殺害される事によって、誰かが何らかの利益を得られるのなら、デナトワールは利用するのに丁度良いに決まってる。狂信者達に動悸は必要無い。生け贄に利用する人だけ指定すれば、自分は直接手を下さずに勝手に事が進む。だから……………っ!!」

いきなり腕を強く引かれたかと思うと、柵に背を叩き付けられていた。突然の衝撃に一瞬息が詰まる。ケホッと咳き込むと、カールの顔が異様に近い場所にあった。

「なっ!?!」

「一度だけ言う。お前はこの件を降りろ」

「っ!?!」

身が竦む程冷たく発せられた言葉と共に、その吐息を感じる。引かれた腕はカールの手で柵に縫い付けられ、全く動かせない。もう片方の手で顎を持ち上げられ、顔を背ける事が出来ず、無理矢理視線を合わせられる。あと少し近づけば、唇が触れてしまいそうな距離だ。

咄嗟に身を引こうとしたが、背後には柵があり後ろには下がれない。腕も一本取られてしまっているので、全く動けなかった。

一体どうなっているのだ!?!と状況について行けない頭が混乱するセリアだが、カールに言われた言葉に更に目を見開いた。

「これ以上関わるな」

「な、なんで…………」

静かに言われ、本当は恐ろしくて仕方がないのだが、それよりも

カールの言葉に納得が出来ない。なぜ急にこの様な事を言うのだろうか。

そう思ってる間にも、質問に答えようとしないうるカールは、増々顔を近づけて来た。

まずい、このままでは確実にまずい。

状況を理解していない頭でも、あり得ない程近いカールとの距離に多少の危機感を覚えたらしい。というより、カールの表情が恐ろしくて仕方ないだけなのだが。

「わっ！まっ！」

「お前を、このままいいようにする事も出来るのだぞ」

「は、はあ！？」

いいようにとはどういう意味だ！まさか、このまま殺すということか。今日の、なんだかあり得ないカールなら間違はなく人の一人くらい殺せそうである。このままでは自分の命が危ない。

と、セリアはかなり違う意味でカールの言葉を捉えたのだが、結果的にはカールが危険人物、と意識する事には変わらないので、取りあえずは良いだろう。

セリアが自分の、色んな意味での身の危険に怯えたり驚いたりしている間にも、カールの顔は確実に近づいている。少し口を動かすだけで唇が触れてしまうだろう距離にセリアの顔も青くなっていた。

「ちよっ！なっ！？」

「逃げたければ逃げろ」

「はっ？」

「私はそれほど力を入れている訳ではない。嫌なら逃げれば良いだけだ」

そうは言うが、先ほどから腕は引いても押しても全く動かないのだ。もう片方の手でカールを押し返して見ようとしたが、こちらでも微動だにしなかった。剣で手合わせをした事はあっても、素手で力比べなどした事が無い。これで力を入れないというのか。

だとしたら、どんな怪力だ。

「その程度の力しかないこの細腕で、何ができる」

「っ！！！」

「己の地位すら確かではないお前が、いったい何をしようというのだ」

「……………」

カールの言いたい事を漸く理解したセリアは、言葉に詰まった。彼等の様な実力が、自分には無い。肉体的な力も、この通りだ。片手で顎を固定されただけで首を振ることすら出来ない。いくら剣が得意だといっても、普通の令嬢より力があるといっても、所詮は女。生物的に、生まれた時から男性以上の腕力を得る事を許されなかった生き物だ。

そして力だけでなく、自分には地位すらない。この国では、まだ女性の権限は認められているとはいえないだろう。幾ら貴族の令嬢だと言っても、所詮は家督を継ぐ前の学生。しかも、自分に弟が生まれてしまえば、はつきり言って用無しの存在だ。万が一危機的状況に陥っても、相手に行動を思いとどまらせるだけの後ろ盾を持っていない。

家督を次いでいないとはいえ、自分とは違い、彼らはその跡取りの地位を揺ぎ無いものになっている。しかもマリオス候補生だ。候補生に選ばれるだけの力を備えた事を証明している。

今までの候補生は卒業の後、何らかの形で大きな影響力を得てきた。それほどの可能性を秘めた彼等に、取り入ろうとする人間はいても、好んで敵にしたいと望む者は少ないだろう。

そんな自分に、一体何が出来たのだ、とカールは言いたいのだ。いつかの様に闇雲に飛び込んで、厄介な事に巻き込まれ、また彼等の足手纏いになるのかと。

「カールの言う通り、私には何の力も無い」

「……………」

「でも、足掻いてもがいて、それで小さな波くらいは立てられるかもしれない。本当に小さな波かもしれないけど」

「……………」

カールは無言のままだ。それが逆に恐ろしくて更に体が震えてしまふのだが、セリアはそれでも続けた。

「例え小さくても、それで少しでもこの事を中心に近づけるかもしれない」

「その波にお前が乗ると？」

「乗るのは私じゃないかもしれない。もしかしたらカール達かも。でも、私はそれで良い。カール達が少しでも解決に近づく手助けさえ出来れば」

「……………」

「前に言ったでしょ。私は国の為に、候補生の踏み台になりたいって」

「国のためなら、その身がどうなっても構わないということか……？」

「そうは言っていない。でも、それがクルダス国の、王陛下の為になるなら、私に悔いは無い」

「……………」

キツとこちらを見据える瞳に、迷いは無い。凜と言い切る様は、初めてあった時を思い起こさせる。ここまでしても引かないのだから、何を言っても無駄であろう。そう理解すると、カールは掴んでいた腕を放した。

「ならば、聞く覚悟はあるか？お前の場合、後戻りは叶わなくなるぞ」

「……………やっぱり、何か知ってたのね」

カールの脅しよりも、彼が何か重要な情報を持っている、という

事が気になる。そんなセリアを見て、カールは再び呆れた表情を見せたが、諦めた様に話し始めた。

「お前の言う通り、ただカルト集団が復活しただけではないかもしれない」

「……………」

## 蜘蛛 2 (後書き)

聞けば聞く程、今回の事が何を意味しているのかを思い知らされる。例え我々が何を思った所で、セリアを巻き込まないなど出来ないのか？安全な場所を守られている、という事はないのだろうか。

ならば、私に何が出来る。セリアを、守るためには……

## 蜘蛛 3

「確かに、二百年前の集団が、なんのきっかけもなく返り咲くのは不自然だ」

「それって……？」

早く先を聞きたいと焦るセリアを尻目に、カールは王宮議会で交わされた議論についての資料を幾つか手に取って行く。

「殺された女人の家に、何か共通点が無いか調べたが、興味深い事が分かった」

そういつてカールは更に奥へと向かう。閲覧禁止書棚の間を進んでいった先には、小ぢんまりとした机と椅子が用意されていた。その上に広げられた資料を手取る。カールの次の言葉を待ってみたが無言でいることから、自分で調べろ、という事だろうか。

初めて触れる王宮内の様子が書かれた資料に、セリアも少し緊張してしまう。ここに纏められている事は、実際に議会で交わされた言葉だ。やはり、何処かずっしりとした重みがある様に感じる。

慎重に持ち上げると、その指で丁寧一枚一枚資料を捲っていた。

ザツと目を通して分かったことは、渡された資料のどれもに次期王の座に就く人物に関しての言葉が少なからず交わされている事。それが、ちょっとした反発の声だったり、大きな揉め事であったりと様々だが、どれもにヴィタリー王弟殿下の名が出ていた。

一瞬で脳を過ぎる嫌な予感に、背筋を冷や汗が流れる。

セリアのその表情を読み取ったのか、カールは新聞記事の切り抜きを纏めた物を差し出す。そこには、ここ最近で犠牲になった者の

名前が載っていた。

恐る恐る先ほどの資料と照らし合わせると、セリアが疑った事を確定付ける事実が目の前に突きつけられる。

「これ……………」

「何らかの形で王弟殿下が王位に就く事に反対の意を表した家の者が、犠牲になっている」

今回、デナトワールレの犯行と思われる事件による被害者は現在七人。その内の六人は夫や父が王宮議会の一員だ。そして、全員がヴィタリー王弟殿下の王位継承に異を唱えている節が見られる。

ならば、その家の者を殺害したのはその事に対する報復か、意に従わぬ者への圧力か。

「で、でも、いくらなんでも、まさか……………」

「まだ決まった訳でなくとも、無視は出来まい」

カールが冷ややかに言ってみせる。確かに、まだ確証は無くとも、関係無しと決め付ける事は出来ないだろう。というより、関係が無かったら可笑しい。

信じられないといった風に、セリアは驚きで資料を凝視していた。

デナトワールレ、ヴィタリー王弟殿下、王宮議会、王位継承権

今日聞いた言葉だけでも、十分自分達が何に首を突っ込もうとしているかを予感させる。

「厄介、ですね……………」

「ああ」

自分達ただの学生が闇雲に手を出したところで、それこそ返り討ちにあう可能性は十分にある。確証も無ければ証拠も無い。まだ推測の域を出ていない考えを突きつけた所で、何の解決にも至らない



だろう。むしろ、こちらに目をつけられて、動き難くなるだけである。

「だからセリアを追い出した訳か」

「うん。カールが場合によっては話すかもしれないけど」

「カールが……」

もし、カールが下した判断ならば、セリアが今回の事に介入することを頭ごなしに反対はしない。悔しいが、今までカールが出した結論で、間違っていたことは少ないからだ。例え、その過程でどれほどの犠牲を払おうと、それ以上の結果が返ってくる。カールの冷静な判断には、候補生達も絶対の信頼を寄せているのだ。

しかし、セリアにはこの件に関わりになってほしくない、というのが正直な気持ち。今後自分達がどの様に動くかはまだ分からないが、何らかの行動には出る積もりでいる。その時に、セリアを巻き込みたくはない。あの少女には、安全な場所で護られていて欲しい。それが、例え彼女の意思に反する事であっても。

もし、今回の事を聞けば、何が何でも関わろうとするだろう。セリアとはそういう少女だ。それはもう、嫌というほど分かっている。だからこそ、カールには是非とも誤魔化し通して欲しい。

そしてなによりの問題は……

「絶対に動かぬ証拠を見つけるまで、下手に動けないってことよね」  
「のわっ!!」

ひょっこりと背後から現れたセリアに、その場にいた全員が飛び上がって驚いた。

はっとして振り向けば、なにやら闘志を瞳に宿したセリア。続いて後ろに立つカールに視線を移せば、こちらと目を合わせようとはせず、どこか不機嫌だ。

これは、つまり、あれであろう。

「やはりこうなったか」

「文句でもあるのか」

ため息と共に吐き出されたランの言葉に、カールが片眉を上げて

言い返した。

ランも、決して文句があるわけではない。ただ、こうなっては欲しくない、という希望を打ち砕かれたただけだ。

「セリア、下手に動けないって？」

「だって、私達でも調べれば分かった事よ。他に誰も気付いてない筈がない」

男の腕に蜘蛛の紋章を見た事を抜きにしても、王弟の王位継承の件に関係しているだろう事は、議会での内情を知っていれば誰でも容易に推測出来ることだ。それでも、今もデナトワールが野放しにされているとすれば、考えられる理由は一つ。

「内通者がいるか、それなりの権威の保持者が後ろにいると考えていいはずよ。王宮や議会内、警察にも口出し出来る誰かが」

これだけ何人も犠牲者が出ていて、未だに手掛かりがゼロだとは考えにくい。誰かがその権限を持ってしてなんらかの手回しをしていると考えられる。

それならば、物的証拠。誰にも握りつぶされない、文句のつけようがない証拠を突き出す他無いだろう。

そして、それを見つけ出す前に、こちらが潰されては元も子も無い。だからこそ、貴族や警察に聞きまわったりなどの目立つ行動は避けた方が良い。

その姿を見て、候補生達は頭を抱えなくなった。どうしてこうも変な所は鋭いのだ。悪いことでは無い筈だが、それが時折恨めしくなる。肝心な時にはこれでもか、という程鈍いくせに。

こうなってくると、もうセリアはどっぴりと巻き込まれることは免れないだろう。鈍臭い者であったなら、なんだかんだとこちらで手を回して早い段階で退場させることも可能なのだろうか。

しかも、妙にやる気満々である。候補生達にとっては好ましくない事態だが、先ほどからセリアの瞳に宿る闘志は、冷める様子が無い。

よし、頑張ろう。と拳を上げるセリアを尻目に、候補生達は全員

大きく息を吐いた。

「やっぱり、王都にあるって書かれてる集会場しか無いと思う」

「賛成です。そこならば、なんらかの痕跡は残っている筈ですから」  
現在、セリア介入阻止に失敗した候補生達は、温室にて資料を手  
に会議中である。セリアのことに關しては、もうこうなっては仕方  
無い、と諦めた。

「王都はここから馬車で一時間だ。行けない距離ではない」

「でも探すっていつでも広いぞ。一体どんな物なのかも分かってな  
いのに、闇雲に走り回ったってそれこそ見つかりっこないだろう」  
ウーンと悩む候補生達だが、やはりまだ情報が少なすぎる。何せ  
二百年前の集団だ。しかも歴史からその存在を排除されている。集  
会場に關しても、王都にあった、としか記述されていない。

「とにかく、今日はもう遅いから、明日一度行ってみない？」

いきなり王都へ行った所で何が見つかるとは思わないが、一度は  
出向く必要があるだろう。

ルネのその意見に一同が賛成すると、その場はとりあえず解散と  
なった。

候補生達が談話室にて、セリア抜きの話し合いを行っているのは、  
もう必然としか言い様が無いだろう。

彼等が最も気にかけている事は、セリアの安全。その一つで  
あった。

「どうすんだ？今回は女ばかりが殺されてるんだぞ」

「下手に干渉すれば、誰であろうと危険な事に変わりはあるまい」それはそうである。しかし、狙われやすい、という点ではセリアが一番危険だろう。生け贄に選ばれるのは女性のみ。狂信者達がセリアにその矛先を向ける可能性は十分考えられる。

「しかし、だからといって突き放しても、きつとお一人でまた……」

彼等の悩みはそこにあった。自覚が皆無のセリアだ。例え自分達が安全な場所に押し込めようとしたところで、それならばと自分で突っ走って行ってしまう。なにしろ行動が予測不能な為、何をしても無意味に終わってしまうかもしれない。

だからと言って、自分達の傍に置いて、それはそれで危険なのだ。

頭を抱える候補生達に、カールが冷たく言い放つ。

「あれが決めた事だ。その結果がどうなろうと、あれにもその覚悟はある」

「だから、それが問題だって言ってるだろう」

覚悟があるからこそ問題なのだ。こちらはセリアにそんなこと望んではいない。彼女の力は認めている。守られるだけの普通の娘でないことも分かっているのだ。しかし、それとこれとは別の問題である。自分達は彼女を危険にさらしたくない。やはり、彼女はまだ自分達とは違うのだ。

「お前達も観念しろ。何を言い聞かせた所で、それを聞くような耳を持つてはいないだろう」

「そうはいってもだなあ……」

セリアが何を言っても聞かないことは彼らも重々承知しているのだが、やはり何とか出来ないものか。

「守る……」

渋るイアン達とカールとの間でそんな会話がなされていたが、ランがポツリと呟いた。それに驚いて他の者も振り向く。

「どんな状況になっても、私はセリアを守る。絶対にだ」

言い切ったランの姿に、イアン達は驚いてしまう。以前ならばセリアを巻き込む事に誰よりも反対しただろうに。やはりこの間の事で、ランの中で何かの区切りがついたのかもしれない。

オルブライン邸に現れた御者が、どうしてセリアを狙ったのかは結局のところ分からなかった。犯人も分からずじまいなため、不安は残るし、歯がゆい気持ちもある。決して喜ばしい事態ではなかった筈だが、それを見事に跳ね除け自分達の下へ戻ったセリアを見てランは感じたのだ。栗毛の少女の確かな存在を。

「それは、俺も同じだ」

「自分も、この身を捧げてでもセリア殿は守ります」

結局はそういうことだ。セリアが干渉することを止められないのであれば、自分達が全力で守るしかないではないか。いくら考えたところで、それ以上の良策は思いつかないのだから。

「…………あのなあ、セリア」

昨晚、セリアを守ると決めたばかりの候補生達に、早くも苦難が訪れた。その元凶である当の地味な少女は、縮こまって本当に申し訳なさそうにしている。

「離れるなって言ったよな」

「勝手な行動も慎むようにとも伝えた筈だが」

イアンとラン。双方の睨みを一身に受けて、セリアは内心で更に悲鳴を上げた。出来れば助けたくないかと、チラリとザウルを伺うが、その琥珀の瞳が静かな苛立ちを秘めていたので途端に目を逸らす。

カールは呆れた様子で冷ややかに見下ろしてくるし、ルネは困り

顔で笑っているしで、申し訳ないとは思うものの、本当に勘弁してくれと言いたい。

昨日の予定通り、候補生達は王都へ来ていた。授業が終了してすぐに学園を出たので、とりあえず少しでも見て周ろう、と考えていたのだ。が、その計画は早くも無視される事になる。

つい先日、ローゼンタール家の帰りに通ったとはいえ、セリアにとって実際に王都を訪れるのは初めての経験だった。慣れていないくせに、妙な気合であちこちをウロチョロと動き回るのだから手に負えない。候補生達は、最初こそ目の届く範囲に居たセリアに安心していたが、いつのまにかその姿を見失った事に気づいた。

一言で説明すると、迷子である。

正体不明の頭痛を覚えながら、候補生達は来た道を引き返していた。

そうして搜索すること一時間。やっと見つかったセリアは、友人を探しているのか、フラフラと裏通りへ入ろうとしているところを捕獲された。どうして候補生達がそんな場所へ居ると思うのか不思議で仕方がないが、見つかった事に取り敢えずは安堵する。

そして現在セリアは、自業自得だが、キツイ説教を食らっていた。

「とにかく、これからは大人しく、頼むから大人しく付いて来い」

何だか大人しくを二回言われたが、セリアは何も言い返せない。

グウツと押し黙り無言で頷いた。

「結局、手掛かり無しだな」

「やはり、そう簡単に見つかりはしないか」

学園に戻ったセリア達は、一日探しまわって収穫が無であることがつくりと項垂れていた。まあ、情報も何も無い状態から、それ

がどんなものか明確ですらない存在を見つけ出すには、王都は広過ぎるだろう。

まさか搜索一日目で何かが掴めるとは思っていなかったが、多少の落胆は仕方ない。

「セリアは何か気付いた？」

「ううん。私は王都も初めてだから」

この中で王都が初めてだった人間はセリアのみだ。他は、何度か赴いた事があるらしい。カールなどに至っては、王宮まで足を踏み入れた事があるという。

「じゃあ、明日はもう一度、閲覧禁止書棚を調べる事にしない？」

王都へ赴いたセリア達が一見して感じたことは、そこはまさに平和そのものであるということ。最近続く貴族女性殺害の事件に緊張感はあるものの、人々の生活はあまり影響されていない様だ。そんな場所へ、情報が皆無の状態でもう一度行ってみた所で、結果は同じだろう。

ならばそれが得策だ、とルネの意見に一同は賛成する。しかし、それに渋い顔をする者が一人。閲覧禁止書棚に近づく事を許されていない人物、セリアである。もう既に一度入っているとはいえ、そう何度も堂々と立ち入る訳には行かない。

「セリアも一緒に図書室に行こう」

「間違っても、一人で王都に行くとは言わない様に」

イアンに言われてセリアはうっ、と怯んだ。どうして今まさに考えている事がバレてしまったのだ。

ギクリとするセリアを見て、候補生達は再び呆れた様にため息を吐いたのだった。

### 蜘蛛 3 (後書き)

また、セリアが一人で行動しない様にしっかり見張っておかないと。気付くとすぐに勝手に突っ走ろうとするから。危ないっていうのは分かってるんだから、もう少し身長に考えてもいいと思うんだけど。

でも、そんなにのんびりしてもいられないんだよね。だって、また………

セリアは強いって分かってるけど、どうしても心配なんだ。だからね、セリア。お願いだから、一人で無茶はしないで。



## 蜘蛛 4

大人しくしている、勝手な行動は慎め。朝から言われ続けた言葉を思い起こし、セリアは深いため息を吐いた。

図書室では、パラパラと紙を捲る音があちらこちらから聞こえてくる。閲覧禁止書棚の奥で、資料という資料をひっくり返している候補生達とは対照的に、セリアは棚の間を徘徊していた。グルグルと図書室を歩き回るセリアを、監視の積もりなのか、時折候補生の誰かが探しに来る。その度に何だか申し訳ない気持ちになるセリアだが、大人しくしているから、と言っても信用には至らなかった。

やはり、歴史から排除された集団の存在が、学園の図書室に置いてある本に堂々と記されている筈もなく、関連していそうな資料は未だに見つけられていない。しかし、フロース学園の図書室はクルダスでもその蔵書数を誇れる大きさであり、情報も多い。ここで見つけられないのなら、何処へ行っても同じであろう。

唯一の手掛かりも、閲覧禁止書棚の端でカールがやっと見つけた本の中の、ほんの一部に載っていた程度だ。セリアが探して情報が得られる可能性は、限りなく低いのだが、それでも一応目は通す。

しかし、やはり今回の事に関係していそうな書物は一つも無い。二、三度分厚い歴史書を取り出し、隅から隅まで目を走らせてもみたが、やはりデナトワールの名前は出て来なかった。

こうなっては仕方が無い。

セリアは悩んだ末に、一つの決断を下した。そして図書室を出るべく扉へ向かう。

「セリア」

「わっ!!」

「何処へ？」

セリアの行動に気付いたのだろう、ランが背後から声を掛けた。  
「また何か企んでいるのか？」

「た、企むって人聞きが悪い。私は少し調べたい事があって……」  
「何処へ？まさか、王都へ行く積もりでは」

「そ、それは無いわ。断じて。私もそこまで無謀でも、考え無しでもない」

セリアが透かさず返した言葉に、ランは渋い顔をした。考え無しはともかく、無謀がそのまま性格に染み付いている様な人間の台詞では無い。自覚が無いのが、また恐ろしい。

しかし、どうやら学園の外まで出る様子は無いようなので、取り敢えず安心する。

「では、何か分かったらまた知らせてくれ」

「うん。じゃあ」

ランの言葉に深く頷くと、セリアは足早にある部屋を目指した。

先程の勢いは何処へやら、今セリアは大いに縮こまっていた。

「廊下はあまり走らない様にと、言われた事はないのですか？」

「うっ。それは……」

ジロリと黒縁眼鏡に睨まれてしまい、うっと怯む。

気持ち先走り、無意識の内に早足になっていたセリアは、丁度目的の場から出て来たハンスに出会ってしまったのだ。

ここ最近目立つセリアの不相応な行動に不満が溜まっているハンスは、尚も厳しい目でその犯人を見下ろしている。眉間には皺がくつきりと刻まれており、かなりご立腹のようだ。カールの様な冷たさは無いものの、ジロリと睨む視線はやはり恐ろしい。

自分に非があるのは分かっているのだが……

「貴方には、もう少し慎みを持って行動して欲しいものです」

「あの、その……」

「それが難しいのならせめて、普段から落ち着きを持つ事を心がけなさい」

「は、はあ……」

その後も、くどくどと説教じみた言葉を並べようとしたハンスだが、いつも以上にそわそわしているセリアに気付き、眉を顰める。不適當な行動を注意しているというのに何だその態度は、と若干苛立つが、何かしら事情があるのだろうと無理矢理納得した。

「それで、何をそんなに慌てていたの？」

「あ、いえ。その……ヨーク先生はいらっしゃいますか？」

「ヨーク？ 彼なら、私用で外出していますよ」

「え、えええええ！？」

そんなあ、と嘆くセリアに、ハンスは更に眉間の皺を深くする。つい今しがた慎みと落ち着きを持って、と言ったばかりだというのに。しかし、セリアがその事に気付く筈もなく、焦った様にハンスに詰め寄った。

「い、何時ごろ戻られますでしょうか？」

「それは分かりません。……何かあったのですか？」

「あ、その、えっと……歴史の事について少し質問がありました……」

ヨークの担当科目は歴史だ。しかも、マリオス候補生クラスの授業も手掛ける程優秀な。彼ならば、二百年前の事について何か知っているかと思ったのだが。しかし、不在ならば仕方ない。

がっくりと肩を落とすセリアに何を思ったのか、ハンスは黒縁眼鏡の位置を正すと、軽く息を吐いた。

「それは明日まで待つように」

「は、はい」

「君はすぐに戻りなさい」

そういうハンスに、半ば無理やりな形で職員室から追い返されてしまった。完全に当てが外れたセリアは、そのままトボトボと廊下

を進む。その姿を、少し不審な眼でハンスが追っていたのだが、それにセリアが気付く事はなかった。

毎日新たな報を伝える新聞で、この日人々の注目を最も集めた一面があった。ある子爵家の令嬢が行方不明になったのだ。それを聞いた誰もが思った。

またか。と

「行方不明になったのはダムレス家から、か……」

「あったぞ！」

ランが開いた資料は、半年前の議会の記録。それに目を通すと、やはり王弟殿下について少ないが言葉が交わされたとの記述がある。どうも子爵は、国王即位後もその兄弟が王位継承権を保持し続ける事に反対したようだ。

更に読み進める内に分かった事だが、ダムレス子爵は、議会内でもかなり信頼が置かれている存在らしい。もう何年かすれば、議会内でもそれなりの権威を得るだろうと噂されている。

「これは、悠長にやってる場合じゃないんじゃないか」

「無事保護出来れば、その証言が動かぬ証拠になるかもしれない」  
カールの言葉に一同が頷いた。もしかしたら、ダムレス家令嬢から強力な証言を得られる可能性もある。少なくとも、実行犯を捕らえるくらいは出来る筈だ。

しかし、肝心な事はまだ殆ど分かっていない。結局、図書室の資料からはこれ以上詳しい事は分らない様である。いくら引っ掻き回しても、あの古びた資料以外からは、狂信集団の名前は見つからない。

ならば残る手は王都を手当たり次第に探すだけとなった。

これから王都へ行ってみようか、と校門を目指していた所で、候補生達を呼び止める声があった。

「こ、候補生様！」

「……！？」

「あの、校長が皆様に集まって欲しいと……」

「そうか……わざわざすまない」

「へっ！？い、いえ！」

ぼっ、と頭を下げると、候補生達を呼び止めた生徒はホッとした様に退散する。

「セリア、悪いが行かなくては。すまない」

「ううん」

ランに謝られセリアは首を横に降った。出来るだけ早く王都へ、という思いはあるが、校長の呼び出しでは仕方ない。それに彼等が謝ることで無い筈だ。

すぐに戻る、と言って歩いて行く背中をセリアは静かに見送った。そこでふと思いつく。この間に、昨日会えなかったヨークにデナトワレの事を聞きに行けるではないか。彼等もそう直ぐには出て来られないだろうし、実に有効的な時間の使い方である。

そう思い立ったら、即行動。セリアは校舎へ向かって歩き出した。気持ちが先走り、昨日と同じ様に廊下を急ぐ。キョロキョロと見回していると、探していた人物の後ろ姿を見つけた。

「ヨーク先生！！」

「セリアさん？」

突然かけられた声にヨークが驚いて振り向くと、慌てて走りよって来る栗毛の少女。かなり真剣な表情で迫って来るものだから、ヨークもぎょつとしてしまった。いったい何事だろうか。

「あの、ヨーク先生。その、お聞きしたい事があって。デナトワレの事について何かご存知ではありませんか？」

「はっ！？」

周りに人がいない事を確認したセリアから出た言葉に、ヨークは

思わず聞き返してしまった。

「い、今………何と？」

「デナトワールです」

久しぶりに耳にするその言葉を唐突に発したセリアを、ヨークは驚きに目を見開いて見詰める。普段から色々と、自分では考えつかない様な事を発言をする少女ではあったが、過去の狂信集団の名が出るとは、思っていなかったのだ。

「セリアさん………勉強熱心なのは良いことですが、それが一体どういうものを理解しているのですか？」

ヨークの真剣な問いにセリアはゆっくりと頷いた。それを見てヨークも納得する。セリアの表情から、国の都合でもみ消された存在を面白半分ではじくり返そうとしている訳ではないのだろうことは分かった。

その上で聞いてくるならば、教え子の質問に自分も誠意を持って答えねば。

「それで、何を知りたいのですか？」

「なんでもいいんです。使用していた集会場の場所や、一員だった貴族でも」

そこまで知っているとは、一体何をしようとしているのか。本来なら、一生をその存在すら知らないまま過ごしたのだろうに。

セリアの真剣な瞳に見詰められたヨークは、そのまま少し考え込む。いくらなんでも、二百年も前の集団の事だ。少し脳内の記憶を掘り起こさなければ、そうは情報も出て来ない。

顎に手を添え、正に考え中の姿勢を取ったヨークを、セリアも緊張した面持ちで見守る。

やがて、何かを思い出したのか、そういうえば、と言うヨークの言葉にセリアはジッと待った。

「デナトワールの一員の事は分かりませんが、集会場には教会を使っていたと聞いた事があります」

「教会……？」

「ええ。王都にある教会の地下を集会場として、同時に聖地としていたみたいです」

「そ、それは……」

それは凄い情報ではないか。二百年前と同様に、今のデナトワールも教会を集会場に行っている可能性は高い。地下ならば少し探し難いかもしれないが、それでも闇雲に探すよりも、遥かに見つけやすい。

セリアはバツと頭を下げヨークに礼を述べると、今得た事実を候補生達に知らせるべく走り出した。その後ろ姿をヨークがポカンと呆気に取りられながらも、見守っていた。

先程校長室に呼ばれた候補生達を目指して、セリアは階段を駆け上がっていた。校長室というだけあって、それは上の階に設けられている。高みの見物にはまさにうってつけの場所、というべきか。急いで上っていたセリアは、突然目の前に現れた影に気付かず、そのまま突進してしまった。

「ふわうっ！！！」

「危ない！！」

セリアはバランスを崩しかけたが、反射的に足を踏ん張り何とか難を逃れる。手は宙を掴み、かなり腰を引いた格好のままホッと安堵していると、ジロリとした視線を感じた。誰かにぶつかったのだと瞬間的に思い出すと、その人物を確認する為に上を見上げる。すると、そこには呆れた様な、安堵した様な、かなりご立腹の様な。とにかく、眉間にこれでもかと皺を寄せた、黒縁眼鏡のハンス。

階段からの転倒は免れたが、彼の睨みは受けなければいけない様だ。

「ハ、ハンス先生！すみませんでした」

「君は……その様に走り回るなど、何度言えはその意味を理解するのですか？」

慌てて姿勢を正し謝罪すると、案の定冷たい声が投げかけられた。ひいっ、と内心悲鳴を上げて縮こまるセリアが、次に聞いたのは大きなため息。

「何処にも怪我は無い様ですね」

「え、あ、はい。それはもう、全く。その、先生は……？」

「人の心配をしている暇があるなら、もう少し自分の行動に慎みを持つ努力をしろなさい」

ギロリと再び睨まれた。しかし、何も言い返せない。よりにもよって、ハンスに衝突してしまうとは、なんたる不覚。しかし、前方の確認が不十分だった事は否めない。下手をすれば二人とも怪我をしていたかもしれないのだから。

「それよりどうしました？随分と慌てていたようですが」

「あっ！そうです。その、候補生様達を探してしまして」

「彼等を……？」

相手が男性ならば、その後「様」を付けるのが、貴族の子女にとつては礼儀正しいとされている。急いでいる今、これ以上また何かを注意されてしまう時間は無い訳で、多少の違和感が残るが、出来るだけ淑やかに振る舞った積もりだ。

「彼等ならまだ校長室ですよ。暫くは出て来ないと思いますが」

「え、ええええええ！」

「貴族の令嬢が、そんな声を出すものではありません」

結局はこうして注意されるのだが、今はそんな事気にしてはいられない。

「そ、そんな!! いつ頃出て来られますか?」

「それは分かりません。しかしだからといって、大事な話の邪魔はしない様に」

この少女なら何をするか分らない、という様な視線でセリアを一瞥すると、ハンスはそのまま階下へ降りて行ってしまった。



ハンスの話を聞いてセリアは呆然とする。それでは、折角ヨークに教えてもらった、教会が集会場かもしれない、という事を話せないではないか。校長に呼び出されたのだし、ハンスの口ぶりから彼等が直ぐに出て来るとは思えない。

候補生達を待ち、明日王都へ向かうという手もある。しかし、そんな悠長にしている時間は無い。また一人、攫われてしまっているのだ。彼女が生け贄にされてしまう前に、何とか見つけ出したい。悩んだ末に、セリアは今から一人で王都へ行く事にした。乗り込む様な真似は出来なくとも、せめてその教会の場所くらいは突き止めておきたい。一日や二日で見つけられるか分からないが、ジツとなどしてられないではないか。

そうと決まれば直ぐにでも出発しなくては。セリアは階段を飛び越え、さっさと校門を出て行ってしまった。

「君達も知っていると思うが、最近令嬢が一人誘拐された」

重苦しい校長の雰囲気、その部屋全体を満たしていた。豪華な椅子に腰を下ろした校長は、候補生達を一人一人見詰めている。その表情はいつものおちゃらけた感じではなく、真剣そのものだ。

「また例の事件に巻き込まれたのでは、との噂もあるが、その可能性が極めて高い事は君達も予想していると思う」

例の事件とは、言われずとも分かる。貴族の女性が次々に殺されている件だろう。

「まだこの学園から犠牲者は出ていないが、今後どうなるか分からない。この件が解決するまでは、君達にも十分用心して貰いたい」

「我々も、最大限の注意は払っています」

「うん。君達の実力は知っているよ。だからといって、危険な行動

に出る必要は無い。ただ、学園の生徒達の動向には意識を向けていてくれ」

校長が彼等に望むのは、生徒達の監視である。といっても、用心な行動に出ないかを見ていて貰いたいだけだ。生徒の行動を逐一制限する様な真似は校長も望んでいないのだが、今はそうも言っていられない。教師達も十分に警戒する積もりであるが、やはり全生徒に目を行き届かせる事は難しい。ならば教師よりも生徒達と距離が近い、候補生達にも協力してもらおう、という事だった。

校長の話を聞いて、彼等の脳内に映るのは、栗毛の地味な少女の姿。自分達が一番その動向に注意していなければならないのは、間違はなくセリアだろう。彼女の場合、一人で何をするか全く分からない。

候補生達が集まっている校長室の窓からでは、学園都市から王都へ向かって走り出した汽車に、栗毛の少女が乗り込む姿は見えなかった。

## 蜘蛛 4（後書き）

蜘蛛を崇拜する狂信集団。

あんまり深く考えた事ないけど、その信者も普段は普通の人なんだよね。

偶然見つけたただけだけど、やっぱり怪しい。確認はする必要がある……よね？

そうすれば、後々皆に報告も出来るし。

だから、もう少しだけ……

## 蜘蛛 5

汽車の車両がゆっくりと停止した駅から、セリアはひよっこりと顔を出した。目の前では同じ様に駅から出る人間や、反対に入って行く人間で溢れている。時間的にも早いので、目的も様々だ。

もうコレで何度目かになるが、やはり王都の華やかさには毎回感心してしまう。

少し人の波を眺めていたセリアだが、何時までもぼうっと突っ立ってはいられない。行き交う人々の間をすり抜け、セリアはさっさと歩き出した。ヨークに教えられた「教会」という言葉を頼りに、王都を探しまわる積もりだ。

流石にセリアも王都中の教会を回ろうとは考えていない。まずは以前見た、影が女性の身体を置き去りにした場所へ赴く事にした。既にあの場所の周りは候補生達と探しまわってみたのだが、今回はあの時とは違う。教会という当てがあるのだ。

なんだかそれだけでもう見つかりそうな気がするセリアは、王都内で乗合馬車に乗り込み、早速あの場所へ向かう。

以前来た時に迷子になった所為で、あの後候補生達に必要以上に執拗に道を教え込まれた。そのお陰で、今はこうして迷う事なく目的の場所へ辿り着ける訳だが。

近くへ着いた馬車から降りると、セリアは身を引き締めた。この近くに何か無いかと必死に視線を彷徨わせながら、早足でその道を進んで行く。

フラフラと歩き回っていた所為か、気がつくと自分の知らない道へ入ってしまった。大通りから大きく外れ、どうも裏道っぽい。日はまだ沈み始めてもいないのに、かなり薄暗く、気味が悪い。野

良猫ですら嫌がって近づかなさそうである。それでも、全く人氣が無い訳ではなく、遠くの方からは姿はなくても幾つか足音が聞こえてくる。時折、ぼんやりと人影も見えるので、人は居るのだろうか、かえって怪しさを強調しているだけだ。

やはり氣味の悪さに耐えられなくなり、セリアは引き返そうと思いい踵を返す。しかし、どちらへ行けば良いのかさっぱりだ。サッと視線を彷徨わせるが、今自分が居る場所に心当たりが全く無い。

うっと絶望しそうになった時、通りの奥に人影を見つけた。これは幸い、とばかりにその影に近寄る。

「す、すみません!」

セリアの声に振り向いたのは、野菜の詰まったバスケットを提げた、氣の良さそうな年配の女性だった。幾ら氣味が悪いといっても、この道は王都のあちこちへ続いており、ちよっとした近道なのだ。その為、時間によってはこの道を利用する者も少なくはない。

女性は突然現れた栗毛の少女に一瞬目を見開いたが、すぐに笑みを返す。微笑みかけてくれたことに、セリアはホッと胸を撫で下ろした。

「なんですか?」

「そ、そのですね……っ!」

女性に追いついたセリアがふいに横を見ると、そこにはかなり古びた扉がひっそりと構えていた。大きさ的にはそれなりなのに、どうも存在感が無い。後ろには所々に亀裂が入った壁が広がっている。視線を動かし全貌を確認すれば、そこには間違いなく教会の役割を担わされた建物。

「あの、その建物について教えて下さい!」

「はっ?」

セリアは思わずそう口走っていた。

急な問いに、どこことなく不審氣な視線を送って来る女性。それにセリアははっとして自分の失態に氣付く。いくらなんでも、これは怪し過ぎるだろう。

「あ、あの、その。教会みたいだったので、その……………」

必死に弁明しようと口を動かすが、上手い言葉が思い付かない。

女性は、あまりにも慌てるセリアを多少不審に思ったものの、見た目や雰囲気から害は無さそうなので、質問に答える事にした。

「そうね。確かに教会よ。随分長い間放置されてたんだけどね。最近はまだ使われてるみたいよ」

「最近？」

「ええ。ある貴族様が援助してくれる事になったの」

「貴族、ですか？」

「確かアルディ男爵っていったかしら」

「……………それは、いつ頃から？」

「ええっと、三ヶ月くらい前かしら。でも、折角援助してもらっても、皆存在すら忘れていた教会だから、まだ誰も通っていないみたいね」

「……………」

気の良い女性に礼を述べると、セリアはその教会の前に立った。自分が探している教会である可能性があるからか、改めて見るとやはり怪しい。そんなセリアの視線を気にすることなく、教会は尚もひっそりと佇んでいた。

貴族がいきなり援助金の寄付を申し出るとは、どうも気になる。それも、ここ最近のことだ。貴族が教会や慈善事業に寄付をするのは珍しい事ではない。自分の財産なのだから、好きにしている筈なのだが。

しかし、こんな裏町の小さな教会を、何故急に援助する気になったのだろうか。しかも、ずっと使われていなかったのに。

可能性の域を出ないが、確かめる必要がある。そう思ってセリアはゆっくりとその扉に手を掛けた。

「失礼しま……うっ!!」

恐る恐る覗いた内装に、セリアは思わず後ずさった。それは、中が薄暗い所為でも、人が居ないからでもない。その中が、蜘蛛の巣だらけだったからだ。

視線を彷徨わせると、埃や汚れは綺麗に掃除されているのに、何故か蜘蛛の巣だけはそのままになっている。まるで、蜘蛛の巣だけはわざと掃除していないかの様だ。どうやったらこんな器用な事が出来るのだろうか。

まだ人は通っていないと言っていたが、確かにこんな蜘蛛の巣窟の様な教会、誰も来たがらないだろう。

すっかり怖じ気づいたセリアだが、ここで諦める訳にはいかないと勇気を出して中へ入る。一歩進むにも、注意して避けなければ蜘蛛の巣に頭から突っ込みそうになった。

後ろ手に扉を閉めると、中へ光を届けるのは、壁にある小さな窓のみ。それも、申し訳程度の大きさしかない窓で、入って来る光もほんの僅かなもの。かなり不気味な雰囲気、セリアは帰りたい気持ちで一杯であった。

本当に援助を受けているのだろうか、と疑いたくなってくる。もう少し、小綺麗にしても良さそうなものだが。他は綺麗に掃除されているのに、蜘蛛の巣が全てを台無しにしているのだ。

一歩一歩躊躇いながらも進んで行くと、気付かぬ間に別の気配が背後に迫っていた。

「……………どうしました?」

「ひぐわあっ!!」

突然後ろから聞こえた声に、セリアは訳の分からない悲鳴を上げてしまった。

バツと振り向くと、そこには黒いローブを着た男性。頭に白髪が

混じり始めている顔は、どこか青白い。ヒョロリと頼りなげに立っている男の頬は痩せこけていて、この場に似合う程の不気味さを醸し出している。しかし、何故か目だけは血走っていた。それが更に怪しさを強調させる要因となっている。

その不気味さにセリアもうつと一歩後ずさりそうになるが、流石にそれは失礼だろう、と何とか平静を装った。

「その、すみません。勝手に入ってしまった」

「いいえ。貴方の様な若いお嬢さんに来ていただけるとは、光栄です」

ジリジリとこちらにじり寄って来る男性に、遂にセリアも耐え切れなくなり一歩後ろに下がった。すると、下から感じた僅かな空気の流れ。おや？と思ひ視線を下げるが、木製の床板があるだけだ。しかし、所々板の間に隙間がある。其処から風が流れたのだろうかと思つたが、すぐにヨークの言葉を思い出した。デナトワールは教会の地下を利用していたと。

「あの……ここは教会ですか？」

見れば誰でも分かる様な質問でも、今セリアに思い浮かぶのはこれだけだった。聞きながら男に歩み寄るふりをして、わざと強く床板を踏む。大きな足音が木霊する中、僅かにだが何かが転がって行く音が混じっていた。小石か、床板の欠片かは分からないが、確かに下へ転がり落ちている。恐らく、地下へ向かつて。

男はセリアの意図に気付いていない様で、セリアの問いにしっかりと答えた。

「はい。すっかり寂れてみえますが」

「神父様」

蜘蛛の巣の後ろから声が聞こえたと思うと、壮年の男性が現れた。背が高く、肩幅もそれなりにある男性で、静かにこちらへ歩いて来る。

薄暗い中では、蜘蛛の巣の後ろに壁があるのか、扉があるのかはつきりと確認出来ない。突然の男の登場に、セリアはギョツとして



しまった。

「私はこれで失礼させてもらうよ」

「はい。では、また」

「ああ……おや？」

そこで男は漸くセリアの存在に気付いた様で、驚いた様な視線を向けて来た。

「これは、珍しい客がいるな」

「えっと……」

「どうも。私はキース・アルディだ。フロース学園の生徒にこんな場所で会えるとは、光栄だよ。お嬢さん」

「っ！！！」

セリアは、男がこの教会を支援しているというアルディ男爵だという事よりも、フロース学園の生徒だと言い当てられた事に動揺した。しかし、考えてみればそれは当然である。なにせ、慌てて出て来たセリアは、学園の制服を着たままなのだから。

何を言おうかと迷い、混乱しそうになる頭を振じ伏せて、セリアは無理やり冷静さを取り戻す。

「セリア・ベアリットと申します」

「学園都市にいる筈の生徒が、何故王都に？」

「あ、いえ。その……えっと……」

「……ああ。やはり聞かないでおこう」

「……………」

上手い誤魔化し方が思い浮かばず、言葉に詰まったセリアが何かを言う前に、アルディ男爵が制した。

「私も学生の頃は、よく学園から抜け出したものだよ」

「はっ？」

「私はフロース学園の卒業生でね」

「あっ、そうなんですか」

セリアはアルディと会話しながらも、決定的な証拠が無いかと視線を気付かれない程度に彷徨わせていた。しかし、中々それらしき

物が見つからない。地下があるのは分かったのだから、そこを調べられれば文句は無いのだが、彼等がいる限りそれも難しいだろう。「どうだろう。私と食事でもしながら今の学園の話聞かせてくれないだろうか？」

「はっ、はい？」

突然の申し出にセリアは、つい声が裏返ってしまった。その反応にアルディ男爵は、ふっと笑みを深くする。

「これは失礼した。会ったばかりの若い女性を急に誘うのは礼儀知らずだったかな」

「い、いえ……」

アルディの申し出にセリアは考え込む。まだ確証は無いが、ここはデナトワールが使用している教会かもしれない。女性の遺体が捨てられた場所からそう離れていない位置にあり、地下まで存在している。何より、無数に張り巡らされたこの蜘蛛の巣も気になる。もし本当にこの場が集会場だとすれば、このアルディ男爵も、後ろでセリアの逃げ道を塞ぐ様にして立っている神父も、関係者の可能性が高い。

敵を見つけた時に最も難しいのが、内側に入り込む事だ。しかし、これは一番敵の体制を崩し易くする方法でもある。なにより、今は令嬢が一人捕らえられているのだ。どんな形であっても、彼女を見つけられるかもしれない。

「あの、もし宜しければ是非ご一緒させて下さい」

「おお、勿論だ。外に馬車を用意している」

そう言って歩き出したアルディの後を、セリアはゆっくりと付いて行った。後ろから、神父と呼ばれた男が未だに怪しい視線を送っているが、気にしてはいられない。恐らく、それなりの事態は覚悟しなくてはならないだろう。

アルディ男爵が言った通り、外には先程までは無かった筈の、真っ黒な馬車が止まっていた。その馬車が醸し出す嫌な雰囲気、セ

リアも乗り込む事を躊躇してしまう。しかし、中からアルディが手招きしているので、セリアも怯む足を無理矢理動かした。

セリアが連れて来られたのは、王都を出た直ぐの場所にある屋敷。貴族の屋敷の筈だが、ローゼンタール家の城を一度見てしまうと、やはり何処か迫力負けしてしまっている。

ゆっくりと止まった馬車から降りるセリアだが、既にここで可笑しいと普通なら考えるだろう。会ったばかりの、しかも少女を、自分の屋敷まで招き入れる男も、安易に付いて行く娘も、本来なら皆無な筈である。流石のセリアでも、これは怪しいだろうと思ったが、敢えて何も言わない。アルディも分かっているのだろうか、特に気にしている様子は無かった。道中はどちらも口を開かず、先程から嫌な沈黙が続いている。

屋敷に入り直ぐに通された部屋には、既に食事の用意が整えられていた。アルディに導かれて、セリアはゆっくりと椅子に座る。その間もかなり緊張し続けているのだが。その所為で食事が始まったも、物は殆ど喉を通らず、味も分からなかった。それに、馬車に乗った時から気を張ったままなので、非常に疲れる。

そんな気まずい雰囲気の中、アルディが突然言葉を発した。

「ところで、あの学園には今優秀なマリオス候補生達が居るそうだね。どんな少年達かな？」

「えっ！あ、はい。それは、えっと……」

「ああ、君の様なお嬢さんには、答え難い質問だったかな」

あの心配性で、個性的な彼等をどう言葉に表そうか悩んでいたセ

リアを、アルディ男爵は別の意味で捉えた様だ。どうやら、セリアも候補生達に熱を上げ、言葉だけでは彼等に対する感情を表現しきれずに悩む乙女達の一人と見たらしい。

「まあ時代は違っても、歴代の候補生とは常に近寄り難い空気を放っているからね」

「は、はあ……」

昔の事は分からないが、今の候補生はそんなこと全く無い、と思いなながらも、ここは大人しく頷いておく。

他愛のない会話の間も、アルディ男爵が、何処か自分を見張る様な、そんな瞳を向けている事が、セリアは気になっていた。その視線がセリアを余計に緊張させる。

その瞳の所為でつい力が入ってしまったセリアは、横にあったグラスに手を伸ばした途端、それを床に落としてしまった。中の液体が飛び散りながら、弧を描いて落下して行く透明なそれを、呆然と目で追う。

あっ、と思った時には既に遅く。派手な硝子が割れる音と共に、グラスは床に叩き付けられてしまった。

「ああっ！す、すみません！！」

しまった、と思いセリアは慌てて椅子から立ち上がり、床に散らばった硝子の破片に手を伸ばした。その姿を、アルディも慌てた様子で止める。

「き、きみ！！そんな事は使用人に任せれば良い」

「あっ！！」

言われて初めてセリアは自分の失態に気付いた。床に膝を付いて硝子の破片を拾うなど、貴族の令嬢に相応しい姿などでは決してない。しかし、咄嗟だったのでセリアは思わず硝子を拾い集めようとしていたのだ。

己の失態に絶望しそうになるが、そこは我慢して再び椅子に腰を下ろした。

「すみません」

「いや、気にする必要はないよ。それより、一つ聞きたい事があるのだが、いいかね？」

「えっ？……はい」

「君はどうしてあの場所に？」

「……っ！！」

突然の問いにセリアは息を呑んだ。アルデイの声があまりにも冷たく聞こえたので、背筋に悪寒が走る。カールの静かな冷たさとは違う、どこか黒いものを含んだ様な声だ。

「探検にしては、少し場所が遠すぎる様に思うのだが」

「……………」

「規律がそれなりに厳しいフロース学園の生徒が、こんな時間に門の外に、ましてや王都にいるのには、何か理由があるのでは？」

「……………」

視線を上げた先では、テーブルに肘を付いて、手の上に顎を乗せたアルディ男爵。こちらに向けられたまま動かない瞳に、セリアも目を逸らせなくなってしまった。

「何かを探していたのかな？」

「っ！？」

ニヤリと怪しい笑みを浮かべながら発せられたその言葉を聞いた瞬間、セリアは確信した。バレている、と。ならば、彼は自白したも同然だ。自分から、セリアが探している物に関わっている事を示したのだから。

「私、そろそろ失礼させて戴きます」

「それは残念だが、考え直してもらう必要があるな」

「うっ！？」

セリアは立ち上がった瞬間、激しい立ち眩みに襲われた。グラリと歪む視界と、足下から来る急な痺れに抗えず、そのまま床にしがみ込む。

「私は用心深くてね。君を帰す訳にはいかなかった」

「くっ！！何を…………？」

「ただの睡眠薬だ。安心したまえ。といっても、もうあと数日の命だろうがね」

「…………デ…………ナト…………ワール」

「やはり知っていたか」

こうなってしまうえば結論は簡単だった。彼は自分を解放する気は無いのだろう。ならば、せめて確証が欲しかった。彼の口から決定的な言葉を聞きたかったのだ。

その確信を得た瞬間、セリアは柔らかい絨毯が敷き詰められた床に崩れ落ちた。

「近況報告っていつでも、何でこんなに時間が掛かるんだ」

「仕方がないだろう。やはり、他の生徒の動向で、最近気になる事が多少あったのは事実なのだから」

「まあ、普通の時なら、そう目立つ行動でもなかったんだけどな」

候補生達が解放されたのは、もう既に夕日が辺りを赤く染め始める時間だった。

突然の校長の要望だったとはいえ、やはり候補生。もう以前から生徒達の動きには警戒していた様で、気になった点を幾つか報告してきたのだ。

「すっかり遅くなってしまいましたね。この分では、王都へ行くのは無理でしょう」

「これだけ待たしちまったんだ。あいつ今頃どっかで眠りこけてんじゃないかねか」

イアンは軽く笑っているが、正にその通りだとは、この時は誰も想像していないだろう。

そのまま学園内を少女の姿を探して回るが、中々見つからない。彼女の行きそうな場所は一通り調べた筈だが。

「先に寮へ帰られたのでは？」

「それなら良いのだが……」

胸に走った嫌や予感を振り払う様に言ってみたが、その可能性が低い事は全員が分かっている事であった。こんな時に、セリアが自室で大人しくしているなどあり得ない。

「……まさかな」

「……………」

不安は拭い切れない候補生達だったが、もう一度学園内を探すため、足を校舎へ向けた。

## 蜘蛛 5 (後書き)

これだけ探して居ないとなると、考えられるのは……………

とにかく、我々も一刻も早く向かわなければ。

一体、何度同じことを繰り返すのでしょうか。どうすれば彼女に届くことが出来るのでしょうか。焦りと不安ばかりで走り回るだけしか出来ない。

でも今は、ただひたすら貴方の無事を祈るばかりです。



## 蜘蛛 6

「どうでした？」

「いや。何処にもいねえ」

散々探し回ったが、結局学園内では見つからなかった。

「やはり、お一人で……」

「だとしても、もう帰ってる筈だろ」

日はとうに沈みきっている。例え王都へ行っていたのだとしても、もう学園へ戻っている時間だ。

「とにかく、寮も確認してみよう」

焦る気持ちを抑え、必死にセリアの身を案じる候補生達が向かった女子寮の前で、意外な人物を見つけた。片手で青髪を弄りながら、不機嫌そうに佇んでいる。

以前もイアンにセリアの不在を伝えた彼女に、候補生は何かを知っていないかと近づく。すると、アンナは予想していたのか、深くため息を吐いた。

「彼女ならいません」

何を聞く前に言われたその言葉に、候補生達も目を見開く。

「何処へ行ったか知らないか？」

「昼頃、駅へ向かってそれきりです」

「っ、！！」

駅へ向かった。それが意味するところは一つ。セリアが王都へ行ったということだ。そして、未だに帰ってない。

考えられる最悪の事態が脳を過ぎり、候補生達は脇目も振らずに走り出した。その後姿を、アンナが再び訝しげに見つめていることには気付いていない。

「あれだけ探して見つからなかったのに、何故こんな時に！！」

「セリア殿が何かを掴んだということでしょうか？」

「だとしたら、何故我々を待てないんだ、彼女は!!」  
頭を掻き毟りたくなるほどの苛立ちを抱えながらも、候補生達は必死に足を動かし、セリアを追って王都へ向かった。

「……ん……………」

ズキリと痛む頭を押さえてセリアは起き上がった。身体に残るだるさは、恐らく薬の所為だろう。

そこまで理解して、自分の状況を思い出すと、セリアはバツと周りを見回した。

床も壁も石ばりのその部屋を照らす光は、天井に高い位置にある窓から射す月明かりと、やせ細り頼りなさげに佇む一本の蝋燭。唯一の出入り口であるのだろう木製の扉へ辿り着く為には、自分の目の前に聳える、無機質な鉄格子を通り抜ける必要があるそうだ。

一言で表せば、ここは牢なのだろう。しかも、かなり古い。何よりもセリアが気になったのは、ここにも所々に蜘蛛の巣が張られている事。そこまで広くは無いため、すぐそこにも銀糸が渦巻いている。

無意識の内に鉄格子に手を伸ばそうとした途端、手首に僅かな痛みが走った。しかも、全く動かない。嫌な予感をするものの、視線を下げて確認すると、両手は後ろ手にしっかりと縛られていた。ご丁寧に足まで縄で纏められている。

完璧に囚われの状態だ。

「あの……」

「えっ!？」

唐突に聞こえた声にセリアは驚く。声の方向を見ると、今まで気付かなかったが一人の少女が自分と同じように縄で拘束されていた。年も自分とそう変わらない。大きなエメラルドの様な新緑の瞳を、これでもかという程見開いている。

「もしや、ダムレス子爵令嬢では……？」

「えっ、あ！はい。シーナといいます。あの、大丈夫ですか？先ほどここへ運ばれてきた時はびっくりして」

「あ、いえ。ありがとうございます。その……どれくらいの時間が経ったか分かりますか？」

「えっと、多分一時間くらいだと思います」

なるほど。アルディの屋敷で眠らされた後、ここへ運び込まれたのか。そして、目の前にいるのはデナトワールに誘拐された令嬢。ならば、ここは生け贄をその時まで捉えておく為の檻か。

「あの、一体何が起こっているのですか？私、ここへいれられてから怖くて、寂しくて」

「あ、えっと……とにかく、ちょっと待って下さい」

色々と説明したいことも、聞きたいこともあるが、まずはこの体制から抜け出さなければ。

セリアは不自由な足を懸命に動かして、履いていた靴を脱いだ。そして、靴を逆さに向けると、中からある物が転がり落ちる。チャリ、という音と共に落ちたのは、ガラスの欠片。それを後ろで縛られている手で掴み、唯一動く手首を駆使してゆっくりと縄を切った。アルディ男爵の家でグラスを落とし、その破片を靴の中に忍ばせておいたのだ。セリアとて、大人しく囚われている積もりも、易々と生け贄などになる気もない。

両手両足の自由を取り戻したセリアは、驚いているシーナの縄も切った。

「貴方は、一体……何故こんな場所に？」

「えっとですね。最近貴族の女性が立て続けに殺される事件がありましたよね。あれの犯人に捕まってしまったようでして……なんと

「うか、その……」

デナトワールは、歴史から排除された存在である。それを話すわけにはいかなかったのでこの様な説明になってしまったが、シーナに今の状況を説明するには十分であった。こんな場所に囚われてさぞ不安だったろうに、儂げな少女を更に怯えさせてしまうのは憚られたが、仕方がない。

「シーナさん。ここが何処だか分かりますか？」

「えっ？えっと、多分街の中だとは思いますが、分かりません」「街ですか？」

「はい。昼になると、あの窓から人や馬車の音が聞こえてきたので街ということは、考えられる場所は王都。アルディの屋敷からまた王都まで逆戻りしてしまった様だ。そして、恐らくあの教会の地下だろう。」

自由になった手で、セリアは鉄格子を軽く押したり叩いたりしてみるのが、見事にビクリともしない。鍵もしっかりとかけられているようで、恐らくこの檻を破る事は不可能だ。それに、たとえ破ったとして、あの扉から無事に地上まで辿り着けるかは分からない。

となると、唯一の脱出手段は……窓

それほど大きくはないが、セリアやシーナなら通れそうである。ただ問題なのは、その位置だ。天井に高い場所にある窓は、手を伸ばしても届かない。もう少し身長があれば問題ないのだが。

シーナが、そこから人や馬車の音が聞こえると言ったことから、恐らくそのまま外へ繋がっているのだろうが。

牢の中には、踏み台に出来そうな物など無い。あるのは、無数の蜘蛛の巣のみ。ならば仕方無い、とセリアはシーナと向き合う。

「シーナさん。あの窓から出られますか？」

「えっ？窓……ですか？多分出られますけど、でも届きません」「大丈夫です」

そういつてセリアは窓の真下で四つん這いになってみせた。

「えっ!?あの……」

「背中に乗って下さい。窓に手が届いたら、そのまま少しぶら下がって下さい」

「でも……」

「シーナさん。今は時間が無いんです。お願いします」

そう言われてしまえばシーナも頷くしかない。人を、しかも同年代の少女を踏み台にするなど、かなり抵抗があるのだが、ここは仕方ないだろう。

一言断りを入れてから、シーナは恐る恐るだがセリアの背に乗った。そうすると、窓の縁にやっと手が触れた。そして言われた通りに縁にしっかりと捕まる。

シーナが窓に届いたのを見届けると、セリアは四つん這いの状態から立ち上がり、素早くシーナの足の裏を押し上げた。少女といってもやはり人だ。羽の様に軽い筈はない。これがカール達であったなら、楽々と彼女を持ち上げたのだろうが。などと頭の隅で考えながら、セリアは精一杯力を込めてシーナの足を押す。

「うっ、くう……」

少しずつだが、シーナが外へ這い出ているのが分かる。彼女も頑張っている、と自分を奮い立たせる。

あとほんの僅かというところで、セリアは力を振り絞った。

「くっ!!」

「で、出れました」

腕にかかる重さが無くなったと同時に聞こえた声にホッと安堵する。そして内心で妙な達成感を感じた。力が無い細腕だと言ったカールに見せてやりたいくらいだ。

「は、はやく、貴方も」

そう言ってシーナがこちらへ向かって手を伸ばした。しかし、セリアは首を降る。いくらセリアが小柄だといっても、シーナが相手では引き上げる事は無理だろう。それに、手を伸ばして貰っても、僅かに届かない。こうなっては、シーナに救助を呼んで来て貰う以

外無いだろう。

「それより、その場所は分かりますか？」

「えっ？ここ、ですか？」

「王都の中の筈なんです。出来れば、警察にこの場所の事を……」

「っ！！ダメです！！」

へっ？と思ったセリアが驚くが、シーナは気にせず怯えた様な目をする。

「わ、私見たんです。警察の制服を着た方を、その牢で」

「えええええ！？」

ということはやはり、内部に協力者がいた、ということか。だとすれば、現場から証拠が見つからないのも、こんな王都の中に集会場があるにも関わらず見つけれられないのも頷けるかもしれない。しかし、それではどうすれば良いのだ。今の今まで捕われていたシーナに、あまり目立つ行動はさせられない。

だとすれば、今考え付く方法は一つ。

「学園都市に行って貰えますか？」

「が、学園都市に？」

「フロース学園へ行って、マリオス候補生に会って下さい」

「イアン・オズワルト様達ですか……？」

「し、知っているのですか？」

「ええ。勿論です。お会いした事はありませんが」

セリアは気付いていないが、実力と地位、誰もが振り向く潤わしの美貌を備え持ち、社交界で常に注目を集めてきた候補生達を知らなかった年頃の娘はセリアくらいなものなのだ。

知っているのなら話は早い。候補生達にまた頼ってしまう事になってしまうが、他に手が無いのだ。彼等にこの場所を伝えて貰うしかない。

「とにかく、人の居る場所まで行って下さい」

「分かりました。本当にありがとうございます。お氣をつけて」  
そう言ってシーナが去って行くのを確認すると、セリアはあっ

と息を吐いた。

彼女が逃げたのがバレるのも時間の問題である。それまでに彼女が安全な場所まで逃げ切ってくれるか。恐らくそれは心配要らないと思う。それよりも、彼女が候補生達へこの事を知らせ、彼等がこの場へ辿り着くまで、自分の命が保つかどうか。

生存できる確率は五分と五分だろう。しかし、万が一の場合になっても、確実にデナトワールの件は解決へ向かう。あとは時間との勝負、といった所か。

セリアがそんな事を考えていると、早速扉の方から音がした。それを聞いた瞬間、顔からサツと血の気が引く。

まずい！幾ら何でも早過ぎるではないか！

絶望感に打ち拉がれるセリアの目の前で、無情にも扉は開かれてしまった。外から顔を出したのは、釣り眼の男。見るからに柄が悪そうで、狂信者というよりは、不良といった方が良さそうだが。

恐らく確認に来たのだろうその男と、薄暗い中で目がバッチり合ってしまった。拘束していた筈の縄は無惨に切られ、囚われの少女の数が足りない事に気付いたのか、男は目を見開いていた。

「チッ！！」

「あっ……」

サツと身を翻して扉の後ろに消えて行く男を、セリアは内心悲鳴を上げながら見送っていた。

「……………」

「……………」

今、セリアが閉じ込められていた部屋の鉄格子の扉は開かれている。手足も拘束されている訳ではないので、逃げようと思えば逃げられる筈だった。目の前に立ち塞がる、この男の存在さえ無ければ。

ジロリと見下ろして来る視線を、負けるものと懸念に睨み返す。先程から睨み合いの攻防で、微動もしないアルディ男爵は、かなりご立腹の様子だった。その怒りは、セリアにも十分伝わっている。

「……どうやら、私は君を甘く見ていたようだ」

「……………」

「縄を解いただけでなく、囚われのお姫様を逃がすとは、随分と勇ましいお嬢さんだ」

「……………もう無駄よ。シーナさんが今頃は警察へ逃げ込んでいる筈だもの」

セリアの精一杯の声に、アルディは動揺するどころか、肩を揺らして笑い出した。

「それは結構だ。そうしてくれた方がこちらにとっても手間が省ける」

「……………」

やはりか。

アルディが声を殺して笑っている間も、セリアは内心で新たな確証を得ていた。やはり警察内に協力者が居たのだ。鎌をかけただけなのだが、このアルディという男は、どうも多くを語る傾向がある。「しかし、今夜彼女を逃したのは我々も歓迎出来る事態ではないな」「うっ!!」

アルディが言い切ると、空気を切る音と共に頬に衝撃が走った。そのまま横に倒れ込んだと同時に、右の頬が異常な熱を持つ。ジワリと痛みが浸透する頬に手を添えながらアルディを見ると、その腕に見覚えのある物が乗っていた。

蔓草の中心に居座る蜘蛛。デナトワールの紋章だ。そしてそれが彫られている位置にも覚えがある。

「まさか、あの時の!？」

「……………やはり、君はただのご令嬢では無いようだね」

カールの屋敷からの帰り、女性の死体を王都の道端に捨て、セリアにナイフを突きつけたのは、この目の前の男だったのか。だとす



れば、セリアがあ教会に居た時点で、標的にされていたのだろう。「既に客は集まっている。予定では彼女を捧げる筈だったが、君に変わりを務めてもらおうとしよう。それに、これ以上何かをされては困る」

「し、しかし男爵。来月の末までに消す筈の者が、まだ七人は残っています。間に合いますか？」

「だからといって、今から子爵令嬢を連れ戻すか？それこそ時間の無駄だ。それに、もう儀式は始まっている」

何時の間に後ろに構えていたのか。あの教会であつた神父がアルディに慌てた様子で問いかける。その言葉にセリアは首を傾げる。

来月末まで、とはどういう事だろうか。王弟殿下の即位反対を唱えた貴族に対する成敗の意味で、デナトワールを利用していたのだとしたら、期限が決まっているのは可笑しい。あまりこの件を長く続けたくないのだとしても、来月とは早すぎだ。

「あと一時間程の命を、存分に楽しむ事だ」

そういったアルディは、セリアの拘束を隣に控えていた男に命じると、背を向け扉の奥へ消えてしまった。その後ろを、先程の神父も急いで追う。

一時間。それでは、シーナが学園都市へ辿り着けても、候補生達がこの場へ来るまでは保たないだろう。ここでまた拘束されてしまえば、もう逃げ出す手だてが無い。そう思っても、再び縄で後ろ手に縛られてしまった。今度こそお終いか、とセリアも覚悟を決める。その間も、アルディと神父の言っていた来月の末まで、という言葉がどうしても気になっていた。

## 蜘蛛 6 (後書き)

悔しい。折角ここまで来たのに、こんな事になるなんて。結局、カールの言った通りなのか。だからって、大人しくやられてやるものか。私だって最後の抵抗くらいする。

彼等がどうして、ここに居るんだろう？

## 蜘蛛 7

王都は広く、当ても無しに探し回ったところで、たった一人の少女を見つけるなどは不可能だ。しかし、今の候補生達に出来る事はこの大きな都市の中を走り回ることであった。

「いたか？」

「いや、誰も見てない」

「駅員の目撃情報があっただけで、他はまだ」

セリアはフロース学園の制服を着たままだった様で、少しの情報は得る事が出来た。しかし、それだけだ。彼女が実際何処へ向かったかは分からないまま、時間だけが無情にも過ぎていく。

王都で考え付く場所といえば、セリアがデナトワールの紋章を初めて見た場所だ。せめて何か手掛かりがないかと、縋る様な気持ちでこの場所へ来た。しかし手掛かりどころか、まだ目撃情報すら無い。これが美人だったり、気品溢れるお嬢様だったなら、もう少し目立っていたのだろうが。

「何処へ行っただ……」

無事でいてくれ、と願うしか出来ない候補生達の耳に、暗闇の中から軽い足音が聞こえた。気になって視線を送ると、何処かで見たことのある少女が、キョロキョロと視線を彷徨わせながら走る姿。

その少女の顔と、脳内の情報が一致すると、候補生達は途端に駆け寄った。

「シーナ・ダムレス嬢!!」

「えっ!？」

呼び止める声が聞こえた瞬間、ビクリと肩を揺らした少女が恐る恐る振り返ると、その先に見た人物に目を見開いた。

「あっ!!」

「失礼ですが、貴方は行方不明だと聞いていたのですが？」

「あっ!はい。先ほどまで捕らわれていました」

「それで、どうやって。それより、貴方は今まで何処に」

「先ほど助けられて。それでイアン様達を呼ぶように言われたんです」

そのまま説明するシーナの話聞く候補生達の背中には次第に悪寒が走り始めた。

助けられたというシーナはここにいるが、セリアはいない。つまり、まだその場に残っているのだろう。捕らわれているのか、己自らその場に留まっているのかは分からないが、どちらにしても危険な事にならない。

「とにかく、その場所を。ルネ、お前は警察に……」

「待ってください！警察はダメです。内部に私を攫った人がいます」「っ！？内通者か？」

だとすれば、セリアがシーナに警察ではなく、候補生の名前を出したのも頷ける。しかし、そうだとすればどうしたら良い。敵の数に見当もつかないうえ、セリアが向こうの手に渡ってしまっている。ただ突っ走って全員を一掃出来る自信はない。

「だからって、何もしない訳にいかないだろ」

「とにかく、セリアの所へ行かなきゃ」

シーナには安全な場所まで行く様に言い聞かせ、候補生達は教えられた教会の場所へ足向け地を蹴った。

牢から引き摺り出され、後ろ手に拘束されたまま連れて来られた場所を見回して、セリアは頬を引き攣らせた。

木製の扉を潜り抜け、その先に広がる廊下を歩いていくと今度は鉄の扉。重い音を響かせながら開いたその扉の奥は、とにかく広かった。今まで自分が押し込められていた石張りの部屋と比べると雲

泥の差だ。しかし、ここでも蜘蛛の巣は健在である。

部屋の中には円形の祭壇らしき物があり、石で作られた寝台の様な物が置かれていた。その周りをぐるりと囲むように黒いローブを頭から被った人間が佇んでいる。その一人一人が蠟燭を手にしていて、その灯が窓一つ無いこの暗い部屋を照らしていた。なんだか訳の分からない、呻き声の様な声を出していて、聞いているだけでも胃に響く。

セリアが中へ入ると、そのローブの人間が一斉にこちらを向いたのだ。そして、まるで崇めるかの様にこちらへ向かって手を伸ばしてくる。それだけでも十分に異様な光景だ。

そのままセリアは自分を拘束する男に押され、祭壇の上の寝台の前に立たされた。ローブの人間達は、この祭壇には近付かない様で、周りから手を伸ばし続けてはいるものの、セリアに触れる事は叶わない。

立たされた祭壇の上で、現実離れた光景を呆然と眺めていると、セリアが入ってきた扉とは別の方向から、重い音が響いた。そちらを見ると、地上へ続いているのだらう階段と、その上で開かれた扉の向こうからこちらを見下ろすアルディ男爵。

ゆつくりと階段を下りるアルディは、先程までは着ていなかった黒いローブを纏い、実に優雅に振舞っている。祭壇の周りのローブ達は何が嬉しいのか、アルディの登場に感嘆の声を上げていた。

得意げに歩くその姿を、セリアはジロリと睨む。そのセリアの視線に気づいたアルディは、益々口の端を吊り上げた。

「本当に勇ましいお嬢さんだ。他の者達は、そのまま失神するか泣き叫びながら救いを求めるかだったというのに」

「…………もうこれで終わりよ。シーナさんが逃げ延びれば、少なくとも貴方は失脚するわ」

「フッフ。心配してくれるのはありがたいが、その必要は無い。あの令嬢は、残念な事に私の顔を見ていないのでね。それに、誘拐されて気が動転していたといえば、彼女の証言も戯言以外のなんでも

ない」

「たとえそうでも、彼女はこの場所の事を話すわ。そうすれば何らかの証拠は見つかる筈」

「確かに、ここを調べられては、何らかの形で痕跡は見つかるだろうね。もし、この場がそれまで残っていればの話だが」

「……？」

「どういう意味だ？」とセリアが眉を顰めると、アルディは嘲る様に笑った。

「今日の儀式が終わればこの地下を埋めることにしたよ」

「なっ！？ どうしてそんな事を」

「ここはデナトワールの集会場であって、神聖な場ではなかったのか。なぜそう簡単に埋めようなどといえるのだ。」

「過去のデナトワールが贄として捧げた女の数は一十八。これだけの数の儀式を行うのに、場が一つであった筈がないだろう」

「ま、まさか！」

「察しが良いね。例えこの場所を失っても、我々が次の巢へ赴けば良いだけのこと。つまり、この場で君が我々を捕らえないかぎり、君の勇敢な行為は無駄という事になるね」

言葉にならなかった。自分の考えの甘さに、嫌気がさす。シーナを助け出せたとしても、肝心のアルディ達を捕らえるには至らないのだ。

絶望で顔から血の氣を無くしたセリアに、短剣が向けられる。

「さて。お喋りはこのくらいでいいかな。我々としても、早めに出る場から切り上げたいのだよ」

そう言って突き出された短剣を、すんでの所で躲す。しかし、その瞬間また頬を思い切り叩かれた。

「うっ！」

張り倒され崩れた先は、台の上。しまった、と思った時には既に遅く、肩を手で押され動きを封じられた。周りではすっかり興奮した様子のローブ達が、先程より一層手を高く掲げ、声もより大きく

響いている。

上を見上げれば、血走った眼を向けて来るアルディが振りかざした短剣。蝋燭の灯を反射し、鈍く光るその刃を見て、セリアの身体を恐怖が駆け上がる。

「くっ!!」

来るだろう痛みに、セリアは咄嗟に目を固く瞑った。

「……うぐっ!!!!」

しかし、次に聞こえた男の呻き声と同時に肩の拘束が緩まった。恐る恐る目を開ければ、飛び込んで来た光景に驚きで声を上げる。先程まで自分に短剣を翳していたアルディの腕に、一本の矢が刺さっているのだ。突然の痛みにアルディも短剣を落とし、ぐっと腕を押さえる。

「セリア!!」

「ルネ!？」

聞こえた声は、いつもはにこやかに温室の草花に水を与える少年の物だった。声の方へ振り向けば、階段の上の扉から入る光を後ろに、弓を構えるルネの姿。えっ、と驚くのと共に、助かったのだと一瞬過る安心感。

「セリア殿!!」

「無事か!？」

次々に乱入してくる候補生達に、セリアも啞然としてしまった。その間にも、候補生達はセリアの周りを囲んでいたロープを次々に薙ぎ倒して行く。候補生達は全員がかなりお怒りの様で、その表情はかなり怖い。

突然の乱入者に混乱するその場に構わず、候補生達はそのまま手当たり次第に吹き飛ばして行く。その姿にも、日頃の品は残っているので、まさに敵と戦う英雄、といったところだ。

急な展開に呆然としかけるセリアだが、何時までもぼうっとしてはいられない。アルディが落とした短剣を素早く拾い上げ、候補生達が居る場とは反対の方向へ向かった。そして、自分が通って来た扉の前で構える。

この向こうには牢へ続く廊下があった。しかし、他の場所へも続いているかもしれない。命が助かった今自分に出来るのは、狂信集団をこの場から一人も逃さない事である。

中断させられた儀式と、倒れて行く崇拜者。信じられない光景を目に、アルディは絶望と焦りが込み上げて来た。その腕には未だにルネの放った矢が刺さったままになっている。

「き、貴様ら。こんな事をして、ただでいられると思っているのか！」

確かに、崇拜者の数は候補生達が想像していたよりも多かった。

周りをぐるりと囲む敵に、候補生達も、短剣で応戦するセリアも限界がある。しかも、こちらは殺傷沙汰になどはしたくないが、向こうはこちらを殺す気で来ている。幾らラン達に腕があるといっても、不利なのは明らかだ。

何処に隠し持っていたのか、鉄の棒やらナイフやらを出して来るローブに、流石の候補生達も押されている。セリアも懸命に応戦するが、一人で大人数を相手にしている上、つい先程までは囚われの身だったのだ。身体に溜まった疲労は誤魔化し切れず、ついに唯一の武器を薙ぎ払われてしまった。まずい、と思った時には遅く、すぐにまた張り倒される。

「セリア！！」

「無駄だ。生憎男の血は使い物にはならないが、生かす必要もあるまい。遺体は纏めてこの場に埋めてやる！」

声高にアルディが言い放つと、ローブ達も動きを一層激しくさせる。自分に向かって次々に腕を振りかぶるローブ達にセリアは再び目を閉じた。



その胸を占めるのは、悔しさ。やはりカールの言う通りだったのだろうか。自分には何一つ出来ず、おまけに友人までも危険に晒した。こうなることを見越してカールは自分に関わるなど言ったのだろうか。

くつとセリアは歯を食いしばった。

が、その瞬間、乾いた音がその場に響く。耳を劈く様な、大きな破裂音。今までに聞いた事が無い様な物だが、セリアにはそれが何なのか心当たりがあった。

恐る恐る目を開けると、候補生達が入ってきた扉から見える赤の制服。

「えっ……!？」

先程の音は、多くの赤い制服を着た男達の一人が、天井へ向かって銃を発砲した音だったのだ。引き金を引いた瞬間、中の火薬が発火した音は、その場の全員の注意を引いた。

揃って銃を持った男達が、規則正しく歩調を合わせながら地下へ姿を表す。全員が纏う赤い制服に、セリアは見覚えがあった。

「なんで、王国軍が……？」

赤の制服を身に纏う彼等が属するのは、王国軍と呼ばれる組織。クルダスの警察や国政からは切り離され、独立した王宮直轄の兵達だ。

国家の安全に関わる公安事件の捜査や、国交間における重要人物の保護など、国家に置いて重要と見なされた事柄にのみ動く組織。そして、彼等を実際に動かす権限を持つのはマリオスと、国王陛下のみ。つまり、彼等がここににいるという事は、そのまま国王の命令だということ。

「アルディ男爵に告ぐ。貴公をクルダスに対する謀反の容疑でその身柄、王国軍が保護させていただきます」

「……………」

「フロース学園生徒以外この場にいる全員、国家における大罪者として、逮捕する」

髭を生やした男がそう言い切ると同時に、王国軍がデナトワールの集会場に雪崩れ込んで来た。候補生達が乱入した時の比ではないほどの事態に、ローブ達は当然動転した。逃げ惑うローブ達を、王国軍は容赦無く捕らえて行く。

何がなんだか分からない。何故王国軍がこの場に居るのだろうか。誰かが通報したのか。しかし、彼等は国王かマリオスの命以外では動かない。国政からは完全に独立した存在だ。それが何故。

候補生達も、全く状況を理解出来ない様子で、呆然と立ち尽くしている。あのカールですら、目を見開いているのだから驚きだ。セリア達が動けないでいると、あつと言う間にその場のローブ全員が呆気なく逮捕されてしまった。あのアルディと神父も同様だ。

二人の顔は、訳が分からない、といった風で、彼等も急な展開に呆然としている。それでも、アルディ男爵の方には、僅かばかりの恐怖がその瞳に潜んでいる様にも見えた。

事態が治まった頃、セリアと候補生達は王国軍に保護され、無事学園まで送り届けられた。

その道中もセリアは呆然としていた。あれだけ自分が足掻いても何も出来なかったというのに、あつというまに片を付けてしまった王国軍を見て、自分の無力さを改めて実感させられる。しかし、どうしても分からないことが一つ。何故王国軍があ場にいたのか。

国家的な犯罪でないかぎり、王国軍が動く事はない。そして、この件はそれに属するだろうか。二百年前は三十人以上の人間が殺されているのだから、王国軍が動く理由としては十分だろう。が、今回は違う。被害者の数はまだ十人にも満たない。人の命に関わるこ

とはいえ、実際には王国軍の腰は重い。

ならば考えられるのは一つ。王かマリオスの命令だということ。しかし、一体どうして。

考え込むセリアだが、ふいに顔を上げるとこちらを睨む候補生達に気付いた。

しまった。王国軍の事にばかり気を取られて、肝心な事をすっかり忘れていた。また彼等に迷惑を掛けたのだ。しかも、今回は命の危機すらあった。彼等の怒りももっともだろう。

とにかく謝らねば。と思って口を開いたものの、周りから集まるあまりにも怒りを含んだ表情に、ひいっと悲鳴を上げてしまう。これはまずい。かなりご立腹だ。

どう切り出そうか、と思い悩んだセリアは渋々問いかけた。

「あの……怒ってる？」

「当たり前だ!!」

「ひえっ!」

途端に怒鳴り返されセリアは身を竦めた。

「本当に、ここまで巻き込まれる積もりはなくて……ただちょっと調べようかと思っただけで……」

「それで捕まっていれば同じ事だ!!もし我々が間に合わなかったらどうする気だったんだ!!」

「でも、シーナさんは助けられたし、あの教会の場所は分かったから、何かの手掛かりには……」

「そういうことを言っているのではない!!あのままだったら君は自分がどうなっていたか分かっているのか!!」

今度ばかりは笑って許す気にはなれなかった。確実に死に繋がる事態だったのだから。ルネの弓の腕が無ければ、この少女は自分達の目の前でその胸を貫かれる様な結果に終わっていただろう。助かって嬉しい筈なのに、どうしても苛立ちの方が勝ってしまう。

「何故君はいつも一人で動こうとする?一人で対処出来る相手だとも思っていたのか!」

「そ、そんなこと……」

そんなことは決して思っていない。今回の事を一人で解決しよう  
と考える程、思い上がってもいない積もりだ。だからといって何も  
しないなど出来なかった。

しかし、何を言っても結局は同じ事。最終的に彼等にまた多大な  
迷惑をかけてしまったのだ。そこにどんな理由があろうと、こうな  
ってしまったからには、彼等には自分を責める権利があるだろう。

「巻き込んだことは、本当に申し訳ないと思ってる。また皆を頼ろ  
うとしたのも。でも……」

今回の事だけではない。この学園に来てから、候補生達はその力  
を自分に見せ付けてきた。その実力、能力、そして強い意思。今ま  
でのことから、彼等は十分この国の為に必要な存在になるだろうこ  
とが分かる。マリオス候補生に選ばれただけの力を備えていること  
を、毎回彼等の傍で自分は見てきた。

そんな彼等に、尊敬と感謝を覚えると同時に、何も出来ない自分  
が酷く悔しかった。結局は無力で小さな存在だと、思い知らされた  
のだ。

候補生達の力になりたい、と願っていた筈が、彼等を頼るしか出  
来ない自分に気付いた。それが口惜しく、虚しい。だからこそ、何  
か自分に出来るなら、なんとしてもやり遂げたかった。

しかし、それはやはり思い上がりだったのかもしれない。自分に  
何が出来る訳でもないのに。彼等の近くにいて、少し夢を見過ぎて  
いたのだろうか。自分にも、彼等と一緒に何かを成し遂げる力があ  
る、と心の何処かで勘違いしてしまっていたのか。

落ち込むセリアの内心は、候補生達には伝わっていない。彼等は  
ただ、何でも一人で考え勝手に行動するな、と言いたかったのだ。  
彼女に幾ら力があるといっても、やはり危なっかしい。せめて、自  
分達の目の届く場所にいてくれと。心配で溜まらないのだと、分か

って貰いたかった。

しかし、セリアが全く逆の事を思っているとは、彼等も理解して  
いないのだろう。

「私に何が出来るとは思ってはないけど、やっぱり……………いつも迷  
惑かけてばかりなのは分かってるけど」

「セリア……………」

悔しそうにそれだけ吐き出すセリアに、やっと候補生達は何かを  
悟った様だ。俯くセリアに、先程怒鳴ってしまったランも落ち着き  
を取り戻した。

「先程は悪かった。言い過ぎた」

ランの言葉にセリアはブンブンと首を振る。

「ランの言う通りだよ。でもいつもただ皆を見てるだけの自分が悔  
しくて」

「……………」

「私が力不足だってことはこの学園に来る前から分かってたのに」  
こんなにも無力な自分が、候補生達の、ましてや国の力になりた  
いなど、冗談もいい所だ。

「……………セリア……………ダムレス家令嬢も、無事保護されたそうだ」

「……………?」

「彼女は紛れも無く、君が救ったんだ」

「……………」

確かにセリアの行動は無茶な上に褒められるものではなかったが、  
それが一人の少女の命を救った事は事実だ。もしセリアの行動が無  
ければ、彼女は今夜確実にデナトワールの犠牲になっていた。

それにセリアが辿り着かなければ、デナトワールを潰す事も難し  
かっただろう。場所も分からず、アルディ男爵まで辿り着いていた  
か。誰が何と言おうと、セリアはシーナを救い、デナトワールの件  
を解決するのに大きく貢献したのだ。

「だからといって、君の向こう見ずな行動を認めた訳ではない」

「……………」

「ただ、今回の事は君の行いがあってこそだという事は、皆が認めている」

「でも……私は何も……」

俯く頭に優しく手を置かれ、セリアも押し黙った。先程まで怒られていたのが嘘の様に、セリアの頭を撫でる手付きは優しい。

「皆セリアが心配なんだよ。あんまり無茶しないで。セリアは仲間なんだから」

「……!？」

仲間、という言葉にセリアは大きく反応した。

こんな自分を、彼等はまだ仲間だと言ってくれるのか。彼等を頼るしか出来なかった自分を、対等の立場の者に対して使う名称で呼んでくれるのか。

そう思っただけで、先程までの自己嫌悪の念が薄れる様に感じた。周りを見れば、安心させる様に優しく微笑む候補生達。あのカールですら、今までに無い程の穏やかな空気を纏っていた。

「ごめん。ありがとう」

素直な感謝の言葉は、誤解されることなく候補生達にしつかりと伝わっただろう。

「まったく、やってくれる」

薄暗い部屋で、淡いランプの灯に照らされた男が、腹立たしげに舌打ちした。その様子を、もう一人が興味無さげに見下ろす。

「やはり期待をかけすぎたか？」

「予定の半分は処理されているのです。貴方なら何の問題もなく計

画を実行出来るでしょうに」

「フン。涼しい顔をして。元はといえば、お前にも責任はあるではないか」

この男がここまで怒りを露にすると珍しい。普段なら冷淡な笑みでもう少し張り合いのある嫌みを飛ばして来るものだが。まあ、自分の筋書き通りに事が運ぶのを当たり前に思っている男だ。今回も、目的が大きいだけに、早い段階で計画にズレが生じるのを好ましく思っていないのだろう。

「それより、どうするお積もりで？」

「もう手は打ってある。その事は心配いらない。元々こちらに足がつく様な方法は取っていないがね」

「それを聞いて安心しました」

「お前はどうかのだ？」

「……問題ありません」

それを聞いて、ランプに照らされた男は安心したのか、ニヤリと笑みを深くした。

## 蜘蛛 7 (後書き)

もし、セリアの言っている事が確かなら、敵の次の動きには大方の予想がつく。しかし、本当にそんな事が？いくらなんでも、やりすぎである。実現してしまえば、何が起こるか想像もつかない。ならば、我々がしなければならぬ事は……

しかしそうになると、セリアはきつとまた無茶をするのだろう。また、目が離せなくなるな。今度こそ、君に危険が及ばないように出来るだろうか。



## 試合 1

学園内の、丁寧な細工が施されたテーブルやソファが置かれた校長室は豪華だ。しかし今校長が居る場合は、そことは比べ物にならない程質の良い調度品が揃えられている。大きさも桁違いで、漂う空気すら輝いている風を感じるのには、決して気のせいではないだろう。その部屋で向かい合った椅子に座った男二人は、目の前に置かれた盤の上でチェスの駒を何処か楽しそうに動かしていた。

「まったく驚いたぞ。いきなり連絡してきたと思えば、一言目に王国軍を貸してくれとは」

「まあそう言うな。可愛い生徒を守る為だ。それに、そちらにも有益ではあっただろう」

「その事は感謝しているさ。中々尻尾を見せない上に、こちらの動きには敏感だからな」

軽い口調でフロース学園校長が会話している相手は、黒のビショップを進めた。そしてそれは校長が操る白のナイトを倒す。

「まったく、最近の生徒達は無鉄砲で困っているのだよ。まるで、昔の誰かを思い起こさせる」

「無鉄砲はお互い様だろう。お前も十分教師達の悩みの種だった筈だ」

男の言葉に笑みで返した校長は、白のポーンで己のナイトを奪ったビショップを盤の外へ追い出す。

「まあ、それは否定しないがな。それより、お前も忙しい身だろう。そろそろ負ける気はないか？」

「お前を勝たせてやるくらいなら、例えば国の存続に関わろうと駒を動かす事に専念するさ」

校長の問いを受け流すと、男は黒のクイーンを動かす。

国の最高位に君臨する筈の男の言葉とは思えない発言だが、彼も本気でそんな事を考えている訳ではない。ただ、目の前に座る昔か

らの友人に、そう易々と勝ちを譲ってやる気が無いだけだった。

「それで、例の件はどうだった？」

「他でもないお前の提案だ。私はそれなりに信用しているが、彼等を納得させられるかはお前と今後の流れ次第だな」

「そうか。それは良い傾向だ」

「……随分自信たっぷりじゃないか」

そう言われた校長は、それは嬉しそうに己のクイーンを動かす。

「それはそうだろう。私が見出した宝石だ。輝かない筈がない」

「まあ、今回の事を見れば、お前がそこまで押す理由も分からないでもないがな」

黒の駒を操る男に、校長はうんうんと頷いてみせる。なにしろ、歴史からも排除され、存在すら知られていない組織の隠れ家を見つけ出し、自分達でさえ手を焼いていたにも関わらず、それを壊滅に導いたのだから。

その話題が持ち上がった途端、それまでにこやかに話していた校長が、途端に目を細め真剣な表情を作る。

「しかし、警備が甘かったな。私の生徒が命を張って捕らえにいったというのに」

「例の事ならこちらも驚いている所だ。恐ろしいほど動きが早い」指摘された点に、男は苦虫を噛み潰した様な顔をする。

校長が警備が甘いと言ったのは、王国軍が捕らえた筈のアルディ男爵が一晩の内に変死した件だ。デナトワールの中で、今回の事の裏を知っているだろう人物は彼のみ。彼が居ない今、残ったのは本当に蜘蛛を崇拜する者だけだ。つまり、首謀者も目的も、アルディが口を利けない状態にされた今となっては、知る術が無い。黒幕におおよその見当はついて、それを裏付ける決定的な証拠を失ってしまったのだ。

「その日の内とは予想外だったな。自殺する隙を与えたか……」

「もしくは、敵もそう甘くはない、ということかな」

「どちらにしろ、厄介な相手だという事に変わりはない」

二人の男は真剣な顔をしながらも、チェスの駒を動かす手を止めない。今の所、男の操る黒の駒が比較的優勢に見えるが、双方負けてやる気はさらさら無いらしい。

「それで、どうする積もりだ？ 敵の策にまんまと乗ってやるのか？」

「私の身を案じてくれるのは有り難いな。まあ、ここはお前の生徒を信じてみようと思っている」

「それは光栄だな。ついでに言うとお前の負けだ」

「むっ!？」

言われて盤に目を落とすと、白のクイーンが黒のキングをチェックメイトしていた。さっと目を動かしても、キングが逃れる術は無い。完全に追い込まれてしまった。

「これは幸先が良いな」

「成る程……お前のクイーンがこちらを負かすと言いたいのだな」

「負かすとは人間きの悪い。しかし、クイーンにキングが敗北したのは事実だな」

ハハッ、と笑う校長に男は恨めしそうな眼を向ける。久しぶりの対局を負け戦にするのは面白くないが、仕方がない。愉快そうに笑いつける友人に、男も釣られて笑みを作った。

「来月の末？ 確かにそう言ったのだな？」

確認する様に聞いたランに、セリアは力強く頷いた。その後、学園で自分達を出迎えた校長と教師数名に、無事であった事を安心されたり、無謀な行動を咎められたりと、色々あって候補生達に話す機会が無かったが、数日後に漸く伝える事が出来たのだ。

「どういう事だ？ それまでに七人とは」

「それは私にも……」

助け出された後も、セリアはアルディと神父の言っていた、来月の末までに、という言葉がどうしても引っ掛かっていたのだ。セリアにとっては全く意味の分からない言葉だが、候補生達には何か思い当たる点がある様で、瞬時に難しい顔を作った。

「来月っていうと、あれだな」

「だとすれば、やはり目的は………」

そのまま話しを進めようとする候補生達に、セリアは疑問符を浮かべる。その様子に気付いたのか、候補生達が説明しだした。

「来月にはな、競技会があるんだよ」

「競技会？」

「知らないのか!？」

キョトン、と聞き返したセリアにイアンが逆に驚いた。剣が得意な彼女が、競技会を知らないとは思っていなかったのだ。しかし、セリアが女性だということ、彼女がフロース学園へ来る前の学園の名を思い出して納得する。

「まあ、ワイトローズ学園じゃ仕方ねえか」

「……?」

競技会。それは一年に一度、クルダスの全州の高等学校の中でも選ばれた生徒が集まり、それぞれの分野で己の技を競い合う日だ。王都で行われるこの行事だが、フロース学園は何年もその栄冠を守り抜いているらしい。少なくとも、入賞者を出さなかった年は一度も無いという。競技は、剣、馬、弓、等に分かれ、それぞれの優勝者を決めるのだ。

「でも、それが今回の事と関係してるの?」

「デナトワールの犠牲者が王弟殿下王位継承に反対していただろう?」

イアンの言葉にセリアはゆっくりと頷く。

「その競技会には、国王陛下も参列されるんだ」

「えっ!? それって………」

ランの言葉にセリアは驚きに目を見開いた。

こうなってしまうば、どんなにそれが恐ろしい予想であっても、何が起るか大体想像出来てしまう。

「ま、まさか……いくら何でも……」

「では、他に何か思い当たるか？」

カールの止めの一言に、セリアは押し黙った。

王弟殿下の王位継承に反対した者が次々と理不尽な制裁を受けた。反対する者を煩わしく思う理由は、王弟殿下が王位を継ぐ機会が近づいたから。しかし、今も国王は健在で、例え王位継承権を保持していようと、まだ王位に就く事はあり得ない。しかし、来月の末までに、力のある王弟殿下に反対する者が標的とされた。そして、同時期に国王は安全な王宮から離れる。

これらから考えられる事は一つ。

「お、落ち着けて！」

「どう落ち着けて言うのよ。王弟殿下王位継承よ！国王暗殺よ！」

「だからって、何をする積もりだよ」

「何だって出来る事はあるでしょう。噂を流すだけだって、陛下の周りの警戒が強まるんだから、その分だけでも安全になるわ」

座っていたガーデンチェアからガタツと音を立てて立ち上がり、温室から出て行くとするセリアを、イアンが後ろから抱え込んで止める。咄嗟だった為につい後ろから抱き込む形になってしまった事にイアン自身も戸惑うが、それどころではない。

戸惑うイアンを他所に、それでも外へ出ようと抵抗を続けるセリアだが、そんなものの男の前では全く無意味に終わっている。それで

も構わず尚も出て行こうとするセリアには、流石のイアンも呆れてしまった。つい数日前にその行動をキツク注意したばかりだというのに。

しかし、セリアが焦るのも無理はない。自分達はいち早く情報を掴んだのだから、何らか事は起こせる。だが、それもその場凌ぎだ。何より、相手が大き過ぎる。少しの動きを見せた所で、根本的な解決には至らない。

「だからって、何もしないなんて」

「今は手を出すな」

冷めた口調のカールが発した声に、セリアは抵抗を止めそちらを向いた。そこでは腕を組み、偉そうにベンチに座っているプラチナブロンドの少年。

「どうして……？」

「敵が自ら飛び込んで来ようと言うのだ。その場で捕らえるのが一番効率的であろう」

「でも……それじゃ陛下が……」

「例え今回を凌いだ所で、敵を逃がす事と同じだ。敵が内部にいるなら、あぶり出す良い機ではないか」

競技会を逃せば、また敵は内部に潜み、次の機会を狙うだけだろう。それならば、多少の危険を冒してでもその場で叩き潰す方が結果としては合理的だ。

「上手く行けば、大本は潰せなくとも、足下は崩せる。そこから暫くは立ち直れない程に叩く事も可能だ」

「……でも」

そんな事が出来るだろうか。相手の動きも策も分からないのだ。しかも、今回の標的は国王。それを顧みず危険を冒す程の勝算があるのだろうか。

それでも、カールはその厳しい視線を、変える事はしなかった。

「ええ、先程も説明しましたが……」

不穏な動きがある時でも、フロース学園の授業は何事も無く行われている。セリアが上の空でヨークの話しを聞き流す間も、生徒達は懸命に教師の言葉を拾う。

あれからセリアの頭は競技会の事がずっと占めていた。国王暗殺など、物騒かつ厄介な事になるのは当然。暗殺、とまでいかないにしても、穏やかではない事件は起きるだろう。クルダス国民として、是非とも阻止したいが、自分にはその力が無い。けれど、何か出来ないだろうか。

そんな事を必死に考えるセリアは、ついこの間己の行動で危険な目にあったのは、すっかり忘れている様だ。

「それでは競技会ですが、他に立候補の方はいますか？毎年フロース学園は各競技三人選出する事になっていますが……」

ヨークの言葉にセリアはあつ、と声を上げた。その瞬間クラスの注目を集めてしまったが気にしない。

国王陛下も試合を観戦するなら、試合場こそが一番陛下に近い場所ではないか。直接声が届く様な距離には行けなくとも、少しでも近くに居られれば、何か動きがあった時に対処出来るかもしれない。そう思ったなら話しは早い。という事でセリアはさっと手を挙げた。

「セリアさん。どうされました？」

「ヨーク先生。競技に性別の制限はありますか？」

「えー！？ええっと、一応女性の参加も可能ですが……立候補ですか？」

ヨークは目を見開いた。名目上は男女問わないとされているが、実際に競技に出る女性は無に等しい。たまに勇ましいお嬢様が名乗

りを上げて、予選で敗退している。それ以前に、各校が選出する選手の中に入れるだけの實力を持った令嬢は、数が限られている。それを、地味でいかにも鈍臭そうな少女がやろうと言っているのだから驚きだ。しかも、毎年優勝者を出し、マリオス候補生という實力者が居るこのフロース学園で。

驚くヨークに、セリアは変わらず凜とした顔を向けていた。

「剣技の選手に立候補した!？」

「うん」

驚く候補生達を他所に、セリアは真剣な顔で頷いてみせた。その様子に候補生達は顔を見合わせ困惑した表情を作る。しかし、セリアの考えを聞き納得した。

「確かに、それが今は一番良いかもしれないな」

この少女の實力なら、間違いなくフロース学園の代表として勝ち残って来るだろう。だとすれば、少しでも陛下に近い場所へ行ける。敵の策も方法も、何も分かっている自分達にとって、それが唯一の手かもしれない。

本当ならば、セリアには是非とも後ろの安全な場所で見たい欲しい所だが、今回はそうも言っていられない。出来るだけ陛下の周りを信頼出来るもので見張る必要があるかもしれないのだ。その点では、候補生以外の生徒で信頼に値し、尚かつ力量があるのはセリア以外考えられない。

「それは良いとして、認められたのか？」

「取り敢えず、フロース学園からの代表選手を選ぶ試合には参加させて貰える事になったわ」

セリアはこう言っているが、そこまで行き着く為にかなりの葛藤



が生じた。

一言で言えば、クラスからの猛反発。男子生徒は、そもそも女性が剣を握る事に嘲りの視線を向け、女子生徒は、そんな候補生達の目に止まる様な、目立つ行為をさせてなるものと反対。誰もセリアの剣の腕を見た事が無いので、この反応も仕方ないのだが。

それをやっとの思いで鎮めたヨークが、戸惑いながらも許可してくれたのだ。彼には感謝してもしきれない。

「だとすると、剣技の選手は決まってくるな」

「はい。間違いなく、ランとカールの他はセリア殿になりますね」  
そういったザウルは、残念ながら例年の如く不参加である。人並み以上の腕を持っているといっても、得意としている競技が無いのだ。彼の特技といえばハモネス伝統の体術だが、残念ながらクルダスの競技ではない。なので、今回ザウルは観客席を見張ると言っている。

イアンも、ランやカールが出る剣技は避け、馬術を選んだようだ。とはいっても、彼の馬術の腕はかなりのもので、間違いなく学園代表にはなるだろう、という話した。

気になるルネだが、デナトワレの件でセリアを救った弓で出場する予定である。セリアは後になって知った事だが、彼の弓の腕はかなり誇れるものがあり、狙った的は百発百中らしい。そんな姿、普段の温厚な天使の微笑みからは想像もつかない。けれど、あの暗い地下で短剣を振りかざすアルディの腕を正確に射抜いた事から、その技量が窺える。

ランとカールだが、当然の如く剣技で参加する事に決めていた。カールは出場辞退するのでは、とも思われたが、ランスロットには負けたくない、と普段の対抗意識が彼を動かしたらしい。

こういう行事にカールを参加させるには、よっぽどの理由かランへの対抗心、そしてルネの鶴の一声を用いない限り、不可能である。こうなってくれば、セリアが剣技で勝ち残る可能性は低くはない。というより、間違いなく代表入りであろう。学園一、二を争うラン

とカールに、まともに対抗出来るのは学園内を探してもセリアだけなのだから。

なにはともあれ、問題なのは国王陛下である。事態がどう動こうと、敵が国の君主の命を狙っている可能性があるのだ。その事が、今候補生達の頭を最も悩ませている事であった。

## 試合 1 (後書き)

今回は、流石に下手には動けないな。だからって、慎重にとも言ってられねえけど。とにかく、俺達に出来る事はこれくらいだからな。それにしても、あいつはやっぱり只のお嬢様で収まる様な奴じゃねえな。

## 試合 2

校長室では、先程から上機嫌で高笑いしている校長をクルーセルが微笑ましく見守っていた。

「嬉しそうねえ、校長」

「それはそうだろう、クルーセル君。こんな面白い事はない」

そう言って校長が広げてみせたのは、各クラスから提出された競技会への立候補者の一覧だ。その中からある者の名前を見つけ出した校長は、その瞬間から今まで笑い続けている。クルーセルも同様に喜んでいる様で、クスクスと忍び笑いを響かせていた。

逆に、校長の笑いの原因である、己のクラスから立候補した者の名前を書いた紙を持って来たヨークは、顔を青ざめている。その横に立っているハンスも、笑顔とは程遠く、何処か不満を隠した様な顔だ。

「校長、本当に宜しいのでしょうか？ 私としてはやはり賛成しかねるのですが……」

「その通りです。仮にも女生徒が剣技など」

「代表決定戦への出場は許可したのですが、もしお怪我でもされたら」

「そもそも、この名門校フロース学園の生徒たるもの、慎重と奥ゆかしさを持って行動すべきです。にも関わらず彼女は次から次へと彼女が伯爵令嬢である事をふまえれば、候補生達よりも質が悪い」

ハンスにしてみれば、女生徒が剣を振り回すなど考えられない事なのだ。逆にヨークは、あの何処か頼り無さげで、見ているだけで危なっかしい少女に剣など握れるのか、と危惧している。ブツブツと日頃から溜まっている不満を洩らすハンスと、不安を募らせるヨークに、校長が言い聞かせる様に言った。

「まあ二人共、そう心配をするな。全ては代表決定戦が決めるだろう。もし、彼女に実力が伴っていないのであれば、それは結果とし

て出る。焦っても仕方ないだろう」

「……………ですが……………」

「それに、本人が強く希望しているのだ。若さ故の冒険、というのも好いものだよ」

どんな些細な物事でも、それを思い切り楽しむ傾向があるこの校長こそ若い、というより子供っぽいと言った方が適當かもしれない。隠す事もせず渋い顔をするヨークとハンスを気にする事なく、ハハッ、と愉快そうに校長は笑い続けた。そんな大事にはならないだろう、と校長は軽く考えているように見えるため、その言葉に説得力は殆ど見られない。試合で彼女に力がなければそれまでだろうと、言っている事自体は的を得ているのにだ。

「それはそうなんだけどねえ……………」

同僚と上司の会話を、微笑ましく聞いていたクルーセルがポツリと零した言葉は、残念な事に誰の耳にも届いていない。

代表決定戦を控えたセリア達は、稽古場で猛練習中であつた。といっても、彼等に練習など必要ないようにも思うのだが。試合に備えて自分達も、と集まっていた他の生徒達は、候補生達の姿を見るなり遠慮してそそくさと退散してしまった。その為、今稽古場には候補生とセリアしかない。自由に動き回れるので、それはむしろありがたいのだが。けれど、セリアにはどうしても多少の申し訳なさが入み上げて来る。候補生達は慣れているのか気付いていないのか、皆平然としていたが。

多くの生徒が去った稽古場からは、剣と剣が交わる音に混じって、候補生達の会話も聞こえて来た。

「それに、しても……………こんな時に、仕掛けてくる、ってことは」

「王宮内でも、怪しまれている……………という事か……………」

「だから誰の……所為にでも出来る……競技会、ね」

息を切らしながら、それでも会話を続けるセリアとランは、尚も剣を下ろさない。真剣に相手を見据え、反撃の機会を窺っている。会話をしながら、それでも軽い動きで剣を繰り出す姿勢は、流石というべきか。

敵にとって、人の多い場所で行動を起こす利点といえば、考えつくのは容疑者が格段に増える事だ。つまり、王宮内では足がつき易い、という事だろう。しかし、人が多ければ、それだけ目撃者が増える危険も増える。その事を顧みずそれでも事を起こそうというなら、一体どの様な手を使うというのか。

腕に疲労を感じ始めたセリアが身を翻してランの突き出す剣を躲し、そのまま腕を振り下ろした。捕らえた!と思ったが、それは次の瞬間防がれてしまう。途端に、金属と金属がぶつかり合う鋭い音が辺りに響いた。

「アルディ男爵って、たしか……」

「コーディアス侯爵とも……親交があったと、聞いている」

「王弟殿下も、何も知らない、ってわけじゃ……ないわよね」

「恐らく……」

例え自分達の憶測だとしても、王弟が野心家だという噂を聞けば、それが有り得ない事ではないと言える。しかし、まだ何の確証もない。自分の聞いた来月の末という言葉が、この競技会を示しているのかも定かではない。思い過ぎしならばそれに越した事はないが、やはり警戒するくらいはした方がいいだろう。

その後、長く続いた剣の攻防を制したのは、セリアであった。

今まで剣と問答を交わしていた二人は、ランの負けを確認しながら息を整える。その様子を、遠くからイアン達は感心しながら眺めていた。

改めて見ても、セリアの腕がかなりのものだということを感させ

る。体力こそ無いかもしれないが、それも自分達男と比較した場合だ。もし、深窓の令嬢等と比べれてしまえばその差は圧倒的であろう。そして、女性特有の身の軽さは確実に相手の動きを捕らえる。この分なら、代表決定戦も問題無い筈だ。何より、あのランやカールと互角に渡り合い、何度も負かしているのだから。もしかしたら競技会でも優勝してしまうかもしれない。

「二人共、お疲れ様」

稽古場の真ん中から戻って来る二人に、ルネが労りの言葉をかけ、それにセリアも笑顔で返す。けれど、体力も限界に近い所まできている為、その笑顔は何処か頼りない。もう一戦ランと交えれば、いとも容易くその剣を弾き返されてしまうだろう。

フウ、と息を吐きながら稽古場の端にあるベンチに腰を下ろしたセリアは、そのまま次の試合に移る候補生達を眺めていた。彼等は次々と試合をやったのけるが、自分は連続で勝ち続けることはできないのだ。これが、他の生徒が相手であったのなら問題は無いのだろうが、相手がラン達では到底適わない。毎回、多少の休憩を挟む必要がある。

彼等のように、もう少し体力があれば、と思うのだが、それは流石に望めそうにない。

そんな事を考えていると、遠くで再び剣が弾かれる音が響く。イアンの握っていた剣を、ランが跳ね返したのだ。先程あれだけ動き回っていたというのに、この自分との差はなんだ。と、手合わせには勝ったにも関わらず、セリアは悔しさを覚える。

自分もいつまでも休んではいけない、と勢いよく立ち上がり、ベンチから離れた。

「セリア、もういいのか？」

「うん。全然平気」

「じゃあ次はカールだな」

あらかじめ誰と試合をするか決めていた彼等は、セリアの次の相

手を呼ぶ。競技会が迫った候補生達は、一日少なくとも一回はお互い剣を交える様にしていた。といっても、剣技で出場する三人同士の手合わせが主であるが。

ちなみに、馬術も全員でイアンの練習に付き合っていたりもする。唯一ルネだけが、毎朝一人で弓を射ているのだが、これは集中力を要するこの競技は一人の方が効率が良いと言ったルネの希望だった。

一陣の風が吹く中、セリアとカールは稽古場の中央で剣を手にお互いを睨み合っていた。といってもカールの場合、四六時中相手を睨んでいる様にも感じるが。そんな事をセリアが考えていれば、それを敏感に感じ取ったのか、カールの瞳がより一層冷たさを増す。それにセリアもひいっと内心悲鳴を上げた。

ランとの手合わせではそうでもないが、カールとの勝負は毎回、身を切る様な緊張感が襲う。恐らく、カールのこの冷たい雰囲気がそうさせるのだろうが。

「はじめ!!」

目の前の敵にすっかり集中していたセリアは、試合開始の合図を理解するのに、一瞬遅れてしまった。その間に、自分を射抜いたバイオレットの瞳が迫って来る。

確実に自分の手にしている剣が捕われそうになった瞬間、セリアは反射的に後ろに引く。それを追う様に、相手の剣が突き出されて来た。それを己の剣で防ぎ、力を込めて振り払う。

「ところで、せめて、国王陛下に……危険はお知らせした方が、良いんじゃないかと、思ったん、だけど……」

「そうした所で……それをどう証明、する積もりだ」

セリアは、今思い付いたかの様にカールに聞いてみた。流石のカールも、動きながらでは言葉が切れる様だ。それも相手がセリアやランの場合に限るのだが。

カールの冷めた声が發した答えに、セリアもうっと言葉に詰まる。



確かに、ただの学生が何を言おうと、立証出来なければ戯れ言に過ぎないだろう。そもそも、自分達の話を聞いてくれる様な人物だろうか。仮にも一国の王なのだ。根拠の無い言葉に耳を貸してくれるか、分らない。

「カールは……お会いしたこと、あるんでしょう」

こうして友人として手合わせしているカールは、ローゼンタール公爵家の嫡男。陛下の信用も熱く、忠臣である家の跡継ぎだ。何度か王宮にまで足を運んでいる上、彼の婚約の時は陛下自らの承認も得た。

交えた剣の先で頷いて見せたカールに、セリアの中に僅かな好奇心が湧く。

「どんな方だった……」

「……なに」

「国王陛下……どんな方だろうと、思ってた」

「……………」

突然の質問に、カールも戸惑っているのか、中々答えようとしな。しかし、その内に口を開いた。といっても、突き出される剣の力は少しも緩まないが。

「陛下、と呼ぶに相応しい方、だな……」

その言葉にセリアはかなり驚きを見せる。あのカールが、相手に対しここまで敬意を見せるとは珍しい。セリアは剣を振るいながらも感心してしまった。

人の器を正しく見極める目を持ったカールだ。もし、相手が尊敬に値しない人物であると感じれば、その容赦ない態度は露骨に出る。取るに足らない存在と判断したなら、興味も示さない。それだけの自信と、それを裏付ける努力があつてこそその行為だろうが。

そのカールが、おそらく彼にとっては最高、といっても良い程の言葉で表しているのだ。

「立派な方、なのね」

セリアの言葉にカールは無言で頷く。

長いクルダスの歴史を紐解けば、愚王と呼ばれる存在が国を統治した時代があった事は否めない。それが、どういった行いによってその様に評価されたかは様々だが。しかし、今は違う。英明な王である事は、クルダスの情勢からも窺い知れる。そして何より、実際に合った事のあるカールがこの様に言うのだ。

「なら、絶対に、何とかしないと、ねっ!!」

最後の言葉と同時に、セリアは勢い良く腕を振り抜いた。それと同時に、鋭い金属音が辺りに響く。

一瞬の時間が止まった様な錯覚の後、セリアの視線の先では己が弾き飛ばした剣が転がっていた。

「フン。当然だ……」

先程まで握っていた筈の剣が、後ろに転がっている事を確認したカールが、それでもどこか満足そうに頷いてみせた。

先に温室へ戻っていてくれ、と言い残したセリアは急いで着替えを済ませていた。早足でこの場まで来たセリアだが、やはり女子の更衣室は遠い。早めに着替える積もりだが、彼等には先に帰ってもらおう事にした。

申し訳程度に建てられている上、殆ど見向きもされないこの場所は、所々がたついている。セリアが使用するようになる以前は、殆ど誰も見向きもなかった場所なので仕方ないが。他に利用する者といったら、他生徒や教師に隠れて逢い引きする男女くらいだろうが、それも少ない。何もこんな場所でなくとも、他にもよっぽど雰囲気の良い場所はあるのだから。

年頃の娘とは思えぬ速度で着替え終え、乱れた髪もそのままに、セリアは足早に更衣室を飛び出した。年頃の娘ならば恥じらいを見

せ、もう少し身だしなみを気にしたりするのだろうか、そんな事は欠片も望める筈がなく。セリアはただ、一刻も早く温室へ辿り着く事だけを目的としていた。

「セリアちゃん」

間延びした声が響いたと思えば、後ろから軽く肩を叩かれる。驚いて振り返れば、案の定クルーセルがいつもの様にニコニコと笑みを飛ばして来た。

「聞いたわよ。競技会に出るんですって？」

「あっ、はい。といっても、まだ代表決定戦に出るだけですけど」

「もう、遅いんだから。惚れ惚れするわあ」

セリアよりもよっぽど女らしく、寧ろ乙女らしく絶賛してくるクルーセルに、セリアも何と言ったら良いか分からず苦笑する。遅しと言われた事に、喜ぶべきなのだろうか。残念ながら、悲しくもないが、嬉しくはない。

突然現れたクルーセルを無視して温室へ走る訳にもいかず、かといって温室に居る彼等を待たせる訳にもいかず、セリアは遅くも速くもない、なんとも微妙な速度で歩みを進めた。その速度に、クルーセルも文句一ついわず合わせる。

「だからイアン君達も骨抜きにされちゃうのよねえ」

「……はっ？」

「ああ、いいわあ。戦うお姫様なんて、憧れちゃう」

「………は、はあ………？」

そのまま似た様な言葉を繰り返すクルーセルだが、セリアはその言葉の一つも意味を理解出来ていない。しかし、質問すると、更に訳の分からない言葉を連発されそうなので黙っておく。

「でもね、セリアちゃん」

「あっ、はい」

「あんまり無理はしないでね。セリアちゃんは女の子なんだし、危ない時だってあるんだから。」

クルーセルの言葉にセリアはうっ、と詰まった。言われなくとも、

何度もその危ない目に遭遇しているのだ。しかし、クルーセルにま  
で言われるとは思っていなかった。候補生達にも言われたが、そん  
なは無謀をしている様に見えるのだろうか。

しかも、クルーセルの目がいつもと違い、どこか言い聞かせる様  
に見えるのも気になる。普段なら、もっと軽い感じで話しかけてく  
るのに。

「でも、セリアちゃんの勇姿は是非とも見てみたいけどね」

「は、はあ……」

そう言っつて片目を瞑って見せたクルーセルに、セリアはもはや何  
と言っつて良いか分からなくなっていた。

少なからずクルーセルに「女の子」と言われた事に引っ掛かりを  
覚えたセリアは、トボトボと道を歩いていた。まるで、競技会に出  
るな、と言われた様でどうも気になる。直接な言葉はなくとも、何  
となくそんな意を含んだ様な目だったのだ。セリアがただそう感じ  
ただけかもしれないが。

それ以前に、真面目さは無くとも、妙な説得力はあった。危険が  
伴うだろう、というクルーセルの意見ももつともだ。たとえ、彼と  
セリアの言う危険の意味するものが違っていたとしても。

競技会に出る事を躊躇う訳ではない。自分が名乗り出る事を快く  
思わない者が居る事も想定内であった。ただ、ハンスや他の者なら  
ともかく、クルーセルが真っ先に釘を刺して来るとは思っていなか  
ったのだ。

「セリア殿、どうかされたのですか？」

「えっ!？」

いつの間にか温室に着いていたらしい。俯き加減で考え込んだま

ま無言で入って来たセリアに、候補生達は心配で声を掛けたのだ。

「なんかあったか？」

「心配事？」

そのままザウルの声に反応した様に顔を上げてセリアを覗き込むイアンとルネ。赤みがかった瞳と深緑の瞳がジッとこちらを見詰めて来る。

「競技会の事で、何か気になるのか？」

「フン。今更怖じ気づいたのではあるまいな？」

最後に何時もの様に鼻で笑ったカールが、呆れた様に尋ねて来た。いつもの軽い挑発だと分かってはいるが、ぼんやりしていたセリアは咄嗟に反応してしまう。といっても、普段からセリアはカールの煽る様な言葉に少なからず反発してしまう事が多いのだが。

「ま、まさか！」

「だったらさっさと顔を上げろ。やるべき事は残っている筈だ」

冷たく言われセリアは言葉に詰まった。今はもう慣れたとはいえ、やはりカールの冷えきった声にセリアは何も言い返せない。

「カール、言い過ぎだ。セリアにも悩みや不安くらいある」

「これがそんな可愛気のある思考する筈がなからう。そんな事も分からないか」

「お前は人への配慮をもう少し表したらどうだ？だから政策もすぐ強引になるのだ」

「ほお。貴様こそ、その甘い思想を改善するべきではないのか」

なんだかカールに若干失礼な事を言われた様な気がしないでもないが、再び火花を散らし始める二人を、セリアはオロオロと見比べた。ランは段々と温度を上昇させているし、逆にカールの周りは急激に冷え始めている。こうなった二人は最後は犬も食わない様な舌戦に突入するので、始末が悪い。

その様子にイアン達は忍び笑いを始めてしまった。以前は二人の様子を心配そうに見守ったりもしたが、今は仲裁役がいるので大丈夫だろう、くらいに考えているのだ。

目の前で早々に臨戦態勢を整えつつある二人に、どうしたものかと頭を悩ませるセリア。こうなった二人が、何を言っても聞かない事は既に分かっている事だ。実は止めるのも面倒なのだが、ここで抑えなければ二人の壮絶な舌戦を聞かされ、運が悪ければ巻き込まれたりもする。なので渋々だがセリアも必死にランとカールを落착かせようとしていた。

こちらにまで被害が及ぶ様な事態に持ち込むものか、と二人を必死に止めようとするセリアは、クルーセルに言われた言葉で先程まで悩んでいた事など、既に忘れ去っていた。

## 試合 2（後書き）

あつという間にこの日が来ちゃったけど、皆は大丈夫かな？特に心配なのはやっぱりセリアだね。気を張りすぎて怪我しなければいいけど。まあ、そんなに気にしなくても大丈夫だとは思う。

今の所は何処も問題なさそうだけど。でも、僕達の予想通りだったら、やっぱりこの後……

でも、その事ばかり気にしてたから、気付けなかったのかな。

### 試合 3

普段は人が少ない稽古場だが、この日ばかりは多くの生徒が集まっていた。その中には、しっかりとセリアの姿もある。

フローズ学園は、所謂勝ち抜き戦で代表選手を決める。それぞれのクラスの担任が審判を勤め、格クラスから二人程選抜し、その上で競い合わせるのだ。稽古場は広く、既にあちらこちらでクラスの代表を決める試合が行われている。

「セリアさん。大丈夫ですか？」

知らぬ間に力が入っていたのか、少し意識が飛んでいた為動かなかったセリアを心配した様子のヨークが後ろから声をかけた。周りには怖じ気づいたか、放心している様に映っていたようで、所々から忍び笑いが聞こえてくる。慌ててヨークの声に答えたが、彼はまだ何処か不安そうにこちらを見ていた。

「今からでも棄権は出来ますが……」

「と、とんでもない。お願いします!!」

そんな棄権だなんて冗談ではない。こちらは何が何でも勝ち残らねばならないのだ。学園内で候補生以外の相手と手合わせをするのは始めてだが、負けるわけには行かない。

よしっ、と気合いを入れ視線を上げると、その先ではセリアに氣付いた候補生達が軽く手を振っていた。彼等の話しによれば、ランやカール以上の剣の腕を持つ者はまず居ないとの事だったが、それでも油断は禁物だ。

「それでは始めても良いですか？」

「は、はい」

ヨークがやんわりと問いかけると、セリアは力強く頷いた。

そのまま彼の指示に従い、セリアは一人の男子生徒と向かい合う。お互い手には練習用に刃の潰れた剣を持ち、相手を見据え構える。ここ最近は毎日の様に経験した姿勢だが、候補生達と唯一違うのは、



相手がどうも嘲りの視線を向けてくる事だろうか。この学園へ来る前から、もう慣れてしまっているものだ。その視線の理由も分かっている積もりだし、文句はないのだが、やはり好い気分はしない。

男子生徒にしてみれば、軽い好奇心で剣を握ってみただけの貴族令嬢に、自分が負ける訳はない、と思っているのだろう。それこそ、地味なだけの小柄な少女に自分が剣で劣る筈がない、という自信で満ちていた。しかし、それが大きな間違いであったことは、すぐに証明される事になる。

「……始め！」

やはりまだセリアに対する不安を拭い切れていないヨークが声高に合図すると、すぐに金属同士がぶつかり合う音が鳴り響いた。

「おめでとう。君達には競技会でフロース学園代表として頑張って貰いたい」

心底上機嫌の校長の前では、ザウルを覗いた候補生とセリア。その他数名の生徒が一行に並んでいた。

剣技の代表決定戦は、驚く程早く決着がついた。女など大した事はないだろう、と軽んじて向かって来る相手を、セリアがバッサバッサと一蹴して行ったのだから当然といえば当然かもしれないが。それに目を見開いて驚くヨークや他生徒の視線を物ともせず、セリアはさっさと挑戦者を一掃していったのだ。そして、最終的に勝ち残ったのは候補生とセリアのみ。

その結果に大満足の様子の校長は、先程からニコニコと頬も緩みまくりである。クルーセルも同様で、嬉しそうに目を細めていた。それとは対照的にハンスやヨークは納得がいかないといった感じに眉を顰めている。セリアが代表戦を勝ち抜いたという事態に、理解

が追いついていないのだ。

「二週間後、君達には王都へ赴いてもらう。我々も応援に駆け付けるよ。それでは、頑張ってくれ」

はつきりいって、気味が悪い程嬉しそうにする校長の言葉を、セリアは半分聞き流していた。今セリアの脳を占めるのは、国王陛下の事ただ一つである。なんとか代表にはなれたのだから、あとはどうすれば陛下を守るだろう。下手に動き回る訳にもいかず、だからといって相手の出方も全く分からない。せめて、いざという時の弾除けくらいにはなれるだろうか。

そんな風にグルグルと思考を巡らすセリアを、ジッと見詰める視線が一つあった。それは、決して好意的なものではなく、むしろ悪意に満ちている様なものだった。

代表決定戦で、一人の貴族令嬢が剣技で勝ち残った、という噂は瞬く間に学園中に広まった。そうなれば当然、ある人物の耳にも届き、それを疎ましく思うのは仕方ないといえる。なんといっても、彼女には今までにも何度か己の計画を阻まれた経験があるのだから……まったく好ましくない。

一体、何処まで邪魔をすれば気が済むのか。大きな障害になる可能性は少ないが、だからといってすぐ傍に居座られていい筈が無い。間違いなく、多少の妨害にはなるだろう。彼等を見くびっていたかもしれないと、丁度思い始めた矢先にこれだ。全てを知っている風ではなかったが、何かしら感じ取っているのは確かだろう。

どうも目障りである。あれさえ居なければ、どうとでもなったものを。

あまり気は進まないが、仕方あるまい。出来る限りの手は打っておく必要があるだろう。

「よかった……」

その後、漸く校長の説明から解放されたセリア達は、温室で長く続いていた緊張を解いた。

一体どうなるだろうか、とセリアはかなり心配していたが、なんとか代表に選ばれた事にホッと安堵する。

「言ったろ。お前なら大丈夫だって」

「ああ。君の腕なら問題は無いと思っていた」

息を吐くセリアの肩をイアン達が笑いながら軽く叩く。

しかし、安心ばかりはしていられない。問題は次だ。自分達はどう動けば良いだろう？

いくら代表選手といえど、容易に陛下には近づけない。それどころか、その周りは恐らく王国軍できっちりと警護されている筈だ。敵も動き難いだろうが、それは自分達も同じ。

「やっぱり、陛下に直接お話しすることは出来ないのかな？」

「本気で伝えようと思うなら、一度だけ機会はある」

「えっ!？」

突然のカールの言葉にセリアは驚いた。相手は国王陛下。いくら近くへ行けたとしても、直接言葉を交わすなど到底叶わない人物だ。しかも、証拠も何も無い状態で、危険を知らせる事は容易ではないはずだが……

「剣技の優勝者には、陛下が直々に優勝杯を渡される」

「そ、それって……!!？」

「無礼を承知で、確証も無い危険を伝える積もりならば、その時以

外あるまい」

「っ……っ」

痛い所を突いた言葉に、セリアは一瞬言葉に詰まったが、カールのありがたい情報に目を輝かせた。

カールの言う通り、もし陛下に何かしら危険を知らせるなら、その時が唯一の機会だろう。優勝杯が直々に手渡しされるならば、声が届く距離に行けるという事なのだから。

しかし、その前に何らかの確証が欲しい。まだ確信がある訳でもないのに、国王に対して命が危ういなど、軽々しく言える事ではない。しかも、それが実の弟が企てているかもしれないのだから。

「でも、王弟殿下とは実の兄弟の筈なのに……」

「色々あるんだろ。それこそ、王族の事となれば複雑なのは、歴史が物語ってる」

そんな色々で済まされるような事ではないのだが、自分達が考えでも始まらない、とイアンは敢えて軽く言ってみる。ただの貴族と違い、王族はまた特殊だ。国の頂点に君臨する分、責任も、栄光も、次元が違う。

「いつの時代にも、分不相応な野心を持った輩とはいるものだ」

「な、それは……ちよつと」

冷たく言い放つカールに、セリアは冷や汗を流す。仮にも王弟殿下に対して、いくらなんでも言い過ぎではないだろうか。

けれど、王族ともそれなりに関わりのあるローゼンタール家の嫡男であるカールだ。何かと王弟殿下とも接触があったのだろう。カールがいくら冷たいといっても、人を見る目は持っている。その彼がそう言うのだから、少なくとも現国王陛下以上に英明という訳ではない、という事だろうか。

なにはともあれ、これで目先の目標は決まった。

「優勝する以外、無いってことよね」

「どうしても、というならそうなるな」

恐らく、カールの言うようにその時が唯一の機会。無礼だろうと  
なんだろうと、国の未来がかかっているかもしれないのだ。その時  
を逃す手はないだろう。そう納得した候補生達は、お互い顔を見合  
わせてゆつくりと頷いた。

その後の話し合いの結果、陛下に一番近い人間、という事で陛  
下伝えるのはカールに頼む事になった。何度か直々に言葉を交わ  
した事があるというのだから流石というべきか。対抗心むき出しの  
ランと負けず嫌いのセリアも、この時ばかりは何の文句も言わない。  
それどころか、優勝にはカールを、という考えはランの案だった。

そうなれば、ランとセリアの役目は他の選手を出来るだけ蹴散ら  
して行く事になる。しかし、その点は心配無いだろう、と候補生達  
は余裕の表情を浮かべる。優勝が難しい、とはいってもカールやラ  
ンならば問題は無いのだ。なにせ、カールは去年の剣技優勝者であ  
り、ランも準優勝しているのだから。

「しかし、何時どんな形で妨害が入るか分からない。それに、それ  
まで陛下が安全かどうか」

「陛下の警護もそれなりの筈だ。早々に手を出す事はしないだろう。  
なんらかの機を計らっている筈だ。それを見逃さない事だな」

こうして候補生達が不安を募らせる競技会は、直ぐに訪れる事と  
なる。

「セリア。大丈夫か？」

「あう。えっと、その……」

王都へ向かう汽車にフローズ学園代表選手が乗り込む中、セリアは懸命に人混みを掻き分けていた。自分達と同じ理由で王都へ向かう者で溢れかえる駅内を、鈍臭いセリアがすんなりと通れる筈もなく。先を行く候補生達を必死で追いかける。

人波に押し返され、あっちへ行ったりこっちへ行ったりを繰り返すセリアを、冷や汗を流しながら見守る候補生達。先程から何度か助けようと手を伸ばしたりしているのだが、差し出された手を掴む、などと可愛らしい思考、焦るセリアに浮かぶ筈もなく。ただただ必死に候補生達に向かって歩くだけだ。しかし、実際には殆ど意味を成しておらず、ズルズルと流されるだけ。

やっとの思いで辿り着いた車内に、セリアは大きく息を吐きながら腰を下ろす

「つ、疲れた……」

「お疲れ様」

ニッコリと笑うルネに、セリアも乾いた笑みを返した。どうしてあの人混みの中を彼等はあかも容易くすり抜けてしまうのだろう、と疑問に思う。背の高いイアン達は納得出来るとして、ルネは彼等より幾分か小柄である。平均男性よりも若干低いくらいだろうか。それでもセリアよりは十分身長があるのだが。にも関わらず、あの様にスルスルと人の間を歩けるのはどうしてだろう。

「本当にセリアって面白いよね」

「へっ？」

あんなに身軽に剣を振るうくせに、こういう時にはどうしてああも鈍臭いのだろうか。けれど、決して別人という感じはせず、やはり何処かセリアらしい。セリアがルネの事を疑問に思う以上に、ルネ達候補生の方がセリアの行動を不思議に思っていた。

「本当に面白いよね」

「……？」

再び言われた面白い、という言葉にセリアは首を傾げる。はて。何か可笑しな事をしただろうか？

頭を捻って考え始めるセリアを他所に、候補生達は現状を思い出して、表情を厳しくした。

「何かあったら直ぐに言う様に。約束出来るな」

「……はい」

数日前から何回も言われた言葉に、セリアは再度頷いた。もう何度目になるだろうか。何か気になる事があればまず彼等に言う様にと散々言われ続けているのだ。まあ、それも当然だろう。

セリアがいくら理解した、と意思表示しても全く聞き入れて貰えず、何度も同じ言葉を聞かされている。いい加減セリアもうんざりしてくるが、デナトワールの件で彼等に迷惑を掛けてしまった後ろめたさから、何も言えない。

セリアは話を逸らす様に、先程ヨークから渡された今日の予定表に視線を移した。

「開会式の後に、剣技の……一次試合？」

「剣技は参加者が多いので、一次と二次に別れている。その間に弓や馬術等の競技が行われるんだ」

「あ、なるほど」

その間は休憩していて良いらしい、ということにセリアは喜んだ。その後のランの話では、一次でも参加者が多いため、一人一人試合の間に十分な時間があるようだ。体力が続かないセリアにとってキツくなるか、とも思っていたが、これなら大丈夫かもしれない。

競技会、という今まで触れた事の無い世界への期待で忘れてしまいくらいになるが、今日は物騒な事件が起きるかもしれないのだ。十分に注意する必要がある。沸き上がる不安を押さえ込み、セリアはグッと気合いを入れ直した。

普段からかなり賑わっている王都だが、今日は少し違っていた。この日は沸き上がる熱狂的な声援が、王都の空を埋め尽くしている。「そこまで！！！」

弾き飛ばされた剣に、観客からは「オオッ！」と歓声が上がる。特に今の試合では、見た事の無い少女が、屈強な若者を打ち負かしたのだから尚更だ。始めにセリアが競技場に現れた時は、所々から忍び笑いや批判的な声も聞こえたが、今はそれも治まっている。直ぐに敗退するだろう、と笑っていた者達だが、今は少女の活躍に驚くか、貴族令嬢にあるまじき行為と呆れるか、二つに別れていた。

そんな中、汗を拭いながらセリアは辺りを見回す。思っていたよりも人が多い。一般にも解放されているらしく、何処を見ても人で溢れかえっていた。競技場は幾つかに別れていて、予選はそれぞれ小さめの場で行われているようだ。今も金属同士がぶつかり合う鋭い音が耳に響く。

メインの会場では別の競技が行われているらしい。そして恐らく、国王もそこで試合を観戦しているのだろう。

セリアは再び競技場の外に設けられた休憩所へ向かう。次の試合に備え、体力を回復させる為だ。流石に各校から選ばれた選手だけあって、強者が多い。とはいっても、毎日ランやカール達と剣を交えていた為か、それほどの手応えは感じなかった。それよりも、客席の方に不審な動きは無いかと気になる程である。

そうしてセリア達が順調に勝ち進んでいると、剣技の一次試合が終了となった。ここで大幅に数が減らされるらしく、元の三分の一も残っていない。剣技は二次試合からメインの競技場も使うらしく、その間に他の競技を全て済ませるのだ。



負けた選手は殆どが観客席に引き上げ悔しさを噛み締めながら自分を負かした者達のその後の試合を観戦する。残った者は専用の休憩所へ移り、次の試合に備え英気を養うのだ。

競技場の外に設けられた休憩所は、テントの様な幕で仕切られている。広さはそれなりに確保されていて、格競技の選手が集められている様だ。その中にはしっかりとセリアの姿もある。ただ、周りには逞しい青年ばかりで、かなり浮いて見えるのは仕方ない。しかし、なんだか周りからジロジロと奇異の視線を向けられてしまい、セリアもいたたまれなくなる。

オロオロとしだすセリアに、声を掛ける者があった。

「あの、女性の方はこちらでお願いします」

「えっ！？ あ、はい！！」

どうやら女性専用の待機場所があるらしく、セリアはそそくさと声に誘われるまま付いて行った。あまりこの場に留まりたくなかったので、助かったと胸を撫で下ろす。流石に周りの視線を一身に集めていては、精神的に休まらないというもの。

案内された場所は、今までの休憩所の隣にあり、同じ様にテントで仕切られている場所。ただ唯一違うのは、大幅に面積が減っている点だろうか。中には当然だが誰も居ない為、セリアはポツンと一人で取り残される形になった。明らかに即興で作ったな、というのが分かるほど、こちらは何も無かった。唯一、簡易椅子だけがセリアと同じ様にポツンと置かれている。男性の休憩所には、色々とベンチだの何だのと用意されていたのだが。

どうしようかと悩んだセリアは、取り敢えずその椅子に座ってみることにした。右も左のテントの白に包まれた空間だが、その直ぐ外には湖が広がっていて、かなり落ち着ける。湖といっても、それほど広い物ではない。それでも、無いよりはマシ、という事だろうか。湖の向こうは広々とした公園で、休日には家族連れや恋人達が街の喧騒から逃れるために集まる。クルダスでも大きく発展している王都だが、その端の方にはまだこの様に自然が残されているのだ。

時折聞こえる歓声を背に、セリアは思考を巡らせていた。なんとか二次までは勝ち残った。今後どうなるかは分からないが、なんとかカールに国王陛下に会ってもらわねば。

一見した所、客席に不審な点は見当たらない。出場選手や係員の中にも、怪しい人物は居なかった。観客の方はザウルが回っている筈だが、一人で確認するには無理がある。なので、出来るだけ国王陛下が列席されている場所の近くを見ると言っていた。しかし、陛下の周りは警備も注意を払っている筈である。なので、観客に混じって、という可能性は低いだろう。

こんな派手な場である。カールの言った通り早々に手を出して来る事はしないだろうが、一体どんな方法を使うのだろうか。

そんな風に頭を捻るセリアに背後から近づく影が一つ。

「グッ!？」

突然、後ろから口を何かで塞がれたと思ったら、羽交い締めにされた。それも、かなり強く。急な事にセリアは驚き抵抗するが、全く意味を成していない。混乱しながらバタバタと手足を振るが、空を切るだけである。その間も首を強く絞められ、肺に送られる酸素が少なくなってきた。

「うっ……」

なんだ!？ 一体どういうことだ!！

焦り出す思考と足りない空気に、必死に腕を振って抵抗する。その瞬間、自分の爪が何かを引っ掻いた感触がした。と思えば、後ろの相手が一瞬怯む。わざとではないが、相手に多少の傷を与えてしまったようだ。その隙を見逃さず、セリアは相手の足の甲を思い切り踏みつけた。

「くっ!？」

急な打撃は相手も想像していなかったのか、一瞬緩んだ拘束から抜け出し、セリアは咄嗟にテントの外へ転がり出た。そして敵を確認する為バツと振り返る。しかし、後ろには人の影は見当たらず、

すぐ横で誰かが走り去る音が響いた。反射的に視線でその後を追うが間に合わず、確認出来たのは競技場内へ消えて行く黒い影だけ。その後を追うが、その姿を見失ってしまった。

「……………」

一体なんだったのだろうか、今のは。感じたのは確かな殺気。首を絞める力が相当の物だったことから、本気で殺意があったのだろう。しかし、何故自分を……

敵に取って自分は何の関係も無い存在の筈である。確かに、国王陛下に対する謀反の企てを承知してはいるが、相手がそれを知る術は無い筈である。こういった事を恐れて、自分は候補生以外の誰にも話していないのだから。それは、候補生達も同じの筈だ。では今自分の首を占めていた人物は、一体何の目的があったのだ？

疑問に思っても、返って来る声といえば、再び湧き上がった歓声のみであった。

### 試合 3（後書き）

ここまでは何とか来れたけど、後はどうする。まだ動きはないけど、ただ待っているだけでも出来ない。そんな事してる間にも、時間は少なくなってきたのに。

とにかく、もう一瞬も気は抜けない。

## 試合 4

候補生達は先程まで見当たらなかった友人が、急に外から駆け込んで来た姿を見て驚いた。そして、その後セリアが語った話しに、更に目を見開く。

「襲われた!？」

「……う、ん」

「それで、大丈夫だったのか？怪我は!？」

「なんとか平気……それより」

男性用の休憩所に顔を出したセリアは、候補生達を見つけ出し、今しがた起こった事を相談した。話を進める内に、候補生達の視線が段々睨む様なものになって行っただけで、少し恐ろしかったが咄嗟の事でよく確認できなかったが、伝えられる事は全て伝えたいもんだ。

「それより、じゃねえだろう！何があった？本当に大丈夫なのか!？」

「この通り無事。それよりも、やっぱり今日……」

両手を広げて何処にも怪我が無い事を目一杯意思表示するが、候補生達の不安そうな顔は崩れない。まさか予先がセリアに向けられるとは思っていなかったのだ。

「どうしてセリアが？」

「分からないが、デナトワールの件に関係があるのでは？」

ランの言葉にセリアも思考を巡らせる。ランの言う通り、恐らくデナトワールと関連性があるのだろうが、やはり分からない。何故自分が襲われたのだろう。今回の国王陛下暗殺の件も、敵が本気ならば慎重に動く必要があるのだから、派手には動き回っていない筈である。国王やマリオス達に動きを知られてはならないのだから。そんな状態で自分にそこまでして構う程の理由があるのだろうか。

「とにかく、今日ここで何かがある、っていう事は確かよね」

「ただの思い過ごしではなかった様だな」

決して有り難くはないが、これで確証を得た。参加選手の一人が襲われたのだ。何かがある、と陛下に危険を知らせる理由くらいにはなるだろう。

しかし、嬉しくはない。と候補生達は顔を陰しくさせる。もしかすればセリアもただでは済まなかったのだ。向こうが本気で殺意を持っていたなら、この後も十分危険だと考えられる。まさか、一度失敗してそれきり、とは考え難い。相手の狙いは分からないが、またセリアに矛先が向けられる事はあるのだ。かといって、それを理由に競技会を中断させるような事は出来ない。そんなことをすれば、最初に危惧した通り、敵を逃す事になるのだ。それでは、ここまで来た意味がない。

「セリア。お前は棄権しないか？」

「は、え？……」

「ここまでで十分だ。後は俺達に任せて……」

「……………」

言い聞かせる様に言ってみたものの、セリアは直ぐにブンブンと首を横に振った。ここまで来ておいて、そんな今更逃げるなどんでもない。それに一番危険なのは国王陛下であって、自分では無い筈だ。この通り自分は無事なのだし、出場辞退など考えられない。

答えは分かっていたもののイアンは提案してみた。しかし、返って来た答えは案の定否定するもの。全く、本気で呆れてしまう。たった今襲われたばかりだろうに。気が強いのか、怖い物知らずなのか、もはや言葉で表し切れない。

もう慣れてしまったとはいえ、こうも見せつけられると、言いようのない苛立ちに襲われる。とイアンが頭を抱えている間にも、遠くがざわつき始めた。

「二次試合が開始します！」

その場に声高に響いた言葉に、それぞれ別の考えを巡らせていたセリアと候補生達は同時に顔を上げた。それに続いてゾロゾロと参

加者達が列を成してテントの外へ出て行く。

「腹を括った方が良い見たいだな」

もはや時間切れ。思い悩む事も、後戻りも出来ない。今出来るのは、当初の予定通り、国王陛下にその身の危険を知らせる為に最善を尽くすだけだ。

セリアが忙しなく視線を動かしながら、やっと遠目に見つけたのは、国王が座る観客席の最前列に位置する団体。周りを少数の王国軍が警備している真ん中に、ゆったりと腰掛けているのが陛下だろう。しかし、この距離ではまだはっきりとは確認出来ない。メインの競技場は広く、一度に多数の試合を行っているので、セリアはどうしても国王の席からは離れてしまうのだ。その近くでは、優勝候補の選手達が剣を交えている。やはり、競技会の主催側としても、国王には見応えのある試合を、という考えの様だ。

折角姿を拝見出来ると思ったのだが、と少々セリアは肩を落とした。それでも、自分の相手は容赦無くこちらを見据えている。折角ここまで勝ち残ったのだ。ここで引き下がる訳にはいけない、とセリアは剣を構えた。

そんな栗毛の地味な少女の姿を遠目に捕らえた男は、ほうっと感心の声を発した。何処か危なげに剣を握る姿はやはり少女の物。凛々しく相手と対峙していても、とてもこの競技会に似つかわしいとは言えない。それを見た男は堪え切れない、といったようにくつ、と喉で笑った。

「あれが、そうか」

そう呟いて視線を走らせれば、遠くに見える自分の友人の姿。豆粒程度の大きさで、その顔をはっきりとは確認することは叶わないが、向こうもこちらを見ているのだろう事は容易に想像がつく。

先日の対局では自分が敗退したが、今度はどうであろう。そう思った瞬間、遠くの友人の目がキラリと光った気がした。

「そこまで!!」

ハアハア、と息を荒くしながら、セリアは勝利した事に安堵する。しかし流石は二次試合。やはり強豪が揃っている。ここまでは勝ち抜いたが、体力が徐々に削られて行くのも事実。グイッと頬を伝う汗を拭いながら、セリアは再び視線を彷徨わせる。

先程の男が今回の国王と王弟殿下の件と全く無関係だとは考えられない。咄嗟の事で相手の顔も、着ていた服も確認出来なかったが、何か手掛かりになるものは無いだろうか。そう思ってセリアは先程から勝負の度に視線を動かしているのだが、未だに何も見付けられていない。また、何時再び何か仕掛けて来るかも分からない為、始終気が抜けないのだ。その分肩に掛かる疲労の重みは増す。その事も、セリアの体力を奪っていった

ただ、国王陛下の姿だけはしっかりと見る事が出来た。

陽の光に照らされ、尚も堂々と居座る姿は、正に国王。大勢の観客に埋もれる事なく、未だその存在感を持って人々を圧倒している。思わず見上げてしまう程の威圧感に、セリアはしばしの間見惚れた程だ。

いずれ、ラン達も彼の為にマリオスとなって尽くす様になるのだろうか、と。そんな事を考えて、セリアは言い知れぬ感動を覚えたのだ。彼がこのクルダスを導き、支えているのだ、と実感出来た瞬間であった。

そんな国王の姿を見て、セリアも俄然やる気を出す。こうなれば、何が何でも、相手が王弟殿下であろうと、何かが起こる前に阻止し



てやろうではないか。

そうは思っても、実際はまだ何の動きも無い。可笑しい。もう既に競技会は終盤に近づいている。残る試合も数少なくなってきたというのに、何処にも何の不審な点は無い。それが却って不気味さを増している。

セリアがそんな風に考えていると、遠くで新たに勝者を讃える歓声が上がった。

「そこまで!!」

声高に言い渡された試合を制したのは、冷たい瞳を宿したカール。その先では、ダークブロンドの青年が髪に纏わりつく汗を拭い払っている。ついにランとカールが当たってしまった様だ。そして、そのまま予定通りカールに勝利を譲ったのだろう。本当なら本気で相手をしたかったであろうに。しかし、今回はそうも言っていられない。ランもそれは十分理解しているようで、不満そうな顔は一切見えない。むしろ、セリアと同様観客席に注意を向けている。

次はいよいよ決勝。その日の勝者を決める試合だ。数々の強者を負かし、そして勝ち残ったカールの相手は、やはりセリアであった。ここまで来れば勝負の行方は初めから決まっている。しかし、セリアは何処か浮かない顔をしていた。その理由は決して、この後に負けるからではない。

「はじめ!!」

試合開始の合図と共に金属同士がぶつかり合う音が響いた。

剣を交えている内に、セリアの不安を読み取ったのだろう、カールが刃の反対側から静かに問いかけて来た。

「……どうかしたのか？」

「その……」

「……………」

「未だに何も分かっていないし、中々動きがないから、どうなるの

かと思つて……」

「ならばどうする？この場から逃げるか？」

そう言ったカールが強く剣を振り下ろせば、セリアはそれを透かさず防ぐ。ムツとした表情で睨み返せば、冷たい瞳に見据えられた。「そうは言つてない」

「なら、普段の気の強さを見せたらどうだ」

そう言いながら挑発する様にセリアとの間合いを詰めるカールに、セリアも攻撃を仕掛ける。

弱気になっていたのは事実かもしれないが、どうしてこうも神経を逆撫でする様な言い方しか出来ないのだろうか、この男は。しかし、考えてみればカールの言っている事ももっともである。今更逃げる事も無視する事も出来ない。ならば唯一の可能性に賭けてみるしかないのではないか。

優勝候補と名高いローゼンタール家の嫡男と互角に渡り合っている、あの地味な少女は一体誰だ。と観客がざわつく中、不穏な空気をまき散らす人物が一人、握った拳を振るわせていた。その視線の先には、今その場に居る筈の無い栗毛の少女が、素早い動きで駆け回っている。

どういうことだ。少なくとも、二次試合には参加させるな、と言つておいたにも関わらず、何故今あの場で何事も無かったかの様に剣を振り回しているのだ。

このままでは確実に、事態はまずい方向へ向かう。こうなつては、もう自分では対処し切れない。

そう思つた男は、サツと身を翻し、自分の主に今回の件の失敗を伝える為にその場を離れた。まだ事は起こっていないとは言つても、こうなつてしまえば結果は容易に想像出来る。ならば今自分出来る事は、計画を強引に押し進める事ではない。潔く手を引き、己の

身を守る事であった。

再び鋭い金属音が響いたと同時に、セリアとカールは交差する剣を押し合っていた。試合はほぼ互角に見えるが、その様子を見守る数名は、二人が本気ではない事を知っていた。普段から二人の動きを見慣れている候補生達は、二人が剣を振るいながらも、慎重に機を窺っているのが分かる。でなければ、とつくにどちらかが勝負を仕掛け、試合は終わっている筈なのだ。それを分かっている候補生達も、用心深く回りに視線を集中させている。

緊張感を高める候補生達の視線の先では、腕力で劣るセリアに、カールが小さく言葉を発した。

「そろそろ、頃合いか」

「うん。これだけ粘って何も起きないなら、これ以上続ける意味はないよね」

本気で動いているわけでない二人は、息も乱れていない。

カールの言葉に小さく頷いたセリアは、剣を握っていた手の力をフツと抜いた。その瞬間を逃さず、カールはセリアの手から剣を弾き飛ばす。空気を切る様な音が響いたと同時に、高く弾かれた剣はカランと音を立てて地面に落ちた。

一瞬静まり返った会場は、次の瞬間大きな歓声に包まれた。「ワッ！！」という声と共に広がる拍手を背に、セリアは咄嗟に国王に視線を向ける。目で捕らえた王は軽く拍手をしているだけで、特に何か回りで起こっている様子は無い。一先ず安心するが、そうも言っていないのだ。何故、何も起きないのだろうか。その方が好ましい事には違いないが、決してこのまま終わる事はないだろう。では、一体何時、どのような形で敵は動くのだ。

セリアが不安に駆られる間も、観衆の声援は鳴り止む事をせずに、

競技場全体を響かせていた。

今年の競技会は残す所を表彰式と閉会式のみ。敵が何かを仕掛けて来るとすればその間だろう。

「カール」

「……………」

不安そうなセリアの呼びかけに、カールは冷たい視線を寄越しただけで、直ぐに場所を移動してしまった。ここで何を言っても無意味だ、ということだろう。競技場を横切るカールは、未だに声援を贈る観衆に目もくれない。涼しい顔で完全に無視している。仮にも優勝したのだから、もう少し愛想よくしても不自然ではないだろうに。相変わらずの反応にセリアも思わず苦笑してしまう。

剣技の優勝者であるカールには、陛下が直々に優勝杯を渡される。その時が唯一陛下に自分達が知り得た情報を伝えられる機会なのだ。もし不審な動きがあればセリア達は直ぐにでも行動する積もりだが、何しろ相手が悪い。下手に突っ走る訳にもいかないのだ。

セリアが考えを巡らせている間にも、表彰式の準備が着々と行われていた。

弓の競技で見事優勝したルネ。優勝は逃したが、二位と十分誇れる結果を出したイアン。それぞれの競技での入賞者を発表して行く間も、セリア達は緊張の糸を張り巡らせていた。今まで以上に警戒する様子は、周りの者にも伝わってしまったようで、一体どうしたのだ、と同じように表彰されるのを待つ選手達に訝しげに見られている。

ワツと上がった歓声に視線を上げれば、競技場へ入って来た国王の姿があった。数人の王国軍と青色の長いローブを纏った男性二人を従えた国王はゆっくりとこちらへ向かって歩いて来る。

赤い制服と対になる青のローブは、王宮内ではマリオスのみに着る事を許された色。つまり、今国王の後ろにピッタリと付いて歩いて来る二人の青年が、マリオス、ということだろうか。

今まで憧れ続けていた存在が目の前にいるのだ。セリアは沸き上がる好奇心を抑え切れず、その姿を少しでも見れないかと視線を走らせた。始めて見たマリオスに僅かに興奮を募らせるセリアだが、肝心のマリオスは俯いているのか、顔をはっきりと確認することは出来ない。

そうしている間にも、国王が前へ出て来た。それに合わせて周りの視線も動く。今、この場に居る全ての者の視線は、間違いなく王を捕らえているのだろう。近くで見ると、やはり圧倒的な威圧感を感じた。その存在感もかなりのもので、王が一步動くだけでも空気が揺れる様な錯覚を覚える。

国王が参加者達へ祝いと労いの言葉を贈っていると、その横へ影が近づいて来た。ハツとしてセリアが視線を移すと、歩み寄る男の手には優勝杯が握られている。どうやら国王陛下に杯を渡すだけらしい。

気を張り過ぎだろうか、と少し肩透かしを食らった様な感じで、セリアもホッと息を吐く。だが、目に入った優勝杯に興味を引きつけられそのまま視線を止めていると、気になるものを見つけてしまった。優勝杯を持った男の手の甲に乗っている、真新しい引っ掻き傷。

他の時ならば気にならなかったのだろうが、セリアは先程首を羽交い締めにした時、確かに相手の腕の一部を爪で深く引っ掻いたのを思い出す。抵抗する事に必死だったので、腕のどの部分だったかは分からないが、相手にも多少の傷は残った筈だ。そして、傷を負った手を見付けてしまった。もし、男の傷が自分の爪がつけた傷

だとしたら、それはあの男こそ自分を襲った男だということだろうか。

けれど、手に傷を負った者などいくらでもいる。考え過ぎだろう、とは思いながらも、セリアはどうしても気になって目を逸らす事が出来なかった。

遂にカールの名が呼ばれ、プラチナブロンドの青年は表彰台へと上って行く。それを確認して男も国王に優勝杯を渡した。

他の者は誰一人気にならなかった様だが、注意深く男の動作一つ一つに目を光らせていたセリアは見た。一瞬だけ優勝杯の底へ伸びた男の手を。

「っ!？」

そのまま男は何事も無かった様に国王に優勝杯を渡した。そして、役目は終わったとその場に背を向ける。男は務めを果たしたのだから、その場から離れて良いのは当たり前だ。しかし、今のセリアには、彼が一刻も早くこの場から去ろうとしている様に見えた。

その途端、セリアは飛び出した。周りの者を押しのけ、表彰台の上へ駆け上がる。そのままセリアは懸命に手を伸ばし、驚きの表情を見せる国王の手から優勝杯を奪い取った。自分でもなんて無礼な事をしているのだ、とは思っても、今は時間が無いのだ。

「なっ!？」

「っ!!!」

周りから驚きと戸惑いの声上がる間も、セリアはその足を止める事なく、台の上から近くに居た馬に飛び乗った。馬術競技の優勝者の横で、主を栄光の座へ導いた馬だ。優勝した馬だけあって、毛並みも美しく、体軀もしっかりしている。しかし、そんな事を気にしている余裕はセリアにはない。

「無礼な!!!」

「なんてことを!!!」

「なんの積もりだ!?!」

「子娘の分際で!!!」

所々から沸き上がる怒気を含んだ声に動じる事はせず、セリアは勢いに任せて馬の腹を蹴った。それと同時に馬は大きく嘶くと、力強くその場を駆け出す。走る馬を操り、セリアは必死に競技場の外を目指した。

迂闊であった。こんなに人目があり、注目されている陛下だ。周りもそれなりの警護で固められている。自分達は、敵はその警護をすり抜けて、隙を狙うのだらうとばかり考えていた。しかし、もし、周りの者も諸共標的にする様な手段を使用してきたらばどうだ。その点を見落としていたのだ。自分の予想が間違いであれば文句は無いが、もしかしたら、という事もある。

手の中にある優勝杯を抱え、セリアは尚も競技場の外を目指した。それと同時に後ろに向かって大きく叫ぶ。

「その人、逃がさないで!!!!」

セリアの声の先では、サツと青ざめる手に傷を負った男。その言葉が自分に向けられたものだど理解したと同時に、男は背筋に悪寒を感じ、咄嗟に地を蹴った。

「させません!」

そのまま逃げ出そうとした男を、観客席の上から優雅に舞い降りた影が阻止する。そして同時に顎を蹴り上げた。男がぐっ、と息に詰まりその場に崩れ落ちれば、途端に上から赤い髪 of 青年に取り押さえられる。

「一体どうしたのだ!?!」

「あの娘、何の考えがあつて?」

国王の後ろに控えていた二人の青年が声高に叫ぶ。ただの娘が、

国王陛下の手から優勝杯を奪い取ったのだ。そして、そのまま逃げ出してしまった。予期していなかった事態に誰もが驚き動揺する中、マリオスの二人は冷静に対応し、そのまま事態を掌握しようと王国軍に指示を出す。しかし、彼等がセリアを捕らえる様に命令する前に、国王の前に出た者がいた。

「陛下」

「……………カールハインツ」

「ご無礼お許しください。しかし、あの者の行動には必ず意味がある事はご理解戴きたく」

「……」

跪くカールをジッと見据える王が言葉を発する前に、男の声が遠くで響いた。ザウルに取り押さえられた男が、必死に逃げようともがいているのだ。しかし、上からガツチリと拘束したザウルを撥ね除ける事は叶わず、まるで水から上げられた魚の様に小刻みに震えている。

「離せ、この！！あの女！！」

その姿を見てマリオスは迅速にその場を押さえる為に動いた。素早く状況を判断し、ザウルと、彼に取り押さえられている男を囲むよう指示を出す。こうなっては、男にもう逃れる術は残されていない。ゾロゾロと自分を囲む赤い制服を見ては、顔を絶望の色が覆って行く。

「カールハインツ。この場はお前の言葉を聞こう」

「ありがとうございます」

「しかし、説明はしてもらおうぞ」

「……心得て」

そう言って国王は、後ろで控えるマリオスに目配せした。それを見た二人の青年は、納得いかないといった表情をしたものの、ゆっくりと頷く。例えどんな時であっても、彼等は自分の主には逆らえない。

国王の言葉にカールが再び深々と頭を下げるとその瞬間、競技場



の外で大きな爆発音が響いた。その音に反応した者達が同時にバツと振り返る。しかし、競技場の壁に阻まれ、何が起こっているのか確認は出来ない。しかし、音だけでも動揺を与えるには十分だ。只事ではない事態に、その場をいつきに緊張が走る。

「セリア!!」

近くで事の成り行きを呆然と見送っていたランやイアンも、正気を取り戻し慌てて外へ向かって走り出す。その姿を尻目に、カールはそれでもその場を動かなかった。今自分がしなければいけない事は国王への説明である。セリアはラン達に任せて問題はないはずだ。そう理解はしていても、意識して体を押さえつけねば、今にもその場を駆け出してしまいそうな衝動に駆られていた。

言い知れぬ苛立ちが背筋を走るがそれに気付かぬ振りをして、バィオレットの瞳を自分の前で佇む国王に合わせる。

「セリア!!」

「いったた……」

ラン達が競技場の外に出ると、すぐ外にある湖の傍で倒れた馬の横に転がり、地面の上で頭を押さえるセリアの姿。そして、何故か周りは雨が降った後の様にずぶ濡れだった。

「おい! 大丈夫か!」

「うっ……なんとか………」

「何があった!!」

「えっと……私も咄嗟で、何が何だか。とにかくさっきの優勝杯を湖に放り投げたんだけど、そしたら……」

競技場の直ぐ外に広がる湖。その中へ優勝杯を投げ込んだ途端に、中に仕組まれた爆薬が絶妙のタイミングで破裂したのだ。爆発に巻

き込まれる事はなかったが、そのかわり、大きな音に馬が驚き暴れたものだから、セリアは放り出されてしまった。その所為で軽く地面に叩き付けられたのだが、大した事ではない。それよりも、もしあとほんの僅かでも遅れていたらどうなっていたか、と背筋に冷たいものが流れる。

「相変わらず、無茶をする」

「あっ、それより陛下は？さっきの人は？」

「心配無い。男はザウルが取り押さえた。陛下もカールがお傍にっている」

「よ、よかったあ」

それを聞いてセリアはホッと安心したのか、そのまま地面に倒れ込む。地面の上に直に横になるなど、貴族どころか年頃の娘なら決してしないだろう行為でも、今は見逃して欲しい。情けない話したが、杯が水に落ちた瞬間に激しい爆音と共に上がった水柱に、腰が抜けてしまったのだ。意気込んで咄嗟に動いたは良いが、実際は手の中の物が何時どのような惨事を生むかと気が気でなかった。すっかり気の抜けたセリアを、イアンが軽々と抱き上げる。

あまりこの様な所に寝かせておくのは得策ではない。何処か休める場所へ運んでやった方がいいだろう。と思ったのだ。しかし、いきなり持ち上げられたセリアはそれどころではなかった。

「わっ、ちょっ！イアン！？」

「分かった分かった。お前は大人しくしてろ」

「いや、だから、その……」

急に歩き出したイアンの手から、動かない身体を駆使して何とか逃れようとするが、全く無駄な抵抗に終わった。

「まあ、今は休め。話しはそれからだろ」

「でも、歩けるから、下ろして」

「却下」

突然の状況にセリアは内心で悲鳴を上げたが、イアンにとってそんなのは知った事ではない。その後ろではランが少々納得いかない

表情を見せたが、状況を報告するため再び競技場内へ戻って行った。  
下でギャアギャアと騒ぐセリアを他所に、イアンはドンドンと進んで行った。今はとにかく、結果的に国王を救った少女を休ませてやりたい。陛下への説明や、他の面倒事は、カール達が請け負ってくれるだろう、と若干無責任な事を考えながら。

## 試合 4（後書き）

序奏は終わった。後は、ここでどう出るかだな。まったく、アイツはいつもながら驚く事を私に提示してくる。まあ、それが外れた事はないが。

アイツも生徒達には苦勞しているようだが、十分楽しんでいるようだからいいだろう。

折角の好機だ。無駄にするなよ。

## 手紙 1

「セリア・ベアリット殿」

「あっ、はい！！」

「お待たせしました。こちらへどうぞ」

「はい！！！！」

豪華な部屋の豪華な椅子に腰掛けて待っていたセリアは、扉の向こうから現れた青のローブを纏った男性に呼ばれて慌てて立ち上がる。そのまま後ろを付いて行くだけなのだが、自分だけが通された事にセリアは多少戸惑った。部屋の中では、己が呼ばれる時を待つ候補生達がジッとこちらを見ている。躊躇しながら振り返ると、その瞳に、さっさと行け、と押されて渋々ながらセリアは先程のローブの後を追った。

あの後、軽くパニック状態になった競技場は、その場に居たマリオス二人のお陰で惨事になる事なく、なんとか収拾がついた。たった二人で、王国軍や市民に指示を出しながら、冷静かつ迅速に対応してみせた姿は、流石というべきか。

その後、カールが陛下に手短かに事の次第を述べると、向こうは驚く程すんなりと事情を受け止め、その場は治まったのだ。あれほどの事態なのだから、もう少し驚くなりするだろうと予測していたのだが。

国王は、候補生達と、自分を救ってくれた女生徒を、後日改めて王宮に招く、とだけ言い、マリオス達と共にその場から去って行った。混乱が生じた場に、国の最重要人物が長く留まる事は、あまり好ましくないのだ。

そうして約束通り、本日王宮に正式にご招待された訳だが、妙な緊張感が漂う雰囲気の中、セリアは内心で必死に状況を纏めようとしていた。まるでこれから裁判にでもかけられる様な気分で案内された扉を潜れば、そこは謁見の間。奥に設けられた大きな玉座に座

った男性は、間違いなく二日前競技場で見た姿と同じであった。国王はここでも、見ているだけで気圧されそうな程の威圧感を放っている。というより、周りの豪華な装飾が加わり、威厳は前に見た時より更に増しているようだ。

玉座に腰掛ける国王の横にズラリと佇む青のローブ。両端に三人ずつ、計六人のマリオスがこの場に列席していた。それだけでセリアは、今にもこの場を逃げ出したくなってしまおう。憧れていた筈の場だが、どうして全員が全員自分を睨みつけるのだろうか。

心当たりがない、といえば嘘になる。陛下に事情も説明しないまま、その手から優勝杯を奪う様な事をし、剩え大混乱を起こしかねない状態を招いたのだ。やはり、無礼を働いた罪で処罰されるのだろうか。だから候補生達はあの部屋に残されているのだろうか。だとしたら、自分の人生は終わったも同然かもしれない。

セリアが内心でダラダラと冷や汗を流している間も、国王とその横に並ぶマリオス達は、真っ直ぐに栗毛の地味な少女を見下ろしていた。

やはり、何処からどうみてもただの少女である。二日前には剣を振り回しながらあのカールハインツと互角に渡り合い、その命を賭けて国王を守り抜いた少女には、到底見えない。これが、見目麗しい美少女であったならまだ納得できたのだろうか。

あまりの緊張感に、立ったまま軽く放心していたセリアを正気に引き戻したのは、端に立つ一人のマリオスの咳払いであった。ハッとしたと同時に、まずい、と慌てて玉座の前で床に跪き、頭を垂れた。ああ、またやってしまった。と伏せた顔は絶望に染まり始めている。

「話しはカールハインツから聞いた。セリア、というらしいな」

野太い声がある場に響く。それだけで周りの空気が揺れ、セリアは一瞬反応が遅れたが、すぐに我に戻り名乗る。

「べ、ベアリット家長女。セリア・ベアリットと申します」

「今日ここに招かれた理由は察していると思うが」

「うっ……それは……」

聞かれてセリアは言葉に詰まった。やはり無礼を働いたのが拙かったのだろう。しかし、このままでは、自分だけの問題ではなく、あの場に一緒にいた候補生達にまで飛び火してしまうかもしれない。そう思うと冷や汗が流れる。あれは自分の咄嗟の判断であり、友人達は関係のないことだ。無礼を働いたのは自分だけなのだから、それだけは分かって貰わねば。

「も、申し訳ありませんでした。数々のご無礼、お許しください。しかし恐れながら、あの場では他に手が思い浮かばず、陛下の安全を第一にと思い、やむを得ずあの様なことに……」

「……………」

「ですが陛下への無礼と、あの場においての自分の不手際は承知しています。処分は受ける覚悟がございます。ですが、あれは私が独断で行ったことであり、友人達に非は……」

「セリアよ。私は何も其方そなたを責める為に呼んだのではない」

「へっ？」

思っていた様な言葉ではなく、むしろ全く逆の展開に、セリアは思わず声が裏返ってしまった。

「今回の件、其方達そなたたちには命を救われた。心より、礼を言いたい」

「えっ！？ い、いえ……」

「それと、まだ学生である其方そなたに危険を冒す真似を強いてしまったこと、心苦しく思っている。すまなかった」

「え、ええ！？ そんな、滅相もございません。クルダスの国民として、当然の事をしたままで……」

セリアは、いよいよ訳が分からなくなり慌て出した。国王陛下に謝られるなんて、一体何が起こっているのだ。夢でも見ているのか。だとしたら悪夢だ。などと頬を抓りそうな勢いでオロオロしだすセリアを、国王の横に立っていたマリオスの一人が見据えた。

「何故杯に危険物が仕込まれている事を知っていたのかを聞きたい。」

答えられるか？」

凜と通る男の声に、セリアは動きを止める。質問してきたマリオスをチラリと窺えば、蜂蜜色の瞳と視線が合った。どう説明すればよいものか、と言葉に一瞬詰まるが、やはりデナトワールに捕らわれた時、そこで競技会で何かが起きる可能性がある事を知った、と説明する以外ないだろう。そして、国王陛下が相手では、恐れ多くて容易に忠告など出来なかった事も。

ゆっくりと語るセリアの話しに耳を傾けていた国王は、セリアが話し終わるとゆっくりと頷いた。

「そうか。其方<sup>そなた</sup>にはいくら感謝しても足りないな。せめてもの礼として、私に何か出来る事はないか？」

「は、はい！？ そんな……」

そんな恐れ多い申し入れ、失礼とは思いつながらも断る以外ないではないか。そう思ってブンブンと首を降って否定するが、ホレホレ遠慮するな、といった感じで国王も引き下がらなかった。なんだか何処かで見た事がある様なノリだが、今はそれどころではない。

「本当に何も無いのか？」

「はい。勿論でございます」

そんな国王陛下から直々に何かを与えられる程、自分は大それた事をした訳ではない。それでなくとも、国王とマリオス達には、既に国を十分に守ってもらっているのだ。それだけでもこちらが感謝しなければならぬほどののに、これ以上何かを強請るなどとてもない。

失礼とは思いつながらもキツパリと断れば、国王も渋々ながらも諦めてくれた。そのことにセリアもホッと安堵する。その後も、再び感謝されたり学園生活の事について質問されたりで、セリアの危惧していた様なお咎めは全く何もなかった。それでも、次には何を聞かれるのだろう、と内心でビクビクしていたりする。

「陛下」

そのまま話しが長くなりそうな雰囲気、マリオスの一人の諫め



る様な一言が破った。それを聞いて国王も今気付いた様な顔をする。  
「おお。話しが長くなってしまったな。すまない」

「い、いえ。お時間作って戴き、ありがとうございます」

「うん……………それはそうとセリアよ。最後に一つ聞いてよいかな？」

「は、はい！なんなりと」

漸く終わった、と思った矢先にまだ何かあるのか！？とセリアは緊張で身体を固くする。次に一体どんな言葉が来るのだろう、と構えていると玉座に座る国王が少し動いたのが気配で分かった。チラリと窺えば、マリオス達は全員が自分を射る様に見ている。難しそうな顔をするその眉間に寄った皺が、セリアの緊張をより強めた。

「其方そなたはこの国が好きか？」

「……………っ!？」

その問いにハッとして顔を上げた途端、セリアはカールの言葉を思い出した。

『陛下、と呼ぶに相応しい人物』

まさにその通りだった。先程までの気さくな雰囲気とは違い、また相手を威圧するだけでなく包み込む様な偉大さを感じる。国の全てをその一身に背負い、民の未来を導く国王。時には英雄として、時には父として、国を支えるその人物が、今日の前に居た。その姿に魅了されるセリアだが、問いに答える為、深く息を吸い込む。

「はい！」

その一言を言い切ったセリアの顔は、何時かの様に凜としていた。それ以上は言葉にしくとも、その周りに纏う空気で、この少女がどれほど自国を誇りにしているかが伝わってくる。肯定する、たった一言を、国王は満足したようにしっかりと記憶した。

「はあ……」

再び通された豪華な部屋で、セリアは今度は候補生達を待っていた。自分の時は一人だったのに、何故彼等は全員なのだろう。と疑問に思う。それよりも、国王への散々の非礼を咎められるでもなく、更に感謝までされてしまうとは予想していなかった。その器の大きさに、セリアは今更になってすっかり氣後れしてしまう。

友人達は今頃どんな話しをしているのだろう。もしか、別々に尋問し、事の真理を確かめるつもりだろうか？とそこまで考えてセリアは思い直した。いくら何でもそれをするには遅すぎるだろう。自分達は同じフロース学園の生徒。昨日の内に口裏を合わせる事は可能なのだ。もし本気で尋問する気ならば、とっくに行われていただろう。

しかし、考えても分からない。うーん、と唸りながらセリアは深く椅子に腰掛けた。

「其方達にも礼を言わねばならないな」  
そなたたち

「ありがとうございます」

「今回、私を狙った者やその他の事は、こちらで処理させて貰いたい。よいかな？」

国王の言葉に候補生達全員が頷く。この件に王弟殿下が関与している可能性がある事、伝えるべきかと悩んだ候補生達だが、証拠もないまま王族を疑うのは望ましくない、とその事は伏せた。それに、国王と彼の横に並ぶマリオス達が、何も知らないとは考え難い。

「それにしても、其方達は素晴らしい学友を得たようだな」  
そなたたち

「セリアのことでございますか？」

「あれほどの才気を宿した少女を、私は見た事がない」

「……彼女も、我々同様、心から陛下と国に尽くしております」

「それは私も心強い。彼女には、是非とも其方達そなたたちと共に国を導いてもらいたいものだ」

「……………」

それはどういう意味だろうか、と候補生達は首を傾げる。セリアを見ていると忘れてしまいそうになるが、今の彼女はどうか好意的に見ても、国を導く様な地位からは遠い場所にいる。それを、目の前に座る国王が知らない筈はないというのに。

「今のマリオス候補生達の評判は聞いている。いずれ、其方達そなたたちがクルダスを支えてくれる要となることを、期待しているぞ」

「勿体なきお言葉、心より有り難く……」

謁見の間から戻った候補生達は、目の前の現状を見て苦笑を洩らしていた。

「どうするんだ、これ？」

「そっとしておきたいが、そういう訳にもいかないだろう」

候補生達が囲む椅子の上では、スヤスヤと寝息をたてるセリアが、それはもう気持ち良さそうに眠り込んでいるのだ。椅子から落ちない為なのか、膝を抱え丸まっている姿は、まるで赤ん坊。ここ最近慌ただしかったのだから、セリアの疲労も分からなくもない。このまま寝かせてやりたい気持ちもある。だが、そうも言っていられないだろう。

「セリア、起きろ」

「ふがっ!？」

まだ夢の中のセリアの鼻をイアンが軽く摘むと、息苦しさからセ

リアは奇妙な声を上げた。なんだかあんまりな起こし方に、他の候補生達から非難の視線が向けられるが気にしない。

目を覚ましたセリアは、まだ寝惚け半分にここは何処だ、と辺りをキョロキョロと見回している。少しの間そうして漸く思い出したのか、あつ、と声を上げた。

「お待たせセリア。もう帰るよ」

「えっ、帰る？」

「うん。ほら、フロース学園に」

「あ、ごめん。うん、そうだったね」

そうだ。もう用は終わったのだから自分達はフロース学園に帰らねば。

扉の外で自分を待つ候補生達に、セリアは慌てて付いて行った。

セリア達が陛下に謁見を済ませた次の日、二人の男が国王専用の執務室で実に愉快そうに笑い声を上げていた。

「しかしお前も無茶をする。危うく私より先にあの世行きだったではないか」

「お前より先に行く積もりは無いさ。それにしても、今回は派手にやったな」

「証拠はどうだった？」

「思わしくないよ。いい身代わりを用意している。それに、事が失敗する前から逃げておった」

「それは予想外だな。計画に手落ちでもあったか？」

「さあな」

向かい合って座る二人の男は、真剣な話しをしているにも関わらず、更に笑い声を響かせていた。

「ククッ!!それにしても見たか、あの時のカールハインツの顔を？ 私の前に立っても今までは眉一つ動かさなかったというのに、あの少女の弁明をする時は必死であった」

「それは、面白いものを見逃したな。言っただろう。私のクイーンは手強いと」

「ああ、それは十分理解したよ。問題はキングを取れるかだな。どうだ？」

「やってみせるさ。またとない好機だ。これを逃せば、次は何時になるか分からない」

軽い口調で校長が返すと、向かい合っていた男もゆっくりと頷く。その時、執務室の扉を軽く叩く者が居た。

「陛下、マリオス様達が揃いました」

「おお、そうか。分かった」

外の者にそう伝えると、校長の向かいに座っていた男、国王はゆっくりと立ち上がる。

「ここからはお前の勝負だな。お手並み拝見といこうか」

「お前とクイーンが設けた場だ。私が手柄をたてないでどうする」

ニカニカと笑う校長は、そのまま部屋を後にする友人を静かに見送った。

謁見の間に通された校長は、玉座の上に座る国王の前で跪いた。その左右を囲むのは、縦に並んだ総勢二十名の青いローブ。皆重い空気を滲ませ、難しい顔をしたまま若干俯いている。

普段はその責務に追われ、王都に居ない者も少なくないマリオス達がここまで集まるのは非常に珍しい。しかしこの時は、自分が尽くす国王の一言に呼ばれたマリオス達が、重要な決議を決める為、

顔を揃えているのだ。

全員がこの場に集わされた理由を既に十分理解しているため、余計な説明や前置きは一切無い。ただ、重い沈黙だけが続く。その内、一人がポツリと洩らした。

「私は反対です。既に別の計画を進めている時に、このような事態……」

「しかし、いずれは必要になるという事は事実」

「それにしても、時期が悪い。急な変化は混乱を招く。しかも、長い伝統を変える様な事となれば尚のこと」

渋い顔をする青年に、彼より年上の一人が静かに返した。それに青年は再び反論する。その言葉に、今度は校長を挟んだ反対側から声が上がった。

「もう一つの改革は既に決定している。それとほぼ同時期に別の変化まで齎すという事に反対なのは私も同じだ」

「そうは言っても、今回の働きを見れば、切り捨て難いということも否めないだろう」

「それで王宮の信頼を失う事になれば、元も子もない」

「だからといって、そう簡単に見送る、という決断も得策とはいえない。何より、今は人材が必要な時期」

今回、マリオス達が顔を合わせているのは、そこにも理由があった。ここ数年、新たな逸材が見つかっていない事は事実。使える人材なのか、という事で、マリオス達は王宮へ足を向けた。

しかし、やはり簡単に納得出来る議題でもなく、こちらでも反対と賛成に別れた言い合いが行われた。賛成の声はあるものの、顔を渋らせている者が多いことは否めない。

「そもそも、こんな議論に値する人物だろうか？ 国への強い忠誠心が足りない事が、昔からこの件が見送られる理由とされてきた」

「その点は問題無いと思います。我々はその場に居ましたが、国への想いは見込み違いでは無いかと」

「周りの者に感化され、その様に見えているだけではないと言える

か？」

「彼等と同じだけの実績を出せると判断されたこそ、今こうして名が上げられているのでは？」

議題に上がっている人物本人を直接見た者はこの中でも数名。その中の一人がきっぱりと言い切ったした。その言葉に、他の者が付け足す。

「しかし、素行が褒められるものではなかったのも事実。陛下への受け答えも、あまり感心できるものでは……」

「素行に難がある件に関しては、既に前例がいるのでは？」

その言葉に、マリオス達は視線をその場の一人へ向ける。途端に、視線を集めた者が切り返した。

「おいおい、勘弁してくれよ。まっ、俺も自分が品行方正だとは思ってねえけどな」

「おい！陛下の御前だぞ。控えろ」

「へえへえ。しかし、俺は反対も賛成もしかねるぜ。やらせて見るのは面白いが、失敗すりゃそれまでだ。成功すれば得る物は大きい。そうでなければ、取り返しがつかないかもしれねえ」

「だからこうして話し合いの場を設けているのだろう」

そう言われた男は、頬を掻きながら再び適当な返事を返す。態度や言葉を改める気は、残念ながら微動も無いようである。

次に恐る恐る声を発したのは、その男の横に立っていた人物だった。

「しし、し、しかし……じ、時期が、悪、い、というのも、そ、そ、その………じ、じ、事実か………と………」

「言いたい事があるならはっきりしたまえ」

「ひ、ひいい。お、おお、お許しを………で、でですが………しゅ、周辺の、う、ううう動きが………き、気、ににになると、ととき、で、でです。い、いい、まは………情勢にも、そ、その………お、落ち着きが、ほ、欲しい、とと、と、時に………で、ですか、か、かか、改革を、お、おし、おし、押し進めるのは、その、

その、ど、どうか……と」

「その意見には、私も賛成だ。混乱を招くような事態、今は好ましくない」

気の弱そうな男が、汗をダラダラと流しながら述べる言葉に賛同の声が上がると、オドオドしていた男もホッと安堵する。この男の言葉は普段から非常に聞き取り難いのだが、今となっては慣れたもので、それを責める者は少ない。むしろ、注意などしようものなら、この男は一層怯えてしまう。それは、出来れば避けたい事態であった。それに、その発言が毎回の得ているのも事実。なので、文句を言う者は一人もいなかった。

「たしかに、もう一つの計画が決まった以上、そちらを優先するべきだ。二つを同時に行う程、今余裕があるとは思えない」

「しかし、いずれは通過せねばならない道」

「だからこそ、今回は見送り、一から慎重に育てた人材を採用すべきだ。突然現れた者に、国の未来を賭けるだけの価値を、私は見出せない。必要な変化ならば、尚更時間をかける必要があるだろう」

その言葉に今まで黙ってマリオス達の会話を聞いていた校長が、ピクリと反応した。それを見逃さず、国王はマリオス達を一度鎮める。

「どうだマクシミリアンよ。何か申したい事はあるか」

「はっ。発言をお許し戴けるなら……」

顔を上げた校長が、ズラリと並んだマリオス達を見据える。その迫力と威厳は、国王を除く全ての者を黙らせるのに十分であった。「一つ、訂正させて戴きたい。私は、改革を望むが故に今回の事を申し出た訳ではありません。後にこの国にとって、陛下にとって重要な逸材になる可能性がある、私が判断したからこそ、その為に変化が必要になり、進言したまでです」

「……………」

「そのことを、マリオスの皆様には、ご理解戴きたく」

「……………」



途端に困惑の表情を浮かべ、お互い顔を見合わせるマリオス達。言い聞かせるような校長の言葉に、それまでの考えを多少改める者も出る。しかし、それだけで修まり切る様な場ではない。

「この場に議題として持ち上がる時点で、器量が十分なのは認めよう。しかし、慣例を無視する事態になる事は事実。私はそれに賛成出来ない」

「しかし、慣例に捕われる必要もあるまい。昔からの伝統は大事だが、それに固執した為に衰退した国もある」

「しかるべき理由があるからこそ、今まで守り抜かれて来た伝統だ」次々と上がる声に、その場の空気も少しずつ重苦しいものになってくる。すると、端の方で今まで黙っていた男がゆっくりと口を開いた。低く響く声に、その場の誰もが注目する。

「陛下のご意思にもよるが、私は反対する気はない」

「なに？」

「実力、能力、国への忠誠心。必要なものは揃っている。足りないのはそれを活かす環境のみ。そしてそれを我々が提供出来るのなら、意地でも拒否する理由はない。後は国自身が定める事。違うか？」

「その環境を与える人物を、間違っていないかと審議しているのではないか！」

「マクシミリアン殿がここまで押す程の者、期待はずれで終わる事もあるまい。それに、この目で見た限り、捨て置くには惜しい人材であった事も事実。そして、我等は今それを必要としている。そうではなかったか？」

がっしりとした体躯の男が蜂蜜色の瞳を開いてそう言えば、周りにはシンと静まった。しかし、まだ懸念する者は男に声を投げる。

「決定した場合、議会が黙っていないぞ」

「それを鎮めるのも我等の勤め」

「だからといって、簡単に納得する筈も………」

「何故そこまで危惧する。なんの為の候補生制度だ」

「候補生がどんな存在であるかは、国全体が承知している」

「そこで実績を出せず、用無しと見定められればそれまで。言ってしまうと測りの期間。まだ実際には起こってもいない変化に何を言った所で、それを背負うのは本人のみ。違うか？」

「ぐっ……………」

言われて反論していた者は押し黙る。今回の事が決定したからといって、それはまだ力を見定めるためだけに留まる。そこで結果を出せないようであれば、それまで。本当なら、悩む必要のない事であるが、慣例と国民が抱くだろう混乱、これらがマリオス達の頭を固くさせていた。

しかし、指摘されてしまえば否定出来ない。再び静まり返った場で、国王と校長の瞳が一瞬輝きを増す。

「各々答えが出た様だな。まだ反対の意を唱える者が居れば申し出よ」

「……………」

国王の言葉に、表情を歪める者や、唸る者も出た。しかし、誰一人として、これ以上言葉を述べる事はしない。そのマリオス達一人一人をジッと見回した国王は、満足そうに頷いた。

## 手紙 1（後書き）

自分はどうしても納得出来ません。

本当に、一体セリア殿に何があつたのでしょうか。話しが急過ぎて、自分も事態の整理が追い付かない。何故、突然あのような……とにかく、セリア殿に少しでも考え直していただければ。

自分には、言葉を掛ける事しか出来ませんが、これだけは聞かせて下さい。その決断で、貴方は後悔されないのですか？

## 手紙 2

カーテンが窓を覆い、陽の光が満足に届かない室内で、最新の報を伝える紙に綴られた字を目で追う者が居た。暗闇の中で字など読めるのか、と疑問に思うが、その者にとってはあまり気にする点ではないらしい。

普段ならば新聞を広げる機会など滅多にないが、この日ばかりは違った。家の者とはあまり関わりを持たなくても、屋敷中が同じ話題で盛り上がっていれば、いやでもその内容は耳に入るといえるもの。信じ難かったが、それでも確認の為に紙面を広げた。

そこには、周りに気圧される事なく、勇ましく剣を振るう、良く見知った人物。その横に書かれた詳細を最後まで読む事なく、グシヤリと音を立てて丸められた新聞を投げ捨てる。感情の全てを捨てた様な目が、無惨に転がった「紙クズ」を、何時までも凝視していた。

セリアが何時ものように静かな廊下を歩いていると、後ろから唐突に声が投げかけられた。

「セリアさん!!」

「ふえっ!?!」

その怒気を含んだ声に驚いて振り返れば、三人のスラリとした美人が、自分をこれでもかという程睨んでいる。今にも襲いかからんばかりの気迫に、セリアもうっと一歩後ずさった。

彼女達は何を目的として自分を呼び止めたかは、セリアにも分かっていない。なにせ、既に何度も廊下や教室で声をかけられ、その全てが同じ理由だからだ。間違いなく、彼女達もそうであろう。

「少しお話がしたいの。いいわよね」

「えっと、その……私、これから……」

「はっきり言わせてもらうけど……!」

これから用事がある、と続けようとしたのだが、彼女達に聞く気は無いらしい。その事にセリアはがつくりと肩を落とす。しかし、自分は直ぐにでも温室へ行かねばならないのだ。先程クルーセルに呼び止められ、手にしている資料を温室に居るであろう者達に渡す事になった。いくら時間に制限は無いとはいえ、あちこちで散々呼び止められ、既にかかなりの時間が過ぎていく。これ以上遅れると、魔王様の凍てつく睨みを確実に頂戴する事になるわけで、出来れば一刻も早く温室へ辿り着きたい。

そんなセリアの内心知った事ではない、と女生徒達は尚も声を荒げる。

「貴族令嬢として恥ずかしくはないの!! いくらマリオス様達に取り入る為とはいえ、競技会にまで参加するなんて!!!」

「いえ、あの……ですから……」

「しかも、カールハインツ様が受け取る筈だった優勝杯を紛失するなんて」

「そ、そうはいわれましても……」

国王暗殺の為、優勝杯に爆弾が仕掛けられていた、などと公表する訳にもいかない。一時は混乱した場をなんとか宥めたものの、その場の者全てが納得する説明はされなかった。急な事だったのでそれは仕方ないだろう。

しかしそうなると、人とは勝手に憶測を広げて行くものである。杯が偽物にすり替わっていたとか、外から聞こえた爆音はテロの仕業だとか。中でも酷かったのは、勇ましく競技会に挑んだものの優勝を逃した令嬢が、優勝杯に目がくらみ陛下から盗んで逃げた、というものだ。

王宮の権力を使ってでも、セリアや候補生達に汚名が着せられる様な噂は出させない、と国王が約束してくれたが、既に広まった噂

や誤解が取り除かれるのには時間を要するのも事実。更に、今の所、大衆が納得する様な説明もされていない。事態が完全に治まるのは、気長に待つしかなさそうだ。

噂を立てられるなんてこと、セリアにとっては大した事ではないのだが、こうして何度も文句を言われるのは勘弁して貰いたい。

「いい加減に身の程を知ったらどうなの!!」

「は、はぁ……」

言い返すことも面倒なセリアは、取り敢えず目の前の女生徒達の声を聞き流す事にした。こういう場合、暫く言わせておけば自然と向こうの熱も冷めるので、自分が何かを言う必要もないのだ。言った所で聞いては貰えないだろうし。

しかし、このままでは魔王様の睨みだけでなく、文句の一つや二つ付いてきそうだ。彼の小言一つに比べれば、女生徒達の怒りなど大した事はない。

セリアが内心でため息を吐く間にも、彼女達は言いたい放題言っ  
て満足したのか、得意げな顔でその場から去って行った。それを見  
送ったセリアも短く息を吐くと、サッと踵を返す。そのまま温室へ  
向かって足を急がせたのだが……

「ちよっと、アナタ!!」

「は、はい？」

またもや呼び止められてしまった。

度々行く手を阻まれながらも、漸く辿り着いた温室にセリアはソ  
ロソロと足音を忍ばせて入る。気配を出来るだけ消し、中に居る人  
物を確認しようと視線を動かしていると、

「遅い」

「ひ、ひえっ!!」

後ろから背を這う様な声が聞こえ、セリアは飛び上がった。バツと振り返った先では、その視線だけで人を射殺せるのでは、というほどこちらを睨む魔王様がいらっしまった。その姿に悲鳴を上げそうになるが、セリアは己の命の為なんとか堪える。これ以上機嫌を損ねれば、どうなるか分かったものではない。

「あ、セリア。わざわざ持ってきて来てくれてありがとう。ごめんね。急に頼んじやって」

「い、いえいえ。これくらいお易い御用ですよ」

そう言ってセリアはカールからさり気なく目を逸らす。そのまま気付かれないよう移動しよう、と足を動かしたが、途端に睨まれた。背を走った悪寒に、セリアもひとつ短い悲鳴を上げる。すると、その様子に見かねたのか、すぐにランが二人の間に割って入った。

「カール、やめないか」

「それがさっさと動けば良いだけの話しだ」

「急な頼み事をしたのはこちらだぞ」

「この程度の事、それほど時間を要する必要もないはずだが」

なんだか不穏な空気がだだ漏れしている二人に、セリアはまずいと顔を青くし慌てて資料を二人に手渡した。この二人が言い争いを始めれば、それがどんな惨事を生むかは、セリアも身を以て知っている。しかし、時は既に遅く、セリアが手渡した資料は二人にとって、相手をねじ伏せるための材料にしかない。

お互いを睨み合ったランとカールの間で、試合開始の合図であるセリアの悲鳴が鳴り響いた。

フラフラと女子寮に戻ったセリアは、がっくりと肩を落としなが

ら自分の部屋へ向かっていた。あのまま議論は延々と続き、先程漸く解放されたところだ。

どうしてあの二人はあも仲違いするのだ、と聞きたくなる。普段は、流石はマリオス候補生、と賛美を贈りたくなる様な議論を交わすが、頭に血が上ったランと、額に青筋を浮かべたカールが顔を合わせた時は別である。最終的には、やれお前は甘いだの、やれお前は横暴だの。はつきりいって、下らない喧嘩に発展してしまうのだ。それに巻き込まれるのは、当然の如くセリアである。双方から逃すものか、とがっちり釘を刺されては、建前上の議論に参加しない訳にはいかない。

ランを相手に強烈な舌戦を繰り返すカールを、元々彼を怒らせたのは自分だという後ろめたさから、セリアは諫める事も適わず。議論という名の口喧嘩はそのまま夕食時まで持ち込まれた。数時間の後にお互い漸く怒りの炎が鎮火したのか、なんとか案は纏められ、それと同時にセリアも解放される。しかし、ここへ来るまでにどれほど気力を使っただろうか。

はあ、とため息を吐いて自室の扉に手をかけると、横から声が掛かった。

「ちよつと……」

「へっ、アンナ？」

「貴方宛に手紙よ。居なかったから私が預かる事になったの」

「あ、ありがとう」

用件だけ述べ、アンナは白い封筒をセリアに渡すと、さっさと自分の部屋へ戻って行った。

自分に手紙とは誰からだろう、と差し出し人の名を確認したセリアは目を見開いた。信じられないものを見た様な顔で、そのまま部屋へ入るなり、急いで封の中から紙を取り出す。広げたそれに視線を落とし、書かれた内容を理解していく内に、セリアの表情は少しずつ険しくなっていた。

「えっ!？」



手紙の向こうに、これを書いた人物の顔を見た気がした途端、セリアの手は震え始める。小刻みに揺れる手は、その中にあった白い紙を落としてしまった。しかし、それを拾う事はせずセリアは部屋の入り口で佇むだけ。そのまま動けず、セリアの脳をあらゆる思考が巡っていく。その大半は、どうして、という疑問が占めていた。

暗いままの部屋で、窓から入り込んだ月明かりが僅かに照らした手紙の一部にはこう綴られていた。

『二日以内には退学届を出す様に』

朝日が差し込む頃、セリアは机に向かったまま手の中にある紙をボンヤリと眺めていた。一晩中そうして過ごしたセリアは、飽きもせず同じ文面を何度も何度も読み返す。しかし、幾らそうしていても、綴られた文字が変わる筈もない。

それでも、セリアは他にすることを忘れたかの様に、何時までも手紙を手放さなかった。

そんな事をしている内に、外から人の声が聞こえ始める。ハツとして窓の外を見ると、校舎を目指す生徒達。驚いて咄嗟に時刻を確認した。それを見ると、結局一晩明かしてしまったようだ。今からでは間違いなく遅刻である。こうしてはいられない、と慌てて登校の用意をしようとしたが、そこで思いとどまる。

手紙には二日以内とあった。封筒が届いたのが昨日だとすると、少なくとも今日中に退学届を出す必要がある。

『退学届』

その言葉を口の中で何度も繰り返すセリアは、迷いながらも机に

向かい筆を取った。

この時間、生徒は各々のクラスで授業を受けている筈である。しかし、校長室には生徒の証である制服を着た女生徒が一人、自分のクラスへ向かう事はせずに、その部屋の主の前に佇んでいた。

「……………」

「今まで、お世話になりました」

校長は目の前に差し出された一通の封筒と、自分の執務机の前に立つ人物を見比べる。ゆっくりと頭を下げる栗毛の地味な少女を見詰めるその表情は、普段と変わらない様に見えるが、その周りの空気は普段の様に穏やかな訳ではない。

「急な決断のようだが、誰かに相談はしたのかな？」

「……………いいえ」

「そうか。君が十分考えた上で出した答えならば、私は何も言うまい」

「はい……………ありがとうございます」

待っていたその言葉を聞くと、セリアは校長室から静かに退室して行った。その姿が扉の後ろへ消えて行くと、クルーセルが途端に校長に駆け寄る。

「校長、いいの？ セリアちゃん。折角ここまで来たのに」

「……………」

「校長？ ねえ。聞してる？」

「……………ク……………クルーセル、君……………」

漸く振り向いた校長は、まるで捨てられた子犬の様に絶望的な目をしていた。必死に平静を保っていた校長だが、もう限界であった。

弱々しげに自分の理解者を見上げれば、困った様な顔を向けられる。

「とにかく、彼等にも聞いてみるわ。まだ諦めちゃだめよ」

「そ、そうだな」

「そうよ」

「……………しかし、どうも迷っていた様だが、一体何があったと言うのだ」

そのまま顔を伏せ、ブツブツと何かを唱え始めた校長を置いて、クルーセルはさっさとその部屋を出た。本当なら、もう少し長居する積もりでいたのだが、そうも言っていられない。

この後、今までに見た事が無い程真剣な表情のクルーセルを校内で見た、との目撃情報が彼の同僚の元に届く。

そんなクルーセルが、目的の人物の内の一人を見付けるとすぐさま駆け寄り、その肩を軽く叩いた。

「ちよつとザウル君。いいかしら？」

「クルーセル先生……………!？」

「あのね、セリアちゃんの事なんだけど、最近何か悩んでいなかった？」

「セリア殿、ですか? いえ、特には」

「そうなの? じゃあ、何か嫌な事があったとかは?」

「すみません。自分に心当たりは…………セリア殿に何かあったのですか?」

「それがね……………」

今得た知らせを自分の友人達に伝える為、ザウルは駆け足で温室へ向かっていた。

未だにクルーセルの言葉は信じ難いが、嘘を言っているとも思えない。何かの間違いか、とも思ったが、真剣な表情の彼を見て、それが確かなのだと確信した。しかし、一体どうして急に。

温室へ転がり込むようにして入って来たザウルに、中の者達は目を見開いて彼を迎える。

「ザウル!？」

「ハア、ハア。セ、セリア殿は……?」

「セリア? まだ来てないけど、どうしたの?」

「その……」

細身な身体からは考え難いが、平均男性と比べてかなり体力のあるザウルが息を切らしているなど珍しい。それ以前に、いつでも落ち着いた雰囲気を持つ彼が、ここまで取り乱しているとは。一体何があったのだ、と候補生達も緊張を高める。

「どうしたんだ?」

「セリアに何かあったのか?」

疑問を口にしながらザウルを見詰める候補生達。やはりまだ誰も知らないのか、とザウルは一度肺に残る息を全て吐き切り、そして深く息を吸い込んでから言った。

「セリア殿が……退学届を出されたそうです」

「……はっ!? ……今、なんて……」

ザウルの言った言葉を理解出来ず、候補生達は思わず聞き返した。退学届。それを出すという事は、この学園を去るということ。そんな当たり前の事だが、候補生達はまるでその事を忘れてしまったかの様に、その意味を考えていた。

誰も言葉を発せず、温室は静まり返る。しかし、ザウルの言葉が漸く脳に浸透すると、枷を切った様に全員が声を上げた。

「何時だ!？」

「今日、先程校長室で」

「なんでだよ!! 昨日はそんな素振り全く見せなかっただろ!!」

「分かりません。でも、クルーセル先生もその場に居たようで、実際に見たと……」

分からない。昨日まで当たり前の様にそこに居て、何時もの様に議論を交わしていたというのに。あのセリアがこんな重大な事を胸

の内に秘めていたなら、自分達が気付かない筈はない。恐ろしい程考えが素直に顔に出るのだから。昨日のセリアは、確かに退学など考えてはいなかった。

ならば、彼女は一晩でこの決断を下したというのだろうか。

「しかし、理由に心当たりが無い。一体、何故!？」

「そうだよ。急に退学なんて……」

あのセリアにこれほど短時間の内に退学届を出させるなど、一体何があったというのだ。そんな風に候補生達が慌てていると、たった今温室へ入って来た様子の人物が顔を表した。それを確認すると、ルネがその名を呼ぶ。

「セリア!！」

外まで聞こえていた大声に、セリアが一体何事かと様子を窺う様に恐る恐る顔を覗かせた。しかし、表情はやはり曇っている。その姿に、ザウルに言われた事が間違いでは無かった事を確信して、候補生達は詰め寄った。

「なんでいきなり退学なんだよ!? 急過ぎるだろ!！」

「えっ!! 何で知って……?」

今まで世話になった彼等に、何も言わない訳にもいかず、これから退学の事を話そうと温室へ出向いたのだが、候補生達が既にその事を知っていた事に驚いた。

「セリア、本当なの?」

「う、うん」

ルネの質問に目を伏せながら答えたセリアに、今度はランが質問する。

「せめて理由を聞かせてくれないか? 何故、急に?」

「それは……」

「何か悩み事があるなら相談してほしい。我々に出来る事なら、君の力になりたい」

「……ごめんなさい。言えない……」

急な知らせに理由も無しでは彼等も納得はしないだろう、とは思

ったがそれでもセリアはその胸の内を語ろうとはしなかった。

これは彼等に気軽にご相談出来る様な事ではない。完全に個人的な事情だ。それに、話してどうなる事でもない。

だからといって、その所為で心配性で責任感の強い彼等に、また要らない心労を掛けてしまうのは忍びないが、こればかりはどうにもならないのだ。

「言えないって……なんでだよ？ 誰かに何かされたとかか？」

「そんなことない！ 学園での生活は楽しいし、残りたいよ。でも……」

「じゃあそうすればいいじゃないか」

「……ごめん……」

ただ謝るだけのセリアは、それ以上の言葉を拒否する様に温室を出ようとする。これ以上を聞かれても、何も答えられないのだ。しかし咄嗟に誰かに手を引かれ動きを止めた。振り返れば心配気に細められた琥珀の瞳に見据えられる。

「セリア殿……せめて、貴方のお心をお聞かせください。その決断で、後悔はされないのですか？」

「うっ……」

嘘を許さない独特の雰囲気気圧され、セリアは言葉に詰まる。

後悔しない訳がない。恐らく、生涯自分の判断を悔やんで過ごすだろう。しかし、それが分かっている、自分は答えを変えることは、出来ない。

ザウルの問いに答える事が出来なかったセリアは、その手をやりわりと解くと、そのまま言葉を紡ごうとする顔を見る事が出来ず、今度こそと足を動かす。しかし、またしてもその行く手は阻まれてしまった。

「わっ!!」

「……………」

セリアが外へ出ようとする、突然壁にぶつかった。と思っただが、こんな所に壁がある筈は無い。驚いて上を見上げれば、いつもの冷

たさを含んだバイオレットの瞳。突然のカールの登場に驚くが、ここで歩みを止める訳には行かないのだ。

セリアはカールの横を急いで通り抜けると、今度こそ候補生達の集う温室から走り去った。

「……何があった……？」

目を逸らしてこの場から走り去った栗毛の少女と、思い詰めた表情を揃える候補生達の姿に、眉を顰めたカールが問う。誰かの葬式か、という程重い空気を割り、ルネが戸惑いながらもゆっくりと事の経緯を話した。

## 手紙 2 (後書き)

いくらなんでも納得が出来ねえ。

どうしていきなり、こんなことになっちゃったんだ。そもそも、何でアイツは理由を言おうとしないんだ。そりゃあ、言いたくない事もあるかもしれないっていうのは分かってる。

でも、だからって指を銜えて見てるなんて出来る訳ない。

俺は……………



## 手紙 3

「まったく、なんだって次から次へと」

「しかし、理由が何も思い付かない、というのが……」

候補生達は苛立ちを募らせながらも、先程からその疑問に思いを巡らせていた。けれど、いくら考えても、その答えは出ない。むしろ、訳が分からず更に苛立つだけである。

「ご本人がまだ残りたいと望んでいるのに……」

「セリアは分かりやすいからね」

「何故、あれ程頑なに学園を出て行こうとなさるのでしょうか」

夢がある、この学園でやり遂げたい事がある。と語った彼女が、軽い気持ちで退学しようなどと考えるだろうか。しかも、この場所を去りたくない、と内心で思っているのは周りにまで伝わって来る。それを抜きにしても、退学を決意するには時間が早過ぎるのだ。流石のセリアでも、よっぽどの理由が無い限り、一晩で退学しようなどと決めるとは思えない。では、何が彼女をそこまでさせるのか。

「あれが決めた事ならば捨て置け。我々が何かを強制する必要もあるまい」

「っ！！カール！？」

「己の行動に責任が取れぬ程、あれも子供ではあるまい」

冷めた瞳で腕を組みそう言うカールを、候補生達は驚いた目で見詰めた。

確かにカールの言っている事は正論だ。しかし、この状況でそこまで冷めた事を言うとは思っていなかったのだ。しかも、セリアを相手に。

「お前、それ本気で言ってるのか？」

「自身で下した決断なら、後悔するもしないも己次第だ」

「そうは言ってもだなあ……」

「ただ、それがあれの決断ならば、の話しだ」

ハッとした候補生達が改めてカールを見れば、その額はくつきりと青筋を浮かべていた。

「そうでないのなら、こちらも口を出すくらいの事はしてもよからう」

他人に強いられて出した答えなら、こちらもその積もりで対応しようではないか。そう言うカールに、候補生達も妙に納得させられてしまった。セリアが、自ら望んでこの学園を去る事を決心した訳ではないなら、それに疑問を持つくらいはしても良いだろう。

セリアが去った温室で、候補生達は互いに顔を見合わせた。

日も沈み、学園もすっかり静まりかえった頃、セリアは再び机に向かい、昨日届いた手紙をボンヤリと眺めていた。

あと数日の内にはこの場を去る事になる。自分で蒔いた種とはいえ、やはり実感すると辛い。

胸の内でこの場に留まりたいと、幾ら叫んだ所でその声が手紙の送り主に届く事はない。今までもそうだったのだから。だからといって、セリアには逆らう事も出来ない。そんな権利、自分にはないと思っっているからだ。手紙の送り主の言葉に反抗するような行動を、自分は出来れば取りたくなかった。そして、その為に自分が学園を退学しなければならないなら、そうしようと思ったのだ。

恐らく、今フローズ学園を去れば、二度と戻る事は出来ない。つい先日、共に「帰ろう」と言ってくれた友人達の手を払い、「帰る場所」まで捨てようとしているのだ。その事実、肩が押しつぶされそうになる。

そんな時、ふと候補生達の顔が思い浮かんだ。今頃、彼等はどう

しているだろうか？　今まで散々迷惑を掛けたのだ。せめて、世話になった礼はちゃんとしたい。

彼等と過ごした時間は本当に楽しかった。この学園で、自分を友人と呼んでくれた候補生達には、いくら感謝しても足りない。入学前は、会う事すら叶わないだろうと思っていたマリオス候補生と、毎日議論を交わす様な仲になるとは思わなかった。それだけでも、十分満ち足りていたのではないだろうか。

彼等と離れるのは寂しい気持ちもある。だがそう思っても、やはりこの学園に留まり続けるという選択肢は、セリアの中には生まれなかった。

そうしてセリアがボンヤリしていると、突然窓を軽く叩く音がした。ハッとして振り向くと、窓の直ぐ傍まで伸びている枝に足を掛けたイアンの姿。セリアはあっと声を上げ、急いで窓を開ける。

「よお。入っていいか？」

「えっ！？　う、うん」

真剣に問われ、セリアは窓の前から少し離れる。

今までに何度かイアンがここを尋ねた事はあったが、部屋に入るのは始めてだった。セリアが離れた事を確認すると、イアンは自分の前に作られた隙間に影の様に静かに降り立つ。そして素早く窓を閉めた。外から見えない様にとカーテンまで引く。

セリアは、突然の来訪者に目を見開いて驚いていた。まさか、彼の方から出向いて来るとは思っていなかったのだ。それも、こんなに早く。

「俺が何で来たかは分かってるよな？」

「えっと……」

クルリと振り返りながら確認するようにイアンが問う。正直言つて、あんまりよく分かっていないセリアは途端に目を逸らした。恐らく、自分の退学の事についてなのだろうが、明確な理由は分からない。その様子に、イアンは諦めた様に息を吐く。

「なんでいきなり退学なんだ？　何がお前をそうさせた？」

「え、いや、それは……」

ああ、そういうことか。とセリアは納得したが、どう答えようかと戸惑う。言葉によっては誤解を生んでしまうし、安易に人に話したいと思える事でもない。しかも、完璧に個人的な事情が絡んでいるのだ。彼等に相談してまた頼る様な形にはしたくないし、相談されても彼等もきつと困るだろう。

そこまで思ったセリアはハッとしたり。机の上に手紙が出しっ放しなのだ。反射的にチラリと後ろを窺ったセリアをイアンは見逃さなかった。

「それか？」

「えっ！？ あ、ちよっ！！これは違う！！」

セリアの後ろに何があるのか、と伸ばされたイアンの手がそれに到達する前に、セリアは手紙を引っ掴みイアンから隠した。普段の、のほほんとしたセリアからは考えられないその様子に、イアンは更に眉を顰める。

「それ、見せてみる」

「だ、ダメです！！」

「じゃあ説明しろよ！！どうして退学なんだ！？」

「そ、それは……」

やはり言えない。と意思表示する様にセリアは横に首を振った。頑なに自分を拒絶するセリアを見たイアンの苛立ちも、ついに最高潮に達する。

「いい加減にしろよ！！！！」

「っ！！」

突然距離を詰められたと思ったら、両肩を強く掴まれた。そのままグイッと今までに無い程の力で引き寄せられる。一気に縮まった距離に、セリアが驚きで上を見上げると、怒りを隠そうともしないイアンの赤みがかかった瞳と遭遇した。

「いつもいつもいつも。一人で何でもかんでも決めやがって！！俺

達が毎回どんだけ心配してると思ってるんだ!!」

「あ、あの……」

「お前は俺がなんで来たのかって顔してたけどなあ、はっきり言ってやる。俺はお前にここから出て行行って欲しくないんだよ!!」

離れたくない。手放したくない。傍に居たい。そんな思いが込み上げて来て、どうしようもない。自分勝手だとは思っても、ここを去ろうとするのがセリアの意思でないなら、どうしても自分の気持ちを抑えられないのだ。勿論、自ら離れようとするなら、それもそれで面白くないが。

知らぬ間に自分の心にズカズカと入り込んで来たクセに、こちらが関わろうとすると、いつも既に突っ走ってしまった後。こちらを全く頼らないセリアも、そんな彼女を守り切れないのでは、と不安になる自分も気に入らない。本人がいつでも自分達に迷惑を掛けていると思っている、その思考も大いに好ましくない。自分が彼女に頼られるのを、どうして迷惑だと思うだろうか。むしろ、何も知らされずに、一人で抱え込もうとする方が、よっぽど腹立たしい。

確かに、どうしてこうも面倒事に巻き込まれるのだ、と思う事はある。それに眉を寄せた事もある。けれど、彼女と接するうちに、その動向には他の人間の様な欲も裏も無い事を知ると、どうしても放って置けなくなった。むしろ、危なっかしくて目が離せない。そうして、いつしか全てを受け止めてやりたくなったのだ。彼女を全身全霊で力一杯守ってやりたくなった。

だからこそ、セリアが一人で傷つく様なこと、させたくはなかった。それは、他の候補生達も同じだ。

真剣に見詰められて、セリアは何と言っているのか分からなかった。驚きで茶色の瞳を見開く。いや、驚き、というより困惑といった方が適当かもしれない。正直、まさかここまで引き止められるとは全く、これっぽっちも予想していなかったのだ。

イアンは、自分にここを出て行行って欲しくないと言った。あれほど真剣な雰囲気纏っていたのだから、言い間違えたのではないだ

ろうし、自分の聞き違いでも無いと思う。しかし、そう言われた理由がセリアには理解不能だった。というのも、イアン達にとって自分は迷惑以外の何者でもない存在だと思っていたからである。いくら仲間だと言ってくれても、それは変わらないだろう、と。それに、以前アシリアが退学届を提出した時も、候補生達は黙って見守った。だから、イアンがわざわざこの場所を尋ねてまで、自分を説得するとは思わなかったのだ。

「えっと……なんで……？」

非常に聞き難かったのだが、セリアはポツリとそう零した。その途端イアンは、はあ！？と声を上げる。イアンの反応にセリアはビクッと肩を竦めた。やはり聞いてはいけない質問だったのだろうか。真剣な雰囲気だったし、やはり失敗したか。でも、どうしてもここまですて行って欲しくないと言われたのか分からないのだから、仕方無いではないか。

目の前でビクビクと怯える少女に構わず、イアンは眉間に思い切り皺を寄せていた。その額は、明らかに「不快」の二文字を表現している。

今、自分は何を聞かれたのだ、と本気で考えた。あれでも一応、意を決して伝えた言葉だと言うのに、セリアは意味を微動も理解しなかったということか！？いくら普通の娘らしい思考が抜けているとはいえ、これはあまりに鈍感すぎるだろう。というより、何で分からないんだ。

そんな内心の苛立ちが表情に出てしまったようで、イアンにしては珍しく目つきがキツくなる。しかし、ここで引き下がる訳にもいかない。こいつの鈍さは今に始まった事ではないので諦められるが、居なくなるのは耐えられない。そう思い、ここはグッと衝動を堪え、脱線した話を元に戻す。

「とにかく、お前は俺達の仲間であり友達だ。急に出て行くとかわれれば、引き止める。それに抗うなら理由を言え。こっちも真剣なんだから、お前も誠意を持って答えろ」

なんだか押し付けがましく、半ば八つ当たりにも聞こえる。というより、明らかに先程肩透かしを食らった事に対する腹いせだろう。イアンの言葉を、セリアは妙に納得する思いで聞いていた。

確かに、彼の言葉はもつともである。今まで散々振り回したのに、出て行く時には何の説明もなしでは、多少自分勝手が過ぎたかもしれない。

なるほど。彼はそれを怒っていたのか、とセリアも自分の疑問が解消されてすっきりした気持ちになる。これほど真摯に向き合ってくれているのだ。どんなに言いたくない理由でも、彼等にはそれを知る権利があるだろう。ならば、自分も腹を括るしかない。

セリアはゆっくりと頷くと、腕の中に隠していた物をイアンに見せた。

「これは？」

「実家からの、手紙……」

「いいのか？」

イアンが、読んでも良いのか、と尋ねるとセリアは静かに首を縦に振った。他人の手紙を見る事に多少の抵抗はあるが、これでセリアがここに留まってくれるかもしれないなら迷いはない。セリアから紙を受け取ると、イアンはジッとそれに目を落とした。

しかし、書かれた文字に目を走らせる内に、自然と表情が険しくなっていく。そして、手紙の最後の方に書かれている部分を読み顔を歪めた。

『……それと、競技会の事は聞きました。殿方に混じって剣を振り回すなど、貴族の令嬢にあるまじき行為だということは言うまでもないでしょう。フロース学園で少しは子女らしく振る舞うかと思えばこの醜態。学園へ転入する際に出した条件は覚えていると思います。それを違えたのですから、約束は守ってもらいます。直ぐに家に戻りなさい。ワイトローズ学園へ再度転入してもらいます。フロース学園には二日以内に退学届を出す様に』

イアンが慌てて差出人の名前を確認すれば『クリスティーネ・ベアリット』と書かれている。

「母親か？」

イアンの言葉にセリアも戸惑いがちに頷く。

「条件ってのは何だ？」

「貴族として恥じない振る舞いを覚えること。それを条件に、フロース学園へ来る事を認めてもらったから」

までの、自分の貴族令嬢らしくない行動が一番の理由だと言える。そんな時に、令嬢らしい姿勢を守るなら良いのでは、と父が母を説得してくれたのだ。母も、それを破った時はワイトローズ学園へ戻る事を条件に、漸く許してくれた。セリアにとって、フロース学園はそこまでしてでも入りたい世界だったのだ。

「でも、あの競技会は……」

「参加した事は後悔していない。でも、だからって母に逆らう訳には……」

「理由を話して、許してもらうってのは出来ないのか？」

「……………」

理由を話す。そんな事考えもしなかった。今まで自分の声が母に届いた事はなかったから。

俯いたままのセリアを見てイアンは何と言おうか迷っていた。あの頑固なセリアが、母といえど相手に何の意思も示さず、ただ言われた通りに行動するなど想像できなかったからだ。

「悪かったな。無理やり聞き出す様な事して」

「ううん。そこまでしてくれて、ありがとう」

これほどまでに自分と真摯に向き合ってくれた事が、セリアは素直に嬉しかった。ここまで真剣に引き止めてくれた事にも、喜んでしまう自分が居るのは嘘ではない。この学園に来て彼等に出会えて、本当に良かったと思う。もう残り僅かになるかもしれない友人と



の会話に、セリアは心がほんのりと温まった。

「そうだったのか……」

「黙っていて、ごめんなさい」

「いや……君の個人的な問題を、無理やり聞き出す様な事になってしまつてすまなかつた」

次の日の温室。セリアは改めて候補生達全員に事情を説明する事にした。イアンに誠意を持って答えろ、と言われた事もあるが、やはり、ここまで親しくしてくれた友人に、何も告げずに去る事は失礼だろうと思い直したからだ。昨日は言いたくなかつた事でも、彼等の真剣さを目の当たりにしてしまえば、自然と自分の覚悟も決まつた。

やはり詳しくは語れないが、少なくとも母からの手紙が理由だ、という事は納得してもらえたようだ。

「君の事情に、無闇に介入しようとは思わない。しかし、やはり君はこの学園に留まるべきだ」

「ラン……そう言ってくれるのは嬉しいんだけど……」

「我々も全力で力になる。君には、望まない決断をしてほしくはない」

やはり、退学はセリアの意思ではなかつたのだ、と候補生達は確証を得た。ならばもはや引き止めるのに、何のためらいも無い。理由はどうあれ、事情が何であれ、セリア自身が望まないのであれば、それをするべきではない。そう改めて思ったのだ。それでなくとも、今彼女がこの学園を去る事が正しいとはどうしても思えなかつた。

好いた相手だ、という事を抜きにしても、彼女はいずれ自分達にとっても、国にとっても貴重な人材になることは明らかだからだ。

その後も候補生達はセリアの説得を試みたが、本人は決して首を縦に振らなかった。

「セリア……本当にそれでいいの？」

「……………それは……………」

「だって、この学園でやりたい事があるって言ってたのに」

候補生達の力になりたい。国の為に何かしたい。そうセリアは言った。その目標は今も変わっていない。むしろ、候補生達と触れ合い、彼等を知って行く内にその思いは増々強くなった。しかし、夢は少しも達成されていない。これから、という時に、本当に学園を去らなければならないのか。

しかし、どんな事を言っても、それは自分の夢である。母の命令を前には、己の理由は優先順位を下げなければならない。悔しいが、どうしても母に逆らう気にはなれないのだ。

「皆には本当に感謝してる。それに、私はまだ諦めてはいないから」  
「セリア……………」

候補生達の傍にいれば、いつか自分の夢は達成されるかもしれない。けれど、フローズ学園を離れたからといって、自分の国への忠誠心が揺らぐ訳ではない。遠く離れても、彼等の為に力をつけよう、とする事は出来る。ただ、夢が実現する事が難しくなるだけ。昔の様に、憧れの対象になってしまうだけだ。

「私、その……用意があるから、ごめん」

「セリア殿……………」

候補生達の強い視線にいたたまれなくなり、この場を離れるためセリアは適当な理由をつけて温室を出る。後ろから引き止める声があったが、今は無視する以外出来なかった。しかし、温室の扉を潜る前に地を這う様な声で呼び止められ足を止める。待て、と言った本人を振り返り見ると、その射る様な視線に身が凍る様な錯覚を覚えた。

「……カール………」

「……………」

冷たい眼差しでこちらを睨むカールの周りは、やはり冷えた空気が漂っている。しかも、いつも以上に緊迫感を醸し出して、こうして対峙しているだけで足が震えそうだ。もはや魔人を通り越し、内に鬼でも宿しているのでは、とセリアは本気で疑った。

「あの……カール………」

「お前は何の為にここへ来た」

「……っ!？」

「それ相応の覚悟と目的があって此処へ来たと、息巻いていたのではなかったのか？」

「……それは………」

確かに、覚悟があると自分はカールに啖呵を切った事がある。そして、その言葉は嘘ではない。けれど、こんな事態になる事は予想していなかったのだ。己の身がどうなろうと国の為に尽くす覚悟ならあった。しかし、それが母の意に背くことになるとは思っていなかったのだ。

「口先だけの戯れ言ではないと思ったのは、私の見込み違いだったか」

「……………」

「だが、そうではないのなら、それをこの学園で示せば良いだけだ」

この場所に残れば良い、とカールも言っているのだ、という事はセリアにも分かった。素直でなくとも優しい彼だ。此処に留まり、本来の自分の目的を果たせ、と言いたいのだ。

候補生達が言葉を掛けてくれる度に、自分の中で決心が揺らぐ様な感覚を覚えた。しかし、それはどうしても出来ない。候補生達には申し訳ないが。

尚もこちらを見据えるカールから視線を外し、セリアは急ぎ足で今度こそ、その場から離れた。

### 手紙 3 (後書き)

理想や叶えたい願いを持って、それを糧としてこの場へ赴いたお前なら、困難を乗り越えられる筈ではないのか。それでもなおこの場を捨てるといふのなら、その覚悟を見せてもらおう。

だが、今一度考えろ。お前の居るべき場所は、何処だ。

## 手紙 4

「はぁ……」

地面に腰を下ろし、後ろの木に背を持たれながら、セリアはボンヤリと目の前の池の水面を眺める。普段は人気の無い池の畔だが、今は栗毛の少女の姿があった。

一人になりたくて、やはりここへ来てしまったのだ。思えば、この場が始まりの場所だったと言えるだろう。候補生達と始めて会った場所だ。他の何処よりも、温室に並んで思い入れがある場所である。時折吹く風が頬を優しく撫で、その感覚が心地よくて、セリアはそっと目を閉じた。

どうしたい、と問われれば、自分は間違いなくこの場に残る事を選ぶ。しかし、母からの手紙には自分の意思を問う言葉は何処にも書かれていなかった。むしろ、そんな言葉があれば驚きである。約束を違えたのは自分なのだから、その責を負わされるのが自分であるのは当然だ。だからといって、後悔はないし、競技会に参加して良かったとも思っている。ただ、それが学園から去らなければならぬ様な事態を招くとまで、頭が回らなかっただけ。分かっていたとしても、自分は同じ事をしただろうが。

結局は、自分はこの場に留まれる道などないということだろうか。

そんな風に物思いに耽っているセリアに、背後からカサリと草を踏む音が聞こえた。こんな場所に誰だろう、と驚いて振り向くと、そこには想像もしていなかった人物。

「……先、生……?」

「どうも。セリアさん」

人の良さそうな笑みを浮かべ、ヨークがゆっくりとこちらへ歩み寄って来た。慌てて立ち上がろうとすると、それを手で制され、変わりにヨークがなんと自分の横に座り込んだのだ。大の大人が草の

上に腰を下ろすなど、考えられる行為ではないのでセリアも驚く。そんな事を言えば、地面に座り込むなど年頃の娘からは考えられない行動なのもお互い様なのだが。

「セリアさん。退学届を出されたそうですね。クルーセル先生に問いつめられましたよ。何かあったのか、と」

「あ、あの……」

「良ければ、理由を聞かせてもらえませんか？」

「……はい」

セリアはゆっくりと母から退学するよう手紙が届いた事を話した。教師という立場は友人とは違い、はっきりとした理由を述べるのに、あまり抵抗を感じない。簡潔に話しを纏めて説明するセリアの話しを聞き終えると、ヨークはゆっくりと頷いた。

「なるほど。そうでしたか」

「友人は、ここに残れと言ってくれたのですが、やはり母に刃向かう様な事は出来なくて……」

彼等にあれ程説得されるとは思ってもみなかった。この学園を去れば、彼等とも離れる事になるのだな、と思うと、胸にぽっかりと穴が空いた様な感じがする。しかし、これ以上母に楯突く様な真似は、どうしたって自分には出来ないのだ。

「セリアさん……貴方は学園に留まりたいと思っているのですね」

「……はい」

「でしたら、迷う必要はないのでは？」

「でも、母の意に逆らう事は……」

「……………本当にそれは逆らう事になりますか？」

「へっ？」

いつものんびりとした雰囲気そのままに、ゆっくりと言い聞かせるようなヨークにセリアも目を見開いた。一体、ヨークの言葉はこういう意味だろうか。逆らう事でない、というのは。

「お母上の意向とは違いかもしれませんが、セリアさんの心がこの場にどうしても留まりたい、と願うなら、そうするべきだと思います」

すよ」

「……………」

「確かに、親の言いつけを守ろうとするのは正しいかもしれませんがね。まだ貴方も若いですし。でも、それが必ずしも最善の選択だという事ではありません。時には、自分の心に正直になってみるのも、いいものですよ。それは逆らう事ではなく、自分で選択した、という事ですから」

「……」

「決めるのはセリアさんです。セリアさんの将来ですから」

そうなのだろうか。今まで考えもしなかったが、言われてみればそうかもしれない。もし、このまま自分がここに残るという選択をした場合、母に逆らう事になると信じて疑わなかった。しかし、それだけではないのかもしれない。

「ここに居たいと、貴方の心は強く望んでいる様に見えます。それでも、それを無視するほど、貴方はこの学園を離れるべきだと思いますか？」

「……………」

「気楽に考えてみるのも悪くないですよ。反抗するのではなく、自分の意思に従う、と試ってみてはどうですか？」

ヨークの言葉にセリアは俯いた。本当は、自分で分かっている。この場に居たいと、どうしてもここに残りたいのだと。自分でも驚くほど素直な欲が生まれるのだ。これほど何かに執着したのは、始めてだった。

「それに、友人というのは何にも代え難い宝です。今ここで手放してしまうのは、とても惜しいと思いますよ」

「……………」

それが、候補生達の事を言っているのだとはすぐに分かった。ヨークの言葉はセリアにも理解出来る。だからこそ、何も言い返せなかった。

「後はセリアさんに任せます。長い話しに付き合わせてしまってます

みませんでした」

「い、いえ。ありがとうございました」

ペコリと頭を下げるセリアを残して、ヨークはハハッと笑いながらゆっくりと歩いて行ってしまった。その後ろ姿は、今の今まで真剣な話しをしていたとは思えない程のんびりとしている。

その姿が見えなくなると、セリアはさて、と顔を上げ、もう一度真剣に考える。この場に残りたいという気持ちは嘘ではない。ただ、母に反抗する事がしたくなかっただけ。けれど、ヨークの言う通りそれが逆らうという事ではない、と考えたならどうだろう。逆らう訳ではないと、しかしこの場に留まりたいのだと強く示せば、あの人も納得してくれるのだろうか。

一度思い付いた考えは、心にあるこの場に残りたい、という気持ちと重なって、次第に膨らんで行く。都合の好い様に解釈しているだけかもしれないが、それでも考えずにはいられなかった。それはやがて、固かった筈の意思を、ジンワリと和らげて行く。

いいのだろうか？ここに居ても……

温室内では、候補生達が難しい顔をしていた。セリアの説得に失敗し、もしかしたら本当に彼女を止める術は無いのでは、と頭を抱える。

「どうにもならねえのか？」

「何とかお止め出来ないでしょうか……」

あれだけセリアの意思を見せられても、どうしても納得出来ないのは、やはり彼女がそれを望んではいないからだろう。

「とにかく、校長に当たってみないか？もう少しセリアの退学届の



受理を遅らせてもらえるように……」

「あのう………」

恐る恐る、といった風に顔を覗かせた人物に、候補生達は驚きに目を見開いた。先程温室を出て行った筈の栗毛の少女に、全員の視線が向く。

「セリア!？」

「あの、その……まことに申し上げ難いのですが、何と申しましようか……そのですね……」

あれだけ曲げなかった意志を、今更変えたというのは、非常にバツが悪いのだが、伝えない訳にもいくまい。しかし、どう切り出して良いか分からないのも正直な気持ちだ。

「あの、色々考えたのですが……やはり、その……私もここに居たい気持ち強いともうしますでしょうか……その……」

「……?」

「ですから……あの、まだこの場でやりたい事がある、と思い直してですね……その、つまり……」

「っ!セリア、ここに残るの!？」

「あ、えつと……はい。出来ればそうしたいな、と」

ポツリと零された言葉を、候補生達はしっかりと聞き取った。そのの意味を理解すると同時に、全員に安堵の笑みが広がる。

「あの、本当に申し訳ないんだけど……」

「そんな事気にするな!!皆お前が残ってくれる事が嬉しいんだからよ!」

グシャグシャ、と優しくだが乱暴に頭を撫でてくるイアンが、笑顔でそう言う。喜びと安堵でつい腕に力が入ってしまうのは、仕方無いと言って良いだろう。言いたい事は沢山あるし、何が彼女の意思を変えたのかも気になる。しかし、そんな事より今は素直に喜びたい。

「本当に人騒がせな事だ」

「うっ、すみませんでした」

カールにビシリと言われてセリアも言葉に詰まる。しかし、本当の事なので何も言い返せない。カールもそれ以上は特に責める様子見せず、いつもより幾分穏やかな空気を纏っている。

「しかしセリア、急いだ方が良い」

「そうですね。今は校長室へ行かれた方が……」

言われてセリアはハッとした様に顔を上げる。早く校長に退学届の撤回を頼まねば、受理されてしまではないか。これは急がなければ。

「そ、そうだね。ごめん。行ってきます」

「セリア！」

温室を出ようとしたセリアに、後ろから声が掛けられた。どうしたのだろう、と振り向くと候補生達全員に見詰められる。

「帰ってくるのだな？」

「……はい！」

ランに言われた言葉にセリアは力強く頷く。そして、今度こそ温室を飛び出した。その後ろ姿を見送る候補生達は、一先ず胸を撫で下ろす。とにかく、セリアが考えを改めてくれてよかった。

候補生達がホッと胸を撫で下ろしていると、温室に新たな訪問者が現れた。その人物を確認して候補生達は驚きで目を見開く。

「クルーセル先生……？」

「あら、セリアちゃんは居ないの？」

キヨロキヨロと温室内を見回すクルーセルに、候補生達は戸惑った。彼がセリアに何用だろう。まさか、退学が決まった事を伝えに来たのだろうか。

「あの、退学の件ですが、セリア殿はお気持ちを変えられたようで……」

「そうなの？よかった。ヨーク君に言われてもしかして、と思ったんだけど。じゃあ、もう大丈夫ね」

よかった、と微笑むクルーセルに候補生達は自分達の心配は杞憂に終わったのだと理解する。彼もセリアの事を気にかけていたのか。  
「なら、明日からが楽しみね」

「……？」

「これで私のクラスはもっと楽しくなるわ」

「あの、クルーセル先生、それはどういう意味でしょうか？」

ランが聞けば、クルーセルはよくぞ聞いてくれた、とばかりに顔を輝かせた。

「うふふ。聞いて驚いてよ」

「……は、はあ」

「実はね………」

校長室の前に立ったセリアは、一度大きく息を吐く。勢いでここまで来てしまったが、いざとなるとやはり気持ちが重い。とにかく謝り、退学届を取り下げて貰うしかないだろう。折角ここまで来たのだから気合いを入れねば。

セリアは意を決すると、心無しか普段より大きく見える扉を軽く叩いた。

「入りましたえ」

「はい」

入室を許可する声が聞こえ、セリアは深く息を吸い込んだ。まるで、始めてこの学園へ来た時の様だな、と思い出しながらセリアはゆっくりと部屋の扉を開ける。その奥では、校長がいつもの様に執務机に向かっていた。校長室には、珍しく他の誰も居ない。普段ならば、クルーセルが横のソファで寛いでいる姿があるのに。

「校長先生。お話したい事がありました。宜しいですか？」

セリアの言葉に校長も頷く。それを確認してセリアはゆっくりと先程心を変えた事を話した。やはり此処に居たいのだ、という事。そして提出した退学届を取り消して欲しいと。

「申し訳ありませんでした」

「……………」

深々と頭を下げるセリアを、校長は無言で見詰める。その威厳に竦み上がりそうになるが、ここは引く訳にはいかない。セリアはそのまま校長の次の言葉を待った。

「ふむ、なるほど。君の事情は良く分かったよ」

「……」

「しかし、先日提出された退学届は、既に処理するように回してしまったのだよ」

「っ!!」

その言葉にセリアは絶望に落とされた。グラリと視界が揺らぐ感覚に襲われ、立っているのすら難しくなる。しかし、これは自分が招いた結果だ。一度の迷いで生じた間違いは、取り返しはつかないのだ。

グツと足に力を入れ、しっかりと立つ。

「だが、実は確認したところ、退学届に誤りがあってね。受理は出来なかったのだ」

「へっ!？」

その言葉に驚いて顔を上げると、校長は机の引き出しから見覚えのある封筒を取り出していた。自分がこの部屋へ持って来た退学届だ。誤りとは一体どの点だろう。

「ここには、ヨーク君の担当するクラスの生徒、セリア・ベアリット君が退学を望む、と書いてある」

「は、はい」

「しかし、そのクラスにその名前の生徒は、既に所属していないのだよ」

「え、えええ!？」

校長の言葉にセリアは混乱する。クラスに自分の名前が入っていない? 一体どういう事だろうか?

「それと、君に言い忘れていた事があってね」

「はっ?」

「いやあ、私もついすっかりしていてね、君のクラスが変更になった事を伝えるのをすっかり忘れていたのだよ」

「え、あの……どのクラスでしょうか?」

一体、どういう事だろう。クラスが変わるなど、何故だ? 何かまずい事でもしたのだろうか。混乱するセリアを他所に、校長はゆっくりと口を開いた。

「セリア・ベアリット君。君にはマリオス候補生クラスに編入して貰う」

「……………はっ?」

突然発せられた言葉に、つい声の上擦ってしまった。それでも、校長の言葉の意味は脳に入ってこない。

マリオス候補生クラスに、どうして自分が編入するのだろうか。考えてもその答えは出ず、むしろ、それは絶対あり得ないのでは、としか思えない。

「こ、校長先生!! そんな、マリオス候補生クラスって、どうしてですか!？」

「君に適切だと思い、今回の編入を決めたのだが」

「ですが、マリオスになれるのは、男性だけです」

「女性の権限は法律で認められているよ。それに、このフロース学園において、女生徒が候補生になれないという校則は初めから無い」

「それは……」

確かに、校長の言っている事は本当だ。女性が自由な職務に就く権限は、数年前に正式に認められている。しかし、実際に女性が何か職に就く事は珍しい。というより、何処もあまり歓迎しないのだ。やはりクルダスでは、まだ女性は家庭を守る為だけの存在、という

意識が強い。

しかもマリオスといえば、優秀で、選ばれた男性になる事が伝統となっている。しかも、クルダスという国を代表する存在だ。そして、フロース学園のマリオス候補生に選ばれるということは、そのままマリオスになる可能性が十分にあるということ。マリオスとなる事を認められたということだ。

「で、でも、私には無理です！！そんな、マリオス候補生なんて」

「この事は、国王陛下の承認も得ているのだよ」

「へ、陛下の！？」

「そして、マリオスの誰一人として反対はしていない」

「マリオス様達まで！？」

そこでハッとセリアは思い出す。王宮へ行った時の、あのマリオス達の射る様な視線を。まさか、あの時既にこの件が上がっていたのだろうか。だから、まるで見定める様に見られていたのだろうか。

「そ、そんな、でも……」

だとしても、これは別問題だ。誰が見ても分かるが、自分は役不足である。マリオスとは、国を導き、陛下に尽くす、国の要とも言える存在。その候補生だといっても、そんな大役、自分に務まる筈がない。

「校長先生の好意は嬉しいです。でも、マリオス候補生は、私では務まりません」

「君は十分に結果を残してくれると信じているよ」

「いかぶりです。いくら陛下の承認を得ているとしても、私には

……」

「セリア君」

また、あの威圧する様な声で名を呼ばれ、セリアも押し黙る。チラリと見上げた視線の先には、自分を強く見詰める校長。

「君はこの学園に転入する際、マリオスや候補生達に強い憧れと尊敬を抱いていると言っていたね」

「は、はい」

「そして、君は陛下をお守りする為に競技会への参加を申し出た。そうだったね」

「はい……」

「それは、どうしてかな？」

急に何の話だろう、とセリアも疑問に思うが、今は校長の問いに答える事にした。

「それは、この国が好きだからです。自分の生まれた、クルダス国の国民として、陛下やマリオス様を心からお慕っています」

「ふむ。その答えだけでも十分候補生になる資格はある様に思うが」「っ！？自分には無理です！！私にその力が無い事は、誰もが認めています」

「私はそうは思っていないがね。君は十分、今の候補生達と同じだけの実力は持っている」と確信しているよ」

先程からまるで茶化す様に喋る校長に、セリアは気でも触れたか、と言ってやりたくなった。自分をマリオス候補生になど、一体何を考えているのだ。これだけ自分は無理だと言っているのに、全くそんな事聞いていないようだ。

「セリア君。国王陛下、とは何だと思う？」

「はっ？」

突然の質問にセリアは一瞬戸惑った。また唐突に、一体何の話だ。急な問いは、セリアを言葉に詰まらせる。しかし、校長の方は答えを求めている訳ではないようで、そのまま続けた。

「王位に着く者とは、いわば王冠そのもの。国に住む民一人一人の為に、冠だよ」

「は、はあ……」

「ならばマリオスとは、王冠を飾る宝石。冠を更に飾り立て、それを冠る者に更なる栄光を齎す、輝かしい宝なのだよ」

「……………」

「彼等は、その宝石の輝きを持って、国の行く先を照らし、導いて来た。その輝きは、ランスロット君やカールハインツ君。イアン君

にもザウル君にも、そしてルネ君にも十分備わっている」

陛下が王冠ならば、マリオスは宝石。その言葉は、セリアの中にすんなりと浸透する。冠る者に栄光を、民に平和と幸せを与える。まさしく、冠とは適当な表現かもしれない。そして、候補生達にその輝きがある事はセリアも十分に理解している。彼等は本当に光り輝いているのだから。

「その輝きを、私は君にも見出したのだよ。どうかね、セリア君」

「そ、そんな……私には……」

「確かに、君の輝きは彼等の様に、誰にでも見えるものではないかもしれない。しかし、角度を変えて見れば、驚く程の光を内に秘めているのが見えるよ」

「そ、そんな事は……」

「実際に、彼等は君の光に惹かれたようだしね」

候補生達がここまでセリアに惹き付けられるのは、国の為に尽くそうとする、その姿勢から来る、その光を見たからだ。外から見ただけでは分からないが、視点を変えれば溢れんばかりに眠っている光を。

「君達は、残念ながらまだ未開発の原石の様な存在だよ。いつてしまえば、道に転がっている石ころと何の変わりもない。しかし、ランスロット君達は、その事をいち早く理解し、日々自分を磨いている。マリオスという、輝かしい宝石になるためにね」

「それは……」

それはセリアも十分に理解している事だ。彼等が日々努力し、己を高め合っている姿を、自分も目の当たりにしている。そんな彼等の力になることを自分は目指していたのであって、彼等と同じ立場に立ちたいと望んでいた訳ではない。

「セリア君。候補生になる事を、そこまで気負う必要はない。ただ、君が自分を磨くというなら、候補生クラスはよりよい環境を提供してくれるのでは、と思ったのだよ」

「あの……」



「これは、国王陛下の望みであり、ご意思でもあるのだが、どうかね？」

「うっ……!!」

国王陛下の意思。その文字に、セリアは面白い程反応し、返す言葉に詰まった。自分が尊敬する存在である「陛下」の二文字を楯にされては、何も言い返せない。

セリアは、出そうになる言葉をぐっと飲み込み、深々と頭を下げた。そして、大きく息を吸い込む。

「私は、マリ奥斯候補生様達の友人として、彼等をその傍で見えました。彼等は、本当に宝石と呼ぶに相応しい存在です」

「……………」

「彼等の様な輝きを、私は持っていません。でも、陛下や校長が与えて下さった場で、少しでも国の為に尽くせるよう磨く事は出来ます」

「……では」

「マリ奥斯候補生クラスへの編入、是非受けさせて下さい」

これ以上この場で辞退しようとしても、校長はきつと意見を変えないだろう。ホレホレ了解してしまえ、と押すノリに、セリアもそれ以上は断れなかった。

それに、まだ役不足だと理解はしていても、心の底で喜んでいる自分がいる。つい先程まで、候補生の力になりたい、と言っていた自分が、彼等と対等の立場に立てるのだ。それは、許されるのだろうか。もし、認められるなら、こんな嬉しい事はない。しかし……

その後も校長の話しは続いていたのだが、セリアは何処か上の空で聞いていた。あまりにも急な展開に、やはり思考は追いつかないようである。勢いで頷いてしまったが、まだ実感は湧かない。

校長から退室の許可が出たため、セリアはフラフラと扉へ向かっ

た。そのまま一礼して部屋の外から扉を閉めると、すぐ横の壁に寄りかかる。なんだか、足下が掬われる様な感覚がして、立っていられたなかったのだ。

「セリア！おめでとう」

「へっ!？」

すぐそこから声がして顔を上げれば、それは嬉しそうな表情の候補生達。にっこりと笑うその笑顔は輝かしいのだが、彼等が何に對して喜んでいるのか分らない。

「マリオス候補生になれたんでしょ。僕達も嬉しいよ」

「えっ!？なんで知って……?」

嬉しそうに話すクルーセルに教えられた事実、候補生達は心から喜んだ。セリア本人よりも一足先にその事を知った彼等は、校長室の外でセリアを待っていたのである。しかし、そんな事知る由もないセリアは、自分ですらまだ自覚出来ない事態を、何故彼等が知っているのだろう、と混乱した。それ以前に、彼等がこれほどまでに祝福してくれる事が意外だったのだ。

「驚いたが、とても喜ばしい事に変わりはないな」

「ええ。これからはセリア殿と共にマリオスを目指せるとは」

セリアが候補生になるなど、願ってもない事ではないか。突然の事だが、全く予想していなかった訳でもない。彼女の實力ならば、きつといつかはそうなるのでは、と思っていた。むしろ、そうであって欲しいと願っていた、というべきか。なので、こうして唐突に現実になっても、候補生達には何の抵抗も無い。

逆に、セリア自身の方が狼狽していた。

「で、でも、やっぱり私には無理だと……」

「学園側が判断したなら、その地位に相応しいということだ。それとも、貴様是我々もマリオスには不相応だと言いたいのか?」

「えっ!？め、滅相もない!!」

セリアがマリオスに相応しくないにも関わらず、候補生に選ばれたのなら、同じように候補生に選ばれた彼等も力不足だと言ってい

る様なものだ、と言いたいらしい。セリアにしてみれば、そんな積もり微動もないのだが。

反対されるか、呆れられるだろう、と思っていた候補生に、ここまで祝福されてしまいセリアは戸惑った。誰も自分の力不足や分不相応を指摘しようとしないのだ。その事にセリアは何よりも面食らう。

「ほらセリア。そんな難しい顔しないで。セリアなら大丈夫だよ」

「ああ。我々は、君が立派にその役目を果たせると信じている。急な事で不安になるかもしれないが、その時は我々が全力で力になる」

「ねっ。だからセリアも一緒に喜ぼうよ」

先程から困惑か絶望したような顔しか見せないセリアに、ルネが言い聞かせた。その言葉に、セリアの胸の内にくすぶっていた喜びが、顔を覗かせて来る。

つい数時間前まで、退学するかしないかという立場だった自分が、いまやマリ奥斯候補生だ。あまりに現実離れしている様な気がする。まさか、自分にそんな大役が回って来るとは夢にも思っていなかった。しかし、ランやカールの議論を聞いて、マリ奥斯候補生クラスではどんな授業がされているのか、気になっていたのも事実。その全ては国の為になりたい、という想いからの行動だった。そして、マリ奥斯とは何よりも国に貢献出来る立場と言えるだろう。その候補になる資格がある、と判断されたのが嬉しい事は否めない。

「いいのかな。私が、候補生になっても」

「当たり前だろ。俺達は全員歓迎するぜ!!」

当然だろう、と透かさず言い返され、セリアも啞然としてしまう。不安はあるし戸惑いもある。この後の事を考えると、肩に掛かる重圧が一層重みを増すのも事実。だが、周りには彼等が居る。今までもずっと自分を支えてくれた、頼もしい友人が。彼等が自分に笑みを向けるだけで、自分が彼等の横に立つのが許される様な気がする。

出来るだろうか、自分に。彼等に追いつけるだろうか。国を導くような存在になれるのだろうか。

沸き上がる疑問を掻き消す様に候補生達が満面の笑みを向けてくるので、セリアも自然と心から浮かび上がる笑顔を隠し切る事は出来なかった。

栗毛の地味な少女が浮かべる子供の様な笑みに、波乱に満ちた宿命が、舌なめずりをしながら視線を向けている事を誰一人として気付いていない。後に来る大きな嵐が、その少女を飲み込まんと、大きな腕を広げ始めた瞬間だった。

第一章 埋もれた小石

完結

## 手紙 4（後書き）

やったー。第一章完結よ、完結。ホラホラ、ハンスちゃんもヨーク君も、お祝いしないと。

「なぜ、私がこの様な所に……」

「ここまで長かったですね。ハンス先生も、一緒に喜びましょう」  
もう私、授業が楽しみで楽しみで。

「貴方はこれを機に、真面目に教師の仕事をしてください!!」  
考えておくわ

「く、クルーセル。貴方という人は!!」

「ハンス先生。少し落ち着いて下さい。折角、ここまで来たのですから。しかし、私のクラスからセリアさんがいなくなるのは少し寂しいですね」

あら、歴史の授業でまた会えるじゃない。

「そうですね」

色々あったけど、ここまでこれで感激だわ。

マリオス候補生になったセリアちゃんが、どんな活躍をしてくれるのか、楽しみだわ。ね、ハンスちゃん。ヨーク君。

「私は、是非とも遠慮願いたいです。ただでさえあの候補生達は手に負えないのに……」

「セリアさんは頑張っていましたからね。私も嬉しいです」

さて、挨拶が終わったからこれから校長室に行って……

「クルーセル!! 貴方はまだ仕事が残っているでしょう!!」

「お二人とも、落ち着いてください!!」

ハンスちゃん、お願いね

「あっ! クルーセル!!」

ここまで読んでくださり、本当にありがとうございました。  
これからも、どうぞ宜しくお願いします。

## 訪問者 1

今日も空は青々と広がっていた。時折視界に白を移す雲も、温かな光を注ぐ太陽も、全ては昨日と同じである。ただ、それを自室の窓から見上げる少女の心は、昨日までとは少し違っていた。

珍しく早起きしたセリアは、一つ大きく伸びをして簡単な身支度を済ませると、ゆっくりと自室に背を向けた。本来なら、今日は大荷物を手に自室を出る筈だったが、そんな物は見当たらない。変わりに、いつもの鞆が手の中で揺れていた。

校舎へと続く道を歩く栗毛の地味な少女の姿を、目に留める者は少ない。憧れのマリオス候補生達と親しくしている、という事からある種の敵意の視線ならば集まるが。しかし、この時は何が起きるでもなく、セリアは平和に教室を目指していた。だから、彼女が普段とは違う方向へ足を向けていても、気付く者は居ない。

「セリア」

後ろから軽快な声が聞こえて振り返れば、水色の髪がふわりと撥ねたルネがこちらへ向かって歩いて来る所であった。向けられる深緑の瞳にセリアも笑みを返す。

「おはよう」

「ルネ。おはよう」

なんてことない朝の挨拶だが、セリア達にとってこれは斬新であった。マリオス候補生の教室は、今までのセリアの教室とはかなり離れている。しかもセリアは男子寮とはそれなりに距離のある女子寮で寝泊まりしているのだ。その為、朝から候補生達と鉢合わせる事は少なかった。まあ授業の後で温室で会えるのだから、と今まで気にしたことはなかったが。けれど、今は違う。

「おっ！寝坊せずにちゃんと起きたみたいだな」

「セリア殿。おはようございます」

よっ、と軽快に手を挙げるイアンと、それは見事な程丁寧に頭を

下げるザウル。正反対の二人がルネの後ろからひょっこり顔を覗かせた。

今の時間帯、普段ならば会う事はない候補生達にここまで遭遇するのは理由がある。それは、セリアも候補生達と同じ場所へ向かっているからだ。

「ほら行こうぜ」

さっさと進もうとするイアンに背を押され、セリア達も先を急ぐ。時間にはまだ余裕があるので特に急ぐ必要はないのだが、イアンにはセリアを早く教室へ案内してやりたい理由があった。何かを企んだようなイアンの表情に、ザウルもルネもその意図を読み取ったのか、少し歩調を速める。

セリアがそれに気付く事はなく、せっせと三人に付いて行くと、あっという間にマリオス候補生クラスまで来た。扉の前に立つイアン達は、何処かニコニコとこちらを見詰めている。セリアはそこで、イアンの普段と違う様子に漸く気付いたようで少し首を傾げた。

そんなセリアを気にする事なく、イアンは扉に手をかける。

「ようこそ。マリオス候補生クラスへ」

そのままセリアに見せるように扉を勢い良く開く。ガラツと音を立てて開いた教室の中を覗くと、そこには今までとは全く異なった雰囲気 of 教室が広がっている、訳ではなかった。それどころか、セリアが既に見慣れてしまった光景が目飛び込んで来る。

「そろそろ間違いを認めたらどうだ。カールハインツ」

「貴様こそ、己の愚鈍さを理解することだな。ランスロット」

お互いを睨み合いながら、一步も引こうとしないダークブロンドとプラチナブロンドの青年二人。その姿を見て、セリアは目を見開く。その表情には驚き、というより困惑のような色が見えた。まさか、朝っぱらからこんな言い合いを続けていたのだろうか、この二人は。

そのまま横に立つイアンに視線を移すと、当の本人は笑いを必死に



堪えようと肩を揺らしていた。けれど、我慢出来ずにクツと喉の奥から声が漏れている。

「どうだ？これが、いつもの風景だ」

「は、はあ……」

つまり、目の前に広がるこの光景は毎日のものだ、ということだろう。よくもまあこんな所まで言い争いを持ち込むものだ。飽きないのだろうか。などと呆然としていたセリアだが、普段の条件反射で二人の間にある資料に目を落とした。そのまま参戦しそうな勢いで資料の内容を頭に入れて行く。

突然現れたセリアに、その教室に居た他の生徒達が驚きざわつき始めた。

ここはマリオス候補生のクラスであり、しかも今は授業前だ。栗毛の地味な少女の居るべき場所ではない。にも関わらず、一体何用だ、と生徒達が訝しげな視線を送っていると、廊下から薄緑の髪を揺らすクルーセルが現れた。

「おはよう！二人とも落ち着いて。早く皆にセリアちゃんを紹介しなきゃ」

ねっ、と嬉しそうに顔を覗かせたクルーセルは、ランとカールの舌戦に臆する事無く、教師らしく全員に席を進める。そのまま手でセリアを教室の前に呼び寄せると、それはもう満面の笑みで口を開いた。

「今日から、このセリアちゃんもマリオス候補生クラスの仲間よ」

「セ、セリア・ベアリットです。宜しくお願いします」

ペコリとセリアが頭を下げた途端、教室内に動揺が走った。マリオス候補生は全員で十二名。内五人とセリアはもう既に知っていた事だが、残りの七人にとってこの事態は寝耳に水だった。今までマリオス候補生になれたのは男だけ。それは誰もが知る常識であり、伝統であったというのに。そこに、栗毛の地味な少女がいきなり入って来たのだ。突然の事に生徒達の間に動揺と混乱が生じるのは仕方ないといえるだろう。

「貴方は……珍しく授業に出て来たと思えば、それを言うためだったのですか!？」

「まあまあ、ハンスちゃん。いいじゃない。折角なんだし」

クルーセルの後ろで控えていたハンスが声を上げれば、クルーセルはあっけらかんと返した。そのままハンスは、酷い胃痛に耐えながら、同僚の教師にあるまじき行為の改善を懸命に願う。

珍しくも、今日は真面目に授業に顔を見せたので、ついに改心してくれたか、と淡い期待を抱いた。けれど、それはただ単に新参者を教え子達に紹介する事を目的としていたのだ。それが意味することは、今日が終わればまたこの同僚のサボリ癖が再発するということ。そう理解したハンスは内心で大きなため息を吐いた。

「ホラホラセリアちゃん。貴方も座って」

「あ、はい」

後ろから漂うハンスの不穏な空気から逃げるように、セリアはいそいそとクルーセルが指差した席に座った。けれど、席に座れば座ったで、また後ろから刺す様な視線を感じる。もしかしくとも、他生徒による物だろう。まあ、覚悟していたことであるし、特に害はないので気にしないが。

動揺する教室内を平然と見回すと、クルーセルはそのまま授業を始めるべく、口を開く。非常に珍しいことに、この日の授業は、クルーセルが教卓に立ったまま開始されたのだった。

教室の前で、ハンスは眉を潜め、今の状況をどう打開しようかと模索していた。その視線の先には、問題になっている三人の生徒。前日までは二人だった筈が、今となっては三人だ。もうどうしたら

いいか分からない。

「先程から言っているだろう。弱者を切り捨てるだけでは、意味が無い！」

「不穏分子は早めに取り除く事が先決だ。対処を誤れば、新たな火種になる」

「だからといって、それだけでは国家は成り立たないだろう！！」

ドンとランが拳を机に叩き付け、目の前で涼しい顔を向けるカールを睨む。ここまではハンスも既に慣れている光景だ。別に今更動揺したりはしない。しかし、今現在問題になっている人物が間に割って入った。

「この場合、ある程度の犠牲は仕方無いわ」

「だからといって、これはあまりに強引過ぎる」

「その後の待遇と保証を改善すれば、可能よ」

バシバシと自分の意見を言っていくセリア達の議論を聞いている内に、ハンスは言い知れぬ頭痛を感じ始めていた。チラリと横を窺えば、珍しく教室に留まっているクセに、教師らしい行動を一切せず、クスクスと笑いながら白熱する議論を眺める同僚の姿。

「でも、カールのやり方だと、緊急事態への対処で問題が生じるかもしれない」

「必要な処置だ」

「無理に押し進めても、不満の声が上がる可能性があるわ」

その後も、ああでもない、こうでもない、と続く議論に、ハンスは頭を抱えた。どこからどうしてこうなったのだろうか、と思い出そうとしても一向に心当たりが思い浮かばない。つい先程までは普通の授業を行っていた筈だ。少なくとも、記憶の限りでは。それも全ての授業が終わり、ただその日の纏めを行うだけの。それだけの筈だったのに、どこをどうすればこんな事になるのだ。

ハンスは深い溜め息を洩らし、クルーセルはクスクスと忍び笑いを見せる。その間も、イアン達は予想通りの展開に苦笑を洩らしていた。

しかし、この事態に理解が追いつかないのが残り七人のマリオス候補生達。普段から聞き慣れているランとカールの議論だが、どうしてこの少女がそこに何の違和感も無しに加わっているのだ。以前にも似た様な事があった気がするが、未だに目の前の光景が信じられない。それ以前に、セリアという少女が候補生なった事自体、全くの予想外なのだ。

この後彼等によって、フロース学園の歴史上初となる女性マリオス候補生の誕生は、学園中に広まる事になる。その報は瞬く間に全生徒の間を駆け抜けた。セリアやカール達が自然に受け止めていたので忘れてしまいそうになるが、これは一大事なのだ。

マリオス候補生は既にクルダス中の注目の的だ。将来を期待され、マリオスに最も近い場所にいるとされている。その地位に、何処にでも居る様な、地味な少女が納まった。一体どうなっているのだ！？と疑問や不満を洩らす生徒も当然出てくる訳である。そんな生徒は、直ぐに教師達に確認にするため立ち上がった。

「ハンス先生！！一体どういう事ですか！？」

「マリオスになれるのは、男性だけの筈です！！」

「それより、候補生様達は何も仰らないのですか？」

「そもそも、どうしてセリアさんなのですか？もっと相應しい方は居る筈でしょう！？」

生徒達、主に嫉妬に駆られた女生徒達に詰め寄られ、ハンスは黒縁眼鏡の奥の瞳を揺らす。素直に疑問だけを抱き、この場へ赴いた生徒も居たようだが、ハンスの前に立ち塞がる女生徒に恐れをなし、逃げてしまった様である。さっと周りを見回しても、同僚はどうに安全地帯へ非難した後。この処理を全て自分に任せる気か！！と、ここには居ない同僚への恨みを募らせながら、ハンスは声を発する。「候補生に相應しいだけの力があると判断され、決定した事です。君達が心配するような事はありません」

さあ帰れ、と追い出そうとしたハンスだが、女生徒の方が何枚も上手だった。というより、ハンスの言葉など最初から耳に入ってい

ないようである。

「ハンス先生は、あの人の事をご存じないのですか!？」

「女性らしくない上に、裁縫の一つも碌に出来ないのですよ!!」

「それなのに、何故か候補生様達には気に入られていて」

「今回の事も、候補生様方が関わっているのではないのですか？」

根拠の無い憶測を立てる女生徒達に、ハンスは心底うんざりする。どうしてあの少女と候補生達はこうも問題ばかり起こすのだ。と、響く頭痛に悩みながら、辞職願を着々と胸の内で準備し始めた。

そんなハンスの苦勞を知る由もなく、安全地帯の一つである温室で、候補生達は和んでいた。

「どうだったセリア。候補生クラスの感想は」

「うん。やっぱり、前の授業より内容は高度だと思った」

それが、今日一日の素直な感想である。授業内容は、やはり以前のものよりも範囲も広く、内容も複雑だ。それに加え、この場に居る二人が何でもかんでも議論に持ち込む為、授業は教師の手に負えない程にまで発展する。

「でも、お前なら大丈夫だろ」

「多分。なんとか付いて行けそう」

確かに、途中から入る為、遅れた分は痛い。それでも、全く付いて行けない程ではなさそうだ。そんなセリアに、候補生達も精一杯支えて行く積もりである、と意思表示した。というより、彼女が傍に居る事が、素直に嬉しいのだ。

「それより、実家の方は大丈夫？」

「えっと……昨日、ちゃんと手紙を送ったけど、どんな返事が来るかは分からない。でも、何を言われても今は学園に残るつもり」

候補生達に必死に説得され、ヨークにまで引き止められた。最終的に何が自分にそう決断させたか、と聞かれればやはり彼の言葉だろう。手紙にも、これは自分の意思ではあるが、逆らう気ではない、とはっきり書いた。そのことに何と言われようと、もう自分からこの学園を離れるような事はしない。

学園に留まる事を伝えた時、ヨークは心底安心したような顔を見せた。ある意味で、人生を救ってくれたヨークには、感謝してもらえない。そう言っても、大袈裟だ、と笑われてしまったが。

「セリア殿が考えを改めてくださって、本当に良かったです」

「ごめんなさい。また、迷惑かけて」

彼等にもいらぬ心配を掛けてしまったようで、心底申し訳ない。そう言ってセリアが顔を俯かせると、その額を長い指で軽く弾かれた。

「ひえっ!？」

特に打撃は無かったが、驚いたのは事実。パツと顔を上げると、不機嫌そうなイアンの顔があった。

「だから、迷惑なんかじゃねえって言ってるだろ」

「その通りだ。君は我々の大切な仲間なのだから」

また迷惑だのなんだの言いやがって、とイアンが不満を洩らすと、その言葉にランが付け足した。二人の言葉でその場の雰囲気も温かなものになる。

「騒々しい事には変わりはないがな」

しかし、カールの一言にセリアはうつ、と言葉に詰まった。まさにその通りなので返す言葉もない。

遠慮も容赦もないカールの言葉に、ランが言い返すと、また再び強烈な舌戦の幕開けである。

候補生達が温室でのんびりと過ごしていると同時刻、クルーセルは校長室でまったりと寛いでいた。

「楽しかったわよ、今日の授業は」

「やはりな。苦勞した甲斐があつたというものだよ。出来るなら私も顔を出したかったのだが、それでは邪魔になってしまうからね」

「フフフ。それは仕方ないわね」

「しかし、いいのかね？ 今頃ハンス君は大変なのではないか？」

混乱する生徒達を必死に追いつ返そうとするハンスの姿を想像して、校長はクルーセルに聞いてみる。しかし、クルーセルはそんな事気にした様子はなく、むしろクスクスと笑っているのだ。

「大丈夫よ、ハンスちゃんなら。とっても優秀なもの」

この場合、優秀は関係無いように思うのだが。どう考えても、クルーセルが同僚の危機に駆け付ける事は期待出来ない。そう理解して校長もやれやれ、と肩を落とす。それでも、校長は彼を追いつ出すような事はしない。

「今後暫くは慌ただしくなるな」

「特に、校長と私がね」

今は生徒間の噂にとどまっているものの、その生徒達が発信源となり、この報が広まるのは時間の問題である。そして、そのことに對する不満や疑問は学園に向けられるだろう。そうなれば、その対処に負われるのは当然校長と、仮にもマリオス候補生クラス担任の肩書きを持つクルーセルである。なので、今はハンスに頑張ってもらおう、という訳だ。

とはいっても、国王の承認も得ている今回の件は、誰が何と言おうと覆る事はない。混乱や動揺も、数日の内には治まるだろう、と校長は予想していた。

フロース学園が始めて女性のマリオス候補生を出した、という報は騒ぎ立てる生徒達によって、その日の内に彼等の家族に伝えられた。そして、次の日には殆どの貴族に。更に、数日の内には庶民の間にまで噂は浸透していた。尋常ではない早さだが、それも仕方がないと言える。まだ学生とはいえ、フロース学園の候補生とは、マリオスの地位に就く可能性があるのだ。そこに女性が納まるなど、前代未聞であるのだからクルダス中がこの噂で持ち切りになった。あげくの果てには、新聞でも報道される程であった。誰もが、それほど優秀で才ある女性は、一体どんな見目麗しい、利発な姫君なのだ、と想像を膨らませたに違いない。セリアにとって、これほど迷惑なことはないのだろうか、本人がそれを知るのは随分先になる。

しかし、校長の予想通り、人々が色めき立ったのも数日だった。実際にマリオスになったならともかく、まだただの学園の候補生になったというだけである。今までも、候補生にはなれても、マリオスになれなかった者が殆どなのだから。きっと今回も、マリオスになるまでには至らないだろう、という結論に落ち着いた。

納得いかない者は、変な言い掛かりをつけるか、騒ぎ立てるかした様だが、校長が上手く対処した。それ以外は、その者の行く末に興味と感心を向けるだけに留まったらしい。好機の視線が学園の中に向けられる事は仕方無いが、それ以上特に害にはならないようである。何より、国王の承認も得ている、という事実が、やはり大きな盾の役割を果たしたようだ。

かといって、女性マリオス候補生の誕生を快く思わない者が居る



のも事実。

高級な調度品が揃えられた部屋で、壁に激突したグラスが、中のワインを飛び散らせながら粉々に砕けた。一人の男が怒りに任せ、手に持っていたグラスを扉の近くに立っていたもう一人に向かって投げつけたのだ。男の顔のすぐ脇を通り過ぎたグラスは、そのまますぐ後ろの壁に叩き付けられ、無惨にも砕け散った。

「一体貴様は何をやっていたんだ！！完全にそちらの不手際だぞ！」  
「否定はしません。ですが、それなりの手違いは想定内でしょう」  
「よくもそんな事が言えたものだな！！自分の仕事がかかっているのか！！！」

「それは十分理解しています。しかし今回の事、利用価値があるのも事実です」

でなければ、自分は必死に動き回っていただろう。それを、自分の主が理解しているかは別として。

涼しい顔でしれっと言われ、グラスを投げた男の眉間に、更に皺が寄った。自分が幾ら怒りを見せた所で、全く臆する様子を見せない相手に、男も遂に痺れを切らす。

「もうよい！！さっさと出て行け！！」

自分の主が扉を指差したので、男は静かに退室する。その後も、壁の向こうから何かを割ったり、倒したりする音が響いていたが、男は気にも留めない。言われた通り、さっさとこの場を去ろうと背を向けた。しかし、廊下の反対側から予想外にも声がしたので振り返る。

「荒れていますね。あの男も」

「……これは珍しい。貴方がここに居るとは」

滅多にこの場に顔を見せる事をしない相手に、男が眉を上げる。嫌味ではなく、本当に珍しいと思ったのだ。

「私にも、色々と不満があるようですので」

「……それはそうでしょう」

肩を竦めてみせる相手に、男は頷く。

「貴方にも、なんらかの手を打つ事は可能だった筈ですから」

「確かに、可能ではあったでしょう。けれど、わざわざあの男の為に、全てを無駄にする積もりはない」

元々相手を責める積もりの無かった男は、相手の言葉に胸の内でも同意する。ここに居るのは自分の目的を果たす為であって、あの男の使い捨ての道具になるためではない。己の身を危ぶめてまで、あの者の為に身を投じてやる必要はないのだ。

男は二人とも、まるで自分の行動に非は無いいった態度を崩さない。いや、実際に非があるとは思っていないのだろう。

「そちらは、どうなのですか？」

「慎重に動いていますよ。今の所、心配は要りません。貴方の働きにもよるでしょうが」

「そうですか。では私も尽力しましょう。こちら、そちら次第になります」

お互いそれ以上言葉を交わす事はせず、男は今度こそ廊下を進む。後ろで再び聞き慣れた怒鳴り声が響いた気がしたが、振り向く事はしなかった。

ああは言ったが、暫くは目立った動きは出来なくなりそうだ。また、期待の出来ない者達を利用して、その失敗を見届ける事になるのか。と男は喉の奥でクツと笑った。

## 訪問者 1（後書き）

ここに残ると決めた時から、何があっても出来る限りそうしたいと思った。そして、それを支えてくれる友達も居る。だから、ここに残れるなら、どんなことでもするって覚悟した積もりだったのに。まさかここまでだなんて。

結局、あの人は……

## 訪問者 2

本日も、ハンスのため息が吐き出された先では、最近の彼の悩みの種である三人の生徒が白熱した議論を交わしていた。最初こそ、ランスロットとカールハインツと対等に意見を述べるセリアに感心したりもしたが、三日も聞けば、当然耳が痛くなるというもの。しかも、他の教師達からも、この三人が居ると授業にならない、との苦情が殺到している。苦情というより、何とかしてくれ、と縋り付いて懇願する声が多いが。

授業内容や与えられた課題から、どんどんとお互いの意見を出し合う三人によって、教師でさえ手が付けられない程に授業事態が発展してしまうのだ。この現象はセリアが候補生になる以前から問題になっていた事だが、地味な少女が加わってから、更に悪化してしまった。

教師達からの苦情は、本当なら担任であるクルーセルに言って欲しいのだが、生憎誰もそれをしようとはしない。逃げ惑い、授業にすら碌に顔を出さないクルーセルに変わり、担任補佐である自分に全ての責任と問題がのしか掛かる訳である。本当に勘弁してもらいたい。

「まずは農村に支援金を配布するべきよ。農村は国の穀物庫。荒れれば国全体に影響が出るわ」

「しかし、近年は大きな災害もなく、生活も安定している。特に早急な対策が必要だとは思わない」

資料と資料を付き合わせて、意見が飛び交う。

「削減出来るところとして上がるのは、まず軍事費だけ」

「それよりも、お前の言う支援金こそ削る方向で考えるべきではないのか」

ああでもないこうでもない、と全く終わる気配の無い攻防に、ハンスの眉間の皺が深くなる。その様子に気付くことなく、教室内を

飛び交う資料と意見は、留まる事をしない。

ハンスが胃痛と頭痛に懸命に耐えていると、救いの音が教室内に響いた。その日の授業の終了を知らせる鐘だ。今も鳴り続けている鐘の音を待ちわびていたハンスは途端に教卓を叩き、生徒達の注目を集める。

「授業は終わりです。明日までに課題は終わらせてくる様に」

それだけ言うと、もう知らん、とハンスは教室を飛び出す。これ以上付き合っていられるか、と足を急がせ、自分に全ての責を課した同僚の元へ急いだ。

取り残された生徒達は、授業が終われば教室に用はない、とイソイソと帰り支度を整える。セリア達も同様で、続きはいつものように温室で、という事になった。その会話をこっそり聞いていたクラス内の生徒達が、まだ続くのか、と内心でおおいに突っ込んだのは、誰も知らないだろう。

セリアが候補生になってから、既に一週間が過ぎていた。初めこそ慣れない環境で気を張ったままだったが、セリアが候補生クラスに適している、ということでのクラス替えなのだから、そこまで戸惑いはしなかった。しかも、ラン達候補生が何かと気を使い、色々世話を焼いてくれたので、呆気無い程すんなりと馴染めたのだ。けれど、それがセリアだからこそ慣れるのも早かった、ということを知るのは、ほんの数名だろう。

周りからの風当たりが強くなったのは言うまでもないが、マリオス候補生、という地位に就いた事で下手に手出しをしてくる生徒は減った。とはいっても、女性の嫉妬が治まる筈もなく、あれこれと絡まれる事はまだあるが。

授業も終わり、セリアは今温室へ向かって一人廊下を歩いていた。

他の者は、色々と用事があるとかで先に行っていてくれと言われたのだ。

候補生になっても、授業内容が大幅に向上した以外、生活にあまり変化はない。相変わらず授業後は候補生達と温室で過ごしているし、夜は女子寮に帰り、次の日にまた彼等と顔を合わせ一日を過ごす。けれど、セリアはこの生活がとても気に入っていた。退学届を撤回して貰えて、心底よかったと安堵する。

と、そこで思い出すのは、母の事。実家に送った手紙だが、まだ返事が来ていないのだ。学園に残る事を認めてくれたのだろうか。それならば嬉しいのだが、はつきりとそう決まった訳ではない。何時、どんな内容の連絡が来るかと思うと、本当は気が気でないのだ。それでも、出来る限りこの学園に通いたいと思ったのは本当であるが。

「ちょっと、アナタ!!」

「ひえっ!?!」

考え事をしている時に後ろから怒鳴り声が聞こえ、セリアは飛び上がって驚いた。振り返れば、二人のスラリとした美人がこれでもかという程こちらを睨んでいる。なんだか最近こんな事ばかりの様な気がするが、セリアは取り敢えず体制を立て直して彼女達と向き合った。

「まったく。さっきから何度も呼んでいるのに、ちっとも答えないなんて」

「あ、すみません。聞こえませんでした」

セリアが慌てて謝罪すると、横に立っていたもう一人が意地悪そうに口を吊り上げた。

「仕方ないわよ。候補生様のお声以外、耳に入らないんだから」

「ああ、それもそうね」

クスクスと笑い出した二人に、セリアは眉を潜める。けれど、そんな事気にした様子を見せず、二人の女生徒は尚も続けた。

「全く、一体どんな手を使ったのかしら。厚かましいにも程がある

わ」

「見た目がアレな分、人に取り入る技だけは一流なようね」

そこまで聞いてセリアはああ、と納得する。彼女達もか、とセリアは肩を落とした。ここ最近、自分がマリオス候補生になってから、似た様な文句は散々受けて来た。しかしそれだけだ。別にその程度では傷つきもしないし、悲しくもない。こんな事は覚悟の上だ。

けれど、どうにかしてこの状況からは抜け出したいなと思う。特に怖くは無いのだが、このままでは何だか面倒な事になりそうなのだ。

その後も続く中傷の言葉をケロリとして聞いているセリアに、二人の女生徒も機嫌を損ねたらしい。

「とにかく、候補生様達にこれ以上近づかないで」

「いや、近づくなど言われましても……」

同じ候補生クラスに居るのだから近づかないなど無理なのだが。とセリアが口籠っていると、突然髪を掴まれ強く引かれた。これには流石のセリアもバランスを崩し前のめりになってしまう。

「目障りなのよ、アナタ!!」

その声と同時に乾いた音が響き、右頬に衝撃が走った。ジワリと浸透する熱と痛みに、セリアは自分が引っ叩かれたのだと認識する。今までに無い事態に混乱するが、パチパチと瞬きをして意識を現実に戻した。

「大人しく返事をすればいいのよ!!」

「で、ですから、近づくなどというのは無理でして……」

それくらい分かるだろう、とセリアがオロオロとしていると、もう一人が目の前に立った。その手にはペーパーナイフが握られ、ぱちりとこちらに向けられている。これには流石のセリアも焦ったが、離れようとしても髪を強く掴まれていて、それは叶わない。

「これが最後よ。痛い思いをしたくなかったら、候補生様達に近づかないと誓いなさい」

だからそれは無理だと言っているだろう、とセリアが内心で叫ぶ

うともその声が二人に届く事はない。まさかここまでするとはセリアも驚いてしまう。いくら気位が高かろうと、腐っても貴族。暴力沙汰を起こせばそれなりの問題になるのは、彼女達も分かっている筈なのに。というより、もしかしくなくてもこれはかなり危機的状况なのでは。

とセリアが思考をフル回転させていると、いつまでも答えないセリアに痺れを切らした女生徒がナイフを突き出した。

まずい、と思ったセリアは咄嗟に突きつけられたナイフの刃先を素手で掴んだ。刃物といっても所詮はペーパーナイフ。その刃は鋭利な訳ではない。とはいっても、自分に突き刺さろうとする物を素手で防げば、少なからず打撃はある。

「いっ!？」

ビリッとした痛みが手の平に走り、恐る恐る見てみれば、そこはざっくりと切れていた。先端が手の平に当たったまま強く押された所為だ。傷はそこまで深くはないだろうが、ポタリと血が垂れている。頭に血が上っていた女生徒も、赤い斑点が広がる床を見て我に返ったのか、驚きの声を上げた。

「何をしている」

その瞬間、後ろから響いた凍える声に驚いて振り返れば、そこには見慣れた人物達が立っていた。どうして彼等がここに居るのだろうか、とセリア呆然としている間にも、輝く容姿を持ったカールとザウル、そしてイアンがこちらを睨んでいる。その表情は今までに見た事が無いもので、凄く怒っていらっしやるのが分かった。その気迫が恐ろしくて、セリアも手の痛みを一瞬忘れてしまう。

「あっ、カ、カールハインツ、様……これは」

目の前まで来た彼等に、女生徒達もすっかり圧倒され、声が満足に出ていない。

ガクガクと震える女生徒を他所に、ザウルがスツと脇を通り、果然としているセリアの手をやりわりと取る。サツと傷を覗くと、それが深くは無い事を確認し、後ろの二人に目で応えた。



「何をしているのだと聞いている」

それで落ち着くかと思いきや、そんなことはまったくなく、カールは再び胃に響く様な低い声と冷ややかな瞳を二人に向けた。その身も凍る様な声と視線が突き刺さっている彼女達にしてみれば、もう答える所ではないだろう。

「どうしたのだ!？」

そうしていると、今度は反対側から二つの足音が近づいて来た。セリアが振り向けば、焦った様なルネとラン。ゾロゾロと集まった候補生達に、女生徒二人はもう訳が分からなくなっていることだろう。セリアとて同じなのだから。しかし、この状況がまずい、という事は彼女達にも分かったようだ。

カールに怯える二人の女生徒と、手の平から血が流れ出ているセリア。そして、床に転がっているペーパーナイフで、現状を理解したランの表情にも、驚きと苛立ちの色が沸き上がる。

先程から冷えきった視線に射竦められ、ただ震えているだけで答えられない二人と魔人の間に、ルネが割って入った。

「とりあえず、まずはセリアを医務室に連れて行かなきゃ。二人は僕達と一緒に来てね」

今はそちらが先だろう、とルネはセリアをザウルに頼むと、他の候補生達と女生徒二人を連れて何処かへ行ってしまった。困り顔は見せるものの、他の候補生達のように怒りの表情ではないルネに安心したのか、女生徒達は縋るようにルネの後ろを付いて行く。けれど、決してルネがなんとも思っていない訳ではないと、彼女達は後々理解することになるのだが。

「セリア殿」

自分の手にやんわりとザウルの手が這わされて、それまで半ば放心していたセリアは驚いた。傷には触れぬように、丁寧にザウルの手が手の平を伝う。その声色は、普段よりも一層弱々しい。

「とにかく、医務室へ行きましょう」

「う、うん」

「……すみません」

小さく呟かれた最後の謝罪の言葉は、残念ながらセリアには届かなかった。

「セリア。大丈夫か？」

「うん。そんなに深くはないし、大した事ないよ」

そう言うセリアの手には、痛々しい包帯が巻かれている。ヒラヒラと振って大事無い事を伝えるが、それでも候補生達の疑いの眼差しは消えなかった。けれど、普段から剣を振り回し、今までに幾つもの怪我を追って来たセリアにしてみれば、本当に大した事ではないのだ。血は流れはしたものの、傷の痛みは然程ない。むしろ、包帯を見詰める候補生達の視線の方が苦しげだ。

ぶたれた頬も多少腫れたが、直ぐに冷やしたのでそこまで酷くはない。セリアとしてそれほどひ弱ではないのだ。赤くなっているが、明日にはそれも引くだろう。

「それより、あのお二方は……」

「気にする必要はない。少なくとも、二度と下らぬ真似をしようなどとは思わぬだろうがな」

セリアが恐る恐る聞くと、カールが透かさず返した。気にするなと言われてもかなり気になるのだが、カールの続きの言葉が恐ろしいのでそれ以上を追求するのはやめた。一体何をしたのだろう。

「本当は包帯も必要ないんだけど」

「そうはいかないだろう。君はもう少し自分の身体を労るべきだ」

「いや、そんな大袈裟なものでも……」

そんな感じでセリアが平気な事を一生懸命説明していると、今まで姿が見えなかったルネが温室に顔を覗かせた。どこか戸惑いの色が見えるその表情に、セリアもどうしたのだろうかと思ふ。

「セリア。あの……お客さんだよ」

「私に？」

「うん……どうぞ」

そう言ってルネが中へ招き入れた人物の顔を見るなり、セリアは驚きでガタンと椅子から音を立てて立ち上がった。

「母様!？」

ルネに連れられ、温室へ入って来たのは一人の女性。背筋をきっちり伸ばし、ブロンドの髪を上で丁寧に纏めている。隙が無く、感情の全てを捨てた様な瞳で自分を見下ろす母、クリスティーナ・ベアリットの姿にセリアは慌てた。

何故、彼女がここに居るのだろうか。確かに、近々何らかの連絡は入るだろうと思っていたが、まさか本人が直接尋ねてくるとは思わなかったのだ。

急な母の来訪に、緊張からセリアも手の平の傷を血がドクドクと脈打つのが分かる。親子とは思えない緊迫感に、セリアは背筋を冷たいものが流れるのを感じた。

「何時、いらしたので？」

「つい先程着きました。何故私が来たかは、言うまでもないでしょう」

カールの様な冷たさとは違い、温度そのものが感じられない様な声。言葉とセリアを見詰めるその視線に、実の親とは思えない妙な刺々しさを感じ、候補生達は驚く。

「セリア。僕達は外に行ってた方が……」

「あ、うん。ありがとう」

セリアの言葉に候補生達が立ち上がろうとすると、それを制したのはなんとセリアの母であった。

「そこまでして戴く必要はありません。貴方とそう長く話す積もり

はありませんから」

「……………」

冷めた瞳でセリアを睨みつけるクリスティーナの言葉に、候補生達は戸惑う。このままここに居ても良いものだろうか。これ以上、立ち入ってはならない様な雰囲気醸し出しているが、当人の一人に必要な無いと言われてしまった。それに、セリアの瞳が揺れているのも気になる。普段なら滅多に見せない、不安の色だ。その事が、候補生達の足を地面に縫い付けていた。

「手紙は読みました。その気の無い者にもう家に戻れとは言いません。この学園に留まる事は認めます」

所々に棘を含んだ様な言葉と視線が、立ち尽くすセリアに突き刺さる。

クリスティーナの言葉に、セリアを含めその場の全員が安堵した。取り敢えずは学園に残る事を許されたのだ。これで、彼女がセリアを無理に連れ戻しに来たのではないことが分かった。

しかしそうなるとセリアの中に疑問が生まれる。では、母は何故わざわざ学園まで来たのだろうか。それを伝えるだけなら手紙でも十分だった筈だ。こうして本人が出向いたのには、何か他に理由があるのだろうか、それが分からない。

「その変わり、貴方には結婚してもらいます」

「なっ……………!?!」

言われた言葉にセリアは目を見開いて驚く。途端に、足下が掬われるような感覚に襲われた。「結婚」の二文字が上手く脳で処理出来ない。自分は一体、今、何を言われたのだろうか。

「ま、待って下さい。私はまだ……………」

「お話は早い内が良いでしょう。相手の方にはもう既に了解を得ています」

「そ、そんな……………」

「在学中は婚約の形ですが、卒業したらすぐに正式に嫁ぐように」理解が追い付かなかった。結婚が在学の条件ということなのだろう

うか。一週間も音沙汰無しだったのは、これを準備する為だったのか。それにしても、いくらなんでも話しが急過ぎる。自分が結婚だなど、まだ考えられない。けれど、有無を言わせぬ母の視線に、言葉が上手く出て来ない。言いたい事が纏まらないのだ。

「で、でも……」

「口答えは許しません。これで、貴方も漸く家の役に立てるのですから」

強く言われてセリアは押し黙った。クリスティーナは冷静に言葉を発しているようで、その発言は一つ一つが本気の様だ。決して、自分の意にそぐわぬ行動をした娘に対する怒りの感情に任せて言葉を吐き出している訳ではなかった。けれどそれは、とても実の娘にする様な発言ではない。

何も言い返さないセリアに、遂に痺れを切らしたのか候補生が声を発した。

「失礼ですが」

「……貴方は？」

立ち上がったランが声を上げれば、クリスティーナがお前は誰だ、という意味合いを込めた視線を投げてきた。それにランは丁寧に頭を下げる。普段カールと対立している時のような緊張を纏って、ランは相手をしっかりと見据えた。

「ランスロット・オルブラインです」

「ランスロットさん。それで、何でしょうか？」

「失礼ながら、彼女は女性ながらマリオス候補生になるだけの實力を示し、その役目を立派にこなしています。それは伯爵家にとっても名誉なことでは」

「地位や権力で名誉を得られるのは殿方だけです。けれど、女性は違います。名誉を得た殿方に嫁ぐ事こそ女性の名誉。そう私は娘に教えてきた積もりです」

「ですが……」

そういう考えがクルダスではまだ深く根付いているのはランも知

っている。それが正しいとは思わなくとも、昔からの人の考えまでは変えられない。そう教育してきた、と言われてしまえば黙るしかないのだ。けれど、セリアが決してそんな考え方をしていないのは、この場の誰もが知っている事である。それなのに、何故こうも強引に押し進めようとするのか。

「貴方も、自分が長女だという自覚を持つ事です」

「……………」

「とにかく、明日、相手の方と会ってもらいます」

「あ、明日!？」

「またもやセリアは母の言葉に驚かされる。いくらなんでも、話が強引過ぎる。」

「明日の午後、こちらまでいらして下さるとの事です」

「えっ!？」

「前からお話だけは出ていた方ですが、最近どうも貴方に興味が湧いたとか」

「そ、それは……………」

「そんなわざわざ学園まで来るとは、相手にも面倒な筈なのに。しかし、聞かなくとも相手がそこまでする理由はイアン達にも分かった。もしかしなくとも、セリアがマリオス候補生になった事が原因だろう。」

「フローズ学園のマリオス候補生と姻戚関係を結ぶ事を望む者は多い。それだけの実力者であり、将来も期待された存在だからだ。例えばマリオスになれずとも、なんらかの形で大きな影響力を持つ可能性が高いのだから。それが、初の女性マリオス候補生ともなれば、興味が湧くのは当然だろう。」

「候補生というものが常に注目的である事は理解していたが、この時ばかりはそれが恨めしい。とイアン達にしてみれば苦虫を噛み潰した思いだ。」

「とにかく、妥協はしません。明日は失礼の無いように。これ以上私に迷惑を掛けないで」

「……母様」

「唯一、子供を生める体は持って生まれたようですから、然るべき方に嫁ぐ事が貴方の義務です」

「……っ!？」

明らかに侮蔑を含んだ様な物言いに、セリアはどうとう俯いた。その顔は絶望や失意からすっかり血の気が引き、真っ青だ。小さな肩も、普段より一層縮められ、小刻みに震えている。しかし、怒りや悲しみの色は何処にも無い。というより、もう諦めているといった風である。

「それは!!」

「ま、待って」

途端に立ち上がった候補生達が、何かを言う前にセリアが彼等を止めた。頼むから何もするな、と縋る様な視線を向けられ、候補生達も口を噤む以外無い。しかし、胸の内は抑え難い激情が渦巻いている。これがセリアの母でなければ、止めたのがセリアでなければ相手に掴み掛かっていたかもしれない。

何より、悪びれもなく、赤の他人である自分達に聞かせる事を躊躇もしない程、クリスティーナが己の言葉を当たり前前に思っている事に愕然とした。

「分かりました。相手の方とお会いします」

「セリア!？」

一礼してそう言ったセリアに、候補生達は啞然とする。何故言い返さないのだ。クリスティーナの言葉は、どれを取っても娘に対して言うそれでは無い。そうでなくとも、あそこまで言われれば、一言くらい言い返しても良い筈である。まるで、心底憎んでいる相手を見る様な目つきで睨まれて、何故すんなりと相手の言葉を受け入れるのだ。

セリアの返事を聞いて、もう用は済んだとクリスティーナは娘に対する挨拶も無しに温室の外へ向かって歩き出した。一秒でも早くこの場から出たい様子だ。その背中をセリアは慌てて追う。

「お、お見送りします」

「結構よ。そんな暇があるくらいなら、その包帯の下にある傷を目立たない程度に治す努力でもしなさい」

「あっ！」

「その様に醜い物を、相手の方に見せない様に」

それだけ吐き捨てると、クリスティーナは今度こそ本当に温室の外へ出て行った。

それを見送った候補生達は驚きで言葉が見つからなかった。けれど、それは母親の娘に対する態度にではない。まるで当たり前だとも言わんばかりに、憎しみを隠そうともしないクリスティーナと、それを何も言わずにただ受け止めるだけのセリアにだ。

普段の気の強い彼女からは、決して想像がつかない。もし、他の者に女性の価値は男と結婚するだけだ、などと言われればそれはもう必死になって怒りを露に、訂正を要求するだろう。しかし、今のセリアは怒る様子は見せず、文句すら言わなかった。いや、それどころか、本人から怒りやそういった感情が伝わって来ない。ただ絶望しているだけのようだ。

そして、明らかな娘に対する母親からの憎悪。色々と政略や陰謀が絡む事の多い貴族社会だ。体裁や地位に固執するあまり、娘や息子を売る様な形の婚姻を結ぶ家も少なくはない。最近では減っているが、まだまだ望まぬ結婚を強いられる者は多いのだ。その中には、それを理由に自分の子供や伴侶に、行き場の無い怒りをぶつける者も居る。それが理由でないにしても、家庭によって家族間の関係は変わって来るだろう。しかし、先程の言葉や態度は行き過ぎている。何か、尋常ではない理由が絡んでいそうだ。

だからといって、今のセリアからそれを聞き出そうとは思わない。むしろ、それは無理だろう。

「セリア……」

「ご、ごめんなさい。見苦しいものを見せちゃって」

ハハッと軽く笑っているが、その表情はいつものようにのんびり



としたものとはかけ離れている。その様子に、ルネが心配そうに問いかけた。

「でも、」

「いいの……」

そう言って俯くセリアに、候補生達は掛ける言葉が見つからなかった。もう何も言うな、と全身で意思表示するセリアに、候補生達も言葉を失う。セリアの個人的な問題であるからこそ、不用意に介入するのが憚られたのだ。

「ごめん。なんだか疲れちゃって、今日はもう帰るね」

そう言って歩き出したセリアの足下はフラフラとしていておぼつかない。今までに無い程弱った姿のセリアに候補生達も慌てて駆け寄る。けれど、助け起こしたと同時に、胸の内に疑問が沸き上がった。

「明日、本当に相手と会うのか？」

「うん」

「……君は、それでいいのか？」

「出来れば、私も婚約なんてしたくはないけど。でも、どうなるかは分からない。相手の人とはちゃんと話そうと思ってるけど」

「……………そうか」

今はそう言うしかないだろう。所詮、自分達は部外者なのだ。幾ら不満に思っても、他人の家の事情にまで簡単に関与は出来ない。セリアがこの婚約を望んでいないと言うなら、それに賭けるしかないのだ。今は。

## 訪問者 2（後書き）

あれからずっと悩んでたあいつの顔が、あの人に会った途端晴れたんだ。あんな人が突然前に現れれば、そりゃあ誰でも驚くよな。知らない間に圧倒されちまうんだ。あいつとは何もかもが違うのに、誰よりもあいつに似てるのかもしれない。

### 訪問者 3

授業も終わり、帰り支度をしていたセリアから重いため息が漏れる。その日の授業にもあまり集中出来ていなかったのは、言うまでもないだろう。けれど、それは他の候補生達も同じである。

この日は特に妨害も無く、妙にすんなりと授業が運んだことにハンスは眉を顰めた。

どうしたんだ。一体、何があったのだ。このクラスで授業が何の問題もなく終わるなんて、明らかに可笑しい。本来なら望ましい光景であっても、実際に突然何の前触れも無しに、こうも滞りなく事が進めば疑問に思うもの。というより、気味が悪い。天変地異の前触れか、と内心で警戒していた。

そんなハンスに気付く事なく、セリアはもう一度重いため息を吐いた。

一体、どんな相手が来るのだろうか。話の分かる者なら、なんとか婚約を考え直して貰えるかもしれない。けれど、母の言った言葉が本当なら、それもあまり望めないだろう。もうこの話はほぼ確実だと言っても過言ではないかもしれない。

もう何度目か分からぬため息が、温室の空気に溶け込む。しかし、それを咎めるものはいなかった。先程からセリアは唸ったり、首を捻ったり、訳の分からない行動を繰り返している。他人が見れば間違ひなく不審がるだろう行動も、理由を知っている候補生達は心配そうに眺めるだけだ。

「あ、あの……」

突然聞こえた声に振り返れば、非常に困惑した様子の男子生徒が、恐る恐る温室に顔を覗かせていた。

「セリア・ベアリット君は……？」

「あ、はい。私ですけど」

「よかった。校門の所でお客様がお待ちです。それでは……」

自分には恐れ多いこの場から一刻も早く立ち去るべく、男子生徒は早足でその場に背を向けた。その姿を見送ったセリアはもう一度大きな息を吐く。

とうとう来てしまったか。こうなっては腹を括る以外無いだろう。仕方無い、といった風に立ち上がったセリアに続いて、候補生達も足を動かす。

「セリア。門の所まで送る」

「えっ！？でも、そんな……」

「いいから。遠慮するな」

そんな必要は無い、とセリアは慌てたが、強引に押し切られてしまった。セリアの婚約者になるかもしれない男が来ているのに、ただ座って待つなど出来るわけがない。

自分の後に続くこうとする候補生達に、セリアはあたふたと狼狽えた。彼等がそこまでする必要は無いし、自分で行ける。

けれど、絶対に引き下がらない、といった風の候補生達にセリアも口を閉じる他なかった。

「……カールは行かないの？」

「何故私が付き合う必要がある？」

セリアとザウル達が去った後、ルネがその場に残り読書に勤しむカールにさり気なく尋ねた。案の定返って来たのは冷めた声。予想通りの言葉にルネも思わず笑いが込み上げて来る。

「気にならない？セリアの婚約者かもしれないよ」

「興味が無い。あれに付いて行く奴の気が知れんな」

さり気なくこの場に居ない友人に毒を吐くカールに、ルネはやれやれ、と肩を落とした。

「そういうお前はどうかのだ？」

「僕？……あんまり大勢で行くとセリアが困るからね」

相手の男を見た時の友人達の反応を見るのも面白いかもしれないとも思った。けれど、そろそろと出て行く友人の姿に、その気も失せてしまったのだ。

「でも気にはなるかな。もしかしたら本当に結婚しちゃうかもしれないよ」

「くだらん。あれがそう簡単に他人に靡く筈がなからう」

さも当然だ、と言わんばかりにセリアの婚約成立を否定するカールに、ルネは苦笑した。

「そんなこと言って。もしセリアが喜んで婚約了承して帰って来たらどうする？」

「……………」

あ、怒った。とルネは口内で呟く。その視線の先ではカールの周りの温度が急激に冷え始め、眉間にも皺が寄っているので、これ以上言うのはよそう、と口を閉じた。からかう積もりで言ってみた言葉だが、なんだか現実になりそうで不安になる。毎度面倒事を背負い込んで来るセリアだ。今回もどんな厄介事を運んで来るか。

暗い面持ちで歩くセリアの後ろには、いつになく澱んだ空気の時補生三人。間を流れる沈黙に、セリアはいたたまれなくなる。心配されているのは分かるのだが、この空気はどうにかならないだろう

か。

セリアが前で待つ見知らぬ婚約者と、後ろから不穏な空気をまき散らす友人達に内心で怯えている間も、候補生達は機嫌の悪さを隠そうともせずただひたすらに歩いていた。

まるで子供の様な事をしているのは彼等も自分で分かっている。けれど、やはり心配であった。昨日のセリアから、彼女が母親には逆らえないと言ったのがよく分かる。その母親が決めた婚約者だ。解消するよう話はすると言っていたが、あの調子ではどうも頼りない。というより、元々危なっかしいのだから、セリア一人に期待は出来ない。

そんな感じでセリア達が歩いていると、校門の所に佇むスラリとした人影が見えた。帽子を深く冠り俯いているのでその表情は見えない。けれど、セリアはその立ち姿に見覚えがあった。おや、と思い、それを確認するためセリアは少し歩調を速める。

セリアが男の目の前まで来ると、男はスツと帽子を取り、その下の顔を見せた。現れたサラリとしたシヨコラ色の髪と、候補生達にも引けを取らない程の整った顔立ちにセリアはあっと声を上げる。

「やあ、セリア」

「ギ、ギル!？」

セリアが驚いて目を見開いていると、ギルと呼ばれた男は、なんとセリアの脇の下に手を入れ、その体を軽々と持ち上げたのだ。まるで父親が子供をあやすように。

「わっ!？」

「学園では、きちんと大人しくしていたかい？」

「こ、こどもじゃないんだから。それより、下ろして」

会って途端に子供の様に持ち上げられてセリアは壮絶に青ざめた。公共の場で何をしてくるのだコイツは。

セリアはバタバタと宙に浮く足を動かして、その腕から逃れようとする。ハハッと笑いながらセリアを下ろすと、男はそのままセリアの頭を優しく撫でた。

「君を心配するのは、もう僕らの癖だよ」

「ギル！セリアを独り占めするのは不公平ですわよ」

そういつて男の後ろから響いた鈴の様な声に、セリアもパツと顔を輝かせる。

「姉様！！」

「セリア」

自分の名を呼んだその姿を確認する暇も無く、セリアは別の誰かに抱きしめられた。身長さを活かして栗毛に頬擦りしてくる人物に、セリアもくすぐったさから身動ぐ。それが伝わった様で、その人物も満足したようにセリアを解放してくれた。

「二人共、どうしてここに？」

セリアが見詰める先では、大きなサファイアが美しく輝いていた。いや、正確には、サファイアよりも澄んだ蒼の瞳だ。形のよい薔薇色の唇、雪の様に白い肌。後ろで美しく結い上げられている、明らかに透けると輝く金髪。どこを取っても隙の一つも見せない、完璧の更の上に行く容姿。その月の様に清純な光を纏う彼女に、候補生達も見覚えがあり息を呑んだ。

上品な物腰と優雅な立ち姿。世界一美しい鐘の音にも勝ると言われる声。誰よりも美しく、何よりも気高い、クルダスの社交界の花形を見間違える筈がない。彼女は、ボワモルティエ侯爵令嬢、カレン・ボワモルティエだ。

突然の訪問者に、珍しく候補生達も動揺を覚える。

一体、何が起こっているのだろうか？そもそも、何故社交界の花形である彼女がここにいるのだ。そして、何故セリアは彼女と親しげに話しているのだ。こういつては失礼かもしれないが、セリアとカレンとの間に接点があるとは思えない。

「今日はね、セリアの婚約者の事で来ましたのよ」

「へっ！？」

「大丈夫よ。今回の事は白紙になったから」

「え、えええ!？」

カレンの言葉にセリアも啞然としたが、それは候補生達も同じこと。急な展開に、カレンと横に立つ男以外は誰も理解が追いつかず呆然と立ち尽くす。校門の前で、憧れのマリオス候補生と、見目麗しい二人の男女が佇んでいる異様な光景は、学園の生徒達の注目を集めるには十分だった。

ハッとセリアが気付くと、周りは段々と人が集まり始めている。うつ、まずい。とセリアは慌ててこの場を収集するべく後ろで啞然としている候補生達に説明する。

「あの、この人は私の従姉で、レディー・カレン・ボワモルティエ」  
そう言うと、紹介されたカレンはそれは嬉しそうに微笑んだ。候補生達もセリアの声に我に返ると、その手を取って甲に社交辞令のキスをする。普通の人間なら暫くは混乱したままでも可笑しくはないこの状況で、動揺を無理やりにでも押さえ込むとは、流石である。  
「それと、カレン姉様の婚約者のギルベルト」

「どうも、ギルベルト・フォンツォです。有名な候補生様に会えるとは、思ってもみませんでしたよ」

セリアの言葉に、ギルベルトは候補生達の前に一步出ると、深々と頭を下げる。明らかにギルベルトの方が年上だが、彼はあくまで丁寧な候補生達に接した。その柔らかな物腰に、候補生達も丁寧に返す。

一先ず落ち着いた所で、セリアと候補生達は周りから集まる好奇の視線から逃れるべく、突然の来訪者を、学園内の彼等の空間へ招く事にした。

穏やかな陽の光に照らされる温室の中、輝く容姿を備え持つ候補



生達と、まるでお伽話の中から抜け出て来たような男女が、優雅に挨拶を交わしている。それだけで、もう目を開けていられない程の神々しさに、セリアは大いに戸惑っていた。

「まさか、セリアの従姉がレディー・カレンだったなんて」

氣を使って紅茶を用意してくれたルネが、心底驚いたように呟いた。

彼等も名前は聞いた事がある。レディー・カレンといえば、年頃の貴族令嬢は誰でも一度は憧れる、凜とした完璧な淑女<sup>レディー</sup>であり、常に羨望の眼差しを向けられている存在だ。

そのレディー・カレンが唐突にセリアの従姉だと言って現れたのだから、ルネの言葉も当然だろう。

社交界だのそういったものが苦手で、出来るだけ遠ざかって生きて来たセリアだ。その存在を知る者もそれに非礼してほぼ皆無だった。いくら噂好きな貴族社会の中でも、存在が知られていないセリアと、貴族の間で花形と噂されるカレンが結び付く筈もない。想像する人間すら皆無だっただろう。だから候補生達が驚く気持ちはよくわかる。

一方は剣を振り回し、カールやランと臆する事なく議論を交わす、栗毛のおもいきり地味な少女。一方は、誰もが敬う美しき侯爵令嬢。誰がこの二人が知り合いだと、ましてや従姉妹同士だなどと思うだろうか。

「姉様。一言連絡してくれれば……」

「あら、その変わり、セリアの驚いた顔が見れたでしょう？」

「……………」

悪びれも無く言って退けるカレンに、セリアも困惑した。けれどこれは、なんとなく想像していた答えではある。完璧な淑女<sup>レディー</sup>と名高いこの従姉は、実は人をからかう事が大好き、というちょっと困った性格の持ち主なのだ。特に、人の驚いた顔を見るのが楽しいらしく、今まで何度心臓が止まる様な思いをしたことか。

「それに、セリアのお友達にもお会いしたかったのよ」

そういつてカレンがにっこりと微笑みかけた先では、驚きを抑え切れていない候補生達が佇んでいた。この状況を纏めようとして、失敗しているらしい。それを見たカレンは、またクスクスと笑い出す。

けれど、すぐに真剣な顔つきになると、カレンは一度セリアに向き直った。

「セリア。心配したのよ。また叔母様が無理に貴方の婚約の話を進めようとするから」

「あ、姉様。そのことは……」

「でも心配しないで。相手の方にはきっちりとお話してきたから」「っ!？」

この言葉に、セリアを含めた候補生達が再び驚いたのは言うまでもないだろう。

「あの……何を……?」

「ウフフ」

何をしたのだ、とセリアが恐る恐る聞けば、綺麗な笑みを浮かべるカレンは、その後実に楽しそうに語り始めた。

それによると先日、セリアの相手になる筈だった男性と、カレンは『偶然』バラ園で出会わせたらしい。カレンの横には『偶然』彼女が誘った深窓の儂げな令嬢。これまた『偶然』だが、令嬢は以前からその男性に好意を抱いていたとか。そのまま会話は弾み、三人で暫し行動を共にする事にしたらしい。

その後の会話の内容は誰も知らないが、ベアリット伯爵家の令嬢と婚姻の話が出ていた男性の心を、儂げな深窓の令嬢は『偶然』がっちりと掴んだとか。

そんな簡単に事が進んでいいのか、と疑問に思うが、誰もが認める完璧なレディーが褒めちぎる可憐な令嬢に、好印象を抱かない男はいないだろう。そんなちょっと好い雰囲気になったところで、少し交際してみても、と言い出したのも、どうやらカレンらしい。レディー・カレンに背中を押され、自信を付けた令嬢は、どうも普段

よりずっと美しく、淑やかに見えたとか。

そこから先は簡単である。令嬢は目出度く恋を成就させ、今頃ベアリット家には婚約解消の連絡が行っている頃だとか。息子の婚姻に政略的な利益を見込んでいた男性の家族も、本人にその気が無ければどうしようもない、と諦めたとか。

「勿論、全て『偶然』ですわよ」

「……………」

あくまでも偶然とカレンは言い張った。けれど、それが決して偶然などではないことは、セリアもよく分かっている。

「姉様……」

謝罪の言葉が自然と沸き上がる。婚約が解消になった事は素直に嬉しい。けれど、彼女にもいらぬ迷惑を掛けてしまったのだ。と罪悪感から俯くセリアを、カレンはふわりと抱きしめた。

「セリア、そんな顔をしないで。私の夢を応援してくれた、たった一人ですもの。私も貴方の夢を応援しますわ」

「……姉様。ありがとう」

急な展開に理解が追いついていなかった候補生達も、カレンの言葉にとりあえずは落ち着いた。セリアも安堵したのか、昨日から張り詰めていた緊張を解いたのが分かる。なんだか知らない間に事が運んでいたようだが、とりあえず目先の危機は去ったのだ。

和やかな雰囲気 of 二人を、邪魔したいと思う者は居ない筈だったのだが、別の声が割って入った。

「そろそろ良いかい、カレン。セリアとは、もう少し大事な話をする為に来たんだろう？」

「まあ、無粋ですわよ。ギル」

二人の空間を邪魔された事に眉を吊り上げるカレンも、ギルベルトの話が重要という事が分かっているのだろう。不満の声を洩らしながらも、カレンは渋々とセリアから離れた。

「これは、マリオス候補生の方達にも聞いてもらいたいことなんだが、いいかな？」

突然話しを振られて、候補生達もビクリと肩を揺らす。今まで全く蚊帳の外だったにも関わらず、いきなり声を掛けられれば、驚きもするだろう。けれど、直ぐに全員が静かに頷いた。それを確認したギルベルトも一層真剣な顔を作る。そして、目の前に立つセリアに向き直った。

「まずは、おめでとう、と言った方がいいかな。セリア。憧れだったマリオスに一步近づけたんだから」

「あ、ありがとう……」

「でも、一つ気になる事があってね」

「……？」

何かあったのだろうか。とセリアが疑問の視線を向けると、ギルベルトは大きく息を吐いて、ゆっくりと口を開いた。

「大した事ではないんだ。ただ、君の事を随分と批判する記事を見付けたんだよ。それだけならよかったけど、君の事が妙に詳しく書かれていてね」

「っ!？」

「勿論、君の立場ならそれなりの反発も十分あり得る事だとは分かっているよ。ただ、君の性格や容姿なんかも鮮明に書かれていたのが気になってね」

「そ、それって……？」

一体どういう事だろう。とセリアは頭を捻ってみたが、何故そうなるのか理由が思い付かない。自分がマリオス候補生になる事を批判する者が居るのは分かっていた事だ。簡単に受け入れられることでもないと覚悟もしていた。長く続いた伝統を覆すような事態なのだから、それは当然だろう。

けれど、それにしても自分の事が知られているのはどうしてだろうか。候補生達のように、昔から実力や容姿が突出していて、社交界などでもよく知られている存在ならともかく、セリアはそういう事から遠ざかっていた人間だ。ギルベルトがここまでわざわざ来るとは、それほど正確な情報が詳しく載っていたという事だろう。

「ただの思い過ごしなら良いんだけどね。当然、その記事は書き直してもらったから安心していいよ」

「えええ！？」

ギルベルトがサラリと言った言葉にセリアは驚きで声を上げた。

確かに、今回の事は大きく報道はされなかった上に、今彼が言ったような記事は見なかった。人々の間でも、自分の事がそれほど露見している様な感じはしない。そして、彼にはそれが可能だった事に気付く。

「たしか、レディー・カレンの婚約者は……」

そこで候補生達は重大な事を思い出した。一時期クルダスの貴族社会の間を駆け抜けた報だ。誰もが憧れるレディー・カレンが、遂に婚約を決めたというもの。しかも、相手は身分を持たない庶民の、ただの小説家だというのだ。当時勉強に集中していたラン達でさえ、その噂は嫌という程耳にした。

その気になれば、どんな貴族子息でもより取りだろいうレディー・カレンが、身分違いの恋に身を投じた、というなんともロマンティックな風聞に、誰もが注目したものだ。

「出版業界なら、それなりに顔がきくからね」

にっこりと笑うギルベルトに、セリアは胸が締め付けられた。彼の書く小説が、それなりに人気を占めている事は知っている。だからこそ、色々と出版関係者とも関わりが深いのだ。けれど、自分の所為で彼にまで迷惑を掛けてしまったとは、心苦しい以外の何でもない。

そんなセリアの表情を読み取ったギルベルトは、その栗毛に大きな手を優しく這わせる。

「そんなに気にすることはないよ。君には何度も助けられたんだ。僕が君の夢を応援するのは当然だろう？」

「あ、ありがとう。ギル。姉様」

言い聞かせるようなギルベルトの言葉に、セリアは心から礼を言った。その言葉に、彼も幸せそうに微笑む。

セリアは、自分達を救ってくれた大切な存在だ。それでなくとも、マリオスに憧れ、国に尽くそうと努力する姿を昔から見て来た。妹の様なセリアが漸くその夢に近づけそうなこの時期、自分達に出来る事はしてやりたいのだ。

「とにかく、多少は警戒した方がいいかもしれない。僕ももう少し調べてみるけどね」

「それは、何者による記事ですか？」

胸に沸き上がる疑問を、候補生が口にした。その問いに、ギルベルトは申し訳ない、といった表情を作る。

「普通の新聞記者さ。ただ、その情報を誰かが提供してきたらしい。詳しくは分からないが」

「……そうですか」

「気にしてくれているようで、感謝するよ。セリアからも、君達がとてもよくしてくれていると聞いている」

「いえ。彼女は、自分達にとって大切な仲間です。これから、共に候補生として役目を果たして行きたいと思っています」

きつちりと言い切ったランに、他の候補生達も頷いた。それを見てギルベルトも安心したようだ。マリオス候補生が付いているなら、これほど心強いことはない。気になるのは事実だが、一先ずは安心だろう。

けれど、安堵したようなギルベルトとは対照的に、カレンは不安そうな表情を見せる。そして、セリアの両肩にそつと手を置いた。

「でもね、セリア。自分をしっかり支えてくれる殿方も女性には必要なのよ」

「はい!？」

「時々寄りかかりたいと思う時に、横に居てくれる相手が居るというのも、とても幸せよ」

「は、はあ……あの……」

「それでね、貴方ととても良いお友達になってくれそうな方を知っているのだけれど、紹介しても良いかしら？」

「レディー・カレン!!」

なんだか会話が可笑しな方向へ向かっていたが、カレンの言葉を遮って声を発したのはザウルだった。焦りからつい声が大きくなっていた事に、本人はまだ気付いていない。強く発せられたザウルの声に、その場の全員が注目する。

「セ、セリア殿のことは、自分達が精一杯支えて行くつもりです。それに、その……彼女も、マリオス候補生としての役割があります。ですから……あの……」

勢いで言葉が出始めたが、それも長くは続かなかった。勢いとは無責任なもので、それが治まった時の対処など考えていない。今回も例外ではなく、ザウル自身最終的に自分が何を言いたいのか理解出来なくなり、口籠った。

普段は落ち着いているザウルが、これほど焦りを露にすると珍しい。どうしたのだろうか、とセリアは首を傾げる。

周りから集まる視線に居心地悪そうにザウルは視線を彷徨わせた。バツが悪そうに口の中で次の言葉を探すその姿を見た途端、カレンは目を見開いてニヤリと微笑んだ。

「まあ!!」

それは嬉しそうに頬に手を添えたカレンの姿に、ザウルはもしかなくとも自分は大きな過ちを犯したのでは、とその時になって漸く悟った。

「まあ、セリア。貴方はなんでこんなに面白い事を教えてくれなかったの?」

「はい?」

「分かったわ。セリア、頑張りなさいね」

「は、はあ……?」

急に子供のようににはしゃぎ始めたカレンは、セリアにそれだけ言うときと身を翻す。言われた方のセリアは、カレンの言葉を一つも理解出来ていない。何が面白いのか、何を頑張れと言われたのか。

首を捻って考えるが、全く分からない。

「ギル、行きましょう。早く帰って色々準備しなきゃ」

何の準備だ、とは恐ろしくて誰も聞けなかった。

ドレスの裾を翻して進むカレンの後を、やれやれ、と肩を落としたギルベルトが慌てて追う。その姿を、候補生とセリアは呆然と見送った。

数日後、学園に直接届いたボワモルティエ侯爵家からのパーティーの招待状を見た時、候補生達はセリアの行動力に似たものを見たような気がしたのだった。



### 訪問者 3（後書き）

こんなに嬉しい事は久しぶりよ。セリアにあんなに素敵なお友達が居たなんて。きっと楽しませてくれるわ。でもまずは、はつきりして貰わないと。でないと、セリアを任せられませんもの。

## 訪問者 4

気品を漂わせる豪華な調度品が飾られ、主の趣味の良さを十分窺わせる部屋で、セリアは大いに渋い顔をしていた。子供の頃から何度も訪れたこの部屋に、今は半ば強制的に拘束されている状態だ。目の前では、覚悟しろ、とばかりに潤わしの従姉様がニッコリと微笑んでいる。

「あ、姉様。服ならちゃんと持って来たのに……」

「駄目よ。折角なんだから、もっと可愛らしいのを着なきゃ」

言ってみた途端にピシヤリと却下された。

今までカレンが自分に夜会への参加を強制した事は滅多に無かった。時折、どうしても一緒に居て欲しい、と言われた時に、申し訳程度に顔を出すくらいだ。今回も、苦手な場ではあるが、カレンの頼みであるし、何より候補生達も出席するということで、仕方なくこうして赴いたのだ。けれど、屋敷に入った途端カレンに捕らえられ、こうして部屋に連れ込まれたという訳である。

セリアが持って来た服というのは、侯爵家のパーティーには似つかわしくない、華やかさとはかけ離れた、枯れ草色の地味さを全面から漂わせたような物だ。そんな物を選んで来たセリアが、部屋一杯に派手なドレスが広げられた中じから、さあ選べ、と促されても戸惑うだろう。

ここに用意された物は、全て昔カレンが着ていた物である。今はサイズが合わないので着られなくなった物を引っぱり出して来たのだ。流石、社交界の花形が着る物だけあって、色も形も様々だが、豪華ながらに気品がある。けれど、やはりセリアには似合わない。地味な容貌に、無理に派手なドレスを着せても滑稽になるだけだ。

初めのうちこそ必死に抵抗していたのだが、それが無駄だと分かるとセリアも諦めたようで、大人しくされるがままになっていた。

「やっぱり貴方に似合うのは、これかしらね」

膨大な量のドレスの中からカレンが取り出したのは、派手さとはかけ離れた、良く言えば清楚で大人しい、悪く言えば単に地味な白のドレス。ドレスといっても、その形はワンピースに近い。この派手な服の山の中、何故そんな物が混じっているのだ、とは聞けないでいた。けれど、やはりセリアに似合うのは、どうしても地味目の服になってしまいうらしい。

セリアは大人しくそのドレスを手にとってまじまじと見た。褒められる点といえば、袖と裾に細やかにあしらわれた刺繍だろうか。手が込んでいるそれは確かに見事で、品がある。

さあ着て来いと命令され、セリアは渋々それに袖を通した。

「あとは、髪を後ろで束ねて、軽く肩に流せばいいかしら。それと、少しお化粧もしましょうね」

「……………」

もはや逆らう気力も残っておらず、そんなセリアをカレンは楽しそうに弄り回している。ドレスが地味な事には変わらないが、やはりカレンは趣味が良いのか。初めにセリアが着て来たドレスとはやはり何処か違い、地味な中にも清楚な感じが残っている。そうして出来上がれば、セリアは一応の変貌を遂げていた。とはいっても、大変身ではなく、普段より多少粧し込んだといえる程度だが。

「どうしたの、セリア。気に入らない？」

「いや、そういうことじゃないんだけど……………」

はあっと溜め息を吐いたセリアにカレンが問いかけた。気に入らないという訳ではないが、ただ非常に疲れたのだ。慣れない事をすると、その分疲労も半端ない。けれど、カレンはそれを別の意味で取ったのか、セリアの顔を覗き込んで来た。

「もっと可愛いドレスがよかったかしら。それなら、アレにする？」

「……………っ!？」

カレンがアレ、と言って指差した先にあった物を見て、セリアは固まった。ここに多くある、大人びた服とはまた違い、目に痛い桃色の可愛らしいドレス。レースがふんだんにあしらわれていて、全

体から伸びた大きなリボンが目立っている。胸元に散りばめられた小さな宝石が、キラキラと嫌味な程に輝きを反射していた。

「け、結構です!!」

あんな物を着せられるなんて、たまったものではない。似合わない以前に、絶対に嫌である。まるで道化師の衣装ではないか。何故あんな物がここにあるのだ。というより、カレンはあれを本気で自分に着させる気だったのだろうか。

そんな感じでセリアがショックを受けていると、ノックの音が部屋に響いた。カレンがそれに応えようと、扉の向こうからは、正装した姿のギルベルトが好奇心を含んだ瞳を覗かせてくる。

身分を持たない者が侯爵家で開かれるような夜会に参加するのは、メイドや使用人としてが殆どだ。そういった貴族とそうでない者との間の溝は、クルダスではまだ深い。本来ならギルベルトも、参加するだけで醒めた視線で見られても可笑しくはない。だが、彼の容姿は毎回驚く程貴族達の夜会の場に溶け込んでいた。聞かれない限り、間違はなく庶民などと誰も思わないだろう程に。

また、レディー・カレンの横に立つ事で描かれる一枚の絵画の様な光景に、人々は惚れ惚れせずにはいられない。その瞬間だけは、誰もが身分を忘れ、二人に魅入られてしまうのだ。

「姫君達。そろそろ、準備は出来たかい？」

「ギル。女性を急かすのは、礼儀知らずではなくて」

つん、と拗ねたような顔をするカレンに、ギルはその手を取ってゆっくりと口づけた。

「美しく着飾った愛しい姫を、早く見たいと思うのが、男心というものだよ」

慈しむような瞳を向けて来るギルに、カレンも顔を綻ばせた。熱の籠った瞳で見詰め合う二人の間は、バラでも咲いているのではと疑いたくなる程に輝いている。

「では、聞かせて下さる。今夜の私はどうかしら？」

「もちろん、他の者の目に留めさせてしまうのが惜しい程に、美しいよ」

目の前で繰り広げられる、甘ったるい恋愛劇に、セリアはどうしたらよいかわからず、とりあえず事の成り行きを見守っていた。この二人は、年中この調子なので、セリアも今更驚きはしないが、未だに反応に困る。

オロオロと視線を彷徨わせっていると、ギルベルトが思い出した様にこちらに顔を向けた。

「セリアも、随分可愛らしいじゃないか」

「勿論よ。私が見立てたんですもの」

といっても、普段の地味さは健在である。可愛いという言葉で表すには、やはり何処か違うように思うのだが。階下のホールで踊っている姫君の方が、よっぽど可愛らしいだろう。

「さあ、セリア。行きましょう」

「……………はあ」

逃がさないようにガッチリと腕を取られて、セリアはどうすることも出来ず仕方なく頷いた。

侯爵家のホールでは、憧れのレディー・カレンに招待された貴族の紳士淑女が集っていた。場は既にかなり盛り上がっていて、流れる円舞曲に混じって軽快な笑い声が響いている。そんな場であっても、独特の雰囲気と輝きを放つ 候補生達を見つけ出すのは簡単だった。残念ながら、その中に銀髪の青年の姿だけは見受けられないが。カールはどうも私用が入ったらしく、この場に来られなかったのだ。

セリアが候補生達の姿に気付いた時には、彼等は既に複数の姫君

達に囲まれていた。幾ら断っても次から次へと言い寄られては、流石のマリオス候補生も対処に困るようだ。

その様子にどうしようかと迷ったセリアだが、わざわざ姫君達の中へ突っ込んで行く気にはなれず、取り敢えず引き返そうと踵を返す。けれど、それは横に立つ従姉様に止められてしまった。

「セリア。お友達にご挨拶しなくては」

「でも、ほら……なんだか今忙しいみたいだし、後にしても……」

「まあ、セリア。そんな事を言っていては、彼等を取られてしまいますわよ」

「は、はあ!？」

ちよつと待て。取られるとはどういう意味だ。彼等は物ではないし、取られるも取られないもないというのに。そんな事を思っている間も、カレンはセリアの手を取ってぐんぐんと進んで行く。青ざめたセリアが心の中で悲鳴を上げているのに気付いても、おかまいなしだ。

スィスイとホールの中を進むレディー・カレンの姿を目に留めた者は慌てて道を譲る。誰もが輝くその容姿に見惚れ、その腕の先に捕らえられている哀れな少女は目に映らなかった。

「皆様」

「レディー・カレン!!」

突然後ろから声が掛けられ、それまで候補生に夢中になっていた姫君方は途端に振り向いた。後ろには潤わしのマリオス候補生、目の前には憧れのレディー・カレン。まるで夢のような状況に、姫君達は一層頬を赤く染める。

「今夜はいらして下さいありがとうございます。どうか楽しんで下さいね」

ニツコリと上品に微笑むカレンに、姫君達も感嘆の溜め息を洩らす。そうしてフラフラと蝶が光に引き寄せられるように離れて行く姫君達に、候補生達は心から安堵した。

「だ、大丈夫?」

何が大丈夫ではないのか自分でも分からなかったが、今までに無いほど脱力しきった彼等に一応そう聞いてみたのだ。

「ああ、まあ……んっ!？」

「……?」

そう言っって顔を上げたイアンがまじまじと自分を見詰めるので、セリアは首を傾げた。はて、何か可笑しい事でも言っただろうかとセリアが困惑していると、イアンが途端に目を逸らした。

「相変わらず地味だけど、可愛いんじゃないかねえか？」

「はっ!？」

「うん。似合ってる」

「は、はあ……ありがとう」

どうやら褒められたらしい。可愛いというより、地味なだけだろう。先程まで彼等を取り囲んでいた令嬢達の方が、よほど可愛いく見えたが。

イアンの言葉は、普段これでもかという程地味な人間が、たまに少し着飾るとかなり違って見える、というなんとも便利な効果の所為なのだが。それに気付く者はこの場には居なかった。

そんな感じでイアンの言葉に礼を述べると、突然セリアは後ろから大きな腕に抱きすくめられた。

「マリオス候補生ともあろう方が、僕の大事なセリアを、そんな安っぽい言葉で口説き落とそうとするとは」

「ギル!？」

突然の事に驚いたセリアだが、こんなことをしてくる人物はほんの数名しか思い浮かばない。てっきりカレンと一緒に居ると思っていたのだが。

「セリア。付き合う男はちゃんと選ぶものだよ」

「は、はあ!？」

そう言っってセリアの肩に軽く流された髪に指を絡める仕草には、優しさが溢れている。何を言われたのかまったく理解出来ず、セリアは思わず顔を顰めた。

「着飾った女性に、最低限の敬意を払うのは、男として当然の義務ではないかな？」

挑戦的な笑みを向けて来るギルに、イアンは多少ムツとした。けれど顔には出さない。変わりに、不穏な空気にオロオロとしているセリアの手を掴み引き寄せると、軽く腰を折り、その指にそつと唇を這わせた。

「これは失礼しました。普段の愛らしさはまた違った、気品に溢れる美しさに魅せられ、言葉を忘れてしまった自分をお許しください、姫君」

普通の令嬢なら頬を真っ赤に染めて失神しそうな状況に、セリアはポカンと口を開けた。普段の姿からは想像もつかない程のイアンの変わりように、思い切り戸惑う。

なんなのだ、これは。まさか、変な物でも食ったのか？そうでなければ頭でも打ったか、と思いきり失礼な事を考えながらセリアは青ざめた。

セリアはこんな風に思っているが、これが本来貴族の子息である彼等の姿であって、決して体に異常がある訳ではない。

「まあ！」

あり得ない程紳士的なイアンに、嬉しそうな顔を見せたのは、当人のセリアではなくカレンであった。まるで面白い事を見付けた時のように、その瞳を輝かせる。何時の間に戻っていたのか、先程まで周りに居た令嬢方は、遠くで別の男性と談笑を初めていた。

「そうだわセリア。お父様が貴方に会いたがっていたわよ」

「叔父様が？」

「ええ。ギル、セリアを案内して下さる？」

カレンが言うと、ギルベルトは全てを悟った様にニコリと笑い、セリアに手を差し伸べる。それにセリアはイアンに掴まれていた手を離すとギルベルトの後について、さっさとその場を離れてしまった。その姿を、何処か不満気に見送る候補生達にカレンが再び向き直る。



「セリアを取り上げてしまったこと、悪く思わないでね」

「……いえ。そんなことは……」

「でも私、彼方がたと是非お話したい事がありましたのよ」

「……………」

絶対に何かを企んでいる顔で微笑まれて、候補生達は背中に冷たいものが走ったような気がした。

「私、セリアの事が心配で。普から大人しくする事が出来ない子だったの。学園でもどうしているかが気になって」

頬に手を添えて少し俯く姿に、多方面から感嘆の溜め息が漏れる。不安そうに伏せられた眼は、儚げでとても繊細だ。その様は、周りに居た者が男女問わず見惚れてしまった程に麗しい。

カレンのセリアを氣遣う言葉に、候補生達も苦笑しそうになりながら応えた。

「仰る通り無謀な面もありますが、そう心配される事もないと思います。なにより、学園内は安全ですし」

そう。本来ならそこまで心配する必要は無い筈なのだ。セリアが学園内に大人しく留まってさえいてくれれば。けれど、それが望めそうにないことは、取り敢えずは言わないでおく。けれど、カレンはそれがお気に召さなかったようで少し拗ねたように口を尖らせた。「そういう意味ではありませんわ。あの娘が大人しく何処かに留まってくれるなんて期待するだけ無駄ですもの」

「そ、それは……」

流石従姉様、よく分かっていらっしゃる。と候補生達も感心してしまった。そして、本人の居ない間に散々言われている事を、セリアが知る事は無い。

「私は、あの娘をちゃんと支える事が出来るだけの殿方が居るか心配ですの」

その言葉に候補生達も困惑の表情を隠し切れなかった。彼女を助けて行く意思があることは、先日しっかり示した積もりだ。けれど、それでは伝わらなかったのか。それとも、よっぽど自分達は頼りな

いと思われているのだろうか。

眉を寄せる候補生達にカレンは満足したのか、先程の拗ねた様な表情とは一変し、今度は嬉しそうに語り出した。

「私ね、セリアには素敵な恋をして欲しいと思っていますのよ」

「はっ!？」

「でも残念なことに、セリアはそう言った事に中々興味を示してくれませんの」

「……………」

「それで、出会いが大切だと思って、丁度良い殿方を紹介しようと思っていたのですが、止められてしまいましたし」

「そ、その件は……」

カレンが目に向けたのは、バツが悪そうに口籠るザウル。身に覚えがあるのか、非常に居心地悪そうにしている。

「ザウルさん。あのお言葉の真意を聞かせてもらえるかしら？」

「うっ、それは……」

矛先を向けられザウルは押し黙った。何故彼がカレンの言葉に異を唱えたかなど、ここに居る誰もが承知している。カレンも、ここまで言うからには分かっているのだろう。

「実はね、例のお方をここにお招きしているの。今からでもセリアに紹介することは……」

「レ、レディー・カレン!」

ピクリと反応してしまったザウルに、カレンは何、と聞いてきた。その自信たっぷりの態度に、ザウルもついに白旗を上げる。それに、セリアの事になれば、レディー・カレンはいずれは通過しなくてはならない道の様な気もするのだ。

「自分は……その……確かにセリア殿をお慕いしています。ですから……」

「まあ、そうなの？」

カレンは、そんなことまるで知らなかったかのように聞いて来るが、絶対に分かってやっている。それは誰が見ても明らかだ。まる

で自分が告白されたかの様に頬を染め、はしゃぐカレンの姿にザウルも顔を青くした。どうも、自分は手の上で踊らされたような感がある。

その肩に、友人が手を乗せ軽く叩いてやり、氣力の復活を促したが、効果は期待できそうにない。

「では、横槍を入れるのは無粋というものですわね」

「はっ? ……あの」

「セリアとの仲を邪魔することは出来ませんもの」

まるでザウルとセリアとの関係が決定しているかのような物言いに、ランが一步前に出た。

「レディー・カレン。失礼ですが」

「あら、ランスロットさん。何かしら?」

「少し気が早いように思うのですが。まだ本人の心を聞いてはいないのでは?」

冗談ではない。まだセリアの意思が決まっていなところか、こちらを意識しても居ない内から、身内の、しかも姉のような存在に、相手を決められてはたまったものではない。

少し強めに言うランに、カレンはニヤリと笑みを返した。

「ランスロットさん。貴方は恋とは落ちるものだともお思い?」

「はっ?」

突然のカレンの言葉に、その場の全員が息を呑む。

「恋に落ちるまで待っているのでは、あの娘は捕まえられませんかわよ」

「……で、ですが、最終的に決めるのは彼女です」

この時点で自分の気持ちを暴露しているも同然なのだが、ランがそれに気付くのはもう少し後になる。必死で食い下がるランに、カレンはクスリと笑みを深くすると、言い聞かせるように口を開いた。  
「勿論、その通り。決めるのはセリアですわよ」

「……ならば」

「でもね。貴方は一つ誤解していらっしゃるようだわ。他の候補生

の方もよくお聞きになって」

「……………」

「恋はね、落ちるものではなく、落とすものですわよ。それが出来ないようでは、やはりセリアを十分に支えられませんか」

ニッコリとカレンが言うと同時に、候補生達は固まった。それを見計らったかのようなタイミングで、栗毛の地味な少女が姿を表す。「お待たせしました」

ひょっこりと現れたセリアに、候補生達は同時に我に返る。同時に小さな火花が散ったかと思うと、顔に熱が昇り始めた。その様子に、セリアは首を傾げる。クスクスと横で笑うルネに尋ねてみれば、心配要らないと押し切られてしまったが。

「セリア。この場は君に任せて良いかな」

「そうね。私もギルに用事がありますの。では、マリオス候補生の方々、今宵はお会い出来てよかったですわ」

そういつて笑いながらその場を去って行くカレンを見送りながら、セリアはその場に固まったまま微動だにしない候補生達に困惑していた。

「例の令嬢は、上手く相手を丸め込めたみたいで安心したよ」

「丸め込んだのではなく、心を掴んだのよ。でも、バラ園という演出は素晴らしかったわ。だから貴方のシナリオは好きよ」

「君の情報があってこそだよ。あの手の男なら、手は幾らでもあるからね。それに、役者も良かった」

片目を瞑って見せるギルベルトに、カレンも微笑みで返す。セリアの婚約相手になる筈だった男性、深窓の令嬢、そしてレディー・カレンを巻き込んだ茶番劇の脚本を書いたのは、小説家でもあるギ

ルベルトだった。一騒動を起こした今回の件は、既に決まっていた展開に持って行かれただけということを知るのはこの二人のみだが。

「それにしても、君もよくやるね」

「あら、なんのことかしら」

少し離れた場所では、未だに複雑な顔をした青年達を心配げに見守る少女の姿。

「まだ子供の彼等に、わざわざ暗示を掛ける様な事言わなくても良かったんじゃないか」

「あら。小説家にしては、随分と見解が甘いよね。やっぱり、筋書きが決まっていけない恋劇となると苦手なのかしら」

ツンとそっぽを向く婚約者に、ギルベルトもやれやれと肩を落とす。

「私は、セリアには素敵な恋をしてもらいたいだけですのよ。その為には、沢山、色々な経験をして貰わないと」

「それで、彼女が傷ついたら？」

「それも経験の内よ。悲しみも、辛さも、どんなことになっても、何一つ無駄では無いわ。そうしていつか、その果てにきっと素敵な相手を見付けられます」

「……全ては、セリアの為かい」

ギルベルトの言葉に、カレンは当然だ、と返す。

普通の娘だったなら、経験は自然と積んで行くだろう。けれど、セリアはそれとは無縁の場所に留まろうとするのだ。それも、無意識の内に。けれど、それでは太刀打ち出来ないのだ。この世で最も、面倒で下らない渦には。

もし、彼女が生涯をその渦の外で生きようとするならそれで良い。けれど、そんな事は不可能である。少なくとも、彼女は将来的に誰かを伴侶として選ぶ事になるのだ。それと無縁の人生など、あり筈がない。現に彼女の周りにいる青年達は、セリアをそういった目で見てしまっているのだから。それをセリアが理解した時に、感情が絡まない訳が無い。

何も知らない少女が、何の経験も知識も無しに、人間の感情の中で最も厄介な部分が絡む面倒事に巻き込まれればどうなるか。抗う術を知らなければ、それがセリアの夢の妨げになる可能性は十分にある。それだけは、カレンも避けたかった。

「勿論、私は外から応援するだけですわよ」

「是非とも、君の悪戯心が疼かない事を祈っているよ」

白々しく言うカレンに、ギルベルトは彼方で難しい顔をしている青年達に同情するように、やれやれ、と肩を落とした。

ちなみに、レディー・カレンの（ありがたい？）言葉を聞き逃したカールは、その後天使の笑みを浮かべたルネによって、同じ言葉を嫌という程聞かされる事になる。

## 訪問者 4（後書き）

なんだか、物凄くしてはいけない事をした様な気がする。何が、とは言わないけど、絶対に何か可笑しい。そもそも、あの校長はなんでこう変な物ばかり欲しがるんだろう。あんなもの、明らかに怪しいのに。

まあ、ただのお菓子だし、多分平気だとは思うけど。

## 妙薬 1

ボワモルティエ家の夜会から数日。セリアの婚約騒動も解決され、候補生達は平和な学園生活を過ごしていた。と思っているのはセリアだけで、他の者はそうでもなかったりする。平然としているように見えても、ザウル達がレディー・カレンの言葉に、少なからず釣られてしまったのは事実だ。けれど、いざ行動に出そうとしても、なにせ周りには敵が多い。さり気なく邪魔されたり、反対に邪魔したりを繰り返しながら、候補生達は内心穏やかではない状態が続いていた。

そんなある日、授業も終了し、いつも通り不機嫌顔のハンスを他所に、セリア達候補生は帰り支度を整えいた。そうして、さて温室へ行こうかという時、教室の外からひょっこりとクルーセルが顔を覗かせたのだ。

「セリアちゃん」

「……ク、クルーセル先生？」

何時もの如く授業の途中で抜け出した筈のクルーセルが、唐突に戻って来た事にセリアは驚いた。

ニッコリと微笑む姿に、誰が何を言うよりも先に、苛立ちを破裂させた様な声が投げられる。

「クルーセル・ブロシェー！！貴方は、一体今まで何処にいたのですか！！！！」

「やあねえハンスちゃん。そんなに怒ってると、老けるわよ」  
「そういう問題ではありません！！」

眉間にこれでもか、という程皺を寄せたハンスが詰め寄るが、クルーセルはまるで反省した様子を見せない。それどころか、ハンスの言葉を完全に聞き流している。まだ怒気に向けて来る同僚を尻目に、クルーセルは楽しそうな視線で教室内に目的の人物を見付けた。



「それよりセリアちゃん。校長が呼びよ」

「えっ！？ 私ですか？」

「そうよ。ほらほら、急いで」

語尾にハートが付いているのでは、と疑いたくなる程クルーセルはご機嫌だ。こういう時は十中八九何かを企んでいる時である。セリアの背を押して、さっさと教室を出て行こうとするクルーセルに、そうはさせるかと後ろから声が響いた。

「クルーセル！！まだ話は終わっていません！！」

「あらハンスちゃん。校長の呼び出しなんだから、仕方ないでしょう」

「うっ！」

校長、の部分強調して言われれば、生真面目で堅物なハンスは黙る他ない。口惜しさと怒りを必死に押さえ込んでいるハンスには、セリアだけを校長室に向かわせ、クルーセルは残ればいい、という考えは思い付かなかったらしい。

セリアは、ブツブツと文句らしき言葉を呟くハンスを気にしながらも、とりあえず校長室を目指した。

そんなわけで、校長室へ赴いたセリアを、瞳をキラキラさせた校長が迎える。なんだか妙に楽しそうな校長の表情に、セリアはなんだか不安を覚えた。というより、嫌な予感しかしない。

「おお、セリア君。よくきてくれたね。早速だが、これを見てくれ」  
そう言って校長は、執務机の上に乗っている白い箱を指差した。

中を覗き込むと、フワリと濃厚な甘い香りを漂わせる茶色のちんまりとした物体が陳列している。

「これは何だと思うかね？」

「あの、チョコレートに見えるのですが」

「フフフ。そうだよ。まさしく、これはチョコレートだ」

さも自信満々に言う校長に、セリアは眉を顰めた。何を、まるで宝の山でも掘り当てたみたいに誇らしげに言っているのだ。たかが菓子を。

不審げにチョコレートを見るセリアの視線に気付いたのか、校長は一つ咳払いをすると、ゆっくりとこちらに顔を向けた。その緊張した空気と真剣な表情に、セリアも息を吞んで気を引き締める。もしや、このチョコレートに何か問題でもあるのだろうか。

セリアは菓子を見詰めながら、校長の次の言葉を待った。

「実はね、このチョコレートには不思議な力が働いていて、食した者はたちまち異性に恋をしてしまうらしい」

「……はっ？」

「学園都市に行った時に、偶然見付けてね。つい買ってしまったのだよ」

思い切り渋い顔をして見上げれば、それは楽しそうに瞳を輝かせる校長の姿。その表情からは、疑いとかそういった類の感情は一切見られない。完璧に信じ込んでいるのだろうか。

その姿にセリアは短い溜め息を洩らした。なんでこんな変な物に興味を示すのだろうか、この人は。食べたら恋をしてしまうなんて、そんな馬鹿な話があるか。明らかに、ただの宣伝文句だろう。

「ということで、君も食べたまえ」

「ええっ!! な、何故私まで食べなければならぬのですか!？」

「一人で食べるのは怖いではないか」

いい歳をして、何をそんな子供みたいな事を言っているのだ。そんな恥ずかしげに上目遣いで見られても、可愛くもなんともない。というより、そんな事に自分を巻き込むな、と言いたい。怖いなら買わなければいいではないか。

「かといって、クルーセル君では効果があるかどうか確かめられないだろう?」

そこでセリアは思い出す。仕草や言葉がどうであろうと、クルー

セルも一応性別上は男なのだ。

校長も、初めこそクルーセルと食べようか、とも思ったりしたらしいが、それではこのチョコレートに本当に不思議な力があるのか確かめられない。異性に恋する、と言われている菓子なのだから、クルーセル相手では効果は見られないだろうし、仮に効果が出たならそれはそれで問題である。

「まあまあ。これは校長命令だよ」

「うっ……」

ここぞとばかりに権力を振りかざす校長を、セリアは恨めしげに見詰める。生徒と校長では、明らかに自分の方が立場は弱い。このように言われてしまえば、仕方ないのだ。

まあ、どうせ恋に落ちるなんてそんな事あり得ないし、一緒に食べるくらいならいいだろう。とセリアは、白い小箱の中から一つチョコレートを摘み上げると、校長と同時に口の中に放り込んだ。途端にチョコレートが口内で溶け出す。

「うっ……あ、甘い」

それは喉が焼け付くように甘く、濃厚で強烈な味と香りが口一杯に広がった。あまりの甘さに驚くものの、セリアはそれを何とか飲み込んだ。ほろ苦い後味を覚えさせる菓子を、目の前の校長は満足そうに食っている。喉にまとわりつく様に残るこれをどうにかしたいと思っていると、クルーセルが後ろから聞いて来た。

「セリアちゃん。どう？」

「い、いえ。特に変化は……」

恋に落ちるだのなんだの言っていたが、やはり自分に異変は起きていない。

「そうか……」

それを聞いて校長は、かなり残念そうに俯いた。いったい、何を期待していたのだろうか、この人は。そんな感じで落ち込む様子を見せた校長は、やっぱり嘘だったのか、などとチョコレートをもう一つ摘んでじっくり観察している。セリアが校長室を後にした時も、

校長はまだ残念そうに瞳を伏せていた。

その様子に、本気で信じていたのか、とセリアは心の中で突っ込んだ。

しかし、このチョコレートの脅威は、すぐに発揮される事となる。

教室に置き忘れてしまった本を取りに来た序でに、校長室へ呼ばれたセリアを迎えに行こうと廊下を歩いていたイアンは、目の前をフラフラと覚束ない足取りで歩く人物を見つけ慌てた。それがセリアだったものだから、尚更だ。

「おい、大丈夫か？」

イアンがグツと肩を掴むと、セリアは歩みを止め、そしてゆっくりと俯いていた顔を上げた。と思ったら、一瞬驚いた様な表情を見せ、ぱちりと一度目を瞬かせる。そして、ふっと切なげな溜め息を洩らしたのだ。その時点で不審に思ったイアンだが、次の言葉で我を忘れた。

「イアン。私、貴方が好き」

「はっ!？」

何を言い出すかと思えば、飛び出して来た突拍子も無い言葉に、イアンも素っ頓狂な声を上げた。けれど、異変はそれだけでは留まらない。

「頼りになって、明るくて。イアンの素敵なお顔が、私は大好きよ」「お、おい。どうしたんだ？」

イアンは内心で、とんでもなく驚いていた。普段ならば絶対にあり得ないだろう言葉をドンドンと言って来るセリアに、思考が停止する。焦りのせいか、声もかなり上擦っていた。けれど、セリアの変化は言葉だけに終わらず、指を組み合わせると、うっとりとした熱い

視線を向けて来たのだ。まじまじと見詰められ、イアンはどうしたらしいのか分からなくなってくる。

頬を赤く染め、その口から漏れる溜息は、普段他の娘共が自分達に向けて来るものと似ている。けれど、決定的に違うのは、そうして自分に視線を向けているのは、他でもないセリアだということ。既に見慣れたと思っていたものでも、相手が違うだけでこうも胸に溜まる思いに差があるのか、とイアンは何処か冷静な部分でそう考えていた。

けれど、可笑しい。コイツがこんな事を突然言い出すなんて、何かあったに違いない。目の前まで迫って来るセリアから視線を無理やり外し、一度落ち着こうと一步下がると、途端にその瞳が寂しそうに揺らいだ。

「イアンは、私の事が嫌いなのか？」

「うっ、」

潤んだ声でそう聞かれて、イアンは完全に固まった。

嫌いなわけがない。むしろ、この状況は想いが通じ合ったと取っ正しい筈である。完璧に一方通行だと思っていたが、そうではないと分かって嬉しくない訳がない。けれど、今までそんな素振りを全く見せなかったのに、突然そんな事を言われても、もしかしたら嘘なんじゃないかと疑問に思ってしまう。セリアがそんな嘘をつく筈はないと分かっている、疑り深くなってしまうというもの。

フツと息を吐き落ち着きを取り戻したイアンは、セリアの両肩を掴むと、その身体をグイッと引き寄せ、その瞳を覗き込む。途端に頬を染められ、なんだか調子が狂うがイアンは真剣に言葉を発した。

「お前、俺が好きなのか？」

そう聞いた途端、恥ずかしそうに俯き身を振らせながらも、セリアはコクリと小さく頷いた。すると、今度はセリアが尋ねて来た。

「イアンは、私が嫌い？」

捨てられそうな子犬の様に切なげに涙ぐむその瞳に、イアンはもう何でもいいと、自棄を起こした。

「俺も好きだ!!」

「本当に!？」

それはもう嬉しそうにセリアが表情をパツと輝かせた。それと同時に何と抱きついて来たのだ。すっぽりと胸の中に納まった小さな身体に、イアンも硬直する。

なんだ、この新婚夫婦のような展開は。信じられないものを見る様な目で視線を下げると、嬉しいと頬擦りしてくるセリアの姿。そんな風にされては、イアンの思考も限界に達するというもの。もうどうにでもなれ、と自分もその背中に腕を回そうとした。

が、その瞬間。

「何をしている」

身も凍る様な声が廊下に響いた。それを聞いた瞬間、理性が飛びかけたイアンも、先程とは別の意味で固まる。不愉快を通り越し、威圧的なまでの視線を辿って行くと、その先には魔人が立っていた。一通り用事を済ませ、廊下を歩いていた所をこの現場に遭遇したのだ。所在なさに腕を上げているイアンと、その胸に抱きついているセリアを交互に見た魔人様、カールはかなり不機嫌そうにしている。

急な事で固まってしまったが、これはイイ所を邪魔されたのではないだろうか。そう考えると途端に不満を覚えるというもの。イアンは文句の一つでも言ってやろうと口を開いた。けれど、言葉が発せられる前に、セリアの声が響く。

「カール。貴方は本当に素敵ね」

「はっ!？」

イアンが驚いてセリアに視線を向けると、それまで嬉しそうに自分に抱きついていたセリアはスルリとその腕から離れ、カールの傍へ引き寄せられる様に歩いて行った。

うっとりとした視線を向けられ、カールの眉もピクリと反応する。「いつも冷静で、正しい判断を下す貴方が、好き」

「ほう」

それまで不機嫌そうに皺がよっていた眉間を解くと、カールはそっとセリアの顎を取った。クイツと指で顎を上に向けさせられ、セリアは更に頬を染める。

「お前も、漸く物の見方を理解したようだな」

カールがフツと意地悪そうに口の端を微かに吊り上げると、普段は冷たいその瞳に僅かな熱が籠った。

「では、その期待に応えてやろう」

そのままカールの顔が近づく。セリアはそれを受け入れようと期待や不安が入り交じった瞳をそっと細めた。

二つの影が重なり合うかの様に思われたが、それを許さぬ者がここには居る。

「ちょっと待て！」

「……何だ。言い残した言葉でもあったか？」

これから、という時に邪魔され流石に面白くないと思ったのか、カールはジロツと後ろを睨んだ。けれど、イアンにとってはそれどころではない。恋人のように寄り添う二人にズカズカと近づくと、セリアの腕を掴みグツとこちらを向かせた。

「お前、俺が好きだって言っただろう？」

「うん。イアンが好き」

「じゃあ、カールはなんなんだ？」

「カールも好き」

聞いた瞬間グラリとイアンの視界が揺らいだ。なんだこの仕打ち。裏切られたような、思いつき肩透かしをくらったような、訳の分からない苛立ちが込み上げて来て、キツと目を吊り上げる。

「そんなの可笑しいだろう」

「ふえっ!？」

途端にセリアに涙ぐまれ、イアンはしまったと思った。流石に言い過ぎたか、と思いセリアの顔を覗き込むと、その視線は自分には向いていなかった。その瞳がパチリと瞬かれ、潤んだ瞳が廊下の奥

をジッと見詰めているのだ。ハッとしてその方向を見やると、通りかかったのだろう、数冊の教本を抱えた男子生徒がこちらへ向かって歩いて来る所だった。

嫌な予感が通り、イアンがセリアにもう一度視線を戻した時には、セリアがまたしてもスルリとその腕から逃れてしまった後だった。

「好きです」

「は、はあ!？」

偶然通った廊下の真ん中でマリオス候補生達が集まって何をしているのだろうかと思っただが、取り敢えず横に逸れて静かに通り過ぎようとしていた所で、突然こんな事を言われれば誰でも声の上擦るというもの。しかも、相手はフロース学園初の女性マリオス候補生だ。何が起きているのか分からず、男子生徒がその場で固まっていると、途端に前に誰かが立ちはだかった。

はっと視線を上げれば、すっかり冷たさを取り戻したバイオレットの瞳。明らかな怒りの感情を向けられ、しかもそれが魔人の様に恐ろしいもので、男子生徒も途端に膝を振るわせる。

「散れ」

「し、失礼しましたああ」

魂の芯から凍り付く様な声で言われ、男子生徒は訳も分からず逃げ出した。あまりの恐怖にその後、その時の記憶が曖昧になったそうだが、そんな事候補生達の知ったことではない。

「これは、どうすりゃいいんだ？」

イアンが漸くセリアの異変が唯事ではない事に気付き、カールに意見を求めた。というより、コイツが他人に好きだのなんだの言うなんてあり得ない。更に、あんな気の利いた口説き文句なんて、一生かかったって言う訳がないのだ。冷静になってみれば、先程の自分なんて馬鹿だったのだろうか、と数分前の自分を呪った。

とりあえず熱でも計ってみようか、とその額に手を添えれば、またあのうっとりとした視線を向けられる。

「イアン。私を心配してくれるなんて嬉しい。私、貴方が好きよ」



手の届く程近い位置に居たイアンは、至近距離でそんな事を言われ、数秒前に反省したにも関わらずまた動揺した。

けれどそれを押さえ込み、これまでの経緯を考えると、セリアは今、目に映る異性全てに好意を伝えているように見える。

「お前も可笑しいと思うか？」

「明らかに、普通ではないな。大体、こやつがこうも軽々しい言葉を吐く筈がないだろう」

「……そう、だよな」

そんな事を言っているカールも、つい先程セリアの言葉を本気にしたばかりだというのに。彼等の会話を他所に、セリアはニコニコと機嫌良さそうに微笑んでいる。カールとイアンの仕草一つを見ては、また溜め息を洩らし好きだのなんだの言ってくるので、手が付けられない。

「とにかく、温室へ運ぶか」

これ以上ここに居て、また他の生徒と鉢合わせるのは拙い。そう結論づけた二人は、セリアを温室へ連れて行った。その道中も、数人の生徒に出会したが、その度にカールが蹴散らしたため、セリアは誰も目に映すことなく、無事に温室へ辿り着いたのだった。

## 妙薬 1 (後書き)

なんかこうして見るとセリアじゃないみたいだね。取り敢えず、一時的なものだろうから大丈夫だとは思うけど。それより、イアン達の方が心配だな。このまま見てるのも面白いから好いかもしれないけどね。

## 妙薬 2

なんだか尋常では無い状態のセリアを、やっとの思いで温室へ連れて来たイアン達は、そのままゆつくりとベンチに座らせる。心配して顔をもう一度覗き込めば、途端に顔を赤らめ目を逸らされてしまった。セリアが奇怪な行動を取る度、イアンはグラリと自分の中で揺らぐものを感じるのだが、必死にそれを押し殺す。額にそつと手を当ててみるが、熱ではなさそうだ。多少の火照りはあるが、病気の類ではない。

「こんな時に限って誰も居ないのかよ」

見回した温室内には、自分達以外の影は無い。居るだろうと思っていたルネすら見当たらないのだ。けれど、この状態のセリアを、安心して相談出来るのは、残念ながら彼等だけである。

「とにかく、原因が分からねえと」

「確か、校長室へ行くと言っていたいなかったか？」

また余計な事を企んでいるのか、あの校長は。と内心で舌打ちしたカールは、取り敢えず原因を知っているであろう学園の主の元へ向かう事にした。それに続いて、イアンはクルーセルを当たってみる事にする。とにかく、あの二人が今回の事に関わっている可能性は、多分にあるのだ。無闇に人を疑うのはどうかとも思うが、普段の行いから、二人に心当たりがないか聞くくらいはしても問題は無いだろう。

「いいかセリア。絶対にこの場所を動くんじゃないぞ。いいな？」

「イアンは行っちゃうの？」

途端に潤んだ瞳を向けて来るセリアに、イアンもうつと言葉に詰まった。こういう反応は星の数程受けて来たというのに、相手がセリアだけにどう対処すれば良いのか分からないので、一々戸惑ってしまう。

「いいから。俺達が戻るまで大人しくしている」

「イアンがそう言うなら、分かった」

そう言ってシュンと肩を下げたセリアに、イアンだけでなく、カールまで目を見開く。

コイツが大人しく待っている事を了承するなんて、今まであっただろうか。いや。どれだけ自分達が望んでも、決して頷く事はしなかった。なんだか妙な感動を覚えてしまうのだが、今はそれどころではない。

「すぐ戻って来るから、とにかくここに居ろよ」

「うん。早く帰って来てね」

制服の袖を弱く引かれ、上目遣いで懇願するように呟くセリアに、イアンも足を止めそうになってしまった。なんだ、この夫を送り出す新妻みたいな台詞は。

もう暫くこのままでもいいかもしれない、と一瞬過った馬鹿げた考えを、頭を振って追い出した。しかし、幾らそうしても、一度浮かんだ考えがそう簡単に消える筈もなく。セリアをこのままにしておく訳にもいかないだろう、と現実的な思考で自分の愚かな考えを押さえ込む事に必死になる。

とにかく、今は一刻も早く原因を探す事が先である。ここには候補生以外は滅多に近づかない。彼等ならセリアの異常を察して、なんとかしてくれるだろう。とイアンはそのまま温室を出た。

一体あの校長は何をしたんだ、とイアン達が学園内を駆け回っている頃、図書室での用事を済ませたザウルが普段の様に温室へ足を踏み入れた。中を覗けば、一人取り残され、椅子に座ってしょんぼりと俯いているセリアの姿。普段とは何処か違う様子に、ザウルは心配になって歩み寄った。

「セリア殿、どうかされましたか？」

ザウルが入って来た事に今気付いたセリアは、パツと顔を上げそ

の端正な顔をしっかりとその瞳に映した。途端にパチリと大きく瞬きをすると、フツと息を短く吐き出す。頬を染めるセリアにザウルが首を傾げていると、次には信じられない言葉が飛び出した。

「ザウルはいつも落ち着いていて、とても優しいね」

「セリア殿？」

「私、貴方が好き」

「はっ！？あの……」

何をいきなり言い出すのだ、と驚きで目を見開いていると、セリアがゆっくりと立ち上がり、自分の目の前に立ったのだ。咄嗟に身構えたが、そんな事意味を成さず、あっけなくその手を握られてしまった。手から伝わる温もりに、ザウルがパクパクと口を開け閉めしていると、また熱を含んだ言葉が吐き出される。

「私、貴方が好き」

再び言われた言葉に、ザウルは身体の芯から揺さぶられた様な感覚を覚えた。何が起こっているのか分からず、まさか夢か、と疑ってしまう。けれど、次第に心地いい痺れに脳が支配されていくのも事実で、夢でもいいとさえ思えて来た。

と、そこで頭を振る。いやいや、あり得ない。何が何だか分からないが、この状況は絶対に起こりえない。何か、異変が有るに違いないのだ。と一度失いかけた冷静を取り戻し、ジッとセリアに視線を向ける。

相変わらず自分の手を握りしめながら、嬉しそうに頬を染めている姿は、確実に可笑しい。これではまるで、多少なりとも好意を寄せられているようではないか。何がセリアをそうさせているのか、冷静に見定めようとしていたザウルは、再び思考を停止させた。今度はセリアが自分の胸に抱きついてきたのだ。

「ザウル」

「セ、セリア殿……」

ザウルは驚きと動揺から息を呑み、どうしたらよいかと必死に考えを纏めようとするが、頬擦りしてくるセリアの所為で失敗してい

た。けれど、惚れた弱みとやらで、嬉しそうにしているセリアを無理に引きはがす事も出来ず、そのまま固まっていた。もういつそのまま受け入れてしまおうか、などという迷いも生じる。

そんな事をしていると幸か不幸か、後ろから新たな訪問者が現れた。その者の足音を聞いたザウルは、はっとして振り返る。

「……ラン」

「ザウル、どうし……っ!？」

温室の中から必死に何かを訴えるザウルの視線に、ランがどうしたのか、と状況を確認しようとしたが、その瞬間に固まった。目の前では、嬉しそうに身を寄せ合うザウルとセリア。実際は、セリアがザウルに一方的に抱きついていてただけなのだが、ランにはそうは見えなかった。一瞬理解が追いつかず、信じられない物を見るような目で二人を凝視していたが、セリアの次の言葉で更に目を見開く。

「ザウル、好き」

ランは大きな岩で頭を殴られたような感覚がした。目の前の光景と、たった今耳にした言葉の意味を理解する間もなく、心臓が早鐘を打ち始め、ズクンと驚掴みにされた様な痛みが走る。端正な顔が血の気を失い、フラリと蹣跚ければ、心配したようにザウルが声を掛けた。セリアがしがみついている所為で駆け寄る事は出来なかったが。

「ラン!？」

「……ラン……?」

ザウルの呼びかけにランが居る事を漸く知ったのか、セリアがゆっくりと視線を上げる。すると、またパチリと大きく瞬いた。

「ラン。貴方は本当に気品があって紳士的ね。私、貴方が好き」

「はっ!？」

ザウルの胸からスリリと抜け出したセリアは、今度はランの目の前へ来た。そしてそのまま胸の前で指を組み合わせ、うっとりとなんを見詰めるのだ。その場の二人にしてみれば、何が起こっているのか全く分からないだろう。そんな二人の様子に構う事なく、セリ

アは尚も熱の籠った視線でランを見詰める。

普段は決して見る事のない、セリアの乙女らしい表情を真っ正面から受け、ランも怯んだ。というより、心臓が再び揺れた。今度は別の理由で。そのまま無意識の内に手をセリアの赤に染まった頬へ持って行けば、まるで猫の様にすり寄って来る。なんだろうか、この言いしれぬ感動は。

けれどはっとする。つい先程聞いたセリアの言葉。それを確認するためさっと一歩下がった。すると、不安を覚えたのか、セリアが離れようとした手を反射的に握りしめたのだ。その行動にランの思考は完全に停止する。

「ラン、セリア殿の様子が……」

ザウルの、複雑なものを含んだ様な声にランの意識も現実に取り戻された。そこで漸く落ち着きを取り戻す。そうだ、セリアがこんな行動に出るのは可笑しい。そんな素振りを誰にも見せた事がなかったのだから、急にザウルや自分に好きだのなんだの言うなんて、あり得ない。

今までに感じた事の無い感覚に、つい酔いしれてしまったが、これではダメだ。とランはすっかりセリアの物になっていた己の手を引き離す。けれど、セリアが途端に不安そうに目を潤ませたので動きを止めた。

「ラン、行かないで」

「うっ！」

なんだこれは。と頭を掻きむしりたくなるような状況だが、それでもランは気持ちを鎮めようと懸命に努力した。しかし、それも無駄に終わる。再び距離を詰められて、ギュッと腕を掴まれてしまった。まるで、子供が駄々を捏ねるように見詰められては、ランもその手を振り払えない。

そのままどうしようか、と固まっていると、後ろから誰もが恐れる魔人の声が響いた。

「さっさと離れろ」

思考が停止している所に、唐突に声が聞こえれば普通の人間ならば驚くだろう。けれど、ランは違った。カールの声が聞こえた途端、条件反射で頭が急激に冷え、声の主を判別する間もなく後ろを強い視線で振り返った。そして一瞬の後、ダークブロンドとプラチナブロンドの青年の間で火花が燃える。

「ああ、やっぱりこうなってたか」

「本当に、カール達の言ってた通りだね」

カールの後から入って来たイアンとルネが見たのは、嬉しそうにランの腕にすり寄るセリア。

「セリア。とにかく座って」

ルネが顔を覗かせた途端、大きく瞬いてまた好きだ、と迫るセリアを、ザウルとランは信じられないものを見る様な目で追う。けれど、ルネはセリアの異変を既に知っていたようで、笑顔を絶やさずセリアに席を進めた。

「いったい、どうなっているんだ？」

「原因はこれらしい」

混乱を隠せないラン達に、カールがそう言って差し出したのは白い小箱。その中には、甘い香りを漂わせる茶色の物体がちんまりと陳列している。

「これは……？」

「校長と共にこの菓子を食べたらしい」

「なぜ、ただの菓子で？まさか、校長も同じ状態に……？」

もし、校長がセリアと同じように目に映った異性全てに好きだと言って迫っていたら、それはそれで大問題になっているのではないだろうか。けれどランの心配を他所に、カールは首を横に振った。

「あちらはなんともない。原因は恐らくアルコールだな」

「アルコール……？」

チョコレートにはかなり度数の高い酒が使用されたく、大人でも一口で軽く酔う程だとか。それで、恋に落ちる菓子、だという



宣伝文句を使っていたのだ。確かに、人は酔うと普段ではあり得ない行動を起こす者も中には居るようで、セリアがそのいい例である。「つまり、セリア殿は、酒に酔われたと……？」

確認するように言ったザウルの言葉の先では、ルネをうっとりとし見詰めるセリアの姿。これは、一種の酒乱なのだろう。なんて質の悪い酔い方をする女だ、と候補生達は大きく息を吐いた。

とにかく、セリアをこのままにしておく訳にもいかない。寮の自室か、医務室でさっさと寝かせた方がいいだろう。起きた時には、酔いも醒めているだろうし。

そう思って候補生達は同時に動きを見せたのだが、それとほぼ同時に静止した。

「っ？」

「おい」

「なんだ、この手は」

「セリア殿は自分が」

四人がお互いの腕を掴んで、揃って動きを固定したのだ。瞬間、お互いを強い視線で見据える候補生同士の間で火花が散った。

「俺が寮に連れて行く」

「それは私に任せてもらう」

「セリア殿は自分がお送りします」

「貴様等の好きにさせると思うか」

このままセリアを放っておくことも出来ず、かといって、今の状態のセリアと他の奴を二人っきりにするのは面白くない。というより、とんでもない。全員が少なくとも一度はセリアの熱い言葉を聞いてしまっているため、その威力は十分理解している。それを、たとえ仲間であっても、（ある意味）敵でもあるコイツ等に任せられるか。と互いに睨み合っているのである。

動くに動けない状態を、ルネは少し遠い所から傍観していた。その隣では、セリアがニコニコと上機嫌で大人しく座っている。ちょっと頭を撫でてやれば、それは気持ち良さそうに目を細めるので、まるで猫が横に座っているような気分だ。

遠くで言い争っている友人達に、自分がセリアを連れて行くのか、と提案するべきか迷う。ああやって珍しく国政についての議論以外で言い争う友人達を見るのも面白いのだが、少し心配だ。それに、こうしている間にも、セリアの瞼がトロンと下がって来ている。やはり酔っているのだろう、眠気には抗えないようだ。

「セリア、大丈夫？」

「……ル、ネ……？」

笑いながら、まるで寝言の様に自分の名を呼ぶセリアは、もう殆ど夢の世界に片足を突っ込んでいる状態なのだろう。起きている時は散々好き勝手して、その後はさっさと寝てしまおうとは、最早ただの酔っぱらいである。このままここで寝かせるのも戸惑われるが、なにせ目の前で繰り広げられる舌戦が納まりそうにない。

どうしたものか、と悩んでいると、その横で今まで微睡んでいた筈のセリアがフラリと立ち上がった。慌てて視線を映すと、セリアが向かったのは直ぐ傍のテーブル。そして目に留まるのはその上に何時の間にか置かれていた小さな白い小箱。そしてルネの静止の声も空しく、セリアは箱の中身に手を伸ばした。正常な判断が下せないセリアは、フワリと漂った甘い香りに惹かれ、深く考える事なく菓子の一つを口に放り込んだのだ。

これには目の前で言い争いを繰り広げていた候補生達もギョツとしたように目を見開く。濃厚で甘いチョコレートをゆっくり飲み込み、顔を上げたセリアを見て候補生達も頬を引き攣らせた。今度は、完全に瞳が据わっているのだ。眼光を鋭くしたセリアがズカズカと候補生達に歩み寄ると、一番近くに居たザウルの腕を掴み、グイッと引き寄せた。

「ザウルは私の愛が受け入れられないの？」

「は、はあ!？」

「私はこんなに愛しているのに、貴女は私を捨てるといふのね」

「セ、セリア殿。お、落ち着いてください!」

常に冷静を保ってきたザウルも、これには言葉を無くした。けれどそんな事おかまい無しに、セリアはジワリと瞳を潤ませ、自分の想いが届かない(と思っている)事に対する不満を解消させるべく、ギアギアと騒ぎ出したのだ。その後も、カールの愛情が感じられないだの、ランの心を独り占め出来ないだの、イアンと愛の逃避行をしたいだの。いったい何処で覚えて来たんだ、と聞きたくなる様な言葉を連発しながら、温室内をバタバタと暴れまわった。

その後、それがいかなる形であっても、どんなに少量であっても、セリアには絶対に酒を与えるな、という暗黙の了解が候補生達の間で生まれたらしい。

温室内での騒動がなんとか落ち着き、今セリアは寮の自室でぐっすり寝ている筈である。自分達に愛を語りながら騒ぐセリアの姿を思い出し、男子寮の自室で一人、明かりも付けずにベッドに横になっているイアンはクツと喉の奥で笑ってしまった。

さすがにあの時は戸惑ったが、今までに見た事が無いセリアの姿に、多少の優越感を覚えたのも事実。酒に酔った上での意味の無いものでも、あのセリアから甘い言葉を聞けたのだ。脳に直接響くような言葉に、酔わされたのはこちらかもしれない。

もう一度、脳内で可愛い想い人の姿を思い起こそうとする。と、ふいに脳を過ったのは別の光景。そこに見たのは、自分の腕をスルリと抜け、カールの元へ行ってしまったセリアの流れる栗毛。

瞬間、ドクンと心臓が大きく脈打った。はっとして目を開けると、また目に映るのは、自分にしたのと同じようにザウルやランにも熱い視線と言葉を向ける少女の姿。

途端に意味の分からない感情が込み上げて来て、思わずグツと拳に入った力に気付いた。驚いてその手を解くと、手の平に残った爪の後。指の数だけくつきりと残った血の滲んだ後を、赤みがかった瞳が凝視する。ピリツと走る痛みの意味を理解出来ず、イアンは思わず疑問を洩らした。

なんだ、これは

手の平から無理やり視線を外し、背筋を流れる嫌な汗の感触を誤魔化した後に一度大きく息を吐く。

セリアの行動は酔っていた上での物なのだから、そこに何か意味がある訳ではない。それは彼等も全員が承知の事である。それでもセリアに惚れてしまっているのだから、彼女が他の男にあの様に靡けば多少嫉妬するのも仕方ないだろう。

けれど、今、一瞬胸を過った気持ちはなんだったのだろうか。嫉妬とは違う。もっと根深く、強いものだった。

幾ら考えても答えの見えない疑問を、頭を振って追い出す。自分達は仲間であり、同じ様にセリアに惚れているのだ。互いが恋敵であることは知っているし、彼等だからこそ納得も出来る。嫉妬したり、横槍を入れたり、そういった事は覚悟の上だ。その事は十分理解しているのだから、そこに邪心が入る必要は無い筈である。

だから、脳を掠めた未知の感情は、只の気のせいだ。

そう自分に言い聞かせると、イアンは全ての思考を遮断させるように半ば強引に目を閉じた。

## 妙薬 2 (後書き)

どこで間違えたのか分からねえ。何が擦れ違ってるのかも。引き返す事は出来ねえのに、アイツは来ちまった。

そろそろ、潮時ってやつなのかな。腹を括れてことか。

でも、まだ両方を望んでる俺は、自分勝手なのか？

## 確執 1

酒乱騒動が起こった数日後、セリアは再び校長室に招かれていた。また校長室に行くと言ったら、候補生達は顔を引き攣らせていたが、けれど、この学園の最高権力者に逆らえる筈もなく、渋々セリアを送り出した。

ちなみに、先日何が起こったかは綺麗さっぱり思い出せないセリアだったが、候補生達が何故か疲れ切った顔をしていた事だけはよく覚えている。

「セリア君。よく来てくれたね」

見るからに上機嫌の校長は、先程から気味が悪い程こちらをニコニコと見詰めて来る。

「あの、どういったご用件でしょうか？」

「うん。実はね、昨日漸く君の馬が届いてね」

「はっ!？」

「マリオス候補生への寄贈馬だよ」

マリオス候補生に選ばれた者には、学園から記念として一人ずつ馬が寄贈される。ラン達候補生も一頭ずつ贈られていたな、とセリアも思い出した。幾らセリアが女性だといっても、れっきとしたマリオス候補生には違いない。当然、馬も贈られる訳で、それがやっと思いたということだ。

以前、候補生達に誘われ遠乗りへ出向いた時は、セリアに騎乗の許可が下りていなかった為、カールと相乗りという形だった。その時の、後ろから降る背が凍る様な視線を思い出しセリアは青ざめる。他の女生徒が聞けば、何を贅沢言っているんだ、とたちまち怒声が飛んできそうな話だ。そうは言ってもやはり相乗りはどうしても慣れないため、あれから彼等と遠乗りに出掛けた事は殆ど無い。

けれど、これからはそんな思いをしなくても済むのだ。マリオス候補生に寄贈された馬は、当人ならば何時でも乗り回して良いとき

れているのだから。

「気が荒いって言われてるんだけど、セリアちゃんなら大丈夫よね」  
「なにしろ、競技会の時はあの立派な馬を見事に操っていたからね」  
競技会の場でセリアが咄嗟に飛び乗った馬も、かなりしっかりとした体躯を持っていた。しかも、飛び乗るなんて乱暴な真似をすれば馬が暴れて振り落とされるくらいの事になっても文句など言えない。にも拘らず、セリアは臆する事無く、軽々と乗りこなして見せたのだ。それならばどんな馬でも乗りこなせるだろう、と校長は上機嫌で寄贈馬の選出にかかったらしい。

「今日の授業が終わったら、是非厩舎に行ってみてくれ」

「はい」

話が終わると、セリアもその日の授業を受けるべく校長室を出た。その姿を中の二人が温かく見送る。本来ならクルーセルもここで同じ教室に向かうべきなのだが、相変わらずソファで寛いでいたのは、言うまでもないだろう。

授業の終わりを告げる鐘が鳴ると、セリアは言われた通り厩舎へ向かった。折角寄贈された馬なのだし、慣れる為に遠出でもしないか、と候補生達に誘われたのだ。

まだ新しい場所に慣れていないだろう馬に、大勢で詰め寄っては驚かせてしまうから、とイアン達は少し後に来る事になっている。校長も気が荒いと言っていたし、彼等が来るまでに少しでも懐いて貰えればよいが。

授業の緊張も解けたその足で、セリアはのんびりと厩舎を目指す。マリオス候補生一人一人に馬を寄贈するとは、本当にこの学園の懐は広いらしいな、と感心していると、突然厩舎から大きな馬の嘶きが聞こえたので驚く。その音に焦り、セリアが厩舎へ慌てて入ってみると、中の光景に目を見開いた。青毛の立派な馬の鼻を、見た

事の無い青年が落ち着かせるようにゆっくりと撫でているのだ。青年は学園の制服ではなく私服を着ているので、恐らく生徒ではないのだろう。

慌てて入って来た栗毛の地味な少女に気付いた黒髪の青年は、驚いたように一瞬目を見開いたが直ぐにニコリと微笑んだ。

「申し訳ない。どうも俺が来た事に驚いてしまったみたいだね」

そう言ってポンポン、と今でも鼻息を荒くしている馬の鼻を軽く撫で宥める。それを見てセリアはおや、と引っ掛かりを覚えた。どうもこの青年に以前会った事があるような気がしてならないのだが、それが何処か思い出せない。

セリアが必死に記憶を探っていると、また再び栗毛の馬が暴れ出した。それを青年は手綱を引いて落ち着かせようとする。

「どうも興奮してるみたいだな。俺が気に入らないのか？」

「あ、それは多分、この場所にまだ慣れてない所為だと思いますよ」  
見事な栗毛と立派な体躯の馬は校長によってヴァーゴと名付けられた。カールへの寄贈馬、アルセウスにも引けを取らないのでは、と思う程の威圧を備えたこの馬は、これからセリアのみが乗ることを許されるのだ。といっても、小柄なセリアには不釣り合いなのは、と思える程馬の体躯は立派である。けれど、人並みよりも乗馬の腕があるセリアなので、問題は無いだろう。

青年とセリアが懸命に宥めたので、ヴァーゴも多少落ち着きを取り戻したようである。とくに、セリアには鼻を摺り寄せる程までに懐いてくれた。気位の高いアルセウスもが直ぐに受け入れた所を見ると、もしかすると馬に好かれる体質なのかもしれない。本人は全く気付いていないようだが。

後ろの方からは、新参者を歓迎しているのか、追いつきそうと躍起になっているのか、はたまたセリアに構って貰えない事に対する不満を表しているのか、アルセウスやヘルメスなど、候補生への寄贈馬達の足踏みが聞こえる。その所為で、ヴァーゴの気を鎮めるまで更に時間が掛かってしまったが。



「あ、ありがとうございます」

「いや。俺が驚かせたみたいだから。それより、君はフロース学園の生徒だよ」

「あ、はい。セリア・ベアリットと申します」

「俺はアルフレド。実は人に会うために来たんだけど、学園が広くて迷ってたんだ」

アルフレドの言葉にセリアも納得する。確かに、この学園は広い。広過ぎると言ってもいい。外からの来客など、一発で迷ってしまうだろう。自分も初めの頃は何度も迷いそうになったものだ。とセリアはあまり思い出したくない記憶を懐かしんだ。

「君には悪いんだけど、よければ案内を頼めないかな？」

「私、ですか？」

アルフレドが心底困ったように頼んで来たので、思ってもみなかった事態にセリアは咄嗟に言葉に詰まった。けれど、直ぐに承諾する。

候補生達が来る前に、少しでもヴァーゴを乗り回す積もりだったのだが、後に回そう。案内の後に戻ってくれば十分間に合うのだから、と快く了承した。それを聞いてアルフレドも助かった、と安堵したように肩を下ろす。

「それで、どちらまで案内しましょう？」

「俺もよく知ってる訳じゃないんだけど、マリオス候補生達が居る場所って分かるかな？」

「マリオス候補生……ですか？」

アルフレドの言葉にセリアは一瞬首を傾げた。会いたい人物が居ると言っていたが、マリオス候補生の誰かなのだろうか。だとしたら、温室に行けば会える筈だ。

セリアは、心得た、とばかりにアルフレドを連れて温室へ向かった。それにしても、やはり何処かで見た事があるような気がするのがどうにも引っ掛かったのだが。

「セリア、大丈夫かな？」

「心配ないだろ。俺達が行っても、逆に興奮させちまうかもしれないしな」

厩舎に居るだろうセリアの姿を想像しながら、候補生達は温室でのんびりと時間を潰していた。

「しかし、あまり一人にさせるのも不安だ。我々もそろそろ行っただ方が、」

「あの……」

此処には居ないと思っていた人物の声が聞こえ、ランも咄嗟に言葉を読み込んだ。声のした方へ目を向ければ、ゆっくりと顔を覗かせながら温室へ入って来る栗毛の地味な少女。てっきり、今頃は厩舎に居ると思っていたのだが。

「どうしたんだ、セリア？」

「それが、お客さんみたいで」

「……？」

そう言っただけでセリアが外の人物を中へ入るよう促すと、アルフレドが顔を覗かせた。その途端、候補生達は目を見開く。そして一瞬で今までに無い程の警戒心と緊張感が温室を走った。

ピンと張り詰めた空気に、セリアも反射的に身を固くする。急な事に戸惑いを隠せず、オロオロと視線を彷徨わせた。いったい、どうしたのだろうか。

「……アルフレド」

「久しぶりだね。本当に、この学園の構造は分かり難い。彼女に案内してもらえて助かったよ」

ゾクリ、と背筋が凍る様な声にセリアは驚いた。この温室に入っ

た途端、アルフレドが纏う空気が変わったのだ。先程までの、濃厚  
そうな雰囲気とは真逆の、何か冷たいモノを含んでいるような声だ。  
ニヤリと笑ってセリアに視線を移したアルフレドに、チツとイア  
ンが小さく舌打ちすると、固まっているセリアの腕を強く引いた。  
そのまま小さな体を背中に隠すように後ろに押し込め、改めてアル  
フレドと対峙する。

「あの、お知り合いですか……？」

なんだかただならぬ空気だが、完全に状況が読めないためセリア  
は取り敢えずイアンに聞いてみた。

「……俺の、弟だ」

「弟？」

セリアは一瞬目を見開いてもう一度アルフレドの顔を確認した。  
そこで漸く気付く。言われてみれば、確かにイアンと顔の造形が似  
ている。瞳の色も、同じ赤色ではないか。アルフレドを見たことが  
あると感じたのはその所為か、とセリアは納得した。けれど、それ  
と同時にセリアは違和感を覚える。兄弟だ、と言っている二人の間  
に流れる身内とは思えない程の、嫌な緊張感。これは、自分も良く  
知っている類のモノだ。

「そう警戒しないでくれますか兄さん。俺は別にアナタの友人にま  
で危害を加える気はありませんよ」

「……………」

「まあ、興味はあったんですけどね。マリオス候補生に選ばれた者  
が、どれほどの才女か。見た目が地味だったので、名前を聞くまで  
まさか彼女だとは思いませんでしたけどね」

「わざわざそんな事を言いに来たのか？」

イアンから感じるこの緊張は、自分が、母と対峙している時に感  
じるものと同じ。決して、気を抜けない相手を前にした時のものだ。  
相手が何をしてくるか分からない、けれど、こちらからは絶対に一  
歩も動けない時の。

「まさか。兄さんに会いに来たに決まってるじゃないですか」

「……………」

そう言って再びニヤリと笑ったアルフレドに、候補生達も警戒を強める。その様子を、セリアは呆然と眺めていた。というより、アルフレドの変貌ぶりに心底驚いていたのだ。

後ろに隠したセリアの腕を掴む腕にイアンがギュッと力を入れると、アルフレドもフツと笑う。

「折角なんで、俺は学園内を散策してきますよ。じゃあ、またあとで」

「待て！」

温室を出ようと背を向けたアルフレドをイアンが呼び止めた。

「俺も行く」

「……へえ、嬉しいな。兄さんに大事な学園を案内してもらえるなんて」

クルリと首だけ振り返った状態でそれだけ言うと、更に笑みを深くしたアルフレドは静かに温室を出て行った。その後を、候補生達の刺す様な視線が追う。アルフレドの姿が完全に見えなくなると、その場に張り詰めていた緊張が一気に和らいだ。けれど、妙な警戒心が漂うその状態に、セリアは困惑する。

「セリア、悪かったな。……まあ、あんまり気にしないでくれ」

「……うん」

気にするな、と言われても難しいのだが、イアンがあまりにも必死な表情だったのでセリアはゆっくりと頷いた。気にならない事は無いが、あまり込み入った事情を聞く積もりはない。

セリアが頷いたのを見ると、イアンも慌ててアルフレドを追った。案内などと言ってはいるが、イアンが監視の意味でアルフレドに付いて行ったのは明確だ。アルフレドから少しでも目を離すという選択肢は、彼の中には無いらしい。

悠々と前を歩いていたアルフレドに追い付くと、その腕をイアン

はグッと掴んだ。動かしていた足を止め、ゆっくりと振り返ると、眉間に皺を寄せた兄の瞳が真剣にこちらを見据えている。その様子にアルフレドは臆する様子も見せず、むしろ楽しそうに喉の奥で笑った。

「アイツには何もするな」

「珍しいね。兄さんがそんな風に言うなんて。マリオス候補生に選ばれただけあって、随分と周りに気に入られてるんだ？」

「候補生かどうかは関係ない。いいか。アイツには絶対に手を出すな」

「ふうん。まあ、考えておくよ」

本気の力で掴まれた腕が痛いので、アルフレドは適当にそう返す。イアンの腕を振り払うとアルフレドは何も無かったかのように歩き出した。

地位を除けばなんてことないただの娘を、ここまで気にかけているのだ。兄には元々お人好しの傾向はあったし、周りの人間に自分を近づけたがらない姿勢も分からないでもない。けれど、こんな風に誰か個人をかばい立てしたのは、あの候補生達以来であった。なんてことない一人の少女に、増々興味をそそられる。

感心した様に頷くアルフレドの背から注意を逸らすことなく、イアンはその後ろを歩いて行った。

イアンとアルフレドが温室を出て行ってから随分と時間が経つ。その後、もう一度厩舎へ行く気にはなれず、セリアもイアンが帰ってくるのでは、と期待して温室で待っていたのだ。が、結局夕食時になってもイアン達が帰って来る気配はない。待つ事を諦め、今は食堂へ行く前に鞆を置こうと寮の自室へ戻って来た所だ。

何があったのかは知らないが、少なくともあの二人が仲のいい兄

弟でない事は分かった。アルフレドから感じた、イアンに対する挑発的な態度は、確実にセリアにも伝わって来たのだ。それにイアンも随分と警戒していたようである。普段ならば世話好きで、他人思いのイアンとは思えない程に。

セリアが難しい顔をしながらも食堂へ向かっていると、その肩をポンと軽く叩かれた。驚いて振り返ると、そこにはまさに今思考を占めていた人物、アルフレドがこちらに笑みを向けている。けれど、最初に会った時のような、爽やかな笑みではなく、何かを企んだような。

「さつきはどうも。実は君に話したい事があるんだけど」

「わ、私、ですか……？」

言われてセリアは非常に困惑した。

彼が自分に何の用だろう。考えても全く心当たりが無い。けれど、話があると言われてしまえば、無下に断るのもどうかというもの。セリアが静かに頷くと、アルフレドはニッコリと笑ってそのまま歩き出した。その後ろを、セリアも慌てて付いて行く。

「あの、何処へ？」

「あんまり人に聞かれない話じゃないんでね。俺は構わないけど、兄さんは困るんじゃないかな」

「……………」

明らかに何かを含んだ様な物言いに、セリアも眉を顰めた。けれど、アルフレドはそれに構わず足を進める。はたして、その背に付いていてもよいものだろうか。と一瞬悩むが、今更引き返す事も憚られたため、セリアは大人しくその後を追った。

そうしてアルフレドが足を向けた先は、学園内の林の一角。辺りは段々と暗くなって来ているので、なんだか不気味にすら見える。

「何も聞かないんだね」

「はっ!？」

「普通のお嬢様なら、他人の噂話とか事情とかに興味湧くんじゃない？」

「……誰でも、そういう込み入った事は、やはり知られたくないと思うのですが」

いきなり何を言い出すんだろう、とセリアは首を傾げる。イアンの事は気になるが、それは彼が友人として心配だからであって、興味や好奇心からではない。たとえここでアルフレドから話そうか、と言われても本人の居ない場所で勝手に詮索するような事は、出来ればしたくなかった。

「へえ。やっぱり普通とは少し違うんだな」

ジロジロと上から下まで品定めするように見て来るアルフレドの視線に居心地悪くなってセリアは一步下がった。それに構わず、アルフレドは興味深げにセリアに視線を留める。噂話もしないなんて、増々年頃の娘らしくはない。マリオス候補生になろう、なんて言う時点で娘らしさに欠ける部分があるだろう事は予想していたが。そもそも、厩舎なんか一人で来る所からして、普通の娘とは言えないだろう。深窓の令嬢は、野原を駆けたり、悠然と立つ立派な馬に興味はあっても、土や埃で汚れた厩舎なんかには行かない。

「それで、お話し、というのはなんでしょうか？」

「うん。兄さんの事でね。どう？上手くいってる？」

「はあ？」

アルフレドの言葉にセリアは思い切り混乱した。自分は何を聞かれたのだろう、ともう一度その言葉を思い起こしてみるが、全く理解出来ない。

セリアが首を傾げる様子に、アルフレドは増々楽しそうに口の端を吊り上げた。

「ふうん。そういうことか。じゃあ質問を変えるよ。兄さんとは仲良いの？」

「えっと、友人としては多分仲がいい方なのではないかと……」  
少なくとも、ランとカールの様に顔を会わせる度に仲違いはしないし。とセリアは心の内で付け足した。

セリアの答えに、先程まで楽しそうにしていた筈のアルフレドが

一瞬顔を歪める。それにセリアが気付く間もなく、静かな声が響いた。

「面白くないな」

「はっ!？」

先程よりも一層低い声で言われセリアは思わず聞き返した。けれど、そんな事気にした様子は見せずアルフレドは続ける。

「本当に聞きたくない？ 兄さんがどうしてあんなに警戒するのか」

「で、ですから、それは個人的なことで、当人の居ない場所でお話しする事ではないと思う訳でして」

ランの時とは明らかに状況が違う。彼の言葉から、アルフレドがイアンの事を思っただけで行動しているとは思え難たい。ならば、ここで不用意に深入りする事は憚られた。

話はそれだけか、と確認するとセリアは踵を返して立ち去ろうとする。あまり長居する必要もないし、出来れば彼の自分に向けられる、敵視のような物からも逃れたかった。そう思って足を踏み出すと、急に別の力によって腕が後ろへ引かれた。慌てて振り返ると、逃すまいとするように己の腕を捕らえたアルフレドが、こちらを見据えている。そして次に吐き出された言葉は、セリアの背をゾッと凍らせた。

「それは、俺が兄さんを殺そうとしたからだって聞いても？」

「っ!？」

はつきりと聞き取れたアルフレドの言葉にセリアは目を見開いた。殺そうとした、だど!？それは一体どういう意味だ。もし言葉通りだとするのなら、一体何故。幾ら憎くても、二人の間にどんな仲違いが起きようと、家族を、兄弟を手にかけてやろうとするだろうか。

混乱と動揺でセリアが動けないでいると、背後から荒らしく草を踏む音が聞こえた。

「何してる!？」

「……へえ。思ったより早かったね。そんなに大事？」

走って来た勢いのまま、イアンはセリアとアルフレドの間に入る



と、セリアを自分の後ろに押し込め、怒りの籠った目つきで目の前の弟を見据える。その兄の姿に、アルフレドは更に好奇心をくすぐられた。自分が何をしようと、ここまで感情を露に怒鳴る事は滅多になかったのに。

「言った筈だぞ。コイツには関わるな!」

「別に俺は了承した覚えはないけど、まあいいや。今日はこれで帰るよ。学園都市に泊まるつもりだから、また明日宜しく頼むね」

それだけ言うと、アルフレドはイアンの言葉を待つでもなく、セリアに目もくれず、そのまま林から出て行ってしまった。ヒラヒラと手を振るその姿を見送ると、セリアもはっと気付く。アルフレドはイアンを殺害しようとしたと言った。その真相がどうであろうと、自分は彼等の事情に不用意に立ち入ってしまったのではないだろうか。

サツと顔を青くしていると、イアンが膝を折って目線を合わせて来たので視線を上げた。焦った様な、必死の表情にセリアも我に返る。

「セリア、何処も怪我不いか?」

「うん。大丈夫」

「本当だな?何かされたか?」

「なにもないよ。平気」

何度も同じ質問をしてくるイアンに、セリアも一つずつ返す。暫く同じ事を繰り返し替えて漸く安心したのか、イアンは張り詰めていた緊張を抜くと唐突にセリアの腕を引き、その身体を引き寄せた。急な事にセリアが驚いて目を見開いていると、イアンの体がフラリと蹣跚き、後ろにあった木の下に座り込んだ。セリアも抱きしめられたままなので当然一緒に崩れ落ちる。

「ひえっ!?!」

年頃の娘ならキャーとか言ってそのまま凭れ掛かるのだろうが、セリアは今更ながらあり得ない程近いイアンとの距離に慌て始めた。木に背を預けるイアンから、なんとか離れようと身を振らせるのだ

が、動けば廻された腕に更に力を込められて余計に密着してしまう。ちよつとこれは本気でまずいのでは、とセリアは青ざめたのだが、イアンはそれに構う事なく小さく呟く。

「悪い、少しだけ……」

「へっ!?!」

聞いたことのないような縋るような声に、セリアもどうしたらいいか分からず抵抗を止めたが、それでもイアンは解放してはくれず、そのまま二人で暫くそこに座り込んだままだった。

## 確執 1 (後書き)

他人の事情に、必要以上に干渉する事は出来ない。私に出来るのは、彼を横から支え、見守る事だけだ。それがどんなに心苦しくとも、それ以上の行為は彼の意に反する。これは彼等の問題であって、我々が口出しをするべきではないのだから。

けれど、イアンは私達の大切な友人だ。彼の望まないような事態は引き起こしたくない。だから、彼女と彼を不用意に近づける訳にはいかないんだ。

## 確執 2

木に持たれたまま暫く動かなかったイアンだが、時間が経ち満足したのか、先程漸くセリアを解放した。けれど、そのままイアンは動こうとはせず、セリアもそんなイアンを残して寮に戻る気にもなれず、今は二人で芝生の上に寝転びながら星を眺めている。

「殺そうとしたっていつでも、子供の頃の話なんだ」

「……そう、なんだ」

アルフレドの言葉は本当だったのか。とセリアは戸惑いを隠せなかった。弱々しい声に乗せられた言葉に、セリアは頷く以外の反応を返せない。

「昔は、あんなじゃなかった」

「……………」

「小さい頃はさ、二人でよく遊んだんだ。歳も一つ違いだし、毎日一緒に悪さしてさ」

イアンが洩らす声は弱々しく、静かな夜でなければ聞き取れなかっただろう。セリアはそれを黙ったまま聞く。木々の間から見える星空に、イアンは昔の少年時代を映しているのか、スツと目を細めた。

自分の後を付いて回る姿が、可愛い弟だった。自分が何をするにしても、直ぐに真似をしようとする様は、今でも覚えている。何に対しても懸命で、いつも影で努力していた事を、自分だけは知っていた。そして、その度に自分に勝負を挑んでくるのだ。

可愛がっていた積もりだし、懷かれていると思っていた。

「家の近くの木の上にカササギの巣を見付けてさ。それを教えてやると、凄く喜んで二人でいつも覗きに行った」

嬉しそうに出かけて行く自分を見付け、どうしたのか、と聞いてきたので教えてやったのだ。その巢に鳥が居ないか、と毎日登っては確認した。まるで、初めて見付けた宝物の様に自分はそれに夢中になったのである。とくに、二人で覗きに行った時は、弟が木に登るのが危なっかしくて、よく手助けしてやった。

一緒に遊んで、一緒に笑って、二人とも外で遊ぶのが好きだったから、いつも隣に居た。その頃は、本当に楽しかったのだ。

けれど、それは突然、何の前触れも無しに壊れた。

「俺が九つで、アルフレドが八つの時だったな」

近くの湖へ遊びに行った時だった。まだ日差しが暑い頃、自分は大人達の目を盗んでボートに乗り込んだ。昔から悪戯が好きで、大人達が焦る姿を見ては喜んだものだ。だからその時も、ほんの遊び心だったのだ。岸から離れた所で、自分を見付けて驚く大人達を眺めるという寸法。ボートなら何度も乗っているし、平気だろうと得意げに計画を実行に移したのを覚えている。その後ろからは、当然の様にアルフレドが付いて来た。

自分が漕ぐボートを大人達が見付けた時、自分は悪戯が成功した時の優越感に浸っていた。だから、後に居た影が動いた事に気付かなかったのだ。いや、気付いていたとしても、その影が自分を湖に突き飛ばすなど、想像もしなかっただろう。だから、自分の身体は簡単にボートの外へ飛び出していった。

突然の事に、例えば今はマリオス候補生になるほど優秀といっても、十にも満たない子供が反応出来る筈もなく。投げ出された衝撃に、自分は水中でもがく事もままならなかった。水は肺に入り込み、重くなった体が深く湖に沈んでいく。激しい水音に気付いた大人が居なければ、ちっぽけな自分は確実に溺れていただろう。幸い水を飲んだ程度で特に怪我もなかったが、それでも大事になったことは言うまでもない。

助け出され、何があったと聞かれた時、自分は応えられなかった。

自分でもよく分かっていなかったのだ。あの時、誰かに後ろから突き飛ばされた事だけは理解していた。けれど、それが出来たのはボートと一緒に乗っていた弟のみ。けれど、それが信じられなかった。水の中から見えた気がした、弟の冷めた、見下すような目を、自分は信じたくなかったのだ。

何も言葉を発さない自分と同様に、弟も何も言わなかった。当然、大人達は自分が誤って湖に落ちたものと判断し、その後は勝手にボートを盗んだ事に大目玉を食らった。父には叱責され、母を心配の余り泣かせてしまった。けれど、自分にとってそれらは些細な事ではなく、横でジッと佇む弟に全神経を向ける事に必死になっていた。

それを境に、弟は確実に自分から距離を置くようになった。

「その時は、まさかと思ったさ」

理解力が追い付かない頭が、漸く現実を受け止めたのは、もう一度カササギの巣を訪れた時だった。弟をここに連れてくれば関係が修復出来るのでは、と希望を胸にしながら一人で木に登った先に、あると思っていたものは、無かった。変わりに置かれていたのは、無惨に引きちぎられた枯れ草や、粉々に折られた木の枝の集まり。アルフレドだと思った。それは確信であり、証拠だとかそういう論理的な言葉では説明出来なくとも、自分にはそれだけで十分だった。

それからは、全てが変わった。後ろに付いて来た弟の姿は無く、それと同時に自分の周りから色々な物が消えるようになった。自分が以前弟と共に興味を示したり、気に入っていた物は、殆どが壊れるか、無くなるかした。

「でもな、俺にとってそんなのは大した事じゃなかったんだ」

自分にとって、気に入っていた玩具や、好きだった場所を壊されるのは、どうってことはなかった。それ以上に自分に喪失感を与えたのは、いつも後ろを付いて来た弟の姿が消えた事だったから。

自分がフローズ学園へ入学すると、弟はまるで離れる様に遠くの

州の学園へ入ると言い出した。突然だったが誰も疑問は抱かず、すんなりと事は決まった。

アルフレドとの間に距離が出来る事に一瞬安堵するも、唯一心残りだったのは、二人の関係をそのままにしてしまうこと。とはいっても、その頃には、自分の後ろを付いて回っていた弟の影も薄れ、記憶の端に残る程度になってしまっていた。何年も居て居ないかのような振る舞いをお互い貫いて来たのだ。今更、離れる事に抵抗などなかった。

「二年くらい経って、アルフレドが学園に来た時は、本当に驚いた」あれ程自分を視界に入れる事さえ嫌がっていた弟が、突然自分を尋ねてフロース学園まで来たのだ。驚いたが、それよりも胸に喜びが走った。もしかしたら、出来てしまった溝を少しでも埋めるきっかけになるかもしれないと思った。

けれど、その期待は打ち碎かれるのだ。

自分が友人を紹介すると、弟は一瞬、あの見下げた様な視線を投げた。それに違和感を覚えたものの、気付かぬふりをした。

三日後、ルネに遠回しに聞かれた。自分と弟との関係を。何があったのかは教えてはくれなかったが、その瞬間、アルフレドが何を目的としてフロース学園まで来たかを理解した。それと同時に、弟と昔の様な関係を築くことは、絶望的だと突きつけられた。

「俺には分からない。何でこうなっちまったのか。本当に分からないんだ」

「……………」

「それでも。どうしても、嫌いにはなれないんだ」

弟が自分を憎むなら、自分もアルフレドを憎んでしまえと思ったりもした。関係を元に戻したいなどという思いも、同時に捨ててしまえと。そうすれば、どれだけ楽だったか。

けれど、結局自分にそれは出来ない。何をされても、例え、本当にあの時アルフレドが自分を殺そうとしたのだとしても、自分には弟を嫌う事が出来ないのだ。

けれど、弟の矛先は、自分が何よりも守りたいと願った少女にまで向いた。腹の底から怒りが沸き上がり、もう我慢も限界だと、これ以上は許せるかと、叫んでやろうと思った。けれど、自分の胸の内を幾ら探したところで、嫌悪感が見つからない。

「俺にとっては、やっぱり弟なんだよ。たった一人の」

「……イアン」

「情けねえよな。未練がましく一人でぐずぐずしてさ」

自嘲気味に言うイアンを、セリアはジッと見詰めた。そして、控えめに声を発する。

「情けないことなんてない。家族だから、何があっても嫌いになったりは出来ないよ。一緒に過ごした時間があるなら尚更」

「……………」

自分も同じだった。あれだけ露骨に忌み嫌われているにも関わらず、母を嫌いにはなれない。逆らえないと言ったのもその所為だ。昔は、それこそ何度も歩み寄ろうとした。それも、何も知らない幼い頃から。それでも、未だに距離は開いたまま。それでも、相手が自分をどう思っているように、やはり少しでも不仲をどうにかできないかと望んでしまう。

だから、イアンが自分を情けないと思う必要は無いと、素直にそう思った。相手が家族であるなら、和解したいと望む気持ちは、きっと自分と同じなのだろう。

安心させるかのような優しい声に、イアンの中で今まで懸命に塞ぎ止めていた物が、声に変わり外に飛び出した。

「くそっ!!なんで、こうなっちゃうんだよ……」

悪態を吐くと、やるせなさど、再び突きつけられた現実、イアンは顔を隠す様に腕で覆った。横で心配そうにこちらを見る少女に、目の端から込み上げるものを、見られたくなくて。ジッとこちらを



見詰める視線が、それに気付かない筈はないと、分かってはいても。

他の者が寝静まって暫く経った寮の一室で、イアンは一人項垂れていた。というより、自分が犯してしまった失態で、自己嫌悪に浸っているのだ。今、彼を落ち込ませているその失態とは、イアンの中では絶対にあり得ない過ちである。

「泣いてるとこ……見られた……」

ポツリと呟くと、その事実は再び現実味を帯びて襲いかかって来る。そしてイアンはもう一度頭を抱えた。

弟の事は、もう既に何年も戦って来た現実だ。今更、必要以上に悲観する事はしない。だから押し込めていた感情が溢れ出して、泣いてしまうなんて、あり得ない。ただあの時は、横にセリアが居る事で妙に心に隙が出来てしまつて、気持ちが込み上げて来てしまつたのだ。

男にとって、女に涙を見られるのは、これ以上無い程の恥だとイアンは思っている。

今まで、女に弱い部分を曝け出す事は、己のプライドが許さなかったのだ。そして涙こそ、弱さの全てを語ってしまう象徴である。女は守ってやるべき存在であり、頼られる事はあっても、頼る様な真似はすべきではないと。だからこそ、涙だけは絶対に見せるまいと。それは小さい頃から、いつの間にか染み付いていた意地にも似た感情であり、絶対に犯す事をしなかった自分の不可侵領域でもあった。

物心ついた頃から、母にすら泣きすがった事はない。それは、あ

る種の自信すら自分に与えていた。

別にプライド高い姿勢を自慢しようと思っているのではない。むしろ、そういう見栄や驕りおごりは好きではない。ただどうしても、女に涙を見られるという事に、異様なまでの恥辱を覚えるのだ。

それがどうだ。今日初めて、よりにもよって自分の想い人に、弱い自分の姿を見せてしまった。鉄壁だと思っていた壁が、初めてガラガラと崩された時の衝撃は想像以上で、思い出ただけで頭が痛くなる。どうしてあんな所であんな過ちを犯してしまったのだろうか、と自分を責めずにはいられない。弟の事で失意から涙を流した事ならあった。けれど、そのどれも他人に知られた事などなく、ましてやセリアに見られるなど、失態という他なかった。

絶対に取り抜いて来たものを崩された時。一度も他人を入れた事の無い領域に、不可抗力とはいえ、ズカズカと侵入者を踏み込ませてしまった時の精神的な脆さと言ったらない。その相手が嫌悪の対象になるのか、逆に好意の対象となるかでは大きな差がある。

とにかく、誰にも見せた事のない部分を曝け出したのだ。この時点で、イアンにしてみればもう後には引けない訳で、自分でも理解不能な感情が沸き上がって来て、妙な錯覚に陥って来る。

もう一度大きな溜め息を吐き出すと、イアンは全ての思考を停止させ、心身の疲労に身を任せるように目を閉じた。

「それでは、恐怖政治と何も変わりがないではないか!」

「貴様こそ、己の夢想で国を傾ける気か?」

授業が終わったにも関わらず、互いに意見をぶつけ合う二人に、その様を見ていた数名は溜め息を吐いた。睨み合う二つの視線の間

では、忙しくセリアが資料に目を落として、ズバズバと突っ込みを入れている。セリアに昨晚のことを深く追求してくる様子は見せなかったが、イアンにとってはある意味大事だったことに変わりはない。ランとカールの間にいるセリアの姿に、イアンは他とは別の意味で息を洩らした。

そんな事が続いていると、漸く満足したようで、議論を切り上げたカールが温室を出ようとする。けれど、対峙していたランとセリアはまだ納得いかないようでその姿を追って一緒に出て行ってしまった。

「イアン。聞きましたが、彼が来ていると……」

「ああ。まあ、そこまで心配することはねえと思うけどな」

「いえ……それより、貴女は平気なのですか？」

三人が去った温室でイアンがボンヤリしていると、見計らった様にザウルが声を掛けて来た。昨日はあの場に居なかったが、ルネからアルフレドの来訪を聞いたらしい。琥珀色の瞳が、心配そうに細められている。

眉を下げて自分を見る友人の肩を、イアンは大丈夫だ、と言うように軽く叩いた。

「今更だろ。気に病んだって仕方ねえさ」

「……イアン」

「悪かったな、気使わせちゃって」

「その様なことは……」

ザウルは目の前でなんでもない事のように友人を、改めて見た。幼い頃に出来た弟との間の溝を、彼が今でも気にしているのはよく知っている。けれどその弟が、兄から近い人間を遠ざけようとしている事も事実なのだ。だからといって、自分達に何が出来る訳ではない。だから、こうして心配をする以外出来ないのだ。

温室を出てからも、激しい言い合いにも似た議論を交わし、漸く三人の意見が纏まったところで、今度こそ論議は終了となった。その間は周りから好奇の視線がこれでもか、という程集まっていたのだが、セリア達は気付いてはいないようだ。気付いていたとしても、これといって何かをしようとは思わないのだろうか。

カールは今度こそ校舎へ一人で戻ってしまい、残された二人は揃って温室へ向かって歩いていった。その間も、先程宿敵が去り際に放った発言に対しての不満が残っているのか、ランが眉間に僅かな皺を寄せる。それを見てセリアも困ったように微笑んだ。

「ラン。そう怒らないでも……」

「必要の無い犠牲を出さない為に、我々が尽力するべきだ。結果が出せても、犠牲が大き過ぎては意味がない」

カールとランの考え方の根本的な違いはそこだ。そして、去り際にカールがランの思想を甘い、と批判したので彼のお怒りに触れてしまったのだ。それでなくとも、顔を合わせれば二人は途端に機嫌を悪くするのだが。

何故ここまで仲違いをしながらも、普段から行動を共にするのだろう。とセリアは改めて不思議に思う。お互いを仲間と認め合っている事は事実だが、視界に入ればそれだけで舌戦を繰り広げるような仲なのに。というより、毎回毎回同じ様な内容で言い争って、飽きないのだろうか。

まあだからといって、二人が離れれば良いと思っている訳ではなく、ただ疑問に思っただけなのだが。

「……噂の女性マリオス候補生様は、周りから随分好かれているようですね」

突然背中に投げ掛けられた声に、セリアとランは同時に振り向く。そうして捉えたのは、イアンによく似た風貌を持つ彼の弟。途端に警戒心を露にしたランと、いつの間にか背後に立たれた事に呆気に取られるセリア。

二人の視線を受け、アルフレドは大袈裟に傷ついたような顔をして見せた。

「酷いですね、ランスロットさん。そう目くじらを立てないでもいいんじゃないですか？」

「……すまない。こちらの非礼は詫びよう」

そう言っただけでランは、顔に出てしまっていた警戒心を胸の中に隠した。相手が誰であっても、あまりにも露骨に態度に出すには礼儀に欠いた行為だったと反省する。けれど、肩にかかる緊張感はそのままだに、じつと相手の行動を窺った。

「それよりも、先程の言葉。どういう意味だろうか？」

「別に、そのままですよ。頭の良い才女様は、その地味な容姿に似合わず、周りの男を魅了する力を持っているようです。と言っただけです」

まるで、それが理由で候補生に選ばれた、と言っている様な雰囲気とその言葉に、黙って聞いていたセリアも眉を上げた。なんだか、大いに勘違いをされているような発言だ。地味な容姿は否定しないが、それ以降の言葉はやはり納得出来ない。そう思って反論しようとしたが、それはランに止められてしまった。

「アルフレド。君の思っているような事実は、何一つとして無い。

彼女は、自分の実力で今の地位に就いたまでだ」

強く言っただけでランに、アルフレドは心底呆れた様に肩を落としてみせた。

「そうでしょうとも。でも、実力の中に、マリオスとは関係の無い才能も含まれているのでは？」

「あの！」

流石に言い返そうとセリアが口を開いたところで、腕をグツと後

ろに引かれた。喉まで声が出かかっていたセリアも、その力に驚いて言葉を止める。自分の腕を掴んだランを見上げると、こちらに向けられている碧眼。その眼差しが、何も言うな、と必死に訴えて来るので、セリアは仕方なく言葉を飲み込んだ。

変な誤解をされたままなのは好ましくないが、ランの方がアルフレドと、そしてイアンとも付き合いは長い。自分の知らない所で、複雑な事情が絡んでいる事も何となく分かっている。無闇に自分が先走って、更に事態を悪化させることは避けたい。ならば、ここはランの言う通りにおいておいた方が妥当だろう。

「根拠の無い言葉で他人を貶めようとする行為は、自らの品位を下げる事と同じだと思わないか？」

「……………」

「そしてなにより、彼女は私達の大切な友人だ。イアンも、君と彼女との間に蟠りが生じる事は望んでいない」

イアンの名を聞いた時、アルフレドの一瞬怯んだ姿を、セリアは見てしまった。ランは気付いていないようだが、セリアはそれに妙な引っ掛かりを覚える。

ランの言葉に、アルフレドはそれ以上の言葉を返す様子を見せなかった。それを確認すると、ランはセリアの背を押しながら足早にその場を後にしようとする。急に押された事に慌てながらも、ランの歩調に合わせてようとセリアが歩けば、二人はアルフレドを残して温室を目指した。

あやふやなまま別れてしまったアルフレドをセリアが振り返れば、こちらを憎しみの色で睨みつける、イアンと同じ赤い瞳を見てしまった。その瞳に背筋が凍り付く様な錯覚を覚え、セリアは一瞬肩を振るわせる。普段見る、優しげに細められた赤とは違う、初めて見たその色に、セリアの中の引っ掛かりは更に増したのだった。

忌々しい。

その言葉が腹の底から湧いて来て、近くにあった壁を思い切り殴りつけた。拳から伝わる痛みがジンワリと浸透してくると、少しだが頭が冷える様な気がする。けれど、沸き上がった感情が引く気配はなく、そのままもう一度壁に拳を叩き付けた。

その様子を少し離れた場所で見っていた影の瞳が、面白いモノを見付けたように細められたことには気付かず。

## 確執 2 (後書き)

無駄な存在は排除するだけ。それが、俺の成すべきことだ。なのに、  
どうして何時まで経っても要らないものが無くならないんだ。今だ  
って、あんな……

やっぱり、あの人の言葉は本当だった。あれだって、邪魔なだけな  
のに。



### 確執 3

薄い明かりのみが照らす廊下を、ランは静かに歩いていた。静寂に支配されている筈の男子寮で、今動いているのは彼の影だけだ。そのまま静かに歩みを進めていくと、目的の場所からはやはり僅かに明かりが漏れていた。真夜中をどうに過ぎた時間の談話室に、まだ誰かが居る証拠だ。そしてその人物が誰かも容易に想像出来る。

フツと短い息を吐き出し、ランは迷わず中へ足を踏み入れた。

「まだ起きていたのか。イアン」

「……それはお互い様だろ」

ソファの一つに腰掛け、背凭れに身体を預けた状態のまま、イアンが答えた。月は既に高く昇り、誰もが寝静まっているだろうにも関わらず、一人この様な場所に留まっている友人にランは浮かない顔を向ける。

「眠れないのか？」

「まあ、今更だけだな」

言葉少なに返すイアンに、ランの不安は更に増した。今更、と彼は言っているが、彼がこの言葉に到達するまでどれほど掛かったか。反対側に置かれた一人掛けのソファに身を預けたランに、今度はイアンから口を開いた。

「セリアの事、感謝してる」

「……聞いたのか？」

「本人にな」

何を、と聞かずとも、その言葉が意味する事は、お互いが良く理解していた。

あの後、セリアに向ける予定だったのだろう嫌味をアルフレドは自分に向けて来た。貴重な人材だけあって、よほど過保護に守っているのだろう、と。苛立ちまぎれに言葉を放つ姿は、まるで獲物を逃した狩人のものであった。その様子に、イアンはこっそりと胸を撫

で下ろしたのだ。

彼も、セリアが必要以上にアルフレドと関わることは避けたかった。今まで、アルフレドによって多くのものが消えた事は事実だ。例えばそこにどんな真実が隠されていたとしても、その矛先が自分の周りにいる者にまで向けられる可能性は否めない。それが心配でならなかった。自分の周りから消えていった様々な物のように。そして、もし本当にセリアに何かあった時、自分と弟の仲は取り替えしようになくなるだろう。それが一番恐ろしかった。

イアンの不安をランも感じ取り、あの時出来るだけセリアをアルフレドから遠ざけたのだ。その事に礼を述べると、ランも僅かに表情を穏やかにする。

「借りを返したただけだと思っていてくれ」

「……借り？」

イアンがその言葉の真意を推し量ろうとしているとランが再び口を開いた。

「私がセリアへの想いを受け入れることが出来たのは、お前が言ってくれたからだ。あれがなければ、私は未だに失う事ばかり恐れていただろう」

「……」

イアンが真摯に語ってくれた、自分自身の想い。それがなければ、自分はその気持ちに気づくことなく、未だに葛藤していたに違いない。守りたいと思う理由を理解せず、ただ失うことを恐れて。彼にはどれほど感謝していることか。己の中の変化を、自分よりも先に感じ取り、告げてくれたのだから。気持ちが伝わるとか、そうではないとか、そんな事は関係無い。それ以前に、自分の心に気付けた事が嬉しいのだ。

「それに、お前は私の仲間だ。力になれるのなら、出来ることはしたい」

「……………すまねえな」

静かに囁かれた言葉に、ランは気にするな、と返す。けれど、二

人の居る談話室に入って来る別の影の姿があった。

「だからといって、このままという訳にもいかないだろう」

冷めた声に振り返ると、視界の先で透き通る銀色の髪が揺れた。

何時の間に背後に立っていたのか、閉まった扉の前に立つカールの突然の登場と発言に、ランは片眉を上げる。

「立ち聞きとは無粋ではないか？」

「この様な時間に、堂々と語るお前達が悪い」

確かに、誰も起きてはいないような時間に、明かりをつけたままでいれば、怪しまれて様子を伺われるくらいされても文句は言えないだろう。候補生の会話を立ち聞きしようなんて思う生徒は限りなく無に等しいだろうが。

立聞かれた事をランも咎める積もりは無く、カールもそれを理解している。なのに、出会い頭に衝突するのは、もう二人の癖のようなものだ。

数秒の睨み合いの後に、カールが再び口を開いた。

「事を先延ばしにしたところで、問題は解決しない。いつまで手を拱いている積もりだ」

「強引に推し進めたとしても、事が進展するとは限らないだろう」

反論したランに、カールは冷ややかな視線を向ける。

「ならばあの者が去るのを待つか。同じ事の繰り返しで、何かが変わると思わんが」

「……………」

カールの厳しい一言に、さっそく言い返そうとしたランを、イアンが腕を引いて静止する。そして、立ち上がると真っ直ぐカールに向き合った。

「確かに、このままって訳にはいかねえよな」

「……………」

「お前達にまで色々気を使わせてるのは分かってるんだけどよ。それでも、もう少し待ってくれねえか。俺も、ただ闇雲に関係を絶ちたい訳じゃねえんだ」

「……………何をすべきか見失っていないのであれば、私がこれ以上言うことはない」

それだけ言うと、カールは用は終わったと目を伏せる。そしてこれ以上の長居は無意味だと判断したようで、さっさと廊下へ出て行ってしまった。

明らかにイアンを氣遣った上の行動なのだが、そんな素振りを欠片も見せず、言いたい事だけ言って消えるとは。なんというか。まったくもって、素直でない。

さっと背後を振り返り誰にも姿を見られていない事を確認すると、セリアは短く息を吐いた。こそこそと動き回る姿は、はっきり言って思い切り怪しい。けれど、それを突っ込む者がここに居ない為、彼女がそれに氣付く事はないだろう。

肩にほんの少し残っていた力を抜くが、あまりのんびりもしていられないな、と再び足を急がせる。

アルフレドが学園に顔を見せてから、何故か自分の行動は制限されてしまった。それも、監視するかの様に目を光らせている候補生達にだ。といっても、勝手に歩き回るな、とか一人で出歩くな、というものののだが。

なんとなくアルフレドの事が関連しているのだろうことは予想出来るのだが、明確な理由は分からない。まあ、そこまで不便はないし、校則が少し厳しくなった程度に考えているので深くは追求しないが。なにより、緊張と警戒心で気を張り詰めている候補生達に、改めて聞く気も消失してしまった。

どうして自分の行動が関係するのだろう、と首を傾げるセリアは、

イアン達が彼女の身を案じているのだということは相変わらず毛程も理解しちやいない。

そんな理由で、セリアは厩舎へ向かう足を改めて急がせた。授業が終わり、そういえばヴァーゴをそのままにしまっていたな、と思い出したのだ。少し様子を見るくらいはした方がいいだろう、とセリアはこっそり教室を出た。

候補生達に言えばきつと付いて行くと言われてしまう。けれど、それでは逆に馬達を驚かせてしまうだけだ。ならば変わりに行ってやるから待っている、と誰かに言われてしまっても意味がない。そんな理由で、セリアは内密に一人で静かに、速やかに行動する事にした。

漸く目的地まで辿り着き、恐る恐る厩舎の中へ顔を覗かせれば、中には誰も居なかった。ホッとしながら足を踏み入れ、目的の馬の前に立つ。セリアの姿を捉えたヴァーゴも突然の来訪者に視線を向けると、鼻息荒く足踏みし出した。その様子に、驚かせてしまったか、と焦ったセリアは慌てて宥めようと鼻先を撫でてやる。

暫くそうして漸く落ち着いたのか、立派な黒馬も暴れるのはやめてくれた。その様子に、セリアも思わず笑みを向ける。

「案外、守りは薄いんですね」

今まで馬の嘶きしか拾わなかった耳に、突然人間の声が飛び込んできたものだから、セリアは驚いて振り向く。その視線の先では、こちらを見てニッコリと笑うアルフレドが立っていた。そしてその笑顔を、何処か胡散臭いと感じるのは仕方ないだろう。

「それとも、貴女が思っていたよりも軽卒なのか。どう思います？」

「え、えっと……」

軽卒かどうかを堂々と聞かれ、セリアも困惑した。

一体何を言っているのだろうか。というより、なんでここに居るのだろう。と沸き上がる疑問を必死に追う。けれど、自問自答しよ

うとした所で、何一つとしてまともな答えは得られなかった。

「あの、イアンならここには居ませんけど……」

「……………」

相手がこちらを見据えたまま動こうとしないので、取り敢えずそう言ってみた。彼が用があるとすれば、それは自分ではなく彼の兄の筈だ。

けれど、セリアの言葉にアルフレドは一瞬呆気にとられたような顔を見ると、ククツと肩を揺らして笑い出した。その様子にセリアは更に混乱する。

「いいえ。今日も貴女に用事があったんですよ」

「わ、私……ですか？」

また自分になんの用だろう、とセリアは疑問を抱く。彼とイアンの事なら友人の口から直接説明された。目の前の彼からも、決定的な言葉を既に聞いている。なのに、これ以上自分に何を言う積もりだろう。

驚いたようにキョロキョロと視線を動かすセリアを、アルフレドはもう一度小さく笑ってから、ジロジロと見詰める。そして、唐突に言葉を切り出した。

「ちよっとお願いがあるんですよ。兄さんに関わるの、もうやめてもらえませんか？」

「はっ!？」

いきなり言われた言葉にセリアは思い切り疑問符を浮かべた。いったい、それはどういう意味だろうか。

「だって良い事ないでしょう。貴女にとっても、兄さんにとっても」

「……その……」

「だから、離れた方がいいんじゃないですか? そんなに、無理な事をお願いしてはいないですよね?」

アルフレドの言葉を理解していく内に、セリアは眉を顰めた。何故、彼にそんな事を言われなければならないのだろうか。彼が弟だといっても、それはイアンと自分が決める事だろう。そして、自分

は出来ればイアンとの交友を続けて行きたい。

「あの、それはイアンと私の問題ではないでしょうか？」

「……あの人と付き合っても、貴女に利点はないでしょう？」

「で、でも……」

利点があるとかそういう問題ではない。彼は自分を友人であり仲間だと言ってくれた。そして自分にとっても、彼は大切な友人だ。それを、突然関わるなど言われても、無理な話である。

渋るセリアに、アルフレドは痺れを切らした様に顔を歪めた。

「目障りなんですよ。兄さんなんかの周りに、貴方みたいな人が居るなんて」

「……………」

「本当に、見ていて吐き気がしますよ」

吐き出された言葉と、自分を心底憎む様な視線がセリアに突き刺さった。兄さんなんかとは、まるで心からの嫌悪を含んだかの様な声だが、それがセリアには納得出来ない。先日から胸の内を持て余していた疑問が、再び沸き上がって来る。セリアは一度大きく息を吐くと、ゆっくりと口を開いた。

「あの、どうしてそこまでイアンを嫌っているフリをするんですか？」

「っ……………!？」

それが、これまでアルフレドを見ていてセリアが気付いた事だった。彼の発言の中に、イアン自身を罵る様な言葉は極端に少ない。彼が向ける嫌悪を含んだ視線の対象も、イアンではなく、周りにいる自分達だった。イアン本人には、挑発するような言葉や瞳しか向けられていない。イアンがアルフレドを嫌っていないように、アルフレドもイアンを嫌悪しているとは、どうしても思えなかった。

セリアの言葉を聞いて、アルフレドは大きく目を見開く。突然の核心を突いた言葉に、驚きで一瞬息が詰まった。けれど、目の前の少女の言葉を理解すると同時に、腹の底から可笑しさ込み上げて来

る。それを無理に抑える理由は無く、遠慮も無しに大口を開けて笑い声を響かせた。

「フハハハハ。へえ。伊達にマリオス候補生に選ばれた訳じゃないんだ」

「……………」

「まあ、嫌ってるフリをしてる訳じゃないですよ。俺の行動が、周りにそう見えるだけみたいですけど」

「……でも、どうして」

一人笑い続けるアルフレドに、もう一度問いかけた。けれど、それに返されたのは答えではなく、今までに無い程冷ややかな瞳。先程まで愉快そうに笑っていたのが嘘のようだ。温度を失ったかの様な赤い瞳に、セリアがビクリと肩を揺らすとその背筋を冷たいものが流れた。

「さっきも言いましたけど、目障りなんですよ。だから兄さんに近づかないでくれますか？」

「ですから、事情も知らないままに、大切な友人から一方的に距離を置くのは、私も納得しかねる訳でして……っ!？」

最後まで言う前にセリアの言葉は遮られた。いきなり目の前に迫ったアルフレドに首を掴まれたのだ。咄嗟に詰められた距離に、セリアは一瞬対応に遅れた。ハッとしたセリアがアルフレドの手を引き剥がそうともがく。けれど既に遅く、己のそれよりも一回り大きな手は、しっかりと首に廻っていた。

巻き付くようにして絡まる指に、ゆっくりと力が込められていく。急に圧迫された気道から、驚きでそのまま搾り取られるように酸素が抜けて行った。

けれど、締め付けられてはいても、それは決して窒息しそうな程での力ではない。意識を保ちつつ、息が吸い難くなる程度だ。それでも、息苦しいのに変わりはなく、足から力が抜けた所で後ろの壁に身体を思い切り叩き付けられた。それでも首を掴むその手は離れない。



「貴女が離れてくれないのなら、俺が消すしかないですよね」

「なっ…なに、を…」

「兄さんは随分と君に執心してるみたいだったから驚いたよ。君がこのまま消えてくれたら、兄さんがどんな顔するのか、見てみたくなりました」

息が出来ない訳では無いが、それでも明らかに酸素が足りない。けれど、そんな事はどうでもいい。なぜ、こんな状態になっているのか理解出来ない。というより、自分が消えたらとはなんだ。

そうは言うものの、首に回された指がそれ以上気道を締め上げる様子はない。本気で窒息させる積もりはないのだろう。けれど、このままでは非常にまずい訳で、セリアは必死に状況を打開するべく思考を巡らせる。

そんなセリアに構う事なく、アルフレドは再び口を開いた。

「兄さんを惑わすものが無くなれば、きっとまた正氣に戻ってくれる」

小さい頃から、兄は目標だった。何でも完璧にこなし、常に自分の前を歩く存在。それこそが、自分の誇りだったのだ。どんなに努力をしても決して追い付けず、どんな時でも必ず前を進む、そんな存在。それこそが、正しいあり方であり、理想の姿だと信じていた。それこそが、自分の求めるものだったのだ。

何事に置いても、自分が兄に叶う事は無かった。それでも追い付こうと必死に努力し、自分は周りに上立つ程に力を付けた。そして、兄はその自分の上に行く。どんなことにおいても、自分は他人を踏み倒し、兄はそんな自分を打ち負かす。それが、全てだったの

だ。

けれど、それは突然崩された。自分の理想が、根底から崩壊したのだ。

「兄さん、チェスやりましょうよ」

「アルフレド……俺はカササギの巣に行くところなんだぞ」

「いいじゃないですか。一回だけ。今度は負けませんよ」

「しょうがないな。一回だけだぞ」

いつもの様に、自分が黒の駒で、兄が白の駒を操り、盤の上に集中する。チェスは自分の得意なゲームだ。相手が誰であろうと大方倒して来たし、大人にだって負けない自信がある。けれど、それでも自分は兄に勝てた事は無い。そして、今度も自分は兄に大敗する。そうなる筈だった。

「なあアルフレド。お前は俺に勝ちたいか？」

「そりゃあ勝てるなら勝ちたいですよ。でも、どうせ今回も僕の負けですよ」

「……そうか」

手を抜く事はしない。そんな事をしなくても、兄さんは自分に勝てる筈なのだから。負けない事を望みながらも、負ける時を待つ。実に矛盾した勝負。

そうして、真剣に、慎重に駒を倒して行く。ゆっくりと、確実に。勝ちたいと望み、勝負を挑み、真剣に向き合い、そして負ける。

それが、何よりも自分が心地よいと思える瞬間だった。なのに……

「ああ……負けた」

「えっ!？」

「ほら。お前のルークが、チェックメイトしてるだろ」

「あっ!!」

一体、どういう事だ!？チェス盤を確認すると、確かに自分の駒が兄を追いつめていた。白のキングは逃げ場を失い、防ぐ手立ても無く、ただ倒れる時をじっと待っている。どこにも動けないその駒

と同様に、アルフレドもその場で静止した。目を瞬かせて、状況を整理しようと脳が奮闘する。

勝った？自分が？何故？

後は、兄の言った通りに自分が駒を動かすだけ。それだけで、自分は兄に勝てるのだ。しかし、それは起こるべきではない。兄が、自分に負ける筈が無い。ならば何故、自分の駒はそんな場所に立っているのだ。考えても分からなかった。

「俺もまだまだだ。初めて負けちゃったな」

「……そんな」

「ん？嬉しくないのか？ほら。いつまでもそんなところに居ないで、カササギの巣の所に行こうぜ」

ニッコリと微笑んだ兄は、破れた事などさほど気にしていない様子で、そのまま外へ行ってしまう。その後ろ姿を、自分はぼんやりと見詰めることしか出来なかった。

何故、平然としていられるのだ。自分に、弟に負けたのに。何故。

今まで絶対に犯された事の無かった理想が、ガラガラと音を立てて崩れて行った。何もかもが分からなくなり、一步先すらもまともに正視出来ない。グルグルと廻る視界の中で、自分が出した一つの答え。

兄も結局は弱い存在だったのだ。自分よりも優れている、崇高な存在だった筈が、いつの間にか衰えていたのだ。そして今日、彼は自分に負けた。そのことを彼が全く気に留めていなかったのは、兄が自分など眼中にいれていなかったからだ。勝とうと、負けようと。そんな事、兄は歯牙にもかけていなかったのだ。真剣に勝負していたのは、自分だけだったのだ。

カッと頭に血が上った。周りが急激に赤く染まり、何も見えなくなった。唯一目に映ったのは、自分の前を歩く兄の背。

気付けば、突き飛ばしていた。自分より劣っている兄の背など、もう見たくはなかったのだ。自分の上に立っていない兄ならば、本

気で消してしまえと。

けれど、兄は見事に生還した。自分が突き飛ばした水の中から、無事助け出されたその瞬間、目の前を覆っていた色が冷え、またあの理想が戻って来た。やはり、兄は自分などに劣るような存在ではなかった。自分が叶う相手ではないのだ。自分は完全に不意を突いた積もりだったが、それでも兄はこの場に帰って来たではないか。

喜びが溢れると同時に、再び疑問が沸き上がる。ならば、何故兄はあの時自分に敗北したのだ。

『俺はカササギの巣に行くところなんだぞ』

『いつまでもそんなとこに居ないで、カササギの巣の所に行こうぜ』その時理解した。兄が自分に負けたのは、兄を惑わせる存在があったからだ。自分の理想を崩そうとする、邪魔なだけで、必要の無いモノ。崇高な筈の兄を、そうでなくす卑しい存在。それらに兄が気を取られていたからだ。

ならば、自分がそれらを全て消してしまえばいい。そうすれば、兄はまた自分の前を歩いてくれる筈だ。

そう決めたと同時に、兄から少し距離を置くようになった。この世から、兄を惑わす存在全てを消すまでは、と決めて。また、兄が自分より劣っている姿を見るなど、耐えられなかった。だから、今はまだ、と。

一つ、また一つ。兄が執着するものを壊していった。兄が執着しているのは、彼と同じ様に崇高で、自分という存在に勝るものでなければならぬのだ。それ以外は、全て兄を貶めるだけ。

「貴女みたいな存在、兄さんには必要無い。立場が確定していない上に、威厳の無いマリオス候補生だなんて、絶対兄さんの仇になる

に決まっている」

「……あつ、ぐ……」

「このままじゃ、どんどん墮落していくだけなのに。なのに、兄さんはその事に気付いてくれない。だったら、俺がなんとかするしかないですよ」

酸素が足りないのはこちらなのに、そう言ったアルフレドの声の方が苦しげであった。兄を貶める存在を忌々しげに睨みつけるその姿に、セリアは理解した。アルフレドは、イアンに強い憧れを抱いているだけなのだ。彼の、唯一無二の兄が好きなのだけなのだ。

### 確執 3 (後書き)

今更、だなんて思う必要ない。どんなにすれ違いがあっても、イア  
ンは貴方を待っているから。まだ手遅れではないのだから。だから、  
せめてそれだけは理解して欲しい。

貴方に何かあったら、彼はきつと……

## 確執 4

「これ以上、兄さんの邪魔はしないで貰えますか？」

グッと手に加わった力が伝わり、確かな圧迫感を感じたセリアは堅く目を瞑る。けれど次の瞬間、何かを殴りつけるような音と共に首に絡み付いていた手が離れた。途端に喉を通り始めた酸素を、軽く咳き込んで必死に取り込むが、ただならぬ空気を感じて顔を上げる。すると、そこには蹠跟けた体制を立て直そうとするアルフレドと、怒りの籠った瞳で彼を見据える、イアンが居た。

「てめえ!!!」

怒鳴り声と同時に吐き出されたのは、今までに無い程の怒り。まさに、激情と呼ぶに相応しいかもしれない。突然の乱入者に、アルフレドも理解が追い付かなかったようで、一瞬呆気にとられた表情を見せる。

「自分が何をしたのか分かってるのか!!!」

「っ!!!……そこまで固執しますか? そんな人に」

言われて正気を取り戻すと、アルフレドは蔑む様な視線をセリアに向けそう吐き捨てた。挑発しようと意図した訳ではないが、それはイアンの神経を更に逆撫でする結果に終わる。

「いい加減にしろ!!! 言った筈だ!!! コイツには手を出すなと!!!」

「だからなんですか! 周りが見えなくなっている兄さんの変わりに、俺が要らないモノを整理してるんだ」

「黙れっ!!! お前のごたくに付き合う積もりはない!!!」

「っ!?!」

イアンの言葉に、アルフレドは衝撃を受けたように目を見開いた。その意味を受け止め切れずに、思わず一步後ずさりする。

兄が自分の言葉を撥ね除けた。今まで自分が何をしようと、ここまで怒りを露にしたことなどなかったのに。再び自分は蔑ろにされた。兄の視界から、自分は追い出されてしまったのだ。そして、そ

の原因を作ったのは他でもない、目の前の栗毛の地味な少女。

イアンの尋常ではない程の怒りに、セリアは驚きで目を見開いた。それが自分に向けられているものではないにも関わらず、一瞬背筋を悪寒が走るまでに。

これはまずい。二人の間で明らかに、大きなすれ違いが起きている。そして、それにイアンは全く気付いていない。アルフレドも、その事を伝える積もりはないのだろう。でも、それでは更に大きな溝が生まれるだけだ。それに、このままでは取り返しのない状況になってしまおうのでは……

「イアン……」

友人の怒りを抑えようと、セリアはその腕を掴んだ。せめて彼が冷静になるように。というより、イアンがあまりの剣幕で怒鳴りつけるので、次には突然殴り掛かったりするのではないかと不安になったのだ。その後の事など全く考えていないのだが、ここで取っ組み合いにでもなれば、それこそ取り返しがつかないというもの。

唐突に自分に触れた手に、イアンは振り返った。そこには、必死に何かを訴えて来る茶色の瞳。

嫌な予感がしたのだ。今日はまだ姿を見せないアルフレドと、いきなり消えたセリアに。あれだけ勝手に動き回るな、と言っておいたのに。本当に、言う事を聞いてくれない。普段なら苦笑するだけに終わったのだろうが、今は不安を拭い切れなかった。

急いで探しまわってみれば、厩舎の方へ向かったと言われた。そうしてその場所の扉を開けてみれば、遭遇したあの光景。弟の手が少女の細い首に回され、セリアの顔は苦しそうに歪められていた。一番恐れていた事が、現実を起こってしまったのだ。

状況をよく理解する暇も無く、目の前が赤く染まった。そして、訳も分からないまま腕を振り上げ、弟に叩き付けていた。本当は、そのまま殴り倒したいところだったが、それを躊躇したのはアルフレドだったからだろう。他の者だったら、自分は何をしていたか分



からない。背を駆け上がったのは、恐怖と怒りと焦りと苛立ちと。その他にも名前を言いたくもない感情が次々と一瞬で沸き上がった。けれど、腕に感じた温もりに、それらが一気に鎮火する。こちらを見詰めるセリアの姿に、イアンもハッと我に返った。

「さ、触るな!!」

しかし次の瞬間、その温もりが消えた。焦りに駆り立てられたアルフレドがセリアを後ろへ突き飛ばしたのだ。驚いた時には既に遅く、蹣跚けたセリアはそのまま盛大に躓き転倒した。

急に離れて行ったその感覚に、イアンは咄嗟に小さな手を追うが間に合わない。その瞬間、胸に広がる抑え様のない、目の前が黒く染まる程の激しい怒りにも似た熱情。以前に何処かで感じたことのある、未知でとても嫌なモノに酷似したものだ。

名の付け様がない感情のままにイアンがアルフレドを睨めば、その表情が余程恐ろしかったのか、初めてアルフレドも恐怖を覚え息を呑んだ。尊敬してやまない筈の兄が、まるで別人である。背筋を悪寒が駆け上がり、足が竦んだ。

けれど、誰が動く前に聞こえた、大きな？に全員が顔を上げた。

響く怒声と傍に倒れ込んだ少女の身体に驚いたのだろう、馬の一头が後ろ足で立ち上がる勢いで騒ぎ出したのだ。それを皮切りに、周りの馬も次々と興奮し、激しく暴れ始める。

転倒したままの体制だったセリアは、驚きで呆然としたが、次の瞬間目の前を黒い影が覆った。あっ!と思い反射的に避ければ、馬の堅い蹄が自分の元居た場所に叩き付けられている。サッと血の気が引く感覚と同時に、強い力で手を引かれた。

「大丈夫か？」

「う、うん」

心配そうに自分を見詰めるイアンに礼を言っていると、セリアは暴れる馬達をサッと見回した。とにかく、今は彼等を落ち着かせることが先だろう、と思い自分を立ち上がらせてくれたイアンから離れる。

けれど次の瞬間、一層大きな？と同時に悲鳴にも似た声が響き、動きを止める。

「う、うわああああ」

即座にそちらを向けば、周りよりも一回り大きな体を待ち上げたアルセウスと、そのアルセウスの首から伸びる手綱に手首を取られてしまったアルフレド。

初めて感じた兄への恐怖心から蹣跚けた所を、馬の嘶きに驚いたことで大きく体制を崩したのだ。そして、倒れ込んでしまった先は、運の悪い事に気性の激しく、体軀も立派なアルセウス。そして暴れ出した時に垂れていた手綱が腕に絡み付いてしまった。まずい、と思った時には既に遅く、アルセウスは混乱した場に対し、激しい怒りをぶつけた。

この場に相当腹を立てた黒馬は、ギロリと大きな瞳で辺りを睥む。そして、アルフレドを自らの身体に縫い付けたまま、一度後ろ足で立ち上がると、そのまま周りの物を蹴倒しながら厩舎を飛び出してしまった。

扉を蹴破り外へ駆け出したアルセウスに引き摺られながら、アルフレドは必死に手に絡まった手綱を外そうと試みるが、全く効果はない。それどころか、地面に打ち付けられる身体を、硬い蹄に蹴飛ばされないように勤めるのが精一杯だ。

「アルフレド！！」

兄の呼びかけも空しく、馬は青年を縫い付けたままもう見えない所まで走り出してしまっている。突然の事に一瞬啞然とするも、セリアはすぐに動いた。数居る馬の中から、アルセウスに劣らぬ体軀を持つヴァーゴに飛び乗る。

「イアン！乗って」

「どうする積もりだ！？」

「いいから！はやく」

自分の前に乗るよう言うと、イアンは戸惑いながらもそれに従った。そして、すぐに飛び出して言ったアルセウスを追う。見事な黒

馬は二人も人間を乗せている事など、微動も感じさせないほどの速さで、自分の背に乗る主の命に従った。

イアンに手綱を任せると、セリアはしっかりと自分の前に座るイアンにしがみ付く。未だに慣れない体制であるし、密着間にも落ち着かないが、今はそんなこと気にしてはいられなかった。二人を乗せているにも関わらず、前を走るアルセウスに追いつく程の速さを見せるヴァーゴから振り落とされないよう必死だ。

「アルフレド！！」

イアンの叫び声の先では、アルフレドが懸命にアルセウスの身体に縋り付いていた。最早手綱をどうにかするのは諦め、次の瞬間を生き抜く事に必死だ。

「イアン！アルセウスの横につけて」

セリアの言葉にイアンはヴァーゴに更に加速するよう命じ、興奮したアルセウスの横を走らせる。それを確認すると、セリアは振り落とされそうになりながらも、イアンの肩をグッと掴み、走り続ける馬の背で立ち上がったのだ。

「な、何する積もりだ！？」

「いいから、そのまま！！」

突然のセリアの行動に驚き、馬の操縦を疎かにするイアンに、セリアは慌ててそのままの姿勢を維持するように言う。再びヴァーゴを操ることに集中するも、イアンは後ろの少女が何をしようとしているのかに意識を向けた。その間も、セリアは必死に何かの機会を窺うように、ヴァーゴとアルセウスを交互に見やる。そして、その考えを理解した途端イアンも叫んだ。

「無茶だ！やめろ！」

イアンの声も空しく、セリアは意を決したように瞳を鋭くすると、思い切りヴァーゴの背を蹴り、暴れるアルセウスに飛び移った。宙に舞った長い栗毛が、小さな身体の後ろを流れ、鳥の尾のように風に揺れる。

一瞬、周りの時が止まった様な感覚の後、セリアは目一杯腕を伸

ばした。そして、飛び移った衝撃をそのままに黒馬の身体に抱きつく。

ギリギリで手が届いたその背に、セリアも必死に縋り付いた。そのまま何とかアルフレドに絡み付いている手綱を手に取ると、握れる範囲で無我夢中にそれを操る。

その手綱捌きに覚えがあったのか、アルセウスも背に飛び乗った者を振り落とそうとはしない。そしてセリアが発する、こちらを落ち着かせようとする声に反応を見せ、次第に走る速度を緩めていった。

「はあ、はあ。……いい子」

まだ鼻息を荒くしているが、何とか足を止めてくれたアルセウスの首を、セリアは優しく撫でてやる。そして素早くアルフレドの腕から綱を解いた。

「だ、大丈夫ですか？」

腕が自由になった途端、地面に座り込んだアルフレドに慌てて駆け寄る。服の至る所に埃や泥が付いているので、恐らく打撲や痣はあるだろう。けれどそれ以外の目立った外傷は無さそうである。それでも、脱臼などしてやいないだろうか、とセリアは不安の色を瞳に映す。

セリアの声などまるで聞こえていないかの様に、アルフレドは腕を押さえ、俯いたまま動こうとしない。一見、痛がっているようにも見えるその姿に、セリアはまさか骨にまで異常があるのだろうか、と顔を青くした。

「貴方は……」

「あの、何処か怪我を？」

「貴方は本当に何考えてるんですか！？ あんなことするなんて、無思慮にも程がある。俺なんか放っておけばよかったじゃないですか！！」

言われた言葉にセリアは目を見開いた。  
行動が利口でなかった事は否めないが、あんな状態だったのだから

ら仕方ないではないか。それに、放っておけばよかったとはなんだ。そんな事出来る訳がない。あのままではアルフレドがどうなっていたか分からないのだから。まあ、これだけ大声が出せるのだから、彼の身体も一応は大丈夫だろう。

そう一人で納得したセリアだが、まだ不満だと言った顔のアルフレドに答えるため、取り合えず言葉を選んだ。

「放っておくだなんて出来ませんよ。アルセウスは気が荒いので、アルフレドさんも大怪我をする可能性だってありましたし」

「だから、俺がどうなろうと貴方には関係ないだろう」

「……………そんなこと言われましても……………」

セリアは非常に困惑した。どう考えても、彼がああなる状況を作ってしまったのは自分にも責任があったわけだし。それに目の前で誰かが怪我をしそうになっていて、何もしないなんて考えられない。そしてなにより……

「貴方にもしものことがあったら、イアンが悲しみます」

「おい!!」

セリアが言った瞬間に響いた声に、二人は同時に振り返った。すると、焦りを隠す余裕すら無いといった表情のイアンがこちらに走り寄ってくる。その後ろでは、一仕事終えたヴァーゴが、何処か誇らしげにジッと佇んでいた。

「二人とも、怪我は!？」

「兄さん……………」

地面に座り込んだ二人が大きな怪我を負っている様子が無い事を確認すると、イアンは漸く安堵する。けれどそれも一瞬の事で、途端にその顔を怒りに歪ませた。

「お前は、一体なんの積もりだ!」

「……………」

「どういう積もりだって聞いてるんだ!」

先ほどよりはマシだが、それでも恐ろしい程の形相で睨む兄に、アルフレドは何も返さなかった。そのことが更に苛立ちを増徴させ

たようで、その声はますます荒くなっていく。

大声で怒鳴るイアンの腕を再びセリアが掴んだ。オドオドした様子の少女に視線を向ければ、焦ったような表情をこちらに向けている。

「あ、あの……そう怒らないでも……彼も無事だったんだし……」

興奮したアルセウスに引き摺られてしまったのは事故なのだし、そこまで怒らなくてもよいのでは。とイアンに恐る言ってみる。必死に自分を宥めようとする少女に、そう言えばコイツにも言いたい事があった、とイアンは思い出し、顔を強張らせながらセリアに向き直った。

「お前はお前で、何考えてるんだ！」

「は、はい？」

「またあんな無茶しやがって！ 何度同じ事をやれば気が済むんだ！？」

「い、いや。そんな事言われても……」

セリアは視線を逸らしてみるのが、イアンの怒りは納まる様子が無い。イアンも、あの状況ではあれが正しい選択だったのだろう事は理解している。もたもたしていればその分、アルフレドが大怪我を負う可能性が増えるのだから。しかし、イアンにしてみればそれは自分の役割であって、決してセリアがするべき事ではない筈だった。一歩間違えばセリアも惨事に巻き込まれていたのだ。だから自分は待てと言ったのに。

「勝手な行動はするな！ 無鉄砲なのは何時もの事だが、少しは俺の言う事も聞け！！」

「……なんで」

まるで親が子供に説教する様なイアンの言葉に、ポツリと返したのは当のセリアではなく、今まで横で呆然としていたアルフレドだった。どうしたのかと視線を移せば、その瞳は動揺からか酷く揺れている。

「なんでですか。兄さんも解ってるじゃないですか。その人がどれだけ無謀か。そんな人と一緒に居るから、兄さんまで身を滅ぼすこ

とになるって」

「お前、何言って……………」

「解ってるじゃないですか！！なのに、なんで！？」

兄が栗毛の少女と行動を共にしているのは、固執している故に、盲目になっているからだと思っていた。けれど、今のやり取りから、兄は決して少女の全てを肯定的に受け止めている訳ではない事が解る。自分に優しく語りかけた、ある人物の言葉通り、その無謀さがどれ程のものかも分かっているではないか。ならば、それによって兄にも不利益があることも理解している筈。にも関わらず、何故兄はそれでも彼女を庇うのだ。

本気で解らないと言った顔をするアルフレドに、セリアは非常に困惑した。このままでは、またすれ違いが出来てしまう。アルフレドが伝えない限り、彼の考えをイアンが理解する事はないだろう。というより、横に立つ友人の周りの空気が少しずつ不穏なものになりつつあるのが非常に気になる。けれど、だからといって自分が余計な事を言うべきではないわけであって、どうしたものか。と、珍しく冷静に、かつ的を得た考えをしたセリアは、意を決して地面に座り込むアルフレドに視線を合わせるべくしゃがみ込んだ。

「あの、アルフレドさん」

「……………」

名を呼んだ瞬間、ギロリと睨まれセリアは一瞬怯んだ。けれど、そんなことで言葉を止める様な事はしない。

「そ、その……イアンは、とても頼りになる人ですよ。貴方が危惧している程、周りに流されたりすることはないです」

「……………」

「どんな時でも、友人や他の人の事を気遣って、それでも自分には厳しくて、いつも己を高めようとしていて。貴方はそういう所に憧れたのではないですか？」

「……………」

「だから、アルフレドさんがそんなに心配する事はないと思います

よ。兄弟だから、やはり気になってしまふのは当然なのかもしれないですけど」

セリアの言葉に、アルフレドは目を見開いた。いったい、この少女は何を言っているのだろうか。自分の行動を振り返れば、責めたり恨んだりするのが当然だろうに。にも関わらず、呑気な声で困ったような笑顔を向けてくる。その姿に僅かな不信感を覚えると同時に、言われた言葉が胸に突き刺さった。

兄は周りに影響されて、自分を見失うような、そんな弱い人間ではない。そんなことは解っているのだ。けれど、それを認めたくなかった。認めてしまえば、あの日兄が負けた事に説明がつかないから。とにかく、何かの所為になければ、己を保っていられなかったのだ。

「今更……どうしろって言うんだ？」

「……？」

弱々しく吐き出された言葉に、セリアはキョトンと目を見開いた。その声が、とても苦しそうで、まったく覇気が無かったから。

自分は彼に何かを強制したい訳ではない。ただ、これ以上二人の関係が拗れる事態は避けたかっただけだ。イアンはアルフレドとの不仲をどうにかしたいと望んでいる。けれど、実際彼等の間に不仲と言えるような溝は出来ていないのだ。イアンもアルフレドも、互いを嫌ってなど居ないのだから。

「その。私はアルフレドさんに何をしろ、と言う積もりはありません。ただ、イアンは貴方の事を待っていると思いますよ」

「……………」

アルフレドが、今更だなんて思う必要はない。イアンは、今だっ  
てずっとアルフレドと歩み寄る時を待っているのだから。

目の前でしゃがみ込んだまま動かないセリアと、その言葉を聞いているのだらうアルフレドを、イアンは複雑な思いで見ていた。ボ



ソボソと何かを話しているのは聞こえるが、内容までは聞き取れない。何を言っているのか非常に気になったが、何となく自分が聞くべきではないと思い、そのまま動くに動けなくなってしまったのだ。というより、相変わらずの警戒心の無さに、僅かばかり苛立ちを覚える。つい先程、自分に危害を加えようとした相手に、のほほんと微笑みかけるセリアの姿に、出そうになる溜め息を必死に我慢した。

先程まで周りを張り詰めていた緊迫感も、当に打ち壊されている。今、怒りを蒸し返せと言われても、無理な話だ。ついに堪え切れずに、一度大きく息を吐き出せば、目の前でしゃがんでいたセリアが立ち上がった。それと同時に、アルフレドも起き上がる。

反射的に身体に力が入ったが、その警戒も、目の前のアルフレドの思い詰めたような顔を見た途端、薄れてしまった。今まで強気な瞳しか見せて来なかったのに。一体、どうしたと言うのだろうか。

「兄さん……」

自分と呼ぶ声にハツとし、いつの間にか泳いでいた視線を戻す。

「俺は、今までの自分の行動を後悔してないし、謝る積もりはありませんよ」

「……………」

「でも……少しだけ、目が覚めました」

「っ!？」

それだけ残し、背を向けたアルフレドがゆっくりその場を離れていく姿を、驚きで見開かれたイアンの瞳が追う。

いったい、何が起こったのだろうか。目が覚めた。とアルフレドは言ったが、その言葉を自分は理解できない。戸惑い、考えた末に答えを知っているだろう人物に視線を移す。いきなり振り向かれたセリアは、一瞬困ったような顔を見せたと思ったら、また柔らかく微笑んだ。

「彼にも、もう少し時間が必要なんだと思う」

「……………」

その先を語る様子を見せないセリアに、まるで一人だけ置いてけぼりを食らった様な感覚がして複雑な心境になる。けれど、アルフレドから感じた僅かな変化に、セリアの言うように待ってみようか、という気にもなった。何より、セリアが安心させるように隣でそつと微笑むものだから、イアンもこれ以上を強いる気は起きなかったのだ。

「それでね、アルフレドから手紙が来たみたいだよ」

嬉しそうに語った友人の姿を思い出し、ルネは目の前に座るプラチナブロンドの青年に喜ばしい知らせを伝えた。けれど、カールは全く興味を示した様子を見せず、相変わらず目の前の本に集中している。その姿に、ルネは内心で小さく笑った。

「でも、カールも行けばよかったのに」

「必要がない」

今頃、セリアを連れた友人達は今度こそ遠乗りを楽しんでいるのだろう。アルフレドが去った数日後、ようやくヴァーゴを乗り回す機会を得たらしい。ルネとカールも当然誘われたのだが、生憎ルネは花の世話があり、カールも当然頷くことをしなかった。

「ヴァーゴにもすっかり懐かれたみたいだよ」

「……ヴァーゴとはな」

「あ、気付いたんだ」

一瞬口元を緩めた友人の姿に、ルネも嬉しそうに頷く。

「ヴァーゴとは、乙女座の事であろう」

「セリアにぴったりだと思わない？」

乙女座に纏わる神話の一つとして、その星はギリシア神話の女神

の一人、ペルセポネであるとされている。冥界の神に誘拐されたペルセポネを想う女神の母、豊穡の神デメテルの悲しみは世界に冬を齎した。大地が枯れ果て、不作に苦しむ世界を見た大神ゼウスが、冥界の神にペルセポネを帰すよう命じるまでは。そして、ペルセポネの帰郷と同時に、荒れた大地には豊かな花が咲き誇った。けれども、冥界でザクロの実を口にしたペルセポネは、一年の三分の一を冥界で過ごさなければならない。そしてその間、世界は冬を迎える。「でも、ペルセポネが地上に戻ると、世界は豊かな春の季節に変わる」

「フン。あれに女神にでもなれと言いたいのか」

「そこまでは分からないけど。でも校長らしいよね」

ヴァーゴの主人であるセリア。きっと今頃無邪気に馬を乗り回しているのだろう。

「本人は全然気付いてなかったみたいだけどね」

「……驚きはしないな」

呆れたような視線を、遠くに居るだろう少女に向けると、カールはもう一度本に集中しなおした。

## 確執 4（後書き）

苦手、といえはよいのでしょうか。昔からどうしても、好きになれない。ここまで気にする必要は、無い筈なのですが。

理由を聞かれれば、自分は答えられないでしょう。けれど、本当は分かっているのです。

好きになれない理由。嫌いだと言ってしまう理由は、それがまるで  
……

## 冷雨 1

昨日まで清々しい程に晴れ渡っていた空も、今日は朝から雨雲に覆われていた。今にも崩れそうな空を見上げる人々の視線は何処か心配げで、その日の用事を早めに済まそうと、足を急がせる者が目に付く。

まだ日が沈むには早い時刻にも関わらず暗闇が辺りを包み込んだ頃にはやはり気温も下がり、大粒の雨がしとしとと音を立てて降り始めた。そうなれば必然的に道を行きかう人々の姿も疎らになる。

いよいよ本格的に降り出した雨を一時でも凌ぐため、ザウルは近くの店の軒下へと逃げ込んだ。水が掛からない場所を確保出来た事に安堵しながら、肩にしつく纏わり付く水滴を払う。急に降り出した雨だが、幸いそれほど濡れずに済んだようだ。

目の前で地面に叩き付けられている雨粒を眺めながら、ザウルは雨が小振りになるまでここで時間を潰して行くことにした。正直、あまり好ましいことではないが、今は仕方ないだろう。

そのまま静かに佇みながら、激しく落ちて行く水滴に視線を向ける。その琥珀色の瞳は、普段の穏やかさこそ残しているが、どこか不安げに揺れていた。

：雨は嫌いである。とくに、今のよう悲しげに、空そのものが泣いているかのような雨は。こんな天気の日、色々と思ひ出してしまい、どうしても複雑な心境になるのだ。

フツと細められた瞳に、雲に覆われた空の様に、今は僅かな陰りが見えた。

雨が降り出すと、まず思ひ出されるのは、今はもう亡い母の事だ。この世を去る時まで、その顔が優しく微笑んでいたことは今でも覚えていいる。けれど、その心が故郷への想いからいつも悲鳴を上げて

いたのは、幼いながらも理解していた。それでも、周りに気を使  
い懸命に耐えた母は、やはり悲しみも表には出さなかった。

そして寝台に横たわり、涙を流す力すら残されていなかった母の  
代わりに、空はその日泣いていた。

失意に父が落ち込んでいる時も、空には常に雨雲が広がっていた。  
父の心を表すかのように雨を降らす空が、自分は好きではなかった。  
母は泣かなかったのに、父が悲しみを耐えているのに、何故空はこ  
うも簡単に涙を崩すのだろう、と。まるで、代わりに泣いてやるか  
らお前は泣くな、と言われていている気すらしたのだ。

父にクルダスへ行きたいと申し出た日も雨であった。滅多に雨な  
ど降らない季節だったにも関わらず、その日は朝から湿った空気に  
混じり、雨粒が降り注いでいたのだ。瞳を伏せ自分の言葉に耳を傾  
ける父の姿が、雨の音と陰った色の所為で、更に思い悩んでいる風  
にも見えた。まるで父が泣いているのでは、と錯覚した程に。心痛  
を堪えるかの様な父の表情から、自分は目が逸らせなかった。

昔から、こうして空が泣く度に、自分の周りで誰かが涙を堪えて  
いた。それが何よりも辛いことのように思えて、雨の度に一抹の不  
安を覚えるのだ。今、誰かが泣いているのではないか、と。そんな  
馬鹿な、と自分でも思うが、感情はどうにも切り離せない。

ジッと雨の降る道を見据えていると、唐突に横から声が聞こえた。

「あれっ！ザウル？」

「っ！？セリア殿？」

驚いてそちらを振り返れば、全身ずぶ濡れの状態のセリアが息を  
切らせながら自分の居る軒下へ非難してきたところであった。恐ら  
く、街に出ていた所を自分と同じ様に雨に降られたのだろう。服や  
髪から雫が滴り落ちて、濡れていなかった筈の床に染みを広げて行  
く。

セリアはザウルがこの場に居た事が意外だったようで、乱れた呼

吸を整えながら目を見開いている。

セリアのあんまりな姿にザウルはギョツとすると、すぐさま自分の上着を脱ぎ、雨にぐっしりと濡れたその肩に優しくかけてやった。けれど、その行動を全く予想していなかったらしいセリアは慌ててそれを返そうとする。けれど途端にザウルに制されてしまった。

「ザ、ザウル!？」

「そのままでは風邪を引かれてしまいます」

「でも、それじゃザウルが寒いし」

雨の所為で辺りの気温は確実に下がってきているのだ。それなのに、上着を取り上げてしまうのはセリアとしても心苦しかった。けれど、自分は平気だと押し切られてしまった為、渋々だが有難く借りる事にする。というより、返そうとしても受け取っては貰えなかったのだが。

「驚いた。大丈夫かなと思ってたのに、急に降ってくるから」

「そうですね。じきに弱まってくれると良いのですが」

学園まではまだ多少距離があるため走って帰るのは難しいだろう。最初の頃より雨脚は若干弱まった様な気もするので、ザウルにとっでは大した距離ではない。けれど、まだ雨は激しく降っていることに変わりはなく、そんな中セリアをずぶ濡れに走らせる、という選択肢はザウルには考えられなかった。

と、そこで気付く。急に降ってきたとは言っても、本格的に振り出すまでに何処かの屋根の下へ逃げる事は十分可能だった筈だ。実際自分はほぼ濡れずにいたのだから。けれど、横に佇む少女は、頭からグッシヨリと濡れた状態で現れた。

「セリア殿。まさか、あのまま学園まで走って戻られる積もりだったのでは？」

「えっ! う、うん。そんなに遠くは無いし、出来れば帰ろうと思っただけで、流石に雨が強くなってきたから」

「そ、そうですか……」

セリアが答えた瞬間、ザウルは聞いた事を後悔した。分かっている

たことだが、どうしても余計な所で要らない行動力ばかり発揮するのだろうか。雨に降られながら、その下を走り回るなんて、年頃の娘のすることではない。本当に、風邪でも引いたらどうするのだ、と若干思考が保護者のそれになっていたのだが、本人はそのことに気付かない。

「街に何か用事だったのですか？」

「書店に少し。ザウルは？」

「自分は、便箋が切れてしまつて。ただ、空模様が思わしくなかったので諦めたのですが」

「私も」

早く晴れないか、と呟きながら二人はぼんやりと空から落ちる水滴が道に広げる波紋を眺めていた。けれど、その希望を打ち砕くかのように、雨は一向に止む気配を見せない。

「止みませんね」

「そうだね」

何度目かのそんな会話をした頃、セリアの視界の端で小さな影が動いた。反射的にそちらに視線を移すと、それは派手な音をたてて道に崩れ落ちた。

「えっ!？」

突然の事に驚いてそれを見ていたセリアも、その影が一向に起き上がる気配を見せず、遂には啜り泣きまで聞こえて来たので慌てて雨の中、道に飛び出す。その後ろをザウルが追ってきたのを気配で悟りながら、影の横にしゃがみ込んだ。

「えっと……大丈夫？」

「んぐっ……」

声を掛けた途端、キッと反抗的な緑色の瞳がセリアを睨んできた。ボサボサに撥ねた枯れ草色の髪から覗く、その瞳の端から流れているのは雨なのか、涙なのか。それを判断する前に、転んだ影、少年は再び顔を伏せてしまった。顔が見えない為年齢が判断しにくいのが、道に転がった背丈から察するに、七、八歳だろうか。



「セリア殿、彼は……？」

「……」

雨の中道に転んだ体制のまま起き上がる気配の無い少年を、セリアはどうしようか、と見詰めていた。そうして少しの間悩んだが、やはりこのまま道に転がしておく事は出来ないだろう、とゆっくりと手を差し出す。その仕草を感じ取ったのか、少年がゆっくりと顔を上げ、ジッとセリアを見上げて来た。その視線に、セリアは安心させる様に、にっこりと微笑みを返す。

「大丈夫？ 怪我は無い？」

「……………か…ちゃ…」

「ん？」

ボソリと呟かれた声が上手く聞き取れず、セリアは一度聞き返した。けれど、少年の次の行動にセリアだけでなく、ザウルも目を見開く。

転んだ少年はスクツと立ち上がったかと思うと、セリアの胸に思い切り飛び込み、しっかりと抱き着いたのだ。

「母ちゃん!!」

「は、はぁ？」

母ちゃん、と呼ばれた理由が解らず、セリアは何度も瞼をしばたかせる。辺りを見回しても、彼の母親らしき人物は見当たらないし、彼は明らかに自分に向かってその言葉を放った。けれど、自分は彼の母親になった覚えはないし、なにより彼の名前すら知らない。

困惑した視線で横に佇むザウルを見やれば、同じ様に戸惑いを含んだ瞳を返されてしまった。かなり思考が混乱しかけたが、今は何より雨を凌げる場へ移動しなければ、と冷静になり判断する。見れば少年も、自分も、そしてザウルも全身ずぶ濡れではないか。けれど、動こうにも少年が抱きついたまま動けないのだが、どうしたものか。

仕方ない、とセリアは一つ息を吐くと、少年を抱きかかえたまま

立ち上がった。幾らセリアが小柄と言っても相手は子供だ。抱き上げるくらいなら何とか出来る。突然の事にも、少年はセリアの胸に顔を埋めたまま離れる気配がない。

セリアがそのまま先程までザウルと二人で居た軒下へ非難した所で、少年は漸く顔を上げた。そのまま彼を降ろすと、セリアはそつと問いかける。

「君、何処から来たの？」

「……」

「お母さんは？」

「……」

聞かれた問いに、少年は迷う事なくスツとセリアを指差した。これにはセリアも苦笑してしまう。どうやら、本当に母親にされてしまったようだ。

「名前は？」

「……ロイド」

「そっか。家は？」

その言葉に、少年はフルフルと首を振って応えた。先程から、何か質問をしても無言かこうして首を降るばかりだ。けれど、その瞳が幼いながらも必死に涙を堪えている姿から察するに、彼なりの事情があるのだろう。その所为か、ロイドはまだこちらをとて不安げに見詰めて来る。

どうしようか、とセリアが再び悩んでいると、フツと雨が小振りになるのを感じた。視線を移せば、まだ水滴は落ちているものの、動けない程ではない。

「ザウル…… 彼を学園に連れて行っても平気かな？」

「学園にですか？ ですが……」

セリアの問いにザウルは瞳を見開いた。いくらなんでも、それは問題があるのではないだろうか。

ザウルが戸惑ったような声を発した途端、キツと力強く少年に睨まれた。ギュッとセリアの服の袖を握りしめるその拳は、若干震え

ている。それを見たザウルは、少し考える素振りを見せ、チラリとロイドに視線を移すと、ゆっくりと口を開いた。

「雨の中、子供を放置する訳には行きませんし。少しの間保護する、ということなら……」

その言葉に、ロイドは心底安心したように瞳を輝かせた。セリアも安堵したように頬を緩めると、小さな手を軽く引いてセリアはロイドを立ち上がらせる。まだ晴れ渡ってはいないものの、今のうちに移動した方が良さだろう。また何時雨が激しくなるか解らないのだから。

そうしてセリア達は灰色の雲の下を、急ぎ足で学園へ向かって歩き出した。

「漸く、収まって来た様だな」

「そう？　でも、まだ雲が厚いし、多分また降り出すと思うよ」

温室の壁を叩く水滴の音が静まり、ランが呟いた言葉にルネが返した。二人の視線の先では、ルネの言った通り、まだ灰色の雲がどんよりと空を覆っている。

「そういえば、セリアは大丈夫かな？」

「アイツがどうかしたか？　まだ来てねえけど」

「街に買い物だって言ってたよ。急に降り出したから、今頃何処かで雨宿りしてるんじゃないかな」

「……大人しくしてくれりゃあいいけどな」

アイツなら雨の中走り回っていても可笑しくはない、とイアンが眉を寄せると、ルネが明るく笑って否定した。

「流石にセリアもそれはしないんじゃないかな。大丈夫だよ」

「そう、だよな……」

流石のセリアも、こんな雨の中、ずぶ濡れになりながら走り回るような真似はしないだろう。ルネの言葉にイアンは納得したように表情を緩めると、一度ハハハと軽く笑った。けれど、その空気を割るように訪問者が現れる。

ヒヤリと冷たい空気を感じたかと思うと、ポタポタと水が滴り落ちる音が響く。人が入って来た気配にそちらを見やれば、見るも無惨に全身ずぶ濡れの状態のセリアが立っていた。

「セリア!？」

「ご、ごめんなさい。取り敢えず、ここかなと思って」

「……?」

そのまま中へ入るセリアを見ていた候補生達は、その裾にしがみつく妙な物を見付けた。目を見開いてそれを凝視していれば、ザウルがその後から大変気まずそうに温室に現れるのが目に入る。

彼なら事情を知っているだろう事を瞬時に理解した候補生達は、説明を求めるような視線を投げかけるが、何を聞く前にその琥珀の瞳は逸らされた。言葉は無くとも、今の状況を察するには十分だ。

「……またか!？」

何を、と聞かずともその場の者全員が、イアンのこの言葉の意味を理解したことは、言うまでもない。

妙な沈黙が流れるが、それをいち早く割ったルネが慌ててセリアに駆け寄った。

「セリア。取り敢えずそのままじゃ風邪引くし、着替えて来たら？」

君も、乾かさなきゃいけないしね」

そう言ってルネがロイドの前に屈むと、途端に警戒心を強めたロイドがセリアの裾をギュッと握った。

「俺、母ちゃんと一緒に居る」

「……ん?!？」

母ちゃん、と言ってセリアにしがみつくロイドに、その場の全員

が頭に疑問符を浮かべる。そして、小さな少年の言葉が、セリアに向けて放たれた言葉だと気付くと同時に驚愕した。

「……はあ!？」

「あ、あの。これには、色々と事情と言うものがありましてと言いますでしょうか。ですから、その、なにかから話しすればよろしいのか……」

責めるような、怒られているかのような、そんな苛立ちの様なものを含んだ瞳を一斉に向けられ、セリアは大いに怯んだ。というより、何で自分がこんな目に合わなければならぬのだ。

言い淀むセリアに痺れを切らし、候補生達が横のザウルに再び視線を向けた。今度は逃がさない、とでも言わんばかりに強く。鋭く睨まれたザウルも、何から説明すれば、と口籠る。どんなに睨まれたところで、自分でも事態を把握しきれていないのだから。

全員がその場で混乱し出す中、奥に座って事の成り行きを見守っていたカールが立ち上がった。そのまま静かにセリアの前に佇むと、外の空気よりも冷えた視線を向けて来る。

「手短に説明しろ。それは何だ」

「い、いえ。あの……」

それ、と言われた先には、カールを見てすっかり怯えた表情のロイド。それもそうだろう。今のカールの形相は、いつもの彼を見慣れたセリアでも竦み上がってしまう程に恐ろしい。しかも、周りの空気が急激に冷え始めれば、誰でも固まってしまおうというもの。

数秒は呆然としていたロイドだが、ハッと正気に返ると、急に目に涙を浮かばせ、嗚咽を上げながらセリアの背に隠れてしまった。その様子に慌てたようにセリアが屈んで慰めにかかる。けれど、ロイドはすっかり恐れをなしてしまったようで、嗚咽は段々と泣き声に変わって来る。

「う、うわあああん。母ちゃん!!」

遂には大声で泣き出し、母ちゃん、と叫びながらセリアに抱きついてしまった。その様子に、カールの眉間の皺は、更に深さを増す。

額にはくつきりと怒りの証が刻まれており、苛立ちは最高潮に達したようだ。段々と不穏な空気を醸し出すカールに慌てながらも、必死にロイドを泣き止ませようとセリアは努力するが、その甲斐空しく、幼い子供の声は温室の外にまで響き渡った。

すると、その声を聞きつけたのだろう、とても厄介な人物がこの場にやってくる事になる。

「皆、どうしたの？　なんだか子供の声が聞こえたみたいだけど……」

どうかしたのか？　と半分は心配で、残りは好奇心で彩られた瞳を輝かせたクルーセルが温室に顔を覗かせた。そしてセリアに抱きつく少年を見つけ、こちらも目を見開く。

「ク、クルーセル先生!？」

突然現れた担任教師に、まだ自分を母と呼びながら泣きつく子供を宥めながらも、セリアは驚きで声を上げる。何故ここに彼が居るのだろうか。というより、コレはもしやかなりまずい状態なのではないだろうか。

それまで驚いた様に温室の入り口で固まっていたクルーセルだが、ハッと何かに気付いたような顔をした。すると途端に瞳を真剣にさせ、ロイドに合わせて屈むセリアの肩にそっと手を置いた。

「セリアちゃん。正直に答えなさい」

「……は？」

クルーセルの表情が余りにも真剣だったものだから、セリアのみならず、候補生達もそちらに集中した。一体何を聞かれるのだろうか、と疑問に思ったセリアだが、嘘を許さぬ雰囲気には押され、おずおずと頷く。

温室内を走った緊張で、周りの空気が一瞬静まり返ったような錯覚の後、その言葉はゆっくりと発せられた。

「父親は誰？」

「……は、はああ!？」

予想だになかったクルーセルの問いに、セリアを含め、温室内

の候補生達が、未だかつて無い程の絶叫を上げた。

## 冷雨 1（後書き）

それは、誰でも自然に求めるもので。誰もが当然与えられる筈のもので。

でも、それを手に出来ずに苦しむ人も、実は多い。

だけど、伸ばした手が誤ったものを掴んでも、意味がないから。



## 冷雨 2

「そう怒らなくてもいいじゃない。ちよつとした冗談よ」

「……………」

おどけた口調でそんな事を言ったクルーセルの視線の先では、明らかに苛立った様子の教え子達。

この男が言うところの冗談に聞こえないから性質が悪いのだ。と候補生達が心中で悪態を吐いた事など、クルーセルは微動も理解していないのだろう。あるいは、理解していながら敢えて生徒をからかって楽しんでいるのか。だとしたら、もう手のつけようがない。本当に教師か、と疑いたくもなる。

とんでもない質問をされ、泡を噴く勢いで混乱しだしたセリアだがハッと正気に返ると、父親は誰かと聞きながら候補生達を見回したクルーセルに向かって必死に首を横に振り出した。最早、驚きと焦りで声も出せない状態だったのだろう。それを見て流石に気の毒だと思ったのか、クルーセルも自分の言葉を撤回した。

「でもセリアちゃん。その子はどうしたの？」

「は、はい。実は……」

さり気無くこの場を離れ、色々と温室へ持ってきたのだろうルネに、やんわりと渡されたタオルで濡れたロイドの髪を拭いてやりながら、セリアはポツポツと事情を話し始めた。その途中で、本当か？と疑問を含んだ様な視線が、常にザウルを射抜いていた為、ザウルは毎回小さく頷く羽目になったが。

「……大体の事は解ったわ。でもどうするの？」

「その、放置する訳にも行かなかったので。えっと……どうしましよう……」

そう言って困惑した顔を見せるセリアに、候補生達は心底呆れた顔を見せる。面倒事を拾ってくる癖は、何時になったら改善されるのだ、と。溜め息を吐いても、セリアがそれに気付く望みは毛程も

無いのだが。

「取り合えず、校長に報告してくるわね。街でも迷子の届けが出てるかもしれないし」

「す、すみません。宜しくお願いします」

「いいのよ。それよりセリアちゃんもちゃんと着替えるのよ。あんまり冷えると身体に障るからね」

そう言って、もう殆ど止んでいる雨の中、温室を軽やかに出て行ったクルーセルは、まるで面白い物を見つけた時の様に、上機嫌であつた。明らかに、今の現状を楽しんでいる。その後ろ姿に、候補生達が肩を落としたことに、彼も恐らく気付いているのだろう。どうも遠くなっていく鼻歌が、耳につく。

セリアが一通り髪を拭き終わると、ロイドはムツと顔を上げた。

「俺、母ちゃんと一緒に居る」

先程から何度もその言葉を繰り返している。絶対に譲らない、と言った表情で言われ、セリアも再び困惑した。

さて、どうしたものか。と首を傾げて考えていると、その横にスツと影が立った。驚いてそちらを見やれば、再び険しい表情のカールがこちらを睨んでいる。額に浮かぶ青筋からも読み取れるが、機嫌はすこぶる悪いらしい。

「さっさと元居た場所に捨てて来い！」

「え、えええ！？そ、そんな、ダメだよ」

「貴様は、養護施設でも作るつもりか！？」

「いや。だって……」

先ほど顔を見ただけで大いに泣き喚かれ不愉快な気分になっていたところに、先ほどの父親発言があつたのだ。それ以前に、セリアが面倒事を持ち込んだ上に母親にされてしまっているのに。と、カールは不快の文字を額から隠す事もせず、小さな少年と少女を見下ろした。

再びあの冷え切った視線を向けられ、泣き出しそうな顔をするロイドを氣遣って、遂にルネが制しにかかる。

「カール。そんな事言わないでも。少しの間ここに置くくらい良いんじゃない？」

「ほら。そう怖い顔するなって。また泣き出しちまうだろ」

ルネと共にイアンもカールの肩を叩いて宥めたが、それは魔王様の機嫌を更に損ねる結果に終わった様で、カールはそのまま無言で温室の奥に置かれたベンチへ向かってしまった。その様子に、他の候補生達も肩を竦める。

「しかし、セリアが母ちゃんとはな」

「どっちかっていうとお姉さんじゃない？」

ロイドの顔を覗き込みながらルネが聞いてみるが、本人は呼び方を変える意思は無い様で、再び母ちゃん、と呟くとセリアの腕をキユツと掴んだ。その様子に、他の候補生達も諦めた様に息を吐く。すると、イアンが何かを思いついたように瞳を輝かせた。そしてロイドの前にしゃがみ込むと、その目線を合わせる。

「なあ。俺の事、父ちゃんって呼んでもいいんだぜ？」

「なっ！？イアン。お前！！」

その言葉の意味を理解した途端、焦った様にランがイアンに詰め寄るが、本人はまったく気にしていない。横で聞いていたセリアも哑然としている。というより、何故イアンが父ちゃんになるのか、さっぱり分からない。

言われた当のロイドはイアンの言葉には返さず、すっと俯いた。けれど、イアンはそれでも諦めない。

「な。セリアが母ちゃんなんだろ。父ちゃんって呼んでみないか？」

「……いやだ！」

興味津々で、心底楽しむ様に迫るイアンだったが、ロイドのその言葉に一刀両断されてしまった。

幼いながらも強気な声に、イアンは目を見開くとグツと言葉に詰まる。それと同時にその場の空気が一瞬固まった。僅かな沈黙の後、

その様子にルネが耐え切れなかった風にくスクスと笑い始めると途端にイアンは不満そうに抗議する。

「なんだよ」

「ううん。クスッ……残念だったね、イアン」

心底楽しそうに言われたイアンは返す言葉が見つからず、唸りながらバツが悪そうに頭を掻いた。周りからの非難めいた視線も、今は甘んじて受け入れている。

未だに忍び笑いを漏らしているルネは、肩を揺らしながらテーブルの上に小さな皿を置いた。その上には甘い匂いを放つ焼き菓子が並べられている。先程タオル等を取りに行った際に、これも用意したのだろう。

こんがりと程よく焼き目が付いた菓子に気付いたロイドが一瞬瞳を輝かせたのを、ルネは見逃さない。一度置いた皿を持ち上げ、ゆつくりとロイドに視線を合わせると、天使の微笑みを浮かべながらそれを差し出した。

「お腹空かない？　おいしいよ」

「……」

その言葉にまるで吸い寄せられるようにロイドは菓子に手を伸ばす。そして一つ摘み上げると、珍しい物でも見る様に、ジロジロと観察しだした。一通り見詰めていたが、我慢も限界にきたようで、チラッとセリアを見やる。その視線に気付いたセリアが優しく微笑んでやると、凄いい勢いで菓子に被り付いた。それはもう、心底空腹だったと訴えるかのように。

「しかし、彼は何処から来たのでしょうか？」

ガツガツと菓子を口に放り込むロイドに視線を留めたまま、ザウルが呟いた。その問いに、セリアは再び頭を悩ませる。

確かに、ただの迷子ではないだろう。でなければ、自分が母親呼

ばかりされたりはしない筈だ。ならば家出だろうか。けれど、先程から何を聞いても一向に答える様子が無い。

「……ロイド。これを食べたら帰ろう」

言い聞かせるようにルネが最期の焼き菓子を差し出すとロイドは、それまで懸命に菓子を口に詰め込んでいた手をピタリと止めた。そして、それきり菓手に手を伸ばそうとしない。どうやら、それを食べれば帰らなければならないと思ったらしい。

「じゃあ、いらない……」

最後の菓子を恨めしそうに睨みながら言うロイドに、候補生達は驚いた。

菓子の数はそれほど多くは無かった筈である。空腹だったのであれば、まだ満足はしていないだろう。その証拠に、ロイドはジッと菓子の前から動かない。

あれほどがつついていたにも関わらず、帰るとなれば途端に手を止めるとは。小さな子供であれば、駄々をこねて菓子を食べてもまだ帰らない、と言い張ることもあったろうに。しかし、ロイドはそれをせずにここに残る事を選んだのだ。

けれどやはり子供。瞳はまだ菓手に釘付けのまま動く様子はない。その目は心なしに潤んでいるようにも見える。流石にかわいそうになり、セリアはすっと残された菓子を手に取った。その瞬間、ロイドが涙を目に貯めながら縋る様に見上げる。それを見たセリアはもう一度優しく微笑むと、菓子をロイドに差し出した。

それでもロイドは首を横に振って受け取ろうとはしない。その姿に、セリアはゆっくりと口を開いた。

「大丈夫。食べても帰れとは言わないから」

「……本当に？」

「うん。でも、何で帰りたくないのかは聞かせてくれる？」

「……………」

ジッとセリアと菓子を見比べたロイドは、何かを決心した様に瞳を輝かせると、小さく頷いた。それと同時にセリアの手にあった筈

の菓子は、あっという間にロイドの口の中に消えていった。モグモグと咀嚼する姿は、やはり年相応で可愛い。

ゴクリと喉を鳴らしてそれを飲み込むと、ロイドは俯いていた顔を漸く上げた。

「……美味しい」

「よかったね。じゃあ約束、守ってもらえる？」

「……うん」

セリアの言葉にスツと悲しそうに瞳を細めると、ロイドは静かにもう一度頷いた。

「俺、もう家に居たくないんだ」

「……どうして？」

「………」

約束してしまった以上仕方ない。とばかりに、ロイドは語り出した。けれど、先程よりも表情は暗くなっている。その姿に、候補生達も多少胸が痛んだが、やはり話して貰わなければ、彼等も行動が出来ないのだ。

「父ちゃんに忘れられちゃうから」

「……え!？」

「俺の母ちゃん、一年前に病気で死んじゃったんだ。俺も父ちゃんも一杯泣いた。でも、父ちゃんが居たから寂しくても我慢したんだ」

「……そうだったの」

悲しげに語るロイドは、自分の本当の母親を思い出しているのだろうか。小さいながらに寂しさを乗り越えようと努力したのだろう。先程から見られる強気な瞳は、それ故なのだろうか。

「なのに父ちゃんが、新しい母ちゃんを連れて来たんだ。大好きな母ちゃんの事忘れちゃったんだ」

「………」

「そんな父ちゃんなんか知らない!! 母ちゃんが居なくても二人で

頑張りうって約束したのに、忘れたんだ！！……俺の事だっすぐに忘れちゃうよ」

遂に耐え切れなくなったのか。ボロボロと大粒の涙を零しながら、最後の言葉はか細い声でなんとか絞り出されたようであった。必死に嗚咽を堪えながら、こぼれ落ちる涙を拭う姿は、小さな少年には似つかわしくない程苦しげだ。

まだ母を亡くして一年しか経っていない少年だ。その頃の記憶もまだ多く残っている時に、父親の再婚を聞き衝撃を受けたのだろう。

ロイドの言葉に、セリア達もそうか、とゆっくり頷く。

大体の事情は解った。けれど、やはりこのままにはして置けないだろう。家に帰さない訳にも行かない。かといって、素直に帰りそうもない。

どうしようか、とセリアが悩んでいると、横をスッと誰かが通り過ぎた。その後を、長い赤髪が流れる。驚いてその後ろ姿を追うと、その影はロイドの前で屈みその肩に手を置いた。

ジッと自分を覗き込んで来る琥珀の瞳に、ロイドは一瞬たじろぐ。けれど、ザウルはその肩をグッと引いてロイドの視界に自分の表情をはっきりと映した。

「貴方のお父上は、貴方のお母上を忘れたりはされていませんよ」

「……で、でも」

「どんな事があっても、貴方のお母上が亡くなられた時、お父上が流された涙は本物です。解りますね？」

「……………」

一つ一つの言葉をゆっくりと、そしてはつきりと紡ぐ。言い聞かせるザウルの言葉に、ロイドは何も返さずジッと琥珀色の瞳を見返していた。けれど、その内に沈黙に耐え切れなくなったのか、ポツリと洩らす。

「忘れたから、新しい母ちゃんが来ても平気なんだ」

「それは違います」

「……………」

「……貴方はその方と会っていますね？」

連れて来た、ということは、父親が再婚相手を息子に紹介したの  
だろう。ザウルの問いにロイドはゆっくりと頷いた。

「どんな方でした？」

「……優しい人だった」

「そうですか。その方と一緒に居られて、お父上は幸せそうでした  
か？」

「……解らない。でも、笑ってた。嬉しそうに家に連れて来たから。  
前みたいに、母ちゃんの事思い出して泣かなくなった」

「貴方と同じ様に、お父上もとても苦しまれた筈です。そんな時、  
その方はお父上の支えになっておられたのでしょうか。その方に愛情  
が芽生えたからと言って、お母上を忘れた事にはなりません」

「でも……」

一度治まりかけていた涙が、再び溢れ出す。やはり受け入れられ  
ない、と縋る様な瞳が見返して来た。けれど、ザウルは尚もロイド  
の肩を離そうとはしない。

「貴方はお父上をお嫌いですか？」

「えっ!？」

唐突な問いにロイドは目を見開く。驚くロイドを他所に、ザウル  
はジッと小さな少年を見据える。嘘を許さぬ真剣な雰囲気、その  
場の誰もが息を詰めた。

「……大好きだよ!! 俺は父ちゃんが……」

「ならば、貴方がしなければならぬことは、お父上の決断を頭ご  
なしに否定して、逃げ出す事ではない筈ですね？」

「……………」

「それに、お父上は貴方の事を一番に考えられている筈です。貴方  
を忘れるなんて、絶対にありません」

強い口調で言い聞かせるザウルに、温室内は緊張していた。小さ  
な子供に言うには、多少きつかったのではないだろうか、とも思う



がそれを言葉にする者は居なかった。

同じ様に母を亡くし、悲しむ父を見て来たザウルだからその言葉なのだろう。似た苦しさや辛さを理解している分、重みもあった。恐らく、それをロイドも敏感に感じ取ったのだろう。何かに耐える様にグツと唇を噛み、俯く姿からは、必死にザウルの言葉を受け止めようとしていることが窺える。

静かな温室の沈黙を破ったのは、ロイドが遂に堪え切れずに洩らした、大きな泣き声だった。

「本当にここまででいいの？」

「うん。姉ちゃん、兄ちゃん、ありがとう」

セリアを母ちゃんではなく、姉ちゃん、と呼んだロイドは、学園から多少離れた道の奥を差しながら微笑んだ。自宅前までロイドを送って来たセリアとザウルは、駆け足で家へ向かう少年の後ろ姿を静かに見送る。そして、扉の向こうに消えるまで見届けると、一つ短く息を吐いた。

何はともあれ、これでもう母親にされることはないだろう。

「流石に、母ちゃんって呼ばれた時は驚いたね」

軽く笑いながらセリアは言ったが、それに返したザウルの表情と声は、意外にも真剣であった。

「冷たい雨の中、優しく手を差し伸べてくれたセリア殿を、まるで母親のように感じたのでしょうか」

「……ザウル？」

悲しげに呟いたザウルを疑問に思いセリアがそちらを見ると、琥珀の瞳が、今は寂しそうに揺れていた。どうしたのか、とセリアが聞こうとするが、頬に感じた冷たい感触につい顔を上に向ける。

見上げた灰色の空からは、先程までは治まっていた筈の雨が、再び降り出した。

「わっ！降ってきた」

「セリア殿。こちらです」

途端に手を引かれ、セリアは焦りながらもそれに従った。二人揃って慌てて近くの軒下へ避難する。

「折角止んでたのに……」

「……………」

雨を凌ぐ為、先刻の様に軒下で二人並んで立つ。そんなザウル達の目の前を、ポツポツと大きな雨粒は落ちて行った。

空から落ちる水滴を、ボンヤリと眺めていたが、妙な沈黙に僅かな違和感を感じたセリアは、チラッと隣の友人を窺う。その先では、ザウルがとても悲しそうな顔で空を眺めていた。先程から、どうかしたのだろうか、と不思議に思い、セリアは声を掛ける。

「ザウル？」

「あっ！？　すみません。少し考え事をしていて……」

「……………」

降りしきる雨の音に混じって出された言葉は、何処か不安を含んだ色だった。それに気がついたセリアだが、言葉が見つからずに再び口を閉じる。その結果、再び沈黙が流れる事になったが。

けれど、次にその空気を破ったのは、ザウルの声だった。

「……雨は……お好きですか？」

「えっ！？　えっと、嫌いではないかな」

「自分は好きではありません。灰色の空や、湿った重い空気が」

「……………」

「なにより、まるで涙の様な雨が」

そう言うと、ザウルはそれきり黙り込んでしまった。それと同時に、余計な事だったか、と僅かな後悔も押し寄せる。これではまるで愚痴ではないか。少なくとも、聞いていて気分が晴れる話題ではないだろう。

段々と纏う空気が暗くなって行くザウルに、セリアは気付くことなくのほほんと返した。

「確かに、空が泣いてる様にも見えるね」

明るい口調で言ったセリアは、それはまた斬新な意見だ、と妙に感心している。その呑気な空気に、重苦しくなりかけた雰囲気もふっとんだ。それにザウルは一瞬呆気に取りられてしまう。けれど、セリアそれに気付く事なく続けた。

「それに濡れるし、気温も下がるから、雨の間は良い事はばかりじゃ無いよね」

そう言えば小さい頃、雨が降って来たにも関わらず、そのまま外で遊び続けていたら泥だらけになった事を思い出した。そのまま屋敷へ帰ると、身体を冷やした上に、床を汚した事で怒られた事も。

その話を聞いたザウルは、何と返して良いか解らず、苦笑するだけに終わったが。

「でも、雨上がりは好きだな」

セリアがそう言ったと同時に、それまで音を立てて流れていた雨が、ピタリと止まった。名残惜しむかの様に最後にポツリと一滴零してから。その一滴が地面に到達し、ピチャンと音を立てる。すると、今度は雲が割れ、その間から今まで隠れていた日が覗いて来た。「空気は澄んでるし、色々な所に残ってる水が陽の光に反射するから綺麗だし」

止んだ雨を確認する様に手を前に出しながら、セリアが軒下から一步出れば、その場を丁度温かな日差しが照らしていた。まだ影の下に居たザウルには、それがとても眩しく映る。

「でも、雨が降らないと雨上がりはないから。だから、私は嫌いじゃないな」

「……………そうですね」

何時もと変わらぬ笑顔で笑ったセリアに、ザウルも漸く穏やかな表情を返した。普段ののんびりとした表情。雨の様に泣くだなんてとんでもない。それどころか、雨雲を押しつける程呑気で暖かな笑

顔だ。それが、雲から覗く光の筋に当たって、一層明るく見える。  
これも、いいかもしれない。

「もし、次の雨上がりの時も、こうして貴方と一緒に過ごせるのなら」

「ん？ 何か言った？」

「いいえ。何も」

それなら、次の雨を、少しは晴れた気分で待ってみるのもいいかもしれない。

## 冷雨 2（後書き）

相変わらず、彼女はああいったものが苦手のようにだ。

まあ、そこまで心配するほどのことでもなかったようなので安心した。

けれど、ああして一日中気を張っていては落ち着かないのではないだろうか。

## 遊戯 1

「わあああああ」

大きな叫び声と同時に、セリアは寝台から跳ね起きた。その瞳は、まるでこの世の終わりでも見たかのように、動揺の色で揺れている。何が起きたかも判らず、ハアハアと荒い呼吸を繰り返しながら、セリアが辺りを見回すと、部屋は窓掛けからはみ出た朝の日差しで僅かに照らされていた。といっても、今が随分早い時刻なのは確認しなくとも解る。

そのまま暫く呆然とした後、セリアは漸く今の状況を理解した。

「ゆ、め……」

一度言葉にすると何と単純なことか。

けれどだからといって、笑い飛ばす気にもなれず、寝汗でぐっしよりと湿った寝衣を脱ぎながら、身支度を整える。沈んだ気分のままノロノロと動いていたが、なにせ目覚めた時間が早い。再び時刻を確認するが、まだ授業には程遠い。かといって、このまま何もせずに部屋でぼんやりしていても、また嫌な物を見てしまいそうだ。

どうしようかと悩んだが、どうしてもこのまま部屋に留まる気にはなれない。仕方なく、のんびり散歩でもしながら教室へ向かおう、とセリアは静かに部屋を出た。

朝の空気は早ければ早いほど清々しい。けれどセリアは、爽快感など微動も感じず、トボトボと道を歩いていた。

やはり、このような時間に校舎へ向かおうと言う物好きは少ないらしく、他の生徒の姿は見当たらない。なんとなく人影を探して視線を彷徨わせて見るが、どうやらその甲斐は期待出来なさそうだ。

流石に、今校舎へ行っても同じく時間の無駄だろう。そんな風に

考え、のんびりと歩きながら自然と足が向いたのは、林に面した池の畔。キラキラと朝日を反射する水の前に立てば、幾らか気分が晴れる気がした。そのままぼんやりと光る水面を眺める。

「セリアちゃん！」

「ぎわあっ!!」

ぼうつとしていた所を突然後ろから声がかかったものだから、セリアは飛び上がって驚いた。といっても、この驚き方は異常である。朝の林に響く悲鳴にクルーセルは目を見開いた。

「ご、ごめんねセリアちゃん。驚かせちゃって」

「ク、クルーセル先生!？」

それがよく知った人物だと理解すると、セリアは心底安堵する。けれど、同時に急激に青ざめた。幾ら何でも、今のは失礼だっただろう。

「す、すみませんでした。本当に、ごめんなさい」

「いいのよ。急に声を掛けた私も悪いんだし…… でもどうしたの？　なんだか顔色が悪いみたいだけど」

言われてセリアはギクツと肩を揺らす。まさか、悪い夢に魘されて、その所為で少し気を張っていた、などとは言えない。夢の内容を聞かれるなどもってのほかだ。と考えていたら、先ほど寝ている間に見た光景が思い起こされて再び気が沈んでくる。

顔を更に青くしたセリアに、クルーセルは慌てた。

「ちよっ!？　セリアちゃん！　大丈夫?」

「す、すみません。ちよつと気分が優れなくて……」

クルーセルにはそう言って誤魔化すことにした。すると、今日の授業は大丈夫か?　と更に心配させてしまった。そんなクルーセルに、セリアは非常に申し訳ない気持ちで一杯になりつつ、平気なことを伝える。まさか、こんな理由で授業を休む訳にもいくまい。

平気なことを必死に説明すると、クルーセルは漸く納得してくれたようだ。心配そうな表情を見せながらも、引き下がってくれた。

「すみませんでした。ご迷惑お掛けして」

「そんなことないわよ。それに、こんな朝早くからセリアちゃんに会えて私も嬉しいし」

有り難い言葉には違いないが、そこでセリアは気づく。クルーセルが居るということは、もうそんな時間だったろうか、と。どうやらかなりの時間をこの場で過ごしてしまったようだ。

未だに気遣う素振りを見せるクルーセルと並んで、セリアは重い気分のまま、ゆっくりと校舎を目指した。

「で、どうしたの？セリア」

どうも一日冴えない様子のセリアに、候補生達が気づかぬ訳がない。どうしたのだ、と気を使いながら、その日は一日中セリアを観察していた。

授業後になっても青白い顔のままのセリアを見かね、ルネがとうとう切り出したのだ。聞かれたセリアは途端に顔から血の気が引く勢いで暗い表情を見せる。

「い、いえいえ。なんでもありませんと申しますでしょうか。特にこれと言って変わった様なことはないと思いますですが」

「……………」

いつもの癖で、辛うじて理解出来る程の、不思議な口調で喋るセリアに、候補生達は逆に何かあったのだな、と確信する。

「セリア。取り合えず落ち着いて」

目の前のテーブルに紅茶を用意しながら、まあ座れ、とルネが促すと、セリアは素直に従った。差し出された紅茶を一口含めば幾らか落ち着く。それを待っていたとばかりにルネが再び尋ねてきた。

「それで、どうしたの？」

「うっ、それは……」

天使の微笑みで聞かれては、嘘をつくことは最早不可能。下手な



誤魔化しも彼らには通用しないことも、セリアは身を持って既に体験済みである。怯みながら辺りを見回せば、幾つも飛んでくる視線。どうやら、彼らが納得する理由を述べない限り、逃がしてはもらえなさそうだ。そう理解すると、セリアははあっと息を吐いた。

「それが、悪い夢を見て……」

「どんな？」

「うっ、その……」

ポツリポツリとセリアは話し始めた。

「あははははははは！！」

今、温室にはイアンの笑い声が大きく響いていた。当人はそんなことに気にした様子を見せず、腹を抱えながら涙を流す勢いで、いまだに笑い続けている。その横では、どうしたものか、と困惑したザウルや、堪え切れずに肩で笑い始めたルネの姿まで。

「それで今日一日ビクビクしてたのか」

「そ、そんなに笑うことないでしょう」

あまりにもイアンが笑い続けるものだから、セリアは恨めしそうに睨んだ。けれど、そんなもの効果がある訳もなく、イアンの笑い  
は止まる様子を見せない。

「相変わらず、ああいうのが苦手なんだな」

「……」

セリアが見た夢の内容とは、昔から苦手としているものだ。

「それで、白い幽霊に食われるって？ あはははははははは」

「やはり、先日の一件の所為では？」

ザウルが言う、セリアは多分、と自信なさげに答えた。けれど、それが原因であろうことは誰もが理解している。

ザウルの言った先日の一件とは、学園内で夜中に白い影が出る、と生徒達が噂した件だ。結局、一部の生徒の悪戯だと分かり、事件

は解決したのだが、セリアにとっては恐怖の数日間であった。その名残が、今こんな形で出るとは。

「じゃあセリア、寝不足なんじゃない？」

「それほどじゃないから大丈夫なんだけど」

「でも顔色悪いよ」

一日中気を張り詰めていた所為で、かなり体力を消耗したらしい。言われたセリアは、たしかに疲れた表情をしている。

「下らん……」

低く響いた声にセリアが顔を上げれば、相変わらず冷めた瞳がこちらを見下ろしてきた。けれど、普段は涼しいその表情に、今は多少の苛立ちが含まれているようにも見える。

「ありもしない幻想に脅えるなど、意味がない」

「うっ……」

「その懦弱した様で、己の目的など果たせるのか？」

口の端を僅かに上げ、挑発するようなカールの言葉にセリアもピクリと反応した。キツと視線を向けると、カールは更に口を吊り上げる。その様に、セリアもつい強い口調で言い返してしまった。

「なんですって!？」

「フン。事実を言ったまでだ。今日をその下らない理由で無駄にする積もりなら、好きにするがいい」

鼻で笑うカールに、セリアもとうとう怒りを抑えきれなくなる。

まるで見計らったかの様にルネが差し出した資料を受け取ると、カールの前に立ちはだかった。

「いいわよ。無駄になんかしないから!」

「ほお」

バチツと火花を飛ばす勢いのセリアに、ルネ達も漸く安堵する。やり方に多少の問題がある気もするが、取りあえず、もうセリアの心配はないだろう。一度火が付けば、セリアもいつも通りの状態に戻るだろうから。実際、先程までまるで覇気が感じられなかったことが、今は嘘のように対峙している。

ただ、カールの行動が、それを狙ったことだったかは不明だが。

カールの言葉に押され、午後は余計な事を考えずに過ごせたセリアだが、夜になり寮で一人になると、また不安がぶり返してきた。部屋の中を落ち着きなく歩き回りながら、クローゼットの中だとか、ベッドの下だとか、あらゆる箇所を恐る恐る確認している様は、傍目から見れば、かなり怪しいだろう。何が潜んでいる筈もないのに、視線はチラチラと部屋の様子を伺っていた。

ビクビクしながらでは、何かに集中することも出来ない。特にすることもないので、もう寝てしまおうかとセリアが思案していたところに、唐突に何かを叩く様な音が響く。その途端、面白い程に肩を揺らし、飛び上がらん勢いで反応したセリアは、慌ててその音の発信源を探した。

キョロキョロと部屋を見回していると、再びあの音が響いた。それが、外から窓を叩く音だと気づくと、慌ててそちらに駆け寄る。外を確認すれば、そこには驚いたことにここに居るはずのない人物が居た。

「イアン!？」

「だから、大きな声を出すなって」

口に指を当てて静かにしろ、と言うイアンは、いつものように木の枝に腰を掛けている。すっかり定着してしまったような位置だが、彼がここに居てまずいことに変わりはない。

「ど、どうしたの？」

「どうせまた脅えてるんだろうな、と思って来たただだ。そしたら、

本当に部屋の中をウロチョロしてるのが見えたからな」

「……いつから居たの？」

「10分くらい前だな」

ということは、先程からの自分の行動をバッチリ見られていたということになる。居るなら居ると言ってくれば良いのに。と思ったセリアの内心を読み取ったのか、イアンは宥めるように頭に手を置く。

「本当に見てて飽きないな。お前」

「あんまり嬉しくない」

セリアが素直に感想を述べると、イアンは堪らず噴出した。セリアの頭に置いた手はそのままに、もう片方の腕で腹を抱えながら笑い出す。

「まあ、そう怒るな。どうせ一人じゃ寝られねえだろ」

「うっ！」

凶星を突かれてセリアは言葉に詰まった。別に怒っていたわけではないが、一人で居ることが不安だったのは事実だ。実際、ベッドに入ったところで、すぐに寝付けたかどうかは怪しい。とそこで、これはもしや気を使わせたのか、と気づいた。

「ごめん。ありがとう」

「気にするなって。俺が勝手にしたことだからな」

「うん。でも、迷惑かけてごめん」

その一言にイアンは一瞬不満そうな顔を見せた。それと同時に、フツと短いため息が聞こえる。

こうして気を使うのも、心配で様子を見に来るのも、すべて自分が望んでいることだと、この少女はいつになったら理解するのだろうか。

もしどうでもいい相手だったら、わざわざ夜に部屋を訪れたりなどしない。自分はそんな失態はしないが、万が一見つければ、いくらマリオス候補生といえども、どうなるか分かったものではないのだから。

迷惑だなどと思ったことは無いし。むしろ、こうして二人きりの時間が作れることが、自分としては至福なのだ。

自分から、女性に何かを与えたいと思ったのは、正直セリアが初めてだった。今までは相手が望めば、自分の出来る範囲で叶えてきたが、それで終わりだ。ここまで気にすることもなかったし、夜にこっそり抜け出して様子を見に来るだなんて、考えられなかっただろう。だから、迷惑などと思われるのは、正直言って不本意である。そんなイアンの内心を、これっぽっちも読み取っていないセリアは、一瞬見せたイアンの不満そうな表情に不安を覚えた。やはり、このように気を使わせるのは迷惑なのではないだろうか。それに、いつまでもここに留まらせて居ては、見つかる確率が増えてしまう。わざわざ来てもらったのに悪いが、ここは直ぐに戻って貰った方が良いのではないか。

そう思っただけでセリアが言葉を発する前に、イアンがワシワシヤと頭を強く撫でてきた。突然のことにセリアも慌てる。

「わっ！ な、なに！？」

「お前は余計なこと考えるな。いいから素直に甘えてろ」

「あ、あまえる……？」

訳が分からない、といった顔をするセリアに、イアンは苦笑してしまった。

今はどうしても、理解してはもらえないらしい。まあ、これからゆっくり、じっくりと分かせてやるのも悪くはないかもしれないが。

そんなやり取りをしていたセリアとイアンの横で、別の窓が開く音がしたものだから、二人は慌ててそちらを振り向く。すると、開いた窓からスツと青髪が覗いた。どうも虫の居所が悪いらしい。こちらを見据える視線は、何かもの言いたげだ。

また煩くしてしまったか、と心配したセリアを他所に、アンナはスツと白い封筒を差し出してきた。

「朝、居なかったようだったから預かったの。声が聞こえたから、

こちらからの方が早いでしょう」

そういつてアンナはイアンに封筒を向ける。確かに、部屋が隣だといっても窓から渡せば、わざわざ部屋を出る必要がないのだから早いかもしれない。早いというより、ただ本人が面倒だったからというだけかもしれないが。

イアンに封筒が渡ったことを確認すると、部屋に引っ込むかと思っていたが、まだ何か言いたいことがあるようで、アンナは口を開いた。

「それと、何度も言うようで悪いけど、静かにしてもらえる？」

「ご、ごめん」

やはりか、とセリアは慌てて頭を下げた。本当に、何度も迷惑を掛けているようで申し訳ない。けれど、アンナが更にその眼光を鋭くし、次にイアンへその視線を向けた。

「イアン・オズワルト様。発覚した場合に、こちらまで咎められるような事態にはしないと、お約束して頂けますね」

「あ、ああ。約束する。悪かった」

その答えを聞きアンナは満足したのか、さっさと自室へ今度こそ消えていった。その姿を目で追いかけていたセリアとイアンだが、隣の窓が閉まると同時に息を吐き出した。

「びっくりした」

「まあ、ちょっと騒ぎすぎたかな」

忘れてしまいそうになるが、今は夜なのだ。生徒達はもう寝静まっている頃であり、騒々しくすれば見つかるのは当然だろう。

多少反省したイアンは、その手に残っている封筒をセリアに差し出した。

「まあ、いい友達なんじゃねえか？」

彼女がセリアの心配をしてくれたからこそ、助かったこともあるのだ。それが本当に心配故の行動かは、微妙なところだが。取りあえず、こうして校則を破っているところを見ても、口を閉ざしていてくれるのだし。連帯責任が面倒なだけ、ともいえなくもない

が。

結局のところどうなのだろう、とイアンが内心で思考を巡らせていると、セリアがその封筒の差出人を確認しているところであった。その瞳が嬉しそうに輝いたので、イアンは興味を引かれる。

「誰からだ？」

すると、セリアは笑顔で封筒を差し出して来た。それを受け取り、そこに記された名を見たイアンは、不覚にも一瞬怯んでしまう。

『カレン・ボワモルティエ』

## 遊戯 1 (後書き)

楽しみだわ。今度も面白いものが見れそうなもの。

でも、駄目ね。セリアからの手紙は相変わらずだし、まったく変化がないなんて。

やっぱり、それなりに趣向を凝らす必要があるかしら。



## 遊戯 2

従姉であるカレン・ボワモルティエからの手紙に、始めこそ瞳を輝かせていたセリアだが、書かれた内容を読んでいく内に、頬が徐々に引き攣っていく。それを見ていたイアンは、どうしたのか、とその顔を覗き込んだ。

「なんて書いてあるんだ？」

「……今度、ボワモルティエ家で開かれる夜会に、また参加して欲しいみたいで」

「それはまた急だな」

セリアがそういった場を苦手としているのは誰でも知っている。けれど、それが従姉の頼みでは断れないということも。恐らく今回も以前のように、気乗りしないままそれでも行くのだろう。

まあ頑張れ、と言いながら、イアンはポンツと栗毛の頭を撫でてやった。しかし、セリアはイアンの言葉に非常にバツの悪そうな顔を返した。そのことにイアンも僅かばかり嫌な予感を覚える。

「どうした？」

「それが、皆も連れて来いって……」

「……………」

非常に申し訳なさそうな表情で言われたセリアの言葉を理解するまでに、イアンは数秒を要した。予感もしていても、まさかと思っていた分、余計に時間が掛かる。けれど、脳がその意味を処理すると同時に、思い切り顔を洩らせた。

「外出届けを？」

「はい。お願いします」

「私に……ですか？」

「うっ。その、クルーセル先生が見つからないので」

セリアが言った瞬間、ハンスの眉間には明らかに青筋が立った。ひっ、と短く悲鳴を上げたセリアに構うことなく、ハンスはその周りの空気を徐々に邪悪なものにしていく。

「ええ、そうですね。彼の仕事は全て私に回ってくるんですよ。そうでしょうとも。本来仕事をしている筈の人間が、安全地帯で身を隠しているのですから。その責務が全て私に圧しかかってくることを知っていないがらね」

文句を呟き続けるハンスは、もう完全に怒りが頂点に達しているようだ。担任であるクルーセルが、何時もの如く安全地帯（校長室）で寛いでいるので、ハンスに外出許可の申請を頼んだのだが、どうやらこれは失敗だったらしい。とセリアは後悔するが、既に遅い。

目の前では、昨晚も押し付けられた仕事を片付けていた為だろうか、疲れ切った顔に、更に青筋を浮かべたハンスが、未だにブツブツと不満を洩らしている。それが向けられている人物はここには居ないのだが、とは思ってもセリアは口を出せないでいた。

なおも文句のようなものを述べていたハンスだが、どうやら己の仕事を思い出したようで、セリアから本当に渋々といった様子で外出届けを受け取る。生真面目で責任感が強いばかりに、こうしてクルーセルの仕事を押し付けられても、それらをきちんと引き受けてしまうのだ。だからこそ、クルーセルも安心してサボれるのだが。

「しかし、よく彼等と外出が重なりますね」

「はっ！？ えっと、それはランスロット様達のことですか？」

「他に誰か居ますか？」

嫌味っぽく言われた言葉に、セリアもうっ、と怯む。どうやら、相当虫の居所が悪い時に、彼の逆鱗に触れてしまったらしい。なぜ自分がこんな目に遭わなければならぬのだ。ただ従姉の夜会に参加するための外出許可を貰いに来ただけなのに。と内心で不満を漏

らしても、それを外に出す勇氣は、今のセリアにはない。

「交友関係は自由ですが、くれぐれも、学園の外で問題を起こさないように」

特に候補生達が行動を共にすると、厄介ごとに首を突っ込む可能性が格段に増えるのだ。ただでさえ、彼等は自分達教師の手に余る行為を繰り返しているというのに。この上更に自分の仕事を増やされては適わない。とハンスはがっくりと肩を落としている。

「いいですね」

「は、はい。気をつけます」

確認するようにジロリと睨まれ、セリアは反射的に頷いた。実のところ、ハンスがそこまで危惧する理由に心当たりがある分、非常に気まずい。

散々嫌味やら愚痴やらを聞かされたが、取りあえず外出許可は貰えそうだとセリアは一安心し、ツカツカと足早に去っていくハンスの後姿が見えなくなるまで眺めていた。

すると、背後に気配を感じたので咄嗟に振り向く。そして、そこに立っていた人物に、驚いて目を見開いた。

「ヨーク先生」

「荒れていますね。あの方も」

そう言って、ハンスが消えていった廊下を眺めるヨークは、手に幾つかの書類を持っている。横までゆつくりと歩いてくると、そのまま苦笑してみせたので、セリアは首を傾げた。そんなセリアに、ヨークは何時もの調子でのんびりと答える。

「私も、クルーセル先生の代わりに彼にお願いしようと思ったのですが、やめた方が良いでしょうですね」

「は、はあ……」

ヨークの言葉に、セリアもしんみりと頷いた。確かに、それは勧められない。今の状態のハンスに、これ以上クルーセルの仕事を任

せようものなら、それこそカールをも超える魔王が誕生しそうだ。相手がヨークであれば、そこまで激しく怒りを露にはしないかもしれないが。

「仕方ありません。クルーセル先生が戻られることを祈るしかないですね。それはそうとセリアさん。マリオス候補生クラスには慣れましたか？」

「へっ！？ あ、はい」

突然の話題に、セリアは一瞬返答に遅れてしまう。けれど、ヨークはそのことを気にする様子もなく、セリアの答えに頬を緩ませた。「そうですか。安心しました。セリアさんなら大丈夫だとは思いますが、候補生クラスはやはり他とは違うので」

「ありがとうございます。今の私があるのはヨーク先生のお陰です」あの時、ヨークの言葉が無ければ、自分は本当に家に戻っていただろう。それこそ、候補生になる機会が与えられた事に気付くこともなく。ヨークには感謝しても足りない程だ。勿論、候補生達や校長に対しても同じ気持ちだが。

そうしてセリアはもう一度礼を述べながら頭を下げた。

「いいえ。セリアさんの努力の結果ですよ。これから大変かもしれませんが、頑張ってください」

「はい。ありがとうございます」

そう言って、ハンスとは反対の方向に、これまたハンスとは対照的にのんびりと歩きながらヨークは消えていった。そこでセリアは、あっと思ひ出す。そういうえば、カレンに候補生達は全員参加することを伝えるのを忘れていた。夜会までにはまだ数日あるが、早めの手紙を送らねば。

そう思い、セリアはパタパタと駆け足でその場を離れて行った。

思惑通り、従妹の友人が今度の夜会に参加する旨を伝える手紙を眺めながら、先ほどから楽しそうに口を吊り上げている婚約者に、ギルベルトが小さく尋ねる。

「また、何か企んでいるのかい？」

「フフフ。そう見えて？」

頬を緩めたまま振り向くカレンに、ギルベルトはやれやれ、と肩を落とした。

カレンがこの様に楽しそうにしている時は、悪戯が成功したか、誰かをからかう準備を進めている時なのだから。今も、どのようにしてセリアとその友人が焦る様を見ようかと、色々と想像を巡らせているのだろう。ギルベルトは、数日後にはこの屋敷に訪れるだろう少女達に、胸の内ですっと同情した。

「それで、今度は何が起こるんだい？」

同情はするものの、やはりギルベルトにもカレンと似た所があるようだ。僅かな興味をくすぐられ、ソファにゆったりと腰掛ける美しい令嬢の後ろに静かに歩み寄る。

「そうね。どうすれば一番面白いものが見られるかしら」

「……あまりお遊びが過ぎると、セリアも流石に困るんじゃない？」

とはいっても、カレンが実際今回をつけているのはその友人であって、セリア自身でないことはギルベルトも承知している。だからといって、セリアが全く被害を被らない訳ではないだろうが。それに、たとえそうなったとしても、カレンはそれが楽しいのだから招待状を受け取って困惑してるだろう、マリオス候補生達を気の毒に思いながらも、ギルベルトもそれを止めようとはしない。むしろ、一緒になって楽しんでいる傾向すらある。

カレンもそれを理解しているのか、よき理解者に改めて視線を向ける。

口の端を上品に吊り上げ、先ほどよりも笑みを一層深めれば、ま

さしく誰もが羨う、麗しの淑女<sup>レディー</sup>そこに居た。

ついにその日が来てしまい、候補生達はボワモルティエ侯爵家へ赴いていた。それぞれの元へ届いた招待状を手に、候補生達はゆつたりとした歩調で、侯爵が誇る城へと入って行く。

しかし、学園からずっと一緒だった筈のセリアの姿は見当たらない。というのも、到着して直ぐに麗しの従姉様に何処かへ連行されて行ってしまったのだ。そのセリアは、当然の様にカレンの部屋にがつちりと囚われていた。

「セリア。さあ、どれがいい？」

「だから姉様。ドレスなら自分のを……」

「ダメよ」

セリアが最後まで言い切る前に、笑顔で却下されてしまった。その事に、セリアはもう一度がっくりと肩を落とす。部屋中に広げられたドレスの山を見詰めるのも、もう疲れてしまった。

「この間は白だったけど、今日は何色がいいかしら？」

目の前で次々と掲げられる衣装だが、セリアにとっては最早布切れにしか見えない。そんなセリアを完全に無視し、カレンは楽しそうにせっせとドレス選びに勤しんでいる。

「ほら、セリアも選んで。あまりお友達を待たせてしまっては彼等も退屈してしまうわよ」

「そこまでもない、と思うんだけど……」

彼等が社交の場で、ただ待っているだけに終わるなどあり得ない。今頃、華やかなご令嬢達の相手を立派に努めているのではないだろうか。というより、周りが彼等を放って置くことはしないだろう。

「それに、貴方が行かないと何も始まらないのだし」

楽しそうなカレンの言葉に、セリアは違和感を感じ首を傾げた。何も始まらないとはどういう意味だろうか。それが、今夜の夜会の主催側の人間であるカレンならばともかく、自分とはまったく関係がないように思うのだが。と疑問に思っても、それに答えてくれそうな者はここには居ない。

セリアが困惑したまま思考を巡らせている間も、カレンはニコニコと従妹を着せ替えにかかっていた。

暫くの間は大人しく従姉の言葉に従っていたセリアだが、今の状況には耐えられないものがあるようで、懸命に抵抗していた。

「いやだ!!」

「どうして？」

白々しく首を傾げてみせる従姉に、セリアは拒否の姿勢を貫く。何が悲しくて、以前見せられた派手な桃色の道化師の衣装の様なドレスを着せられなければならないのだ。

反抗はしないものの、協力的ではない態度を取っていたセリアの前に、カレンが楽しそうに桃色のそれを掲げてみせたのだ。

「だってセリアったら、ちっとも選んでくれないんですもの」

まるで自分が悪いかの様に言われた事に釈然としないセリアだが、その事には敢えて触れない。それよりも、無理やり自分にそれを被せようとするカレンに、必死に抵抗する。

「お願いだから。もう少し大人しめのを」

「そう？ きつと似合うのに」

してやったり、と口の端を吊り上げる従姉に、セリアも段々と頭が痛くなってくる。面白がられていることなど百も承知だが、だからといって躲し方を自分は心得ていない。むしろ、逆らおうとすれ

ば更に状況が悪化しているような気さえする。こういった事に関しては、やはり経験と年齢が違う分、こちらが圧倒的に不利だ。もうこうなっては、カレンの望むようにするしかないのだ。

「さて。そろそろ行かないとね。セリア、今日はこれにしましょう」  
そう言ってカレンは、部屋の奥から薄い青色のドレスを持って現れた。部屋の奥にひっそりと、けれど準備が整っていたかのように置かれ、迷う事なくそれを取った従姉の姿にセリアも疑問を抱く。

「まさか姉様……」

「あら。バレてしまったからしら？ セリアが来るのに、ちゃんと用意をしていない筈がないでしょう」

当然だろう、とばかりにドレスを差し出すカレンに、セリアはついに項垂れた。

つまり、初めから自分が着せられるものは決まっていたのだ。にも関わらず、長い間、自分に取っては苦行も同然な、着せ替え人形の様な状態を強いられていたのか。

理解すると同時にどっと疲労が押し寄せるが、カレンは悪びれた様子も見せず、ニコニコと上品に微笑んでいる。

「ほらほらセリア。早く着替えて来て。髪も直したいし、お化粧もしなくちゃ」

もう勘弁してくれ、とセリアが心中で幾ら叫ぼうと、カレンがそれを気に留める日は、永久に来ないだろう。

「あっ！ セリア。こっちだよ」

侯爵家の夜会と言っても、今夜の客はかなり少ないようだ。その所為か、今候補生たちの周りに人垣は出来ていない。それでも、光輝く彼等はやはり注目を集めていた。そんな彼等が、ホールに入っ



て来た一人の地味な少女を明るく呼び止めたのだから、何事だ、と視線はそちらへ向く。

それに気付いているのかいないのか、それとも気にしている余裕が無いのか、セリアはトボトボと非常に遅い歩調で彼等の元へ歩いて行った。

「セリア。どうかしたのか？」

項垂れたまま現れたセリアに、ランは眉を潜めながら言葉を掛ける。それにセリアは、ボソリと一言で返した。

「疲れた……」

「……………」

色気も素っ気も無い。折角、普段とは違いそれなりに粧し込んでいるのだから、もう少し楽しそうにしてもいいだろうに。だが、セリアはそんな雰囲気を全く見せず、それがまるで苦痛だとも言わんばかりの勢いでぐったりとしている。まあ、その原因に心当たりが無いわけでもないの、何も言わないが。

「あら、皆様。セリアの姿はお気に召さかったかしら？」

フッフ、と不適に笑いながら現れたカレンに、候補生達は全員肩を揺らす勢いで驚いた。が、そこは意地で、顔にも態度にも出さない。礼儀正しい一礼と共に、今宵の主催者でもあるカレンの手に柔らかに口付ける。

「どうも、レディー・カレン。今宵はお招き戴き、ありがとうございます」

「こちらこそ。いらして下さって嬉しいわ。それよりも、ランスロット様。今夜のセリアの姿はどうかしら？」

カレンは、ずいっとセリアの肩を押してランの前に突き出す。突然の事にセリアは驚いて反射的に逃げようとするが、がっちりと肩を押さえつけられ、思う様に動けない。というより、無理に振りほどいたら、また何か言われそうで怖い。

「……………」

唐突に話を降られたランも一瞬怯むが、ジッと目の前に立たされ

たセリアに目を向ける。薄い青色のドレスに、後ろで一纏めにされた長い栗毛。化粧の所為だろうか、その頬は普段と違い、若干赤みを帯びている。

久しぶりに見る想い人の着飾った姿に、ランは彫刻のような端正な顔に微笑みを浮かべた。

「このように素敵な女性に出会えた事を、神に感謝したい程です」

「は、はぁ……ありがとう」

そっと手を取られながら言われた当のセリアは、言葉に込められた意味を半分も理解しちやいない。その内心では、褒められた事を喜ぶでもなく、そんな小っ恥ずかしい台詞を、そこまで自然に言えるとは流石だな、などと感心までしていた。

別に何を期待していた訳ではないし、思ったままを口にしただけなのだが。けれど、全く反応を見せないセリアに、ランも僅かに複雑な顔をする。

ランの言葉に、まるで自分が褒められたかの様にカレンが嬉しそうに頬を緩めた所で、軽やかな音楽がホールに響き始めた。それに釣られる様に、何組かの男女が手を取り合い、ホールの中央辺りでダンスを楽しむ始める。

いよいよ、夜会という感じになってきた。

すると、まるでそのタイミングを見計らったかの様に、別の声が掛けられる。

「久しぶりですね。マリオス候補生様方」

ひょっこりと現れ頭を下げたギルベルトに、候補生達も会釈した。するとギルベルトは、今度はセリアに目を向け、優しくその瞳を細める。

「またカレンに弄り回されたみたいだね。疲れたって顔に書いてあるよ」

「えっ!？」

まさか、そんなに顔に出ていたか!？ とセリアは顔を青くする。

その様子にギルベルトは噴出した。

「折角なんだし、もう少し楽しそうにしたらどうだい？」

「それよりギル。姉様、また何か企んでるんじゃない？」

横で候補生達を楽しそうにからかっているカレンに聞かれぬよう、こっそりセリアはギルに聞いてみた。その途端、同情にも似た視線を向けられたのでセリアは肩を落とす。ギルがこういった顔をむけるのは、大体が姉の悪戯の標的に対してだ。つまり、また姉は何かをやらかす積もりらしい。

「まあ、大したことではないから心配しなくていいよ」

それだけ言うと、ギルベルトは横に立つ婚約者の肩を抱き寄せた。どうやら、ここへ来た本来の目的はそれらしい。その顔は先程までと違い、恋人を見詰める男の顔だ。

「失礼ですが、そろそろ彼女を譲ってもらえますか？」

そう言う婚約者に、カレンもそれまでとは一転して、うつとりと熱の籠った瞳を向ける。そして、そっと肩を抱き寄せる婚約者に身を持たれた。

「ちゃんと迎えに来てくれたのね。嬉しいわ」

「君が居る場所なら、僕は何処へでも行くよ。ところで、僕の手を取ってくれるかい？」

「フフフ。それは貴方次第だわ」

愛を囁きながらゆっくりとホールの中央へ移動する二人の瞳には、もう他の誰も映っていないようだ。その様子を、セリアは呆然と見送っていた。人前でも留まる事をしない熱愛ぶりには、毎回のことがら目目のやり場に困る。まあ、幸せそうな従姉の姿を見るのは、嬉しいことには変わりないのだが。

そんな風にステップに勤しむ男女達にセリアが視線を向けていると、目の前にスッと手を差し出された。驚いて顔を上げれば、その先では琥珀の瞳がジッと自分を捉えている。

「セリア殿。自分も、一曲お相手願えますか？」

「へっ？ わ、私!？」

驚いて周囲を見回すが、近くに他のご令嬢は見当たらない。遠くから羨望の眼差しを向けるお嬢様方なら居るが。それに、今ザウルは確かに自分の名を呼んだ。

非常に困惑したセリアだが、ザウルは差し出した手を下げる様子を見せずに、ジッと静かに返答を待っている。琥珀の瞳が放つ静かな空気に、セリアも漸く落ち着きを取り戻した。

それに、相手がザウルでは断る理由も無いな。とセリアはゆつくりとその手を取る。

「お願いします」

にっこりと微笑んだセリアの手を、ザウルはしっかりと握りホルの中央へ導いて行った。

## 遊戯 2 (後書き)

姉様が、まさかあんなこと言い出すなんて。それは、昔は私も好きな遊びだったけれど。でも、幾ら何でも、なにか違う気がする。だからって、逆らうことも出来ないのは分かってるんだけど。

とにかく、早く適当な場所を見付けないと。

……でも……何処に……

## 遊戯 3

今、ザウルに手を引かれて来たホールの中央辺りで、セリアは必死に足元に集中していた。聖花祭の際に特訓したのだから、多少はまともになっているだろう、と安易に考えた数分前の自分を恨む。若干テンポの速い曲に合わせながら、隣の人間の足を踏みやしないだろうかが気になり、知らず知らずの内に肩に力が入ってしまう。

とは言っても、以前のセリアからは考えられないほどの進歩であった。ザウルの動きに多少なりとも合わせながら、それでも懸命にステップを踏んでいる。その姿は、カレンに感動されてしまったほどだ。

周りに溶け込むかのように身を寄せ合う（かのように見えている）ザウルとセリアを、候補生達は釈然としない気持ちで眺めていた。心無しか視線もいつになく険しくなっているように見える。そんな彼等に、ルネが明るく声を掛けた。

「仕方ないんじゃない。今のところ、セリアと踊れるのはザウルだけなんだし」

微笑みを浮かべながら言ったルネの言葉に、候補生達は更に眉を顰めた。

そこが問題なのだ。実際にセリアと踊ることが出来る候補生、というより人間は、ザウルの他に居ない。自分達が手を取っても、さつさと転倒されてしまう。聖花祭での特訓で、セリアのダンスの腕は見られる程にまで上達したのだが、それは相手がザウルである時のみに限るのだ。だからこそ、セリアを誘うザウルの前に割って入って、自分がセリアの手を取る、ということが出来ないのであった。

その事実、やはり不満を隠しきれない候補生達は、まだ踊り続けている二人にジッと視線を向けていた。

先程から妙に感じる視線が気になり、セリアは足元を意識しながらも気配のする方角を確認した。その先では、置き去りにする形で残してきてしまった友人達が、まだその場に留まっている。それどころか、何処か不機嫌そうな雰囲気醸し出しているのだ。カールは常にあんな表情なので分かるが、ランやイアンにまで何故あれほど睨まれるのだろうか。ルネは相変わらずニコニコと微笑んでいるが。

もしや、その場に残して来てしまったことが拙かったのだろうか。けれど、彼等がそんなことを気にするとは思えない。では、自分は何か他に失敗をやらかしてしまったのだろうか。

「あの、ザウル」

「どうかしましたか？」

「その……皆は大丈夫かな？」

セリアに言われて、ザウルはチラリと後ろを見やる。目立つ上にこちらをジロジロと睨む友人達は、すぐに見つかった。視線が合ったと同時にお互いの間に小さな火花が散ったのだが、ここで引いては意味がない。

セリアはそんなことまったく気付くことなく、オロオロとしていたが。

「ザウル……わっ!!」

まだ候補生達に視線を向けたままだったセリアは、驚いて目の前の赤髪の青年に目を戻す。腰に回っていた手に急に力が加わり、その所為でグッと距離が縮まったのだ。突然のことに慌てて身体を離そうとするが、腕の力は思いの外強く、ビクともしない。どうしたのか、と驚いて見上げれば、穏やかな表情で微笑まれた。

「今は、自分のことだけを考えてください」

「は、はあ……?」

言われた言葉の意味が解らず、セリアは首を傾げたが、ザウルはそれを気にすることなくステップを再開し始めた。それも、セリアの身体を引き寄せたまま。当然セリアも足を動かすことを余儀なく

される訳だが、お互いの身体がかなり密着しているため、セリアにしてみれば非常に動きづらい。腕に力を入れて再度距離を取ろうと試みるが、結果は同じであった。

「ザ、ザウル？」

「はい」

「あの、動きにくいというか……」

「では、以前のように足に負担が掛からない方法にしましょうか？」

ザウルが耳の傍で喋るものだから、吐息が首筋に掛かりくすぐつたいのだがそんなことを気にする前にセリアは啞然とした。おおいに青ざめながら見上げれば、ザウルはそれにクスリと小さく笑いながら微笑み返す。そのいつもと違う様子に、セリアは言葉を失った。な、何を言っているのだコイツは。この場で、あんな風に抱きかえられるなんて冗談ではない。カレンに見つかれば何といわれるか解ったものではないではないか。それ以前に、公共の場でなんということをしようとするのだ。本当に目の前に居るのはザウルか？まさか、偽者では。

目の前で明らかに動揺しだすセリアは、混乱から思考があり得ない方へと向かいだす。その様子に、ザウルは再び小さく笑った。

普段は中々お目にかかれなセリアの姿に、頬を緩ませたのはランだけではない。その上、セリアが唯一手を取るのが自分だけだと思うだけで、胸が高潮するのだから。だからこそ、今だけでも、彼女の視界に映るのも自分だけであってほしい。なのに、セリアがまだ他の友人達を気にしては、面白くない。

そんなザウルの内心をセリアが理解する筈もなく。まだ僅かな疑問を抱きながらも、今の体制からは抜けられそうにないなと結論を出す、転倒だけはしないようにと懸命に足を動かしていた。



そんな候補生達の様子を、カレンはギルベルトの手を握りながら実に嬉しそうに眺めていた。予想外にことが面白い方向へ進んでいることに、喜びを隠せないようだ。

「そろそろかしら？」

もう待ちきれない、とばかりにカレンが呟けば、横のギルベルトはふっと息を吐いた。それを合図に、カレンはスリとギルベルトの手を離れ、ホールの奥へと足を進める。

「君にしては、よく耐えた方じゃないかな」

疼く身体を押さえセリアを見守っていたカレンに、ギルベルトはやれやれともう一度溜め息を漏らす。それが聞こえたのか、一度カレンは振り返ると、実に上品で美しい笑顔を見せた。けれどその瞳が、貴族の令嬢に似合わぬ、悪戯好きの少年のような光を宿していたことは、ギルベルトしか知らない。

数曲踊り終わり、一休みするため候補生達の下へ戻ったセリアを、ルネが笑顔で迎えた。

「セリア。随分上達したね」

「うん。ありがとう」

確かに、昔と比べてそれほど苦手意識は無くなったが、やはりそれはザウルが相手である時に限る。他の候補生達とでは、すぐに転んでしまう為、とてもダンスにはならないのだから。

そんなことをしんみりと考えていたセリアは、ふと音楽が鳴り止んだことに気づいた。候補生達は勿論、他の客も同じように、どうかしたのか、と辺りを見回している。そうしていると、フツと明かりが消された。そして、ホールの奥で幾つかのランプが灯る。その横では、淡く光るそれらの一つを手を取ったカレンが立っていた。

「皆様。実は私、今夜は少し楽しい遊びをしたいと思いましたの」

鈴が転がるような、可憐な中にも何処か静けさを宿した声に、周りの者達はほうつと感嘆の息を漏らした。ランプの光に横顔を照らされた微笑みは、何処か儚げに見える。最早、この場の視線は全てカレンに釘付け、と言ったところだろう。

「さあ、女性の方はランプをお取りになって。今、屋敷の明かりを全て消していますから、それを持って好きな所へ隠れて頂きたいの」

カレンの言葉と同時に、ランプが女性客達に配られる。当然それはセリアの元へも来るわけで、オロオロとしながらも受け取った。が、青ざめて行く表情は、これから何が起こるのだ、と不安な気持ちを隠しきれていない。

「男性の方は、あちらの大時計が時間を指したら、女性の持つランプの明かりを頼りに、探しに来てください。その先で、素敵な姫君をきつと見付けて下さいね」

笑顔で微笑まれば、その場の誰もが肯いてしまう。反論の声は一切上がらなかった。

カレンが先頭に立つ女性客達は、暗い屋敷の中をランプ片手に男性が迎えに来るまで待つ、というなんとも雰囲気たっぷりの趣向に胸を躍らせる。けれど、セリアにしてみれば冗談ではない。慌ててカレンに近づいて行った。

「あ、姉様！ いったい何を！？」

「あら。どうしたのセリア？ 貴方も大好きだったかくれんぼですよ」

さもあっけからんと言うカレンに、セリアも絶句する。だから、どうしてこの場でそんな遊びをしなければならないのだ。普段ならばなんの問題もないのだが、今は違う。屋敷中が明かりを消しているのだ。はつきり言ってしまうえば、気味が悪いのである。つい先日、悪夢に魘されたセリアにとって、そんな中ランプの灯りだけを頼りにうろつき回るなど、苦痛以外のなんでもなかった。

けれど、そんなセリアの考えを読み取ったかのように、カレンが

にっこりと微笑む。

「駄目よ、セリア。怖いからって逃げたら」

「ぐっ……」

ずばり凶星を突かれ、セリアは押し黙った。しかも、逃げるのか、と言われてしまえば、セリアの足も自然と止まってしまう。

「ほら、セリアも行って」

笑顔のカレンに背中を押され、セリアは渋々ながらホールを後にした。こうなっては仕方ない。腹を括るしかないだろう。けれどどうしても納得がいかない。なぜ、こんな遊びをしようなどと思ったのだろうか。そんな疑問を抱きながら、セリアはノロノロと少しでも明るい場所を求めて歩き出した。

女性客達が去ったホールで、候補生達は啞然としていた。あの行動力や大胆さはセリアの従姉だと言われれば納得だが。

「諦めた方がいい」

呆然としている候補生達の後ろから、聞いたことのある声が響いた。振り返ればやはり、カレンの婚約者、ギルベルトが苦笑しながらそこに立っている。

「彼女は、面白いことがなによりも好きだからね」

「……それは、どういう……?」

ランが訝しげに問えば、ギルベルトは答える代わりに笑みを返す。言われなくとも解っているだろう、という意味らしい。それを理解したランは、僅かに眉を寄せた。

確かに、カレンが自分達にさせようとしていることは解らなくもない。それを高みから見ても面白がっているのだろうことも。けれど、なによりも面白くないのは、手のひらで踊らされていると解っていても、逆らえずにこの後セリアを探してしまうだろう自分だ。そし

て、カレンはそれさえも解っているのだから、尚更性質が悪い。健闘を、とだけ言い残し、自分達から離れて行くギルベルトを目で追う。

どうやら、時間まで明かりが完全に消されることはないらしく、ホールではまだぼんやりと幾つかのランプが灯っていた。

「セリア、大丈夫かな？」

ルネが心配げに呟けば、他の者も同時に反応した。

確かに、今は多少神経質(?)になっているセリアだ。薄暗い中一人で放置するのは、やはり気掛かりである。

「早く見つけてあげないとね」

「……」

解っているのかいないのか、ルネのこの言葉は他の候補生達に火を付けることになった。

「こ、こわい。」

情けない、と自分で思いながらも、セリアはビクビクと震えている。カレンの言い付け通り、隠れた方がいいが、そのままどうしてよいか解らなくなったのだ。目の前では、持たされたランプの灯りが、ユラユラと不規則に揺れていて、余計に不気味さを増している。誰か人が来る気配も無いし、本当に、どうしたものか。

何故自分がこんな目に、などと誰に向けるでもない恨み言をブツブツと呟いていると、唐突に後ろから伸びた大きな手によって口を塞がれた。

何事だ！？ と、あまりのことにセリアは咄嗟に悲鳴を上げるが、口を塞がれている為、くぐもった音しか出せない。同時に手足を動かし暴れようとするが、腕も後ろの影にがちりと掴まれていて、まったく動けないのだ。

異常な事態から、必死に逃れようともがくが、殆ど効果がない。突然の事に混乱していると、自分を拘束している影が低い声で唸るように言った。

「大声を出すな」

空気が凍るような、今では聞き慣れてしまった声に、セリアもはっとして後ろを見やる。とそこには、明らかに不機嫌そうな雰囲気醸し出しているカールが立っていた。

「っ!？」

思っても見なかった影の正体に、セリアは目を見開く。けれど、カールはそんなセリアの行動を予想していたのか、未だに拘束を解かないまま、不機嫌そうに眉を顰めた。

「大人しくしろ」

再び低い声で要求された内容に、セリアも慌てて首を縦に振る。なんにしろ、解放してもらうには、従うしかないだろう。というより、早く拘束を解いてほしい。口が塞がれたままの為、非常に息苦しいのだ。

セリアが頷いたのを確認すると、カールは漸く手を離れた。それと同時にセリアは懸命に不足していた酸素を取り込む。

「カ、カール。なんでここに？」

「下らん遊戯に付き合う積もりはない。逃れられるよい機会だと思つて来てみれば、やはり貴様か」

時間になって男共が屋敷の中を探索しだす中、誰も居ないだろうと思つて向かった場所で、見つけた揺らめく灯り。近づいてみれば、案の定縮こまりながら肩を震わせる栗毛の後姿。

「大方、月明かりでも頼りにしてきたのだろう」

「うっ……その、屋敷の中は暗かったし」

現在、セリアが居るのは、侯爵邸が誇る広い庭の一角であり、備えてあるベンチに座っていたのである。

始めこそ、屋敷の中の何処かの部屋にでも隠れようかと思っていたのだ。けれど、屋敷は完全に明かりを消している為、かなり暗い。その上、女性客はセリア一人ではなく、他にもランプを片手に屋敷の中を動き回っている者も居る。そのお嬢様方が持つランプが、暗い中ぼうっと光るものだから、セリアも遂に耐え切れなくなり、辛うじてまだ月に照らされ明るさの残る外へ出てきてしまったのだ。本人はそれを認めないだろうが、逃げて来た、と言ってもよい。

隣で佇むカールに、次はどんな嫌味を言われるのだろうか、とセリアがビクビクしていると、意外なことにそれ以上の言葉は飛んでこなかった。変わりに、非常に気まずい沈黙が流れる。チラリとカールを見やれば、何かを考えているのか、それとも単に不機嫌なだけなのか。眉間には相変わらず皺が寄っていた。

「カールは、戻らないの？」

「騒々しいのは好まん。利点があるのならともかく、それ以外で意味の無い行事に参加する積もりはない」

そう言ったカールは、本気で面倒くさがっているようだ。そういうえば、今日もルネに無理やりに近い形で半ば強制的に付き合わされていたのだったな。

とセリアが複雑な思いで納得していると、バサツと肩に何かが掛けられた。急なことにセリアは仰天する。驚いて確認すれば、どうやら上着らしい。けれど、空から上着が突然降ってくる筈がない。ということは……

チラリとカールを見やれば、相変わらず冷たい瞳で見下ろしている。訳が解らない、と疑問に思っていると、更に冷めた声が掛けられた。

「貴様は、その薄着でいつまでも屋外に出ている積もりだったのか

？」

「で、でも、そんなに寒くないし」

確かに、外の空気は思ったよりも冷たく、多少肌寒いとは感じたが、我慢出来ない程ではない。この程度なら平気だろうと思っていたのだが。しかし、上着を取ってしまっただけはカールが寒いのでは、と返そうとすると、もの凄い形相で睨まれた。

「ならば、貴様が中へ戻れ」

「えっ！？　そ、それは、ちょっと……」

屋敷の中では、窓から見える幾つかの明かりが、ぼんやりとだが揺らめいている。恐らく、まだ「かくれんぼ」は続いているのだろう。それで屋敷の中へ戻るなんて、冗談ではない。

懸命に首を振るセリアを、カールはまた鼻で笑った。それにまたセリアもムツとする。けれど、言い返す言葉が見つからない。なぜこうも相手の神経を逆なですることしか出来ないのだ、この男は。

グツと言葉に詰まっていると、自分の隣にカールが静かに腰を降ろした。どうやら、本当に暫くは戻る積もりもなく、ここに居座る気らしい。

しかし、自分はどうか。流石に、ずっとここに居る訳にもいかないだろう。かといって戻る気にもなれない。

うー、とセリアが訳の解らない呻き声を洩らしていると、再びあの冷ややかな視線が飛んで来た。

「貴様は、少しは静かに出来ないのか」

「うっ。ごめんなさい」

「フン……」

セリアが漸く黙ったことに満足したのか、長い足を組み直すと、カールはそのまま目を閉じてしまった。色々と考え事をしたり、思索にふける時の彼の癖である。この状態のカールの邪魔をすれば、それはもう凄まじいまでの嫌味と毒舌が飛んでくるので、セリアは下手に動く事が出来なくなってしまった。

なんとなく気まずい空気に、セリアもどうかと戸惑う。け

れど、まあ一人で居るよりも、カールが居てくれた方が遥かに安心できるな、と考え直し、セリアも上げかけた腰をもう一度ベンチに落ち着けた。

グシャリ！！と横で自分の手が何かを握り潰した音に、イアンは瞬時に我に返った。と同時に、手の平から伝わる鋭い痛みが気付く。けれど、痛みの原因を手放す事が出来ず、そのまま更に強く一輪の薔薇を握りしめた。薔薇を守るべく茎を覆っていた棘に破られた皮膚から、赤い雫が滴り落ち、白い薔薇を赤く染め上げて行く。

無惨に花卉を散らしながら、手酷く潰された白と赤の混じった薔薇に、イアンはゆっくりと視線を映した。そして、半ば呆然とそれを見詰める。

まただ。また、抑えられない感情が沸き上がった。

時間になり、自分の瞳が探したのは、やはり一人の少女。どうしても、誰よりも先に見つけ出したかった。屋敷の中を早足で進みながら、必死に耳をすまし、目を凝らす。そんな中、偶然窓から見えた庭の中にポツリと取り残されたかのように揺れた明かり。直ぐにセリアだと分かった。女の夜会着は何かと薄着の物が多いのだ。にも関わらず、室外を隠れ場所を選ぶなんて、あの少女の他に考えられない。

急いで向かったが、そこへ辿り着く前に足を止めた。そこに、思っていた人物と、もう一人が居たからだ。それを確認した瞬間、何故か足が固まり、ぴくりとも動かなくなった。

特に二人の間で何があったという訳でもないだろう。そんなこと



考えずとも分かる。にも関わらず、ベンチに隣り合って座る二人を見た時、自分の視界は赤く染まっていた。身体中の血が逆流するような感覚を覚え、思わず自分が隠れた薔薇の垣根の一輪を握りしめていた。

けれど、何故そんなことになるのか、まったく理解出来ない。いや、理解したくないのか。

嫉妬と呼べる程度の感情なら、今までにも自覚はあった。本気で欲しいと思ったこともある。セリアを好いているのだから当然だろうと、それまでだったら言えたのだ。

けれど、今背筋を這い上がったものは、それらとはまるで比べ物にならない。何かが根本から違う。もっと屈折した、抗い様のない醜いものだ。感情と呼ぶ事すら戸惑われる。

傷ついた手は、血を失った筈なのに妙に熱い。手の平だけでなく、身体中が燃えているようだった。まるで、熱を持ち過ぎた炎が白むように、不気味な色の熱。その所為か、喉が異様に乾き、ひりつく。頭を振って逃れようとしても、更に泥沼に嵌っていくかのように、己を蝕む熱は深まるだけ。

嫉妬や苛立ちなどと呼べるような、そんな程度では済まされない。何故、これほどまでに腹の底が煮えくり返る？ どうして、セリアに触れる者全てがこれほどまでに憎らしく見える？ 面白くないと思ったり、戸惑ったりならまだ分かる。けれど、相手は自分の仲間であって、セリアにとっても友人だ。そんなことは納得済みだった筈ではないか。しかも相手は自覚が無に等しく、警戒心の欠片もないセリアだ。幾らなんでも憎悪を覚えるべきではない。いや、そもそも、こんな理由で他人に抱いていい種類の感情ではない。なのに、何故？

傷を負ったにも関わらず、更にキツク握り締めていた為だろうか。気づけば、自分が握っていた白薔薇は、その本来の色を殆ど残して

いなかった。掌から流れた赤が侵食し、所々に握られ痛んでしまった白が見えるのみ。

それを見たイアンは何を考えるでもなく、ごく自然な動きで僅かに残った白の部分に己の手を滑らせた。血がまだ滴る手に触れられた白は、いとも簡単にその色を変える。最後の白が消えるのを確認した瞳が一瞬揺れる。そして、そうか、と唇だけがその言葉を紡いだ。

フツとイアンは自嘲するように笑うと、赤く染まってしまった薔薇をもう一度強く握り締める。と同時に、新たに数枚の花弁が散った。

最初は興味だった。変わった考え方や行動が斬新な、今までに自分が見たことのなかったような少女。

次に気づいたのは、恋心だった。知れば知るほど分からない、放っておけない可愛い存在。

けれどそのどれもが、その程度だったのだ。自分で自覚出来る程度の感情でしかなかった。胸の内に潜んでいた、恐ろしいまでのモノに、気付きたくなかった自分が、一時の時間稼ぎにその感情の名を利用しただけ。

分かってしまえば簡単なものだ。醜くも芳しく、浅ましくも甘美で、自分ではどうしようもない。この薔薇のように、あれの全てを染め上げたい衝動に駆られる。

一度手の平を解けば、哀れにも痛々しげに潰れてしまった一輪の花。この花の様に潰してしまわないよう、自分はこの感情を押さえ付けるべきなのだろうか。

一瞬、そんな考えが過ぎるが、すぐに無理だと首を振る。だってそうではないか。自分でも、これが何処まで深く根付いているのか、何処まで大きくなるのかすら分からないのだ。それを抑えるなど、到底出来ない。

ならばいっそ、身を委ねてしまおうか。抗わずに、貪欲にも手にすることだけを求めてしまおうか。

答えなど、とうに出ている。逆らう術など知るはずもなく、拒絶すること事態が愚かにすら思える。

「お前が……欲しい」

眩かれたのは、どうしようもない程の想い。今はそれ以外、考える余裕がなかった。

### 遊戯 3 (後書き)

俺は、どうしたらいいんだ。もう何が何だか訳が分からねえ。考えれば考える程、抜け出せなくなっちまう気がする。もう、どうしようもねえよ。

どうしてこうなっちまうんだ。なんで、余計な事まで望んじまうんだ。

だったら、俺が離れるしかねえよな。そうするしか、思い付かねえよ。

## 遊戯 4

「イアン……」

「っ!?! ああ、なんだ?」

自分の声に大袈裟に肩を揺らして見せたイアンに、セリアは首を傾げた。どうも、数日前のカレンの夜会から様子が可笑しいのだ。何かあったのだろうか。

セリアの疑問を他所に、ここ最近繰り返している自分の失態に、イアンは内心で自分を叱責した。カレンの夜会の日からこんなことばかりが続くのだ。けれど意識して心を鎮めようとすれば、逆効果で更に反応してしまう。どうしたものか、と頭を掻きむしりたくなる衝動を抑える。

欲望の赴くまま、そのまま流されてしまうのは簡単だ。が、それを実際に行動に起こす程、イアンも愚かではない。理性でなんとか自分の中に巢食う感情を押し殺す。けれど、こちらの気を全く理解していないセリアの行動に、苛立ちは募るばかりだ。分からせてやろうか、と思ってしまう自分をそうしてまた押さえ付ける。その繰り返しだった。

「教室にこれ、忘れて行ったから」

「あ、ああ。ありがとな」

自分が差し出した本を、何かもの言いたげに受け取るイアンに、セリアも遂に疑問を口にする。

「……なにかあった?」

「はっ!?!」

「その……最近様子が変わだから」

大丈夫か、と聞いて来るセリアを前にイアンは、お前のことで悩んでるんだ、と喉まで出掛けた言葉を飲み込む。言った所でその意味など少しも風蜜理解しやしないだろうが。本当に、どうしてこんな面倒な女とこうなってしまうのか。

目の前でイアンががつくりと肩を落とすものだから、セリアは焦って顔を青くした。なにか、まずいことでも言ったのだろうか。原因が分からないだけに、どうしたらよいのか見当が付かない。もしや、体調が悪いのか。そういえば、顔色がどことなく優れないようにも見える。

「えっと、何か私に出来ることはある？」

とことん勘違いをしたセリアが、こんなことを言うものだから、イアンもピクリと反応した。本当に勘弁してくれ、と言いたくなる。相変わらずだが、こちらの気など毛程も理解しちやいない発言が、これほど辛いものだったとは。

と、イアンが頭を抱えれば、セリアは更にオロオロと慌て出す始末。完全にすれ違い状態が続いている。それを理解したのか、していないのか。イアンはフツと一息吐くと、キョトンとしているセリアに視線を移動させた。その視線に、セリアは何を言われるのだろう、と少なからず身を引き締める。

「じゃあ、今日一日俺に付き合ってくれよ」

「はい？」

街へ行くのに付き合ってくれ、と言われたセリアは断ることも出ず、多少強引にだがイアンと二人連れ立って街へ来ていた。どうせなら他の友人も誘わないか、と提案してみたのだが、深い溜め息を吐かれてしまい、却下された。その理由も気になるが、それよりも体調は大丈夫なのだろうか。

昼下がりの街は、相変わらず人が溢れている。がやがやと賑わう

雑踏の中でも、やはりマリオス候補生とは周りの人間の注目を集めるようだ。少し歩くだけで、好奇の視線が集中している。人目を惹き付ける容姿を持ったイアンと、その横を歩く地味な少女は一体何者だ、という視線が、セリアの居心地を更に悪くさせていた。

「えっと、イアン……」

「どうした？」

オロオロと見上げると、上機嫌でこちらを振り向くイアン。セリアの心情は、気にするところではないらしい。

「その、もう少し離れた方がいいんじゃないか、と思うんだけど……」

セリアが視線を下ろした先には、しっかりと握られた手があった。人々の視線に刺々しさや興味が混ざっている最大の原因だろうそれに、セリアは非常に困惑していた。どうしてこんなことになっているのだろうか、と首を傾げる。

「離れたら、またいつもみたいにどっか行っちゃうかもしれないだろう？」

「だから、そんなことないって言ってるのに」

先程から何度か繰り返している会話に、イアンは悪びれもなく、むしろ楽しそうに返す。手を離す気がこれっぽっちも無いことは分かるが、こんな風に手を繋いでいたら、よからぬ誤解を生むのではないだろうか。そうしたら、彼にとっても、何より自分にとっても良い結果に転ぶとは思えない。そんな意思を込めて、軽く手を引いてみるのだが、逆に強く握り返されてしまう。別に逃げる積もりなどないのだから、心配は要らないというのに。

「いいから、気にするなって」

「……………」

いや、たとえば自分が気にしなくとも、周りのお嬢様方がキツクこちらを睨んでくるのだが。そうセリアが内心で思ってみても、やはりイアンは手を離してはくれなかった。

「ところで、街になにか用事でも？」

「いや。特にはねえな」

「え、ええ！？」

予想外の返答に、セリアは素っ頓狂な声を上げた。てっきり、何か大事な用でもあるのかと思っただが。と考えたが、まあそれで彼の気が少しでも晴れるならそれでも良いか、と思い直した。

「じゃあ、何処か行きたい所はある？」

「そうだな。とりあえず、散歩でもするか」

唐突で身勝手な我が儘に、それでも付き合うセリアに、イアンは胸に広がる喜びを誤魔化し切れなかった。グッと手を引いて引き寄せれば、驚く程に満たされる自分が居る。それでも、満たされた分を掘り下げられるように、自分の中での欲求は深くなる。まるで子供ではないか。

それでもセリアは、こちらの胸の内など微動も気付いていない様子でホイホイと自分に付いてくる。そしてそれを分かっているながら、自分は其所に付け入っているのだ。なんと傲慢であろうか。

イアンがそんな風に考えていると、軽く手を引かれる力で我に返った。といっても、微々たる力だが。振り向くと、瞳を輝かせながらある店を見詰めるセリアの姿。視線を追えば、その先では輝きを放つ硝子細工が並べられている。どうやら、興味を示したらしい。

「見てくか？」

「ふえっ！？ い、いいの？」

まるで子供の様な反応に、イアンも思わず微笑してしまう。セリアは、イアンの提案に瞳を一層輝かせた。特に欲しい訳ではないが、普段は見ない物が視界に入るとどうしても好奇心が沸き上がってしまうのだ。

「ほら、行こうぜ」

「う、うん」



そんな風に、時々立ち止まっては店の中を見たり、硝子越しに覗いたりして二人は街をブラブラと歩いていた。その殆どが、セリアが興味をくすぐられた為に立ち寄っていたのだが。物珍しげにキョロキョロと視線を彷徨わせるセリアに、イアンは釣られたように笑みを向ける。放って置けばすぐに迷子になってしまいうだろう。どうやら、手を繋いでいる利点がもう一つ出来たようだ。

適当にフラフラと歩いていると、どうやらかなりの時間が過ぎてしまったようだ。はしやぎ疲れたセリアとイアンは学園近くの公園のベンチで二人並んで腰を下ろしていた。そこで自分の失態に気が付き、セリアは顔を青くする。

つい、自分がはしやいでしまったが、そういえばここにはイアンの気分転換に来たのではなかったか。なのに、自分に散々付き合わせてしまった。これではまったく意味がないではないか。しかも、イアンは嫌な顔一つせずに一緒に廻ってくれたものだから、一層申し訳なさが募る。

「その、色々付き合わせちゃって……ごめん」

「あのなあ、元々俺が言い出したことだろ。それに、楽しかったからいいんだって」

「……でも……じゃあ、次はイアンの行きたい所に……」

「だから、特に目的とかはないんだって。それに、そろそろ戻る時間だろ」

言われてセリアもうっと言葉に詰まる。けれど、そうは言われてもやはり責任を感じてしまうのではないか。イアンが何と言っても、結局は散々自分が連れ回してしまった結果に終わったのだから。や

はりこのままでは引き下がれない。

「じゃあせめて何か今日のお礼をさせて。なんでも聞くから」

なんでも聞く。その言葉に、イアンの表情はピシリと固まった。

コイツ。自分の言っている事の意味が分かっているのだろうか。

いや、間違いなく分かっているだろう。

「本当に？」

イアンが漸く自分の提案に反応を見せてくれたので、セリアはホッと安堵した。そしてこちらを振り向くイアンにうんうんと首を縦に振る。

「はいはい。なんでもどうぞ」

のほほんと呑気な雰囲気と一緒に笑顔で頷くセリアに、イアンもギシリと奥歯を噛んだ。それと同時に、グッと腕を伸ばす。

それまでとは一転し、不穏な空気を纏ったイアンが、ダンッと音を立ててセリアが座っているベンチの背に手を突いた。顔の両脇に手を突かれ、グッと近くなった距離にセリアも驚きで目を見開く。見上げた先では、真剣な表情でジッとこちらを見下ろすイアン。

「……本当に、なんでもいいんだな？」

「えっと、あの……」

明らかに普段と違う様子に、漸くセリアも気付き戸惑う。

どうしたのだろう、と再び首を傾げる。というより、もしや怒られているのだろうか。やはり勝手に付き合わせてしまったのがまずかったのか。けれどその前に、距離が近い。どうしてこんな状態になっているのだろうか。

色々な考えが浮かび、オロオロと見上げれば、妙に気迫の籠った視線で見下ろされた。

そのままセリアが半ば放心していると、スッとイアンは腰を屈める。そのまま流れるような動きで顔を近づけた。自然とお互いの距離も近づき、その所為でセリアの視界に瞳を細めた麗しい顔が広がる。反射的に身を引くが、両側を塞がれている為、大した距離は生まれない。

相手は熱い眼差しを向ける、輝く容姿を有した男だ。甘い雰囲気  
を纏いながらこんな風に迫られたら、普通の娘ならばそのまま流さ  
れるなり、なんなりしていただろう。しかし残念なことに、相手は  
普通の娘では、ない。

「ぎゃ、ぎゃーっ！何をしてるでありますか！！」

異様なまでに近い距離感に耐えられなくなり、素っ頓狂な悲鳴上  
げながら自分の胸を押したセリアに、イアンもハッと我に返り動き  
を止めた。そこで動きを止めたものの、折角のいい雰囲気、こん  
な色気も何もない反応でぶち壊しにされたらやはり面白くない。ム  
ツとした表情のまま、気付けば口走っていた。

「なんだよ。キスぐらいで大騒ぎするなって」

「は、はああ！？」

キスぐらいとはなんだ、キスぐらいとは。というより、もしかし  
なくとも、やはりコイツは自分に、く、口付けようとしていたのか  
！？

さっと青ざめながらセリアは大いに慌てていた。

「こ、恋人でもないのに、なにをそんな破廉恥な！！」

「はあ！？何でも聞くなって言ったのはお前だろ」

「うっ！！で、でも。それとこれとは話が違うのでありましてで  
ございましてねえ……」

確かに、自分は何でも聞くと云ったが、だからって何で口付けに  
繋がるのだ。と、混乱した頭で必死に状況を打開しようと奮闘する。  
顔を赤らめるどころか、壮絶に青ざめるセリアと同じ様に、イア  
ンも自分の行動に内心で舌打ちしていた。

一体、何をやっているのだ、自分は！一瞬、本気で唇を奪おう  
としていた。まだその欲が僅かにだがしぶとく残っている。このま  
までは、本当に自分は何をしだすか分からない。

グッと唇を強く噛むと、イアンは咄嗟に笑顔を貼付けた。

「……冗談だよ」

ポツリと呟き、スッと自分から身を離すイアンに、セリアは目を

見開く。が次の瞬間には心底安堵し、息を吐いた。つまり、自分是从かわれただけらしい。まったく、何をやっているのだコイツは。とまだ内心でブツブツと文句を続けていたが。

「ほら。帰るぞ」

「あ！　だ、だから、まだ話は終わってないって」

まだ先程の話は済んでいないではないか。と自分を引き止めるセリアに、イアンは本気で頭を抱えたくなった。

「だから、気にするなって言ってるだろ」

「そうはいかないってば」

「あああ！　ったく」

はあっと大きく溜め息を吐いたイアンは、諦めたようにセリアに向き直る。そして、ここへ来た時のように、もう一度その手を多少乱暴に取った。

「じゃあ、帰るまでこうしてていいか？」

取った手をそっと開かせると、今度は握るだけでなく、その指を絡め取る。まるで、恋人が手を繋ぐように。

手を取られた当の本人はというと、どうしてこんな状態になるのだろうか、と首を傾げていた。それに、街の中でも手を繋いでいたのだから、今更な気もするのだが。そんな疑問を抱きながら視線を上げると、またやんわりと微笑まれた。

「俺がこうしたいんだよ」

「はあ。私と手を繋ぎたいなんて、変わってるね」

セリアが思ったまま素直に感想を述べれば、イアンは苦笑しながらも、その手をもう一度強く握り締めた。

「ああ。くそっ！」

悪態を吐いて、イアンは目の前の木を殴りつけた。

学園へ着いてしまえばもうセリアを縛る理由はない。貼付けた笑顔をそのままに、やんわりと手を放し、そのまま別れた。その瞬間も、伸ばしそうになる手を必死に引っ込めた。そんな風にざわつく心のまま、友人達の居る寮へ戻る気にもなれず、一人になれるだろう池の畔へ足を向けていた。

自分は、一体どうしたいのだろうか。自分の奥に潜む欲を自覚してしまえば、それをいつまでも押さえ付ける自信などない。だからといって、離れることも出来ない。そんな身勝手な自分に嫌気がさす。けれども、自分の欲深さが、いつどのような惨事を生むかわからない。そのことは、今日よく分かった

募る苛立ちに任せ、イアンがもう一度拳を木の幹に叩き付ければ、背後でその姿を見ていた者が口を開いた。

「イアン……」

「っ！……ザウルか」

思わぬ人物の登場に驚いたイアンが振り向けば、こちらを見据える琥珀色の瞳と目が合った。けれどすぐに視線を逸らす。

「悪いな。今は一人にしてくれないか」

力なく、義務的な感じの声を絞り出したイアンに、ザウルも眉を上げた。

昔から見てきたので知っているが、イアンはあまり遠慮というものをしない。ズカズカと多少強引にでも周りの人間に触れ、時にはそれが心をかき乱す結果に終わるが、相手を見抜いてしまう。しかも、一を言えば十を理解できる察しのよさで、内面まで深く読み取ってしまうのだ。相手との間にある壁を、見て見ぬふりをしながら飛び越えてしまう。そして、相手が救いを求めていれば、当然のよ

うに手を差し伸べてきた。

それと同じ様に、相手には自分を見せる。全てを曝け出すわけはないが、多くを一人で抱え込むようなことはしない。それほど、器用な人間ではないのだ。

相手を理解し、自分も見せる。なんとも公正で単純だが、実行することは難しい。けれど、それをイアンは当たり前のように続けてきた。人によっては付き合い難いと敬遠する者も居るが、自分達にとって、彼の存在は親しみやすく、そして救いでもあった。

にも関わらず、こんな時間にこんな場所で、今一人で何かを抱え込んでいる。そして、それを自分に見せようとはしない。それが、ここ最近見れたイアンの不調と関連していることは、容易に想像出来た。

「今日、セリア殿は貴方と一緒にだったのですね」

「……………」

栗毛の地味な少女の名を聞いた途端に揺れた肩が、イアンの動揺を表す。すると、苦虫を噛み潰したように表情を歪ませた。そのことに、ザウルは更に眉を寄せる。セリアへの好意を、なんの迷いもなく宣言した男とは思えない。

「最近貴方の様子が可笑しいようでしたが、何かあったのですか？」

「……お前等に隠し事は出来ないな。他の奴にもバレてんだろ」

「ええ、まあ。セリア殿ですら、気付いていたようでしたから」

「だよな……」

自嘲するように笑うイアンはそのまま背後の木に凭れ掛かると、深く息を吐き出した。

「なんか、訳が分からなくなっちゃってな」

擦れた声は、風に乗って漸くザウルの耳に届く程か細かった。二人の距離はほんの数歩程度だと言うのに。

「アイツが好きだって思ってた。でも、そうじゃなかったんだよ」

「……………!？」

「そんな、綺麗なもんじゃなかった」

好きだとか、恋だとか、そんな詩に出てくる様な感情ではない。そんな純粋なものではないのだ。初めは自分の奥底で眠っていたものが、どんどんその黒さを増し、熱を持ち、今直ぐ解放しろと叫び始めている。

「本当に、訳が分からないんだよ」

欲しいと思ってしまうばかりがない。どうしても、どんなことをしてでも自分のものにしたい。自分だけのものにしたい。縛り付けて、拘束して、自分の色だけを見詰めればいい。そんな考えが、後から後から沸き上がって来る。けれど、そんなことをして何になると僅かに残る理性が自分を叱責する。そんな身勝手な欲を、あの少女にぶつければどうなるかくらい、想像が出来ない訳がない。そう考えても、すぐに別の声が響く。それでもいい、と。たとえば、人形のように精神も肉体も壊れてしまったとしても、それでも欲しいのだと。

気付けば、抜け出し様のない執着を覚えた自分が居た。けれど、それがどれほど愚かで、醜い物かぐらいは分かる。それを抑え切れなくなった時、どうなるかも。

「俺は、それが一番恐ろしい」

「……………」

こんな醜い感情を、好意などと呼ぶことは、どうしても躊躇われる。

イアンは、心底忌々しそうに自分のことを語った。そして、その内容を聞いて納得する。イアンが何処となくセリアを避ける様子を見せていたのは、自分を抑える為だったのかと。

彼がそこまで苦しんでいたとは、予想外だっただけに僅かに驚いた。しかし、他人事ではないだけに、微妙な複雑さも感じる。

「イアン。貴方だけではありませんよ」

「……………」

「好いた相手だからこそ、欲することは誰にも止められません。自分も同じですから」

自分の中でも、時折覗く欲や嫉妬心は隠し切れない。やはり、他の男とセリアが親しげにしていれば、面白くないと思うし、その瞳の先に自分が映る事を喜んでしまう。これは、紛れもなく独占欲だ。

「それに、貴方は彼女を傷つけまいとしている」

「……………」

イアンの言う様に、彼の欲が強いものだとしても、セリアとイアンの間にはまだ何もない。嫌悪の対象になっても可笑しくはない恋敵である自分達とも、友人の関係を保っている。それは、彼の自制を十分示しているのではないか。イアンの感情が、彼の言う程のものなら尚更。

「彼女を欲しいと思う気持ちも、貴方の想いの一つでしょう」

「だとしても……………」

「それに、もし貴方が彼女を傷つけたとしたら、自分が奪いに行きますよ」

その言葉にイアンがハッと顔を上げると、ザウルが珍しく挑戦的な視線を向けて来た。

「貴方がその感情をどうするか結論をだすまでは、まだ時間が必要なのでしょう。ですが、貴方が彼女に無理強いをするようなことは、自分がさせません」

気持ち溢れ、彼の言う様に自制が効かなくなったとしても、それを野放しにしてやる気などさらさらない。彼女の存在を望んでいるのはイアンだけではないのだ。

ザウルに言われたイアンも、そう言えば周りは敵だらけだったな、と思い出す。そして、それが仲間であることも。

途端に笑いが込み上げて来て、クツと喉の奥から洩らせば、ザウルも口の端を僅かに上げる。

「お前にそんなことを言われるなんてな」



「これで、相子ですよ」

いつもどんな時でも、公平を望み自分を見せて来たイアンに、ザウルは言葉を選ぶ。その意味を理解したのか、イアンはもう一度、一瞬だけ笑い声を洩らした。

## 遊戯 4 (後書き)

最近、ちょっと気になることがあるけど。こういう時に一番注意しなきゃいけないのは、やっぱりセリアだね。すぐに一人で出て行くようにするから。

でも、何もしないっていうのもまずいよね。なんだか嫌な予感もするし。

## 要因 1

「またか」

「……そうみたいね」

珍しく難しい顔をした校長が発した声に、クルーセルも同意を返した。その視線の先では、今週に入って無断外泊をした者の名前が連ねられた紙が、静かに質の良い机の上に置かれている。

ここ数日で頻発しているこの問題に、校長も眉を寄せていた。問題を解決しようにも、生徒達は一向に自分達の行き先を語ろうとしない。こんな事は前例がない為、こちらもどう対処するべきか悩む。「誰に聞いても言いたくないの一点張だしね。無理に聞くことも出来ないから嚴重注意に留まってるけど……」

クルーセルの言葉通り、学園側はまだこの問題を大事にはしていない。それは、相手が悪い為か、生徒達を思っているのか。それとも何か他に理由があるのか。校長の真意を計ることは難しい。

「どうする？ もう少し厳しく注意した方がいいかしら」

「いや……その必要はない」

「了解」

難しい顔のまま出された校長の答えに、クルーセルはまた普段の笑顔で頷いた。

「ベアリット嬢」

「は、はい!!」

後ろから突然声を掛けられセリアは驚いて振り向いた。視線を彷徨わせて声の主を探せば、不機嫌そうな顔と同様、不機嫌そうな雰

困気を醸し出している男子生徒が、廊下の向こうからこちらを睨んでいる。それも、既に見慣れてしまった顔だ。カールハインツを慕う、自称彼の部下の一人である。彼等はどうも自分を敵視しているらしいが。

今にも不満が飛んできそうな勢いの彼は、落ち着く為か深く息を吸い込むと、ズイッと一枚の紙を突き出してきた。

「カールハインツ様が、温室に来る前にこの資料を図書室から持ってきて来いと仰せだ」

「は、はあ。分かりました。ありがとうございます」

それだけ言うと、男子生徒はカールハインツから用事を頼まれたのが自分ではなく目の前の地味な少女だということに不満を抱きながらも、逆らうことはせずに足早にその場を去っていった。

セリアは突き出された紙を確認しながら、そういえばランとの攻防が授業からまだ続いていたのだったな、と思い出す。恐らくこの中にはランが欲しがっている資料もあるのだろう。その間に、お互い飽きもせずに舌戦を繰り広げているのだろうか。ようするに、雑用を押し付けられたようなものである。とはいっても、丁度図書室へ用事があったところなのだから、別に気にはしないが。

それにしても、まったくあの二人はどうしてこうも仲違いするのだろうか。とブツブツ独り言を呟きながら、セリアは目の前に聳える大きな扉を開けた。途端に目に飛び込む書籍がびっしりと詰め込まれた棚の数々。授業の後の一時を過ごしているのだろう、所々で雑談する生徒の姿も目立つ。

セリアが一步中へ入ると同時に一瞬の静寂が流れたのだが、今更気にはしない。もう慣れてしまったな、と軽く溜め息を吐きながら、目的の棚へ向かって足を進めた。

広い図書室内を歩き回りながら自分の用事を済ませると、今度はカールの部下から託された紙に視線を向ける。そして、同時に息を吐き出した。

「これ……」

そこに書かれてあるものは、図書室の中でも奥まった場所にある物ばかり。加えて、今自分はそこからかなり離れた場所に居るのだ。同じ図書室内に変わりはないが、かなりの広さを誇るこの場所を行ったり来たりするのは、なんとなく精神的にも疲れる。かといって、今から温室へ行って自分で探せ、と突っ返すわけにもいかない。そんなことをすれば、途端に魔王様が降臨するに違いないのだから。

仕方ない、と肩を落としてセリアは再び足を動かした。

「…い……な…」

「……れ……だ…」

目的の棚まで辿り着いた時、ふいに話し声が聞こえた気がしてセリアは首を傾げた。棚の陰に身を隠しながらそうと覗き込めば、案の定二つの影が棚の前で声を潜めながら話している。二人はこちらには気がついていないようで、コソコソとした話し声はまだ僅かに聞こえた。

こんな図書室の奥を選ぶとは、恐らく他人に聞かれたくはない内容なのだろう、とセリアは推測する。このまま何も聞かなかったことにして立ち去った方が良いのだろうが、しかし困った。彼らの前を通らねば、自分は目的の棚まで辿り着けない。彼らの話が終わるのを待ってもよいのだが、早くしなければ、この原因である魔王様から嫌味の一つでも飛んできそうだ。

さて、どうしようか。と困惑したセリアの耳に、話し声が今度ははっきりと飛び込んできた。

「昨夜はどうだったんだ？」

「ああ。噂通り、なかなか楽しかったぜ」

その内容に、セリアは再び首を傾げ、もう一度彼等の姿を伺うべく棚の間を覗き込む。目を凝らして見た先に居たのは、近日目立つ無断外泊した生徒の内の一人。候補生だから、という理由ではない

が、セリアも最近生徒達の間で生じた風紀の乱れが気になってはいたのだ。その生徒がこんな会話をしていれば、セリアでなくとも気になってしまうというもの。セリアは当初の目的も忘れ、後ろめたいとは思いつつも、息を潜めながら僅かに聞こえる二人の会話に集中した。

そのまま暫く聞いていて、分かった事は一つ。どうやら、生徒達は全員レイダー・ペトロフ、という男の屋敷を尋ねていたらしい。それを知ったセリアは今、図書室で調べられる範囲内の貴族の名や家などの資料を必死に捲って行った。

「レイダー・ペトロフ……」

その名を呟きながら、該当する手がかりがないかと懸命に探す。とその内に、目当ての名を見つけた。

「ペトロフ……伯爵」

やはり、複数の生徒を毎夜のように招いて宴を楽しむだけの余裕があるなら、貴族だろうと思ったのだが。とにかく、今はそれが分かっただけでも良しとしよう。本当にこの男が今回のことと関係しているのか、まだ確信はない。恐らく外れてもいないだろうが。

広げていた資料を手早く片付けると、セリアはさっと踵を返した。

レイダーのことを調べるのに、思ったよりも時間を取られてしまったようだ。急がねば。と焦りながらセリアが温室へ足を踏み入れた途端……

「遅い」

横からその一言が飛んできた。びくつと肩を揺らしたセリアが恐る恐る視線を向ければ、明らかに不機嫌顔のカールが、そこに静かに佇んでいる。

「セリア、お疲れ様。遅かったけど、どうかした？」

「えっ！？ ううん。なんでもない」

カールに資料を手渡しながら、心配げに聞いてきたルネにセリアは咄嗟にそう答えた。まだ、ペトロフ伯爵が本当に今回のことと関連しているか解らない。彼の名前を候補生達に告げるのは、少なくともそのことを確認してからの方が良いだろう。とセリアは先ほど知った事実を自分の胸の内にしまった。

とはいえ、妙にそわそわしながら、大袈裟に反応するセリアの様子に候補生達が気づかない筈がない。不審に思い、セリアにどうかしたのかと再度聞いてみる。がしかし、幾ら聞いても本人は強情にも全く答えようとしなかった。何に対しても、なんでもない、としか返さないセリアに、候補生達も一度顔を見合わせる。

けれど、それでもセリアは決して言葉を発しなかった。

日が沈み始め、夕方の色が辺りを染める頃、校門の傍をコソコソと動く小さな影があった。言わずもがな、セリアである。候補生達を何とか躲し、どうにかここまで来れたことに安堵し、セリアは短く息を吐いた。

ペトロフの屋敷の場所は確認済みである。あとは、その場を訪れて本当に生徒達の夜間外出と関わりがあるかを確かめればよい。その後、校長に報告して、そして候補生達にも話して……

セリアがこれからの計画を思い浮かべながら校門を出て行こうとすると、いきなり後ろから襟首を掴まれた。

「わっ!!」

突然の事に驚くが、そのままぐいっと引かれ後ろへと倒れ込んだ。突然のことにセリアも呆気無くバランスを崩す。咄嗟に強張らせた身体は転倒することなく、別の腕にやんわりと抱きとめられた。けれど、転ばずに済んだことに安堵するよりも、セリアは自分の襟首を掴んだ者の正体に全神経を集中させる。恐る恐る背後を伺ってみれば、そこには思ったとおりの人物達が勢揃いしていて、

「げっ!」

気付けばそんな声を上げてしまった。けれど、しまった、と思う暇もなく、その場の全員からキツイ睨みを頂戴する。壮絶に青ざめながら縮こまるセリアに構わず、候補生達は苛立ちを募らせていた。「色々と言いたいことはあるが。まずはセリア。君は一体ここで何をしている」

明らかに苛立ちを含んだランの声に、セリアは途端に目を逸らした。先ほど温室で問われた時になんでもない、と言い切った分、嘘を吐いていたことがバレてきまりが悪い。というより、何故バレたのだ。とにかく、このままでは非常にまずいのではないか。ここはすぐに言い訳を考えなければ。しかし、一向に何と言ってよいか思いつかない。

オロオロとしだすセリアを候補生達も微動だにせずジロリと睨む。けれど、後ろから聞こえた新たな声に驚いて振り向いた。

「皆、ここで何してるの?」

「クルーセル先生!」

「最近、生徒達の夜間の外出が目立つから、ちょっと心配になって来てみたんだけど」

いつになく困り顔でこちらへ歩いてくるクルーセルに、セリアはまずい、と瞬時に顔を青くさせた。もしかしくとも、これは自分も疑われているのではないだろうか。確かに、まさに今無断で外出しようとしていたところだったのだが。



「とりあえず、ここで何をしていたのかしら？もう寮に戻ってる時間でしょ？皆に限って心配はないと思ってたんだけど」

「ち、違います先生！！」

眉を寄せて首を傾げるクルーセルに、セリアは強く反論する。

クルーセルの言葉に、セリアは血の気が更に失せるのを感じた。このままでは自分だけでなく、他の候補生達まで疑われてしまうのではないか。しかも、明らかに自分の所為でだ。こんなことにする積もりは全く無かったのだが。けれど後悔してももう遅い。とにかく、この場はきちんと説明する他ないだろう。

「その……彼等は私が出て行こうとしたのを止めていただけで……」

「そう。でもセリアちゃん。貴方は何処へ行こうとしていたのかしら？」

「そ、それは……」

セリアがチラリと視線を上げると、未だにこちらを強く見据えるマリオス候補生達。その視線からも、さっさと説明しろ、といった感じの威圧を感じる。逃げ場を失ったセリアは深く息を吐き出すと、渋々白旗を揚げた。

「あら。そうだったの」

セリアがオロオロとしながらも必死に説明する内容を、クルーセルは全く疑う様子も見せずに、うんうんと頷きながら聞いていた。まるで、最初から何か理由があったのだろうことを分かっていたような様子だ。

それとは対照的に、横でセリアの話に耳を傾けていた候補生達は、心底呆れた様な視線を向けた。セリアの無鉄砲かつ無謀な行動力は理解している積もりだが、やはりこうして見せ付けられると内心穏やかではいられない。

「それでセリアちゃん。その伯爵の屋敷に行って、どうする積もり

だったの？」

「そ、それは。その……もし本当に彼に今回の原因があるのでしたなら、学園の生徒達を夜間に屋敷へ招く行為を控えてもらえないだろうかと交渉できないか、と思いましてでして」

「……一人で？」

クルーセルのもっともな意見に、セリアもグツと言葉に詰まった。正直、その辺りのことは全く考えていなかったのだ。とにかく彼の屋敷へ行き、生徒達の夜間外出先が彼の屋敷だったならば何かしなくては。と、また咄嗟に浮かんだ考えのみで行動しようとしていた。候補生達にもそのことはお見通しだったようで、苛立ちを含んだ溜め息が先ほどから数回セリアの耳にも届いている。

とにかく、夜間に無断外出をしようとしたのは自分だけなのだから、候補生達が咎められるような事態は避けなくては。とセリアが弁解しようと口を開いたが、その前にクルーセルの口からは楽しそうな声が飛び出していた。

「ダメよ。こんな可愛い女の子を一人でそんな危ないところへなんか行かせられないわ。そうでしょ、みんな」

「はっ？」

突然同意を求められ、候補生達も反応に遅れる。けれど、クルーセルはそんなこと気にした様子を全く見せず、更に続けた。

「もうセリアちゃんたら水臭いわね。最初から私達に話してくれればいいのに」

「え！？あの……」

「でもやっぱり遅いセリアちゃんの姿は素敵ね。惚れ惚れしちゃうわ」

もうそれは上機嫌で訳の分からないことを口走り始めたクルーセルに、セリアもどう反応してよいか大いに戸惑う。けれど、途端にクルーセルが真剣な表情を見せたのでセリアも固まった。

「そうね。そこまで分かったなら、何かしないとね。さて、どうし

ようかしら？セリアちゃんにお願いするのはやっぱり心配なのよね。それに、わざわざそこまでしなくても良いのよ」

何処か楽しんでいるような声で言われた言葉に、セリアは反応を見せる。そして、咄嗟に言葉が口について出た。

「い、いえ。あの！私はこのことを解決出来るのなら、精一杯のことをやりたいと思ってます」

「うーん。気持ちは有難いし、セリアちゃんなら任せられると思うんだけど、やっぱり一人じゃ心配なのよね」

「そ、それは……」

生徒達の風紀の乱れは学園内だけに留まらず、街にまで噂が広まっていた。白昼堂々と街を歩きながら学園へ戻る生徒がここ数日で何人も目撃されているのだ。当然、噂好きの人々がそのことを勘繰らない筈がない。それと同時に、学園内の雰囲気も何処かピリピリとしたものになっていった。そんな状態が改善されるのならなんでもしたい、と思っていたのだが。けれど、結局はまた候補生達に迷惑を掛ける結果になってしまった。自分の不甲斐なさを見せつけられているようで、情けない。

徐々に暗い空気を纏い出すセリアに、クルーセルはやっぱりと言いかせるように言った。

「セリアちゃん、どう思う。やっぱり、こんな時間に一人で外を歩かせる訳には行かないんだけど」

「あ、あの……」

「だから、誰かと一緒なら、お願いしようかと思うんだけど」「はっ？」

思ってもみなかった言葉にセリアはバツと顔を上げる。確認したクルーセルの顔は冗談を言っている風でも、ふざけている訳でもなさそうだった。それにセリアは更に目を見開く。つまり、クルーセルの言葉は本当に一人で外に出すことは出来ないという意味だけだったのか？

呆然とするセリアに構わず、クルーセルは相変わらず楽しそうに

続けた。

「それでセリアちゃん、どうする？ やっぱりこのまま一人で行こうとする？ それだと私もセリアちゃんを行かせる訳にはいかないの」

「そ、それは。あの……」

「ほら居るでしょ。セリアちゃんを助けてくれる、素敵なお友達が」  
ポンと肩を軽く叩いたクルーセルは、セリアに視線を動かすように促した。クルーセルに釣られて見回せば、候補生達が自分を強く見据えながらも、そこにジッと佇んでいる。

そこで、クルーセルの言わんとしていることを漸く理解したセリアは、さっと顔を青ざめた。

## 要因 1（後書き）

解っていたことですが、やはりこうなりましたか。普段から無茶はなさらないようにと、あれ程言っているのに。彼女が、無茶をするな、という言葉に縛られることはないのでしょうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0334q/>

---

大地の宝石

2011年12月24日00時57分発行